

# 小松市林遺跡

一般国道8号小松バイパス改築工事に係る発掘調査報告書

1993

石川県埋蔵文化財保存協会



# 小松市林遺跡

一般国道8号小松バイパス改築工事に係る発掘調査報告書

石川県埋蔵文化財保存協会





林遺跡遠景



須恵器窯遠景



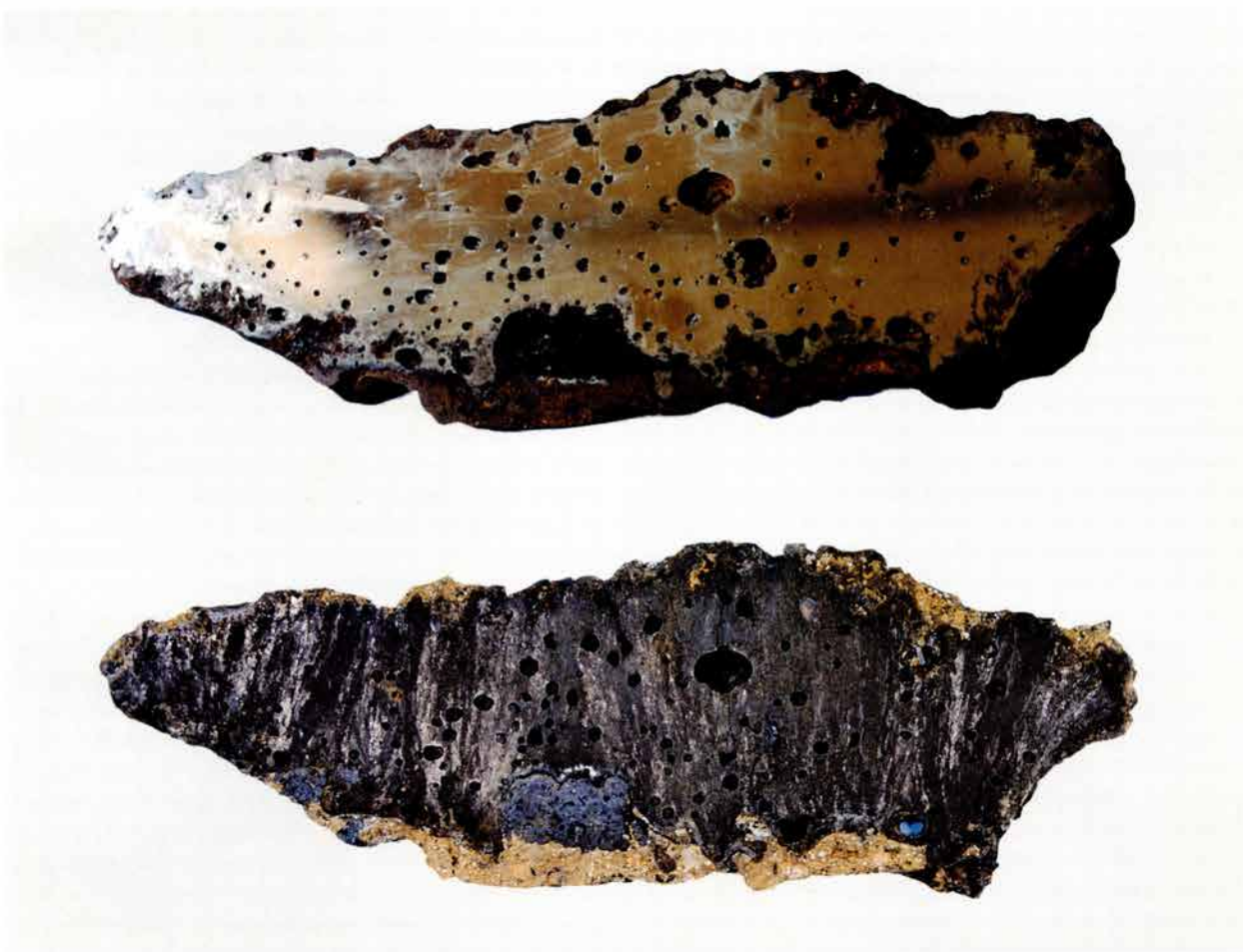
2号窯床面出土状況(焚口から)



(窯尻から)



製鐵遺構全景



大鐵塊切斷片

2号窯高环胎土分類(S≒1/1)



(A 類)



(B 類)



(C 類)



(D 類)

土器成形の方法(环)



1号窯高环胎土分類(A類S≒1/1, B類下S≒1/2)



(A 類)



(B 類)

土器成形の方法(壺)





## 序 文

本報告書は、平成元年発掘調査機能をもつ組織として改名発足した、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が手がけた、小松市林遺跡の調査記録である。国道8号線小松バイパス建設にともなうもので、昭和63年度県立埋蔵文化財センターによる第1次につぐ第2次調査として、3つの丘、3つの谷に亘る1万㎡の範囲の発掘調査を行なったものである。ここには、縄文時代から近世に及ぶ数々の遺跡がみられるが、主な遺構には須恵器窯跡2基、製鉄関連遺跡1ヶ所、中世城郭遺構がある。出土遺物も多く、殊に製鉄関連遺物整理は県内ではじめてのことであり、穴澤義功氏・大澤正己氏の指導を得てすゝめた。大澤氏には本報告書に金属学的調査結果の玉稿をいただいている。

窯跡の年代測定の結果を、広岡公夫氏・黒原秀夫氏がおよせいただいたことと併せて諸先生に深く感謝申し上げる次第である。

須恵器窯跡、林オオカミダニ1、2号窯の報告中、2号窯体内一括出土品の出土状況その他のことから、窯操業作業の復元を試みているのは従来の窯跡調査報告書にみられない点として注目すべきものである。中世城郭遺構は14～16世紀の出土品を伴うことから、近くに営まれた林超勝寺との関連も含めて今後重要な課題を残している。

須恵窯跡、製鉄関連遺跡、木炭窯跡からの炭化材の樹種鑑定の結果も収録してある。今はバイパス道も出来上り、多くの車が往来している。二度ともとの姿に蘇らない林遺跡の記録保存のためにベストをつくした調査担当諸君の労を多とするものである。

理事長

濱 岡 賢太郎

# 例 言

- 1 本報告書は一般国道8号小松バイパス改築工事に係る林遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和63年度（第1次調査）は石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査は湯尻修平・久田正弘・山本直人が担当し、田畑弘（センター調査員）、竹谷洋史（同志社大学学生）の協力を得た。  
平成元年度（第2次調査）は(社)石川県埋蔵文化財保存協会が発掘調査を実施し、調査は久田正弘・沢辺利明が担当した。
- 3 調査の実施にあたっては、建設省金沢工事事務所、小松市教育委員会、林町町内会の協力を得た。
- 4 整理作業は平成元年度から4年度にかけて調査資料係で実施した。担当者は以下のとおりである。  
浅井勝郎、石地範子、太田正美、岡本 晃、岡本外代子、尾田裕子、小野澄江、河村裕子、北百合子、小谷紀美子、小林直子、小間博文、末富しげ子、中村早百合、福田恵子、馬場正子、吉田節子
- 5 本報告書の編集は久田が行い、執筆分担は下記のとおりである。

第1章～第3章第2節第3項、第3節～第7節、 第5章第2節、第6章	久田正弘（主任調査員）
第3章第2節第4項、第5章第1節	沢辺利明（調査員）
第4章第1節	大澤正己（新日本意鐵株式会社）
第4章第2節	広岡公夫・黒原秀夫（富山大学）
第4章第3節	パリノサーヴェイ株式会社
第5章第3節	宮本直哉（主任調査員）
- 6 本遺跡の出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターにて収蔵される予定である。
- 7 挿図中の方位は全て真北であり、挿図中の数字は全て標高である。遺物写真の縮尺は不同である。

# 本文目次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	6
第3章 遺構と遺物	7
第1節 概要	7
第2節 須恵器窯	8
1. 調査方法と概要	8
2. オオカミダニ2号窯	8
3. オオカミダニ1号窯	22
4. 土器	31
第3節 土師器窯・木炭窯	59
1. 土師器焼成土坑	59
2. 木炭窯	59
3. 土坑	64
第4節 土塁・郭状遺構	66
1. 土塁状遺構	66
2. 郭状遺構	70
第5節 その他の遺構	81
1. 道路状遺構	81
2. 落ち込み	81
3. ピット群	84
第6節 調査区出土遺物	84
1. 西丘陵～中央丘陵西裾	84
2. 中央丘陵	90
3. 中央丘陵東裾～東丘陵	90
4. その他	93
第7節 製鉄関連遺構	97
1. 概要	97
2. 遺構	106
3. 遺物	112
第4章 自然科学的調査	135
第1節 林遺跡における製鉄関連遺物の金属学的調査	135
第2節 オオカミダニ古窯の考古地磁気測定	185
第3節 出土炭化材の樹種同定	189
第5章 考察	199
第1節 須恵器について	199
第2節 製鉄遺構について	222
第3節 林超勝寺について	232
第6章 まとめ	240

# 図 版 目 次

第1図	石川県全体図	1	第47図	第9号郭状遺構断面図2 (1/60)	80
第2図	周辺の遺跡(1/25,000)	2	第48図	道路状遺構実測図(1/200)	82
第3図	周辺の地形(1/7,500)	4	第49図	落ち込み実測図(1/200)	83
第4図	主要遺構配置図(1/1,500)	7	第50図	G6区付近実測図	85
第5図	現況地形図(1/200)	9	第51図	G6区付近断面図(1/60)	86
第6図	第1次調査断面位置図(1/200)	10	第52図	ピット群実測図(1/100)	87
第7図	第1次調査断面図1 (1/60)	11	第53図	調査区出土土器1 (1/3)	89
第8図	第1次調査断面図2 (1/60)	12	第54図	調査区出土土器2 (1/3)	91
第9図	グリッド配置図・灰原の厚さ分布図	13	第55図	調査区出土土器3 (1/3)	92
第10図	灰原等分布図	14	第56図	調査区出土土器(1/2、1/3)	93
第11図	オオカミダニ2号窯実測図(1/120, 1/60)	15	第57図	調査区出土瓦1 (1/3)	95
第12図	2号窯断面図(1/60)	17	第58図	調査区出土瓦2 (1/3)	96
第13図	2号窯層位模式図	18	第59図	製鉄遺構現況図(1/100)	98
第14図	2号窯窯体断ち割り(1/30, 1/60)	19	第60図	製鉄遺構グリッド配置図(1/100)	99
第15図	オオカミダニ1号窯実測図(1/120, 1/60)	23	第61図	製鉄遺構周辺図(1/80)	100
第16図	1号窯煙道遺物出土状態(1/60)	24	第62図	製鉄遺構遺物出土状態1 (1/30)	101
第17図	1号窯断面図1 (1/60)	25	第63図	製鉄遺構遺物出土状態2 (1/20)	102
第18図	1号窯断面図2 (1/60)	26	第64図	製鉄炉全体図(1/40)	103
第19図	1号窯層位模式図	27	第65図	製鉄遺構断面図1 (1/40)	104
第20図	1号窯窯体断ち割り(1/30)	28	第66図	製鉄遺構断面図2 (1/40)	105
第21図	2号・1号窯平面図(1/60)	30	第67図	製鉄炉実測図1 (1/20)	107
第22図	各部名称および法量測定位置	32	第68図	製鉄炉実測図2 (1/20)	108
第23図	2号窯坏A分類	35	第69図	炉壁出土状態(1/10)	109
第24図	2号窯坏B分類	37	第70図	炉壁集中区実測図1 (1/20)	110
第25図	1号窯坏A分類(1)	46	第71図	炉壁集中区実測図2 (1/20)	111
第26図	1号窯坏A分類(2)	47	第72図	鑄型実測図1 (1/3)	113
第27図	1号窯坏B分類	49	第73図	鑄型実測図2 (1/3)	114
第28図	横瓶頸孔切断片、他の窯土器	57	第74図	鑄型実測図3 (1/3)	115
第29図	土師器焼成土坑実測図(1/20)	60	第75図	羽口実測図(1/3)	116
第30図	土師器焼成坑出土土器実測図(1/3)	61	第76図	石・鉄滓等実測図(1/3, 1/6)	118
第31図	第1号木炭窯実測図(1/60)	62	第77図	大鉄塊実測図(土落とし前)(1/3)	120
第32図	第2号、4号木炭窯実測図(1/60)	63	第78図	大鉄塊実測図(土落とし後)(1/3)	121
第33図	第4号木炭窯木炭出土状態(1/30)	64	第79図	鉄塊等実測図1 (1/2)	123
第34図	第5号木炭窯・焼土土坑実測図(1/20)	65	第80図	鉄塊等実測図2 (1/2)	124
第35図	第1号土壘実測図(1/200)	67	第81図	炉壁実測図1 (1/3)	125
第36図	第2号土壘関連遺構実測図1 (1/200)	68	第82図	炉壁実測図2 (1/3)	126
第37図	第2号土壘関連遺構実測図2 (1/100)	69	第83図	炉壁実測図3 (1/3)	129
第38図	土壘・郭状遺構現況図(1/400)	71	第84図	炉壁実測図4 (1/3)	130
第39図	第1～8号郭状遺構実測図(1/200)	72	第85図	炉壁実測図5 (1/3)	131
第40図	第1～3号郭状遺構断面図(1/60)	73	第86図	炉壁実測図6 (1/3)	132
第41図	主郭状遺構実測図(1/200)	74	第87図	炉壁実測図7 (1/3)	133
第42図	主郭状遺構断面図1 (1/60)	75	第88図	製錬関連遺物のTi・V 相関図	145
第43図	主郭状遺構断面図2 (1/60)	76	第89図	オオカミダニ窯跡の考古地磁気測定結果	188
第44図	第9号郭状遺構現況図(1/200)	77	第90図	2号窯体内一括検出土器の検討	200
第45図	第9号郭状遺構実測図(1/200)	78	第91図	土器設置・重ね焼方法1	202
第46図	第9号郭状遺構断面図1 (1/60)	79	第92図	土器設置・重ね焼方法2	203
			第93図	林オオカミダニ2・1号窯出土土器分布図1	211
			第94図	林オオカミダニ2・1号窯出土土器分布図2	212

第95図	林オオカミダニ 2・1号窯出土土器分布図 3 .....	213	第140図	1号窯出土土器	横瓶 2 .....	298
第96図	林オオカミダニ 2・1号窯出土土器分布図 4 .....	214	第141図	1号窯出土土器	鉢、短頸壺、壺 1 .....	299
第97図	林オオカミダニ 2・1号窯出土土器分布図 5 .....	215	第142図	1号窯出土土器	壺 2 .....	300
第98図	県内出土鉄鍋・獣脚集式図 (1/3) .....	224	第143図	1号窯出土土器	壺 3 .....	301
第99図	鉄滓等出土量グラフ .....	227	第144図	1号窯出土土器	甕 1 .....	302
第100図	南加賀一向一揆関係図 (1/200,000) .....	234	第145図	1号窯出土土器	甕 2 .....	303
第101図	林村超勝寺屋敷之図.....	236	第146図	1号窯出土土器	甕 3 .....	304
第102図	林超勝寺伝承地復元プラン (1/2,500) .....	237	第147図	1号窯出土土器	甕 4 .....	305
第103図	調査区遺構図 1 (1/400) .....	260	第148図	1号窯出土土器	甕 5、蓋、陶錘、器種不 明品 .....	306
第104図	調査区遺構図 2 (1/400) .....	261・262	第149図	1号窯出土土器	焼台転用土器、所属窯不 明土器 提瓶 .....	307
第105図	調査区遺構図 3 (1/400) .....	263	第150図	所属窯不明土器	平瓶、横瓶、鉢、壺 .....	308
第106図	2号窯出土土器 坏A蓋 1 .....	264	第151図	所属窯不明土器	甕、陶錘 .....	309
第107図	2号窯出土土器 坏A蓋 2、坏A身 1 .....	265				
第108図	2号窯出土土器 坏A身 2 .....	266				
第109図	2号窯体内一括検出土器 1 .....	267				
第110図	2号窯体内一括検出土器 2 .....	268				
第111図	2号窯出土土器 坏B蓋・身 1 .....	269				
第112図	2号窯出土土器 坏B身 2、埴、鉢、高坏 1 .....	270				
第113図	2号窯出土土器 高坏 2 .....	271				
第114図	2号窯出土土器 高坏 3 .....	272				
第115図	2号窯出土土器 高坏 4 .....	273				
第116図	2号窯出土土器 高坏 5、甗、瓶、長頸瓶 .....	274				
第117図	2号窯出土土器 提瓶、平瓶 .....	275				
第118図	2号窯出土土器 横瓶 .....	276				
第119図	2号窯出土土器 壺 1 .....	277				
第120図	2号窯出土土器 壺 2 .....	278				
第121図	2号窯出土土器 甕 1 .....	279				
第122図	2号窯出土土器 甕 2 .....	280				
第123図	2号窯出土土器 甕 3 .....	281				
第124図	2号窯出土土器 甕 4 .....	282				
第125図	2号窯出土土器 脚、蓋、焼台転用土器 .....	283				
第126図	1号窯出土土器 坏A蓋 1 .....	284				
第127図	1号窯出土土器 坏A蓋 2 .....	285				
第128図	1号窯出土土器 坏A身 1 .....	286				
第129図	1号窯出土土器 坏A身 2 .....	287				
第130図	1号窯出土土器 坏A身 3 .....	288				
第131図	1号窯出土土器 坏B蓋 .....	289				
第132図	1号窯出土土器 坏B身、埴、鉢 .....	290				
第133図	1号窯出土土器 高坏蓋 .....	291				
第134図	1号窯出土土器 高坏 1 .....	292				
第135図	1号窯出土土器 高坏 2 .....	293				
第136図	1号窯出土土器 高坏 3 .....	294				
第137図	1号窯出土土器 甗、瓶、長頸瓶 .....	295				
第138図	1号窯出土土器 提瓶、平瓶 .....	296				
第139図	1号窯出土土器 横瓶 1 .....	297				

## 巻頭図版

- 巻頭図版 1 林遺跡遠景 須恵器窯遠景  
巻頭図版 2 2号窯床面出土状況(焚口から、窯尻から)  
巻頭図版 3 製鉄遺構全景 大鉄塊切断片  
巻頭図版 4 高坏胎土分類、土器成形の方法

## 本文図版

- Photo. 1 鑄鉄錆化物と鉄滓の顕微鏡組織 ……150  
Photo. 2 鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……151  
Photo. 3 鉄滓の顕微鏡組織 ……152  
Photo. 4 鉄滓と鉄錆化物の顕微鏡組織 ……153  
Photo. 5 鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……154  
Photo. 6 鉄滓の顕微鏡組織 ……155  
Photo. 7 鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……156  
Photo. 8 鉄塊系遺物及び製錬滓(含鉄鉄滓)の顕微鏡組織 ……157  
Photo. 9 鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……158  
Photo. 10 林遺跡出土鉄塊系遺物のピッカース断面硬度圧痕写真 ……159  
Photo. 11 林・戸津遺跡出土鉄塊系遺物のピッカース断面硬度圧痕写真 ……160  
Photo. 12 林遺跡出土鉄塊系遺物(HY2-①)鉄中非金属介在物と片状黒鉛の特性X線像と定量分析値…161  
Photo. 13 林遺跡出土鉄塊系遺物表皮付着鉄滓(HY2-②)の特性X線像 ……162  
Photo. 14 林遺跡出土鉄塊系遺物(HY2-③)表皮包含砂鉄粒子の特性X線像 ……163  
Photo. 15 林遺跡出土鉄塊系遺物(HY11-①)中非金属介在物の特性X線像と定量分析値 ……164  
Photo. 16 林遺跡出土鉄塊系遺物(HY11-②)表皮包含砂鉄粒子の特性X線像 ……165  
Photo. 17 林遺跡出土鉄塊系遺物(HY12-①)表皮付着鉄滓の特性X線像 ……166  
Photo. 18 林遺跡出土鉄塊系遺物(HY12-②)中の片状黒鉛の特性X線像 ……167  
Photo. 19 戸津遺跡出土鉄塊系遺物(HY19-①)表皮付着鉄滓の特性X線像 ……168  
Photo. 20 戸津遺跡出土鉄塊系遺物(HY19-②)表皮付着砂鉄の特性X線像 ……169  
Photo. 21 戸津遺跡出土砂鉄製錬滓(HY-20)表皮付着鉄滓・半還元砂鉄の特性X線像 ……170  
Photo. 22 鉄滓の顕微鏡組織 ……171  
Photo. 23 粘土と鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……172  
Photo. 24 鉄塊系遺物と鉄滓の顕微鏡組織 ……173  
Photo. 25 鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……174

- Photo. 26 鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……175  
Photo. 27 砂鉄粒子の顕微鏡組織 ……176  
Photo. 28 林遺跡出土ガラス質滓(HYS-2)中の未還元硅砂の特性X線像 ……177  
Photo. 29 林遺跡出土ガラス質滓(HYS-2)の特性X線像 ……178  
Photo. 30 林遺跡出土炉壁粘土(HYS-5)における胎土の特性X線像 ……179  
Photo. 31 林遺跡出土鉄塊系遺物(HYS-9)表皮スラグの特性X線像 ……180  
Photo. 32 林遺跡出土鉄塊系遺物(HYS-9)鉄中捲込みスラグの特性X線像 ……181  
Photo. 33 林遺跡出土製錬滓(HYS-14)の特性X線像 ……182  
Photo. 34 大鉄塊(HYS-10)のエッチプリント・サルファープリント調査結果 ……183  
Photo. 35 大鉄塊(HYS-10)の断面マクロ組織 ……184  
Photo. 36 炭化材の顕微鏡写真1 ……195  
Photo. 37 炭化材の顕微鏡写真2 ……196  
Photo. 38 炭化材の顕微鏡写真3 ……197  
Photo. 39 炭化材の顕微鏡写真4 ……198

## 写真図版

- 図版 1 遺跡周辺(1947年)  
図版 2 遺跡周辺(1989年)  
図版 3 林遺跡全景  
図版 4 中央丘陵遠景  
図版 5 オオカミダニ2・1号窯  
図版 6 灰原検出状況 灰原掘り下げ  
図版 7 オオカミダニ2号窯全景 完掘後  
図版 8 断ち割り後 奥壁部層位 焼成部層位 焚口部層位 焚口部壁断ち割り  
図版 9 床面土器出土状況1(焚口部から) 床面土器出土状況2(焼成部から)  
図版10 床面土器出土状況3(詳細)  
図版11 前庭部層位(南面) 前庭部層位(北面)  
図版12 煙道全景 煙道層位(上層)  
図版13 煙道層位(下層、南面) 煙道層位(下層、北面)  
図版14 煙道部貼り床1(南西) 煙道部貼り床2(北面)  
図版15 煙道部貼り床3(北面) 煙道部貼り床4(北面)  
図版16 係属溝層位 付属土坑層位  
図版17 付属土坑・付属溝 焚口部天井(北壁)  
図版18 オオカミダニ1号窯全景 完掘後  
図版19 焚口部層位 焚口部天井(1北壁、2南壁、3南壁下) 焼成部壁断ち割り  
図版20 奥壁付近 焚口部舟底状ピット  
図版21 煙り出し部 煙道全景(南から)  
図版22 煙道全景(北から) 付属溝・付属土坑

- 図版23 煙道層位 煙道部窯壁出土状況 付属溝層位付  
 属土坑層位  
 図版24 前庭部層位1(焚口部側) 前庭部層位2(灰原  
 側)  
 図版25 前庭部層位3 前庭部層位4(横断面)  
 図版26 1号窯灰原・盛土層位 1号窯盛土内土器出土  
 状況  
 図版27 1号窯盛土層位(横断面) 1号窯盛土層位(縦  
 断面)  
 図版28 土師器焼成土坑土器出土状況 土器取り上げ後  
 図版29 土師器焼成土坑・第1・2・4号木炭窯付近 第  
 1号木炭窯(南から)  
 図版30 第2号木炭窯木炭出土状況 完掘後  
 図版31 第4号木炭窯木炭出土状況 完掘後  
 図版32 第5号木炭窯 調査区壁側断面  
 図版33 焼土土坑 第1・3・5・6・8・9・12・13  
 号土坑  
 図版34 第1号土壘全景 土壘断ち割り土層  
 図版35 第2号土壘全景  
 図版36 第2号土壘 第2号土壘付属溝群  
 図版37 第5号溝(西から) 第5号溝(北東から)  
 図版38 第5号溝 第2号土壘付属溝群(第5 a b号溝、  
 東、北東、南西から、第4号溝)  
 図版39 郭状遺構遠景 中央丘陵全景  
 図版40 主郭状遺構 完掘後  
 図版41 主郭状遺構(東) 主郭状遺構(西) 第1号郭状  
 遺構 第2号郭状遺構 郭状遺構遠景 第2号  
 郭状遺構 第2・3号郭状遺構 第3号郭状遺構  
 図版42 第4～8号郭状遺構 完掘後  
 図版43 第9号郭状遺構 完掘後  
 図版44 道路状遺構全景 道路状遺構(第11号溝)  
 図版45 ピット群(G 6区付近、G 8区付近、I 7区付近、  
 ピット内土器) N19区落ち込み(土壘付属  
 溝?)  
 図版46 製鉄遺構  
 図版47 製鉄遺構(南側、北側)  
 図版48 製鉄遺構全景 半地下式豎形炉  
 図版49 鋳型埋設土坑(上側) 鋳型埋設土坑(下側)  
 図版50 鋳型出土状況1 鋳型出土状況2  
 図版51 作業場・排水溝(作業場木炭層、作業場層位、排  
 水溝層位、排水溝) 作業場遺物出土状況  
 図版52 送風関連施設遺物出土状況 完掘後  
 図版53 送風関連施設(遺物出土状況1上面、2下面、3  
 土器) 排水溝 炉壁No.2 出土状況 炉壁集中  
 中区表土除去後 炉壁集中区全体 炉壁集中中  
 区上側  
 図版54 2号窯坏A 1・2類  
 図版55 2号窯坏A・3～6類  
 図版56 2号窯床上検出坏A  
 図版57 2号窯坏A  
 図版58 2号窯坏B  
 図版59 2号窯高坏A類  
 図版60 2号窯高坏C 1類  
 図版61 2号窯高坏C 2～C 5類  
 図版62 2号窯高坏C 6～10・B類  
 図版63 2号窯甗、瓶、長頸瓶、平・提・横瓶  
 図版64 2号窯短頸壺  
 図版65 2号窯壺  
 図版66 2号窯甕  
 図版67 2号窯蓋  
 図版68 2号窯脚、蓋、焼台  
 図版69 1号窯坏A 1～4類  
 図版70 1号窯坏A 6類  
 図版71 1号窯坏A 7～10(11)類  
 図版72 1号窯坏A身  
 図版73 1号窯坏A蓋  
 図版74 1号窯坏B蓋 1～B 4類  
 図版75 1号窯坏B蓋 B 5～B 7類、坏B身、甕、鉢  
 図版76 1号窯高坏蓋  
 図版77 1号窯高坏A・B・類  
 図版78 1号窯高坏C類  
 図版79 1号窯高坏D類、甗、瓶、長頸瓶  
 図版80 1号窯埵・平・横瓶、無頸壺、短頸壺  
 図版81 1号窯壺  
 図版82 1号窯壺底部、甕  
 図版83 1号窯甕  
 図版84 1号窯甕  
 図版85 1号窯蓋、陶錘、焼台、器種不明品  
 図版86 所属窯不明横瓶、鉢、壺  
 図版87 1・2号窯、別窯須恵器  
 図版88 調査区出土遺物1(土師器、須恵器)  
 図版89 調査区出土遺物2(土師器、中・近世陶磁器)  
 図版90 調査区出土遺物3(石器、瓦)  
 図版91 調査区出土遺物4、製鉄遺構出土遺物1  
 図版92 大鉄塊X線CTスキャナー1  
 図版93 大鉄塊X線CTスキャナー2 大鉄塊右側面  
 図版94 製鉄遺構出土遺物2(大鉄塊)  
 図版95 製鉄遺構出土遺物3(鉄器、黒鉛化木炭など)  
 図版96 製鉄遺構出土遺物4(土器、鋳型)  
 図版97 製鉄遺構出土遺物5(鋳型、鉄塊系遺物)  
 図版98 製鉄遺構出土遺物6(羽口、石)  
 図版99 製鉄遺構出土遺物7(炉壁)  
 図版100 製鉄遺構出土遺物8(炉壁、鉄滓)

## 表 目 次

表 1	周辺の遺跡	3
表 2	土坑一覧	64
表 3	製鉄遺構遺物出土地	134
表 4—(1)	供試材の履歴と調査項目	146
表 4—(2)	供試材の履歴と調査項目	147
表 5	製鉄関連遺物の化学組成	148・149
表 6	オオカミダニ 1 号窯の NRM の磁化測定結果 .....	188
表 7	オオカミダニ 2 号窯の NRM の磁化測定結果 .....	188
表 8	オオカミダニ 1 号窯の 50Oe の磁化測定結果	188
表 9	オオカミダニ 2 号窯の 50Oe の磁化測定結果	188
表 10	オオカミダニ窯跡の考古地磁気測定結果	188
表 11	木炭窯出土材（1 次調査）の樹種	193
表 12	飛鳥時代 1 号窯出土材（2 次調査）の樹種	193
表 13	飛鳥時代 2 号窯出土材（2 次調査）の樹種	194
表 14	平安時代末～中世初頭製鉄炉出土材（2 次調査） の樹種	194
表 15	出土遺構と樹種構成	194
表 16	2 号窯地点別土器出土状況	207
表 17	1 号窯地点別土器出土状況	208
表 18	出土土器破片数・実測土器破片数・推定個体数 .....	217
表 19	須恵器重量・体積・粘土体積	217
表 20	器種別型式数	218
表 21	X 4 Y 18 区鉄滓等計測値	228
表 22	X 4 Y 19 区鉄滓等計測値	229
表 23	製鉄遺構鉄滓等計測値	230
表 24	調査区鉄滓等計測値	231
表 25	2 号窯須恵器(1)	244
表 26	2 号窯須恵器(2)	245
表 27	2 号窯須恵器(3)	246
表 28	2 号窯須恵器(4)	247
表 29	2 号窯須恵器(5)	248
表 30	2 号窯須恵器(6)	249
表 31	2 号窯須恵器(7)	250
表 32	1 号窯須恵器(1)	250
表 33	1 号窯須恵器(2)	251
表 34	1 号窯須恵器(3)	252
表 35	1 号窯須恵器(4)	253
表 36	1 号窯須恵器(5)	254
表 37	1 号窯須恵器(6)	255
表 38	1 号窯須恵器(7)	256
表 39	1 号窯須恵器(8)	257
表 40	1 号窯須恵器(9)	258
表 41	所属窯不明須恵器	258



## 第1章 位置と環境

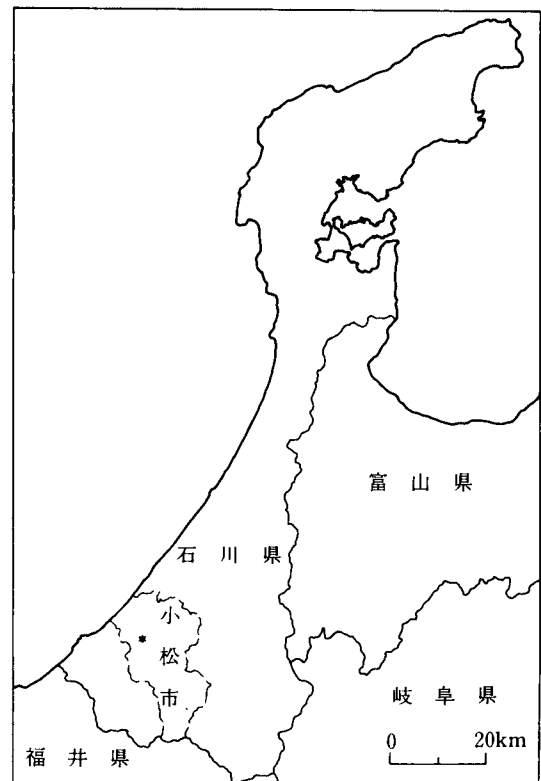
林遺跡は石川県小松市林町地内に位置する。林町は旧加賀国の能美郡に属し、江沼郡との境に位置した。現在は小松市の南部地区(第1図)に位置し、日用川が開析した谷平野に立地する。遺跡は林町の西側に位置し、白山山系から続く丘陵の先端部に立地する。この丘陵は白山山系の前山地帯にあたり、高位段丘堆積物からなり、標高40~100mの低丘陵である。この低丘陵は遺跡周辺(北東~南西方向)に分布し、小さな谷が多く入っている。丘陵の北側には木場潟(第2図上)、今江潟(消滅)、柴山潟に挟まれた低い台地が続き、三湖台と呼ばれている。この台地は中位段丘堆積物からなり、多くの遺跡や古墳(第2図78~103)などが確認されている。林遺跡周辺には沖積平野や低丘陵内の谷平野が存在する。現況は水田であり、水田の床土以下には白色粘土が存在し、現在は小松瓦の瓦土として採集されている。この粘土は古代では須恵器・土師器の粘土、中世は加賀焼の陶土、近世は赤瓦の瓦土に使用されたものと推定される。

林遺跡付近の丘陵列は須恵器窯跡162基、土師器窯跡27基、中世陶器(加賀焼)窯跡35基以上が確認されており、南加賀古窯跡群と呼ばれている。製鉄遺構も40基が確認されている。窯跡群は戸津・林地区(第2図1、5)、戸津オオダニ地区(6~10、14)、二ツ梨オオダニ地区(16~27、39)、矢田野・箱宮地区(36、38)、動橋川流域(北東地区50~52)、馬場川流域(30、32、33、59)に大別されている。林遺跡(1)は戸津・林地区にあたり、南加賀古窯跡群の北東端に位置する。県調査地はオオカミダニ支群(須恵器窯2基、木炭窯5基以上)にあたり、北側にはタカヤマ支群(須恵器窯3基、木炭窯4基)が存在する。林地区の須恵器窯は全て7世紀前半である。県関係の調査区では須恵器窯2基、土師器窯1基、木炭窯4基などを検出した。市関係調査区(第3図)では須恵器窯3基、木炭窯4基、製鉄炉2基などを検出した。林遺跡付近の丘陵列と木場潟の東側に存在する白山山系前山地帯には多くの製鉄遺跡が確認されているが、今後も数が増えるものと推定される。林遺跡周辺は須恵器窯を中心とした窯跡調査は多く行なわれているが、集落遺跡はあまり調査が行われていない。各時代ごとに概観してみたい。

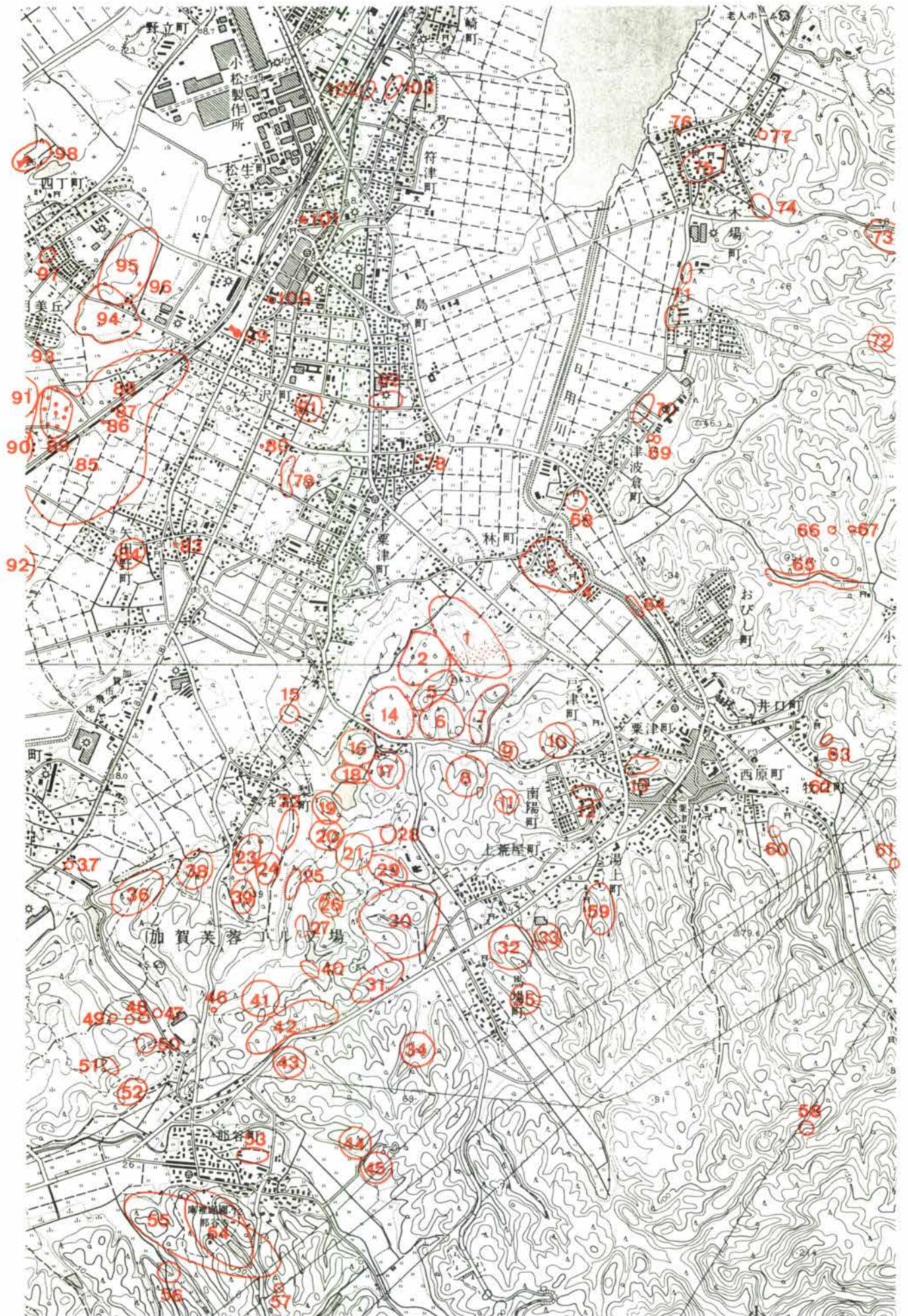
**縄文時代** 木場温泉遺跡(77)、大谷山貝塚(70)、念仏林南遺跡(94)、念仏林遺跡(95)、符津A・B遺跡(102・103)、矢田A遺跡(91)などが存在する。大谷山貝塚は前期前葉の貝塚であり、その台地上にも遺跡が存在した。台地上では前期後葉の蛭ヶ森式、福浦上層式土器が出土している。念仏林南遺跡は中期前葉~中葉の新崎II式、上山田I式期の集落遺跡である。住居跡6棟ほかに後期前葉の気屋II式、後期末の八日市新保(I)式土器が出土した。北側に位置する念仏林遺跡でも念仏林南遺跡と同じ時期の土器が出土しており、同じ集落(遺跡)であろう。

**弥生時代** 島遺跡(82)、念仏林南遺跡が存在する。島遺跡には後期の土器、念仏林南遺跡では月影式土器が出土している。

**古墳時代** 古墳時代は念仏林南遺跡、矢田野遺跡(85)、矢田B遺跡(90)、刀何理遺跡(92)などの集落遺跡が存在する。念仏林南遺跡では、古墳時代中期の住居跡5棟や7世紀前半の須恵器が出土した。古墳は三借家8号墳(89)、白のほぞ古墳(98)、矢田野エジリ古墳(99)などの前方後円墳が確認され



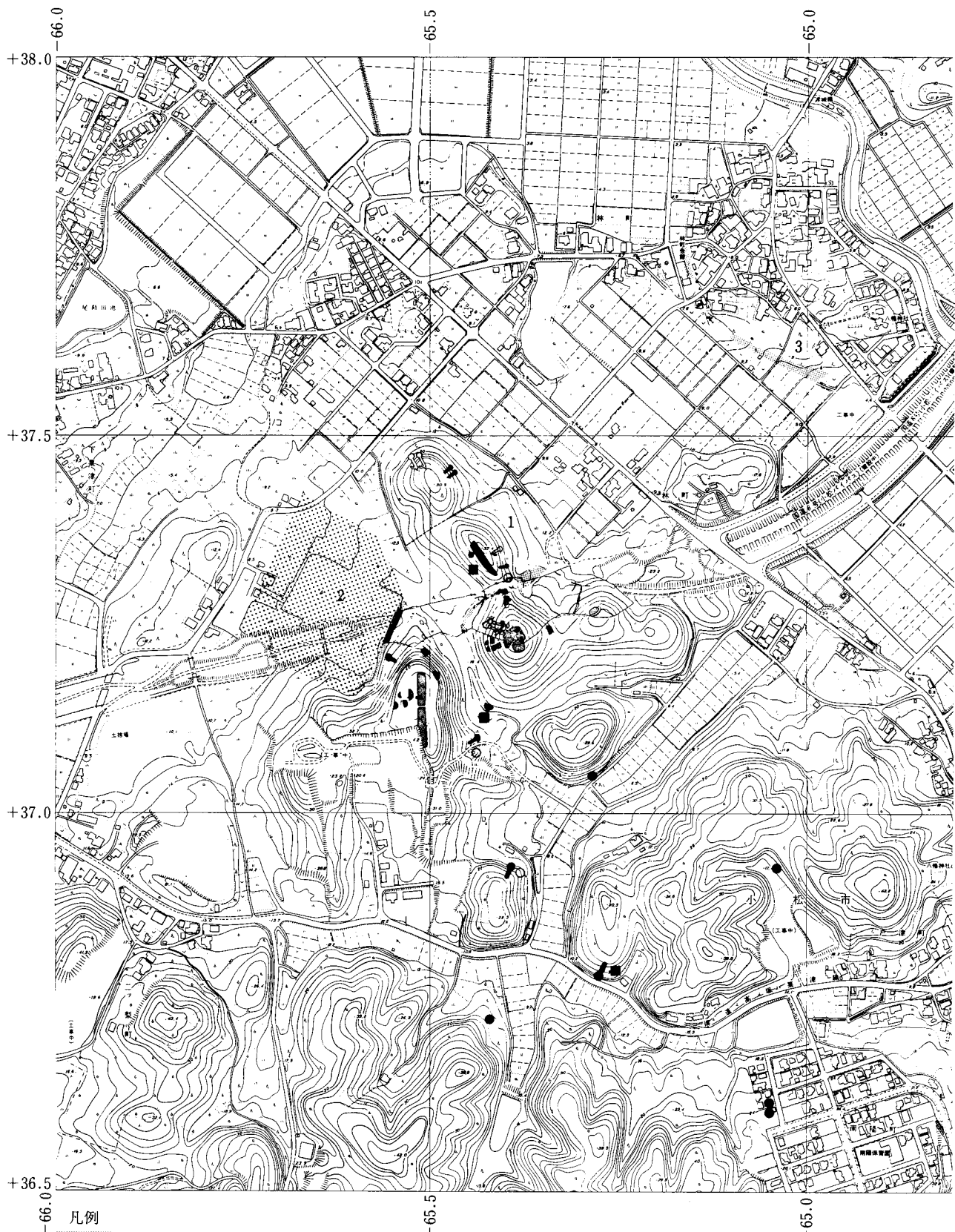
第1図 石川県全体図











第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

表1 周辺の遺跡

遺跡名(時期)	性格
1	林遺跡(飛鳥~中世) 須5 土1 炭8 製鉄(箱1・縦1)
2	林超勝寺伝承地(16世紀)
3	林六郎館跡伝承地(中世) 土壘
4	林八幡神社経塚(鎌倉後期)
5	戸津六字ヶ丘窯跡(古墳・奈良) 須16 土1
6	戸津古窯跡群(古墳~中世) 須25 土18 加賀1 炭2
7	戸津シンプザワ遺跡(平安) 須4 製鉄2
8	戸津オオタニ遺跡(奈良) 須1 製鉄1
9	戸津1号窯跡(平安~室町) 須 製鉄
10	戸津ショウガタニ遺跡(平安) 須1 製鉄1
11	戸津第2号窯跡(平安) 炭
12	戸津製鉄跡(不詳) 製鉄
13	戸津本蓮寺跡(室町) 土壘 庭園跡
14	ニツ梨一貫山古窯跡(奈良前半・平安) 須・土10
15	ニツ梨遺跡(奈良・平安)
16	ニツ梨豆岡山窯跡(古墳) 須4
17	ニツ梨豆岡山向山窯跡(奈良・平安) 須4
18	ニツ梨殿様池窯跡(古墳・平安) 須・埴輪3 土3
19	ニツ梨丸山窯跡(古墳) 須2
20	ニツ梨峠山窯跡(古墳・奈良) 須6
21	ニツ梨サンマイダニ窯跡(平安) 須5
22	ニツ梨東山窯跡(古墳・奈良) 須5
23	ニツ梨釜谷窯跡(奈良・平安) 須3
24	ニツ梨脇釜窯跡(奈良) 須1
25	ニツ梨横川窯跡(奈良) 須1 製鉄1
26	ニツ梨カセイデ古窯跡(不詳) 須2
27	ニツ梨奥谷窯跡(平安末) 加賀3
28	上荒屋遺跡(奈良) 須2
29	上荒屋サンマイダニ遺跡(平安ほか) 須4以上 製鉄2
30	上荒屋ジャモンダニ遺跡(古墳・平安) 須4 製鉄8
31	上荒屋ユルイデン遺跡(不詳) 製鉄4以上
32	上荒屋ホジョウヤマ遺跡(平安~中世) 須5 製鉄2 中世
33	上荒屋ハカタンニ窯跡(中世) 加賀2
34	上荒屋那谷口遺跡(不詳) 製鉄
35	馬場ニカヤマ遺跡(平安) 須・土数基、製鉄
36	加賀市箱宮窯跡(奈良・平安・中世) 須7 中世1
37	箱宮B遺跡(中世)
38	矢田野長尾山遺跡(平安・鎌倉) 須6 製鉄2
39	矢田野向山窯跡(奈良) 須1
40	矢田野1・2号横穴(古墳)
41	那谷1~6号横穴(古墳)
42	那谷中山谷遺跡(不詳) 製鉄2基
43	那谷梅ヶ谷遺跡(不詳) 製鉄
44	那谷エモンジャ遺跡(不詳) 製鉄
45	那谷コモクソ遺跡(不詳) 炭3 エモンジャ遺跡に供給
46	那谷1号窯跡(鎌倉初期) 加1 近くに製鉄3
47	小天王谷第1号製鉄跡(不詳)
48	小天王谷第2・3号製鉄跡(不詳)
49	大久保谷第1・2号製鉄跡(不詳)
50	小天王谷第1・2号窯跡(鎌倉) 加賀焼
51	大天王谷第1~5号窯跡(鎌倉) 加賀焼
52	カミヤ古窯跡(鎌倉) 加5
53	那谷遺跡(鎌倉中期)
54	那谷寺遺跡(室町)
55	那谷城跡(室町)
56	那谷ゴザダニ遺跡(不詳) 製鉄
57	那谷タタラ遺跡(不詳) 製鉄
58	西荒谷カマンダニ窯跡(鎌倉末~室町) 加2
59	湯上谷窯跡(中世) 加8以上 製鉄(不詳)
60	牧口製鉄跡(不詳) 製鉄
61	西原製鉄跡(不詳) 製鉄
62	牧口中世墓地(鎌倉中期~室町)
63	井口神社タタラ跡(不詳) 製鉄
64	井口遺跡(奈良・平安)
65	小山田A遺跡(不詳) 製鉄
66	スギモトB遺跡(不詳) 製鉄
67	スギモトA遺跡(不詳) 製鉄
68	津波倉神社遺跡(中世)
69	津波倉ホツジ遺跡(室町末期) 地下式横穴
70	大谷山貝塚(縄文前期、古代)
71	木場古墳群(古墳) 4基以上
72	木場遺跡(G地区)(不詳) 製鉄
73	木場A遺跡(奈良後半) 製鉄1 炭3
74	木場B遺跡(平安・中世)
75	池田城跡(不詳)
76	木場古墳(古墳) 円墳 刀、勾玉
77	木場温泉遺跡(縄文)
78	下粟津1・2号横穴(古墳)
79	下粟津横穴(古墳)
80	島経塚(不詳) 経石
81	島B遺跡(奈良・平安)
82	島遺跡(古墳~奈良)
83	中村古墳(古墳) 円墳 須恵器、土師器、刀剣、銀環
84	矢田野神社前遺跡(平安)
85	矢田野遺跡(古墳後期)
86	矢田野1号墳(古墳) 円墳
87	矢田野2号墳(古墳) 円墳 須恵器
88	百人塚古墳(古墳) 円墳 須恵器
89	借家1~8号墳(古墳後期) 円墳 8号墳(前方後円墳34m)
90	矢田野B遺跡(古墳)
91	矢田野A遺跡(縄文)
92	刀何理遺跡(古墳後期・中世)
93	念仏塚古墳(古墳) 円墳
94	念仏林南遺跡(縄文中期・古墳)
95	念仏林遺跡(縄文中期~古墳)
96	念仏林古墳(古墳後期) 方墳 鉄鎌、金環、玉類
97	月津新遺跡(縄文)
98	臼のほぞ古墳(古墳) 前方後円墳52m
99	矢田野エジリ古墳(古墳後期) 前方後円墳30m 須恵質埴輪
100	裏輪塚古墳(古墳後期) 前方後円墳 須恵器、鉄器、小玉
101	石山古墳(古墳後期) 切石横穴式石室 金・銀環、馬具
102	符津B遺跡(縄文中・後期)
103	符津A遺跡(縄文)



- 凡例
-  土塁状遺構
  -  郭状遺構
  -  超勝寺伝承地
  -  須恵器窯
  -  木炭窯
  -  製鉄跡
    -  箱形炉
    -  竪形炉

第3図 周辺の地形 (1/7,500)

ている。矢田野エジリ古墳は試掘調査により古墳の存在が確認された。墳丘がすでに削られており、周溝だけ残っていた。6世紀前半代の古墳で土師質と須恵質埴輪が出土した。円筒、人物、馬の埴輪が出土した。借屋4号墳(89)、念仏林古墳(96)、養輪塚古墳(100)は箱形の粘土槨を主体部に持ち、中村古墳(80)は切石積み石室を持つ。三湖台には20基の古墳が確認されているが、現在若干の古墳が残っているだけである。調査や確認されずに消滅した古墳は相当数にのぼるものと思われる。木場潟に望む丘陵先端にも木場古墳群(71)が存在する。

須恵器生産は6世紀初頭に二ツ梨オオダニ地区(6~10、14)で始まり、6世紀前半に戸津・林地区(1、5)、6世紀末に動橋川流域で開始された。7世紀前半代の窯は林タカヤマ窯跡(3基)、林オオカミダニ窯跡(2基)、戸津六字ヶ丘窯跡(3基)など、戸津・林地区に多く確認されている。二ツ梨オオダニ地区では二ツ梨峠山窯跡(1基)、動橋川流域では分校窯跡(5基)、松山窯跡、那谷金比羅山窯跡(5基)が確認されている。林タカヤマ窯跡と林オオカミダニ窯跡では、窯尻に土坑状の煙道を持ち、煙道部から続く作業道と思われる溝を待つ。戸津・林地区と動橋川流域では8世紀初頭、二ツ梨オオダニ地区は9世紀初頭に須恵器生産は終焉した。

古代 木場B遺跡(74)、島遺跡、島B遺跡(81)、矢田野神社前遺跡(84)などが存在する。8世紀初頭になると戸津オオダニ地区で須恵器生産が開始され、中心的窯場(全盛期)となる。二ツ梨オオダニ地区でも併存して生産が行なわれた。9世紀になると戸津オオダニ地区に窯が集中し始め、9世紀末に2回目の全盛期を向かえた。そして須恵器生産は10世紀中頃に終焉した。

製鉄遺跡は小天王谷第1号製鉄跡(47)、林遺跡(1)、木場A遺跡(73)が調査されている。小天王谷1号製鉄跡は箱形炉であり、古代と思われるが、時期は確定できない。林遺跡1号製鉄炉は箱形炉であり、8世紀中頃と思われる(宮下1991)。製鉄炉には排水溝が「コ」の字状に巡り、上屋が存在したものと推定されている。木炭窯が1基伴うようである。木場遺跡群では製鉄跡3箇所が調査された(望月1991)。木場A遺跡(73、C地区)では箱形炉1基と木炭窯2基が調査された。木炭窯は8世紀後半の横口式木炭窯1基と9世紀ごろの地下式木炭窯1基が存在した。箱形炉の時期も木炭窯と同じと思われる。東側のB地区では製鉄炉2基と木炭窯2基が存在した。1号製鉄炉は竪形炉であり、送風施設を持つ。時期は10世紀前後と思われる。2号製鉄炉は地下構造と思われる隅円長方形の土坑が存在した。上側に送風施設を持ち、鉄滓は竪形炉系の炉内滓である。これらの特徴から竪形炉と思われるが、地下構造を持つことから箱形炉と竪形炉の折衷形態かもしれない。時期は9~10世紀と思われ、1号製鉄炉より古いものと思われる。A地区では、地下式の木炭窯2基、平窯構造の木炭窯1基が存在した。製鉄炉は発見されなかったが、谷向いの大曲遺跡に竪形炉が存在するようである。

中世 那谷町地内には鎌倉~室町時代の那谷遺跡(53)、那谷寺遺跡(54)、那谷城跡(55)が存在する。時期不詳ながら津波倉神社遺跡(68)、池田城跡(75)などが存在する。一向一揆関係では越前藤島超勝寺の移転推定地(2)、超勝寺の分流である戸津本蓮寺跡(12)などが存在する。林超勝寺伝承地(第3図2)は通称「門の内」と呼ばれ、雑草地であった。明治23年頃水田用に開墾され、大正3年に果樹園に造り替えられた。土塁と溝による方形区画の寺域が存在したようであるが、溝は水田のために埋められており、しかも遺物もなかったという(上田1924)。また、林の集落(3)は江沼郡古城跡図によると林六郎四郎影久の古城跡とされている。大正期には集落全部が城郭の内部にあるようであり、現在は集落の南側にのみ土塁と空堀が存在し、北隣の集落にある津波倉神社遺跡(68)との関連が想定されている(石田1988)。

須恵器生産が終焉して200年ほど後になると、今度は瓷器系の中世陶器(加賀焼)が焼かれ始めた。主に馬場川流域と動橋川流域に窯が分布し、12世紀後半~14世紀末まで焼かれていた。二ツ梨奥谷窯跡(27)、那谷1号(ナタカナクソダニ)窯(46)、大天王谷窯跡(51)、カミヤ古窯跡(52)、湯上谷窯跡(59)、西荒屋カマンガニ窯跡(58)が標識窯である。製鉄遺跡は12世紀前後の林遺跡2号製鉄炉(竪形炉)が存在する。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

**事前調査** 小松市内の交通渋滞をはじめとする諸問題に対処するために、寺井町大長野～加賀市箱宮間 15.6 km に一般国道 8 号小松バイパスが計画された。小松市八幡～加賀市箱宮区間の小松バイパス予定地内は低丘陵や山地、そして谷が多く存在する。そのためまず踏査を行ない、現況の把握に努めた。踏査により遺跡を確認し、また遺跡が存在しそうな地点(試掘調査必要地)を定めた。建設省が用地取得後に、試掘調査を実施した。昭和 62 年 3 月下旬栗津町・林町地内のボックス建設に伴う試掘調査が行なわれた。林超勝寺伝承地内の試掘では水田耕作土の下は地山であり、試掘穴や周辺には遺構・遺物は存在しなかった。伝承地は大正期にはすでに果樹園のために壊されていた(上田 1924)。現況も南西側はひどい攪乱が認められ、試掘地点には、産業廃棄物が埋められていた所も存在した。昭和 62 年 10 月には林町の山林(調査区)の試掘調査を行なった。須恵器窯 1 基、土師器窯 1 基、窯の落ち込み(自然の落ち込み) 3 基、鉄滓散布地 1 箇所が確認された。昭和 62 年 12 月には二ツ梨町地内を試掘調査を行なったが、遺構・遺物は確認されなかった。昭和 63 年度石川県立埋蔵文化財センター(以下センターと省略)の発掘調査中に東丘陵から県道部分までの部分を試掘調査を行なったが、遺構・遺物は確認されなかった。

**第 1 次調査** 昭和 63 年度は建設省から依頼を受けてセンターが発掘調査を実施した。調査面積は 1 万 m<sup>2</sup> を対象とし、現地作業は 5 月 18 日～12 月 14 日まで実施した。調査区内は樹木が生い茂り、しかも倒木が多数存在した。まず樹木を伐採し、中央谷部に試掘トレンチを設定し、遺構と包含層の状況を把握した。G 6 区付近には包含層が 2 層確認された。中央谷部東側には土塁、中央丘陵には郭状遺構の存在が確認された。土塁と郭状遺構を航空測量した後、中央丘陵の調査に入った。須恵器窯付近に試掘トレンチを設定(第 6 図)し、須恵器窯の状況を把握した。オオカミダニ 1 号窯の左(北)側に古い窯が存在することが判明し、オオカミダニ 2 号窯と命名した。

伐採に時間を要したこと、郭状遺構が須恵器窯の上に存在すること、須恵器窯が新たに 1 基確認されたこと、灰原出土土器の多きなどから調査計画が遅れることとなった。昭和 63 年 10 月に建設省とセンターの協議がもたれ、調査面積が 8 千 m<sup>2</sup> に変更された。須恵器窯の灰原部分(第 6 図)まで調査を行なった。

**第 2 次調査** 平成元年度は建設省から依頼を受けた石川県教育委員会が(財)石川県埋蔵文化財保存協会(以下協会と省略)に発掘調査を委託した。委託調査面積は 1 万 m<sup>2</sup> であり、現地作業は平成元年(1989) 5 月 8 日～12 月 20 日まで実施した。最初に中央丘陵の郭状遺構を調査した。その後、須恵器窯 2 基の調査に着手した。須恵器窯の調査に目処がたつと、中央丘陵東斜面～東谷部の調査に取り掛かった。M 16、17 区付近で製鉄遺構が路線外に伸びていることが判明した。M 16、17 区付近の調査を中断して、石川県教育委員会に建設省と小松市教育委員会との協議を要請した。協議の結果、小松市教育委員会の発掘調査予定地区側に約 70 m<sup>2</sup> 拡張する(当協会が調査する)ことになった。製鉄遺構調査のために、富山県埋蔵文化財センター関清氏に調査指導を要請した。製鉄遺構は谷(下)側から調査を開始した。調査が上側に及んだ際に、竪形炉と鑄型埋設土坑が検出された。その取り扱いについて当協会と小松市教育委員会が協議した。協議の結果、竪形炉と鑄型埋設土坑は調査せずに小松市教育委員会に引き渡すこととなった。富山大学広岡公夫氏に須恵器窯の熱残留磁気調査をお願いした。

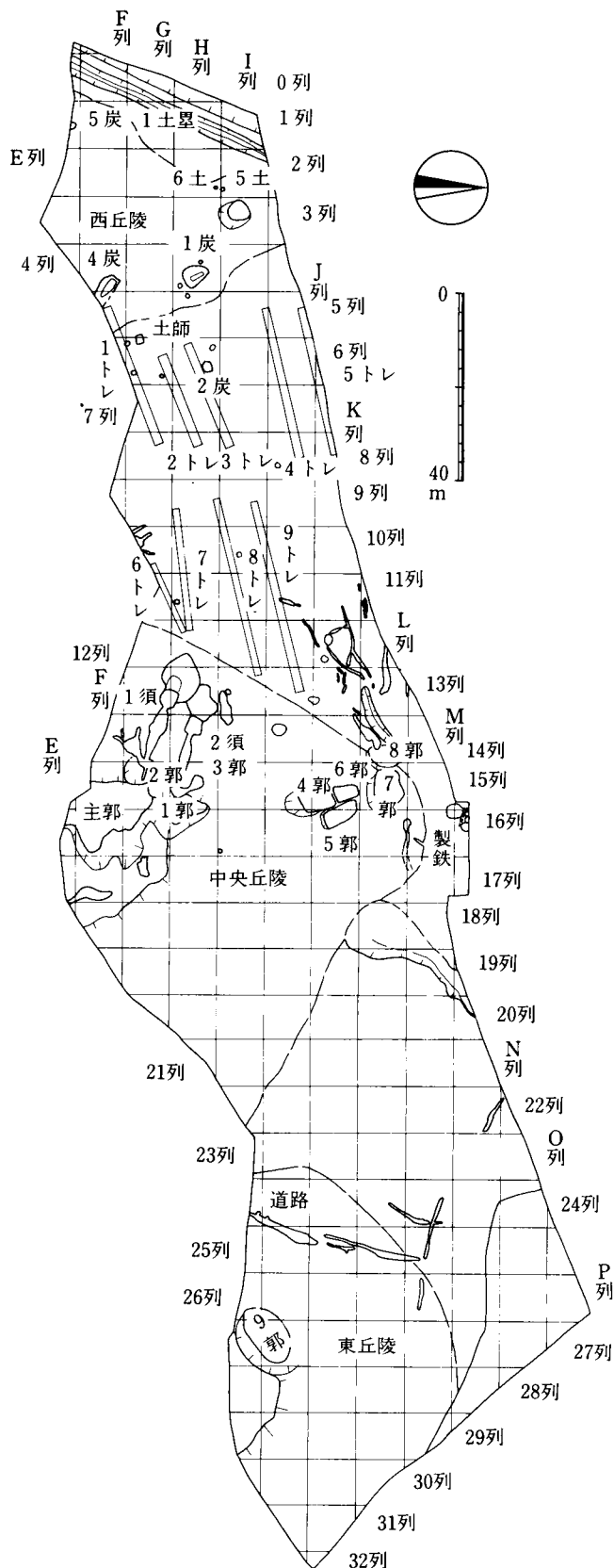
**整理作業** 平成 2 年 1 月から出土遺物の整理作業に着手した。2 月穴澤義功氏に製鉄遺跡の調査方法、大澤正己氏に金属学的研究に関する講演をお願いした。平成元年度にバリノ・サーヴェイ株式会社に木炭の樹種同定を、大澤正己氏に鉄滓等の金属学的分析を委託した。平成 2、3 年度にも遺物整理作業を実施した。平成 2 年度国立歴史民俗博物館で大鉄塊を X 線 CT スキャナーにかけさせて頂いた。平成 3 年度川鉄テクノリサーチ株式会社に大鉄塊の切断作業を、大澤正己氏に鉄滓等の金属学的分析を委託した。

### 第3章 遺構と遺物

#### 第1節 概要

調査区の区割りは、西端中央に存在した道路中央線杭を基準として設定した。真北にあわせて、10mグリッドを設定した。南北列をアルファベット、東西列をアラビア数字を冠した。グリッド番号は南西のポイントで代表させた。グリッド設定時点に路線図面がなく、南側に延びると思われたので、基準点をH1杭としたが、結果としてA～D列は存在しない。

調査区は大きく3つの丘陵と3つの谷部に分かれる(第4図)。西端の丘陵を西丘陵、東側の丘陵を東丘陵、間の丘陵を中央丘陵と呼称する。西丘陵には、斜面西側(西谷部)に第1号土壘(第35図)、第5号木炭窯(第34図)、第5・6号土坑(第34図)と攪乱と思われた平地、尾根部分にピットが存在した。中央谷部西側には第1・4号木炭窯(第31、32図)が存在した。中央谷部には10世紀中ごろの土師器焼成土坑(第29図)、第1～4号土坑(第34図)、古代のピット群が存在し、8～11世紀代の土器が出土した。中央谷部東側には第2号土壘・付属溝群(第36図)、第7～13号土坑(第34図)が存在し、中世の土器・陶器が出土した。中央丘陵の北側(先端)と頂上部には郭状遺構(第38図)、西斜面には7世紀前半の須恵器1・2号窯(第5図)、東斜面には自然の落ち込み群が存在した。中央丘陵の北側には12世紀前後の竪形炉と鑄型埋設土坑(第64図)が存在した。東谷部には風倒木痕と落ち込み(土壘の付属溝か)が存在した。東丘陵には西斜面に14世紀と思われる道路状遺構(第48図)、頂上部には郭状遺構(第44図)が存在した。斜面には古代と中世の土器が出土し、頂上部には近世の赤瓦が出土した。



(1/1,500)

第4図 主要遺構配置図

## 第2節 須恵器窯

### 1. 調査方法と概要

**分布調査** 中央丘陵には須恵器窯1基が確認されていた(近間1988)。これは小松高校地歴部が小松市内丘陵部における窯跡の確認を目的とした踏査を行った。昭和61年度に確認され、林オオカミダニ1号窯と命名された。昭和62年度に分布調査を行った際には、試掘(分調)7トレンチが1号窯の灰原裾をかすめた。

**第1次調査** 上部に郭状遺構が存在したことや1号窯の落ち込み・盛土などが確認された(第5図)ので、現状地形を航空測量した。そして須恵器窯の位置と数の確認の為に人力による試掘を行なった。第6図1～2ライン、3～4ライン下にトレンチを設定した。その結果、もう1基別な須恵器窯が存在することが判明し、2号窯と命名した。両者の関係を調べるために土層観察用の畦を残して、表土・流土を除去した。灰原(黒色)を検出し、色調の違いなどによって、ブロック分けを行い(第10図)、上面のレベルを押しえた。そして、10mグリッドを2.5m方眼に組み、16の小グリッドを設定した(第9図上)。昭和63年度は灰原部分を調査した。灰原と盛土の切り合い関係から北側の2号窯の方が古いことが判明した(第7図5～6ライン)。来年度も継続して調査を実施しなければならず、土層観察用の畦と前庭部は調査しなかった。

**第2次調査** 丘陵頂上部の郭状遺構を調査完了後、流土を除去し、窯体の落ち込み痕を検出した。2号窯は左側に煙道から続く付属溝と土坑(ともに作業用)を持ち、焼成部に須恵器の取り残し(第90図)が存在した。1号窯には右側に付属溝と土坑を持ち、煙道部には煙出しと思われる溝が存在した。1号窯の盛土下(H12-14、H13-2、-3、-6、-7区)には2号窯の灰原が一部存在した(図版7、27)。

### 2. オオカミダニ2号窯

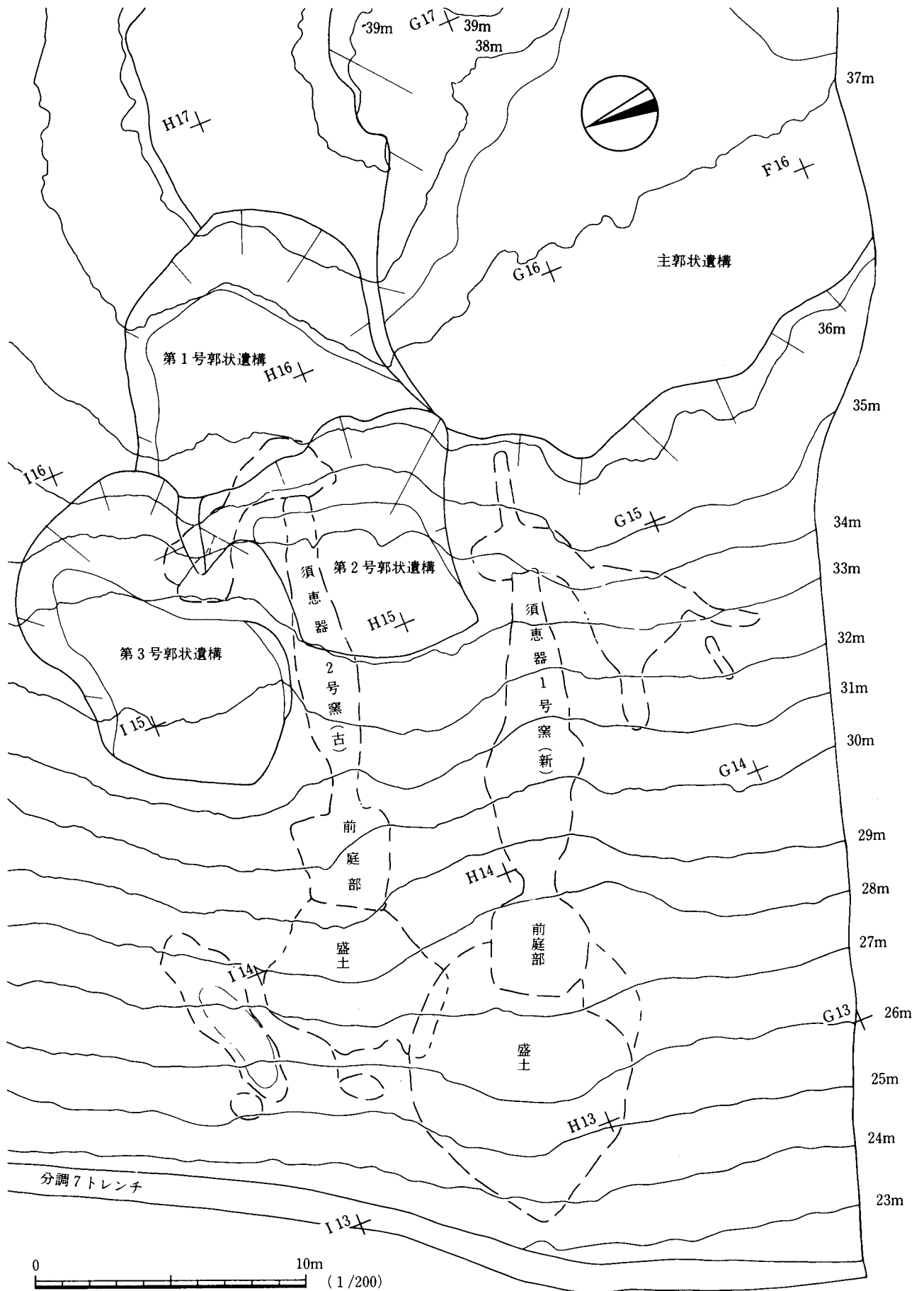
**概要** H13～H15区に位置する(第11図)。中央丘陵の西裾から8m上に前庭部、頂上から3m下に煙道部が築かれていた。窯は等高線に対して直行かやや左に寄って築かれていた。第2・3号郭状遺構によって窯尻、煙道、付属溝・土坑の一部が削られていた。全長18.6mを測ると思われる。

**窯体** 名称は須恵器窯跡カード作成マニュアル(北陸古代土器研究会1992)によるが、マニュアルに拠らない部分もある。窯体長11.8m(焼成部長さ9.4m、焚口部長さ2.4m)を測る(第21図)。床幅は奥壁付近0.95m、焼成部最大1.8m、焚口開口部1.1mを測る。基本的には地下式であるが、焚口部の前庭部付近と奥壁の煙道部付近は半地下式の可能性がある。胴部最大幅は奥壁付近は床幅より狭く、焼成部最大幅2mを測る。焚口部の開口部幅は床幅(1.1m)より狭く(1m)、絞り込んでいる。窯体の主軸は焚口から焼成部の1/3まではやや右(南)側に振れ、焼成部中央付近はやや左(北)側に振れ、奥壁付近は右(南)側に振れ戻っている。奥壁の先端は側壁より0.2m前にはみ出している。焼成部中央の右側と焚口部には床に亀裂がはいっており、壁(粘土)の繋ぎ目のように見えた。焼成部と焚口部の境には壁に段差がある(第14図A～Bライン)。断面形は蒲鉾型を呈するが、床面は凹む。

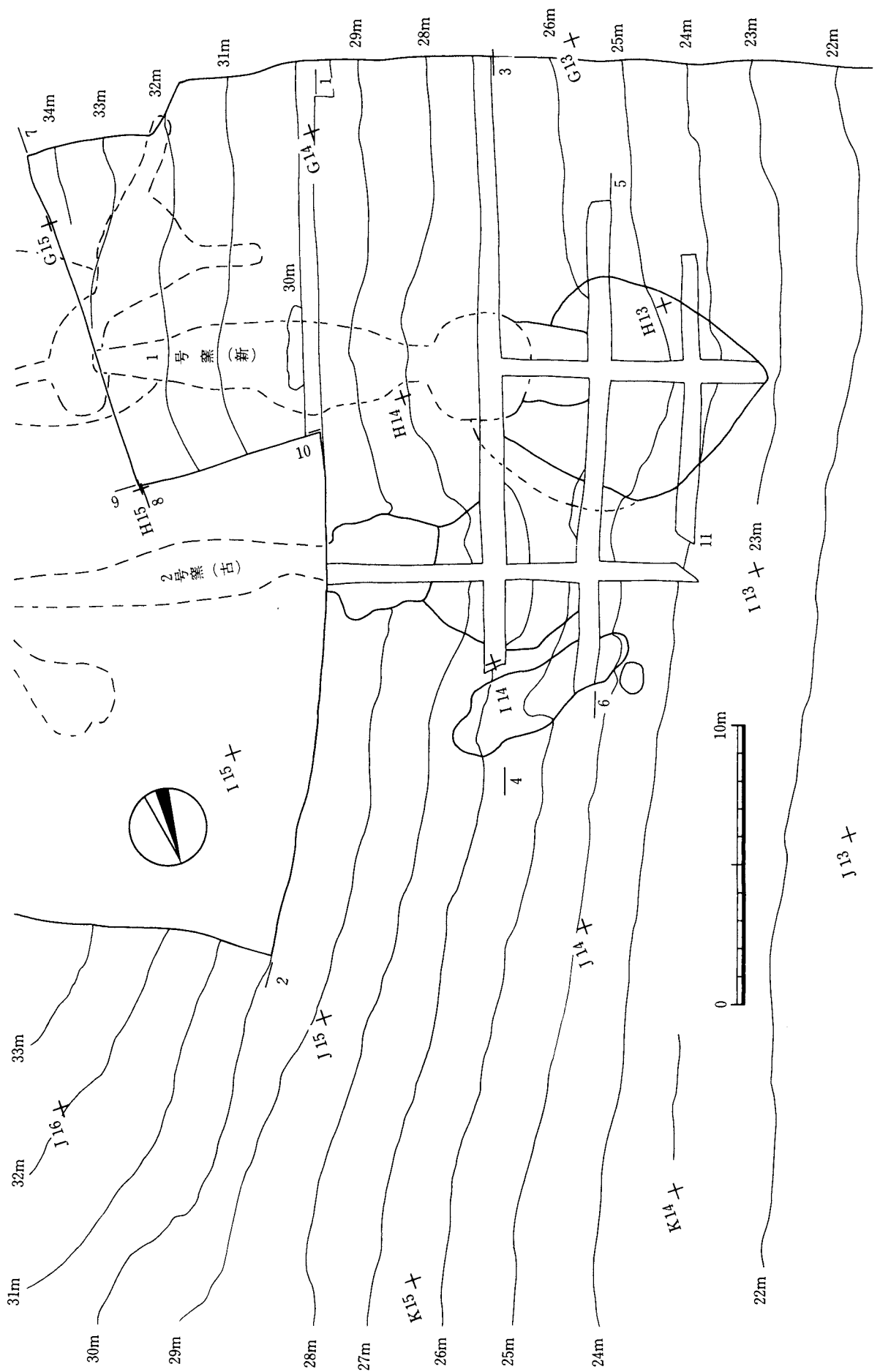
焼成部の壁は、トンネル状に掘られたものと思われ、暗赤色壁が2枚確認された所(第14図9～10ライン)があり、1度補修されたようである。焚口部の壁は地上まで掘りあげて、立壁(第14図11～12ライン2、8層)を作り、その途中に天井を渡したと思われる(図版17)。床の傾斜は焼成部奥壁傾斜角20度、焼成部中央付近傾斜角35度、焼成部焚口付近傾斜角10度、焚口部傾斜角5度を測る。焼成部平均傾斜角28度、窯体平均傾斜角23度を測る。

**前庭部** 標高29mの地山面に位置し、標高28.6mを測る。丘陵裾から8m上に位置する。やや台形を呈し、長さ3.8m、幅3.7m、深さ0.6mを測る。焚口部側と北側には不整形なピットが存在する。焚口部側の灰原層上には壁が崩落し、その上に地山崩落土が覆っていた。前庭部31層(第12図)は壁崩落後の灰(炭)層であり、灰原層は32～34層の3層である。33層は第12図B～Cラインでは焼土粒子が入り、上下層に分層したが、第12図18～19ラインでは分層できなかった。灰(原)層の関係は30層と32層の色の黒さは近いが、黒さは30層>32層>33層>34層>36層>





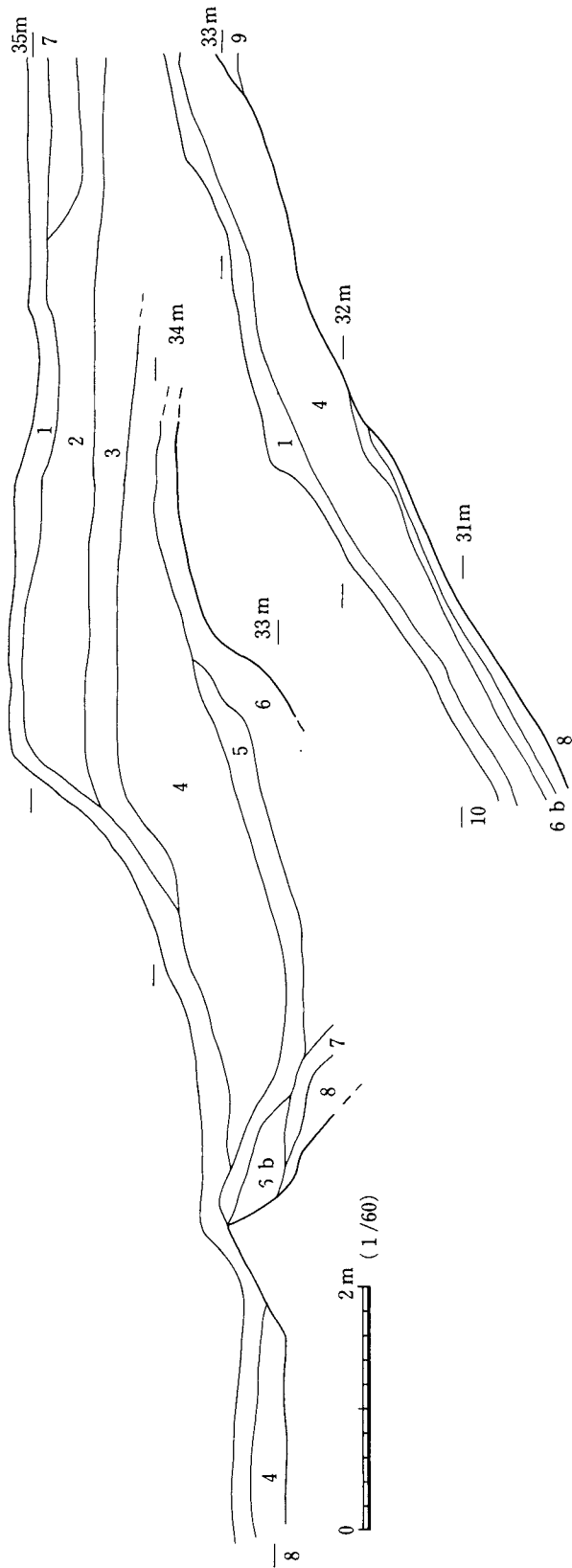
第5図 現況地形図



第6图 第1次调查断面位置图



第7图 1次調査断面図(1)



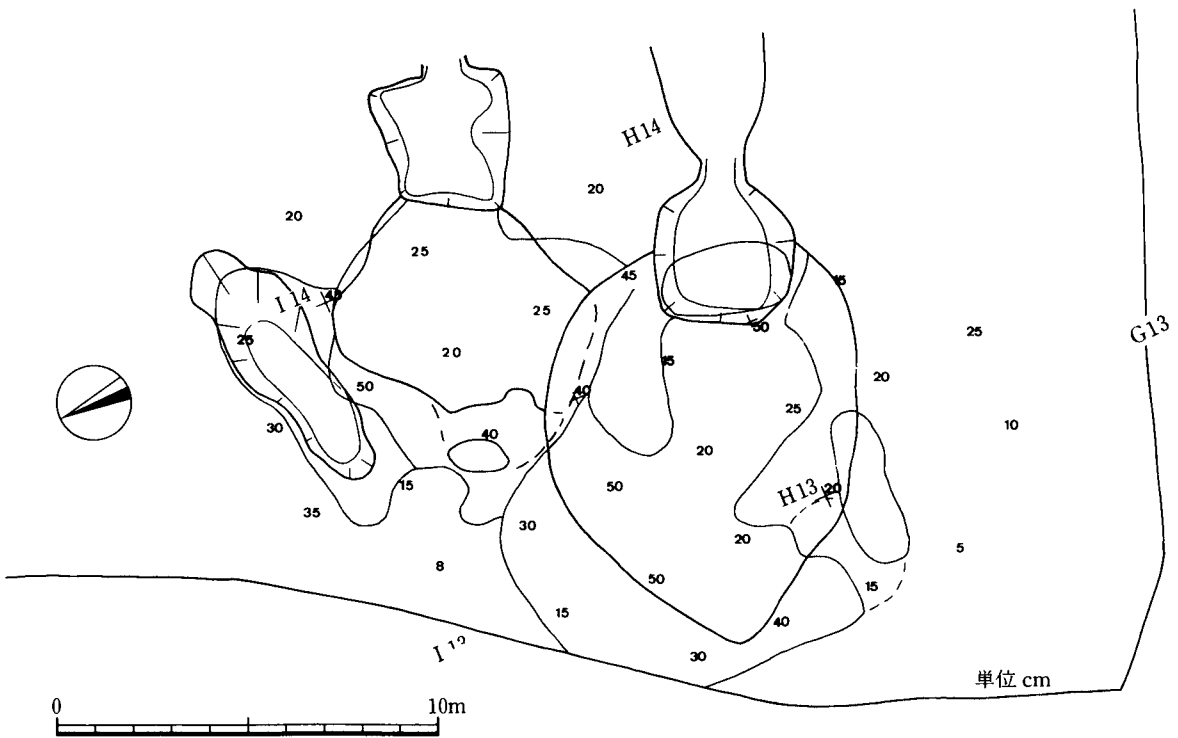
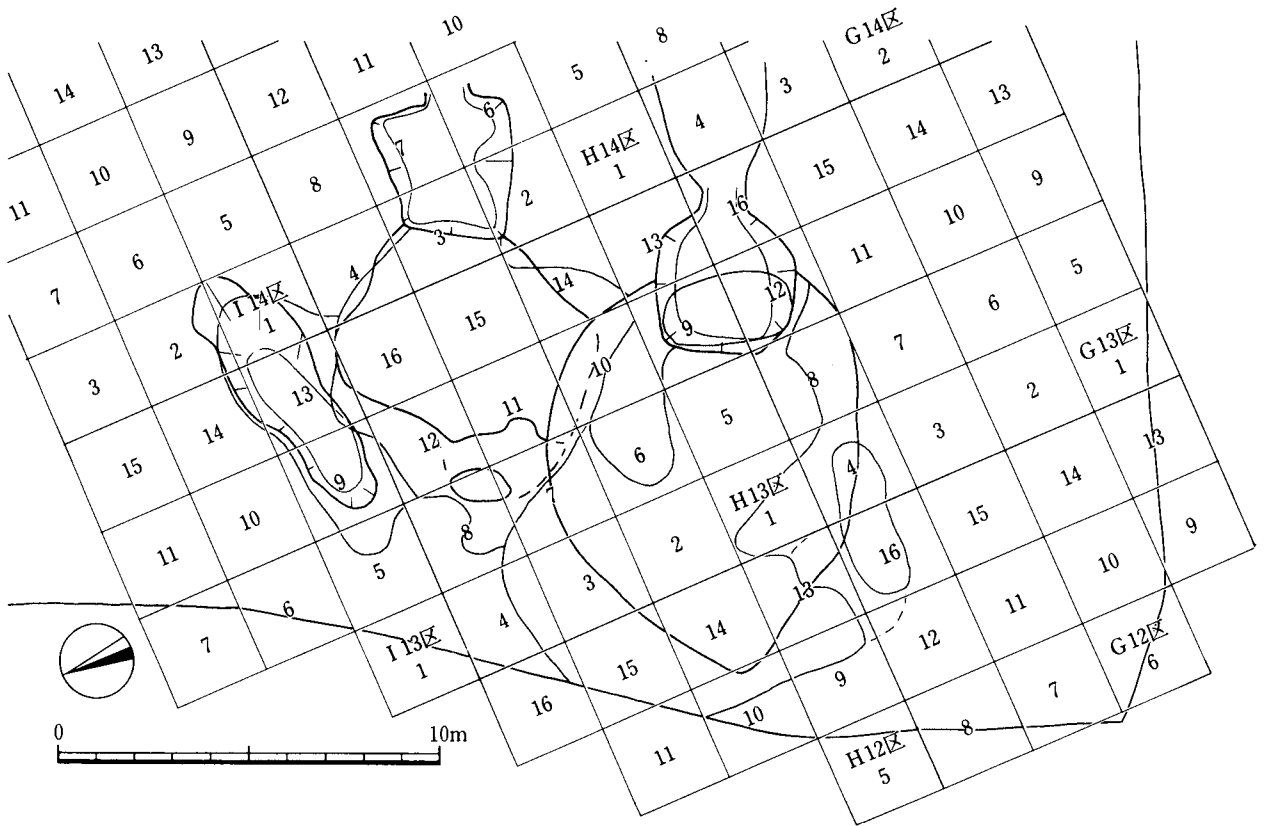
- 1・2号窯灰原関係層位  
 1～2ライン(第7図上段)
- 1 表土
  - 2 明黄褐色粘砂質土(流土)
  - 3 暗灰褐色粘砂質土(須恵器含む) b(5層が混じる)
  - 4 黄褐色粘砂質土
  - 5 黄橙褐色粘砂質土(盛土)
  - 6 灰褐色粘砂質土
  - 7 明黄灰色粘砂質土 b(炭粒含み、暗い)
  - 8 暗灰色粘砂質土(炭粒含む)
  - 9 黒灰色粘砂質土(焼土・炭含む)
  - 10 灰赤色土(焼土、炭含む) b(焼土ブロック)
  - 11 明灰褐色砂質土

- 3～4ライン(第7図中段)
- 1 表土
  - 2 黄橙色粘質土(しまりなし)
  - 3 淡橙灰色粘砂質土
  - 4 灰褐色粘砂質土(須恵器片含む、灰原流土)
  - 5 灰黄褐色粘土(須恵器含む)
  - 6 灰黄褐色粘土 b(焼土含む)
  - 7 焼土層
  - 8 黒灰色粘砂質土(1号窯前庭部)
  - 9 灰褐色粘砂質土(2号窯灰原)
  - 10 暗灰色粘砂質土(2号窯灰原)
  - 11 黒灰色粘砂質土(2号窯灰原)
  - 12 黒色粘砂質土(2号窯灰原)  
b(14層黄灰色ブロック混じる)
  - 13 暗灰色粘砂質土(須恵器多い)
  - 14 黄灰色粘砂質土(2号窯盛土)

- 5～6ライン(第7図下段)
- 1 黄褐色粘砂質土
  - 2 灰褐色粘砂質土
  - 3 黒色砂質土(1号窯灰原) b(黄色ブロックを含む)
  - 4 黒灰色粘砂質土(1号窯灰原)
  - 5 暗灰色粘砂質土(1号窯灰原)  
b(淡く、須恵器・炭を多く含む)
  - 6 暗灰色粘砂質土(灰原より黒い)
  - 7 暗灰褐色粘砂質土(炭含む、1号窯灰原)  
b(淡い) c(明るい)
  - 8 灰褐色粘砂質土(1号窯灰原流土)
  - 9 黄色砂質粘土(1号窯築造時盛土)
  - 10 赤褐色粘砂質土(〃、9層ブロック含む)  
b(9層ブロックを含まない)
  - 11 淡黄色粘砂質土(1号窯築造時盛土)
  - 12 黄褐色粘砂質土(1号窯築造時盛土)
  - 13 黒灰色粘砂質土(炭多い、2号窯灰原)
  - 14 暗灰色粘砂質土(〃) b(淡い)
  - 15 混黒褐色粘砂質土(炭・焼土多い、2号窯灰原)
  - 16 混黄灰色粘土(炭含む)
  - 17 混赤褐色粘土
  - 18 混黄褐色粘土(炭少々含む)
  - 19 灰黄褐色粘砂質土
  - 20 暗灰色粘砂質土(炭含む)
  - 21 黒褐色粘砂質土(〃、北側灰原層14b層より黒い)
  - 22 灰褐色粘土

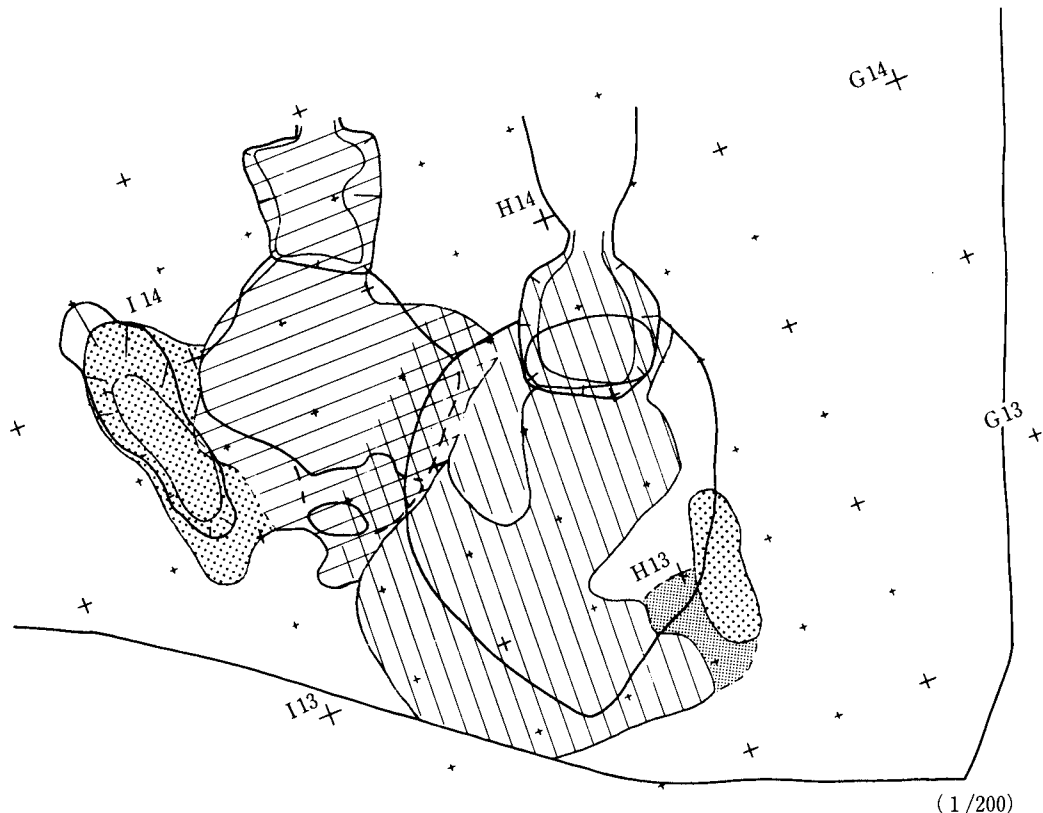
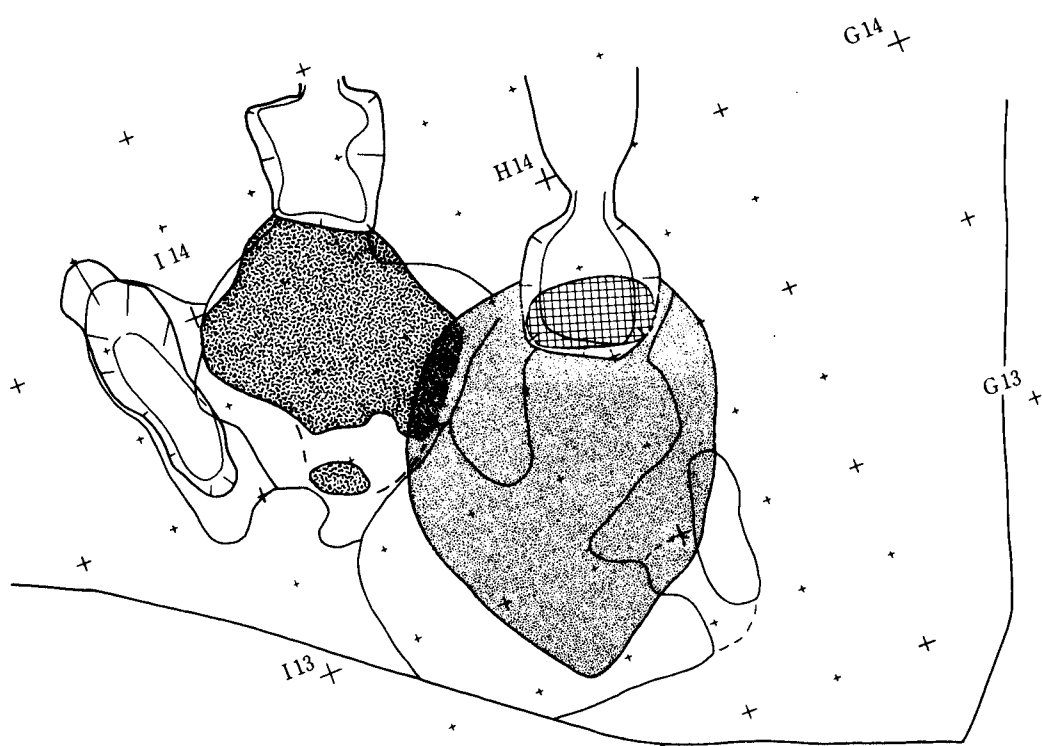
- 1号窯、主郭・郭状遺構関係層位  
 (第8図7～8、9～10ライン)
- 1 表土
  - 2 灰黄褐色粘砂質土(しまり甘い) b(しまりある)
  - 3 黄褐色粘砂質土(しまり甘い)
  - 4 黄橙褐色粘砂質土(しまり非常に甘い)一郭盛土
  - 5 明灰褐色粘砂質土(炭片少々含む)
  - 6 灰褐色粘砂質土(しまり甘く、炭片やや多く含む)  
b(やや赤橙色が強い)
  - 7 淡灰褐色粘砂質土(炭微量含む)
  - 8 暗灰褐色粘砂質土(炭少々含む)

第8図 1次調査断面図(2)

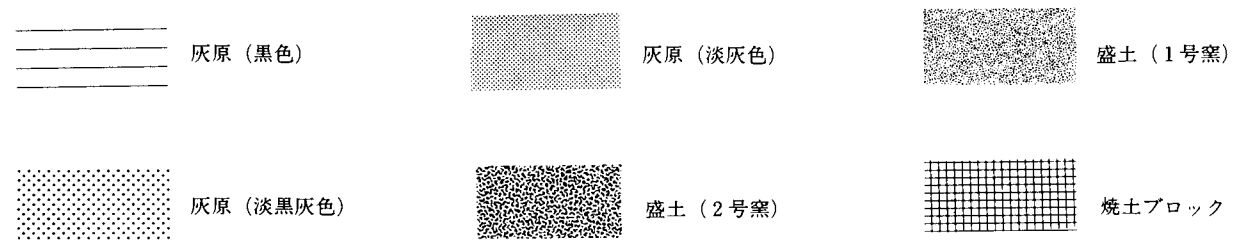


(1/200)

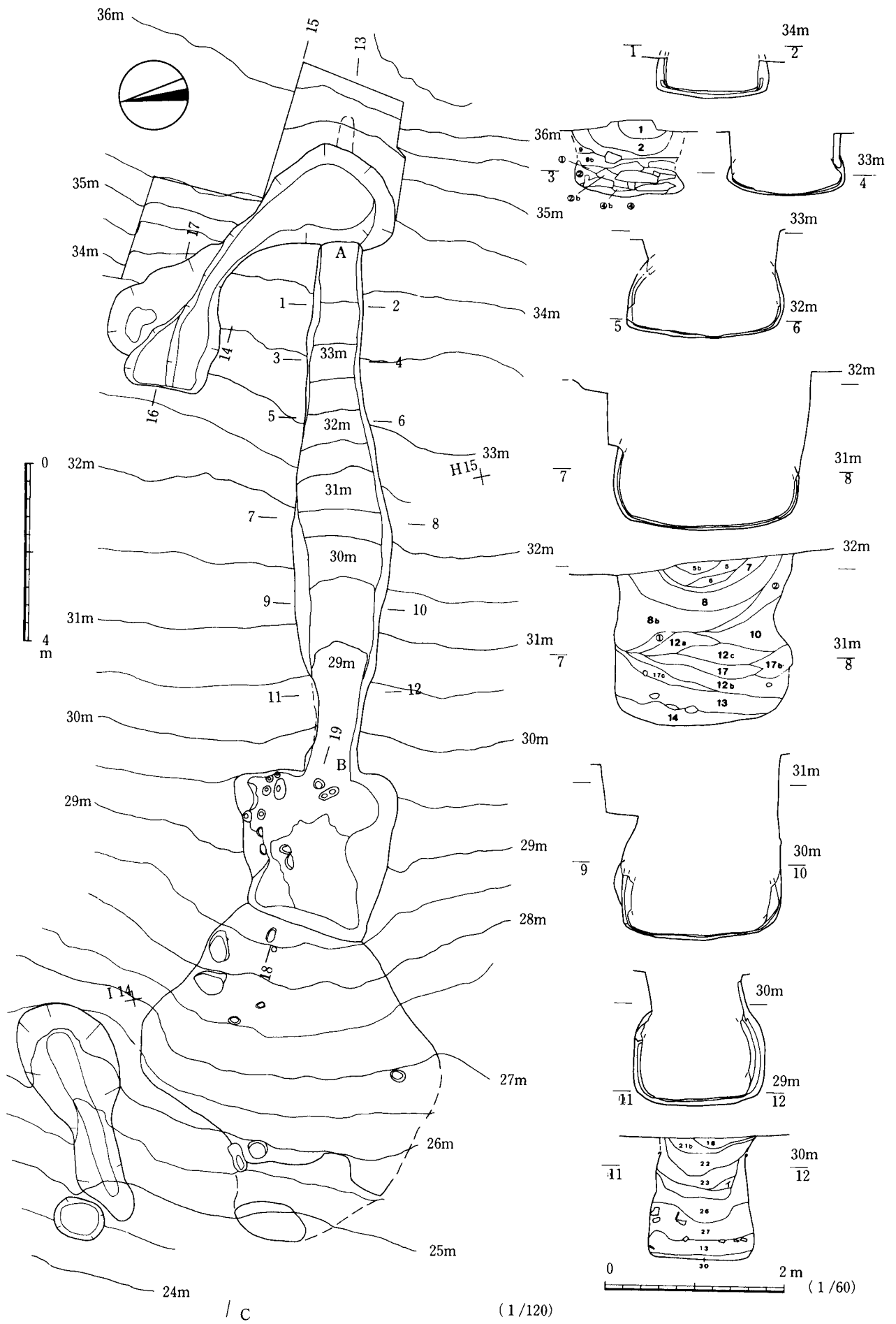
第9図 グリッド配置図・灰原の厚さ分布図



(1/200)



第10図 灰原等分布図



第11図 オオカミダニ2号窟実測図

35層の順である。

**煙道** H15区南東に位置し、地山面の標高34.3~35mを測る。郭状遺構造成の際に削られているが、不整形円形を呈し、長さ2.2m、幅3m、深さ1mを測る。山頂(東)側には1m程度の煙出し(第12図A~13ライン・16層)が存在したようであるが、地山が軟らかく、しかも赤色であったために掘りすぎてしまった。天井は存在しないと思われる。層位は大きく上下2層に分かれる。上層は第12図A~13ラインへ・ホ層以上にあたり、窯が機能しなくなってからの堆積である。自然堆積の灰(炭)層が3層(へ、ニ、ロ層)確認され、へ層は8世紀前半(第55図13)、ロ層は8世紀後半(第55図14)に埋まったようである。

下層は大きく4層に分かれ、作業手順の結果が層位に反映している(第12図13~Aライン)と想定される。作業1)煙道部土坑ないし付属溝を掘った後に埋めて(14層)、形を整え、空焚き(11層)を行なった。作業2)埋め土(10、13層)を入れて形を整え、床を延ばして(7b~9層)、操業を行なった。作業3)操業後、焼土・土器などを掻き出した土(12層)が堆積した。作業4)掻き出し(操業)終了後に土(15、17、18層)が堆積した。作業1)、2)の14、10、13層はしまった粘土を埋めており、瞬時に行なわれたようである。作業2)の北(裏)面では張床(7層)の下に焼土層が互層に存在する(図版15)が、埋めた土か、空焚きの繰返しかは不明である。作業3)の12層は非常に硬く締まっており、奥に行くに従って締まりが甘い。12層中ないし上面で作業が行なわれたことが想定される。また、床との関係は左(北)側は途切れているが、右(南)側は焼土面が広がっている。しかも硬く締まり赤化が強いので、床面が続くように見えた。

**付属溝・土坑** H15区北東に位置し、煙道部から続く。第3号郭状遺構により削られていた。溝は東端では2度掘りされていたようであり、北側が古く、南側が新しいと思われる。長さ4m、幅0.5~1.1m、深さ0.9mを測る。溝底は赤化していない。第12図14~15ラインでは4層は後世の崩落土であり、締まりが甘い。5層以下はよく締まっている。6層以下は粘性が強く、防湿のため埋めた可能性と作業面として利用されたために締まった可能性がある。小松市教育委員会92年度調査では階段が検出されたことから、付属溝は作業用通路と思われる。土坑は溝の左(北)側に位置し、長さ3.3m、幅1.1m、深さ0.8mを測る。盛土の北側に付属溝の延長と思われる溝が存在する。I13~14区に位置し、長さ7.3m、幅1.5~2.1m、深さ0.4mを測る。

付属土坑の層位は大きく4層に分かれる(第12図16~17ライン)。作業1)溝を掘り込む。作業2)操業前ないし空焚前に土坑を掘り込み、土(7層)を埋め込んだが、埋まった。作業3)空焚ないし操業後の掻出し層(4~6層)が堆積する。作業4)操業後ないし溝が機能しなくなった後、2・3層と1層(2次堆積土)が埋まる。

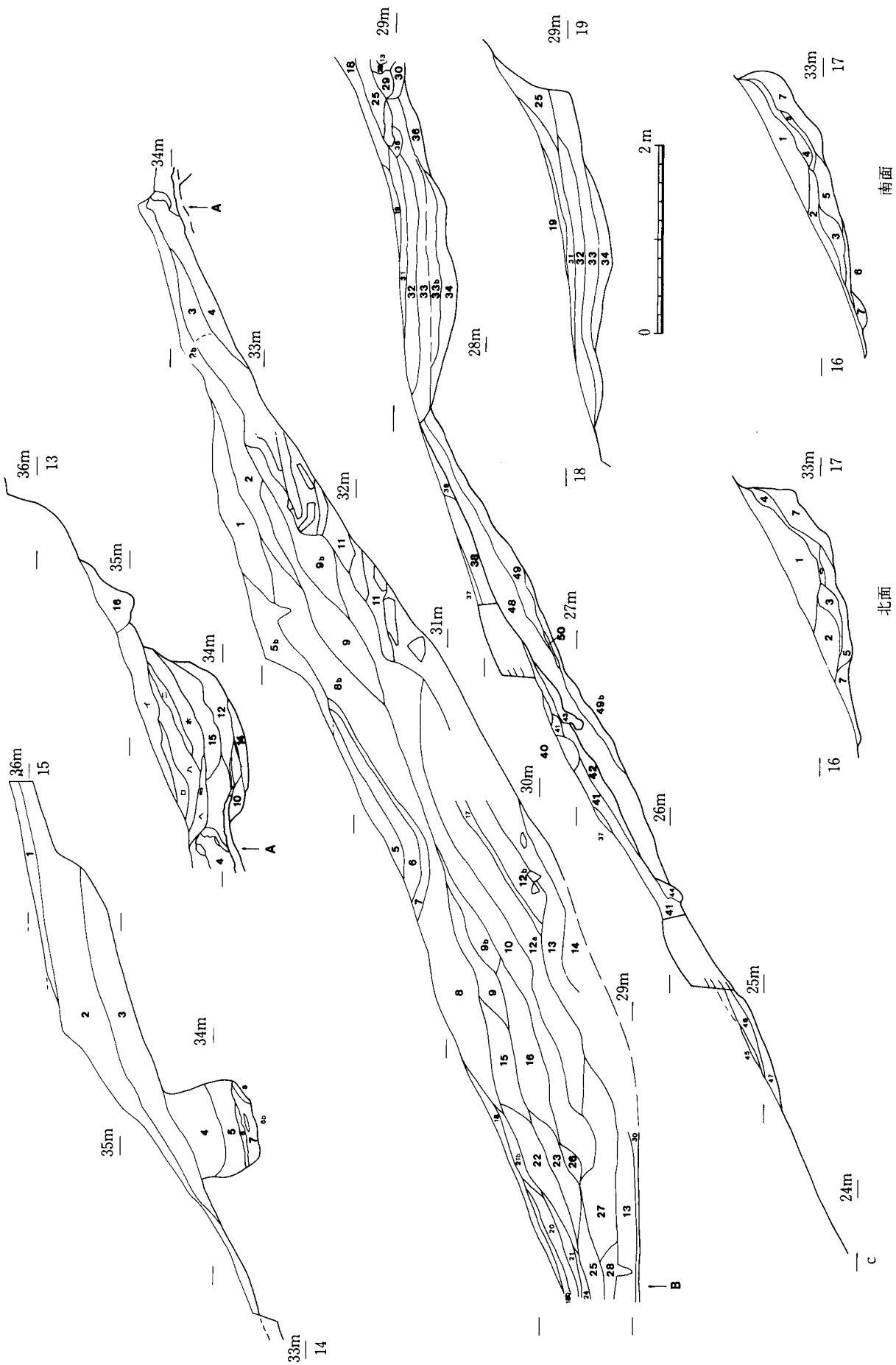
**覆土(第13図)** 焚口部と燃烧部中央より下半の壁が崩落し、それにつられて燃烧部上半部も一気に崩落したようである。窯出し前に崩落したので焼成部に土器が取り残された(第90図)のか祭祀のために残された(北野氏教示)のかは不明である。焚口部上方・焼成部中央付近上方の黒色層は2次堆積層である。前庭部の31層は崩落土の上に堆積しており、灰原というより2次堆積層の可能性が高い。

**盛土** H13~H14区西側に分布する。長さ5.8m、幅7m、厚さ最大0.5mを測る。前庭部・窯体を掘った土を盛り上げたと思われる。窯体主軸よりやや北側に多く分布するが、前庭部主軸よりはやや南側に多く分布する。H13-7、10、11区では上に第1号窯の盛土が乗っていた(第7図D'~6ライン)。

**灰原** 盛土を中心に黒色土が平均0.2mの厚さで分布する(第9図)。西側の溝状遺構の上面には淡黒灰色土がほぼ同じ範囲に広がっていた。1号窯盛土の下にも存在(第18図25~26、28~29ライン59層、図版27)することから、南側(右側下方)に舌状に存在した。よって、H12-15、-16、H13-3、-4、-7区の地山直上の灰原(最下層)出土土器は1号窯の土器と認定して取り上げたが中には2号窯の土器が含まれている可能性も存在する。

**まとめ** 2号窯の操業回数は、壁では2回(第14図9~10ラインの暗赤色壁2枚)、前庭部では3回(灰層3枚)、灰原では2回(41、42層)の操業が想定される。

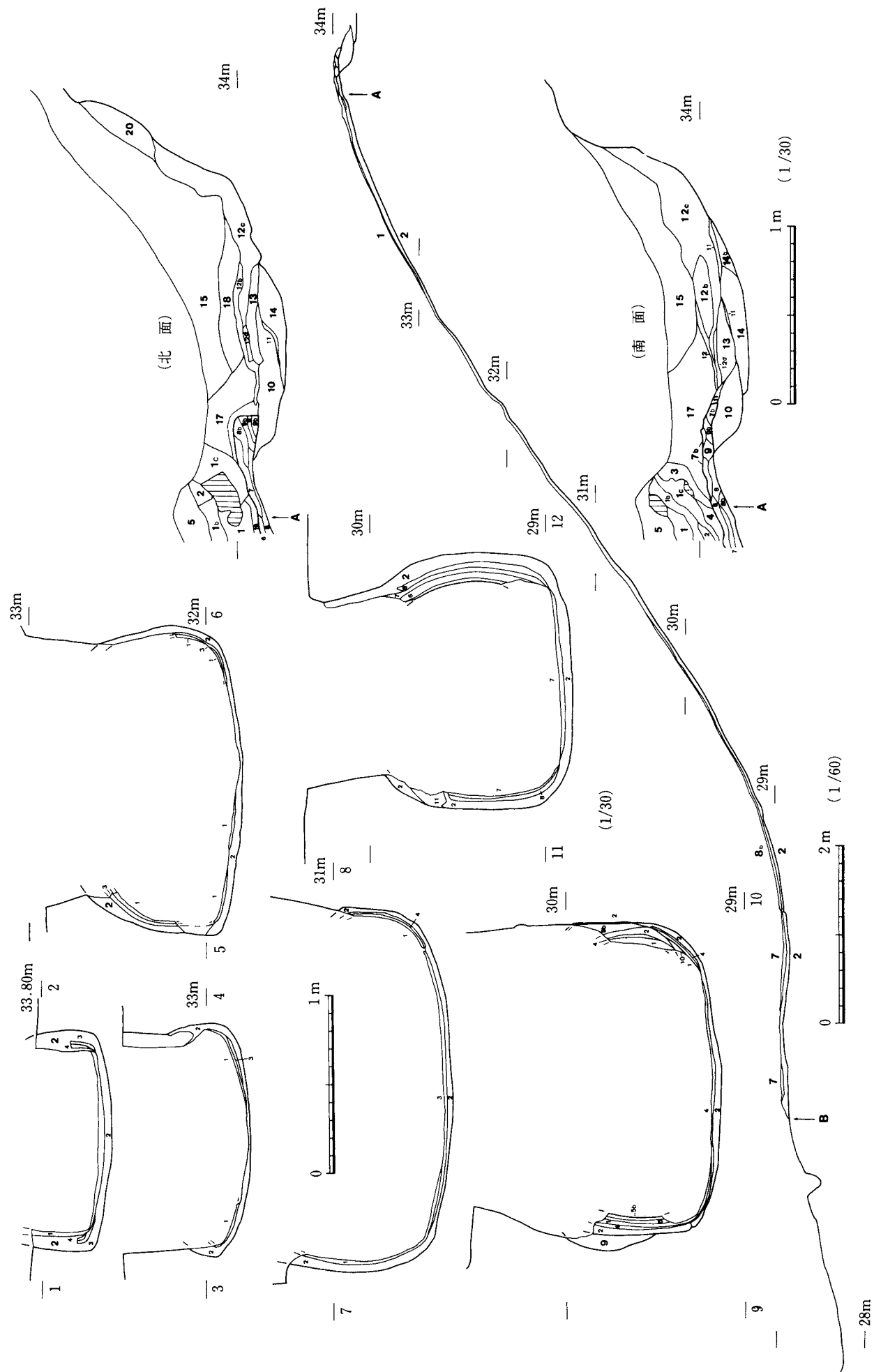




第12图 2号察断面图



第13图 2号窯層位模式图



第14図 2号窯窯体断ち割り

オオカミダニ 2号窯層位(第12図 A'~Bラインと対応)

(第11図 3~4ライン)

- 1 黄橙色砂質土
- 2 灰黄色砂質土(しまりはよい)
- 9 黄褐色砂質土(壁ブロックを少々含む)  
b(褐色が強く、壁ブロックをやや多く含む)
- ① 明黄褐色砂質土(濃赤色焼土多く含む)

(第11図 7~8ライン)

- 5 暗灰褐色砂質土(炭小片を含む) b(淡い)
- 6 黒褐色砂質土(炭・焼土粒子を含む)
- 7 淡灰褐色砂質土(6と8層の漸移層)
- 8 黄色砂質土 b(褐色が少し強い)
- ① 赤褐色粘砂質土
- ② 黄褐色粘質土(焼土粒少し含む)
- 10 濁黄色砂質土(焼土粒子、黄色砂質ブロックをやや多く含む)

(第11図 11~12ライン)

- 18 淡灰褐色粘質土 b(やや黒い)
- 21 暗灰褐色粘質土(炭を少々含む) b(淡い)
- 22 灰黄橙色砂質土  
(しまり良く、大粒の炭を少々含む)
- 23 黄橙色粘砂(硬くて、しまり良い)
- 26 赤黄橙色粘質土  
(赤い壁粒子・ブロックを多く含む)

付属溝層位(第12図 14~15ライン)

- 1 表土
- 2 茶褐色粘砂質土(しまり甘い)一郭盛土
- 3 黄褐色砂質土(しまり甘い)一郭盛土
- 4 黄赤褐色粘砂質土(しまり甘く、炭少し含む)
- 5 暗黄赤褐色粘砂質土(しまりよく、炭少し含む)

煙道層位(第12図 13~Aライン)一上層(後世の堆積)

- イ 黄褐色砂質土(地山質)  
ロ 暗褐色砂質土(黒土)  
ハ 黄褐色砂質土(地山質、イ層よりしまる)

窯体~前庭部層位(第12図 A'~4ライン)

- 1 黄橙色砂質土
- 2 灰黄色砂質土(しまりはよい)  
b(壁ブロックを含む)
- 3 褐色土(壁ブロックが中心)
- 4 赤褐色土(壁の崩落土)
- 5 暗灰褐色砂質土(炭小片を含む) b(淡い)
- 6 黒褐色砂質土(炭・焼土粒子を含む)
- 7 淡灰褐色砂質土(6と8層の漸移層)
- 8 黄色砂質土 b(褐色が少し強い)
- 9 黄褐色砂質土(壁ブロックを少々含む)  
b(褐色が強く、壁ブロックをやや多く含む)
- 10 濁黄色砂質土(焼土粒子、黄色砂質ブロックをやや多く含む)
- 11 明黄褐色粘質土(しまりはよい)

- ① b(暗赤色焼土多く含む)
- ② 焼土(濃赤色) b(暗赤色)
- ③ 焼土(濃赤色、還元壁粒多く含む)
- ④ 淡黄褐色粘砂質土(焼土・還元壁粒子含む)  
b(還元壁粒子多く含む)

- 11 明黄褐色粘質土(しまりはよい)
- 12 灰黄橙色粘砂(黄色砂ブロック、橙色粒子をやや多く含む、炭を少々含む)  
b、c(12層より黄色砂粒多く含む)
- 13 赤黄橙色粘質土(壁ブロックを多く含む)
- 14 濁赤灰色粘砂(壁の崩落粒子で構成)
- 17 濁淡灰褐色粘質土 b(黄白色砂ブロックを少し含む) c(しまり、大きめの炭を少し含む)

- 27 暗黄褐色粘質土(しまり甘く、壁ブロックを多く含む)
- 30 黒褐色砂質土(しまり良く、炭・焼土を多く含む)  
燃焼部床の灰(炭)層  
イ 黄橙色砂質土(しまり良く、壁粒子を少々含む)  
ロ 黄褐色砂質土(しまり良く、炭を少々含む)  
23層とロ層の境を中心に  
壁ブロック(赤)が存在

- 6 黄白褐色粘砂質土(しまりよく、焼土・炭含む)  
b(白色強い)
- 7 暗黄白色粘砂質土(しまりよく、焼土・炭含む)
- 8 暗赤褐色粘砂質土(しまり甘く、同 )

- ニ 黒褐色砂質土(黒土)  
ホ 淡茶褐色粘砂質土(地山質)  
ヘ 黒褐色砂質土(黒土)

- 12 灰黄橙色粘砂(黄色砂ブロック、橙色粒子をやや多く含む、炭を少々含む)
- 13 赤黄橙色粘質土(壁ブロックを多く含む)
- 14 濁赤灰色粘砂(壁の崩落粒子で構成)
- 15 黄橙色粘質土(しまりよい)
- 16 黄褐色砂質土(15層より褐色強い)
- 17 濁淡灰褐色粘質土
- 18 淡灰褐色粘質土 b(やや黒い)
- 19 黄褐色粘質土(しまりがあまい)
- 20 黒褐色粘質土
- 21 暗灰褐色粘質土(炭を少々含む) b(淡い)
- 22 灰黄橙色砂質土(しまり良く、大粒の炭を少々含む)
- 23 黄橙色粘砂(硬くて、しまり良い)
- 24 暗黄褐色粘質土(壁粒子、炭を少々含む)

- |                                       |                                     |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 25 濁黄褐色砂質土(壁ブロックを多く含む)                | 32 黒褐色砂質土(しまり甘い)一灰層上                |
| 26 赤黄橙色粘質土(赤い壁粒子・ブロックを多く含む)           | 33 (淡)黒褐色粘砂質土(波線部に焼土が存在)一灰層中(上)・(下) |
| 27 暗黄褐色粘質土(しまり甘く、壁を多く含む)              | 34 (淡)黒褐色粘砂質土(やや褐色きみ、地山粒子を含む)一灰層下   |
| 28 同(やや黒く、しまりは非常に甘い)                  | 35 淡黒褐色砂質土(黄色粒子を多く含む)               |
| 29 壁ブロックと黄褐色土の混在層                     | 36 淡黒褐色砂質土(黄色ブロックを含み、35層より黒い)       |
| 30 黒褐色砂質土(しまり良く、炭・焼土を多く含む)一燃烧部床の灰(炭)層 |                                     |
| 31 暗灰褐色砂質土(炭・焼土粒子を少々含む)一灰原上面層         |                                     |

灰原層位(第12図 B～Cライン)

- |                       |                            |
|-----------------------|----------------------------|
| 37 淡褐色粘砂              | 43 黒灰色砂質土(しまり甘く、炭少々含む)     |
| 38 暗褐色粘砂(炭・焼土粒子を多く含む) | 44 淡黒灰色砂質土(しまり甘く、炭・焼土少し含む) |
| 39 淡褐色粘砂              | 45 暗灰色砂質土                  |
| 40 黒色粘砂               | 46 暗灰褐色砂                   |
| 41 暗灰褐色粘砂             | 47 暗灰褐色砂                   |
| 42 淡黒灰色砂質土            |                            |

盛土層位(第12図 B～Cライン)

- |                          |                  |
|--------------------------|------------------|
| 48 暗黄白色砂質土(しまり良い)        | 50 淡赤褐色粘質土(粘性強い) |
| 49 淡黄褐色砂質土 b(しまり良く、粘性強い) |                  |

付属土坑層位(第12図16～17ライン)

- |                        |                      |
|------------------------|----------------------|
| 1 暗赤褐色粘砂質土(炭・焼土粒を少々含む) | 5 暗黄茶褐色粘質土(炭・焼土少し含む) |
| 2 同(やや黄色が強い)           | 6 濁赤褐色粘砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 3 濁暗黄赤褐色粘砂(炭粒わずかに含む)   | 7 濁黄褐色粘砂質土(炭・焼土少し含む) |
| 4 暗黄赤褐色粘質土(炭・焼土多く含む)   | どの層も締まりは良い           |

煙道層位(第12・14図3～A、3～A'ライン)

- |  |  |
|--|--|
| 1 赤褐色粘砂質土(しまり良く、青灰色壁少し含む) b(壁多く含む) c(壁・焼土多く含む) | 12 c(炭、6 b、黄白色ブロックわずかに含む) d(炭、6 bをわずかに、黄白色ブロックを多く含む) |
| 2 黄赤褐色粘砂質土(しまり甘く、壁少し含む)                        | 13 暗黄赤褐色粘質土(しまり良く、暗赤色壁・焼土粒少し含む)                      |
| 3 暗黄褐色粘砂質土(しまりあり、壁少し含む)                        | 14 暗黄褐色粘土(よくしまり、炭粒少し含む) b(黄白色ブロックを多く含む)              |
| 4 黒褐色粘砂質土(炭多く、青壁焼土含む)                          | 15 暗褐色粘砂質土(よくしまり、炭・焼土粒少し含む)                          |
| 5 灰黄色砂質土(しまり良く、壁ブロックを含む)                       | 16 濁黒褐色粘砂質土(よくしまり、炭粒少し含む)一煙道部煙出し部分                   |
| 6 還元壁(暗青灰色)                                    | 17 淡赤褐色粘砂質土(しまり甘く、炭・焼土粒少し含む)                         |
| 7 酸化壁(暗朱色)一いづれも硬い b(明朱色) c(濁朱色)                | 18 褐色粘質土(やや赤色、しまりあり、炭・焼土粒少し含む)                       |
| 8 暗赤色焼土(しまりは甘い) b(黒い)                          | 19 褐色粘質土(しまりあり、炭・焼土粒少し含む)                            |
| 9 同(ややしまり、炭多く含む) b(赤色薄く、炭少し、黄白色ブロック含む)         | 20 濁褐色焼土(ややしまり、炭・焼土粒少し含む)                            |
| 10 褐色粘質土(焼土・炭粒少し含む)                            |  |
| 11 濁朱色焼土(ややしまりあり)                              |  |
| 12 同(非常に硬く、しまっている) b(炭、6 b、黄白色ブロックを多く含む)       |  |

窯壁断面(第14図1～12ライン)

- |              |   |
|--------------|---|
| 1 青黄白色還元壁    | 7 灰白色壁                                  |
| 2 暗赤色壁       | 8 灰緑色壁 b(暗い)                            |
| 3 濁朱色酸化壁     | 9 黄褐色砂(しまりよく、他は含まない) b(濁り、壁粒子を多く含む、しまる) |
| 4 灰黄色壁       | 10 暗青色粗砂(壁の剝離した粒子)                      |
| 5 青灰色壁 b(暗い) | 11 赤色壁(2)と黄褐色土(9)の混じった土                 |
| 6 暗青壁        |   |

### 3. オオカミダニ1号窯

**概要** H13～G15区に位置する(第15図)。中央丘陵の西裾から5m上に前庭部が、頂上から3m下に煙道部が築かれていた。窯は等高線に対して直行して築かれていた。煙道部は主郭状遺構の盛土で覆われていた。窯体の陥没痕と盛土の高まりが、地表で観察された(第5図)。1号窯の盛土は、H13-7、-10、-11区では2号窯の盛土と灰原(第7図D'～6ライン)を、H12-14、13-2、-3、-6、-7では灰原を覆っていた(第18図25～26、28～29ライン)。全長30.1mを測る。

**窯体** G13～14区に位置する。窯体長11.9m(焼成部9.4m、焚口部2.5m)を測る。床幅は奥壁付近0.7m、焼成部最大幅1.8m、焚口開口部幅1.1mを測る(第21図)。地下式であるが、前庭部側の焚口部には長さ2mの立ち壁(図版19)が存在することや奥壁の煙道部側が地表面から浅いこと(図版20)などから、2号窯同様に焚口部の前庭部付近と奥壁の煙道部付近は半地下式の可能性がある。壁は窯体の主軸に沿っている。

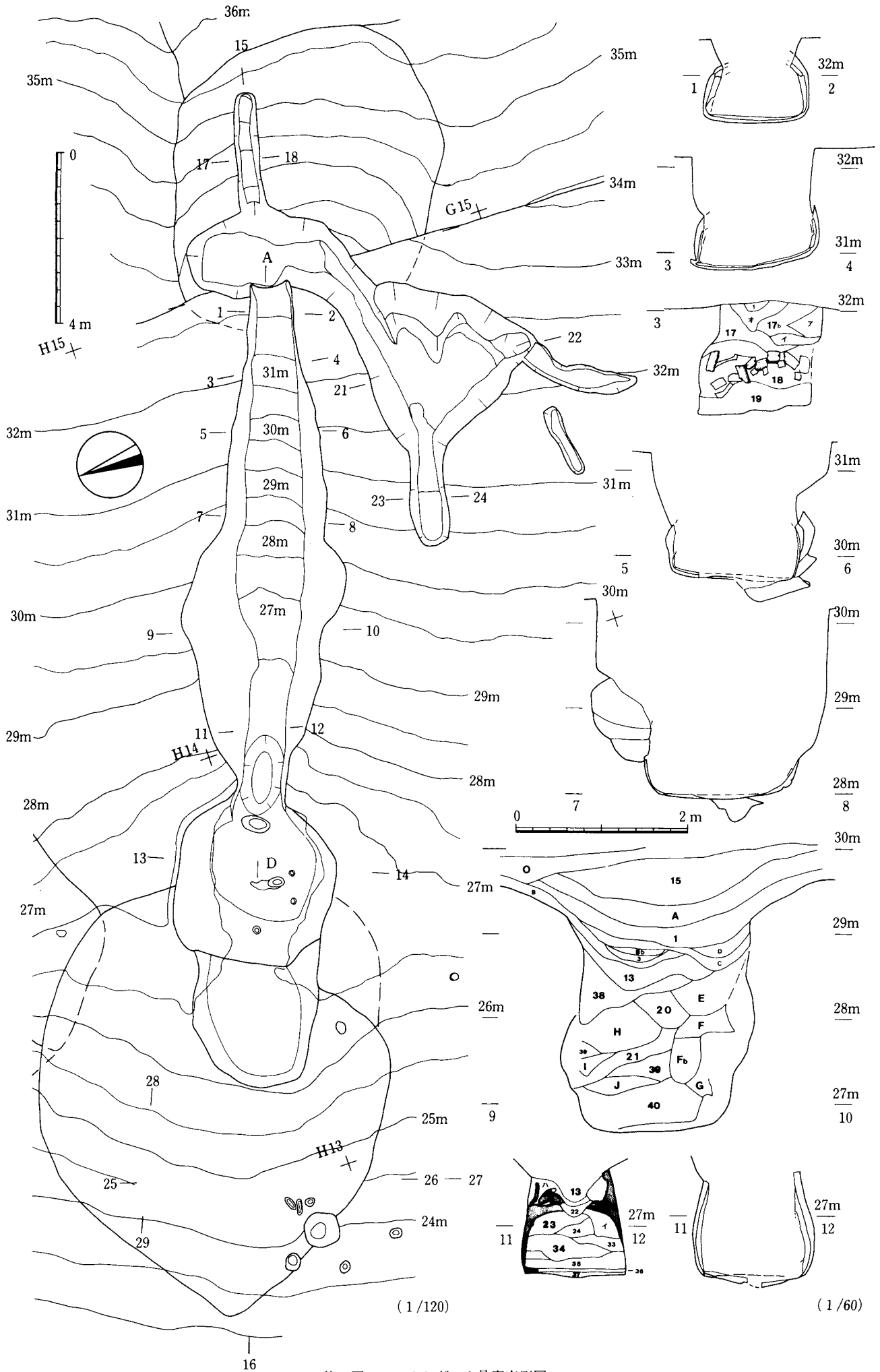
奥壁は右側の方が0.2m煙道部側に伸び、先端部には少し掘り方も存在した。床面は奥壁から3mまではほぼ平坦であるが、3m以降は幅0.2m、長さ0.1m程度の凹が多い。石の焼き台を置いた為であろう。なお、奥壁の左側には石の焼き台1個が存在した。焼成部では、床の下に土が入った部分が存在(第20図5～8、11～12ライン)したが、掘り方であろうか。奥壁から4～5mの所に0.2～0.3mの赤色壁を貼ったような部分が観察できた(第18図A～Dライン)。焚口部の床は濁灰緑色でザラザラとした表面で、締まって硬く、数片の須恵器が壁のなかに存在した。また前庭部側には舟底状の土坑(1.4×0.9×0.25m、図版20)が存在し、その上に濁灰緑色壁が存在した。焚口部の開口する地点のみ天井が存在(第15図11～12ライン)し、前庭部側2mまでは立壁が存在した。

床の傾斜は焼成部奥壁傾斜角32度、焼成部中央付近傾斜角39度、焼成部焚口付近傾斜角35度、焚口部焼成部付近傾斜角4度、焚口部前庭部側傾斜角177度を測る。焼成部平均傾斜角34度、窯体平均角24度を測る。

**前庭部** G・H13区に位置する。標高27mの地山面に位置し、底は標高26.1mを測る。隅円五角形を呈し、長さ3.6m、幅3.8m、深さ0.9mを測る。1次調査の確認作業の際に、焚口と呼称してしまったので、土器は1号窯焚口として取り上げた。窯体側と側面の地山面を削って大きな凹を造り、その中に前庭部を掘っている。焚口部との境には0.6×0.4m、深さ0.2mのピットが存在した。また、中央部～右側には深さ0.1m程度のピットが存在した。層位は大きく上層(13・23層以上)と下層(25・26層以下)に分かれる(第17図)。上層は13、23層の地山崩落土の存在から窯の廃絶(陥没)後に堆積したと推定される。よって10～12層は2次堆積層であり、灰層ではない。また、焼土の塊で構成されるC層は窯の廃絶(陥没)後に焚口の閉塞壁を壊して再利用するために置いた可能性がある(望月氏教示)。下層は1号窯の操業に伴うものである。27b層(焼土)の間層を挟んで、下に2層、上に1層の灰層を確認した。27b層(焼土の間層)の存在から、大きく2回の操業が想定される。なお、27層は26層と28層の関係を見ると27b層より新しい可能性もある。

**煙道** G15区に位置する(第16図)。不整形に浅く掘り込んだなか(長さ6m以上、幅6.2m)に土坑部分と溝状の煙出し部分に分かれる。土坑部分は長さ2.2m、幅3.2m、深さ1.8mを測る。窯体の先端より0.2m下側にまで存在する。下場は左側に寄っており、右側は奥壁右側の所ですばまり、付属溝へと続く。窯体の床面より0.1m下に土坑の床面が存在する。東(上)側の壁では、上の方が弱く赤化していた。土坑の床面と煙出し下端の床面との比高差は1.6mである。窯体の壁より上には2次堆積土が存在し、その上には主郭状遺構造成の際の盛土が堆積していた。なお、黒色土(第18図19～20ライン3層)を取り除くと表面が鉛色した壁が存在した(第16図、図版23)。奥壁の頂点より、0.1～0.2m上に存在した。黒色土より下は硬く締まっていた。煙出し部は長さ2.8m、幅0.5～0.6m、深さ0.2mを測る。横の壁が少し赤化していた。床面の比高差は1.8mを測り、傾斜角29度である。

**付属土坑・溝** F・G14区で、窯体の右側に位置する。土坑は隅円三角形のような形をし、長さ4m、幅4m、深さ0.7～0.9mを測る。土坑の上側は2段掘りになっており、下場はいびつなハート形をする。付属溝側が深くになっており、溝底は0.2mだけ深い。覆土は1～5層までは締まりが甘く、7層は踏み固められたため非常に硬い。



(1/120)

(1/60)

第15図 オオカミダニ1号窟実測図



第16図 1号窯煙道遺物出土状態

付属溝は煙道部から続き、土坑の左端を通って下る。作業用通路であり、長さ8m、幅0.8~0.9m、煙道部付近では1.4mを測る。深さは煙道部付近は1.5m、土坑内では0.9~1m、土坑より下では0.5mを測る。また、右側には幅0.4~0.6m、深さ0.2mの溝が存在する。共に作業用の遺構の可能性がある。

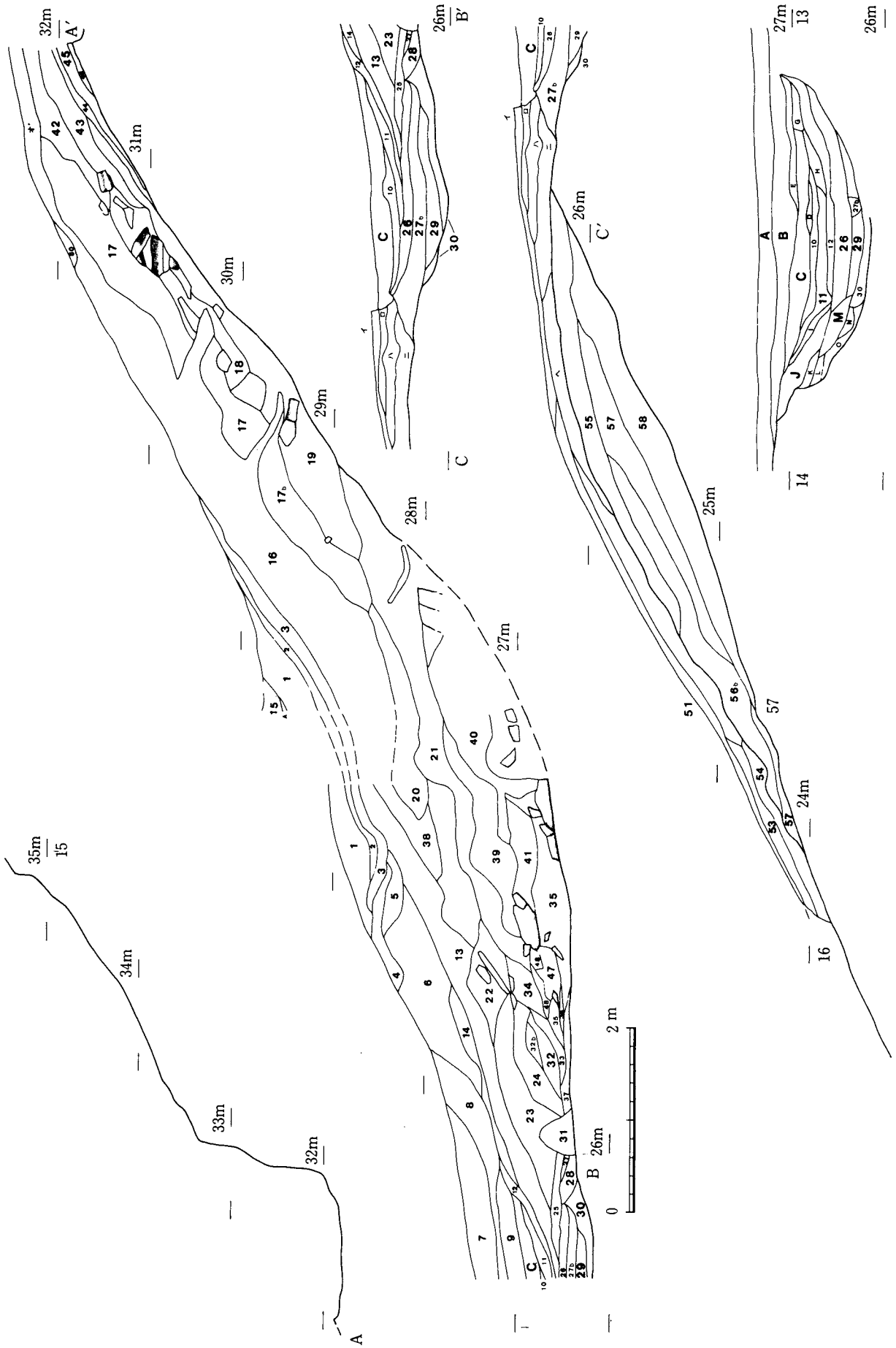
**覆土**(第19図) 焚口部上半と焼成部下半の壁が崩落した。奥壁付近は赤褐色、黄赤褐色基調の土(焼土・炭を含む)の上に焼成部上半の壁が崩落した。つまり、奥壁が崩落するまでに煙道部に堆積していた土が崩落していたようである。前庭部では灰原層+焼土層+灰原層(操業中)→地山崩落土+2次堆積土(操業中止)→焼土層(再利用の準備?)という堆積過程が見られた。北西側の前庭部下には2号窯の灰原が存在した。

**盛土** G・H12~13区に位置する。長さ10m、幅8.3m、厚さ最大0.9mを測る。やや左側は円形に近く、右側は孤状を呈し、左側に多い。右側には不整形なピットが存在する。盛土の下には2号窯の灰原が最大0.1m存在した(H12-14、H13-2、-3、-6、-7、-10、-11区、図版27)。前庭部の続きには浅い土坑状のものがあり、長さ3.9m、幅3.9m、深さ0.1~0.2mを測る。前庭部と同じく作業場であろう。

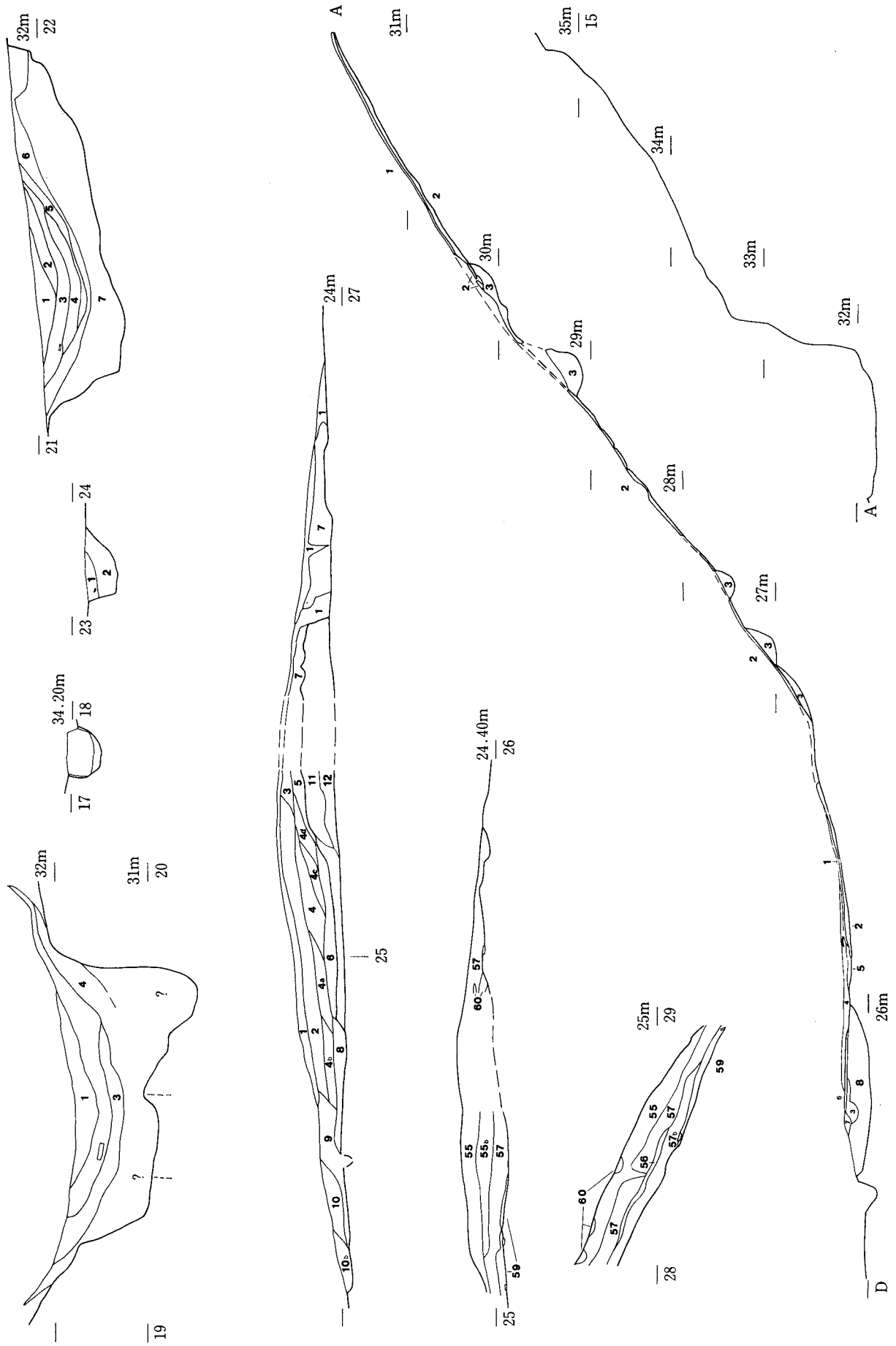
**灰原** 盛土同様に西側(左下方)に多く捨てられていた(第10図下)。南側(右下方)には小ブロック(淡黒灰色)と淡灰色土が存在した。灰原層は黒色砂質土が全体に0.15~0.25mの厚さで存在し、上層・黒砂として取り上げた。部分的に2・3層確認された地点(厚さ0.5m)も存在した。2層目は灰褐色粘質土、淡灰黒褐色粘質土(第18図25~27ライン4、5層)であり、下層・黒粘として取り上げた。H12-13~15、H13-2~4区に分布した。3層目は黒灰色粘質土(第18図25~27ライン6層)であり、最下層として取り上げた。H12-15、H13-2~4区に分布した。しかし、2号窯の灰原が盛土下に分布(H12-14、H13-2、-3、-6、-7)していたので、H12-15、H13-3、-4区的最下層とH12-16、H13-7区の灰原には2号窯の土器が一部入っている可能性がある。2・3層目の分布範囲から主軸ラインより左側に多く廃棄されていた(第10図)。

**まとめ** 1号窯の(空焚きを含めた)操業は、前庭部では2回(灰層では3回)、灰原では3回が想定できる。

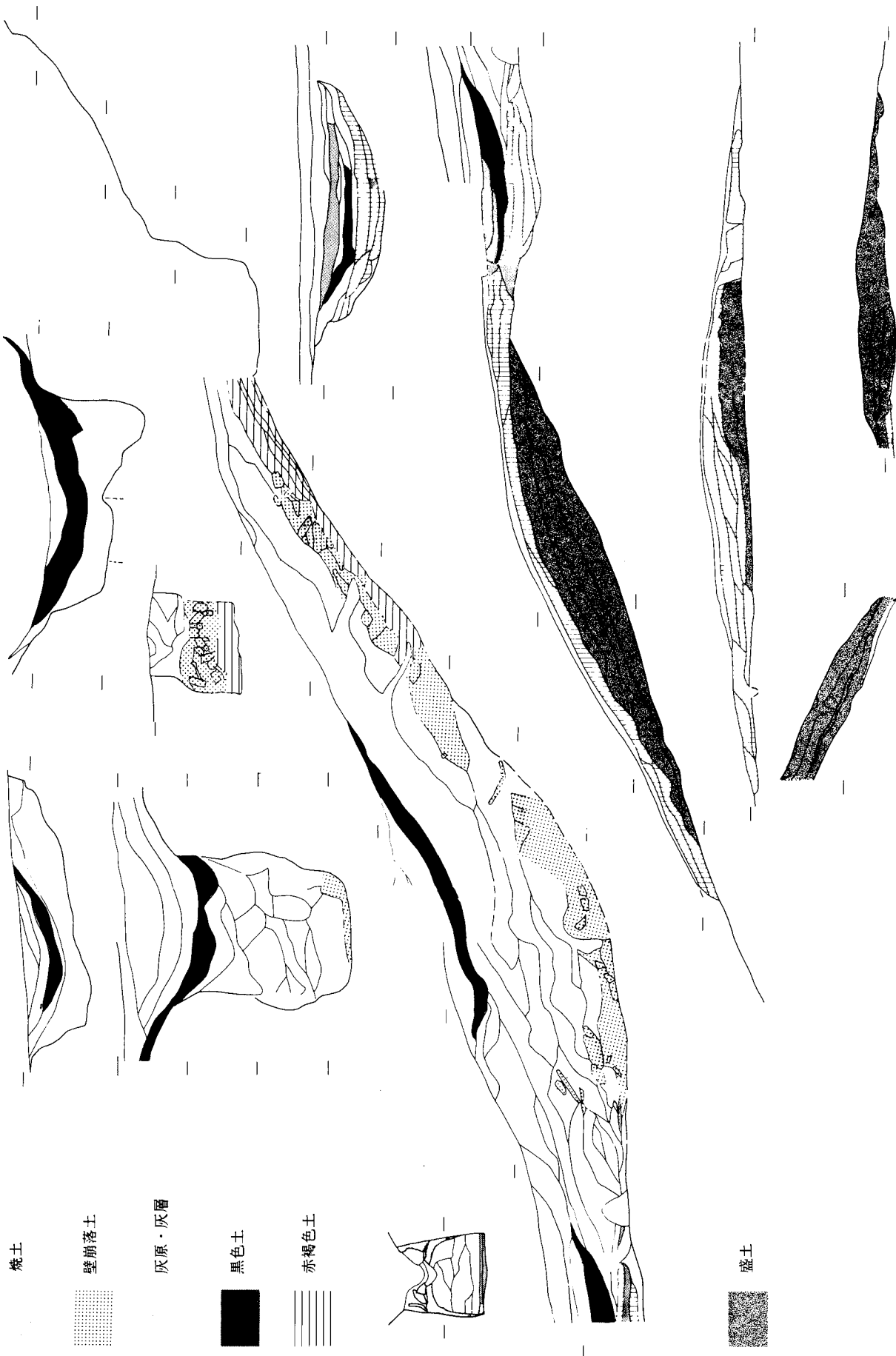




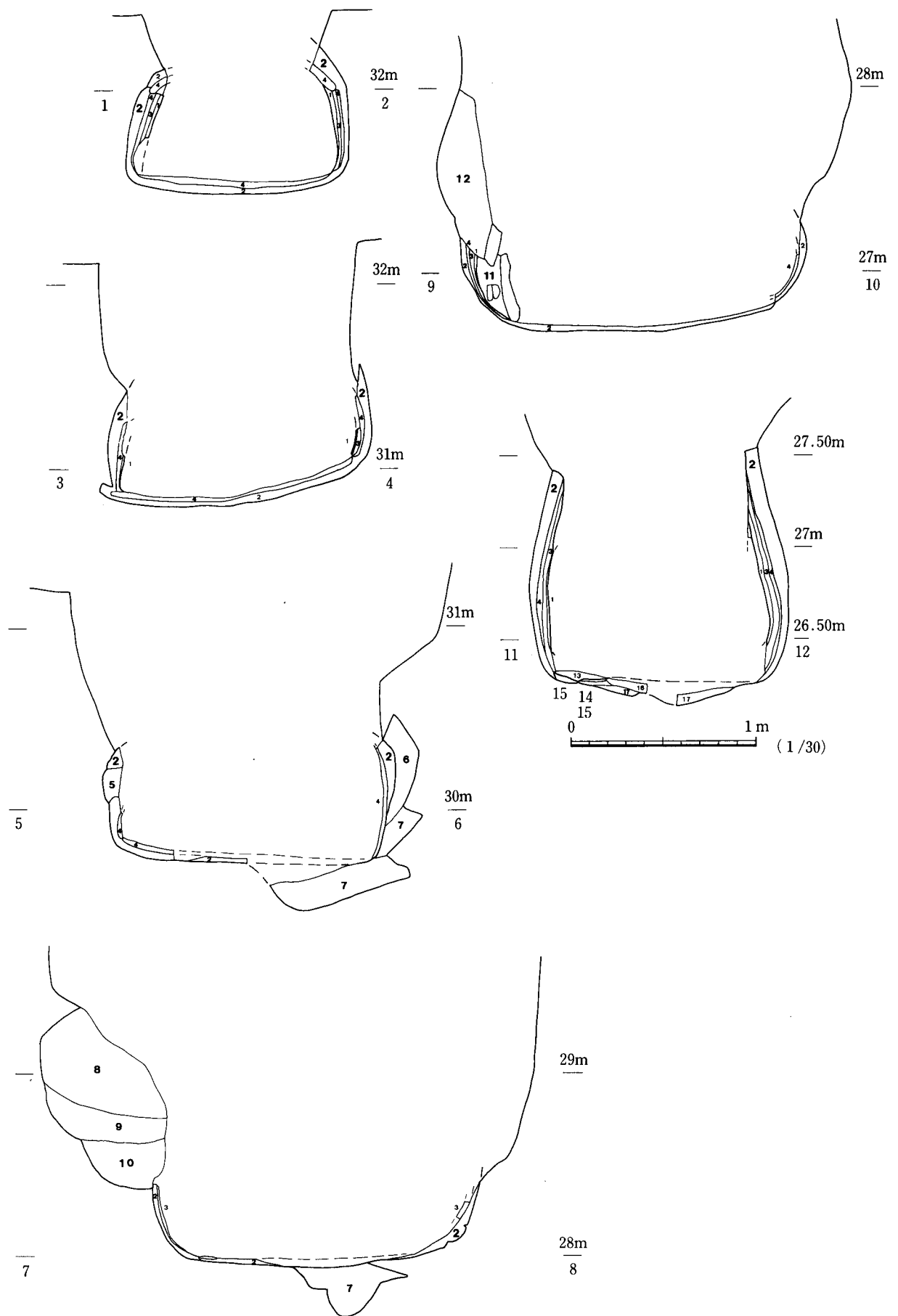
第17图 1号察断面图(1)



第18图 1号寨断面图(2)



第19图 1号窯層位模式图



第20図 1号窯窯体断ち割り

オオカミダニ1号窯窯体～前庭部層位(第17図A'～Cライン)

- |   |  |
|---|--|
| 1 黄褐色砂質土(やや暗い)                            | 27 焼土 b(炭・黄色粒子を多量に含む)                  |
| 2 淡灰褐色砂質土<br>(粘性ややあり、炭を含む)                | 28 黄褐色粘土(炭少々含む)                        |
| 3 黒褐色砂質土                                  | 29 黒灰色粘質土(26層と近いが、焼土粒子が多く、やや淡く、褐色が強い)  |
| 4 黄灰褐色砂質土                                 | 30 暗灰褐色粘質土(しまり甘く、黄色・黒色粒子などが混じる)        |
| 5 淡灰褐色砂質土(2層より淡い)                         | 31 黄褐色粘質土(しまりが全くなく、一度掘り返した土を入れたようなもの)  |
| 6 褐色砂質土                                   | 32 黄褐色粘質土(壁粒子やや多く、やや黄色い)<br>b(やや褐色が強い) |
| 7 淡褐色砂質土(6に近いが、褐色が強い)                     | 33 暗黄褐色粘質土(壁粒子を多く含む)                   |
| 8 灰色砂質土                                   | 34 32層と同じような層だが、やや橙色が強い                |
| 9 濁黄褐色粘質土(炭・焼土粒子を少々含む)                    | 35 黄褐色粘砂(黄灰色砂岩を含む)                     |
| 10 灰褐色粘質土(炭粒子を少々含む)                       | 36 壁・焼土                                |
| 11 黒褐色砂質土(粒子が細かく、流れ込んだ土、3層に近い同一層)         | 37 橙色粘質土(焼土・壁粒子を含む)                    |
| 12 灰褐色粘質土(炭粒子・壁ブロックを含む)                   | 38 赤黄色粘質土(しまり良く、硬い)                    |
| 13 混黄褐色粘質土(炭・壁ブロックを多く含む、やや赤い)             | 39                                     |
| 14 黄(褐)色砂質土<br>(6層より黄色が強く、粒子が粗い)          | 40                                     |
| 15 淡黄褐色砂質土(しまり甘い)                         | 41 黄灰褐色砂質土(35より壁粒子を多く含む)               |
| 16 黄灰色砂質土(6層より粒子粗く、黄色い)                   | 42 黄褐色砂質土(しまり良く、窯尻にかけて炭・焼土粒子少し含む)      |
| 17 淡赤灰褐色砂質土(やや粘性あり、壁粒子を多く含む) b(やや黄色が強い)   | 43 黄赤褐色砂質土(やや粘性を持ち、窯尻にかけて炭・焼土粒子を少し含む)  |
| 18 淡赤灰褐色粘質土(壁ブロックが落ち込み、17層と混じる)           | 44 赤褐色粘質土(焼土多く含む)                      |
| 19 淡黄褐色粘質土(壁粒子を少々含む)                      | 45 黄赤褐色粘質土(焼土粒子多く含む)                   |
| 20 濁黄褐色粘砂(16層よりしまりが強く、硬い)                 | 46 暗黄赤褐色粘質土(焼土・炭粒子含む)                  |
| 21 淡赤褐色粘質土(粘性強く、しまり良い)                    | 47 淡橙褐色粘砂質土(壁・黄色粒子多く含む)                |
| 22 淡赤褐色粘質土(壁ブロックを含み、やや赤い)                 | 48 淡黄褐色粘質土(黄色粒子少し含む)                   |
| 23 黄褐色粘質土(13層ほど赤くなく、壁粒子のみで壁ブロックを含まない)     | 49 淡黄褐色粘質土                             |
| 24 黄(橙)色粘質土(23層より黄色が強い)                   | オ' 淡灰褐色砂質土(窯尻にかけて炭・焼土粒子少し含む)           |
| 25 暗灰褐色粘質土(しまり良く、炭・焼土をやや多く含む、13と26層の漸移層か) | 50 黄色砂                                 |
| 26 黒灰色粘質土(しまり非常に良い、炭・焼土を多量                |  |

前庭部横断面層位(第17図13～14ライン)

- |                               |                                 |
|-------------------------------|---------------------------------|
| A 黄褐色砂質土                      | K 暗灰褐色粘質土(南側の方がやや黒い)            |
| B 黄褐色砂質土                      | L 混黄褐色粘質土(地山にK層が少し混じる)          |
| D 暗灰褐色砂質土(しまり甘く、焼土粒・炭を含む)     | M 黒灰色粘砂(26、29、30層より黒く、しまりも良く硬い) |
| E 灰褐色砂質土(焼土ブロックをやや多く含む)       | N 黒褐色粘砂(M層より黒く、しまり良く、炭を多く含む)    |
| G 黒褐色砂質土(11層より灰色が強く、炭・焼土粒を含む) | O 濁灰褐色粘質土(地山ブロックと炭・壁粒子を含む)      |
| H 暗灰色砂質土(しまり良く、炭を少々含む)        |                                 |
| I 淡黒褐色砂質土(10層よりは淡い)           |                                 |
| J 濁黄褐色粘質土(しまりはやや甘い)           |                                 |

灰原層位(第17図B'～23ライン)

- イ 黄褐色砂質土(炭・焼土少し含む)  
ロ 灰褐色砂質土(炭多く、焼土少し含む)  
26層と色が似る  
ハ 灰黄褐色砂質土(しまりやや甘く、炭含む)  
ニ 灰茶褐色砂質土(しまりやや甘く、炭・焼土を含む)  
ヘ 淡灰褐色粘砂質土(炭・焼土少し含む)

煙道層位(第18図19～20ライン)

- 1 黄褐色砂質土(崩土)  
2 暗灰褐色砂質土(炭粒子をやや多く含む)  
3 黒褐色砂質土(灰層)  
4 淡灰褐色砂質土(炭を少々含む)

付属土坑層位(第18図21～23ライン)

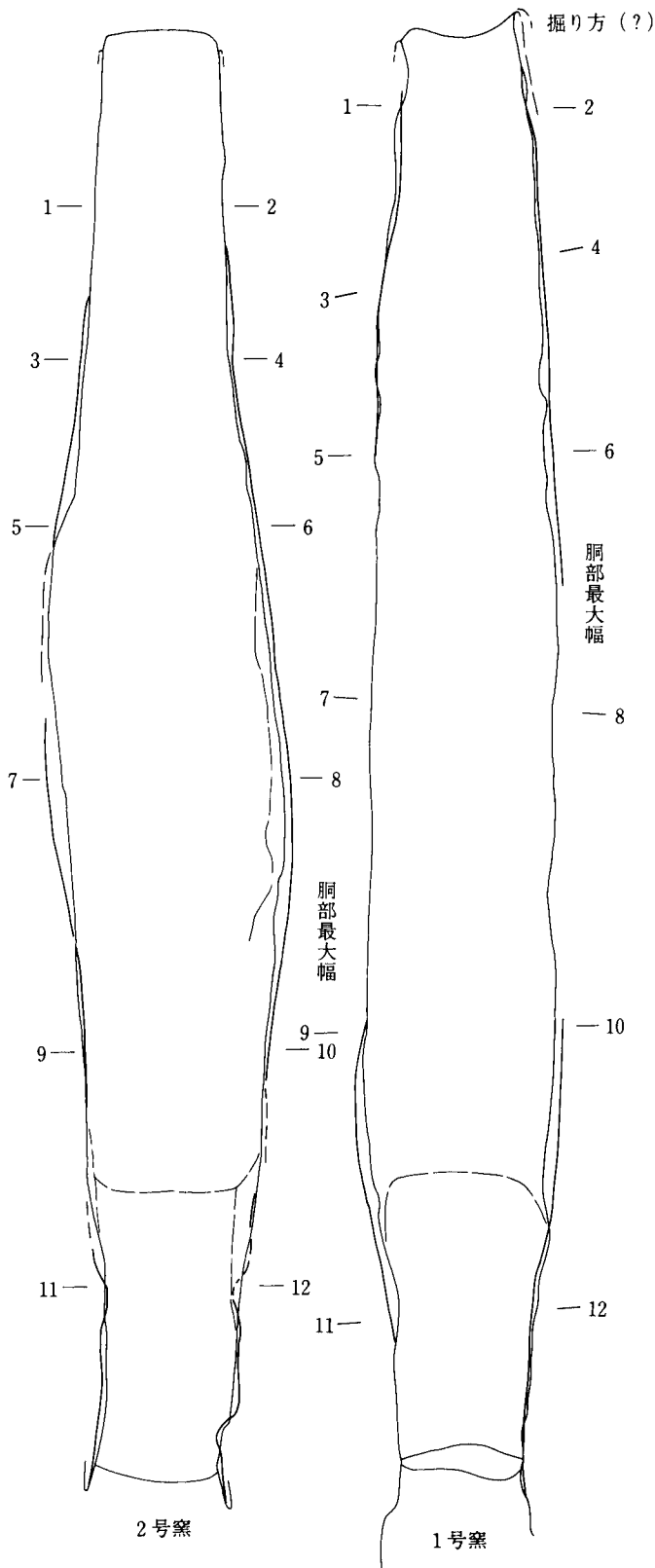
- 1 暗黄茶褐色粘質土  
2 暗黄褐色粘質土(3層ブロック混じる)  
3 茶褐色砂質土(炭混じり、しまり甘い)  
4 黒褐色砂質土(炭混じり、しまり甘い)一灰層  
5 茶褐色砂質土(炭・焼土混じり、しまり甘い)  
-4層と6層の漸移層  
6 黄褐色砂質土  
7 淡黄褐色砂質土(焼土・炭粒多く含む、非常に硬い)  
b(焼土・炭粒わずか含む、非常に硬い)

付属溝層位(第18図23～24ライン)

- 1 淡黄褐色粘質土(焼土・炭多く含む)  
2 淡黄褐色粘質土(焼土・炭若干含む)

灰原・盛土層位(第6図11～第15図27ライン)

- 1 淡灰褐色土(若干炭を含む)一灰原上面  
2 淡黒色粘砂質土(軟らかく、土器・炭多量に含む)  
一土層・黒砂  
3 淡灰黒色砂質土(軟らかく、下に炭を含む)一土層・黒砂



- 掘り方(?)
- 4 淡灰黒褐色砂質粘土(炭を多く、焼土・黄色ブロックを含む)一下層・黒粘
    - a (褐色が強く、4層より炭・焼土多い)
    - b (焼土・黄色ブロックを含まず、一番黒い)
    - c (黄色ブロックが多い、黄～褐色をおびる)
    - d (最も4層に近く、炭・焼土含む)
  - 5 灰褐色粘土(炭・焼土多く含む)
  - 6 黒灰色粘質土(炭・焼土を多く含む)一最下層
  - 7 黒色粘質土
  - 8 淡黒色砂質粘土(2層に近く炭・焼土多い)
  - 9 淡黒色粘砂質土(2層に近く、土器を多く含む)
  - 10 淡灰褐色土(1層に近い) b(明るい)
  - 11 黄(灰)褐色粘土(炭を若干含む)一盛土
  - 12 黄褐色粘土一盛土

- 盛土層位(第18図25～26、28～29ライン)
- 55 褐色砂質土(しまり良く、炭少々含む)
    - b(しまり良く、焼土・壁を少々含む)
  - 56 明褐色砂質土(しまり良い)
  - 57 黄褐色粘砂質土(しまり良く、黄白色ブロックを含む)
  - 59 黒色土一2号窯灰原
  - 60 暗褐色土

- 窯壁断面(第18図A～Dライン)
- 1 灰色壁
  - 2 赤色壁
  - 3 淡赤褐色砂質土(あまりしまらない)
  - 4 濁灰緑色壁(しまっており、堅い。表面はザラザラとした粒子)
  - 5 濁灰青砂色砂質土(しまりなし)
  - 6 濁赤褐色砂質土(炭・壁粒子を少々含む)
  - 7 濁灰褐色粘質土(炭を少々含む)
  - 8 濁黄灰褐色粘質土

- 窯壁横断面(第20図1～12ライン)
- 1 紫色壁
  - 2 赤色壁
  - 3 灰白色壁
  - 4 灰黄緑色壁
  - 5 2と地山の混じった層
  - 6 暗黄茶褐色粘質土
  - 7 茶褐色砂質土(壁粒子を多量に含む)
  - 8 茶褐色砂質土(壁ブロックを多量に含む)
  - 9 濁黄灰色砂質土(壁ブロックを多量に含む)
  - 10 淡茶褐色砂質土(壁・地山ブロックを多量に含む)
  - 11 茶褐色粘砂質土一崩落土
  - 12 灰黄色砂質土(壁・地山粒子を含む)一崩落土
  - 13 濁灰色壁(ザラザラした粒子からなる)
  - 14 炭層
  - 15 淡赤褐色粘質土(焼土粒子を少々含む)
  - 16 濁灰赤褐色砂質土
  - 17 黄褐色粘質土(しまり良く、やや堅い)

第21図 オオカミダニ2号・1号窯平面図

## 4. 土器

### (1) 土器整理の方法

2カ年にわたる発掘調査により2基の窯跡からは破片数にして31,645片、重量にしてほぼ1.1トン、遺物整理箱にして約320箱(水洗後)の土器を得ている。遺物整理作業に際しては水洗・接合の終わったものから順次実測土器を抽出していった。抽出時には坏B、甕、各種瓶といった焼成量の少ないものは実測に耐える範囲でできるだけ抜き出した。高坏、壺、甕についても口径・器形が復元できるものを中心に、希少なものを抽出した。坏Aについては大量に焼成されていることが分かっていたことから、器形の復元が可能な土器、希少土器を抽出して実測した。「表土層」、「試掘トレンチ」のように遺物に付されたラベルに所属窯の記載のない土器からの抽出量は少なく、希少器種・型式を抜き出したくらいである。この所属窯不明土器の中には型式分類作業を経て最終的に所属窯を決定したものも多い。

土器図版は窯・器種・細別型式の順にレイアウトしている。ここでは土器図化作業の後に土器分類作業を行ったことから、残存度の小さいものでは各分類の特徴を的確に表現していないものもある。これを補うものとして図版レイアウトの際に坏、高坏、横瓶、壺、甕については土器実物に依り、土器遺存度が高く各細別型式の特徴を良く表す土器より順に並べることを心掛けた。実測点数の少ない器種については口径順にレイアウト優先で配置した。写真図版では細別した型式の特徴を良く表す土器を外側、側面、内面から撮影し、細部調整(ロクロひだ・ヘラ切り離し)手法の違いの明確化を心掛けた。また、重ね焼を行っているものもできるだけ載せた。写真の縮尺の統一は図らなかった。ただ、同一窯の同一器種においてはほぼ同一の縮尺である。

### (2) 土器分類の方法

土器製作においては1)原料粘土の選択・採取・調合、2)土器製作、3)窯入れ・焼成、4)窯出し・集積・選別、5)搬出といった作業工程がある。これとは別に、窯場選定・築窯・燃料の獲得、土器製作に係わる工具の製作といった作業もある。このうち、2)、3)および4)が窯跡出土土器の分析により復元できる工程といえる。そして、それぞれの工程を経ることにより土器に顕れる要素とは、2)土器製作工程では、粘土調合から成形・調整技術に係わる要素として土器胎土、器形、器厚、法量、器表面のロクロひだ・細部加飾、ロクロからの切り離し前の調整ケズリの加え方、切り離しの手法、あるいは、切り離し後の天井部や底部外面の処理方法等がある。3)窯入れ・焼成の工程では、窯内での土器設置位置を反映する要素として土器の質感・発色等の焼成状態、器表面に被る釉調がある。土器の分類にあたっては上記要素を観察項目とし、各器種の細別型式が土器製作工人単位を反映するものとなるよう心掛けた。4)窯出し・集積・選別の工程については土器の分類を補足するものとして第5章考察において器種別・型式別実測土器分布や土器接合関係について検討を加えた。実際、分類作業に際しては大量に生産された小型器種(坏・高坏)では上記の調整・加飾等の違いに工人の作り癖(作風)の偏差の幅とできる要素を見出し、出土土器を数種の型式としてまとめあげたが、個体数の少ない器種(壺・甕・瓶等)にあっては工人技術の偏差の幅を押さえることはできず、器形、細部の形態・加飾といった諸属性の組み合わせによる型式分類となった。また、土器胎土についても検討を加えたが、結果として全器種共通の記述とはならず、個別器種毎の相対的な識別となった。

### (3) 土器各部の名称および法量計測位置

各窯出土の土器を分類し説明を加えるにあたって土器各部の名称および各法量計測位置について若干の説明を加える。坏Aおよび坏Bの各部の名称については第22図のとおりであるが、蓋・身とも丸底のものにあっては天井部(底部)・体部の境は明瞭なものではない。また、口縁部の範囲についても口縁を曲げるもののほかは不明瞭であり、ここでは口唇部水平ラインから1~1.5cmの範囲を指すものとする。高坏は坏部と脚部に大別し、坏部

の名称は坏に準ずる。脚部については棒状部、裾部、裾端部に分ける。甗・壺・甕は口頸部(口唇部、口縁部、頸部)、胴部(肩部または胴上部、胴下部)そして底部とに分け、提瓶・平瓶等の瓶類もこれに準ずる。

法量計測位置は図示したとおりである。口径・受け部径はその口唇部頂点を計測点とし、立ち上り高(返り高)については受け部(つば部)水平ラインより飛び出た高さを計測した。

#### (4) 土器の分類

各器種、林オオカミダニ窯に前後する時期との関係において捉えられる器形要素によりA・B・C・・・と大別し、この大別において1・2号窯共通の分類要素となる。以下、器形、成形手法の違いにより1・2・3・・・と分類し、調整手法・細部形態の違いによりa・b・c・・・と細分類した。壺・甕においてはさらに細部形態の<sup>(1)</sup>違いにより1・2・3・・・と細分した。<sup>(2)</sup>

##### 坏の分類

A類 蓋にかえりはなく、身に受け部を持ついわゆる坏Hである。蓋・身ともにロクロ上からはへら状具により切り離している。切り離した後天井部(底部)には雑にナデを加えるものもあるが多くは切り離した後不調整である。また、へら切り離し前には調整ケズリを加えているが、ロクロナデにより調整ケズリの有無の分からないものもある。<sup>(3)</sup>天井部(底部)・口縁部の形態、器厚、へら切り離し方等の細部手法の違いによって細分できた。

B類 身に受け部はなく蓋にかえりを持つものである。<sup>(4)</sup>蓋に付されるつまみは2号窯で宝珠形が存在するが、主体は偏平なボタン状のものである。天井部の調整にはカキ目を加えるもの、ロクロナデまたはロクロケズリによるものがある。身の多くは底部に不定方向のへらケズリを施すが、これが底部周縁のみのもの、ケズリを加えないものも少量存在する。

##### 高坏の分類

A類 坏部に立ち上りを持つ有蓋長脚高坏。

B類 坏部に立ち上りを持たない無蓋長脚高坏のうち、脚部2方に長方形2段透かしを加えるもの。

C類 坏部に立ち上りを持たない無蓋長脚高坏のうち、脚部3方に長方形2段透かしを加えるもの。

D類 坏部に立ち上りを持たない無蓋長脚高坏のうち、脚部に透かしを加えないもの。

E類 有蓋短脚高坏であり、脚部に透かしは加えないもの。

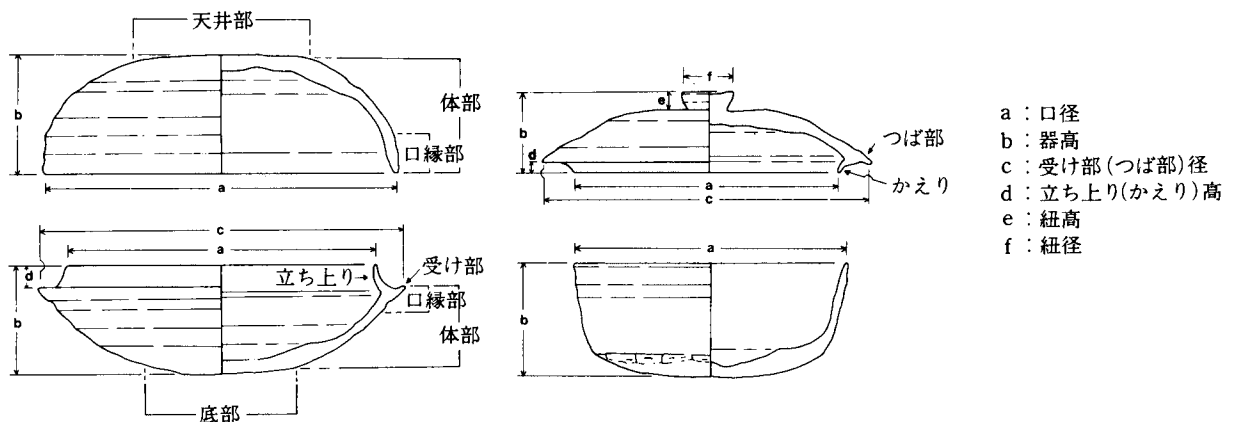
##### 壺・甕の分類

壺・甕においては諸属性の組合わせによる分類である。<sup>(5)</sup>

1：口縁部形態

A類 口縁部を肥厚しないもの。

B類 口縁部を肥厚し、肥厚帯部を設けるもの。



第22図 各部名称および法量測定位置



2：口頸部形態

- 1類 直立
- 2類 外傾または外反
- 3類 内湾

3：口唇端部形態

- a類 先細り
- b類 面取り
- c類 丸

(5) 2号窯出土土器

坏蓋(1)(第23図、図版54～57)

A 1類口径13.5cm 前後。口縁部外面に深いロクロひだを数条加えるもので、形態等により細分できる。

A 1 a類(1～4) 器高は高く、平らな天井部と体部が明瞭に区別できるもので、体部は口縁端までなだらかに続き、外面にはロクロひだがめぐる。胎土は白色砂粒を多く含み、青灰色に発色し、手触りはザラつく。(自然)釉は被らない。

A 1 b類(5～11) 器形が1 a類に較べ扁平で、天井部と体部の境は不明瞭である。胎土は1 a類と同じく灰～青灰色を呈する。外面に緑色釉を被るものが多い。

A 1 c類(12～23) 1 b類と同様の器形であるが、その胎土は砂粒の含みが少なく、しまりのある堅ちな焼き上がりである。また、器内面のロクロひだは浅くその及ぶ範囲も狭い。器面に被る釉は明緑～暗緑色とバラエティをもつ。

A 2類(24～26) 口径13cm 前後。ヘラ切りの範囲が広く平坦な天井部を形成し、口縁部は下方に折り曲げる。胎土は白色砂粒を少量含み、灰色に発色する。釉は被らない。24は焼成のやや甘いもの。26は上方に突き出た天井部中央に粘土を貼り付け、雑なナデを加える。また内面中央には幅5mmほどの密なロクロひだめぐる。これはヘラ切り離しに失敗し穴のあいた天井部に粘土を貼って補修した痕と推定する。

A 3類(27～31) 口径13cm 前後。平坦な天井部からゆるやかに体部に移行し、口縁部を下方に曲げるもので、全体に扁平な器形を呈する。口縁部にロクロひだ加え、器肉は口縁端部まで厚く仕上げる。天井部には丁寧なヘラ切りを加えヘラ痕は残らない。焼成はやや甘く、胎土は白色砂粒をわずかに含み、灰～淡青灰色に発色し、ザラつく手触りをもつ。釉は被らない。

A 4類(32) 口径12.9cm。平坦な天井部から折れ体部となる。体部は肩が張り、口縁部に2・3条の密なロクロひだを強く加えるほかは滑らかに仕上げる。焼成はやや甘く、胎土は淡青灰色に発色。A 1 c類類似の胎土であり、釉は受けない。ヘラ切り痕は判別できず、セットとなる身も不明。

A 5類(33～44) 口径13cm 前後。天井部から口縁部まで滑らかにいたり、口縁部を下方に曲げるもので、全体に扁平な器形を呈する。器表は滑らかに仕上げ、ロクロひだは残らない。胎土は白色砂粒を少量含む。37・40・43・44は灰白～灰色を呈し焼成がやや甘く、収縮度が小さいためか口径は他に較べ大きい。焼成良好品は青灰色から暗青灰色を呈する堅ちな焼き上がりとなり、ザラつき感は弱い。36、38、42、46、47は緑～褐緑色釉を器外面に被る。丁寧に加えたヘラ切り離しにより外面は平滑であり、ヘラ痕の残らないものが多い。

A 6類(45・46) 口径13cm 前後。器高は高い。幅が狭く平坦な天井部から丸みをもつ体部に移行し、口縁端部は外方に摘み出す。器表面は滑らかに仕上げる。焼成は良好。胎土は白色砂粒を少量含み、灰色を呈し、ザラつきをもつ。釉は被らない。セットとなる身は不明。

坏身(1)(第23図、図版54～57)

A 1類 口径12.2cm 前後。口縁部外面には深いロクロひだを数条加えるもので、形態等により細分できる。

A 1 a 類(48~53) 器高は高く、丸みのある底部をもつ。立ち上がりはもっとも高く上方に折り上げ、先細りさせる。釉は被らない。

A 1 b 類(54~60) 1 a 類に比べ腰の張りが弱く、底部は体部との境が明確化する。胎土は 1 a 類と同様。底部外面に緑色釉を被るものが多い。53はロクロひだが浅くかすかなものであり、A 1 類の特徴と異なるが、天井部のへら切りおよびへら抜き手法は50と同様であり、器面細部調整からは異なる印象を受けるが同一工人による造りとして認められる。器面の調整や胎土・法量により、坏蓋A 1 類と組む。

A 1 c 類(61~73) 1 b 類と同様の器形をもつが、胎土は淡灰~青灰色を呈し、しまりをもつ。

A 2 類(74~80) 口径12.2cm 前後。器形は偏平であり、口縁部外面に浅いロクロひだを加える。本窯ではオリコミ法によって立ち上がりを造り出す。ほとんどの土器はこれを加工することはなく、立ち上がり基部内面にミズばれ状の微隆起線が残る。これに対し本類では立ち上がり基部内面にさらにナデを加えており、体部から滑らかに立ち上がり部へと移行する。胎土に砂粒の含みは少なく、淡灰色を呈し焼成は堅ちであり、サラつく手触りをもつ。82・84・86の受部に褐緑色釉を被るほかは無降灰。

A 3 類(81~88) 口径11.6cm 前後。腰部に張りのある偏平な器形を呈し、底部から体部へは滑らかに移行する。器表面のロクロひだは浅く、残らないものもある。器肉の厚い立ち上がりは内傾させるのみで端部を丸く納める。胎土は淡灰褐~灰色に発色する。釉は受けず、焼成の甘いもの、歪むものが多い。器面調整・胎土より坏蓋A 3 類とのセット関係を推定する。

A 4 類(89~90) 口径13cm 前後。へら切りの範囲が広く偏平な器形を呈する。ロクロひだは残さず、器表面を滑らかに仕上げる。器肉の厚い立ち上がりは内傾させるのみで端部を丸く納める。へら切り離し後に板状具によるナデを雑に加える。立ち上がり基部内面にはA 2 類同様ナデを加える。胎土は白色砂粒を少量含み、灰色を呈し、ザラつく手触りをもつ。釉は被らない。へら痕は89が図版55に示す刃先の丸い形態をもつ。

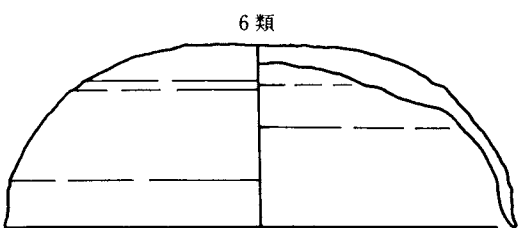
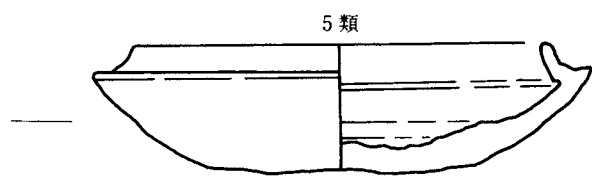
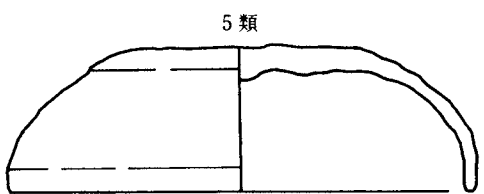
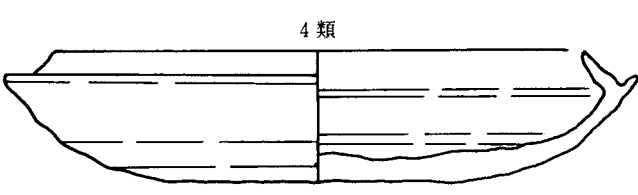
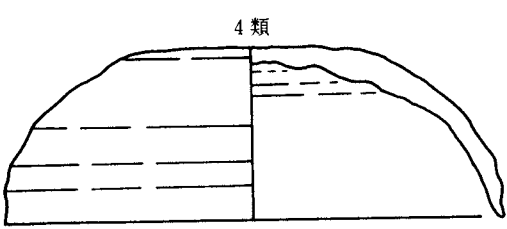
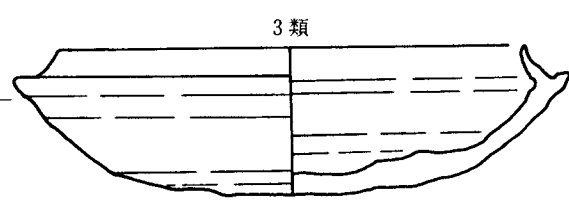
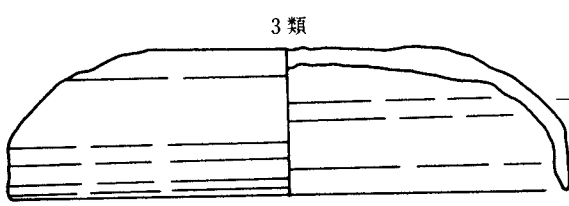
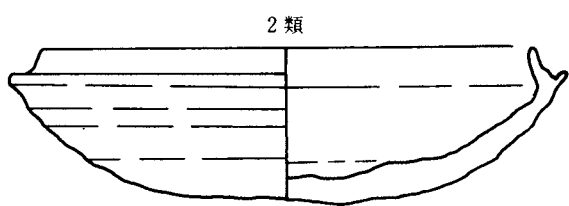
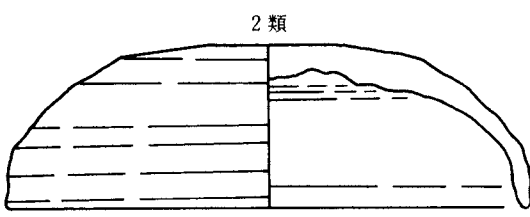
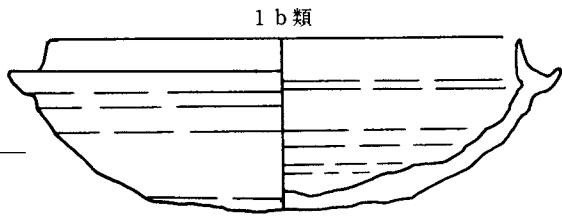
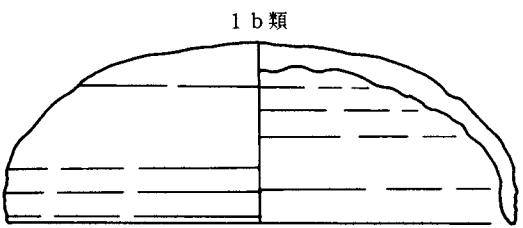
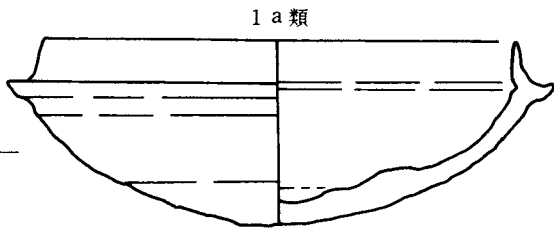
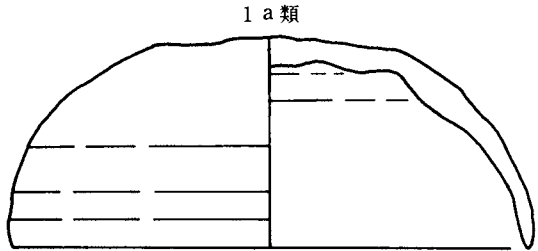
A 5 類(91~100) 口径11cm 前後。口径は他類が12cm 前後なのに対しA 5 類では11cm 前後と小径である。器形をうかがえるものは少ないが、底部は丸いものと、幅の狭い平坦面を持つものの二種がある。受け部のつまみ出しは弱く、立上がりも低く小振りである。立ち上がり形態には受け部から平坦面を介し折り上げるもの、受け部から滑らかに続くものがあり、ともに、端部を丸くおさめるものが多い。胎土は淡灰~淡青灰色に発色し焼成は堅ちであり、ザラつく手触りをもつ。多くは明緑色釉を被る。器面調整・胎土より坏蓋A 5 類とのセットを推定する。

#### 案内一括検出土器(図版56)

101~144は焼成部入口から2~4mの地点の窯床直上で一括出土したものである(巻頭図版2)。坏Aが蓋・身合口のもの29セット、長頸瓶・甕の口縁部が調査時にわずかに破損した他は完存する。各土器は土器取り上げ時に傾斜・釉垂れの方向等を記録して取り上げており、第5章考察においてこれらに対し若干の検討を加えた。坏Aについては先の分類ではすべてA 1 類に属するものである。天井部(底部)に残るへら痕には、1)へらを刃側にひねり土器を起こすもの、2)へらを峰側にひねり土器を起こすもの(図版56 131身・135蓋等)、3)へら全面で土器を持ち上げて起こすもの(図版56 122蓋・124身等)がある。また、2)の手法では土器を起こしたあとへらの方向を変えて抜いた痕が残るものも(図版56 133身)も多い。図版56からも分かるように細部調整が全く同一とできる土器はなく、このへら起こし痕についても蓋・身での対応は認められない。

#### 坏蓋(2)(第24図、図版58)

B 1 類(145~151) 口径10.4cm 前後。頂部の丸い宝珠つまみをもつ。偏平な天井部から口縁部にかけては滑らかな曲線をなし、坏受け部に幅5~7mmの平坦面を設け、かえりはこの平坦面から内側に折り出す。かえり端部は先細りさせる。器内外面をロクロナデにより仕上げる。胎土は白色砂粒を多く含み、淡灰~暗青灰に発色。黒色の吹き出しが目立ち、濃緑色釉を天井部外面に厚く被る。かえり部分の剥離痕や焼け班から身とセットで正



(S = 1/2)

第23図 2号窯坏A分類 (一はセット関係を示す)

位で焼成されたことがうかがえる。

B 2 類(152~155) 口径10.6cm 前後。頂部の尖った端正な宝珠つまみをもつ。天井部は丸みを帯び、口縁部外面には浅く幅のあるロクロひだを加え、坏受け部に幅7~10mmの平坦部を設ける。つば端部は角張らせ、かえりは下方に細く鋭く引き出すもので、このかえりはつば部水平ラインより下には出ない。器内外面をロクロナデによって仕上げる。胎土は白色砂粒を多く含み、黒色吹き出しは目立たず、青灰色~淡灰褐色に発色する堅ちな焼成である。暗緑色釉を天井部外面に被る。胎土・釉とも2号窯の坏Bにはなく他の埴器形とセットとなる可能性がある。152・153と154・155を比較すると、前者では受け部平坦面幅が狭く、口縁部外面に弱いロクロひだが1条残り、後者とは細部の造りに若干違いがある。しかし、天井部器形、つば部形態、胎土、発色、器面に被る釉色は同一であり、両者は同一工人の造作によるものとしてよい。

B 3 類(156・157) 口径9.2cm 前後。偏平なボタン状つまみをもつ。丸味のある天井部からは滑らかに口縁部にいたり、幅広い坏受け部は平坦面を設けず滑らかに仕上げ、かえり端部は先細りさせる。天井部外面にはロクロケズリのちカキ目を施し、他の部位はロクロナデ仕上げである。胎土は白色砂粒を多く含み、黒色のふき出しが器表・破断面に目立ち、淡灰褐~淡青灰色に発色する。156は身・蓋セットで正位で焼成している。身の口径は10.4~10.7cm、蓋はつば径12.4、口径9.1~9.4、立上高0.3cmである。157は緑色釉を被るもので、天井部外面に坏B身と思われる土器の口縁部が熔着する。窯内において正位の蓋に身を逆立に載せ焼成したと推定する。また、この蓋のかえり端部には他の土器との熔着痕がめぐる。その器種は特定できないが、蓋の下にさらに逆位の身を設置していた可能性もある。

B 4 類(158~163) 口径10.6cm 前後。偏平なボタン状つまみをもつ。天井部は偏平で、天井部と体部を稜で画する。坏受け部に平坦面を設け、かえりは下方につまみ出し先細りさせる。天井部外面には、ロクロケズリを加え、他の部位はロクロナデ仕上げである。胎土は白色砂粒を多く含み、破断面や器表に黒色の吹き出しが目立つ。淡灰~灰色に発色し、器表面はザラつく。多くは天井部外面に緑色釉を厚く被る。

B 5 類(164~169) 口径10.4cm 前後。偏平なボタン状つまみをもつ。幅狭で平坦な天井部をもつと推定され、天井部からはゆるやかに口縁部にいたり、つば部を上方に屈曲させる。胎土、釉ともB 3 類に同じ。

B 6 類(170・171) 口径9.2cm 前後。偏平なボタン状つまみをもつ。平坦な天井部をもち口縁部にはロクロひだを強く残す。つば部を上方にわずかに屈曲させ、受け部内面は滑らかに仕上げる。かえり端部は先細りさせる。胎土は白色砂粒をわずかに含みB 1 類に類似する。暗青灰色に発色し焼成は堅ち。器表面には黒色吹き出しがみられる。暗緑色釉が天井部外面に厚く被り、受け部には身の痕が残る。

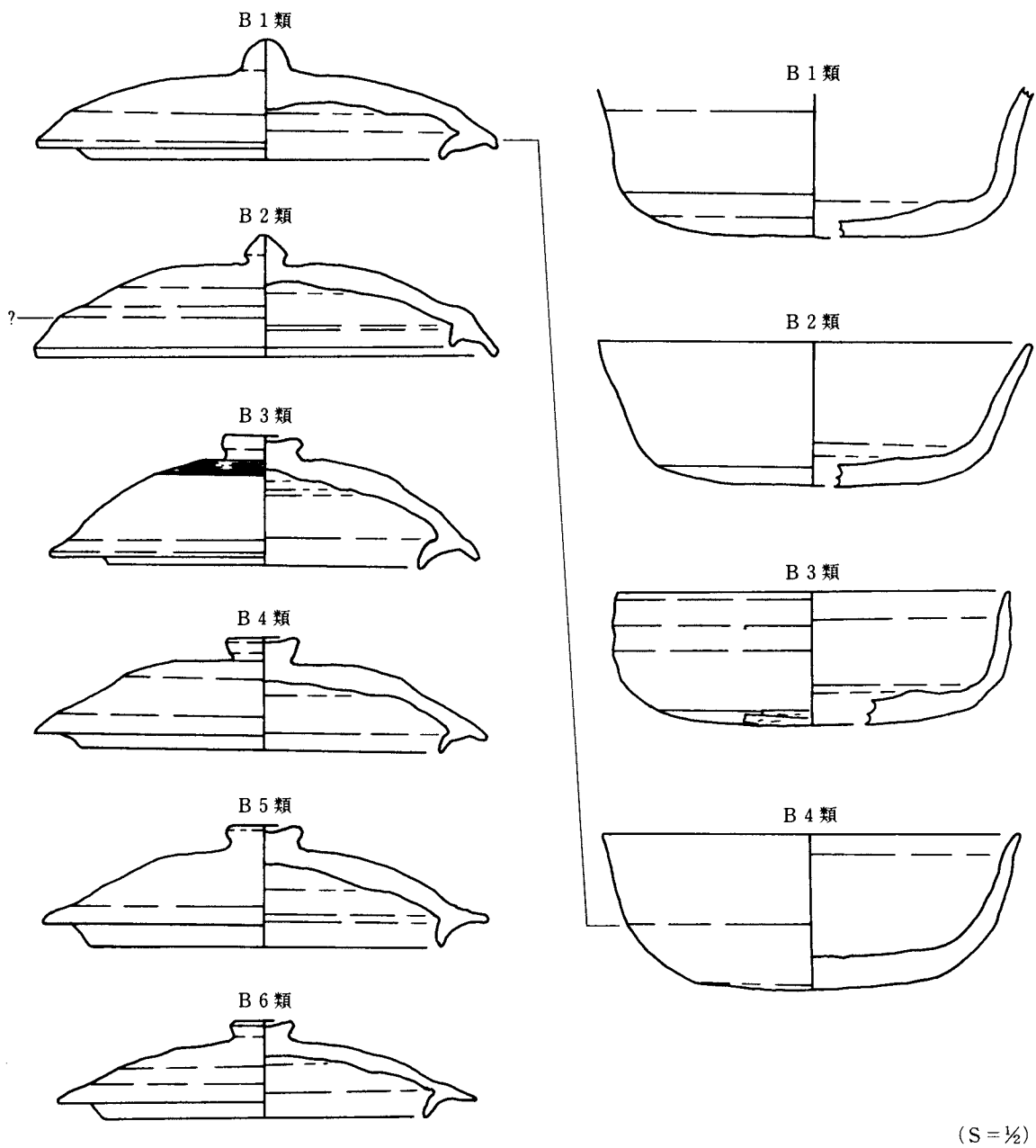
#### 坏身(2)(第24図、図版58)

降灰状態の観察からB 1~3 類は蓋を伴わず身のみで焼成し、B 4 類は蓋を載せ焼成している。

B 1 類(172~175) 口唇部まで残存するものはないが口径約13cm、器高約5.5cmを測る大振りのもので推定する。器形は体部中央で外反し、口縁部で上方に立ち上がる。底部へラケズリ幅(底部外面の不定方向へラケズリのおよぶ範囲)は直径10cmを測る。他の部位はロクロナデによる。胎土は白色砂粒をわずかに含み、淡灰白色に発色する。釉は明緑色。173は身を2段に重ねており、内面に釉が厚くたまる。

B 2 類(176~186) 口径12.5cm、器高4.5cm。体部中位でわずかに外開きし口縁部にいたる。底部へラケズリ幅は10cmを測る。176では4段の、177では降灰状態の観察により4段以上の、186では2段のいずれも身のみによる重ね焼を行っている。179・180・185では重ねは行なわず単体で焼成している。胎土は砂粒を多く含み、淡灰色または暗青灰色を呈する。いずれも正位で焼成しており、器内面に緑褐色釉を受ける。

B 3 類(187) 口径約13cm、器高4cm。底部へラケズリ幅は不明。口縁部は外傾し、口唇部は先細りする。体部中位にはロクロひだを1条加える。胎土はB 1 類に同じ。内外ともに明緑色釉を被り、重ね焼は行っていない。



第24図 2号窯坏B分類（一はセット関係の可能性を示す）

B 4 類(188・189) 口径12cm、器高4.5cm。平坦な底部から丸みをもって体部にいたり、体部は外傾のち口縁部で外反する。口唇部は丸く納める。底部はヘラ切り後不調整であり、器内外をロクロナデにより仕上げる。B 2 類と同様の胎土は青灰色に発色する。器外面には濃緑色釉を被り、内面は無降灰。口唇部に剝離痕がめぐる。胎土や釉色・口径等から蓋 B 1 類とのセット関係を推定する。

壺(190・191、図版58) 口径に比べて器高の高い壺器形をもつものである。190は口径8.6cm、器高7.2cmを測る。底部と体部の境は丸味をもち、体部から口縁部にかけてはまっすぐ立ち上がる。口縁部はわずかに内湾し先細りする。胴部中位には凹線を2条加える。胎土は白色砂粒を少量含み、淡灰色に発色し、ザラつく。緑色釉が底部外面および口唇部外面に付着する。口唇部には剝離痕がめぐるもので倒置されていた可能性がある。

鉢(142・143、図版58) 口径14.8cm。底部からゆるく曲がり体部となる。体上半部は外反のち立ち上がり、口唇部を丸く納める。体部中位には2条の凹線を加える。底部は完存しないがヘラケズリにより仕上げるようである。淡灰色に発色する胎土は白色砂粒を少量含み、坏身 B 2 類の胎土に似る。193は淡灰白に発色し、坏身 B 1 類の胎土に似るが砂粒はより細かい。いずれも緑色釉が体部外面・底部内面を中心に被り、蓋は乗せていない。

#### 高坏胎土分類(巻頭図版4)

他の器種に較べ坏部や脚部への加飾の要素が多く型式伴別が容易であることから、高坏ではとくに個々の土器胎土の識別・分類に検討を加えた。<sup>(8)</sup> 胎土識別に際しては胎土の発色、土器破断面における白色砂粒の大きさ・量、土器の割れ様、破断面表面の凹凸度・手触りおよび胎土のしまり具合を比較項目として、肉眼観察により相対的な分類を行った。また、風化した破断面と新鮮な破断面では大きく印象が異なることが多いことから、新鮮な面を観察対象とした。結果として細分型式と胎土は対応するとの結論を得ている。以下に胎土分類の基準を示す。

A 類 0.1mm 大の白色砂粒を多量に含み、断面に塩粒状に白色砂粒が目立つもの。胎土は青灰～暗青灰に発色し、しまりは良く気泡はほとんど表れない。割れ口はシャープだが破断面には細かい凹凸があり、ザラつく感触をもつ。

B 類 0.1mm 大の白色砂粒を多く含む。また、1～3mm 大の白色砂粒をわずかに含む。青灰～灰色に発色するものが多いが、還元が弱いためか淡赤褐色に発色する一群もある。この淡赤褐色を呈する B 類胎土は、水に濡らすと胎土中の白色～白色透明砂粒が蛍手様に白く浮かび上がるという特徴をもつ。割れ口は、シャープなものもあるが、打ち欠いたように凹凸になるものが多い。手触りはザラつきをもつ。胎土は精良でしまりは良いが、気泡がわずかに表れる。

C 類 最も精良な胎土と捉えられ、0.1mm 大の白色砂粒を少量含む。青灰～淡灰色に発色し、器表に釉を被るものは少ない。焼成はやや甘く多くの土器には被熱痕が明瞭に残る。気泡はほとんど表れず、割れ口はシャープであり、破断面も滑らかだが、手触りはザラつく。

D 類 釉を受けず焼成のやや甘いものが多い。これらは淡青灰～灰色を呈し、1mm 大の白色砂粒を少量含み、断面には気泡が少量表れる。割れ口はシャープで破断面は凹凸をもち、器表、断面ともザラつきが大きい。

#### 高坏蓋(図版59)

いずれも体部中位(肩部)に凸帯または稜を一条めぐらすものである。

1 類(194) 天井外面を不定方向ケズリのみによって仕上げるもので、丸い天井部にはつまみを付さない。凸帯は強くつまみ出し凸帯上位には幅広のロクロひだを1条加える。器肉は口縁端部まで厚い。器内面には緑色釉を厚く被り、外面は無降灰。

2 類(195・196) 平坦で幅広の天井部をもち、凸帯はナデによりつぶされ稜状となる。凸帯上位のロクロひだはかすかに残るのみである。天井部外面にはロクロケズリのちロクロナデを施しており、胎土・釉調から高坏 A 1 類とのセット関係を推定する。196は径2.7cm、高さ0.7cmの偏平つまみをもち、口縁端部は内面を肥厚する。天井部外面には丸い無降灰部分(直径13cm)があり、その外側は緑色釉を被る。内面は無降灰、口唇部には剝離痕

がめぐる。195は釉を受けず、焼成のやや甘いもの。

3類(198) 天井部は丸く外面に稜を持たないものである。口径13.3cmと2類に較べ小さい。天井部外面にはカキ目を施し、径2.5cm、高さ0.7cmの端整な偏平つまみを付ける。内面には強いロクロひだが渦状に残る。

4類(199) 天井部外面をロクロケズリにより仕上げる。窯壁中に埋まっているため全体はうかがえないが、つまみは頸部が長く、つまみ高0.8cmを測る。破断面および器内面に明緑色釉を被り、胎土は淡黄褐色を呈ししまりをもつ。この胎土は1・2号窯、他器種を探しても見当たらず他窯からの紛れ込みの可能性がある。

#### 高坏(図版59~62)

高坏の分類では工人の作り癖をうかがう属性として、胎土分類や細部形態の相違に加え、坏接合部での脚基部内径(脚部しぼり込みの度合い)および透かしのうがち方を重要な観察点とした。

A1類(200~204) A類胎土。脚基部内径は約1.2cmを測る。坏口縁部形態は不明。上・下段ともしっかりした長方形の透しをうがち、脚裾端部は下方にゆるく湾曲させるものが多い。脚裾部には凹線を1・2条めぐらす。また、図化しなかったが裾部に凹線を加えないものもある。坏部内面には幅広の板状具を器面に捺しつけ整形した痕が残る(200)。202は脚部が焼成途中で坏部からはずれたものだが、この脚基部上端には脚部との接着のため坏部に加えられた同心円状の加工が転写し残る。いずれも脚部内面に厚く緑色釉を受け、窯内で倒置して焼成したことがわかる。また、この釉表面はうすく銀化した降灰に薄くおおわれている。同様の銀化した降灰は窯内の燃焼部から焼成部入口にかけての窯壁で調査時に観察している。また、窯体内取り残し土器の内の甕にも見ることができる。これらの高坏も窯焼成部入口付近に配置されていたと推定する。

A2類(205~210) B類胎土。脚基部内径は1.4cmを測る。坏部は立ち上り高1.4cm、立ち上がり端部は先細りさせる。脚裾部に1・2条の凹線を加え裾端部は下方に短かく曲げる。また、坏部内面には板状具による押捺整形痕がロクロナデの下にかすかに残る。脚部内面と坏部外面に緑褐色釉を受け、窯内で倒置して焼成している。210では緑色釉を受ける。

A3類(211~213) B類胎土。脚基部径の判るものはないが脚部しぼりは弱く、A1・2類より内径の大きいものとなろう。坏部は立ち上り高0.8cm、立ち上り端部は丸く納める。脚裾部に2条の凹線をめぐらし、裾端部を下方に短かく折る。213では凹線は加えずロクロナデのみにより仕上げている。いずれも脚部内面・坏部外面に緑色釉を厚く被る。

B類(214) B類胎土。脚部中ほどの破片のみである。棒状部内径は1cm以上の大きなものと推定できる。器面には緑色釉を被る。

C類はいずれも坏部に凸帯または稜を2段にわたってめぐらす。

C1類(215~231) A類胎土。透しは坏底部に接してうがち、脚基部内径は0.7cm前後を測る。坏部に施される凸帯は上下の2本とも丁寧に造り出す。下段の凸帯の成形手法により、a類)下段凸帯内側に凹線を1条加えることで角張ったしっかりした凸帯とするもの(215~224)、b類)下段凸帯内側の凹線が幅広であり、さらにナデを加えるため凸帯の断面形態が丸味をもつもの(225~230)、c類)凸帯を摘み出して仕上げるもの(231)の3類に細分できる。多くは坏底部外面から脚裾部までカキ目を施し、また、脚棒状部中央には2条の凹線を、裾部には1・2条の凹線をめぐらすほか、凹線を加えないものもある。完形に復元できるものが5個体ありこれにより脚部形態をうかがうと、C1a類では裾部に2条の凹線を加え、脚裾端部を下方にゆるく曲げるものが多い。C1b類では裾部に1条の凹線を加え、裾端部を折り曲げるものが多い。C1c類のものは脚裾部に凹線を加えず、裾端部は折り曲げている。脚部のみ破片は以上の分類によりそれぞれに分けている。中には2本の凹線が裾部を1周するうちに1本になるものもあり、脚部では所属の決定しがたいものもある。また、透し長をみると、焼成による収縮を考慮しても上段、下段とも主流を占める長さはあるがそれより長いもの、短いものも多くあり厳格な基準は認められない。ただ、坏部内面成形の共通性(凸帯部分の内面で段をもつ)からも、これらは同一の工人の

手によるものとしてよい。外面には全体に暗緑色釉を被る。

C 2 類(232~234) B 類胎土。脚基部内径、透しのがち方、脚部の造りはC 1 類と同様である。坏部下段の凸帯は丸味を持つ。器肉の薄い脚部はロクロナデにより仕上げ、カキ目は加えない。裾端部は短く下方に曲げる。脚部は2点図化したのが、下段透しの長さが大きく異なる。しかし、造り・胎土・釉色は全く同じである。ともに脚部内面、坏底部外面および坏内部片面に厚く緑色釉を被り、窯内で傾斜をもって倒置されていたと推定できる。胎土は淡灰褐色を呈する。

C 3 類(235~237) B 類胎土。脚基部内径は1.3cm とC 1・2 類に比べて大きい、透しは同じく坏部に接しうが。坏部下段の凸帯は2 類と同様丸味をもつ。237では凸帯下に凹線を加えず、弱くつまみ出すことで凸帯を造り出す。脚部形態は不明。胎土は淡青灰色を呈する。坏底部外面には明緑色釉を受け、内面は無降灰。

C 4 類(238・239) B 類胎土。脚基部内径は1cm を測る。坏部上段の凸帯は丁寧につまみ出して造るものの下段では凸帯下に凹線を加えず稜状のものとなる。緑色釉を被り、坏底部外面には半月状の焼き斑がのこる。

C 5 類(240~244) B 類胎土。かろうじて内部まで貫通する省略丸味の透しは、脚部付け根から2~3mm 下がった位置からうがち、脚基部内径は1.5~1.7cm と大きい。下段の凸帯はつまみ出して成形する。坏部上段の凸帯はつまみ出すものだが、242では凹線を加えることで造り出し、口縁部の外反度は弱い。脚裾端部はゆるく下方に曲げる。外面に明緑~緑色釉を被り、坏底部外面には半月状の焼き斑が残る。

C 6 類(245~249) B 類胎土。坏部外面の凸帯は上下ともつまみ出しによる稜状のものである。坏部と脚部の接合資料はないが胎土・釉調から脚部の組み合わせが推定できる。脚部は、脚基部内径0.7cm、裾部は透し下端で大きく広がり、裾端部をゆるく下方に湾曲させる。裾部径は小さく、全体にC 2 類のようなプロポーションとなろう。247・248は裾部が自重によりゆがむ。器外面に褐色釉を被る。

C 7 類(250~256) C 類胎土。上段の透しは省略され内部まで貫通せず、下段の透かしは略三角形を呈する。脚基部内径は1.5cm と大きい。坏部凸帯は上・下段とも弱くつまみ出す稜状のもので、下段は浅い凹線を稜内側に加え凸帯状とする。器肉の薄い裾部は広がりが弱く、端部を下方に折るものだが端部内面では折り曲げ度は弱い。釉は受けず、坏底部外面に半月状の焼き斑が残る。

C 8 類(257・258) C 類胎土。坏部、脚部各1点のみで接合しないが青灰色を呈する胎土、半生焼けの焼成状態、出土地点(焚口灰層床、焚口灰下層)よりセットと推定する。坏部凸帯は上下段ともつまみ出しの弱い稜となる。脚棒状部形態は不明。裾端部を下方に強く折るものである。釉は受けない。

C 9 類(259~262) D 類胎土。坏部と脚部の接合資料はないが、D 類胎土のザラつく特徴的な器表面よりセットとしてよい。脚基部内径は1.2cm と大きい。凸帯は上・下段ともC 類の中でもっともつまみ出しが弱い。また、坏部内面は滑らかに仕上げられており、他類のような段は作らない。坏底部や脚部に残る剝離痕の観察から、上段の透かしはかろうじて内側まで貫通する省略されたものであることが分かる。下段にはしっかりした長方形の透かしをうが。脚裾端部は下方に強く折り、すどく先細りさせる。器面に釉は被らない。

C 10 類(263~265) B・D 類胎土。脚裾部直径10.4cm と小径であり、裾部はゆるく外方に折り広げ、裾端部は下方に折る。坏部、透し等の形態は不明。B 類胎土類似のものは褐色釉を被り、D 類胎土のものは釉は被らない。

2号窯の高坏D 類はいずれも坏部に凸帯または稜を1段めぐらす。

D 1 類(266~280) B 類胎土。a 類坏部にめぐらした凸帯下に幅狭で深い凹線を加えるもの(266~275)と、b 類幅広で浅い凹線を加えるもの(276~280)に分けられる。この凹線はいずれも成形時に凸帯を器面からつまみ出した際に付いたものである。坏部内面形態は底部から弱く折り上げ口縁部に到るものが多いが、268や269では底部から滑らかに口縁部に移行している。脚棒状部中央には1・2条の凹線をめぐらす。裾部には1・2条の凹線を加えるものが多く、凹線を加えないもの(276)もある。裾端部は弱く下方に曲げる。273は窯内床上出土であり、279とともに明緑色釉を被る。267、274は緑色釉を被る。他は薄く降灰を受ける程度で、淡灰色を呈し焼成のやや



甘いものが多い。坏部外面には半月状に焼け斑が残り、脚部や坏部内面には床より浮いた裾部から釉や炎が吹き込んだために偏って釉・焼け斑がみられる。266についてはA類胎土であり、坏部高が高く、外面にはロクロひだを残し、器内面には褐緑色釉を受ける。

D 2 類(281~285) B類胎土。坏部にめぐらした凸帯下に凹線は加えず凸帯が稜状となるものである。坏部内・外面に偏って緑色釉を厚く被り、また坏底部外面には半月状に無釉部分が残る。胎土は淡赤褐色に発色する。

甗(143・144・287~290、図版63) 143・144は窯体内一括検出土器中のものであり、ともに2個の坏Aおよび長頸瓶の間に載せられる形で出土した。両者は、143がカキ目を口縁部まで加え口縁端部には凹線をめぐらす、胴下部の凹線がせん孔後の加工のため途切れるという点に144との違いを認める。しかし、法量(143:口径13.8cm、器高15cm、胴部最大径9.7cm、144:12.8cm、15.4cm、9.4cm)では焼成終了までの収縮を考えるなら同一法量とみなせる。その他、口縁下端・頸部・胴部に加えられる凹線やカキ目の施文具合、胴部のクシ歯状具による刺突がともに10本単位であることなど、同一工人の手のよる製品とみなして良いものである。底部は不定方向ヘラケズリにより仕上げ、器内面には濃緑色釉を被る。287・288は器外面に緑色釉を被り、転置して焼成している。288では口縁内面周囲にも薄く釉を受けるが中心付近は丸く無降灰部分があり、瓶等の口にかぶせて焼成したものであろう。289は口径11.2cm、口唇部を内側に摘み上げる。

瓶(291~294、図版63) 口径は5~7cmを測る。口頸部は大きく外反、口唇部を上方に短く折り上げ先細りさせる。胴部は294のような球形のものとなろう。いずれも口縁部に濃緑色釉を被る。口径約7.2cmを測る294は釉を口頸部以下に被り、口唇部外側に剝離痕がめぐる。器内面には降灰を受けていないことから、口縁にかえりのある小径の蓋あるいは甗を乗せていたと推測する。

長頸瓶(295~302、図版63) 142は窯体内一括検出土器の中の一つである。口頸部は弱く外反し、口縁部にかけてわずかに立ち上げ、端部は丸く納める。胴上半から口縁部にかけてカキ目を施し、胴下半部には不定方向のヘラケズリを加える。頸部上半に3本、下半に1本凹線を加える。肩部には2本、胴部には1本凹線を加え、その間を連続刺突で埋める。296・297は同様に口縁部に3条の凹線をめぐらす。296は口縁部を受け口状に仕上げ、口唇部を先細りさせる。これは他の瓶類に属するかもしれない。298~302は胴部片である。底部はいずれも不定方向ヘラケズリによる。肩部上加える凹線には1本のもの(298・299)と3本のもの(300)がある。302の底部には「※」のヘラ刻みが認められる。300では底部に丸い無釉部分があり、壺あるいは瓶の口縁部に載せて焼成したことがうかがえる。その他、胴下半まで降灰を受けるもの、無釉状態の底部に床上に敷かれた砂が付着するものがある。

提瓶(303~306、図版63) 口頸部の形態は不明。303・304は2カ所に環状把手をもち、外面はカキ目により仕上げる。305は把手を付さず、外面に丁寧なカキ目を加え、頸部付け根周囲にもカキ目を加える。

平瓶(307~309、図版63) 307は肩部が弱く曲がり胴下半部につながるもの。308は口径7cm、やや受け口状の口頸部をもち肩部の屈曲の強いもの。いずれもロクロナデ・カキ目により仕上げる。器内底面には成形の際の連続指頭圧痕が残る。また、器表面を流れる釉の方向や側面に付着して残る窯床から、両者とも床上に横立し焼成したことが分かる。307では横立した土器の安定のために粘土塊(直径2cm)を支えとして使用している。209は受け口状の口頸部であり、外面に凹線を2条めぐらす。

横瓶(310~320、図版63) 口径13~17cmを測る。いずれも外傾する口頸部で、口唇部には面を取り、口縁肥厚帯下端に凹線を1~2条めぐらす。316~319では、肥厚は弱く口唇部の面取りも甘い。

短頸壺(図版64) 口径11cm前後のものと、8cm前後のものがある。ともに器内・外面をロクロナデ、底部外面を不定方向ヘラケズリにより仕上げる。

1類(321~327) 肩部が内外面とも屈曲をもち、ロクロひだは目立たず器表面を滑らかに仕上げるもの。胎土は白色砂粒を少量含み、淡灰~淡青灰色に発色する。割れ口はシャープで、ザラつきのある良好な胎土である。

無降灰(323・324)のほか、釉色には暗緑色(321・322)、緑褐色(325)および緑色(326・327)がある。321・322・326・327は口唇部内面に剝離痕が認められ、口縁部外面は薄く降灰し、肩部には厚く緑色釉を被る。これらは口縁部に他の器種を載せ焼成したものと推定する。325は口頸部が外傾し体上部は稜をもって体下半部と区別できるもので、器表を極めて滑らかに仕上げる。体下半には釉を被り口縁部は生焼け状態、口唇部には砂粒が付着しており、窯床上に直接倒置して焼成したものであろう。

2類(328～334) 肩部内面の屈曲は弱く、体部以下にロクロひだが明瞭に残るもの。釉色には緑色(328～330)、緑褐色(331・332)、緑色(333)、暗緑色(334)がある。焼成方法は、328～331では底部を中心に降灰を受ける。その内331は口縁部外面に釉を受け口唇部に剝離痕がめぐらされたもので、他の土器等に倒置して焼成したと推定する。また、334の底部外面調整はヘラ切り離した後まず全体に雑にナデを加え、ついで底部周縁にのみ不定方向ヘラケズリを施すものであり、底部中心にはヘラ痕が残る。

無頸壺(335、図版65) 丸い胴部と短く立ち上がる口縁部をもつと推定され、環状把手を2カ所に付し、内面には同心円状の当て具痕が残る。外面には窯壁が熔着。

壺(図版65) A類は口頸部が短く立ち上がり、口縁肥厚体部はもたない。長胴器形を呈するもの。B類は口頸部は短く外反し、内外に肥厚した口縁肥厚帯部をもつ。肥厚帯部下端には凹線を1条加える。

A 1 a類(336) 口径12.6cm。頸部中位に凹線を2条めぐらす。

A 2 a類(337～342) 口径11～13cm。口頸部中位に浅い凹線を1条めぐらす。ほとんどの土器は窯内での焼成時に破損しており、器表面及び破損面には砂粒や釉が多量に熔着する。

A 2 b類(343・344) 口径約11cm。ともに窯内での焼成時に破損しており、器表面及び破損面に砂粒や釉が多量に熔着する。344では口縁部に無蓋高坏を載せて焼成している。

A 3 a類(345～348) 口径11～13.4cm。口頸部中位に凹線を1条めぐらす。347・348では張り気味の肩部をもつ。

A 3 b類(349～351) 口径13～14cm。口頸部上位に凹線を1条めぐらす。いずれも厚く釉を被る。

B 2 b類(352～354) 口径13.8～15.6cm。張り気味の肩部をもつ。

B 2 c類(355) 口径14cm。肩の張りは弱く、口縁部の肥厚も弱い。

底部(356～359) 356・357は底部までカキ目を加えており、A 2 a類の底部となろう。358は不定方向ヘラケズリを加える。359では逆位に設置した坏A蓋を焼台として使用していることがわかる。

脚部(360) 内側にふんばり、外面に凹線を1条めぐらす。

甕(図版66～67)

A 2 b類(363～368) 363～365は口径14～17cmを測る小型のもの。365は口唇部に水平に近い面を取り、内外の叩き痕はカキ目やロクロナデによりかすかなものとなる。366～368は口径21～28cmを測る大型甕である。器肉は厚く直線的な口頸部をもち、口頸部中位に凹線を1条加える。367では内傾度の大きい面を取り、366・368は水平に近く端部に丸みのある面を取る。366・367の把手数は不明。368は口径21cmと小さいが、3方に把手を付し、肩・胴部の良く張る器形となる。

A 3 b類(361・362) 口径16cm前後。受け口状の口縁部をもち、口頸部上半に凹線を2条めぐらす。胴部の良く張る器形を推定する。361では3方に小振りの把手を付し、362の把手数は不明。

B 2 b類は口縁部形態により3類に細別できる。

B 2 b 1類(369～375) 口縁肥厚帯は厚い。弱く面取りした口唇部の面両端が丸みを帯びるもの。369は口径15cmを測る小型のもの、373・374は口径21cm前後、他は口径25cm前後を測る。また、372～375は肥厚帯下端に凹線を1条加え、さらに373・374では口唇面取り上にも1・2条凹線を加える。371は淡橙色を呈し、焼成不良。

B 2 b 2類(376～381) 口径は20～23cm。口縁肥厚は弱く、口唇部に幅のあるしっかりした面を取るもの。肥

厚帯下端に加える凹線は幅広で浅いものが多い。376・380は口唇部面内端を強くつまみ出す。378は淡橙色を呈する焼成不良品。

B 2 b 3 類(382~384) 口径33~39cm。胴部中位に最大径をもつ大型甕と推定する。大きく外反する口頸部は高さ13cm 前後。口頸部外面にはカキ目またはロクロナデ上に波状文を1・2単位めぐらし、その上下を凹線により画する。384では口頸部付け根に胴部との接合を良くするために加えた平行叩き痕が残る。

脚(387~390、図版68) どのような器種に付けられたものかは不明だが、脚を据えた状態を復元すると脚部高は内側で8.2~8.9cm、外側で9.5~9.8cm を測る。八角形の各面はへら状具により丁寧に削る。上位土器との接合部には刻みを加えているが、接着が甘かったためかいずれもこの部分ではがれている。器肉の厚さ、細部調整、屈曲の度合が異なり同一個体かは決定できないがともに灰色を呈する焼成良好品であり、同質の高坏胎土分類B類により作られる。釉は受けない。

蓋(図版68) 391は平坦な天井部からは稜をもって強く屈曲し口縁部が垂下する。392は肩部に凹線を2条加えるもので、東海地方からの系譜がうかがえる。いずれも外面に緑色釉を被る。

焼台転用土器(393・394、図版68) 床面に直接設置した坏A蓋・身である。多くは蓋あるいは身とのセット状態ではなく単体で1~2cmの厚さに敷いた床砂に埋め込んでいる。壺・甕等の大型品の焼台として使用したものでありゆがみが激しい。393は正位の身と逆位の蓋が、蓋・身合口である394では上に設置された甕(横瓶?)が熔着する。外面には厚く緑色釉を被る。

## (6) 1号窯出土土器

### 坏蓋(1)(第25・26図、図版69~71.73)

A 1 類(395~398) 口径14cm 前後。器高が高く天井部の丸い器形である。天井部から口縁部までは滑らかな曲線をえがき、口縁端は外開き気味である。体部に深いロクロひだを3・4条施し、内面ロクロひだは凹凸が大きい。胎土は白色砂粒が目立ち、暗灰~青灰色に発色、ザラつき感は小さい。明緑色釉を外面に被り、2次被熱を受けるものもある。

A 2 類(399~406) 口径13.5cm 前後。平坦な天井部から弱く折れ口縁部にいたり、口縁部は直立する。口縁部にはロクロひだを2・3条施し、内面のロクロひだは深く明瞭。天井部外面には渦状のへら切り痕が残り、体部中位から加える調整ケズリは明瞭に観察できるものが多い。胎土は白色砂粒を少量含み、淡灰~暗青灰色に発色、ザラつきは大きい。外面に薄く被る緑色釉は2次被熱により剥離する。399は外面の3ヵ所に重ね焼斑が残る。天井部にはへら痕が良好に残り、へらの刃部に直交する木目様の筋も観察できる。

A 3 類(407~410) 口径13.6cm 前後。平坦な天井部からゆるやかに体部となり、口縁部は下方に曲がる。へら切り痕は間隔の密な渦となり、口縁部にはロクロひだを1・2条加えるほかは平滑に仕上げる。内面のロクロひだは深く明瞭である。窯尻溝出土(第16図)の409は2次被熱を受け釉が剥離する。他の土器は無降灰。口径はA 2類より大きい。内外面の成形技術に両類の関連が推定できる。

A 4 類(411・412) 口径13.6cm 前後。幅の狭い天井部から体部へは滑らかに続く。口縁部は下方に曲がり直立する。全体に偏平な器形である。器外面にはロクロひだを残さず平滑に仕上げ、内面のロクロひだは浅い。天井部内面中央がとくに凹むのは、不十分なロクロ上からの切り離しのために中央部が台にくっつき引っ張られたためであろう。へら切り痕は釉(411)や被熱による剥離(412)のため観察不能。外面に被る明緑色釉(411)や、2次被熱を受けた器表面の色調、内部整形の類似より坏身A 4類とのセット関係を推定する。しかし、その胎土は砂粒をあまり含まずしまりをもち、ザラつき感の小さいものでA 4類とは異なる印象を受ける。

身A 5類に対応する坏蓋A 5類は検出できなかった。

A 6 a II類(413~415) 口径13.8cm 前後。器高は高い。中央部が突出し、天井部から口縁部までゆるやかに曲がる丸みのある器形をもつ。調整ケズリとへら切りは滑らかにつながり、器表面はへら切り部分ではザラつくほ

かは滑らかに仕上げる。内面のロクロひだは深く明瞭。胎土は白色砂粒を少量含み、淡灰～灰色に発色。焼成は良好だが、断面には小孔が目立ちザラつきは大きい。窯内床上出土の413は口径14cm、淡赤褐色を呈する焼成不良品。413と全く同じ器形・調整をもつ414は口径13.4cm、焼成良好品であり焼成による収縮度合いの違いがうかがえる。415は外面に明綠色釉を厚く被る。

A 6 b II類(416～418) 口径13.8cm 前後。6 a 類に較べ天井部は平坦で中央の突き出しは弱い。切り離し痕が渦状に残るものが多く、調整ケズリ部分は平滑さを欠く。ヘラ切り方法・口縁部形態・器内面の調整および胎土は6 a 類と同様である。416は口径13.5cm を測る窯内床上出土の焼成不良品であり、同じ器形・調整をもつ417は口径13.6cm を測る焼成良好品で外面に厚く明綠色釉を被る。他の多くは外面に明綠色釉を被る。418はゆがむ。A 6 類は器形、平滑な器表面、ヘラ切り離しおよび内面ロクロナデの手法にA 2 類との類似が見出せる。また、419～422は細片であり a 類、b 類の所属が決定できない。

A 6 I 類(423～425) 口径12.4cm 前後。II 類同様の器形・胎土をもち、a 類)天井部中心の突出するもの(423～425)と、b 類)突出の弱いもの(426～430)に分けられる。口縁部形態は外広がりのも、下方に折るものがあり、ヘラ切り離し痕ではヘラの回転痕が密な渦状に残るもの、渦の幅が広く2.5回転ほどで切り離すものに分けられるが、内面にはともに深いロクロひだを加える。釉を受けず、423では焼け斑から天井部外面の3方に坏を載せていたことが分かる。

A 7 類(431～433) 口径13cm 前後。器高は高い。幅狭で平坦な天井部が突き出し、張り気味の肩部からは滑らかに口縁部にいたる。体部は口縁端にロクロひだを残すほかは滑らかに仕上げる。内面のロクロひだは深く明瞭なもの。ヘラ切り部の調整は観察不能。胎土は淡灰～青灰色を呈し断面に気泡が少量表れるが、砂粒の含みの少ない緻密な胎土であり、手触りはザラつく。器外面には緑色釉を被る。

A 8 類(434～442) 口径13cm 前後。調整ケズリとヘラ切りを丁寧に加え天井部と体部との境は明瞭。体部は肩が張り、口縁部は内湾する。器表面を平滑に仕上げ、内面のロクロひだは浅い。器肉は天井部から口縁端まで厚い。胎土は淡灰～灰色を呈し断面には小気泡が表れるが、砂粒をほとんど含まない緻密なもので、手触りはザラつく。釉はほとんど受けず、生焼けのもの、部分的に焼成不良のものが多い。

A 9 類(443～449) 口径は12.5cm 前後。幅広で平坦な天井部から弱く折れて体部となり、口縁部は下方に曲げる。器外面は滑らかに仕上げ、内面ロクロひだは浅い。ヘラ切り離し痕は平滑で、ヘラ痕の観察できるものはない。天井部と体部の境にはヘラ切り離し前のアタリ痕がよく残る。器肉は口縁部まで厚く、とくに体部から突き出した天井部は厚さ1cm 前後を測る。この天井部分の突出は調整ケズリが十分に加えられなかったためと考えられ、443・444では坏成形中途(調整ケズリ前)におけるロクロ上での天井部(底部)幅を残すものと推定する。本類でこの天井部は直径7.5cm 前後を測る。胎土はA 8 類に類似する。外面に緑色釉を被るもの(444・445・449)、焼成の甘いものがある。

A 10 類 口径12.5cm 前後。天井部に幅狭の平坦部をもち、口縁部を外開き気味に仕上げるもの(a 類450～456)と、天井平坦部幅が広く口縁部を下方に曲げ直立させるもの(b 類457～459)がある。また、ヘラ切り離し痕では渦となるもの、切り離し後に雑なナデを加えるものなどバラつきがある。内面のロクロひだは微かであり、成形の際にロクロナデを十分に加えなかったようで、内面中央部分のみ強くナデつけ、この部分が特に凹むものも多い。器肉はA 9 類と同じく肉厚で、胎土は後述する高坏胎土分類B 類であり、淡灰褐・淡赤褐色を呈する。B 類胎土は断面に気泡が目立ち、空気膨れの著しいものだが、このしまりの悪さは胎土の質のみならず、このロクロナデの甘さにも起因するかもしれない。450は明綠色釉、451・453・457は緑色釉を天井部外面に被る。459は褐綠色釉を口縁部外面に被る。他は無降灰。

A 11 類(460～466) 口径13cm 前後。幅狭の平坦面をもつ天井部は上方へ突き出す。天井部から体部へは滑らかに続き、口縁部は下方に曲げ端部を外方に摘み出す。調整ケズリ・ヘラ切りともに渦状痕を残さず平滑に加え、

内面ロクロひだは中央部分でとくに間隔が密となる。天井部が突き出すのは切り離し時に、ヘラ切りを中央部まで十分加えないまま土器をロクロからはずしたため、ロクロ台に密着した部分が引っ張られたためであろう。焼成はいずれも良好。胎土は青灰色を呈し、降灰は受けない。この類とセットとなるの身は決定できなかった。

坏身(1)(第25・26図、図版69～72)

A 1類(467) 口径12.4cm。平坦な底部から弱く折れて口縁部にいたる略三角形の器形を呈し、器外面には深いロクロひだを加える。窯内床中出土であり、内外とも暗灰色を呈し、2次被熱により緑色釉の剥離が目立つ。天井部調整は不明。胎土・色調および器表面の調整より蓋1類とセットと推定する。

A 2類(468～475) 口径12.2cm 前後。平坦で幅広の底部から曲がり口縁部に至る偏平な器形を呈する。口縁部には浅いロクロひだを加え、他の部位は滑らかに仕上げる。内面のロクロひだは浅い。立ち上がりは途中で上方に折り上げ、先細りさせる。天井部に雑なヘラ切りを加え、胎土・調整・色調は坏蓋A 2類と同様のもの。器外面には緑色釉を被るが2次被熱を受け釉の剥離が激しい。471は坏蓋A類を逆位にした上に身を正位に置き焼成するもので、身内部に釉がたまる。

A 3 II類(476～479) 口径12.4cm 前後。2類と同様、底部から体部へは滑らかに続き、器内面にはナデ痕を渦状に加える。立ち上がりは端部を丸く納める。灰色を呈する器面に2次被熱はみられない。480・481は口径の小さいものである。色調・調整ケズリ・内面調整の類似より坏蓋A 3類とのセット関係を推定する。

A 3 I類(480・481) 口径約11.3cm。A 3 II類と同様の器形、調整をもつもので、立ち上がり、受け部も小振りとなる。

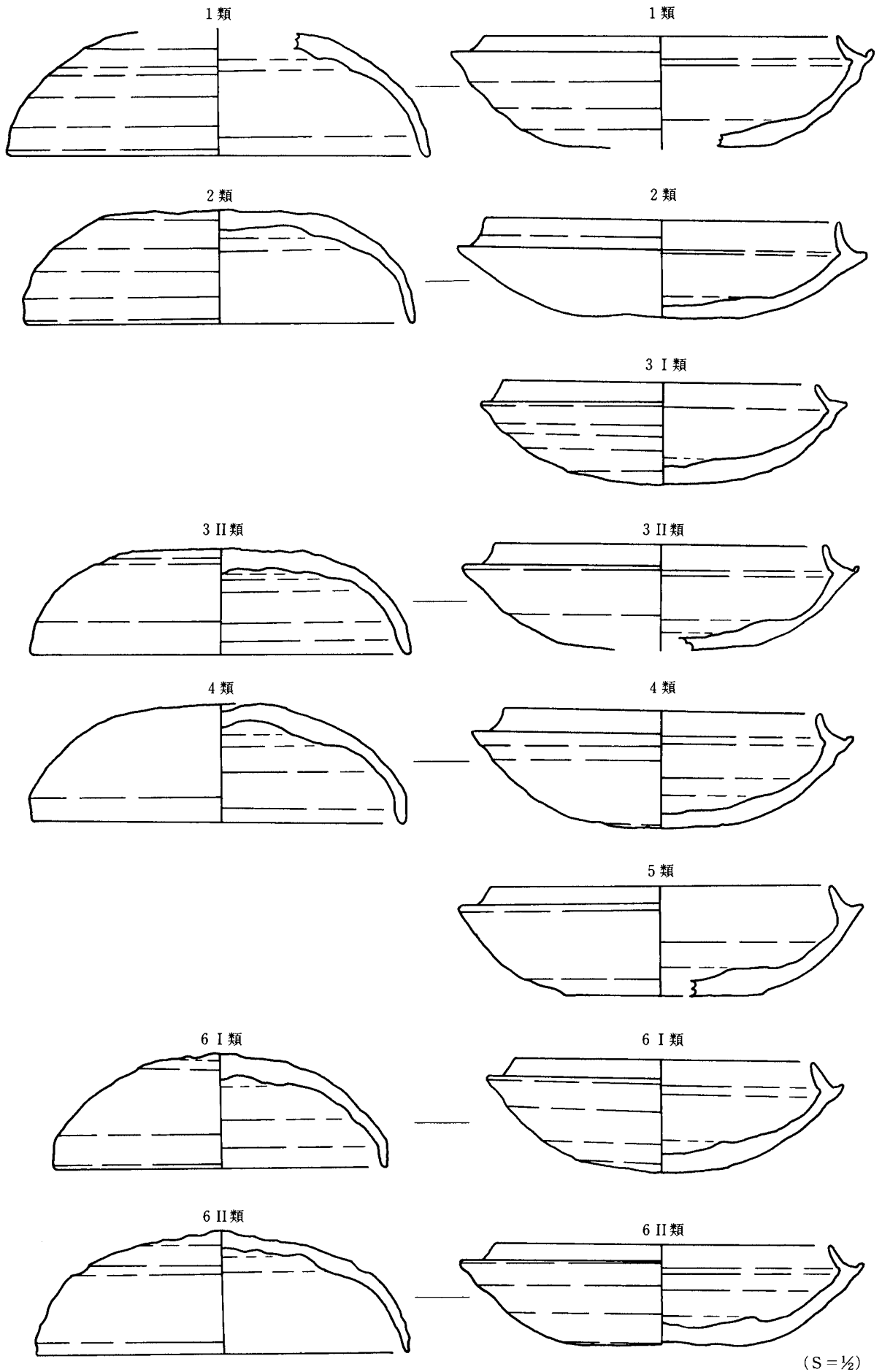
A 4類(482～488) 口径11.8cm 前後。やや丸みをもつ底部と体部の境は不明瞭。口縁端外面にはロクロひだを1条加え、他の部位は滑らかに仕上げる。A 3類と同様の胎土をもつ。多くは灰白色を呈し無降灰だが、2次被熱を受け外面に被る明緑色釉が剥離するものもある。

A 5類(489) 口径12.3cm。窯尻溝内出土である(第16図)。幅広で平坦な底部から折れ、腰の張る体部となるもので偏平な器形を呈する。器内面は体部中位より上方に曲がり滑らかに立ち上がり部となる。胎土は白色砂粒を少量含み、灰色に発色、ザラつきは大きい。釉は被らず、器面は2次被熱を受ける。このA 5類とセットとなる蓋は検出できなかった。

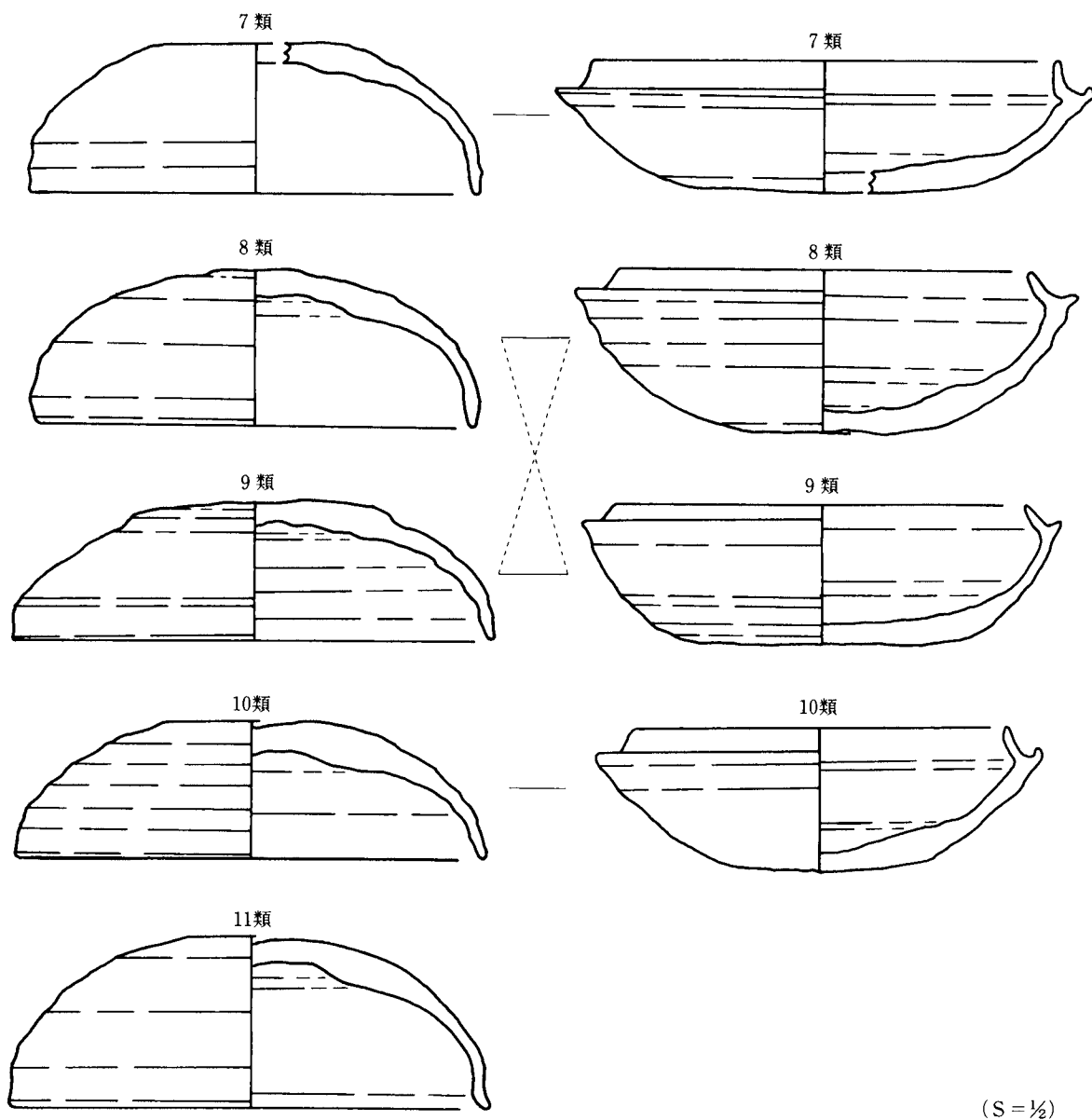
A 6類(490～529) I類口径11.2cm 前後(511～529)、II類口径12.5cm 前後(496～510)のもの。ヘラ切りにより幅狭の平滑な底部をもち、底部からは折れて体部となる。外面には全体に浅いロクロひだを加え、内面のロクロひだは深い渦となる。立ち上がりは外湾し端部を丸く納めるものが多い。ヘラ切り痕より、ロクロ上から1.5回転ほどで切り離したことが観察でき、調整ケズリはロクロナデにより消される。505は黄橙色を呈する焼成不良品。I類では立ち上がりが小振りとなり、ヘラ切り幅も狭いが器内面にはII類と同様の深いロクロひだを加える。外面に明緑色釉を被るもの(492～495・506)、緑色釉を内面に被るもの(497)があり、外面に釉を受けるものが多い。胎土・底部(天井部)内外の調整の類似からI類、II類それぞれに坏蓋A 6 I類、II類とのセット関係を推定する。

A 7類(530～542) 口径12.2cm 前後。器高は低い。幅の広い平坦な底部からゆるやかに曲がり体部となる。外面は口縁端にロクロひだを加えるほかは平滑に仕上げ、内面のロクロひだは浅い。立ち上がりは途中で上方に折り上げるものが多く、立ち上がり高は高い。天井部ヘラ切り痕は渦となって残る。釉は明緑色(530)、緑色(532・533)、無降灰(535・536・538～542)、535・537は淡橙色を呈する生焼け品。胎土の類似に加え、身と熔着する431からも坏蓋A 7類とのセット関係を推定する。

A 8類(543～552) 口径11.8cm 前後。器高は高い。底部は丸みをもち、底部から滑らかに腰の張る体部となる。口縁部には浅いロクロひだを加え、内面ロクロひだは浅い。つば部は引出しが弱い。つば部から滑らかに続く立ち上がりは内傾し端部を丸く納める。調整ケズリ幅は広く、その後にはナデは加えない。544～546・548は正位で焼



第25図 1号窯坏A分類(1) (一はセット関係を示す)



第26図 1号窯坏A分類(2) (一はセット関係を示す)

成しつば部に明緑色釉を被る。胎土・色調・調整の類似から坏蓋A 8類とセット関係を推定する。また、A 8類はへら切り手法や立ち上がり形態、つば部を丸く仕上げるという点にA 5類土器との関連が指摘できる。

A 9類(553・554) 口径約11.5cm。平坦で幅広の底部が突出し、底部と体部の境は明瞭。外面にロクロひだを残さず口縁端まで滑らかに仕上げる。つば部から滑らかに続く立ち上がりは内傾し端部を丸く納める。553は焼成がやや甘く、554はつば部に明緑色釉を被る。A 8類と器形・胎土が近似し、A 9類の突出する底部は調整ケズリおよびへら切りの十分に加えられなかったものと見ることもできる。また本類ではこの突出部の直径は7.5～8cmを測る。

A 10類(555～568) 口径11.6cm 前後。幅広で平坦な底部から折れて体部となる。ロクロひだは目立たない。他類に比べ器肉は厚く、外湾する立ち上がりも端部まで肉厚であり端部は丸く納める。へら切り痕が渦状に残るもの(556～559)、調整ケズリが不十分で底部の突き出すもの(560・561)、渦を残さず平滑に仕上げるもの(563)とバラエティがある。細分の可能性もあるが、その胎土はいずれも器内・外面に空気膨れやゆがみの目立つ高坏胎土分類B類であり、全体に技術的に未熟な製作者の手によるものと推定する。胎土は灰色、青灰色あるいは黄灰色に発色する。この胎土の発色の違いは同一粘土の被熱度(酸化・還元度)あるいは風化度の違い(巻頭図版4)によ

る変化と考える。釉は明緑色(562・563)、緑色(555・560・564・565)がある。560は身のみを床上に逆に設置し焼き台としたもので、内面に床砂が付着し、外面には台付長頸瓶を載せている。A10類は胎土・調整より坏蓋A10類とセット関係を推定する。

#### 坏蓋(2)(第27図、図版74・75)

1号窯坏蓋B類はすべて偏平なボタン状つまみをもつ。

B1類 口径10cm 前後。丸みのある天井部であり、器表面を滑らかに仕上げる。a類)坏受け部が滑らかなもの(569～574)と、b類)坏受け部に平坦面を作るもの(575～582)がある。調整は569は天井部外面にロクロケズリを施し、幅のあるより偏平なつまみを付す。ほかは内外面ともロクロナデにより仕上げる。胎土は坏身B5類や鉢と同様の高坏胎土分類B類であり、淡灰褐色に発色する。また、強環元したものは暗青灰色に発色する。多くは緑色釉を被るが570・571・577では暗緑色釉を被る。多くが天井部外面に厚く釉を被り、身とセットで正位で焼成している。576は正位の身に蓋を逆さに載せ焼成している。569ではさらにその上に身を逆さに載せ焼成している。

B2類(583～585) 口径10cm 前後。丸みのある天井部であり、器表面は滑らかに仕上げる。坏受け部およびかえりの造りが大柄で、長く伸びるかえり端部は丸く納める。胎土は高坏胎土分類B類であり、淡灰褐色に発色する。緑色釉を天井部外面に被る。胎土・釉色より坏身B5類とのセット関係を推測する。また、図化しなかったが坏身B5類と本類蓋のセットを正位に2段重ね焼成したものもある(図版74)。

B3類(586・587) 口径11cm 前後。丸みのある天井部であり、器表面は滑らかに仕上げ、つば部を上方に曲げる。受け部に平坦面を作り、器肉は端部まで厚い。胎土は白色砂粒を少量含み、灰褐色を呈する。緑色釉を外面に被り、釉とともに砂粒が付着する。

B4類 平坦な天井部をもち、口縁部外面に約1.5cm と幅広のロクロひだを加えるもの。法量により3類に細分できる。

B4I類(588～593) 口径6cm 前後。断面三角形の端正なかえりをもち、口径に比べつば部の張り出しが大きい。天井部外面にはカキ目を施す。胎土は白色砂粒をわずかに含み、黒色吹き出しは目立たず、多くは淡灰色に発色する。胎土より坏身B1類、あるいは壺とのセット関係を推定するが長頸壺の蓋となるものもあろう。

B4II類(593～596) 口径9cm 前後。坏受け部は滑らかに仕上げ、つば端は下方に曲げ、端部を丸く納める。天井部外面にはカキ目を施す。緑～暗緑色釉を外面に厚く被り、胎土・色調はB4I類に同じ。594は外面には釉を受けず、かえり内面に釉を受ける。焼成は甘く蓋・身をセットにし倒置したものと推定する。

B4III類(597～599) 口径10cm 前後。天井部外面にはカキ目を加えずロクロナデにより仕上げる。器外面には厚く緑色釉を被る。口径、胎土等より坏身B3類とのセット関係を推定する。

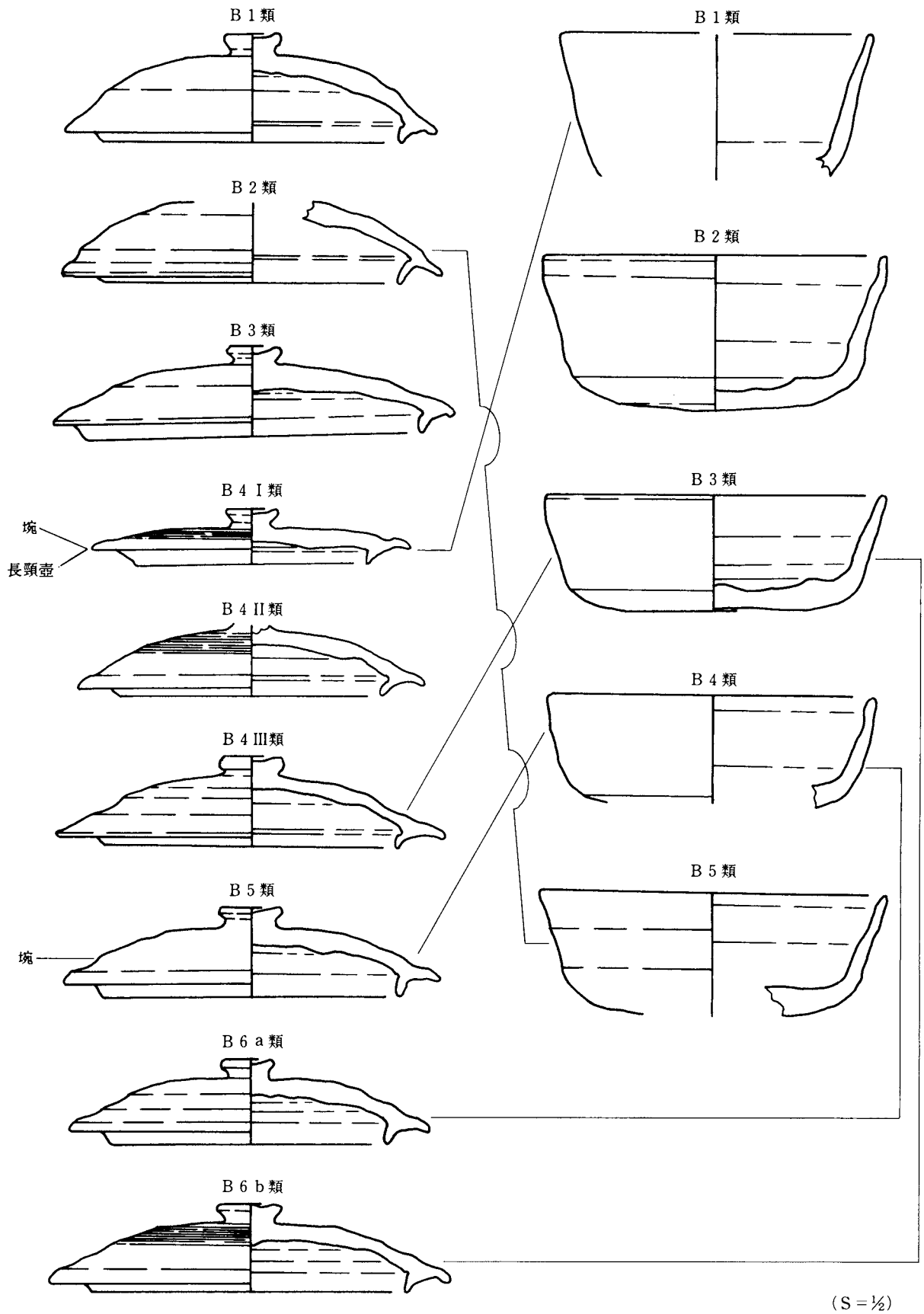
B5類(600～603) 口径約10.3cm。平坦な天井部をもち、口縁部外面に幅の狭いしっかりしたロクロひだを1条加える。坏受け部は平滑で、かえりは先細りする。器内・外面をロクロナデにより仕上げる。胎土は精緻なものであり、白色砂粒をわずかに含み、淡灰から淡青灰色に発色。その割れ口はシャープで鋭さをもち黒色吹き出しも少ない。多くは天井部外面に緑色釉を厚く受ける。坏身B4類や壺も同様の胎土でシャープな破断面をもち、口径からもセットとなる可能性が大きい。

B6類 平坦な天井部をもち、口縁部外面に凹線を2条めぐらす。

B6a類(604・605) 口径9cm 前後、つまみ径1.9cm。坏受け部は平滑で、かえり端部は先細りさせる。胎土は白色砂粒を含み黒色吹き出しはめだたず、灰～暗灰色を呈する。釉は2次被熱により剥離する。同様に2次被熱を受けるものが坏身B4類の中に存在し、ともに器内面のロクロひだが微かであることから、これとのセットを推定する。

B6b類(606・607) 口径10.8cm、つまみ径2.3cm。a類と同様の受け部形態だがより大柄であり天井部外面にはカキ目を加える。胎土は6a類と同様である。褐緑～緑色釉を被り坏身B3類とのセット関係を推定する。





第27図 1号窯坏B分類(一はセット関係を示す)

B 7 類(608・609) 口径約20cm、つば径約23cm、かえり高0.5cm を測る大型の蓋であり、鉢型器形とセットとなろう。鈕は径4cm、高さ1.5cm を測る。天井部外面にはカキ目を施し、他の部位にはロクロナデを加える。坏受け部には平坦面を作り、かえりは下方に短く折り出す。胎土は白色砂粒を少量含み、気泡・黒色吹き出しが表れる。天井部外面に緑色釉を厚く被りゆがみが大きい。

#### 坏身(2)(第27図、図版75)

B 1 類(610・611) 口径10.2cm、体部高約5cm。底部外周に沿って施されたロクロケズリにより底部と体部は区別でき、外傾する体部は表面を滑らかに仕上げる。胎土は砂粒を少量含み、淡青灰色に発色する。暗緑色釉を器外面に被る。

B 2 類(612～615) 口径約11.5cm、体部高は5cm 前後。底部からゆるやかに体部となり、体部中位で外反、口縁部で上方に立ち上げる。ロクロケズリを底部周縁にのみ加え、底部中心はへら切り後不調整である。胎土は白色砂粒をわずかに含み、黒色吹き出しは目立たず、灰～淡灰色に発色する。外面には暗緑釉を被り、口唇部には剥離痕がめぐる。また、底部外面には3ヵ所に重ね焼による剥離痕が残る。

B 3 類(616～619) 口径約11.5cm、体部高は4cm と低く体部の外反度は小さい。胎土は白色砂粒をわずかに含み、黒色吹き出しは目立たず、淡灰色に発色する。口唇部に剥離痕はみられず器内には降灰を受け、外面には緑～淡緑色釉を被る。また、616は倒置して焼成している。B 2・3 類ともに底部内面に強くロクロナデを加えており、深い明瞭なロクロひだが残る。

B 4 類(620) 口径10.8cm、体部高3.5cm。へラケズリを施す底部からゆるやかに立ち上がり、外傾する体部となり、口縁端は丸く納める。口唇部には剥離痕がめぐる蓋を載せて焼成している。体部外面に緑色釉を被り、胎土・釉はB 2 類に類似する。

B 5 類(621・622) 口径約11cm、体部高約3.5cm。底部からゆるやかに立ち上がり外傾する体部となるもので、口縁部はわずかに外反し、口唇部には剥離痕がめぐる。胎土は高坏胎土分類B 類であり、鉢と同様の淡灰褐色を呈する。緑色釉を体部外面に被る。

壺(623・624、図版75) 口径約10cm、器高約8cm を測る。全面に不定方向ケズリを施した底部からゆるく曲り外傾する体部となり、口縁部は直立、あるいは、わずかに内湾させる。623では体部中位より上に3条の、624では体部中位に2条の凹線をめぐらす。胎土は高坏胎土分類B 類であり、灰色に発色する。坏身B 6 類の濁緑色釉が底部外面を除く器内・外面に被り、蓋は乗せていなかったようである。

鉢(625・626、図版75) 625は、口径約13cm。底部と体部は稜を持って画される。626は底部から滑らかに体部となる。いずれも体上半で外反し、口唇部は丸く納め、胴部中位には2条の凹線をめぐらす。底部調整は不明。胎土は高坏胎土分類B 類であり、淡灰褐色に発色する。内面は無降灰であり、625では濃緑色釉を、626では緑色釉をともに器外全面に受けており、転置して焼成している。また、626では底部内周に沿って他の土器の溶着痕がめぐる、鉢どうしの重ね焼きを行ったと推定する。

#### 高坏胎土分類(巻頭図版4)

1号窯の高坏に対しても2号窯の場合と同様の視点により胎土に観察を加えた。

A 類 0.1mm 大の白色砂粒をわずかに含むものである。割れ口はシャープなものが多く、破断面は凸凹するものが多い。また断面には気泡を少量含み、手触りはザラつく。A 類は胎土の色調が淡灰褐色を呈し、破断面に融解しガラス状となった砂粒が吹き出し破断面表面を覆うもの(A 1 類)、青灰～灰色に発色し、ザラつきは大きく、胎土が良好に観察できるもの(A 2 類)、灰白色を呈する生焼け状態のもの(A 3 類)に分けられる。しかし、同一土器でも部位により焼成状態が違い上記細分類が混在するものがあり、細分類の決定できないものもある。ただ、A 1 類は2次被熱を受けたものとしてよい。また色調では風化する破断面では黄褐～淡青灰色となるが、新鮮な破断面では淡灰～青灰色に発色するものが多い。

B類 0.1mm 大の白色砂粒を多く含むものである。焼成は堅ちだが、器表には2mm 程度からの空気膨れが特徴的に現れ、断面には気泡が顕著に見られる。また、この胎土による土器のほとんどはゆがんでおり、割れ口も不整で破断面の凹凸も大きい。色調は淡赤褐色を呈するものが多い。部位により暗灰色に発色しこの部分ではやや良好な焼き上がりとして観察される。

高坏蓋(図版76) 全て肩部に凸帯(稜)を1条めぐらすものだがそのつまみ出しは弱く、凸帯上位に凹線を加えることで凸帯を造り出すものが多い。

1類(637) B類胎土。2号窯高坏蓋1類(194)と同様、天井部外面に不定方向ケズリを施すもので、つまみは付きにくい。丸みのある天井部をもち、肩部稜以下、口縁部を垂下する。器内外面に釉を受けゆがむが同じB類胎土による高坏蓋3類に比べ丁寧な造りで空気膨れは表れない。

2a類(627・628) 平坦な天井部をもち外面をロクロナデのみで仕上げる。627はB類胎土で作られ釉は受けにくい。他のB類胎土による蓋同様、器表に空気膨れが目立ち、器内面のロクロナデは不良。628は凸帯上位に凹線を加え他より凸帯つまみ出しが強いもので、青灰色を呈し焼成がやや甘い。2a類は同様の色調・焼成をもつ高坏A2類とのセット関係を推定する。

2b類(629～636) A類胎土。平坦な天井部に径2.1～2.5cmを測る小径のつまみを付し、天井部外面にはヘラケズリ後カキ目を加える。器表に吹き出た砂粒によりザラつく感触や器表に垂れる緑色釉、あるいははじけたようにかすかに被る釉より高坏A1類とのセット関係を推定する。

3類(638～645) B類胎土。幅の狭い天井部平坦面から折れゆるやかに下り、内湾する口縁部に到る器形をもつ。体部中位にめぐらす稜は摘み出しの弱いものである。偏平つまみは径2.4～3.3cm、高さ0.5～0.7cmと造りに幅をもつが、器形との関連は認められない。天井部外面はロクロケズリを施す。器内面では口縁部にロクロナデが加えるものの、中心部では成形時にロクロ上で粘土を押し広げて以後強いロクロナデは加えられず(加えられても弱いもの)、不定方向のナデを施すのみである。このためか器肉は天井部で最大1.5cmと厚く、大方の土器に空気膨れ、焼きゆがみが目立つ。また、天井部外面には焼台として用いられた坏A身・蓋が剥離痕を残して、あるいは熔着して残る。

#### 焼台転用土器(646・647、図版76)

646、647は高坏焼成時の台として用いられたものであり、内面にはつまみの剥離痕が残り、下位の坏蓋外面には床砂が付着する。坏身の口径は10～10.5cmを測り、その型式は蓋・身ともに高坏A3類と同様の胎土により作られた坏A10類である。天井部に輪状に残る重ね焼き痕の外側にうすく緑色釉を被る。646・647、高坏蓋2b類と溶着した636より、有蓋高坏の焼成方法は逆位の坏蓋に坏身を正位にして重ね窯床に置く。そして、この上に蓋を載せた状態の有蓋高坏を転置して焼成するものである。

#### 高坏(図版77～79)

A1類(648～654) A類胎土。649は脚基部内径2.4cm測る。基部内径1.5cmと小径の648も他と同様に厚い緑色釉を受けることからA1類に加えたが、A2類の坏部かもしれない。坏部は先細り気味の立ち上りをもち、脚部は棒状部で大きく開き、裾部の広がり弱い。裾端部は下方に短く折るもので、端部まで器肉の厚い安定感のある器形である。裾端部までカキ目を施し、脚棒状部、裾部それぞれ2条の凹線をめぐらす。焼成は良好。坏底部外面・脚部内面に厚く緑色釉を被るものが多い。

A2類(655～658) A類胎土。坏部形態の分かるものはない。大きく広がる裾部をもち、裾端部形態および凹線の加え方にバラエティがある。655、656は裾端部を下方に短く摘み出し、棒状部に2条、裾部には幅の狭い凹線を2条めぐらすもので、焼成は甘く黄白色を呈する。657は断面4角形を呈する裾端部を下方にわずかに曲げるもので、裾部には凹線を加えない。焼成は良好。内面に被る緑色釉には剥離が目立つ。658は裾端部を下方に弱く曲げ先細りさせ、裾部に幅広の凹線を3条めぐらす。青灰色を呈し焼成はやや甘く釉は受けにくい。

A 3類(659) B類胎土。基部内径は1.2cm。器肉は厚く、器表には空気膨れが目立ちゆがみが大きい。立ち上りの形態は不明。脚付け根部分の観察から3方にうがたれた透しは不平等間隔に加えられ、また、内部まで貫通しない部分もあることがわかる。底部外面に緑色釉を厚く被る。

B 1類(660・661) A類胎土。脚基部内径は0.9cm。脚裾の広がり弱く、角張らせた端部下端をわずかに下方に摘み出すもの。外面に緑色釉を被る。

B 2類(662) A類胎土。脚裾端部を下方に折り曲げるもの。外面に明緑色釉を被り、2次被熱により釉は剥離する。

B 3類(663) A類胎土。透かしは上段・下段とも縦方向に刻みを入れるのみである。脚底径は小さく、裾端を下方に短く折る。土器は透かしを境に2つに割れており、一方は釉を受けず、もう一方は2次被熱し裾部内面および破断面に緑色釉を被る。2次被熱する側がより収縮しており、うまく接合しない。

664は2方透しをもつ脚部片であり類別不能。焼成は甘く黄白色を呈する。

1号窯高坏C類は同様の形態をもちながら、脚部調整にはロクロナデにより仕上げるもの、カキ目を加えるものがあり、前者をa類、後者をb類とした。

C 1類(666～673) A類胎土。胎土・焼成・釉調より坏部と脚部のセット関係が決定できる。坏底部外面および脚部をロクロナデで仕上げるもの(C 1 a類666～669)、カキ目を加えるもの(C 1 b類670～673)に分けられる。坏部は下段の凸帯を丸味を持って造り出し、この凸帯下に凹線を加える。脚部は大きく広がる裾をもち、裾端部は下方にゆるく曲げる。裾部には1・2条の凹線を加える。また、焼成・釉調では、2次被熱を受け明緑色釉が剥離するもの(666、667)、剥離を受けないもの(668)、灰白色を呈し焼成の甘いもの(669)、胎土に砂粒が目立たず淡青灰色の堅かな焼成で、釉をほとんど受けないもの(670、671、673)がある。670、671には、坏部内面に板状具による押捺整形痕が残る。

C 2類(674～676) A 2類胎土。坏部は凸帯を上下ともしっかりとつまみ出すもので、脚部は端部を下方に折り曲げ先細りさせる。675は裾部内面に厚く被る明緑色釉が2次被熱により大きく剥離し、676は焼成が甘く灰白色を呈する。これらの脚部の造作は高坏B 2類と同様である。

C 3類(677～679) A 2類胎土。C 3 a類(677・678)、C 3 b類(679)に分けられる。坏部形態は不明。脚部は裾端部を下方に短く折り先細りさせるもので、裾部にはロクロひだを残す。釉色は緑色(677)・明緑色(679)であり、678は焼成が甘く灰白色を呈する。

C 4類(680～682) A類胎土。脚裾部径は10cm前後と小径である。坏部形態は不明。先細りする裾端部を短く下方に折り、裾部表面は滑らかに仕上げる。C 4 a類(680、681)は緑色釉を被り2次被熱を受ける。C 4 b類(682)は明緑色釉を被る。

C 5類(683～685) B類胎土。C 5 a類(683～687)、C 5 b類(688・689)に分けられる。坏部形態には底面が下方に突き出し、坏部下段の凸帯は角張るもの(683)、丸味をもつもの(684)があり、脚裾端部形態には折るもの(685)、わずかに曲げるもの(687)がある。また、687では脚裾部に加えた凹線を大きく越えて透かしがうがたれるなど、細部調整にバラつきがある。しかし、いずれの土器も器肉は特徴的に厚く、また1個の土器の同一部位でも器厚は均一に作られておらず技術的に未熟な印象を受ける。坏部内面には押捺整形痕が残る。a類では外面に緑褐色釉を被り、b類では裾部内面を中心に明緑褐色釉を被る。b類の胎土は灰黄色に発色するものでa類より良好な焼上がりである。

665はc類高坏坏部にかえりをもつ蓋を載せており、蓋天井部外面には緑色釉を被る。

B 1類(690～695) A類胎土。坏部凸帯下に凹線を1条加えるものであり、a類幅のある凹線となるもの(690～693)、b類幅の狭い凹線となるもの(694・695)に分けられる。裾部には1・2条の凹線を加えるが、裾部に凹線を持たないものもある(692)。裾端部はゆるく下方に折り摘み出すことで成形する。690・692・693は坏部

外面、脚部内・外面に厚く緑色釉を受けており、斜置あるいは倒置して焼成している。695の脚基部径は約0.4cm、焼成がやや甘く淡青灰色を呈する。

D 2 類(696・697) A 類胎土。脚基部径約0.4cm。坏底部と口縁部が明確に区別でき、摘み出しによる坏部凸帯は後に加えたロクロナデにより潰れ目立たない。器肉は坏底部・脚部ともに厚く仕上げる。696・697ともに破断面まで被る緑色釉は2次被熱により剥離する。

D 3 類(698～703) A 類胎土。口径12cm 前後。坏部に稜をもたず、器形となるもの。坏部内・外面をロクロナデにより仕上げる。胎土は淡褐色を呈し、698・700が坏部内面に暗緑色釉が偏って被るほかは釉を受けない。699は焼成がやや甘いものである。

D 4 類(704・705) A 類胎土。低脚のもので脚基部内径2cm を測る。裾部は大きく開き、裾端部は下方に折る。外面にはロクロひだを残し凹線は加えない。704は釉を受けず、705は緑色釉を微かに受けるが2次被熱し剥離する。ともに淡灰色を呈する。高坏の製作法方について、大方の高坏ではそれぞれに製作した脚部に坏部を載せ接着していると考えられるが、905では脚部のしぼりによるラセン状のしわが坏部内面にもおよび、坏内面中心部に渦状の凹みが残る。この土器では、脚部成形途中で坏部と接着しさらにしぼり込みを加え完成品としたようである。

E 類(706・707) A 類胎土。坏部に立ち上がりをもつ有蓋高坏だが、脚部に透かしはうがたない。脚基部内径は1.8cm を測る。淡灰色を呈し、内・外面および破断面には緑色釉を被り、2次被熱を受ける。脚部の開きや脚基内部径からあるいはD 4 類の坏部かもしれない。

壺(708～719、図版79) 器形の全体がうかがえる資料はない。すべて口縁下部に凹線を一条加えるものだがこれより上、口縁部高の低いもの(708～711)と高いもの(712)がある。711は凹線下にへら状具により縦方向の平行刻みを加える。胴部には2条の凹線をめぐらせ、その間にクシ歯状具による刺突を加えるもので、718および脚をもつ719では下位の凹線は浅く微かなものである。底部は不定方向へらケズリを加える。釉色は明緑色(708・712・715・716)、緑色(710・711・713・717～719)に分けられる。焼成は717が転置している他は全て正位で行い、大方は床直に設置しているが、718では口径約9cm の瓶の口縁部に載せ焼成している。

瓶(720・721、図版79) 口唇部を外側に肥厚するもので、ともにゆがみをもつ。720は内外面に明緑色釉を、721は内面に緑色釉を被る。

長頸瓶(722～733、図版79) 口頸部下半まで残るものは少ない。口頸部に凹線を加えるものでは、2条めぐらすもの(722～724)と3条めぐらすもの(725～727)がある。いずれも外傾する口頸部で、723・726ではやや受口状を呈する。727は頸部にへら刻みを加え、728～730は外面をカキ目のみで仕上げるもので、提瓶の口頸部かもしれない。器肉は厚く不均等であり、高坏胎土分類B類により作られる。727～730では内面は降灰を受けず口唇部外側には剥離痕がめぐる。小径の蓋あるいはその他の土器を載せていたことが分かる。731～733は胴部片。731は肩上部に2条、732は3条の凹線をめぐらす。また、731は肩部の1ヵ所には坏A身が正位で熔着し残り、1ヵ所には剥離痕が残る。胴部の降灰の観察からはほぼ水平に設置されていたことがうかがえ、上記の剥離痕と熔着土器から肩部に坏Aを置いていたと推測する。

提瓶(734～742、図版80) いずれも高い口頸部をもち、734・739は口縁部に2条の凹線を加える。器形を復元できるものはないが、鼓状の胴部の片側を偏平にし、もう一方の側を膨らませるものであろう。胴部の仕上げ調整には、カキ目の他に、偏平面をロクロケズリにより仕上げるもの(735・737)がある。把手には環状のもの、ボタン状のもの2種が存在する。742は胴閉塞部であり外面にカキ目を加える。

平瓶(743～749、図版80) 749は口径8cm。やや受け口状の口頸部であり、口唇部に面を取る。肩は張らず胴下半で強く折り平坦な底部とするもの。外面にはカキ目を施し、頸部付け根周囲には8個の小ボタンを貼り付ける。743～746は口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、平瓶の口頸部と推定する。747は小型の平瓶である。748は器内底面に連続指頭圧痕が残る、外面にはロクロケズリを施す。熔着土器により口唇部を窯床に埋め込んだ坏A身

に正位に据え焼成したことが分かる。

**横瓶**(750~772、図版80) 口径は750が約11cmの他は13~16cmを測る。口唇部形態により、a類)口唇部に内傾する面を取り、口縁部肥厚帯下端に凹線をめぐらすもの(750~758)、b類)口唇部の面取りが甘く、口縁端部が丸みをもつもの(759~767)、c類)口縁端を上方に短く折り上げ、端部に幅の狭い面を設け凹線は加えない(768~770・772)の3類に大別できる。口縁部に加える凹線をみると、a類では2号窯出土品と同様にしっかりとした凹線であるが、b類では凹線は浅く後に加えるナデにより隆線状となるものが多いほか、凹線を持たないものもある。焼成方法では762が横立して焼成していることが釉の流れから分かる。

#### **鉢**(図版80)

A類(773) 口径18.7cm。丸い体部をもち、口縁部には内傾する面を取り、面外端をつまみ上げる。器外面にはカキ目を加え、内面はロクロナデにより仕上げる。焼成は甘く灰白色を呈する。

B類(774・775) いわゆるすり鉢器形を呈するもの。774は体部および底部外面を不定方向のヘラケズリにより仕上げ、内面刺突は加えないようである。775は体部および底部外面をナデにより仕上げ、器内面には刺突を加える。ともに焼成はやや甘く、淡青灰~灰白色を呈し、降灰は受けない。

#### **短頸壺**(図版80)

1類(776・777) 口径9cm。短い口頸部が外側に開き肩の良く張るもの。胎土は白色砂粒を多く含み、気泡が少量入り、青灰色に発色する。破断面は凹凸をもちザラつき感がある。776は器内・外に明綠色釉を被り、2次被熱を受ける。777は外面に綠色釉を被る。

2類(778・779) 口径11.8cm、口頸部が高く肩の張りの弱いもの。胎土は1類に同じ。ともに器外面に綠色釉を被るが、779は底部を中心に釉を受け、口縁部には剥離痕がめぐり、倒置して焼成したものである。

3類(780) 口径10.5cm、口頸部が直立するもの。底部周縁にのみ不定方向ヘラケズリを加え、中心はヘラ切り離し後不調整でヘラ痕が観察できる(図版80)。高坏胎土分類B類により作られ、淡灰褐色に発色する。器内は口縁部まで厚く造りの離なもので、内外面に明綠色釉を受け、底部には床砂が付着する。

#### **無頸壺**(図版80)

A類(781) 口唇部を丸く納めるもので、2条の凹線を3単位加える。側面には窯壁が熔着する。

B類(782) 口唇部に面を取るもので、2条の凹線を2単位カキ目上加え、底部内・外には叩きの痕が残る。また、底部外面には逆位の坏A身が熔着しており(図版80)これを焼台として焼成したのであろう。A・B類とも高坏胎土分類B類で作られ、内外面とも綠色釉を受ける。

#### **壺**(図版81~82)

A 2 b類は口頸部は外反のち中位で上方へ立ち上がる形態をもち、口頸部内形はやや受け口状を呈する。肩の張りの弱い長胴の器形をもつと推定する。胴部への調整ではロクロナデにより仕上げるもの、カキ目を加えるものがある。口頸部への施文手法により4種に細分できる。

A 2 b 1類(783~792) 口径11.2~15.4cmを測り、13cm前後のものが多い。口頸部上半に凹線を1条加えるもの。口唇部の面取りには内端を強くつまみだすもの、角張らせるものなど細部手法に差異が認められる。肩の張らないものが多いが、口頸部までカキ目を施す790は張り気味の肩部となる。791は胴径に比べ口径が大きく、口唇部面取りも幅をもつ。

A 2 b 2類(793~799) 口径12.5~15.5cm。口頸部上半に凹線を2条加えるもの。

A 2 b 3類(800) 口径13.8cm。口頸部までおよぶカキ目を部分的にナデ消すのみで凹線を加えないもの。

B 2 b 4類(801~803) 口径12~14cm。口頸部の外反度は弱く、口唇部の内・外面に面を設ける。内面の面取り下端のつまみ出しは弱く、口頸部上半には浅い凹線を1条めぐらす。

B 3 a類(806・807) 806は口径16cm、807は口径21.8cm。口唇部内面は肥厚せず滑らかに仕上げ、外面肥厚帯

部下端は凹線を加えるととも下方に摘み出す。

A 3 b 類(804・805) 口径11cm 前後。口頸部中位に凹線を1条加え、肩の張りは強い。

B 2 c 類(808) 口径約16cm。口縁部の肥厚は弱く、破損面には釉を受ける。

底部(809~818) 多くが内外面に厚く緑・暗緑色釉を受ける。内面をロクロナデにより仕上げ、外面には不定方向のケズリを加えるもの(809・810・816・817)、カキ目により仕上げるもの(811・813~815)、叩き後ナデを加えるもの(818)があり、カキ目を加えるものがより偏平度の高い底部となる。813・814・818は高坏胎土分類B類胎土で作られており、他に比べ器肉が厚い。これらは焼台として坏A身を用いているが、この身もまた同様のB類胎土による製品である。

脚部(819~822) 819はよく踏ん張るもので、820も同様の形態を推定する。ともに器内面に緑色釉を厚く被り壺脚部であろう。821・822は外開き気味で、凹線を1・2条めぐらす。外面にそれぞれ褐緑色釉、暗緑色釉を受ける。これらは長頸瓶あるいは壺の脚部と推定する。

#### 甕(図版82~84)

A 2 b 類 823は口径13.7cm を測る小型のもので、横瓶の可能性もある。口縁部外面に隆線を1条造り出し、口唇部には内傾する面を取る。824~826は口径25~27cm。肩の張る器形をもつ大型甕である。825は4方に把手を付す。826も把手を付すがその数は不明。いずれも口唇部にはわずかに内傾する面を取り、824・825では面内端を内側に、826では面の両端を内外につまみ出す。

B 2 b 類は外傾または外反する口頸部をもち、口頸部高は低い。836は丸い胴部の中位に最大径をもつ。他の多くは胴上半に最大径をもつ840・842のような器形となろう。口縁部の肥厚度や口唇部の面取り手法により細分できる。

B 2 b 1 類(827~829) 口径15~17cm。口縁部の肥厚は弱く、口唇部面取り幅4mm。面内端を鋭どく仕上げるもの。

B 2 b 2 類 口縁部の肥厚は弱く、口唇部面取り幅約7mm。面内端をつまみ出すもの。口径17cm(834・835)、22cm(830~833)。

B 2 b 3 類 口縁部の肥厚は弱く、口唇部面取り幅約7mm。面内端のつまみ出しをしないもの。口径16cm(836・837)、20cm(838・839)。

B 2 b 4 類 口縁部に厚い肥厚帯部をもつもの。841、842では肥厚帯部に凹線は加えず、口頸部中位に凹線を1条めぐらす。口径25cm(840)、21cm(841・842)。

B 2 b 5 類 口径25~28cm(843~844)。口頸部器肉が厚く、幅のある肥厚帯・口唇部面取りをもつ。

C 類 上記のA・B類以外のものをC類とした。846は口径14.8cm。器肉は薄く口縁部を受け口状に仕上げる。847は口径18.8cm、口頸部高9.4cm を測る。口縁部上半を弱く折り広げ、凹線を口縁部と頸部に2条加える。

底部(848~851) いずれも丸底のもの。849は焼成がやや甘く淡青灰色を呈する。849は逆位に設置した坏A蓋を焼台としている。850は甕製作の際に底部円盤から成形したことが分かるものであり、外面に床砂が付着する。851は底部外面をケズリにより、内面をロクロナデにより仕上げられており、壺底部の可能性もある。

蓋(852・853、図版85) 852は口径10.2cm、器高4cm を測る。天井部外面を不定方向へラケズリで仕上げ、降灰は受けない。坏B身の可能性もある。853は平坦な天井部より強く屈曲し体部となるもので、外面に緑色釉を厚く被り、口唇部には剥離痕がめぐる。短頸壺の蓋であろう。

陶錘(854、図版85) 長さ6.7cm、最大幅2.3cm、孔径5.5mm、重さ31g を測る。棒状具を粘土で包み、手で握ることで成形し、両端を切り落して仕上げたものである。

器種不明品(855、図版85) 器肉は1.6cm と厚い。外面はカキ目を渦状に加えて仕上げ、内面には同心円当て具痕が残る。外面は無降灰、内面は明緑色釉を受け砂粒の付着が著しい。胎土は砂粒を少量含み、淡青灰色の堅ち

な焼き上がりとなっている。大型の壺あるいは提・提瓶の類と考えたい。

焼台転用土器(856~860、図版85) いずれも坏Aである。器外には厚く緑色釉を被り、器内は無降灰。ゆがむものが多いが破断面には釉を受けず2次被熱もみられない。これらは他の土器と同様に製品として作られながらも焼台として使用された土器である。857では3個の土器が接する形で、860では4個の土器を格子状に配置している。いずれの土器も口縁部を下にして設置しており、859の例(壺を載せる)のように、製品をこれら焼台転用土器の間に設置することを意図したのであろう。焼台転用土器は床砂に口縁部を埋め込んでいくもの他に、土器断面図に実線で示すように設置する土器の内側には粘土を貼っていないものがある。また、857・860では実測図に破線で示すように貼り込んだ床粘土の繋ぎ目が観察できる。<sup>10)</sup>

#### (7) 所属窯不明土器(図版86)

提瓶(861~867) 861・862・866は環状把手をもち、863はボタン状の貼り付けをもつ。

平瓶(868) 環状の把手をもつ。

横瓶(869) 口径13cm。器肉は1cmと厚い。口唇部面取り幅は約1cm、面取り内端を強くつまみ出す。

壺(871~879) 871は口頸部高の高いもので、胴部には凹線および連続櫛歯刺突を施す。頸部にはへう描きが見られる。また、口頸部と胴部では明らかに異なる胎土を使用している。胴部の胎土は2号窯高坏B類類似の淡赤褐色を呈するしまりのないものを、口頸部には淡灰色を呈するしまりのあるものを用いている。このため、胴部と頸部の接合状況がよく観察できる(巻頭図版4)。872~874は器肉の薄い口頸部が外反するもので、口縁端を上方に短く折り上げ面を設ける。または丸く肥厚する。875・876はA3b類であり、口頸部上位に凹線を2条めぐらす。877・878は底部外面までカキ目を施し、それぞれ坏A身、坏A蓋を焼台として使用する。内・外面には厚く緑色釉を受ける。

#### 壺

A2b類(879) 口径22.8cm。口頸部外面に凹線を2条めぐらす。口唇部にはわずかに内傾した面を取り、両面端を内外につまみ出す。

B2b類(880~883) 口径20~23cm。口縁部肥厚帯は薄いものの、器肉は厚く、口縁部を弱く肥厚する。880・882は1号窯高坏B類胎土によることから1号窯製品であろう。

B3b類(884) 口縁部の破片のみであるが、櫛描波状文を3段に渡って施すようである。

陶錘(886) 854と同様の成形方法であり、片側面に削りを加えている。長さ5.9cm、最大幅2cm、孔径0.5cm、重さ25gを測る。

#### 横瓶頸孔接断片

第28図1(図版87)は横瓶等に口頸部を接ぐための胴部せん孔時に切り取られた不要品である。切断面より3~4mm内側に深さ1mm程の沈線が切断面に沿って丸く加えられている。これにより胴部せん孔前にせん孔部にあらかじめ下描きとして丸く沈線を加えていたことが分かる。

#### (8) 他窯の土器(第28図、図版87)

以下の土器は胎土・釉調および細部の形態より、オオカミダニ窯以外の製品とできるものである。

3は口径12cm、受け部径14.4cm、器高4.4cm、立ち上り高0.8cm、口縁部残存度7/12を測る坏A身である。底部から滑らかに口縁部にいたり、口縁部および内面に浅いロクロひだを残す。胎土は白色砂粒をわずかに含みザラつきをもち、灰色を呈する。明緑色釉を底部外面に被り、底部の調整は観察できない。口径・立ち上がり高とも林オオカミダニ窯の土器と同時期として良い。

4は口径10.2cm、受け部径13.2cm、器高3.8cm、立ち上り高0.4cm、口縁部残存度6/12を測る坏A身である。平坦な底部から折れ、やや腰の張る体部にいたる器形をもつ。外面は滑らかに仕上げ、内面には浅いロクロひだが残る。蓋受け部・立ち上がりはオオカミダニ窯の土器に比べ小振り、蓋受け部もより滑らかである。胎土は

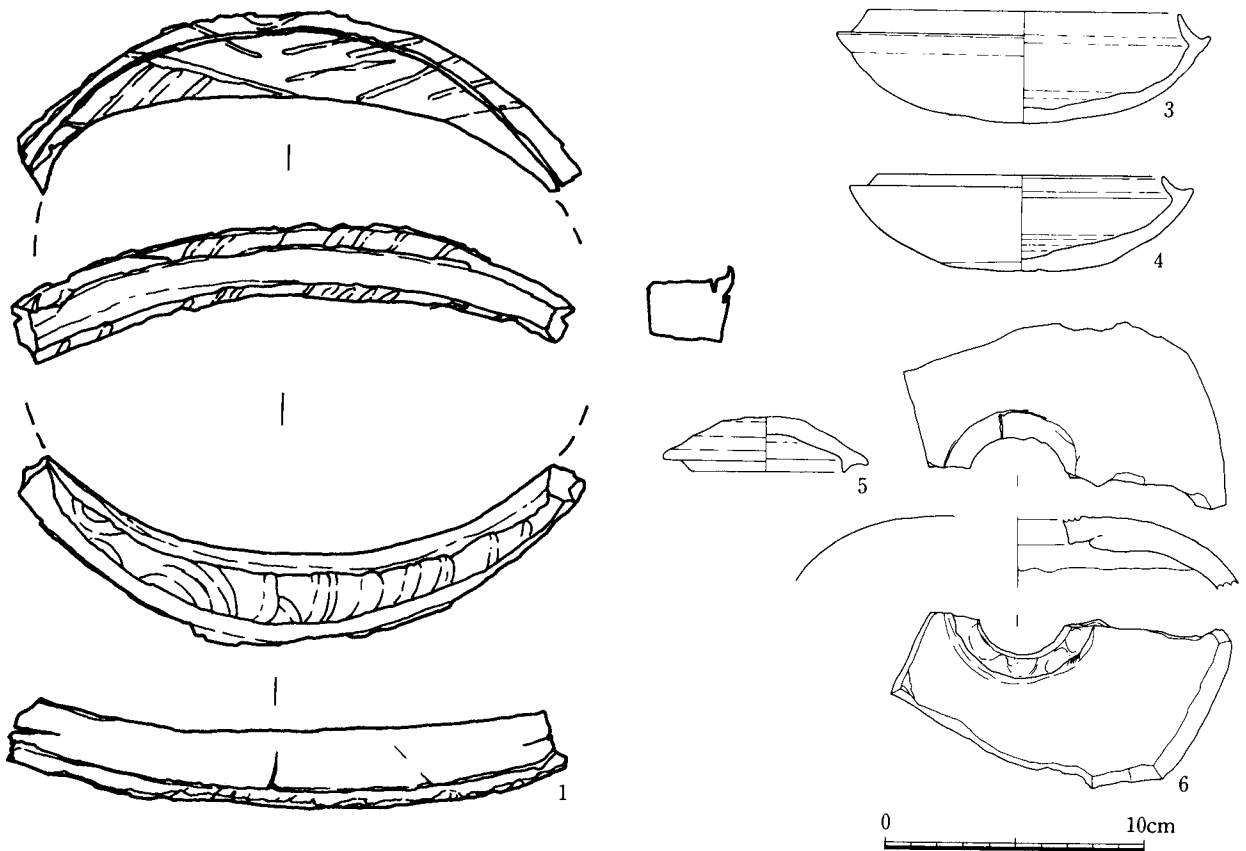


砂粒をわずかに含みザラつきは弱く、灰色を呈する。釉は受けず、底部外面には亀裂が入る。

5は長頸壺等の蓋と考えられ、口径6cm、つば径7.8cm、器高2.1cm、立ち上り高0.2cmを測る完形品であり、天井部にはつまみを付さずへら切り離し後不調整である。胎土は灰～暗灰色を呈する。内面には窯床砂が厚く熔着し、外面には薄く明緑色釉を被る。

以上の3点は林タカヤマ窯と同一斜面に位置するN・M区落ち込み内溝(第49図)より出土したものであり、タカヤマ窯のいずれかの窯の製品と考えたい。

6は丸い胴部をもつ瓶肩部であり、口頸部は2段接合を行っている。胎土は、砂粒をほとんど含まない精緻なものであり、明灰黄色に発色し、外面には明緑色釉を被る。G-6区出土であり、所属時期は不明。



第28図 横瓶頸孔切断片 (1 S=1/1)、他窯の土器 (3~6 S=1/3)

注

- (1)(2)土器分類の方法で述べたように器種の分類が土器製作工人の違いを反映するものとなることを意図した。坏、高坏ではこのレベルにおいて同一工人の技術偏差の幅(作風)をとらえ、工人差を示す分類となったと考える。ただし、2号窯の工人の1号窯への関わり、あるいは同一窯で数回の焼成がある場合の1次焼成時と2次焼成時の工人の関係といった識別はできず、あくまで各窯でそれぞれの器種製作に関わった工人の延べ人数を推定したものである。
- (2)坏、高坏ではこのレベルにおいて同一工人による作り違えを反映したものとなったと推定する。
- (3)佐藤浩司1989「古墳時代須恵器蓋杯の研究(I)」『研究紀要』第3号(叻北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室)
- (4)坏B類はいわゆる坏Gと捉らえられるものであるが、2号窯では蓋を伴わず身のみ重ね焼成する一群がある。また、蓋を載せるものについても底部調整はロクロナデを施すのみでへらケズリは加えていない。これらは従来のこの時期における坏Gの理解にはないものであり、あるいは、「坏A」の萌芽とすべきものかもしれないが、ここでは、「坏H」に対する新出の坏形態として一括して扱った。
- (5)甕の叩き目の観察により工人単位を復元する方法があるが、本窯では検討を加えられなかった。しかし、実測図や写真図版でも分かるように胴上半、頸付け根部内面での同心円当てで具痕には、同心円の重複が密で、力強く明瞭に頸付け根まで残るもの(363、374、375、825等)、同心円の重複は疎で、頸付け根で叩きをナデ消すもの(381、831、839、840等)といった手法差を認める。同様に外面の並行叩きの施文具合にも手法差を認める。しかし、十分な検討を加えずここではその有効性を指摘するにとどまる。
- (6)田辺正三編1966『陶邑古窯跡群I』平安学園考古学クラブ

- (7)この床面一括検出土器においても、他の型式中においても全くの同一器形・法量、同一調整とできるものは少なく、同一と認められるのは僅かに1号窯A6類中の413・414と416・417くらいである。これは林オオカミダニ窯放棄品中の、しかも、実測土器の比較のみからの結果であるが、本窯では現代の陶工の技術にみるような再現性をもった土器製作は行われていなかったと考える。
- (8)2号窯の胎土は1号窯の胎土ほど明瞭な差異であるとは決定できなかった。坏や高坏で同一型式に属する土器の胎土を比べると、焼成の甘いものほど砂粒の含みが少なくしまりをもった精緻な胎土と捉えられる。焼成がやや甘いC類胎土でもさらに高温で酸化、あるいは還元を受けるならばA類・B類胎土のように白色砂粒等が表われ可能性があり、A・B・D類胎土についても窯内配置を反映した被熱状態の違いによる相違とも考えられる。焼成実験による検証の必要性を感じるものである。
- (9)横瓶の口頸部は口縁部を肥厚するという点で壺形土器的ではなく、甕形土器的であるといえる。しかし、その口唇部面取りや凹線の施文手法は1号窯の横瓶の中で、より丁寧に成形しているa類においても、また2号窯の横瓶をみても甕のそれと比べると明らかに雑といえる。そのため頸接合部の残らない口頸部細片でも横瓶と甕の識別は容易であり、当時の土器製作工人は横瓶と甕の口頸部を明確に区別し製作していたといっただろう。ここでは横瓶の用途までは言及できないが、この両者の相違は横瓶という土器の用途を示唆するものではないだろうか。
- (10)焼台転用土器の観察から窯床構築の状況を推測すると、貼り床材としては壁や天井の場合と異なる、粗砂に粘土を加えたものを使用し、傾斜する床での土器の安定、床に直接設置した土器と床との熔着を防いだことがまずうかがえる。そして、貼り床作業は、素掘りの床に径10cm程度の塊にした床材を少しずつ貼り付けていき、厚さ1～2cm程の貼り床を作り上げる。その際、土器の配置を考えながら、適宜、焼台転用土器を土器安定のために有効な方向を向け埋め込んでいく、というものであろう。窯床構築にあたって十分な経験と知識が要求されたのである。また、略長方形の自然石も何点か出土しており、傾斜の急な窯尻部ではこれらも焼台として用いていたであろう。

### 第3節 土師器窯・木炭窯

#### 1. 土師器焼成土坑

##### 遺構(第29図、図版28)

G6区に位置する。調査中は第3号窯と呼称した。尾根の下で、等高線に直行して築かれ、風のあたらない場所に位置する。略長方形を呈するが、一辺がやや長い。規模は長さ1.8~1.95m、幅1.45~1.65m、深さ7cmを測る。G6区付近は包含層が2枚存在するが、上層(第50図6層)面に築かれていた。土器は多数出土したが、小さく砕けており、北側に多く見られた。北西コーナー部分には焼土が著しく分布していた。焼土は5~10mの厚さを持つ。また、東(谷)側と南側には焼土(赤化した範囲)が見られなかった。床面には穴が3個確認された。南側の周辺に穴が存在するが、上屋が存在したかどうかは、確定できない。

##### 遺物(第30図)

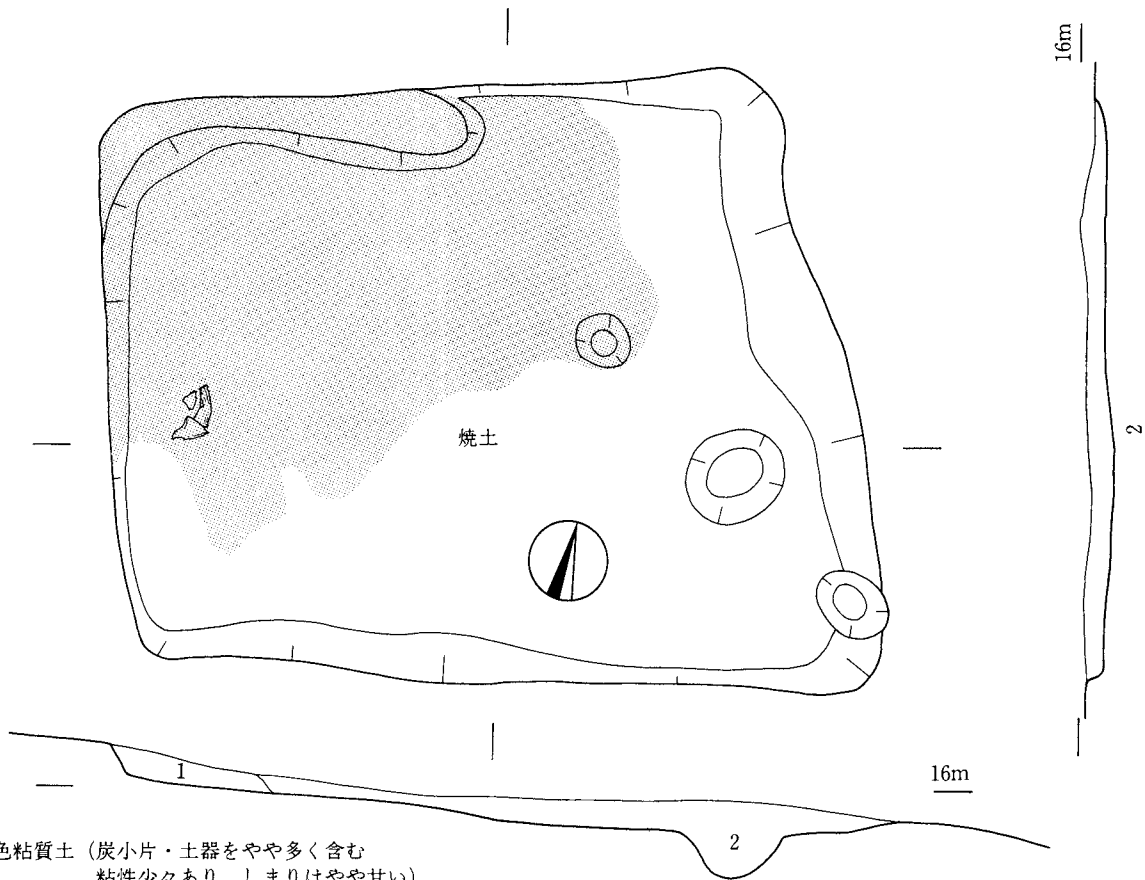
全て土師器の細片であり、焼成後の破片の取り残し、ないし廃棄されたものと思われる。計測値は全て復元径である。1~6は坏、7は皿と思われる。1~3は体部に強い稜を持たないものであり、1は口径14cm、2は13.4cm、3は12cmを測る。4~6は体部に強い稜を持つものであり、4は口径14.2cm、5は12.8cm、6は15.8cmを測る。7は口径12.8cmを測り、口唇部を丸くおさめる。8~15は有台の底部、16~20は無台の底部である。8、13、20にはへらなどにより平行な工具痕が認められる。8は底径7cm、高台径7.6cm、高台高0.9cm、9は底径7.6cm、高台径7.4cm、高台高0.7cm、10は底径6.2cm、高台径6.4cm、高台高0.6cm、11は底径5.8cm、高台径6cm、高台高0.5cm、12は底径6.6cm、高台径7cm、高台高0.6cm、13は底径6.2cm、高台径6.6cm、高台高0.8cm、14は底径6.8cm、高台径7.6cm、高台高0.6cm、15は底径7cm、高台径7.6cm、高台高0.8cmを測る。16は底径5.4cm、17は底径6.6cm、18は底径6.4cm、19は底径5.4cm、20は底径5.4cmを測る。21~24は長胴甕である。21は口径20.4cm、頸部径19.2cm、22は口径20.4cm、頸部径18.6cm、23は口径21.8cm、頸部径19.4cmを測る。24は内面下半に同心円のタタキを持つ。時期は10世紀中頃と思われる。

#### 2. 木炭窯

木炭窯は4基検出した。全て西丘陵であり、第5号木炭窯を除いて、東斜面に立地する。時期の特定できるものは出土していない。構造は半地下式(第1号)が少なく、地上式(第2、4、5号)が多い。地上式の木炭窯は伏せ焼きと思われる(穴澤氏教示)。また、西斜面には地下式木炭窯1基を踏査で確認した。中央丘陵の舌状に伸びた部分(小松市教育委員会調査区)には4基の地下式木炭窯が存在する。

##### 第1号木炭窯(第31図、図版29)

H4区に位置する。尾根より少し下がった所に築かれている。東(谷)側に掘った土を盛り上げて、平場を作り出している。一度大きく掘り込み、地山質の土(8層)を埋めている。長さ5.6m、幅4m、深さ0.8mを測り、2段掘りの部分では、長さ4.2m、幅3m、底長さ3.7m、幅1.2mを測る。中の覆土は4層黒褐色粘質土(炭・炭材を多く含む)、2層暗灰色粘質土(しまりがなく炭を多く含む)であり、間に間層が一部入る。この4、2層が木炭焼成時の床と思われる。床は長さ約3m、幅0.8mと想定され、基本的に水平であり、両端がすこしあがり、北側の幅が少し狭くなるようである。南東コーナー部分には炭と焼土を含む部分(5層)があり、炊き口と想定される。尾根側には、地山面にピットが存在し、炭を含み地山に達しないピットも存在した。また、周辺には、直径0.8~0.9m、深さ0.1~0.2mの浅いピットが3つL字形に並ぶ。北東部は試掘トレンチのために不明であるが、存在したものと思われる。この周辺のピット群は覆土は黒褐色粘質土であり、第1号炭窯に伴うものかは肯定も比定もできない。遺物は4層から古代の土師器片1点、2層からは鉄塊系遺物の様なものが出土した。時期は特定できないが、10世紀(後半)以降と思われ、中世~近世であろうか。



- 1…黄褐色粘質土 (炭小片・土器をやや多く含む  
粘性少々あり、しまりはやや甘い)
- 2…黒褐色粘質土 (炭・焼土粒をやや多く含み、  
土器は多数含む。  
粘性少々あり、しまりは1層よりある)

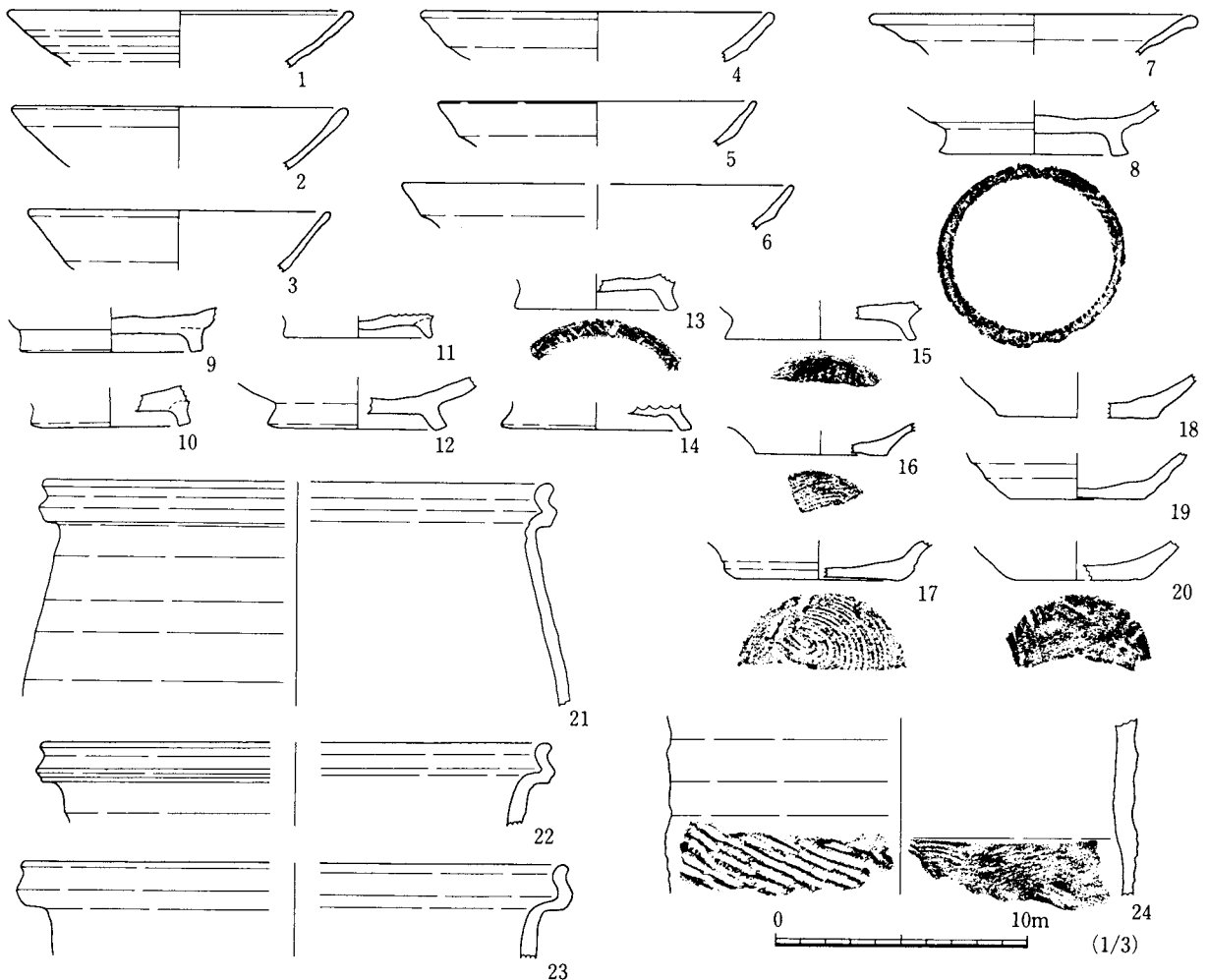


土器出土状態(1)

土器出土状態(2)



スクリーン  
は赤彩土器



第30図 土師器焼成土坑出土土器実測図

第2号木炭窯(第32図上段、図版30)

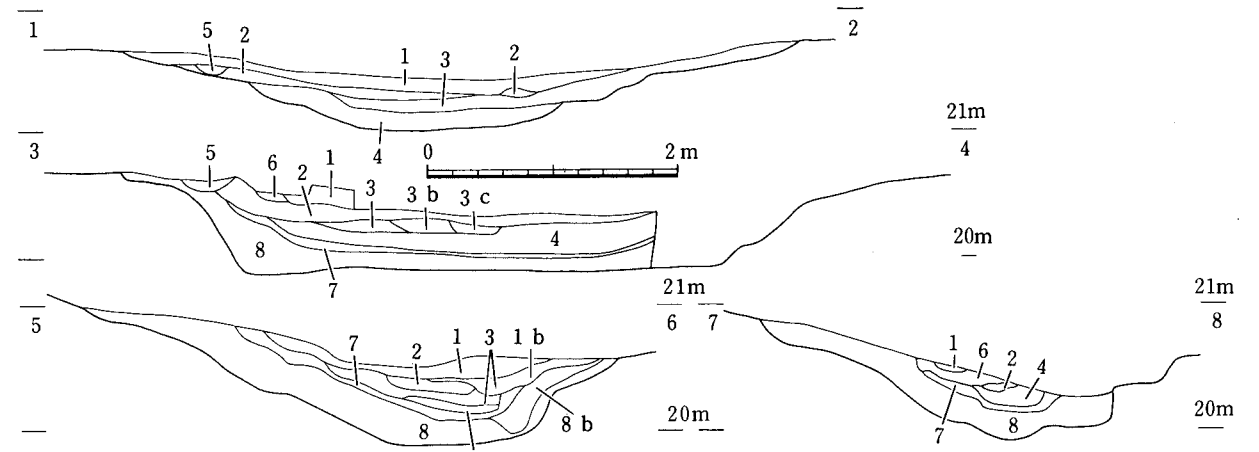
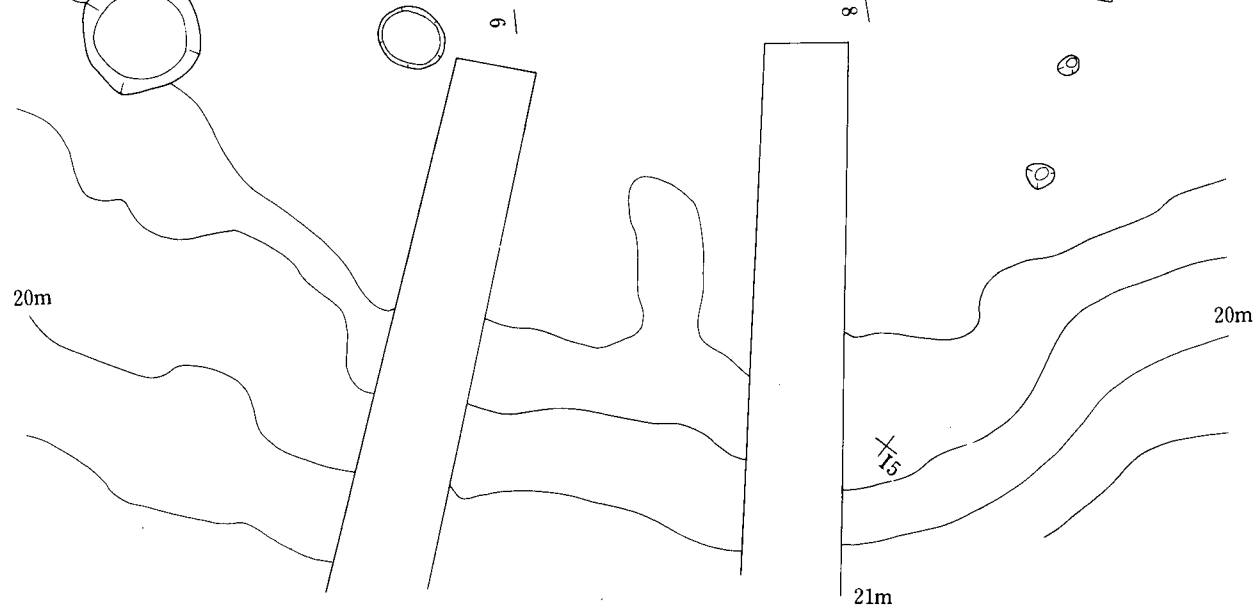
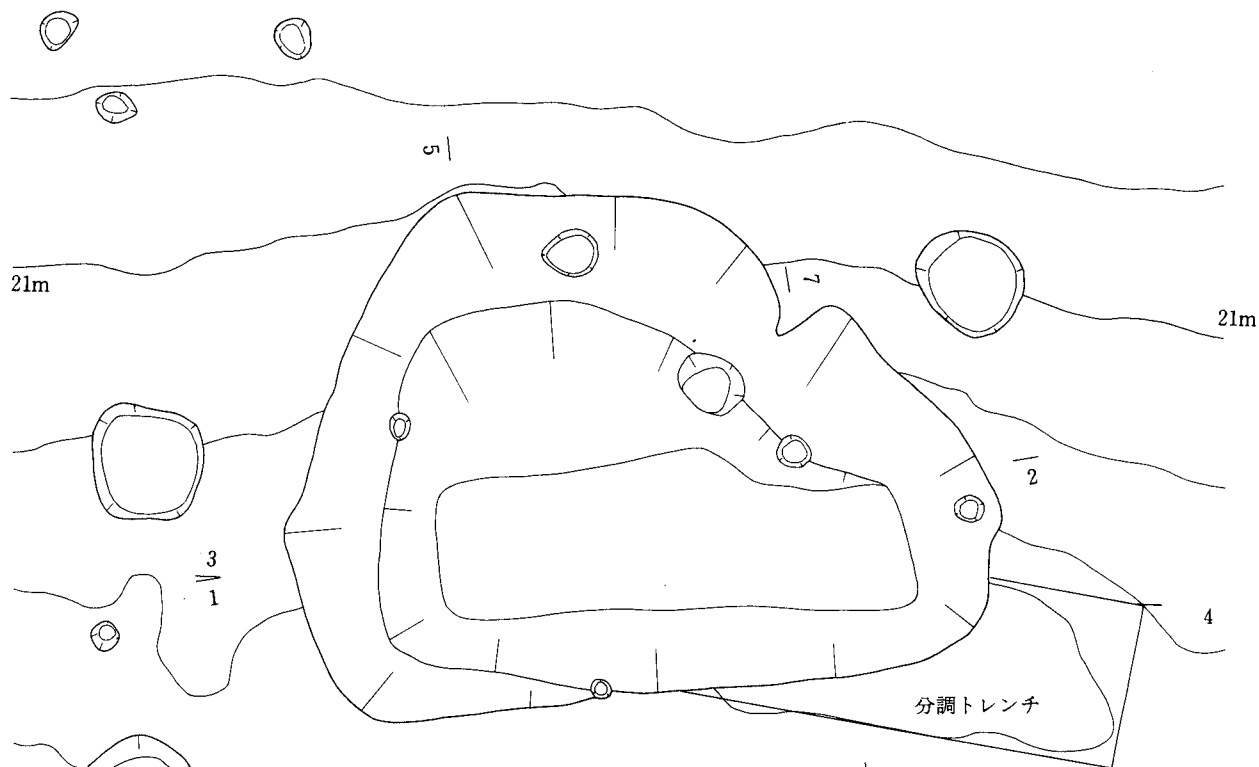
H 7 区に位置する。尾根から谷の変換点に築かれている。不整形を呈し、長さ2.2m、幅1.7m、深さ0.2mを測る。床はやや谷側が低いがほぼ水平である。ピットが4個確認された。床に数cmの厚さで炭の分布がみられた。木炭は樹種分析の結果、9点の資料ともコナラ類である。

第4号木炭窯(第32図下段、図版31)

F 4、5 区に位置する。尾根の中腹に築かれている。南東側が流れており、全体像は不明であるが、長方形で長さ4.5m、幅1.6m、深さ0.2mを測ると思われる。床はやや谷側に傾いているが、ほぼ水平に近く、山側に浅い溝(5cm)を持つ。焼土は山側の中央部に沿って見られた。木炭は山側に多く見られ、3つのブロック(北・中央・南)に存在した。北側をA~D、中央をE~G、南側をH、Iと呼称して炭材を取り上げた(第33図)。木炭は直径が2~4cm程度のものがほとんどである。長さはAブロックでは5~10cm程度の木炭が多く、Cブロックでは20cm、Dブロックでは25cmの木炭、Fブロックでは50cmの木炭があった。樹種分析によるとAブロックの1点がコナラ類であり、ほか9点はクヌギ類であった。

第5号木炭窯(第34図、図版32)

E 1 区に位置する。遺構は調査区外に伸びているために、全体は不明である。残存長1.1m、幅2.1m、深さ0.3mを測る。床は焼けているが、焼土は少なく、地山がやや赤く、堅くしまった状態であった。木炭は幅5cm角材状のものや両端を切り落とした材が多い。樹種分析は1点がコナラ類、6点がクヌギ類である。



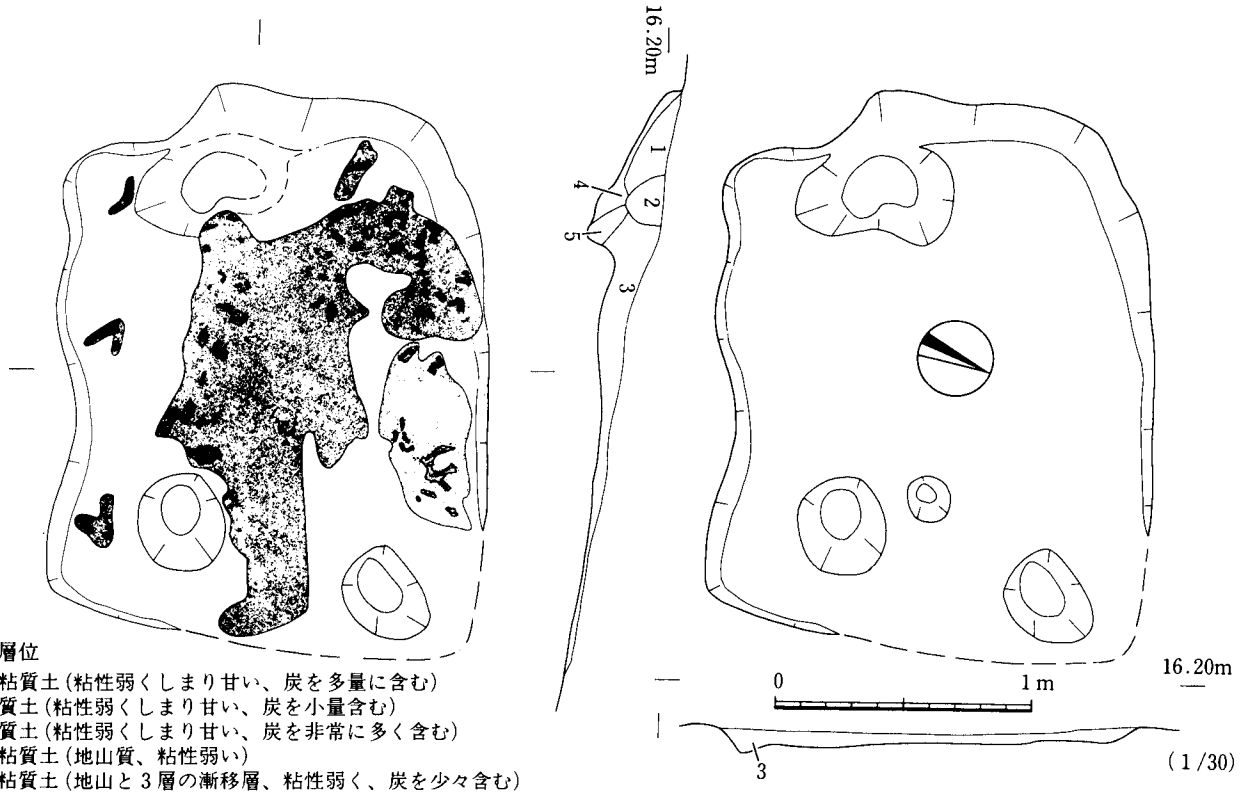
第1号木炭窯層位

- 1. 黄褐色粘質土(しまり良く、下側に炭を少々含む)  
1 b(暗く、炭を多めに含む)
- 2. 暗灰色粘質土(しまり良く、炭を多く含む) ←炭層
- 3. 灰褐色粘質土(しまり良く、炭を少々含む)  
3 b(炭材を多く含む) 3 c(黄色が強い)
- 4. 黒褐色粘質土(粘性あり、炭・炭材を多く含む) ←炭層

- 5. 黒色粘質土(4層より黒く、しまりは非常に甘い、炭を多く含む、焼土も含む) ←焚口か
- 6. 暗黄褐色粘質土(1、2層が混じったようなもの)
- 7. 暗黄褐色粘質土(4、8層の漸移層)
- 8. 黄褐色粘質土  
8 b(暗く、7、8層の漸移層)

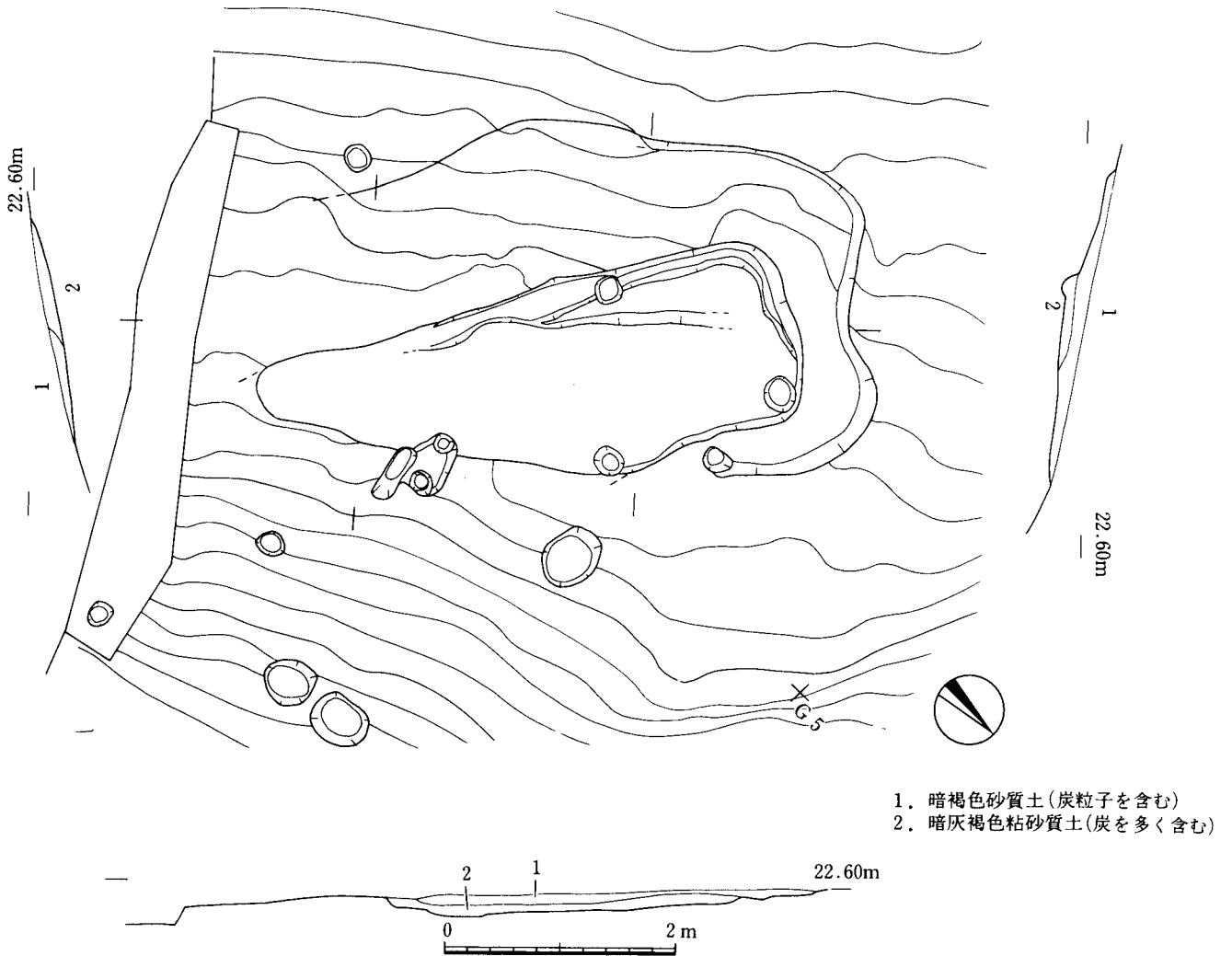
(1/60)

第31図 第1号木炭窯実測図

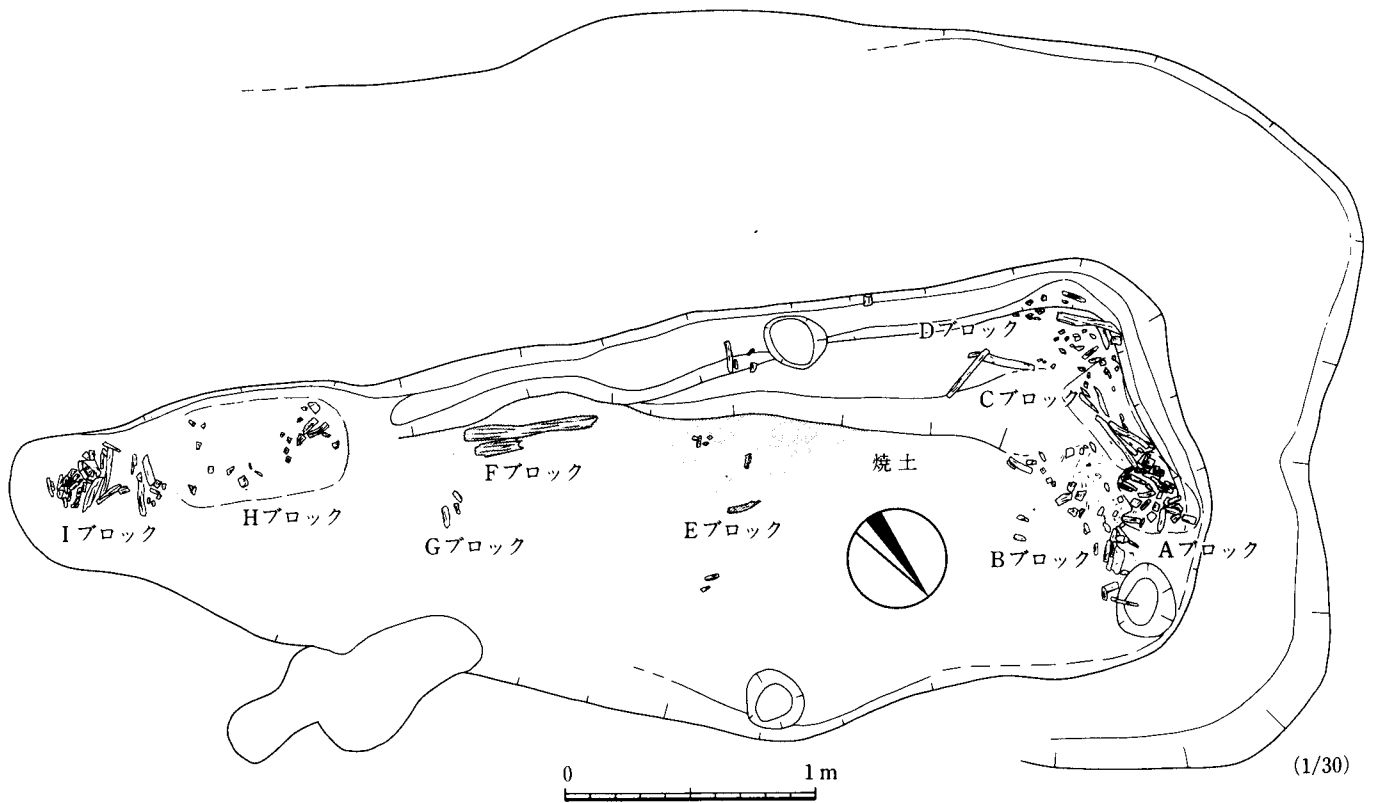


第2号木炭窯層位

1. 暗灰褐色粘質土(粘性弱くしまり甘い、炭を多量に含む)
2. 黄褐色粘質土(粘性弱くしまり甘い、炭を少量含む)
3. 灰褐色粘質土(粘性弱くしまり甘い、炭を非常に多く含む)
4. 明黄橙色粘質土(地山質、粘性弱い)
5. 暗黄褐色粘質土(地山と3層の漸移層、粘性弱く、炭を少々含む)



第32図 第2号、4号木炭窯実測図



第33図 第4号木炭窯木炭出土状態

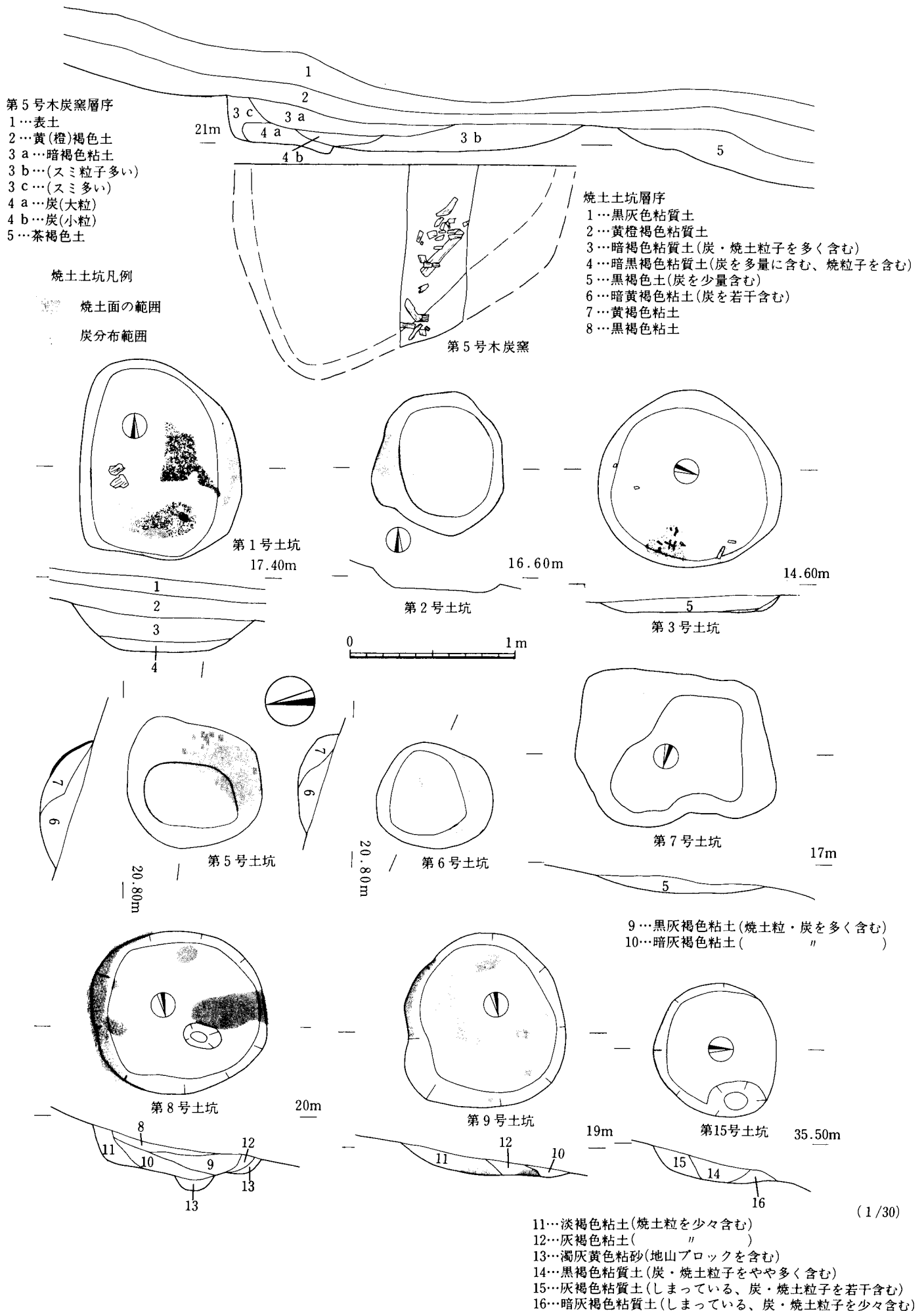
### 3. 土坑

大部分が焼土土坑(第34図、図版33)である。特徴として1m 前後の略円形を呈し、深さは0.1~0.3m 前後と深くない。壁面や床面の一部が赤化している。特に高い方(山側)が赤化しているものが多い。覆土には炭材や炭の粒子が含まれていることが多い。遺物の出土した土坑は第13号土坑だけである。7世紀前半代の須恵器坏蓋、甕破片であり、紛れ込んだものと思われる。性格としては、富山県小杉南遺跡では、古代の簡単な木炭窯(池野1991)とされていることから、ここでは焼土土坑は古代以降の簡単な木炭窯の可能性があるとしてみたい。

表2 土坑一覧

	区	形状	長さ×幅×深さ(m)	備考
第1号土坑	G6・7	不整形	1.2×0.9×0.2	炭粒子、炭、焼土面あり
第2号土坑	G6	略円形	0.8×0.8×0.1	略全面に赤化面
第3号土坑	K8	楕円形	1.4×1.1×0.1	焼土面あり
第4号土坑	J8	略円形	1.1×1.1×0.1	炭材あり、一部赤化
第5号土坑	I2	不整形	0.8×0.76×0.25	焼土面あり
第6号土坑	H2	略円形	0.7×0.6×0.2	炭少々焼土面あり
第7号土坑	I10	略方形	2.2×1.9×0.1	少々赤化面あり
第8号土坑	G11	略円形	1.1×1×0.25	覆土に炭、焼土多、床にピットあり
第9号土坑	H11	不整形	1.05×0.95×0.15	覆土に炭、焼土少々
第10号土坑	K14	楕円形	0.7×0.5×0.15	焼土面あり
第11号土坑	I13	略円形	1×1×0.5	焼土ブロック・粒子を多く含む。2号窯付属
第12号土坑	I11	円形	0.9×0.9×0.2	炭を含む
第13号土坑	K12	不整形	2×1.5×0.1	炭を多く含む
第14号土坑	L13	略円形	1.8×1.5×0.15	普通の土坑
第15号地坑	I16	円形	0.75×0.8×0.25	炭・焼土粒子あり、山側赤化





第34図 第5号木炭窯・焼土土坑実測図

## 第4節 土塁・郭状遺構

### 1. 土塁状遺構

土塁状遺構は西丘陵の西側と中央丘陵の西側に存在し、丘陵を囲むように配置されている。また、調査区外であるが中央丘陵北端の東側にも、中央丘陵に直行する形で土塁状遺構が存在する(第3図)。

#### 第1号土塁(第35図、図版34)

F0～I2区に位置する。西丘陵に沿って、ほぼ一直線に伸びている。北東側は10m程度で終わっているが、南東側は丘陵裾に沿って伸びている(第3図)。土塁は山側に溝を掘り、その土を盛り上げている。盛土はしまりがややあまく、厚さは断面図1～2ラインで0.8～1m、3～4ラインで0.4m、5～6ラインで0.6mを測る。高さ(東側：西側)は1～2ラインで(1.25：0.9)m、3～4ラインで(1.25：0.75)m、5～6ラインで(1.2：0.85)mを測る。土塁の傾斜は山側のほうが強く、谷側が弱い。土塁頂部の幅は1.6～2.2mを測るが、1.8mの部分が多い。土塁頂部から西側は葡萄畑造成の際に削られたものと思われ、特にF0区西側が狭い。最大幅3.6mを測る。山側の溝は3～4mを測り、北東側と南西側が広がっている。深さは北東側0.2m、中央部0.6m、南西側0.8mを測る。試掘トレンチ付近が一番深く、北東側は終点に近いので浅くなり、中央部以南ではほぼ均一の深さを保つ。F0区土塁内から、平安時代後半の長胴甕(10世紀代か)と須恵器坏破片が出土した。江戸時代中期の文献や伝承(上田1923)などから林超勝寺の土塁と想定可能なことから16世紀初頭～中ごろの可能性がある(第5章第3節参照)。

#### 第2号土塁(第36・37図、図版35・36)

中央丘陵の西側裾に位置する。J11～L13区付近に位置するが、I11、12区付近は不明瞭である。幅は2.8～5mを測る。谷側の傾斜が急であり、土塁頂部から裾までは1～2mを測る。高低差は0.4～1.2を測る。山側は平坦であり、土塁頂部から裾までは2～3mを測るが、内側のラインをとると1～2mと少し狭くなる。高低差は0.2mであり、ほとんどない。丘陵裾から頂部までの距離は約10mであるが、Kライン以南は約15mとやや広がる。土塁の北東隅～北側には溝群(第36図)が存在する。土塁の起点と思われるL14杭付近には2本の溝が存在する。土塁の北側には土塁の下端に沿うような形で2本の溝が存在する。付近からはL12区青磁碗、土師質皿(第54図62)、M14区京都系土師質皿(61)、土師質皿(60)、L14区第5号溝付近には青磁碗(63)が出土した。

#### 第5号溝(第37図上段、図版37・38)

L13～14区に位置する。残存長13.5m、最大幅2.6m、最深0.8mを測る。緩く弓形に曲っている。断面は広いV字形となり、西側になるほど皿状となる。L13区では硬い土手が2条存在する。北側(図版37の左側)は幅0.4mを測り、斜面に位置する。北側が古く、茶褐色土が堆積した上に新しい土手が築かれた(第36図1～2ライン)。南側は幅0.5mを測り、ほぼ溝底に築かれていた。この溝は途切れながらJ11区まで続くと思定される。北側には別の溝が存在し、幅0.5～2m、深さ0.1～0.2mである。

#### 第5a b溝(第36図、図版38)

K12～K・L13区に位置する。調査中は第5号溝と関係があると思われたので、5a・5b溝と呼称した。途中途切れるがY字形を呈し、東西(谷)方向に流れる。長さ18.5m、幅0.4～0.8m、深さ0.1～0.2mを測る。7世紀前半の須恵器破片・窯壁が出土した。

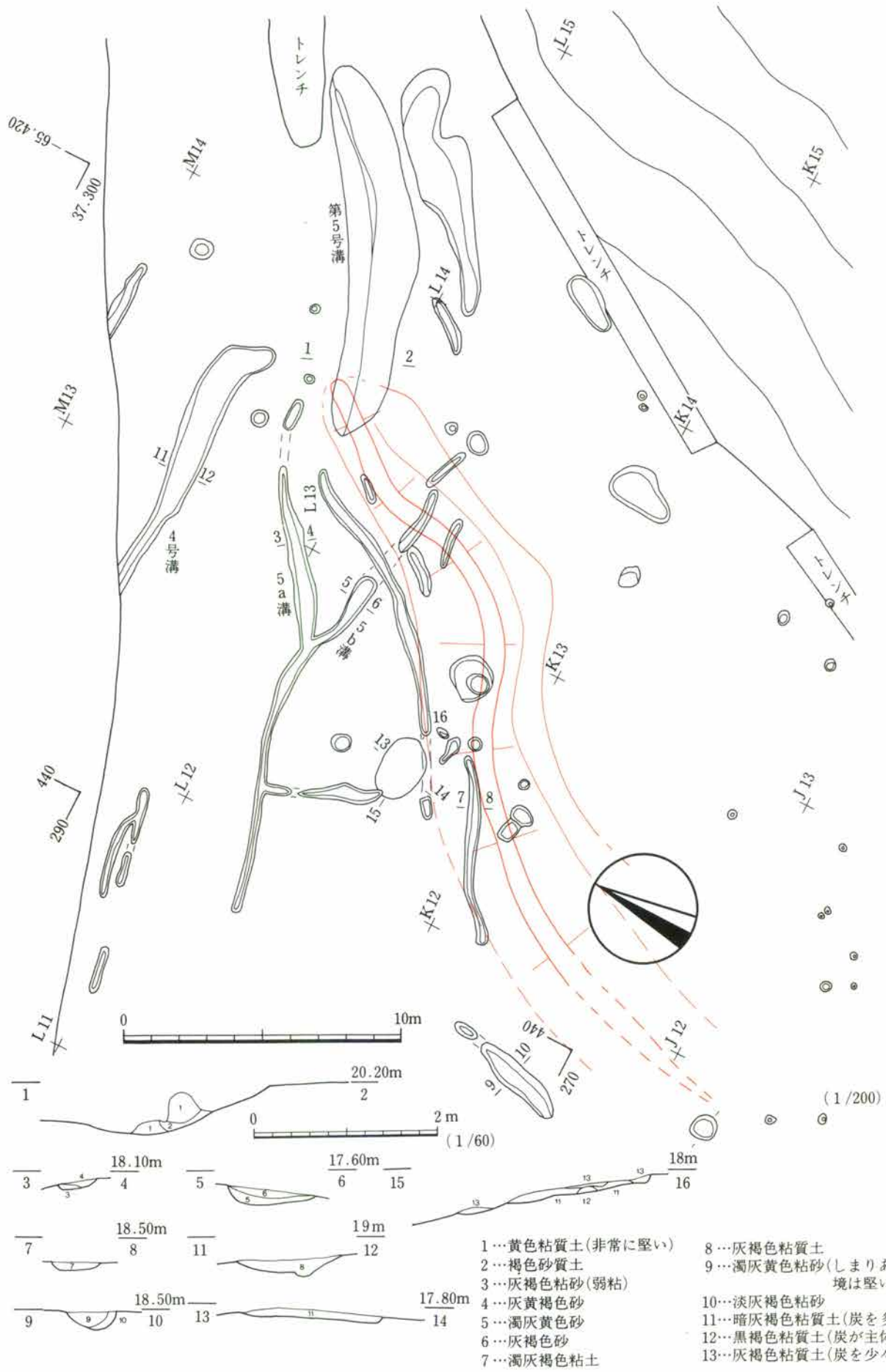
#### F G区溝群(第37図下段、図版35右上隅)

F G9～10区には平行する2条の溝(間隔1.5m)が存在する。第5a b溝は2本存在するので、この2本につながる可能性がある。炭が少し出土し、深さ0.1～0.2mを測る。また、北側には地山の落ち込み(地境溝の可能性あり)と溝が逆「へ」の字状につながる。深さ0.1～0.2mを測る。

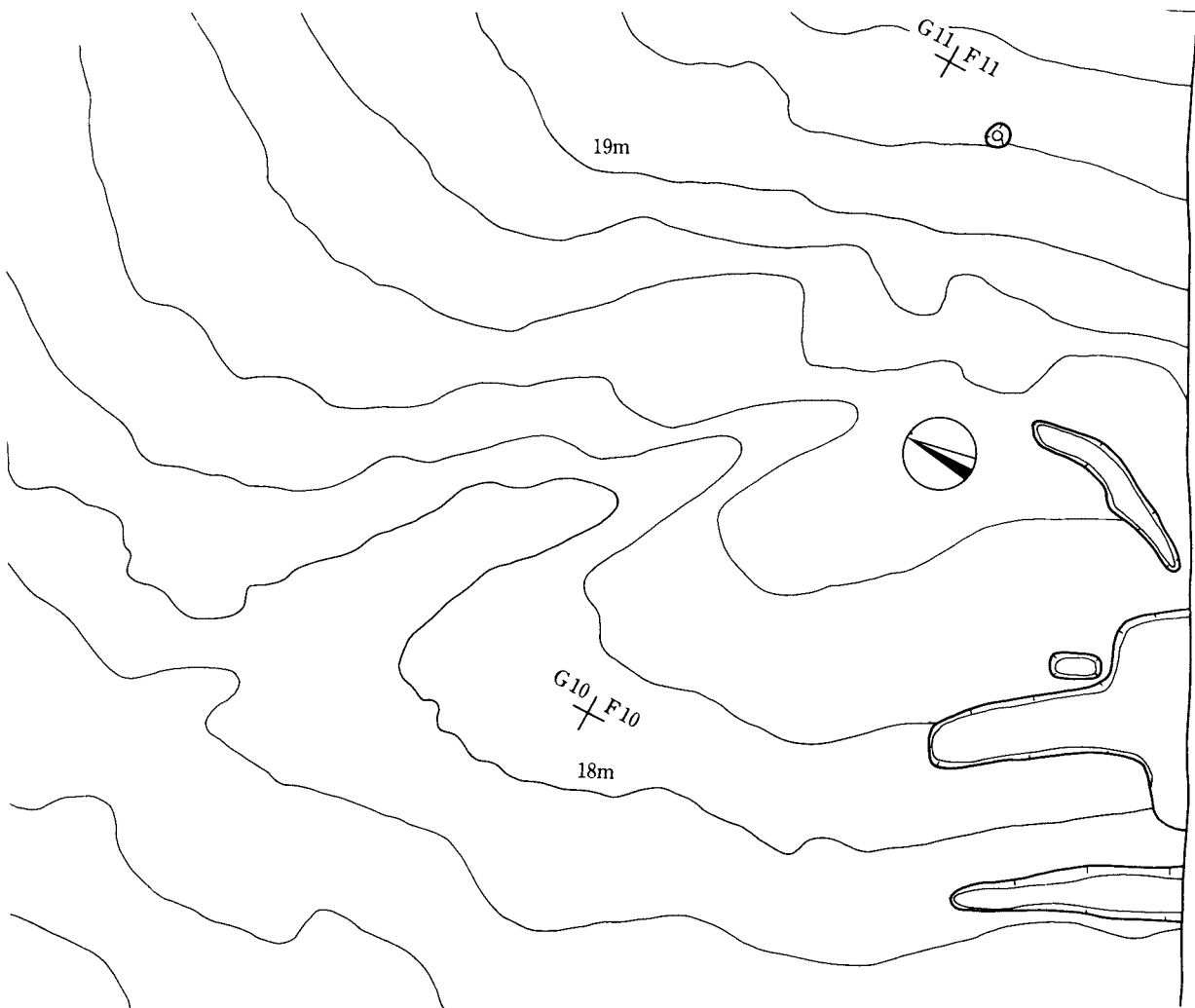
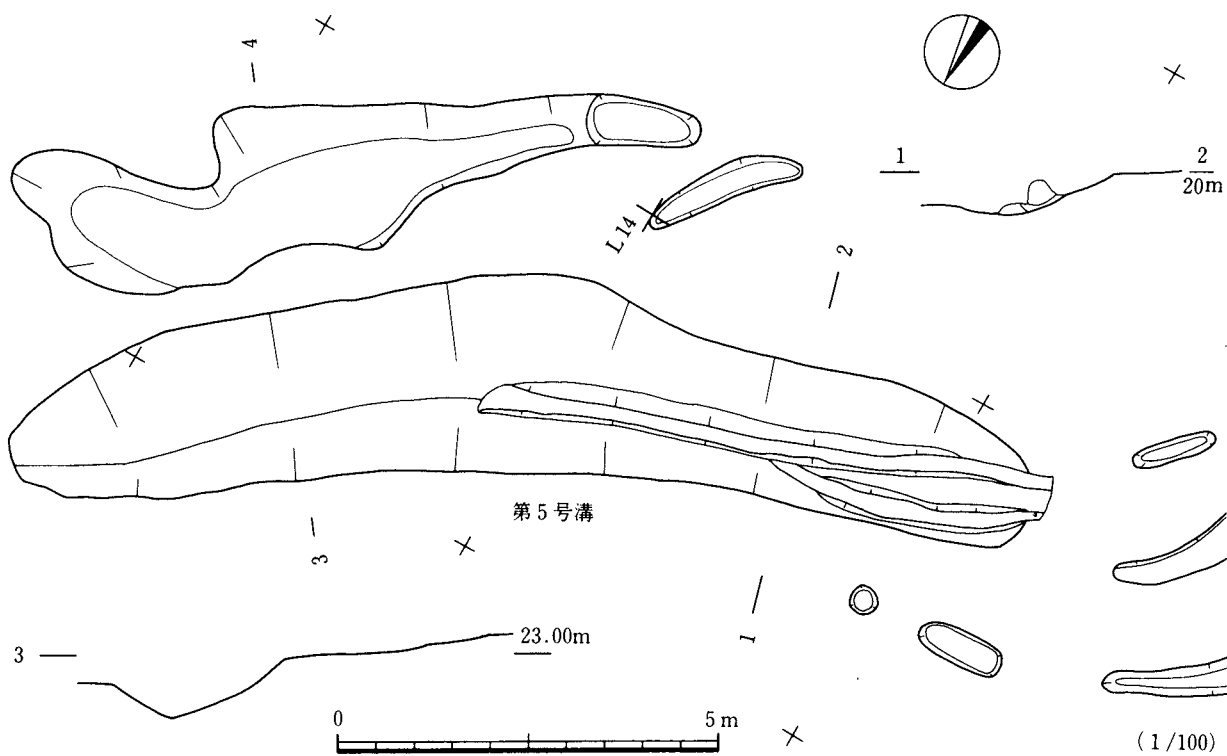
#### 第4号溝(第36図、図版38)

L12～13区に位置する。東西(谷)方向に流れる溝である。長さ10m、最大幅1.2、幅0.4m、深さ0.2mを測る。





第36図 第2号土壘関連遺構実測図(1)



第37図 第2号土塁関連遺構実測図(2) (1/100)

溝中央には一段低くなっている。北側3.5mには方向を同じくする溝が存在する。7世紀代前半の須恵器、窯壁が出土した。

## 2. 郭状遺構

郭状遺構は、調査区内では中央丘陵に2箇所と東丘陵に存在する(第4図)。中央丘陵では北端(A地区)頂上付近(B地区)、東丘陵は頂上から少し下がった所に存在する(C地区)。郭状遺構ではなく、段々畑などではないかという意見も存在する。西丘陵には、調査中は攪乱と認定した平地(郭状遺構?)がある。

**A地区(第38図)** 中央丘陵登り口と尾根筋に存在し、5箇所確認した。等高線に直行する長軸を持つ。山側を削り出して、地山だけで平坦面を構成する。遺物は出土していない。

### 第4号郭状遺構(第39図上段、図版42)

J~K15区に位置する。A地区のなかでは一番上に築かれていた。略長方形の平坦面を持ち、7.5×5.5mを測る。平坦面はほぼ1mの高低差を持つ。中央付近に焼土を持つピットが存在するが、0.2m程度と深くはない。

### 第5号郭状遺構(第39図上段、図版42)

K15~16区に位置する。第4・6号郭状遺構の西側に立地する。台形状の平坦面を持ち、7.3×3.6mを測る。平坦面は約0.6mの高低差を持つ。

### 第6号郭状遺構(第39図上段、図版42)

K15区に位置する。第4号郭状遺構の北(谷)側、第5号郭状遺構の東側に立地する。台形状の平坦面を持ち、4.9×2.5×3.6mを測る。平坦面は約0.6mの高低差を持つ。

### 第7号郭状遺構(第39図上段、図版42)

L15区に位置し、丘陵裾に立地する。略台形状の平坦面を持ち、6.5×8×5.5mを測る。平坦面の下三方を削りだしている。平坦面は約1mの高低差を持つ。

### 第8号郭状遺構(第38図、図版42)

L14~15区に位置し、第7号郭状遺構の西下1mに立地する。半円形の平坦面を持つものと思われる、7×6mを測るものと思われる。

**B地区(第38図)** 中央丘陵頂上付近に存在し、4箇所を確認した(図版40)。尾根方向に直行する長軸を持つ。地山と盛土で平坦面を構成し、下の方から造成したと思われる。

### 第1号郭状遺構(第39図下段、図版41)

H15・16区に位置する。南側には主郭と思われる遺構があり、西側下には第2・3号郭状遺構が存在する。台形状の平坦面であったと思われる、9×5.2mを測る。山側は地山、谷側は盛土である。谷側は流れており、実際は7m弱程度存在したものと思われる。古代の須恵器(第55図20の破片)が出土した。

### 第2号郭状遺構(第39図下段、図版41)

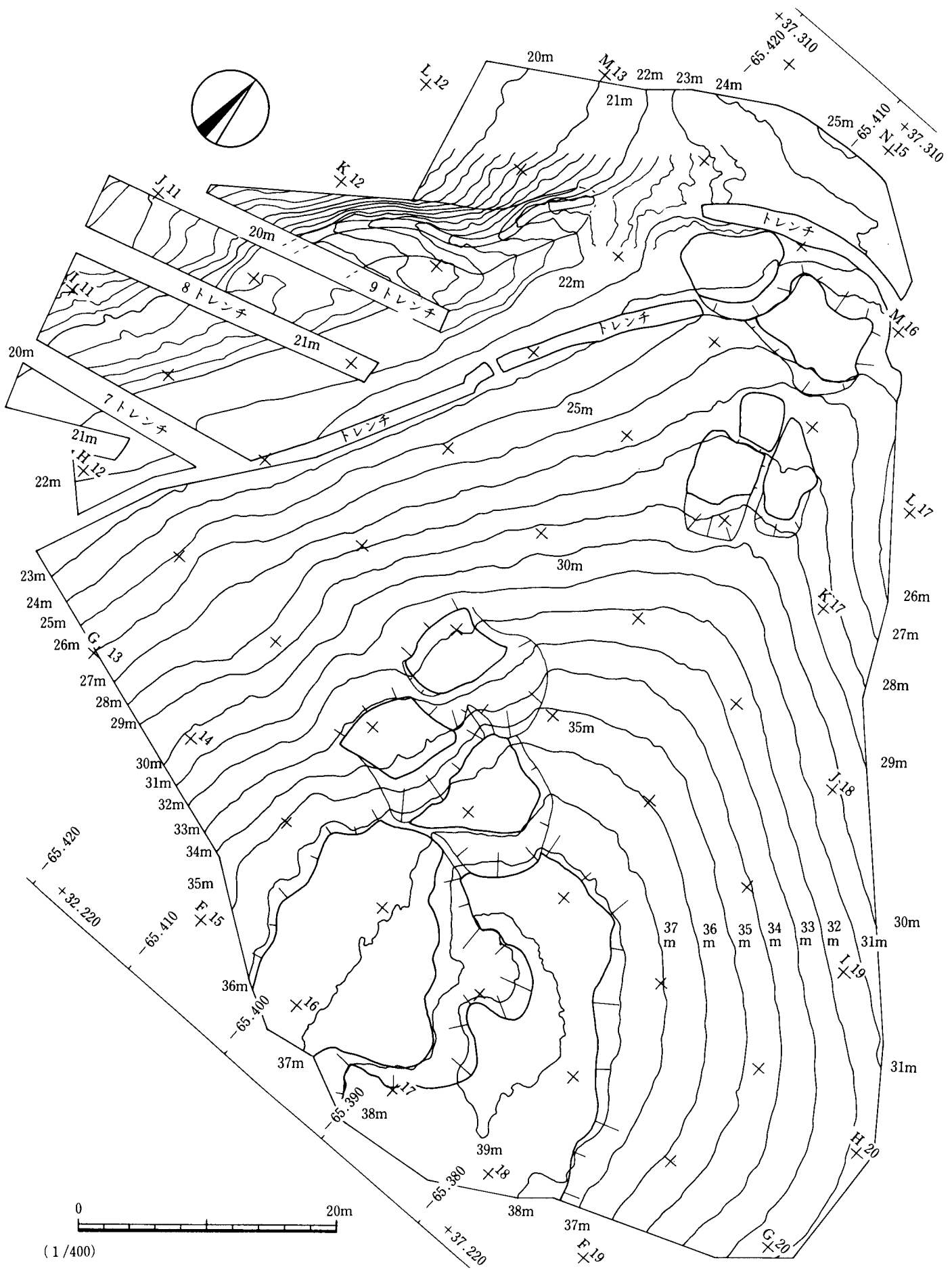
G14~H15区に位置する。第1号郭状遺構の下2m、第3号郭状遺構の上1mに立地する。方形状の平坦面であったと思われる、7×5mを測る。山側は地山、谷側は盛土である。谷側は、断面では7m存在したと思われる。

### 第3号郭状遺構(第39図下段、図版41)

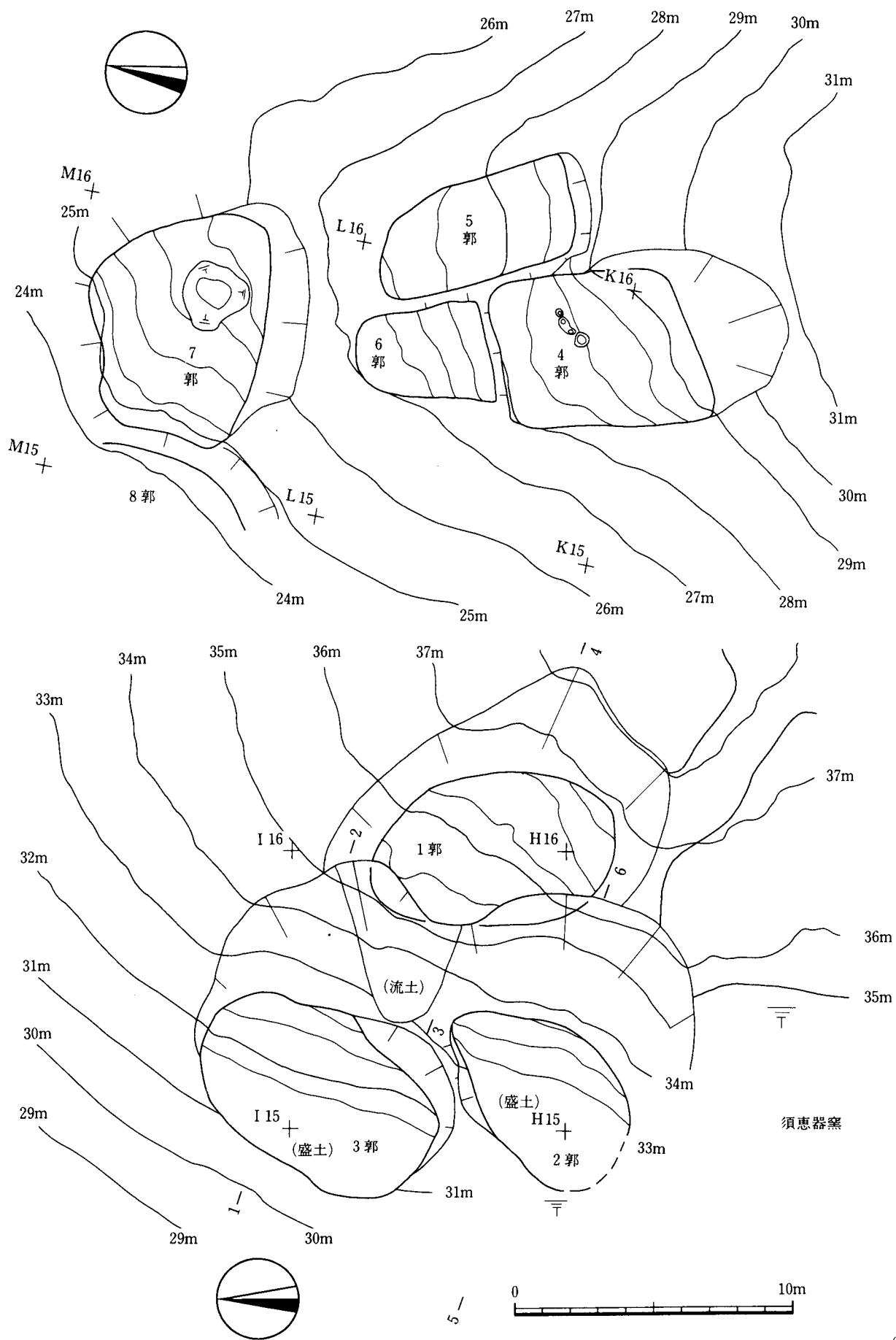
H14~I15区に位置する。第1号郭状遺構の下2.6m、第2号郭状遺構の下1mに立地する。方形状の平坦面であったと思われる、9×6mを測る。山側は地山、谷側は盛土である。古代の須恵器(第55図21)が出土した。

### 主郭状遺構(第41図、図版40)

G15~F16区に位置する。中央丘陵の頂上部西半に位置し、調査区外にも延びている。台形状の平場を形成しており、17.5×9:15mを測る。表土を採り去った面が平場にあたると思われる。平坦面の造成は頂上の地山を削りだし、西側に盛り上げており、G15杭付近は1.8mの盛土となる。地山面では柱穴の痕跡は確認できなかった。



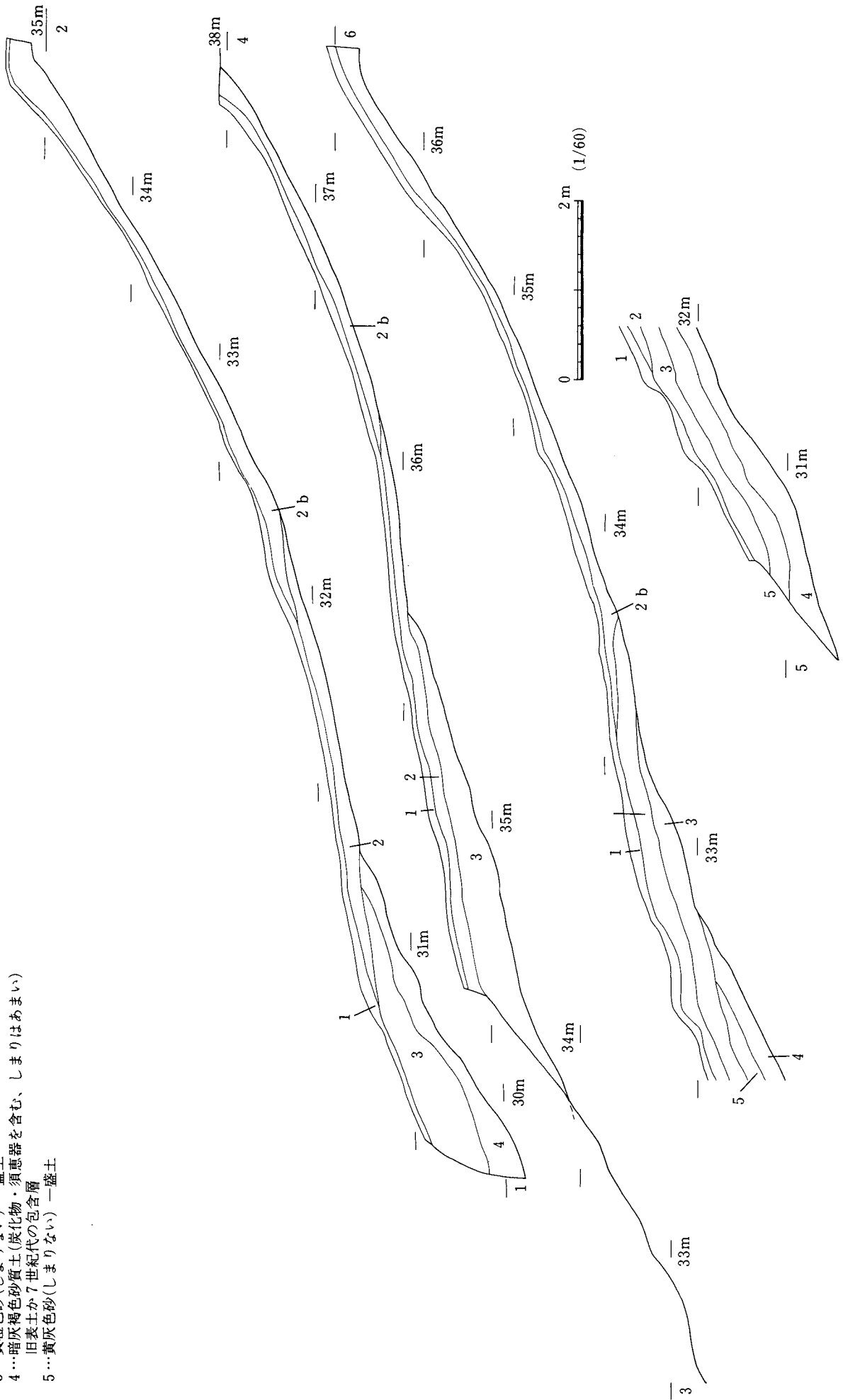
第38図 土塁・郭状遺構現況図



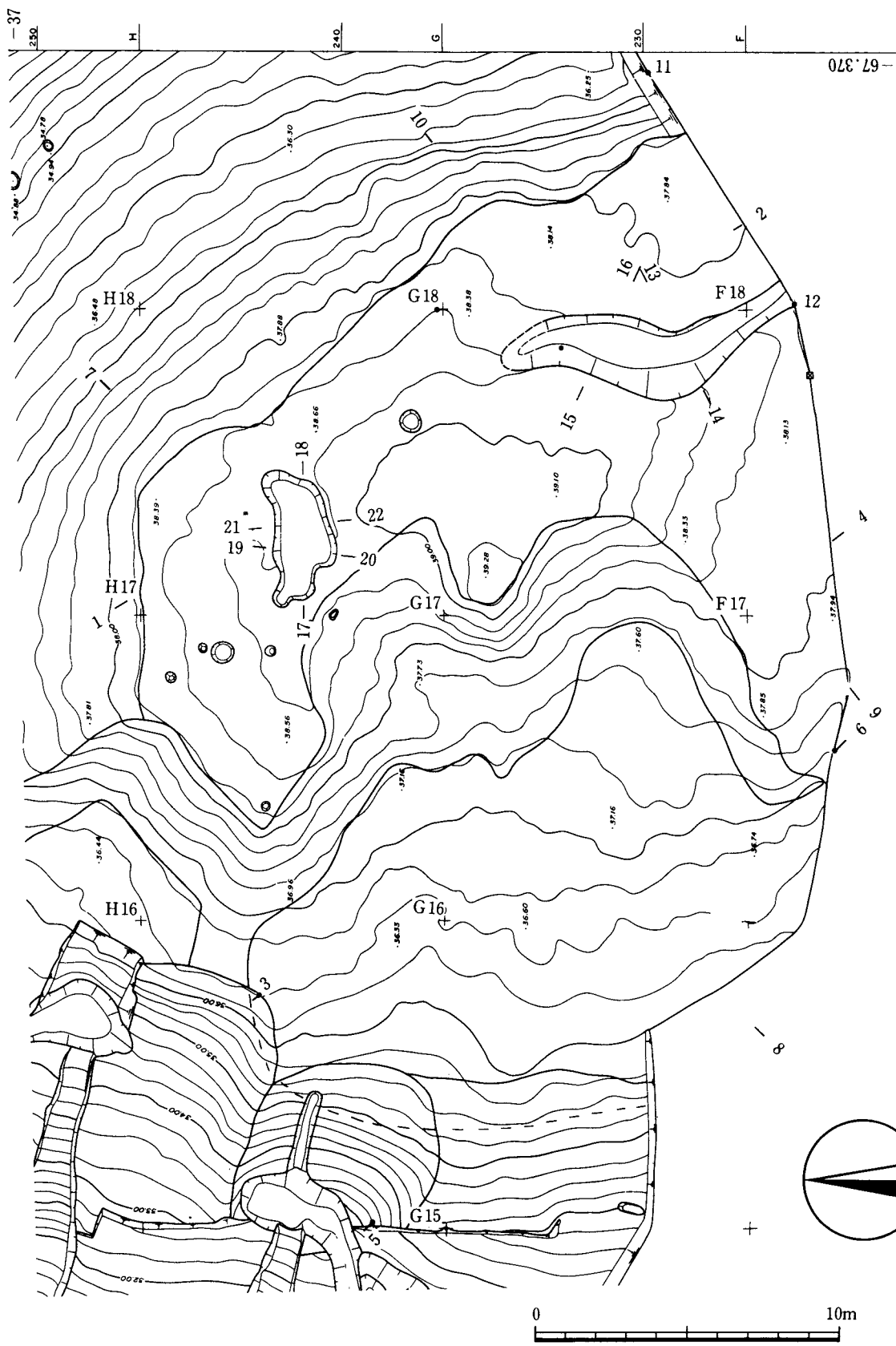
第39図 第1～8号郭状遺構実測図



- 1…赤土
- 2…黄褐色砂質土(やや硬い) — 盛土?
- 2 b…黄褐色砂
- 3…黄橙色砂(しまりない) — 盛土
- 4…暗灰褐色砂質土(炭化物・須惠器を含む、しまりはあまい)  
旧表土か7世紀代の包含層
- 5…黄灰色砂(しまりない) — 盛土

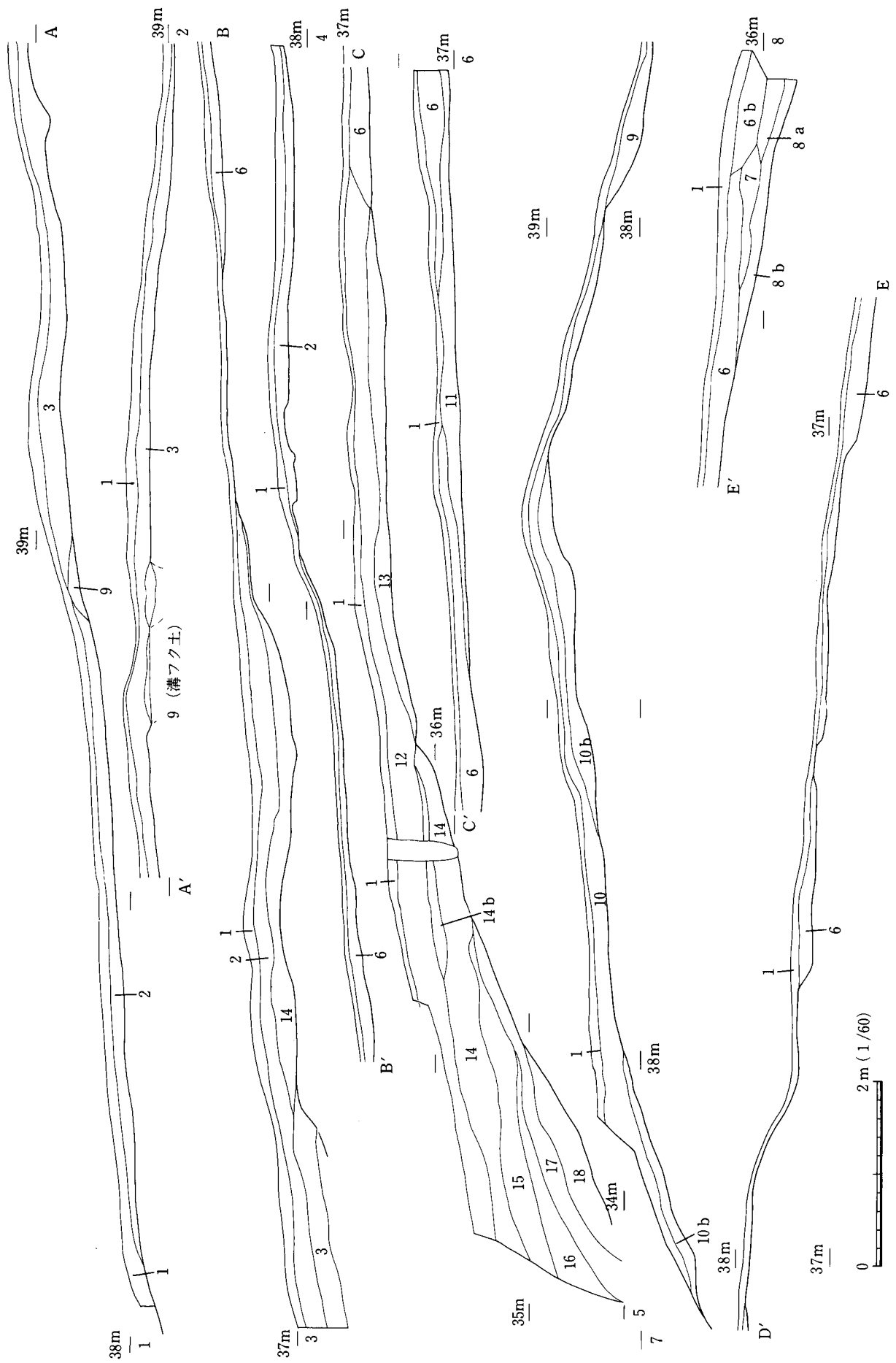


第40図 第1～3号郭状遺構断面図

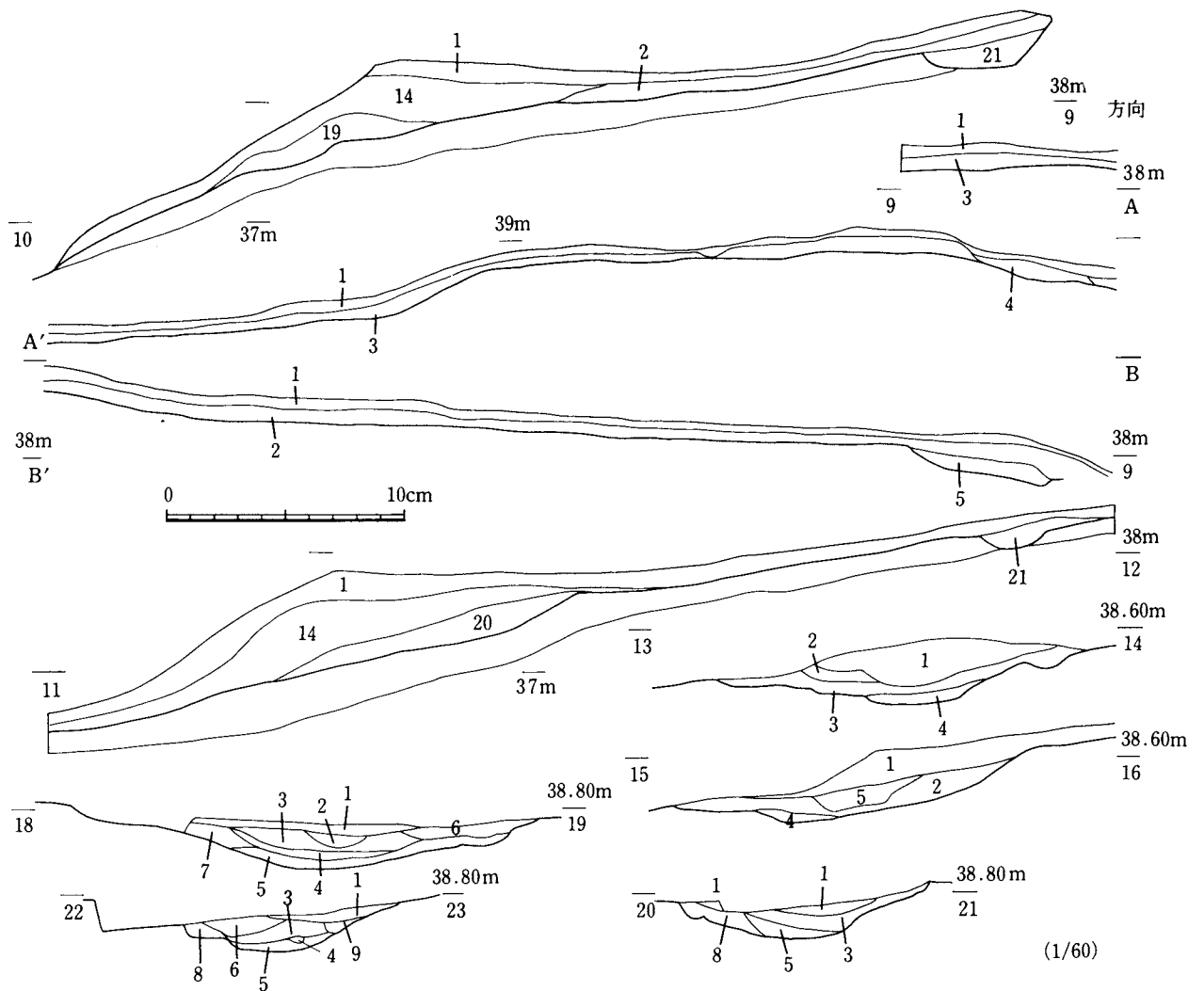


第41図 主郭状遺構実測図

(1/200)



第42図 主郭状遺構断面図(1)



主郭状遺構層位 (第41図 1~12ライン)

1. 表土
2. 黄褐色砂質土(しまりがやや甘い)
3. 淡赤黄褐色砂質土(しまりがやや甘い2層よりは良い)
4. 暗黄褐色砂質土(しまりがなく、パサパサ)
5. 灰褐色砂質土(やや粘性あり)
6. 淡灰褐色砂質土(やや粘性あり)
7. 濁黄赤褐色砂質土(しまりが甘く、パサパサ)
8. 暗黄褐色砂質土  
8 b(やや褐色が強い)
9. 淡褐色砂層(しまりが甘い)
10. 淡黄褐色粘質土(やや赤っぽい、固く、やや粘性あり)  
10 b(褐色が強い)

中央丘陵溝層位 (第41図 13~16ライン)

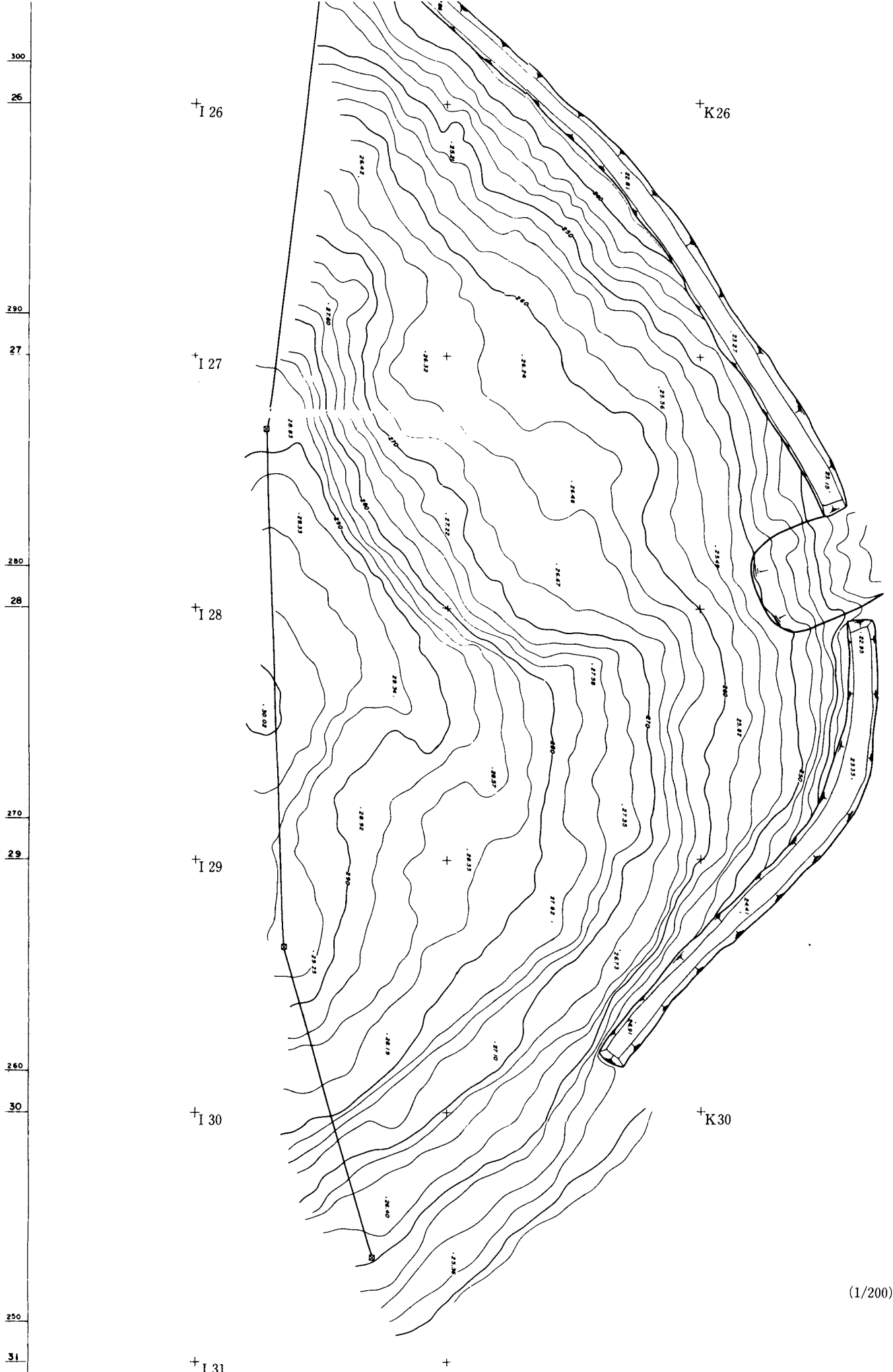
1. 黄橙色粘質土(しまりが甘く、少々炭を含む)
2. 暗灰褐色粘質土(しまっており、微量の炭を含む)
3. 灰褐色粘質土(しまりやや甘い)
4. 黒褐色粘質土(しまっており、炭を少々含む)
5. 淡褐色粘質土(ややしまっている)

11. 淡赤黄褐色砂質土(やや粘性あり)
12. 黄褐色砂質土(しまっており、堅い)
13. 濁黄褐色砂質土(しまりなく、パサパサ)
14. 黄橙色砂層(しまりが甘く、パサパサ)  
14 b(やや暗い)
15. 淡赤褐(橙)色砂層(しまりが無い)
16. 赤褐(橙)色砂層(15層より暗く、少ししまりがある)
17. 灰褐色砂層(しまりが甘い、包含層・旧表土)
18. 黄橙色粘質土(しまりある)
19. 暗褐色粘質土(しまりが甘い)
20. 黄灰色粘質土(しまりはやや甘い)
21. 灰褐色粘質土(しまりが甘い)

中央丘陵山頂土坑覆土 (第41図 17~22ライン)

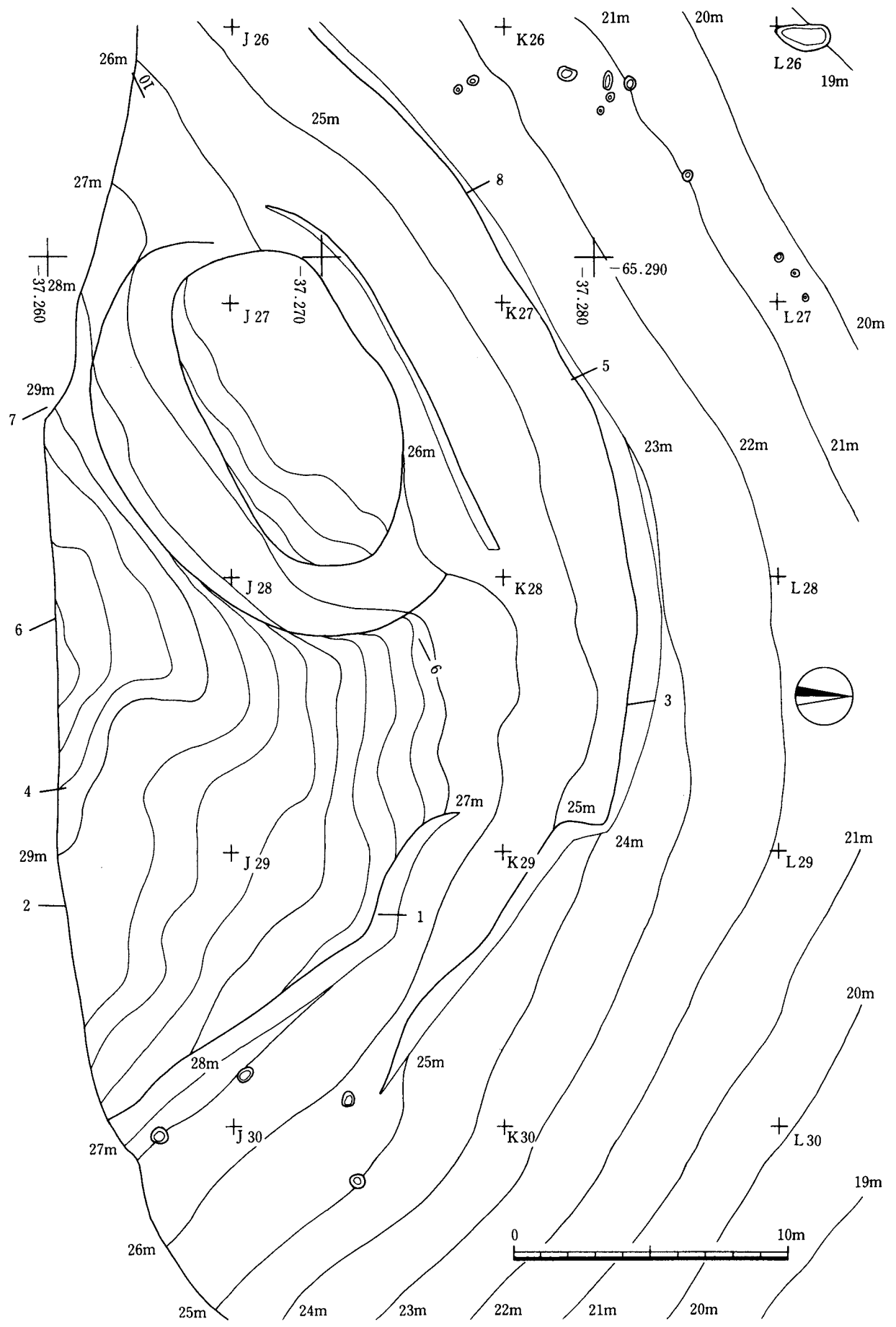
1. 黄橙色粘質土
2. 暗灰色粘質土(やや黄色粒子を含む)
3. 黒灰色粘質土(しまりは良い)
4. 黄橙色粘質土(ブロック状に入る)
5. 黒色粘質土(しまりは良い、炭少々含む)
6. 暗灰褐色粘質土(しまりやや甘く、黄色ブロックを含む)
7. 暗褐色粘質土(しまり良く、黄色ブロックを少々含む)
8. 灰褐色粘質土
9. 淡灰褐色粘質土(しまり良くかたい)

第43図 主郭状遺構断面図(2)

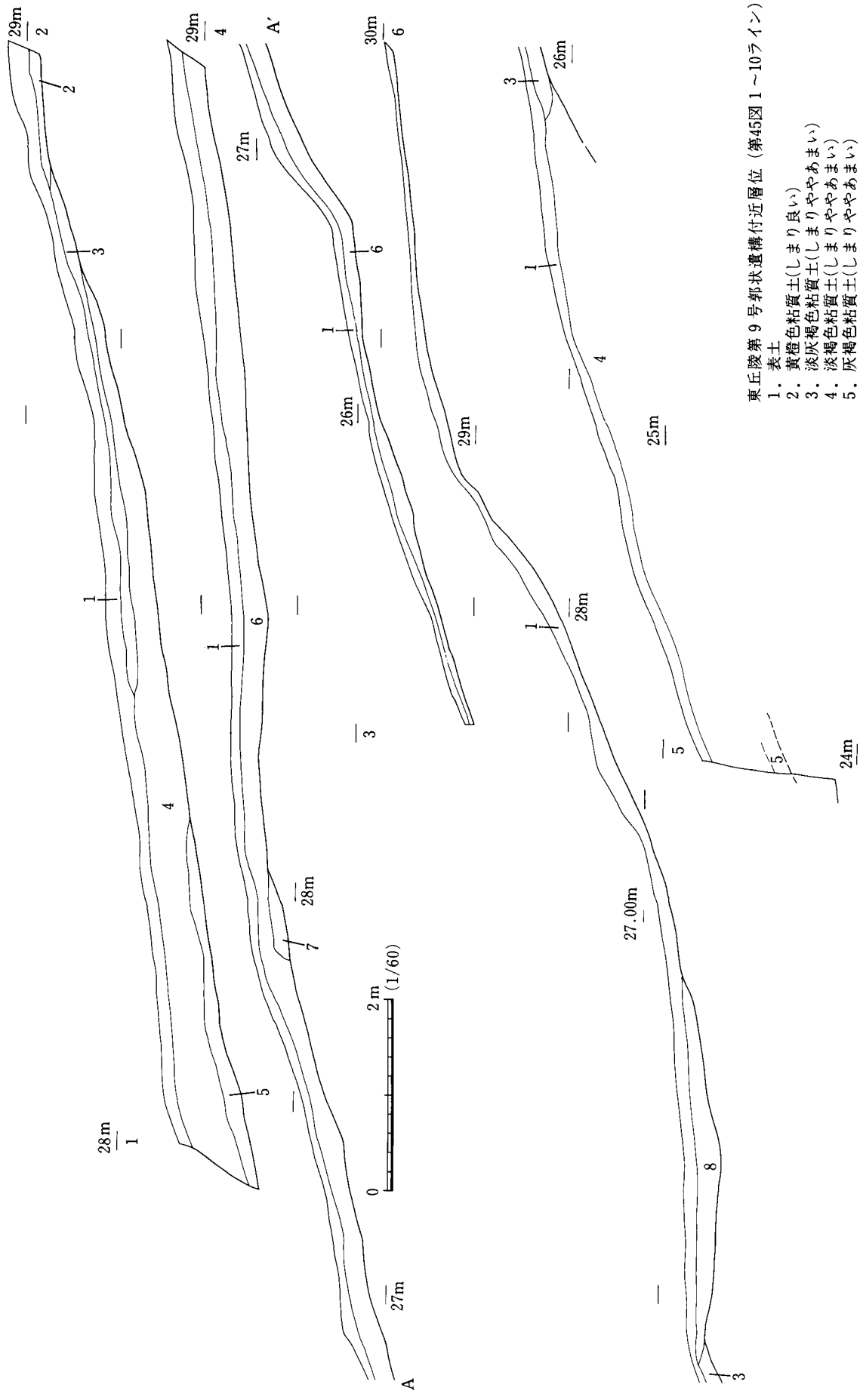


第44图 第9号郭状遺構現況図

(1/200)



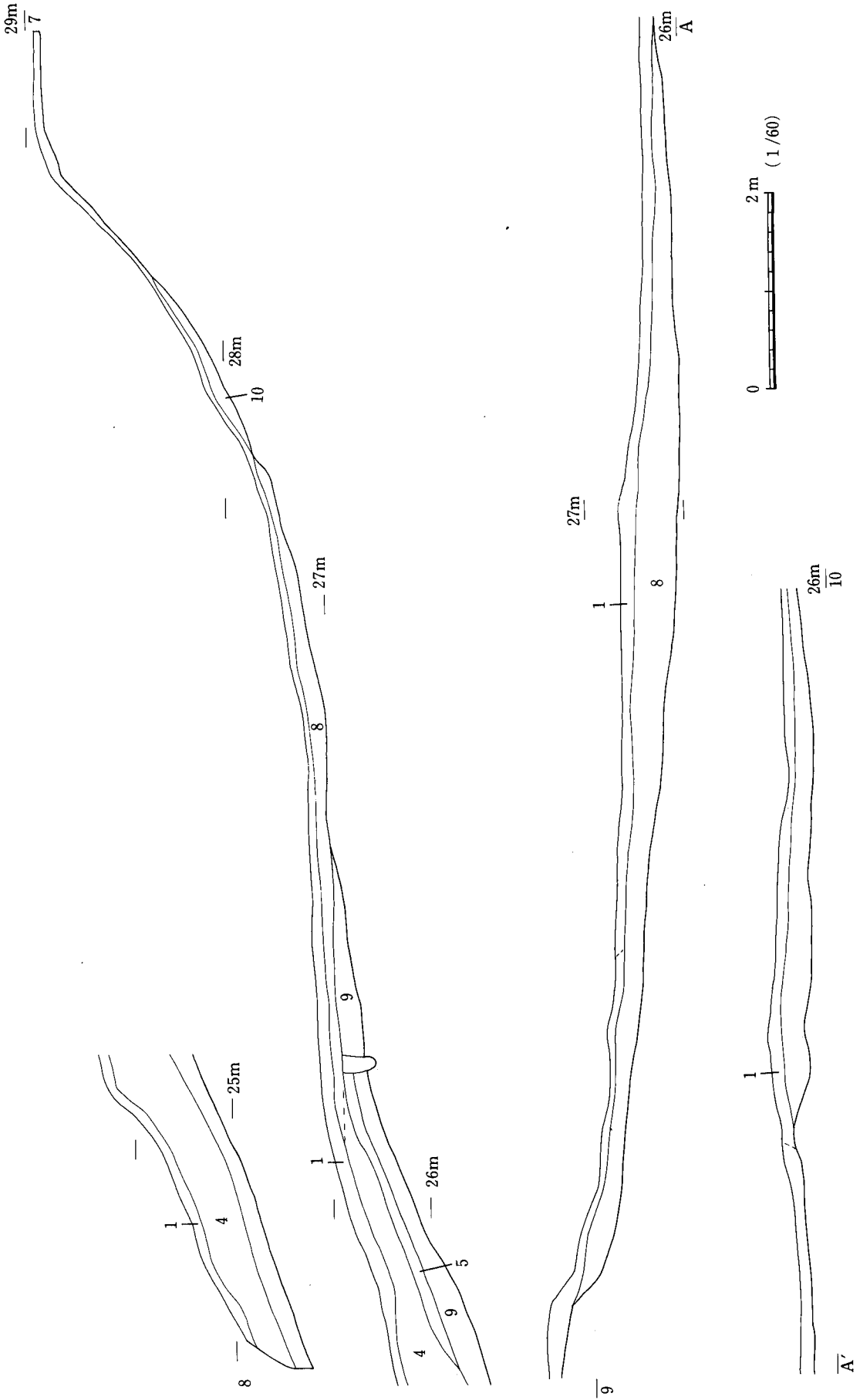
第45图 第9号郭状遺構実測図



東丘陵第9号郭状遺構付近層位 (第45図1~10ライン)

- 1. 表土
- 2. 黄橙色粘質土(しまり良い)
- 3. 淡灰褐色粘質土(しまりややあまい)
- 4. 淡褐色粘質土(しまりややあまい)
- 5. 灰褐色粘質土(しまりややあまい)
- 7. 暗灰褐色粘質土(しまりややあまい)
- 8. 淡黄褐色粘質土(やや褐色がつよく、しまりはない)
- 9. 淡赤褐色粘質土
- 10. 濁黄褐色粘質土

第46図 第9号郭状遺構断面図(1)



第47图 第9号郭状遺構断面図(2)



古代の須恵器(第55図20の破片)が出土した。また、主郭状遺構の東側には平坦面が存在する。この平坦面の東側も0.5~0.6m盛土が成されており、郭状遺構の可能性がある。またE18~F17区には、長さ10m以上、最大幅2.1m、深さ0.2mの溝が存在し、鉄器ないし鉄塊系遺物が出土した。また、G17区には不整形な土坑(長さ4.4m、幅2m、深さ0.6m)が存在するが、遺物の出土はない。覆土は黒色土であり、焼土粒子を含む。

**C地区(第44図)** 頂上よりやや下がった部分に存在する。地山と盛土で平坦面を構成し、等高線に平行な長軸を持つ。また、J~K26区には盛土上に築かれた小さな平場が想定出来る。東側には頂上に平坦面があり、その付近の表土から近世の赤瓦と炉壁(第57、58図)が出土した。70m東側にはカワラ屋敷という小字を持ち、赤瓦を多量に出土した地点がある。C地区に近世の瓦窯が存在したのか、後世の持ち込みかは不明である。

#### 第9号郭状遺構(第44、45図、図版43)

I26~J27区に位置する。東丘陵の頂上付近西側に立地する。楕円形の平場であり、12.4×6.6mを測る。平場は2/3程度が地山であり、山側を大きく削り出して盛土を行っており、K27杭付近は厚さ0.9~1mを測る。盛土部分は平坦である。出土遺物は須恵器(第55図30、31)が盛土から出土し、表土からは赤瓦(第57図1、2)が出土した。付近には赤瓦3ケース分が出土した。遺物からみると古代~19世紀中頃までの造成と思われる。

## 第5節 その他の遺構

### 1. 道路状遺構

#### 遺構(第48図、図版44)

I24~M25区に位置する。東丘陵の西側裾付近に存在する。調査中は遺物の出土したJ25区の溝を第10号溝、L25区の灰色溝を第11号溝と呼称した。ほぼ直線的に延びており、二条一対と思われ、K25区では溝間0.25mを測る。西側は幅0.1~0.2m、深さ0.1m、東側は幅0.1~0.4m、深さ0.1~0.2を測る。J~K25区では非常に堅い面が存在することや断面図3~4ラインでは堅い土手状の物が二個一対で機能していると思われることから、道路状遺構と判断した。現状でも付近には中央丘陵と東丘陵の境を通る山道が存在した。断面観察によると2回の作り替えが想定される。

#### 遺物(第55図17~19)

17、18は第10号溝、19は第11号溝出土である。17は口径12cm、器高2.6cmを測る土師質皿である。ナデ幅は器高の半分程度である。色調は黄橙色である。時期は14世紀頃と思われる。18は加賀焼の体部片であると思われる。19も加賀焼と思われ、押印を持つ。

### 2. 落ち込み

#### F1~H2区落ち込み

西丘陵西側に等高線に直行する落ち込みが3箇所確認された。最初は木炭窯の灰層と思われ、掘り下げたが、自然の黒色堆積土であった。

#### G19~L17区落ち込み

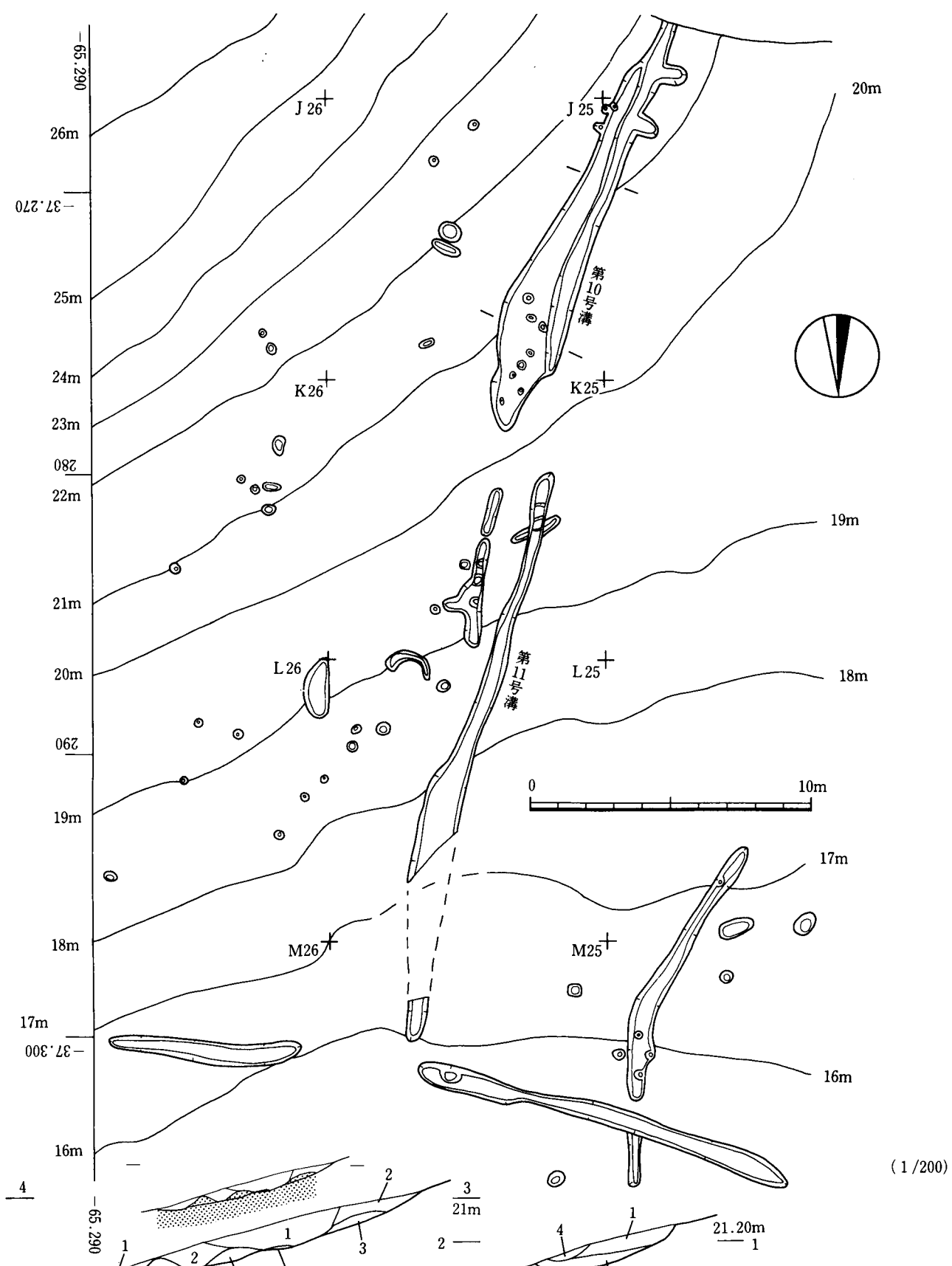
中央丘陵東斜面に位置する。試掘調査の際に、窯の落ち込みと思われるものを確認し、人力による断ち割りを入れたが、不規則な層序から自然の落ち込みと判断した。遺物は石皿(第56図6)が出土した。

#### N22区落ち込み(第49図)

調査中はN22区SXと呼称した。山側に溝(長さ8.2m、幅0.54m、深さ0.2m)を持ち、谷(北東)側に平坦面(8×2.5m)を持つ。付近にはピットが少しある。遺物は須恵器片と整形炉の炉壁と鉄滓が出土した。

#### K18~N20区落ち込み(第49図、図版45)

K18区から北東方向に延びる落ち込みであり、現況は水田であった。北側にもほぼ平行する落ち込みが存在し、

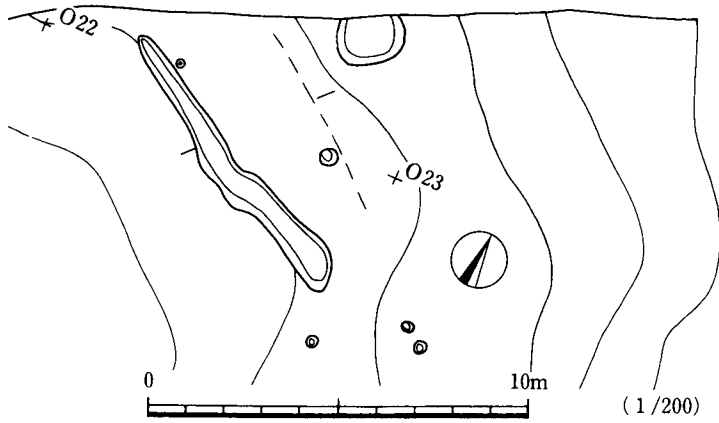


(1/200)

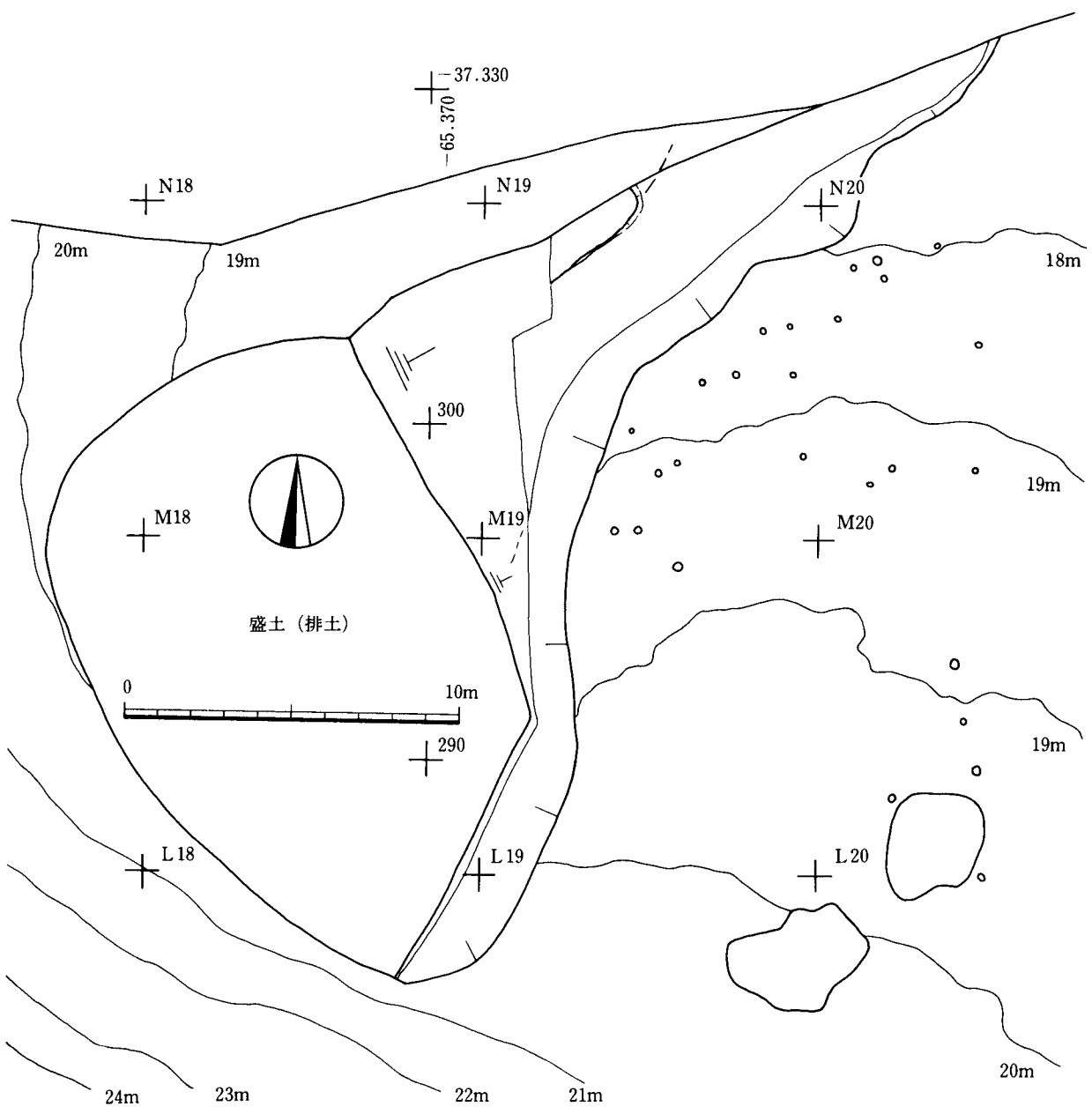
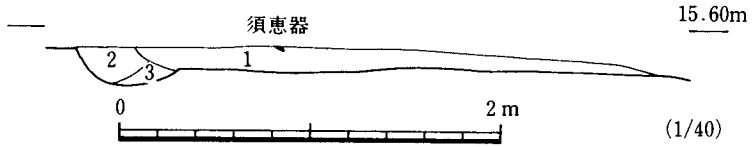
- 1 暗褐色粘質土(しまりはあまい)
- 2 淡褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土(非常に堅くしまっている)
- 4 黄褐色粘質土(しまりはややあまい)
- 5 淡褐色粘質土(しまっている)
- 6 灰色砂質土(非常に堅くしまっている)
- 7 灰褐色砂質土(堅くしまっている)

第48図 道路状遺構実測図

(1/40)



- 1…淡褐色粘質土(しまり良く、少々灰色み)
- 2…褐色粘質土(しまり良い)
- 3… " (しまり良く、やや黒色粒子を多く含む)



第49図 落ち込み実測図

その間は低い土塁状の高まりがある。高まりは軟らかい黄褐色砂層からなり、地山の上には鉄滓が出土したという(宮下氏教示)。よって、落ち込みは12世紀前半以降に、自然の谷を利用した土塁の一部(付属溝)の可能性がある。遺物は第55図22～24は須恵器である。22はN20区出土で、古墳時代の坏蓋である。23は蓋の摘みである。摘み径3.2cm、摘み高0.8cmを測る。24は壺・瓶類の体部片である。25は加賀焼であり、外面灰色、内面褐色を呈す。26はN20区出土である。龍泉窯系の青磁碗であり、15世紀代と思われる。底径6.2cmを測り、内面に沈線を持つ。素地は灰白色、釉はオリーブ灰色である。貫入があり、断面には漆の補修痕がある。27はN20区出土の青磁である。細い蓮弁を持ち、16世紀代と思われる。素地は灰白色であり、釉は火を受けて色あせている。28は染め付けであり、N19区出土である。内外面には貫入が入る。

### 3. ピット群

ピット群は西丘陵とその東側、東丘陵の北側に分布する。西丘陵は丘陵尾根上に存在する一群、中央谷部の南側の一群(上下2面)、南東部の一群、中央部の一群、谷を越えた所の一群が存在する。東丘陵は道路状遺構・郭状遺構の登り口付近に存在する。

G 6区付近(第50図) 上層と下層が存在する(図版45)。調査区隅に位置するために、全体像は不明である。G 6 杭付近から南側には平坦面が続く。上層の遺構は、土師器焼成土坑、下層は第1、2号土坑が存在する。包含層出土土器から、下層は8世紀代、上層は10世紀代中心と思われる。土器の他には箱形炉の鉄滓(炉外流出滓)1点と竪形炉の鉄滓(炉内滓)1点が出土した。ピット出土遺物は全て土師器(第55図1～12)である。時期は10世紀後半～11世紀前半代と思われる。1～4はP1出土である。1は口径37.6cm、頸部径36cmを測ると思われる埴である。2は口径14.4cmを測る坏である。3は底径6.2cmを測る。4は底径6cmを測る。5はP11、14出土の長胴甕である。口径17cm、頸部径13.4cmを測る。6、7はP15出土である。6は底径8cmを測る。7は赤彩、内黒の有台碗であり、内側はミガキ調整、底径8.8cmを測る。8、9はP26出土である。8は甕であり、口径12cm、頸部径11cmを測る。9は口径20cmを測ると思われる。10はP7出土である。大型の埴と思われ、口径38cmを測る。11はP34出土である。長胴甕の底部である。外面に平行線文、内面に同心円文のタタキを持つ。平行線文は内堀分類a類(花塚1984)である。内面はタタキのち軽いナデ調整のために判然としないがa類と思われる。

G 8区付近(第52図上段) G 6区(第50図)の東谷側に位置する。東側は水田で攪乱され、西側は調査区外の平地になる。柱穴が並ぶものが2列存在するが、柵や建物になるかは不明である。

H～I 6区付近(第52図中段) 土坑を中心に柱穴が存在するが、建物になるかは不明である。

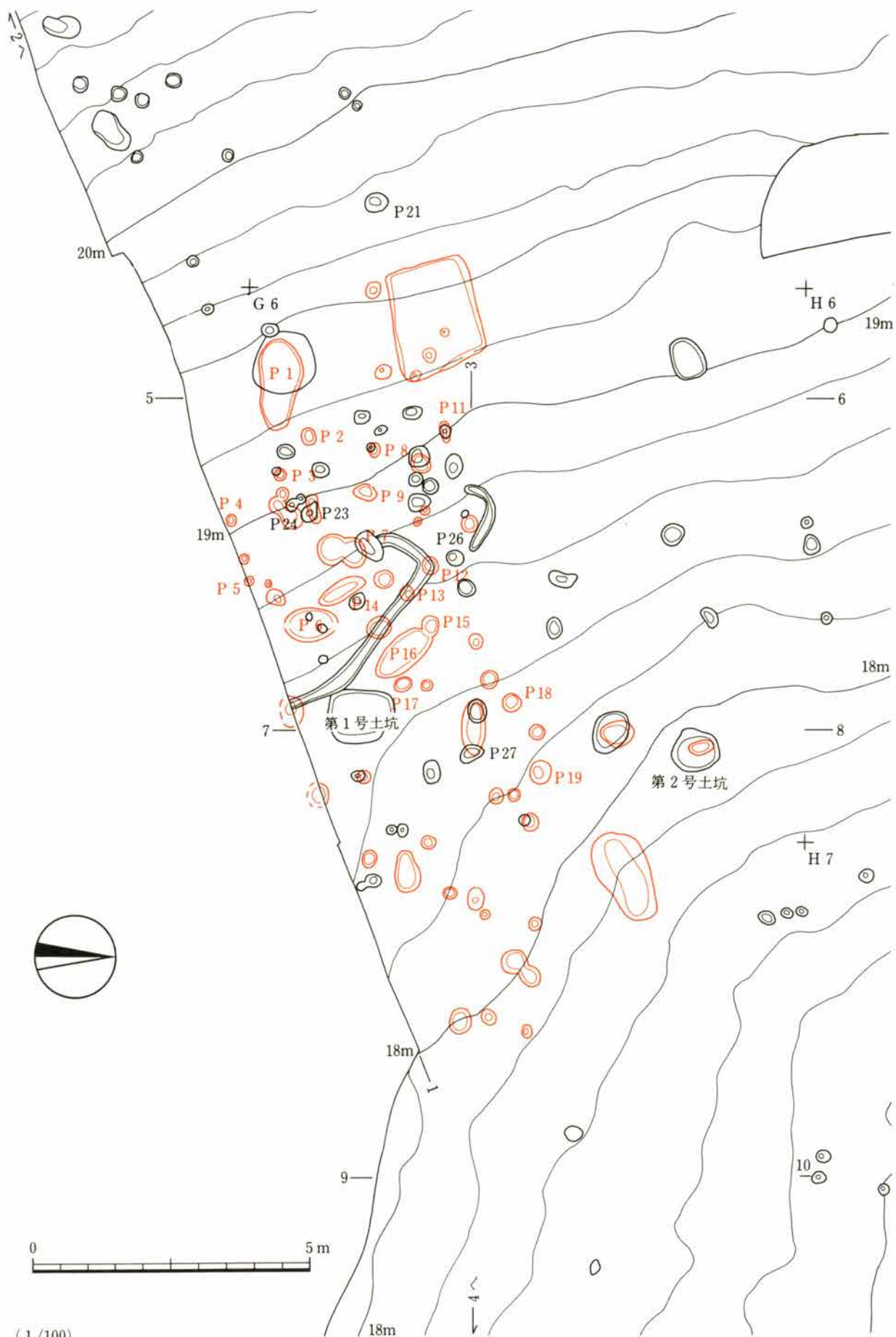
I 6～7区付近(第52図下段) 第2号炭窯の北東側に、柱穴が並ぶものが存在するが、建物になるかは不明である。I 6区包含層には、須恵器窯の坏蓋1点、大型甕の1個体程度の胴部破片(7世紀前半)が出土した。

## 第6節 調査区出土遺物

細片が多く、口径などは全て復元径である。西丘陵～中央丘陵西側、X 4 Y 18・19区、東丘陵頂上付近は包含層と流土を人力で遺構確認面まで下げた。中央丘陵東側以東は重機で下げた。

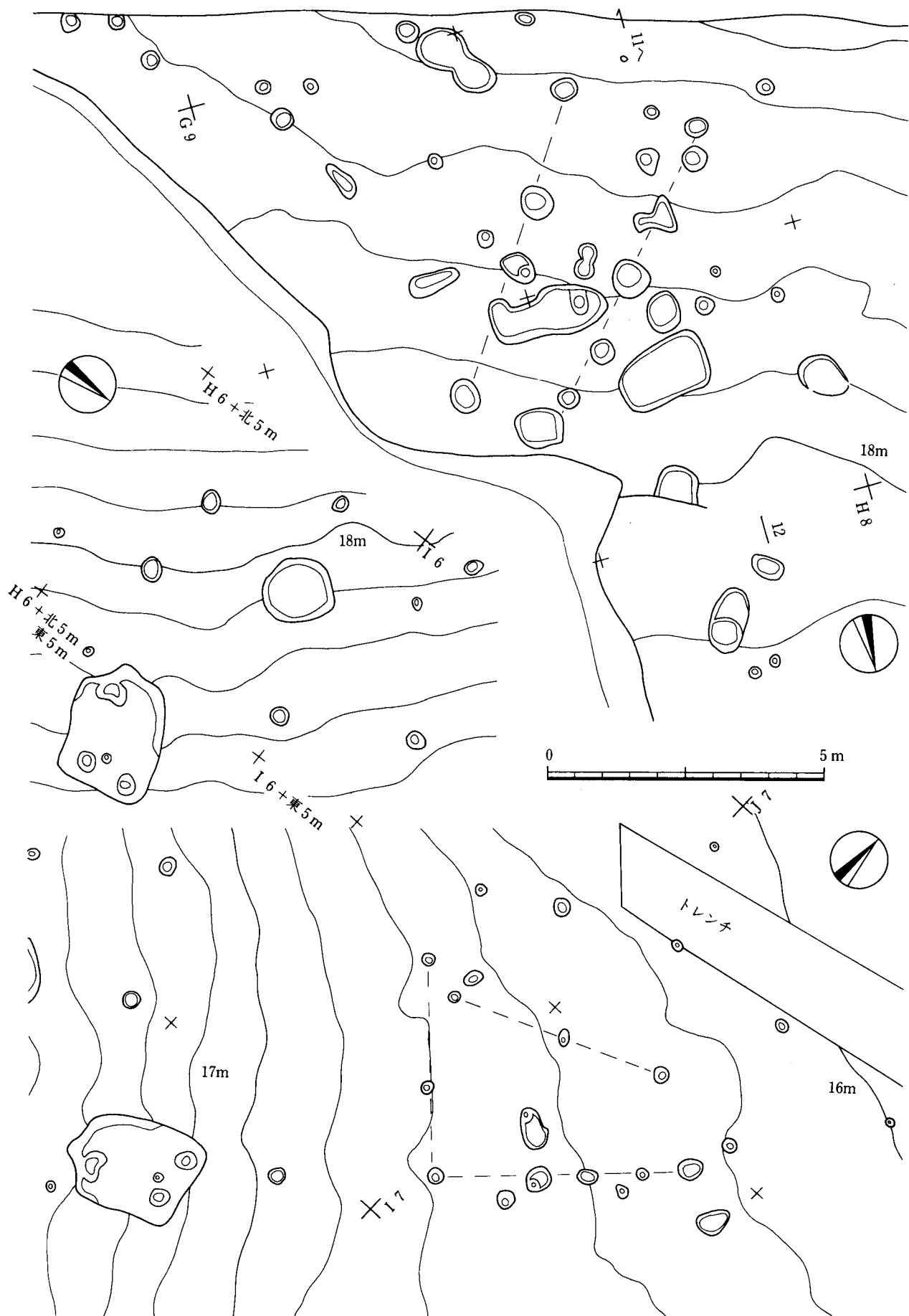
### 1. 西丘陵～中央丘陵西裾地区(第53図1～第54図70、図版88・89・91)

須恵器 1は7トレンチ出土の坏であり、8世紀代と思われる。口径11.8cmを測る。外面に降灰が認められ、口縁部には重ね焼きの痕が認められる。2～4は9～10世紀代と思われる。2はG 6-13上層、6-12・17区出土の坏である。破片がG 6区、G 6-18区に出土した。口径14cmを測る。外面の半分と内面の大部分に降灰が認められる。3はG 6-16区・1トレンチ中央出土の坏である。口径16cmを測る。内外面に降灰が認められる。4はG 6-12区出土の坏である。口径16cmを測り、口縁端部を厚くしている。5はJ 7区出土の盤であり、8世紀後半



第50图 G6区付近实测图





(1/100)

第52図 ピット群実測図

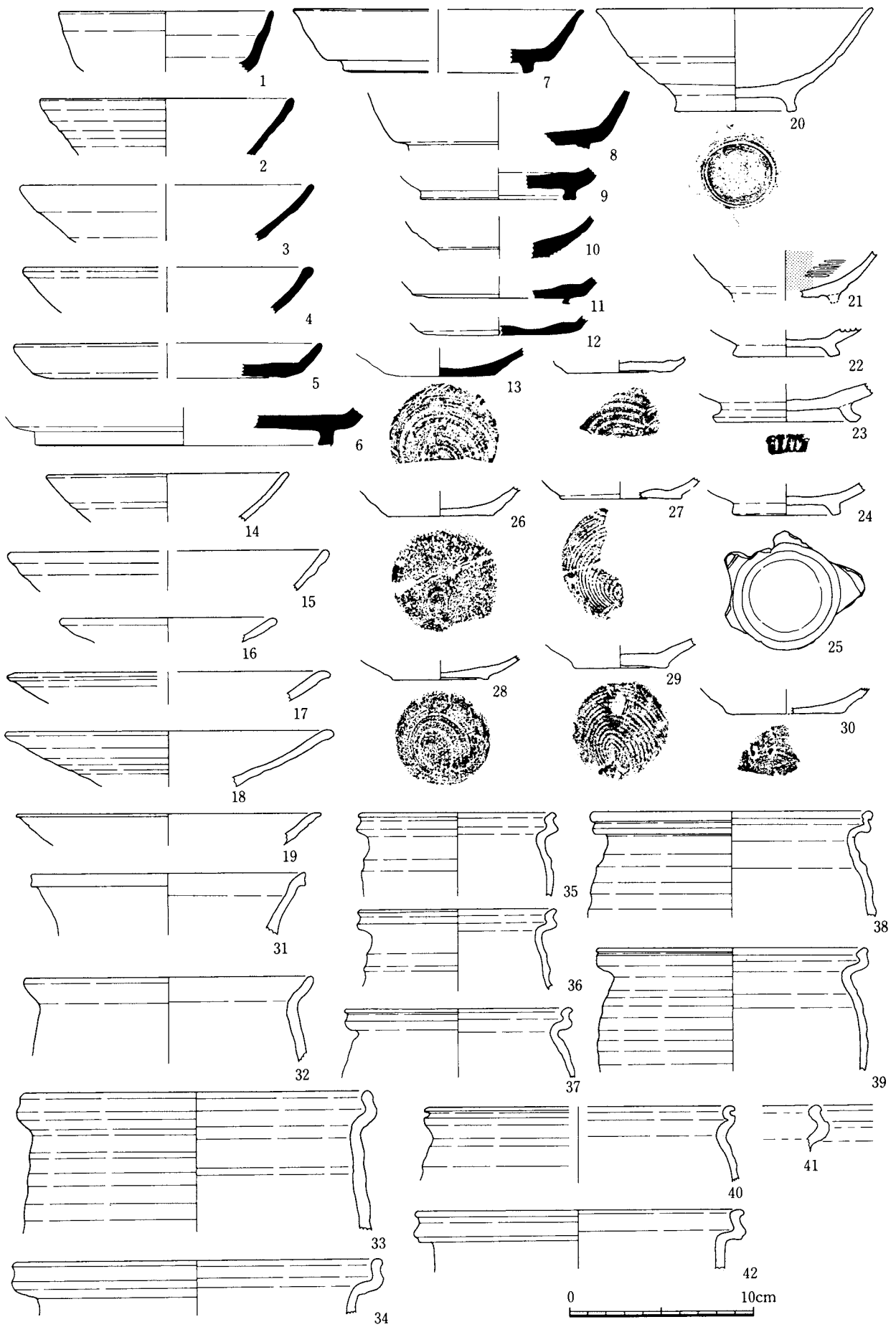
～9世紀前半と思われる。口径17cm、底径14.8cm、器高1.9cmを測る。底部成形は回転ヘラ切りのちナデである。口縁部上半に重ね焼きの痕が認められる。6は9トレンチ東半出土の有台盤である。底径18.6cm、高台径16.2cm、高台高0.8cmを測る。内面と高台内外面には降灰が認められる。7は1トレンチ西半出土の有台盤であり、8世紀代と思われる。口径16cm、底径12.2cm、高台径10.6cm、高台高0.6cmを測る。口縁部内外面と底部内面に降灰が認められる。8はG6区出土の有台坏である。底径11.4cm、高台径10cmを測る。9はG8区水田部出土の有台坏である。底径10.8cm、高台径8.6cm、高台高0.6cmを測る。外面全体と高台底面まで降灰が認められる。10はG6-13区出土であり、底径7cmを測る。11はG6区出土の坏である。底径9.6cmを測り、底部成形は回転ヘラ切りのちナデである。12はF1区出土である。底径9cmを測る。13はG8-10出土である。底径6cmを測り、回転糸切り痕を残す。

**土師器 埴・皿類**、時期は9世紀末～11世紀初頭と思われる。14はG6-7区下層出土であり、口径13cmを測る。15はF6-5区下層出土の赤彩埴(?)であり、口径17.4cmを測る。16はF6-5区下層出土であり、口径12cmを測る。17はG6-12区出土である。口径18cmを測る皿であり、口縁部をやや外反させる。18はG6-12区出土である。口径18cmを測る皿と思われ、赤彩される。19はG6-12区出土であり、口径16.8cmを測る。20は1次調査出土地点不明(土師器焼成土坑?)である。口径15cm、器高5.7cm、高台径6.6cm、高台高0.7cmを測る。体部下半にケズリを入れる。21はG6-11区出土であり、高台径5.6cmを測る内黒埴である。22はG8-4区出土であり、高台径5.8cm、高台高0.5cmを測る。23は2トレンチ東半出土であり、高台径8cm、高台高0.8cmを測る。底部には回転糸切り、高台端部には4本の櫛状具による刻目痕を持つ。24はG6-16区出土である。高台径5.8cm、高台高0.6cmを測り、外面を赤彩する。底部は回転糸きり後ナデである。25～30は無台坏か皿の底部であり、底部に回転糸切り痕を残す。25はG6区出土であり、底径5.8cmを測る。26は1トレンチ東半出土であり、底径5.8cmを測る。27はG8-11区出土であり、底径6.6cmを測る。28はG5-22区出土であり、底径5.4cmを測る。29はG6-6区出土であり、底径6.4cmを測る。壺類、31は1トレンチ西半出土の壺であり、口径15cmを測る。

**甕・埴類** 32はG13-3区褐色層出土であり、8世紀後半代と思われる。口径15.8cm、頸部径14cmを測る。他は10世紀後半～11世紀初頭頃と思われる。33、34は10世紀前半の可能性もある。33はF5-25区出土であり、口径18.8cm、頸部径18.2cmを測る。34はF6-5区下層出土であり、口径20cm、頸部径17.4cmを測る。35はG8-4区出土であり、口径10.8cm、頸部径9.6cm、胴部径10.6cmを測る。36はG5-21区出土であり、口径10.6cm、頸部径9.4cmを測る。37はG5-21区出土であり、口径12.4cm、頸部径11cm、胴部径12.8cmを測る。38はG6-12区出土であり、口径15cm、頸部径13.4cmを測る。39はG6-12区出土であり、口径14.4cm、頸部径12.8cm、胴部径14.6cmを測る。40はG6-16区出土であり、口径16.4cm、頸部径14cmを測る。41は1トレンチ出土である。42はG6-2区出土であり、口径17.8cm、頸部径16cmを測る。43はH8区出土であり、口径22.6cm、頸部径21.2cm、胴部径21.4cmを測る。胴部が張らない甕で、ロクロ調整のちカキメを入れる。器面が荒れているが内面にもカキメが入るようである。44は1トレンチ出土であり、口径21.4cm、頸部径19.6cmを測る。45はF6-5区下層出土であり、胴部径22.8cmを測る。46はF6-5区下層出土であり、胴部径16.6cmを測る。47～52は甕類の底部である。47はF8-20区出土である。底径13cmを測る。48はG6-1区下層出土であり、底径5.4cmを測る。49はG6-17区出土であり、底径6cmを測る。50はG6-21上層出土であり、底径6.2cm、胴部径15cmを測る。51はG6区黄土出土であり、底径6.2cmを測る。底部は回転糸切り後ナデである。52はF6-5区出土であり、底径7.2cmを測る。53～56は埴である。53はG6-1区下層出土である。54はG8-10区出土であり、口径35cmを測る。55はG8区出土であり、口径44.4cm、頸部径41cmを測る。56はG8-12区出土であり、口径43.4cm、頸部径40.6cmを測る。

**瀬戸・美濃焼** 57は8トレンチ中央出土の天目碗の高台である。底径4.4cm、高台径4cmを測る。高台は削出による。釉は鉄釉である。58はK9区出土である。黄瀬戸の小皿であり、時期は14～15世紀代と思われる。口径





(1/3)

第53図 調査区出土土器(1)

10cm、器高1.7cmを測る。

**朝鮮王朝陶器** 59は小皿であり、時期は16世紀と思われる。口径9cm、器高1.8cmを測る。素地は褐灰色、釉は灰黄褐色である。

**土師質皿** 60はM14区出土である。色調は淡白黄色である。色調は淡白黄色である。口縁部がやや外反しており、油煙痕がある。61はM14区出土であり、色調は淡赤褐色である。62はL12区出土である。色調は黄褐色であり、口縁部には油煙痕がある。60、62は京都系の土師器と思われる、15世紀後半以降にみられるものである。

**青磁** 63はL13区第5号溝付近出土である。龍泉窯系の碗であり、時期は14世紀代と思われる。口径16cmを測り、素地は灰白色、釉は明緑灰色である。64は龍泉窯製の盤であり、時期は14世紀代と思われる。内面には蓮弁を持つようである。素地は灰白色、釉は緑灰色であり、厚い。他にL12区出土の碗があり、14世紀代の龍泉窯系と思われる。内外面に貫入がある。

**加賀焼** 65は2トレンチ東半出土である。外面は暗赤褐色を呈し、素地は暗灰色である。内面には降灰が認められる。67はL12区出土の甕である。外面は暗い灰色、内面は灰色、素地も灰色をである。素地には白色粒子を多く含み、黒色粒子も含む。

**越前焼** 66はK9区出土で体部片と思われる。外面は暗い赤褐色、内面は淡赤褐色、素地は黄褐色を呈す。

**染め付け** 68は肥前系であり、18世紀代と思われる。推定口径9.8cmを測る。淡い藍色の二重網目文が入る。69は肥前系であり、17世紀中葉と思われる。高台径5.4cm、高台高0.8cmを測る。素地は灰白色、釉は明青灰色である。他に体部外面に寿の文様を持つものがある(写真図版89)。70は9トレンチ西半出土である。小松市若杉窯系であり、19世紀代と思われる。高台径3.6cm、高台高0.5cmを測る。見込みには文様がある。素地は灰白色、釉は明緑灰色であり、貫入が入る。

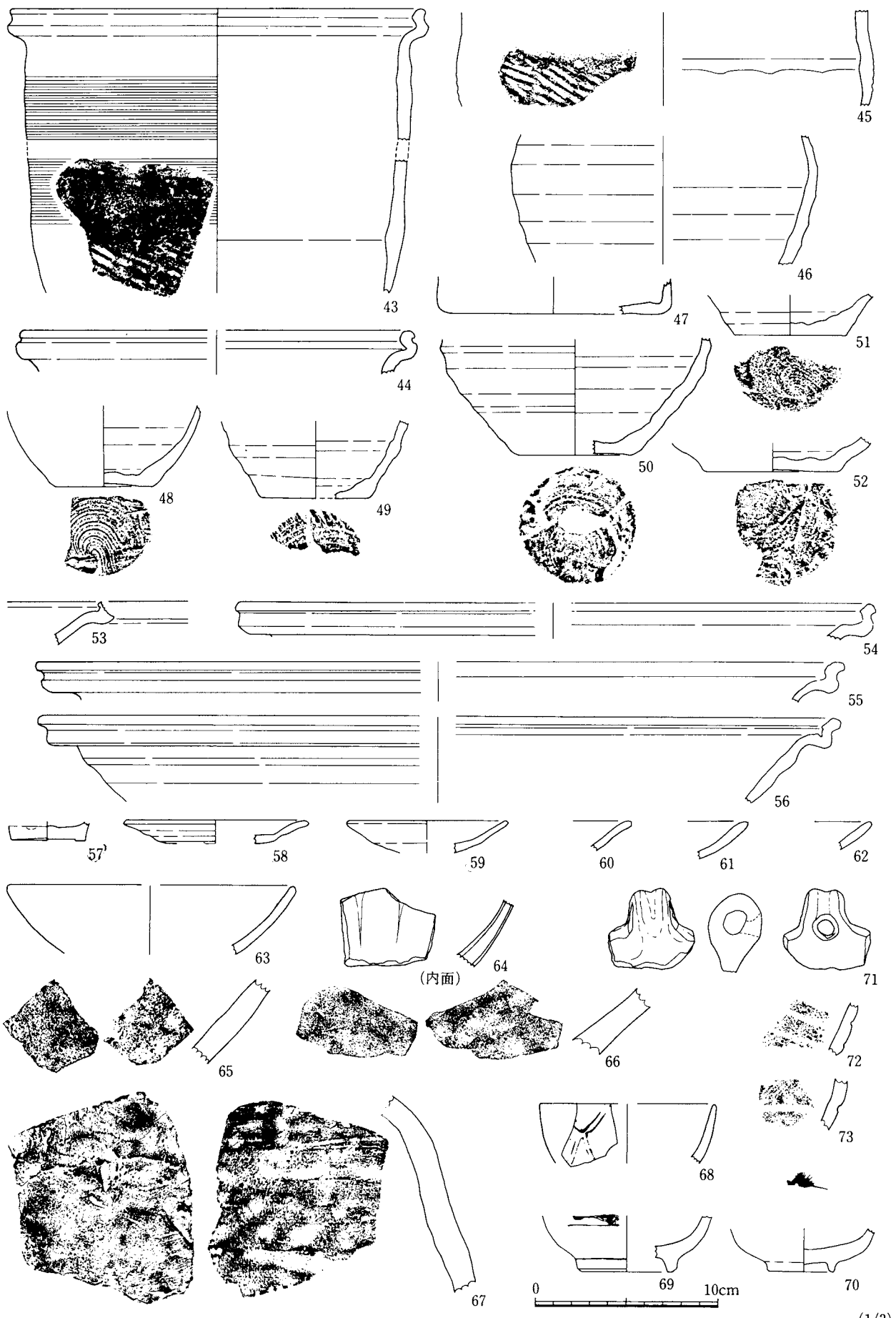
## 2. 中央丘陵(第55図12~14、20、21)

**須恵器** 12はH14-10区2号窯窯体内出土である。底径11cmを測る坏と思われるが、蓋の可能性もある。底部回転ヘラ切り後、雑なナデ調整を行なう。口縁部には淡青紫色の火襷が残る。この火襷の色は2号窯出土土器にはないという。13はH15区南東2号窯煙道黒下層(第12図3~Aラインへ層)出土である。時期は7世紀末~8世紀初頭と思われる。口径15.8cmを測る。14はH15-10区2号窯煙道上層出土である。時期は8世紀後半と思われる。口径16.8cm、器高2.7cm、摘み径3.2cm、摘み高0.8cmを測る。20はG16区北西、南東出土の無台坏であり、時期は8世紀前半と思われる。主郭状遺構と第1号郭状遺構内のカット部分から出土した。口径13.8cm、底径8.6cm、器高3.3cmを測る。口縁部上半分に降灰が認められる。21はH14-4区出土の有台坏・盤である。高台径12.8cm、高台高0.7cmを測る。

## 3. 中央丘陵東裾~東丘陵(第55図29~35)

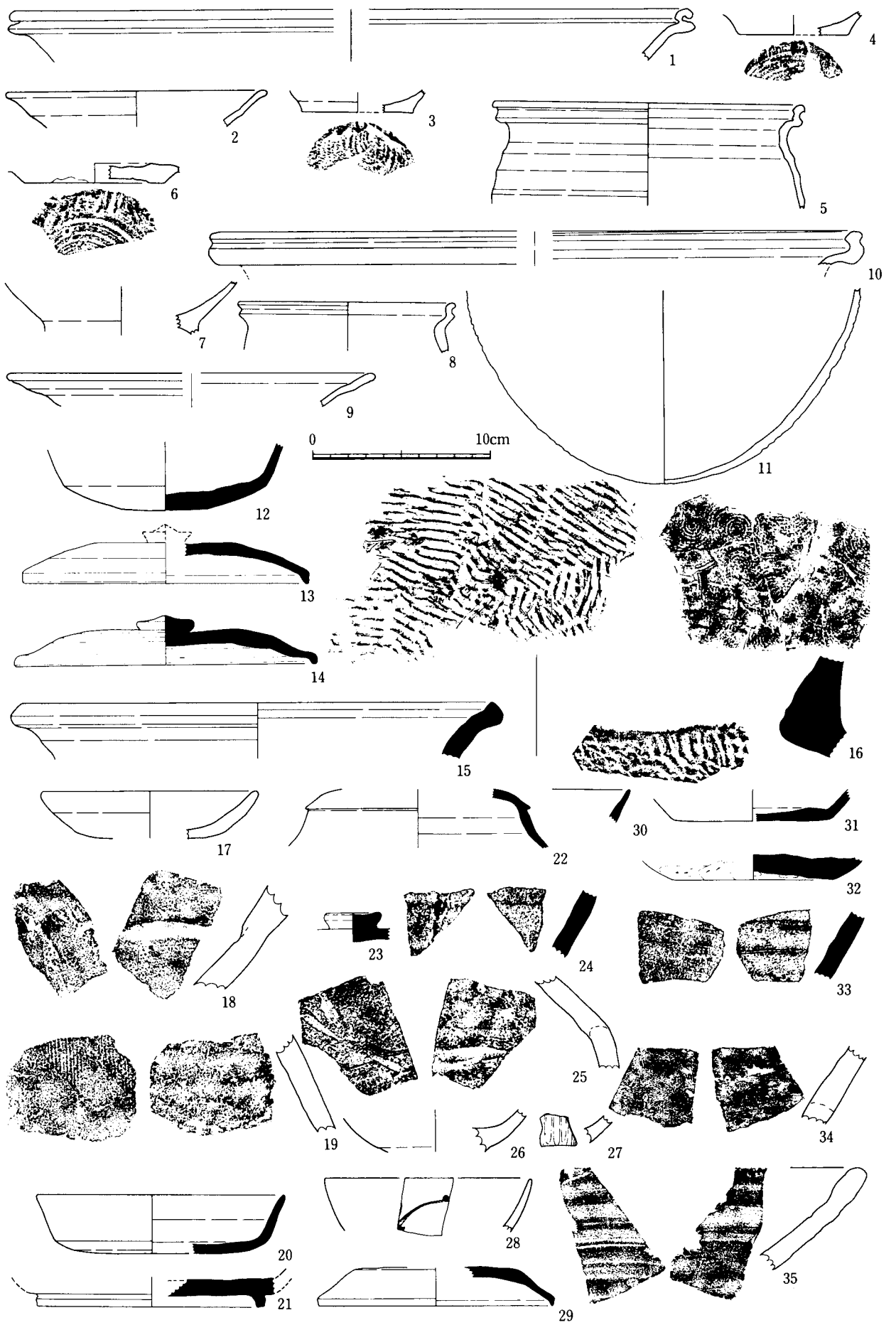
**須恵器** 29はL25区北東出土で、8世紀前半~中葉と思われる。口径13.2cm、器高(2.2)cmを測る。かえりの内外面に降灰が認められる。30、31は第9号郭状遺構盛土出土である。30はJ27区北西出土である。口縁部には重ね焼きの痕跡がある。31はJ27区北東出土である。底径8.8cmを測る。底部成形は回転ヘラ切りのちナデである。32は排土出土である。壺・瓶類の底部と思われる、底径9cmを測る。底部はケズリのちナデ、体部はケズリ調整である。33は壺・瓶類の体部片と思われる。

**加賀焼** 34はM29区出土である。体部片と思われ、内面には一部降灰が認められる。色調は淡い赤褐色で、素地は灰白色を呈し、胎土には黒い粒子が見られる。35はM29区出土の摺鉢である。色調はくすんだ灰黄色であり、素地は黄褐色である。



(1/3)

第54图 調査区出土土器(2)



(1/3)

第55図 調査区出土土器(3)



第56図 調査区出土石器

4. その他(第54図71~73、第56~58図、図版90・91)

**縄文土器** 第54図71はL13区茶褐色粘出土である。中期後半の浅鉢の把手であろう。72はX4Y19区出土である。半截竹管による渦巻文を持ち、中期中葉古府式であろう。73はX4Y19区出土であり、縄文を持つ。

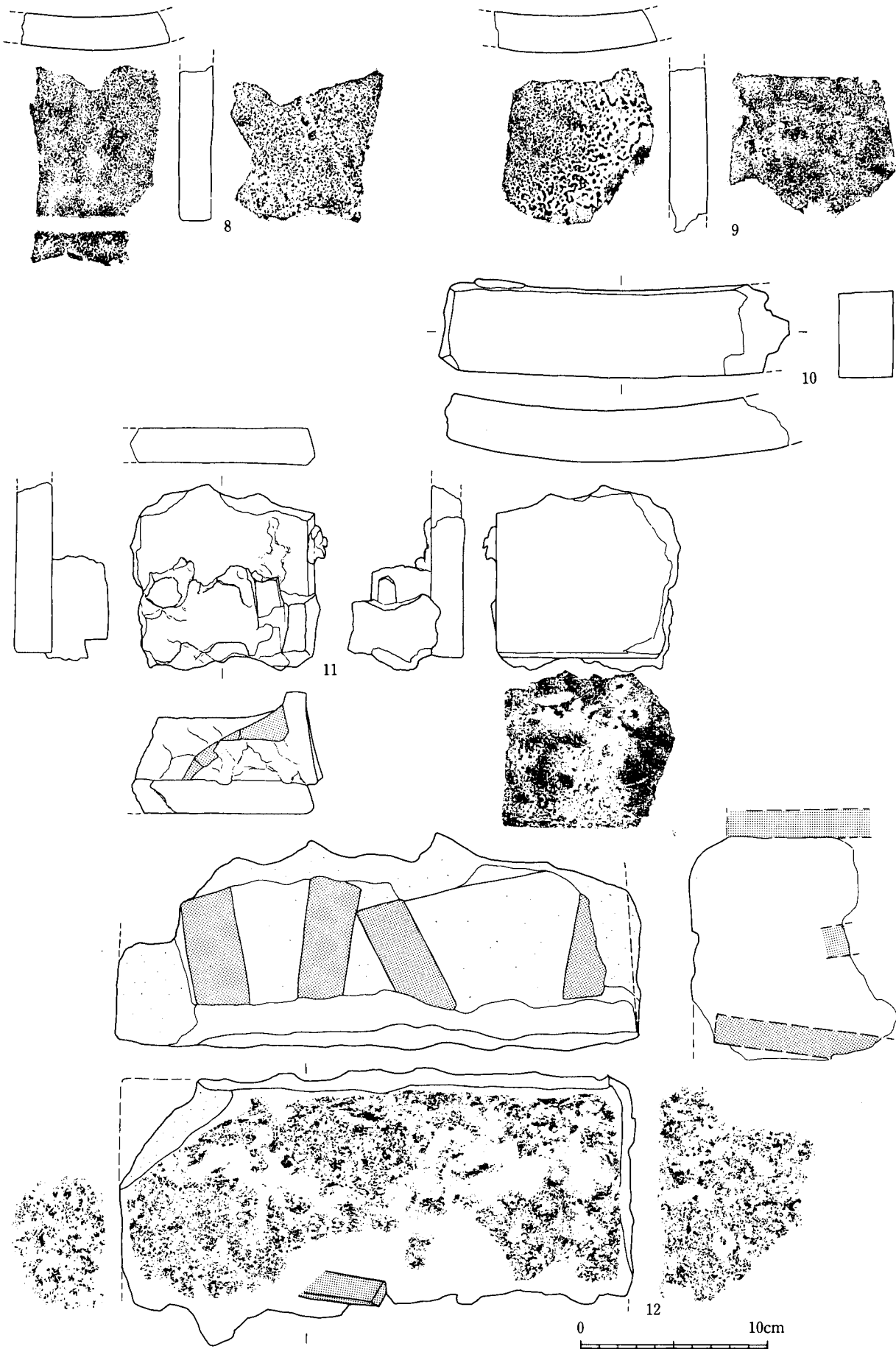
**石器** 第56図1はJ8区出土である。チャート質の石鏃であり、長さ2.2cm、幅2.6cm、重さ0.9gを測る。2、3は安山岩質の剥片である。4はF2区出土である。珪質凝灰炭ないし流紋岩の剥片石器であり、裏面右側に刃部を持つ。上には自然面を残す。長さ6.2cm、幅5cm、刃部長さ4cm、重さ50gを測る。風化の度合いから旧石器の可能性もある。5はG13-6区褐色層出土の鉄石英であり、母岩の可能性はある。長さ4cm、幅5cm、重さ42gを測る。6は石皿であり、J18区SX(落ち込み)出土である。7は焼台であり、H14-10区2号窯出土である。長さ16cm、幅12cm、厚さ6.4cmを測る。8、9は砥石であり、8はN19落ち込み、9はJ9区出土である。8は欠けているが2面を使用する。9は4面とも使用し、断面が菱形に変形する。長さ8.2cm、幅2.2cmを測る。10は軽石であり、2面を使用している。長さ7.3cm、幅5cm、重さ21.4gを測る。

瓦 第57図1はX4Y18-80区表土出土である。素焼きの瓦であり、表面はいわゆる灰釉(自然釉)の発色である。表面は丁寧に仕上げられており、自然釉は薄く斑や表面のひび割れは見られない。裏面には離れ砂が認められる。時期は近世と思われる。2~12は近世~近代にかけての(赤褐色の釉がかかる)赤瓦(久保1989)であり、東丘陵(JK27、28区付近)出土である。2はI27区南西表土出土である。表面の釉の発色は黒褐色で薄く、光沢もない。尻側の線より上は無釉である。裏面の釉の発色は暗赤褐色であり、やや斑があり、ほんの少し光沢を持つ。炉壁の繋ぎに使われた瓦と思われる。厚さは1.7cmを測る。3はI27区南西表土出土である。釉の発色は暗赤褐色であり、光沢を持ち、表面がやや縮む。軒棧瓦であり、小丸部を持たない鎌軒棧瓦である。瓦当面の外区左側には⊗ないし⊕の刻印を持つ。文様は蓮代寺系均整唐草文(久保1991)と思われるが、類例がなく系統・全体の文様は不明である。平瓦部の厚さは1.7cmである。4はJ28区中央表土出土である。棧瓦であり、表面は光沢を持たず、裏面の平瓦部にのみ光沢を持つ。表面の平瓦部では、釉の発色はにぶい黒褐色、丸瓦部はくすんだ灰白色である。裏面の平瓦部では、釉の発色はくすんだ黒褐色である。軒先に⊗ないし⊕の刻印を持つ。厚さは1.8cmである。5はJ28区中央表土出土である。平瓦であり、尻側左側に切り込みを持つ。表面と側面では、釉が少し光沢を持つが、均一ではなく、光沢を持たない部分もある。釉の発色はにぶい灰褐色である。裏面は光沢を持たず、釉の発色はくすんだ灰褐色である。切り込みから頭部までの長さは3.8cm、厚さは2cmである。6はJ28区中央表土出土である。棧瓦の尻側に3.5×4.5cmの切り込みを持つ。止め釘穴が存在する。釉の発色は丸瓦部は暗赤褐色であり、平瓦部は茶褐色である。光沢を持ち、表面がやや縮む。釉は掛かりはややむらがあり、頭部から尻部に流れた痕が見られる。切り込みから頭部までは27.3cmである。瓦の厚さは1.7cmである。7はJ28区北西表土出土である。炉壁の繋ぎに転用されたものであり、炉壁粘土の一部が付着する。釉の発色は茶褐色であり、厚く光沢を持つ。厚さは1.7~1.8cmである。第57図8はJ28区北西表土出土である。炉壁の繋ぎに使われた瓦であり、表面が変色している。厚さは1.7cmである。9はI28区北西表土出土である。釉の発色は茶褐色で厚く、光沢を持つ。厚さは2cmである。10はJ28区中央表土出土である。やや青みが掛かった灰色(無釉)をするが、左角部分に赤褐色の光沢のある釉(鉄釉)がかかる。図の上・下側面はくすんだ黒い黄色の降灰が多く、表面と裏面には少々付着する。長さ4.3cm、厚さは3.3cmを測る。反りの具合が平瓦の反りと一致することや鉄釉が付着することから、瓦窯道具と思われる。瓦と瓦の間に入れて付着しないようにしたのではないかと思われる。同じ物が炉壁の繋ぎにも使われている。11はJ28区北西表土出土であり、赤瓦を繋ぎに入れた炉壁の一部である。粘土は砂・小石を多量に含み、粗い。右側面は茶褐色に溶解している。赤瓦は茶褐色の厚い釉であり、光沢を持つ。厚さは1.7cmである。12はJ28区中央表土出土の炉壁である。正面と側面は生きており、幅27cmである。表面は焼けて、発泡したり、爛れが見られる。赤瓦と粘土を交互に積み重ねており、上は繋ぎの瓦の部分で剥離している。上面の中央部右側の斜めラインは瓦の剥離した痕である。粘土は砂粒を大量に入れており、非常に粗い。火道部分の炉壁と思われる。瓦の時期は久保1992によると19世紀中頃以降と思われる。

なお中世の土器に関しては藤田主任調査員、石器に関しては岡本主任調査員、瓦に関しては久保・木立両氏から教示を得た。



第57図 調査区出土瓦(1)



第58図 調査区出土瓦(2)

(1/3)



## 第7節 製鉄関連遺構

### 1. 概要

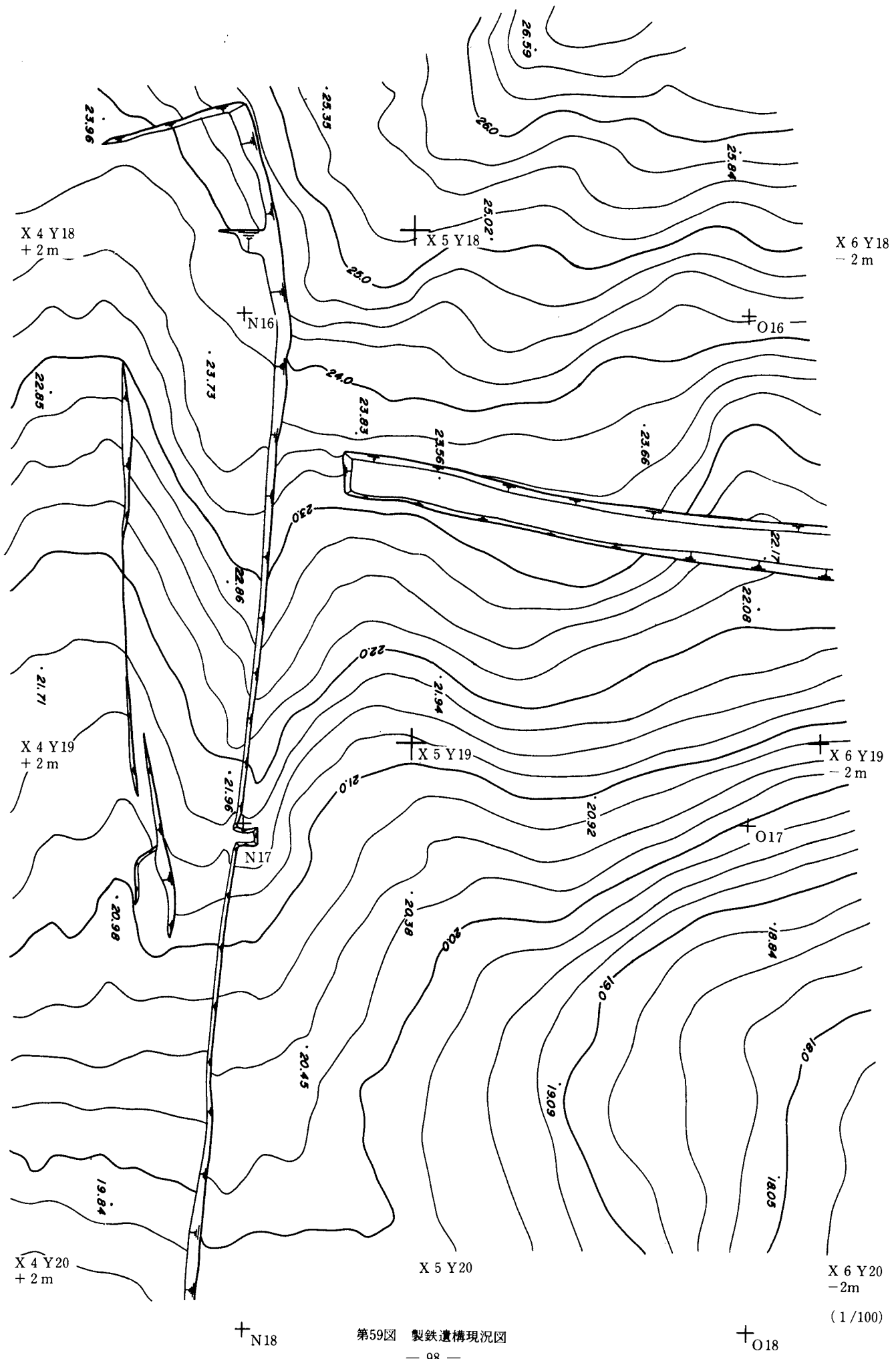
製鉄関連遺構はM16～17区に位置する(第61図)。第1次調査中に山道部分の攪乱中に箱形炉の鉄滓(流出滓)・炉壁、鉄塊系遺物などが散布していた。M16区北西の断面には、炭層が確認された。M17区北側の表土除去作業中に、N17杭付近に鑄型(第73図16)、炉壁の集中地点が確認(第70図)され、豎形炉の存在が想定された。N17杭付近では以北が小松市教育委員会の発掘調査区に当たり、調査を一時中断した。建設省・小松市教育委員会との協議の結果、X5杭まで(幅2.5～4.5、長さ20m)は、当協会が発掘調査を行なうことになった。調査はX4Y19区(谷側)から実施し、X4Y18区(山側)へと掘りすすめた。X4Y18区北西側に豎形炉、鑄型埋設土坑等が確認された。豎形炉はX5Y18区側(北側、小松市教育委員会調査区)に伸びていた。当協会と小松市教育委員会と協議の結果、豎形炉と鑄型埋設土坑は完掘せずに、現状のままで、小松市教育委員会に引き渡すこととなった。完掘していないのでこの報告書では概要程度の記述しか出来ないことを明記する。よって、豎形炉の寸法などは、正確ではなく、今後報告される市教委報告(報告書)で確認願いたい。

検出した遺構は全てX4Y18区に存在する(第61図)。豎形炉はY18-40・50区に位置し、1m山側のY18-30区に送風関連施設(フイゴ座)が存在する。送風関連施設と豎形炉をコの字状の排水溝が囲む。送風関連施設の南側Y18-6～38区には作業場(炭置き場も兼用)が存在する。豎形炉の南東側Y18-49～60区に鑄型埋設土坑が存在し、鑄型はY18-59～60区南端に存在する。Y18区8～9列(8・9～98・99)付近は自然の谷頭が入っているが、Y18-48～98区の8列は断面図(第64図5～13)によると、やや掘り凹めているようだ。また、排水溝の下方はこの自然の谷も利用しているようである。鑄型埋設土坑は豎形炉の作業面(前庭部)に炉壁・鑄型破片などを充填して、鑄型を逆さまに据えている。遺物は鉄滓・炉壁などが多量に出土し、(明確な)鑄型や土器は少ない。土器は7世紀前半の須恵器片10点程度と12世紀前後の土師器柱状高台2点が出土した。1つは送風関連施設の床面(第62図)、もう一つは炉壁集中地点付近(第71図下段)出土である。

小松市教育委員会平成2～3年度調査では、製鉄炉は楕円形の炉壁の中に方形の炉が存在した(宮下1992)。これは、楕円形の豎形炉(製錬炉)を利用して、方形の炉(溶解炉)を築いた可能性が想定される。また、豎形炉の前庭部を利用して、鑄型(羽釜と鍋)が埋設されていた。鑄型埋設土坑の最下層は炭層であり、鑄型は含まないという。鑄型を埋めている土層には炉壁(粘土)や鑄型の大きな破片が入っていた。羽釜の北側には逆さまに据えた鑄型(有段口縁鍋)が検出された。この鑄型は一度鑄込んだ後(還元面を持つ)に、その内側に粘土を貼りつけた後に鑄込まれていた。Y18-50～70区の横の平坦面(第59図)には鍛冶炉(土坑を伴い、鍛造剥片出土)が検出され、鍛冶炉は造り替えられていた。下の方には炉壁を利用した竈状遺構(?)が存在した。O16杭付近のコンターの落ち込みは、木炭窯の窯体と前庭部の陥没痕である。約160m北側には8世紀末～9世紀初頭の木炭窯2基が検出された(第3図)。なお、丘陵の反対側(南斜面)には、奈良時代(8世紀後半)の長方形箱形炉1基、地下式木炭窯1基、鍛冶炉2基が検出されている。

**調査方法** 同一の遺構群であること、小松市教育委員会の調査区を一部ふくむこと、接合関係などの点を考慮して、グリッド割りは小松市教育委員会のグリッドを採用した。10mグリッドを1m毎に分割し、1～100の小グリッドを設定(第60図)した。南西のポイントでそのグリッドを代表させ、層位毎に取り上げた。鉄滓などは小グリッド毎に、土のう袋で取り上げ、土はふるい(5mmメッシュ)でふるい、鉄滓等の全量採取に努めた。また、粘性の土であったために、ふるいの上に、土玉が出来てしまい、作業が遅れがちになった。そのために、出来た土玉ごとを土のう袋に入れて、作業の能率化をはかった。土玉の入った土のう袋を水溜めに入れて、土をやわらかくし、雨天時には現場で、調査終了後に当協会事務所で水洗した。

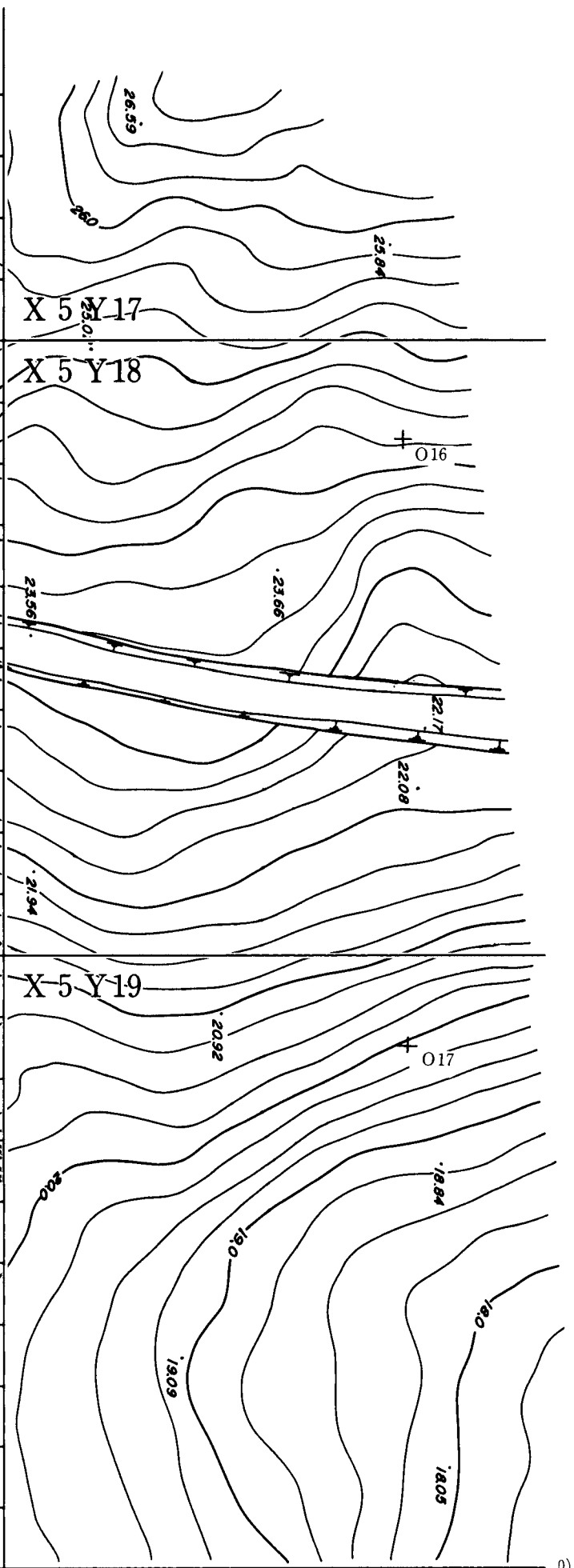
**問題点** 1mグリッドのため、作業員が1～2名しか入れないこと。全体像がつかみにくく、やや掘りすぎてし



第59図 製鉄遺構現況図

(1/100)

	3 列	4 列	5 列	6 列	7 列	8 列	9 列	10 列
X	63	64	65	66	67	68	69	70
4	73	74	75	76	77	78	79	80
Y	83	84	85	86	87	88	89	90
17	93	94	95	96	97	98	99	100
X	3	4	5	6	7	8	9	10
4	13	14	15	16	17	18	19	20
Y	23	24	25	26	27	28	29	30
18	33	34	35	36	37	38	39	40
	43	44	45	46	47	48	49	50
	53	54	55	56	57	58	59	60
	63	64	65	66	67	68	69	70
	73	74	75	76	77	78	79	80
	83	84	85	86	87	88	89	90
	93	94	95	96	97	98	99	100
X	3	4	5	6	7	8	9	10
4	13	14	15	16	17	18	19	20
Y	23	24	25	26	27	28	29	30
19	33	34	35	36	37	38	39	40
	43	44	45	46	47	48	49	50
	53	54	55	56	57	58	59	60
	63	64	65	66	67	68	69	70
	73	74	75	76	77	78	79	80
	83	84	85	86	87	88	89	90
	93	94	95	96	97	98	99	100



X 4 Y 20

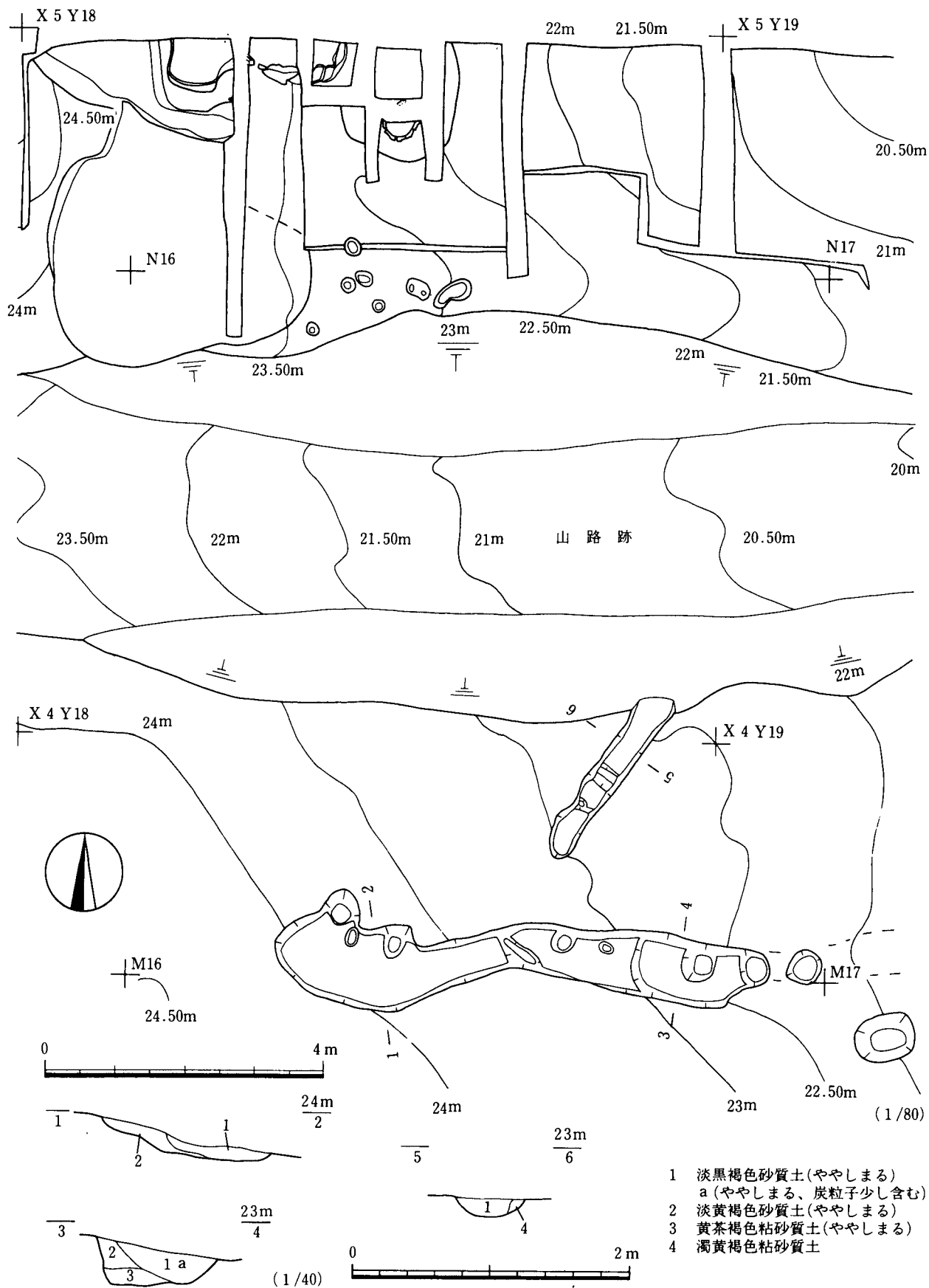
X 5 Y 20

(1/100)

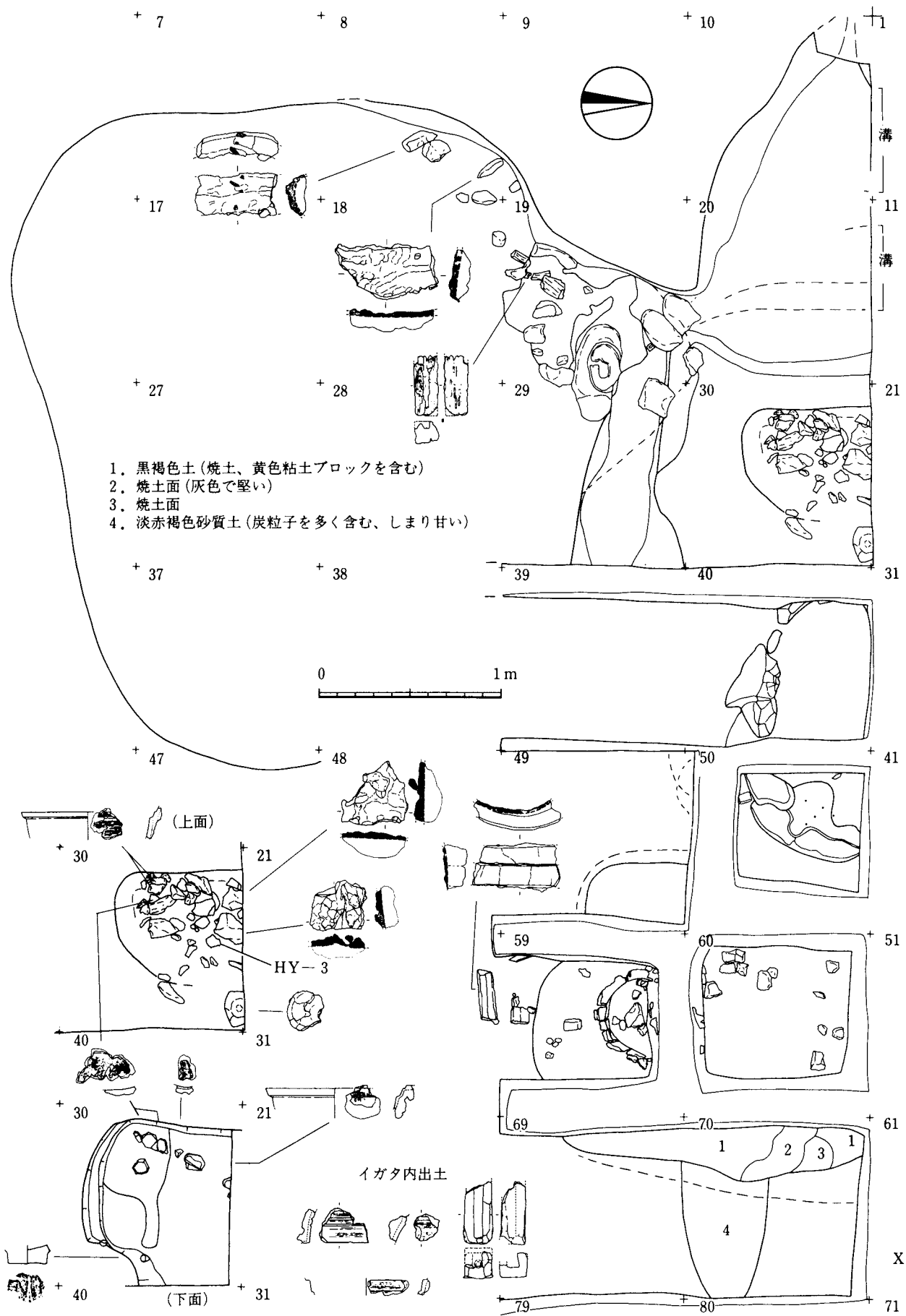
M18

N18

+ O18



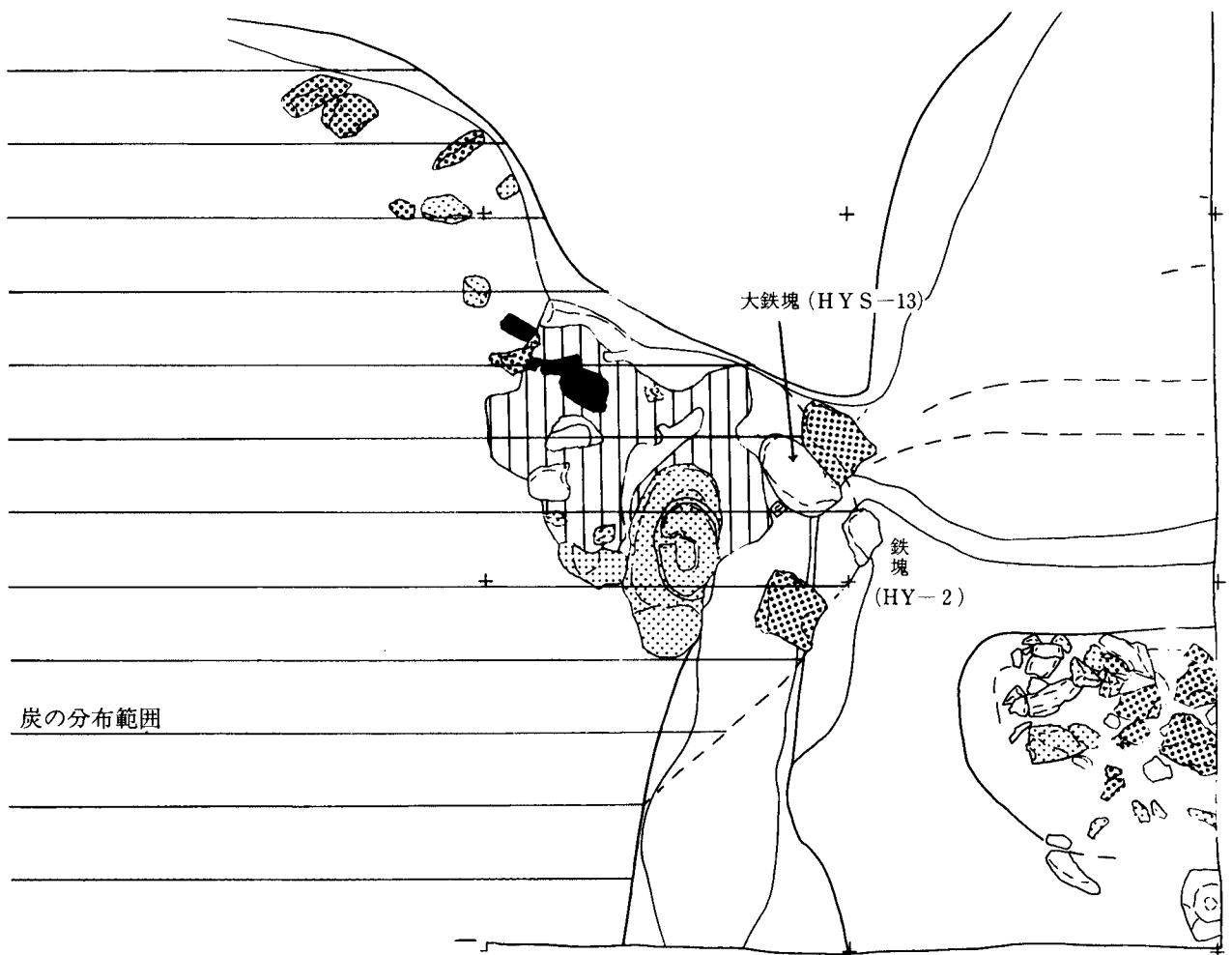
第61図 製鉄遺構周辺図



- 1. 黒褐色土(焼土、黄色粘土ブロックを含む)
- 2. 焼土面(灰色で堅い)
- 3. 焼土面
- 4. 淡赤褐色砂質土(炭粒子を多く含む、しまり甘い)

0 1 m

第62図 製鉄遺構遺物出土状態(1)

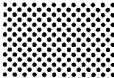
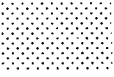





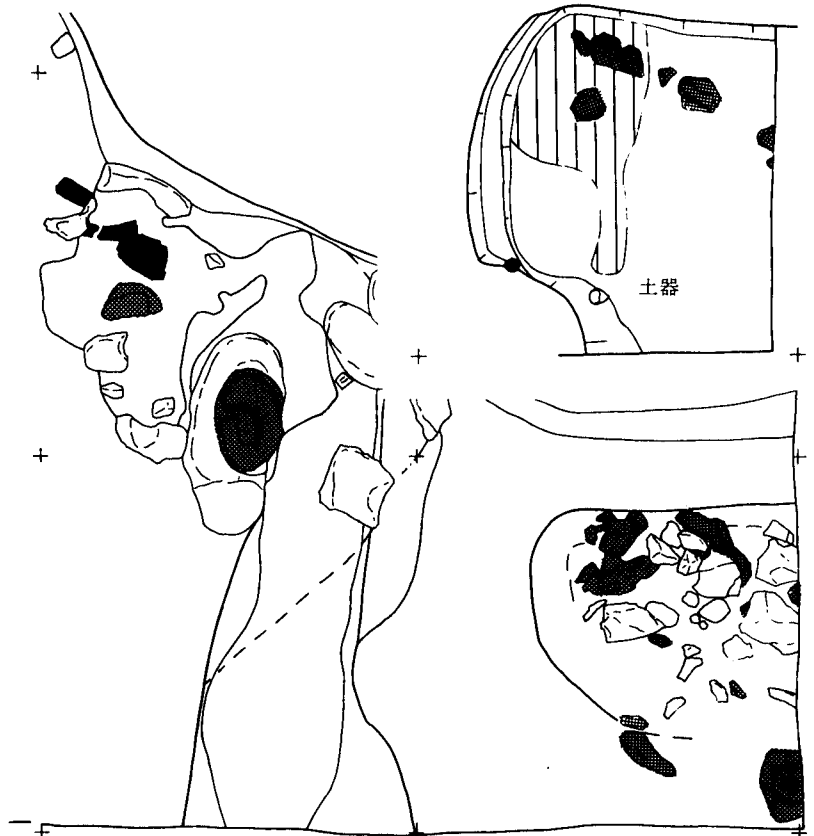
炭の分布範囲

大鉄塊 (HYS-13)

鉄塊 (HY-2)

(下面)

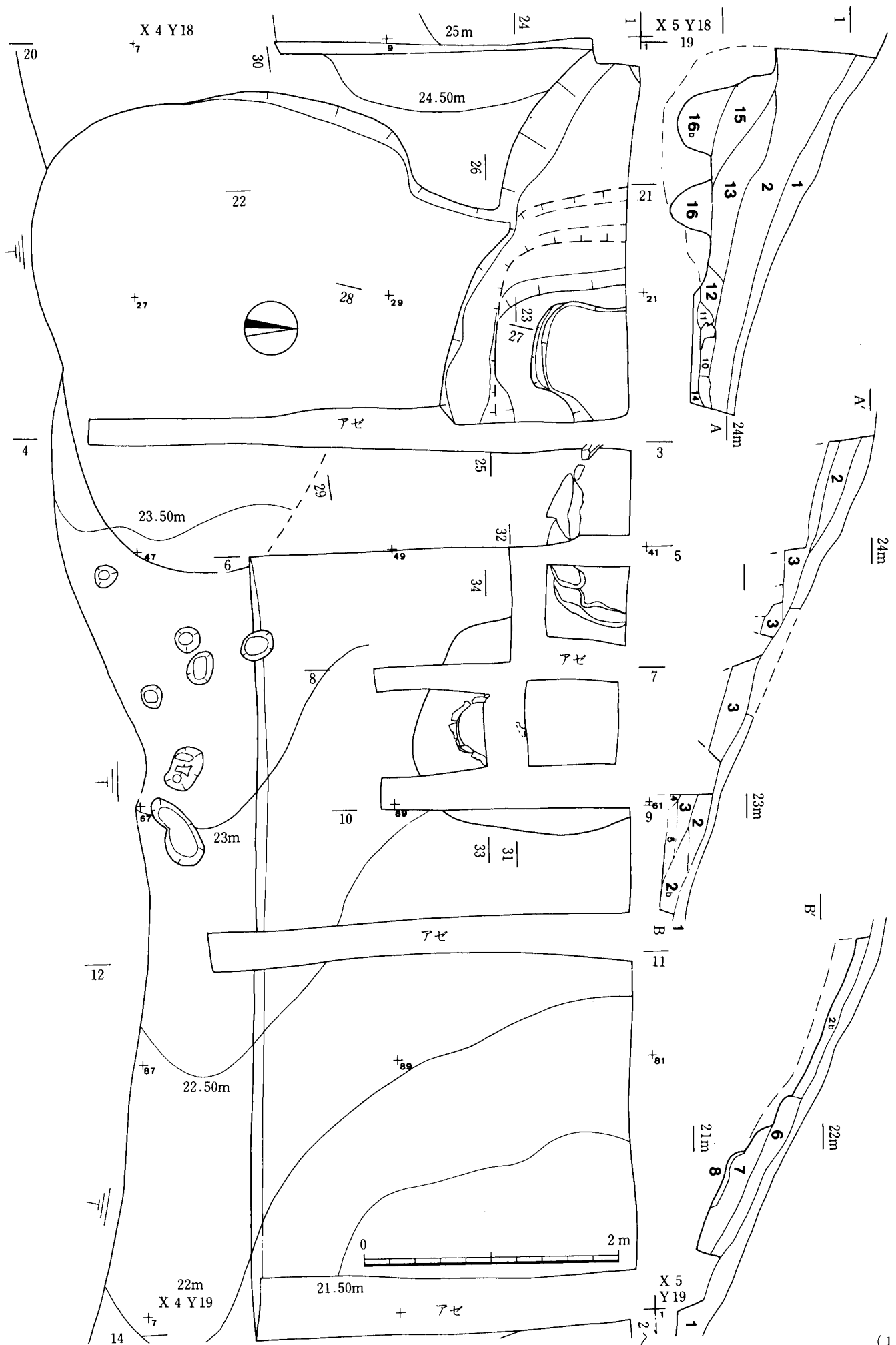
-  炉壁(溶解)
-  炉壁(粘土)
-  鑄型
-  焼土の範囲
-  炭



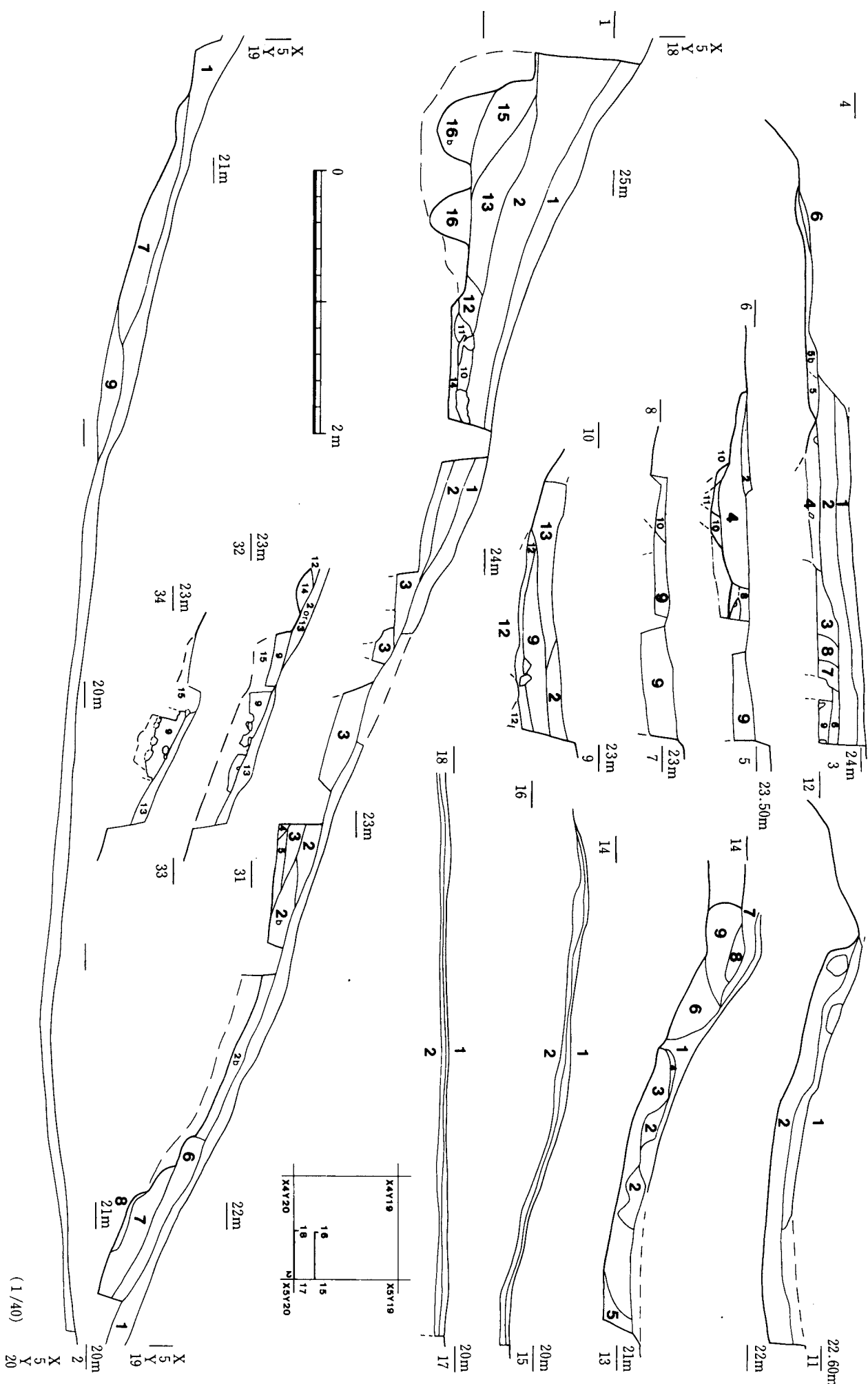
土器

第63図 製鉄遺構遺物出土状態(2)

(1/20)

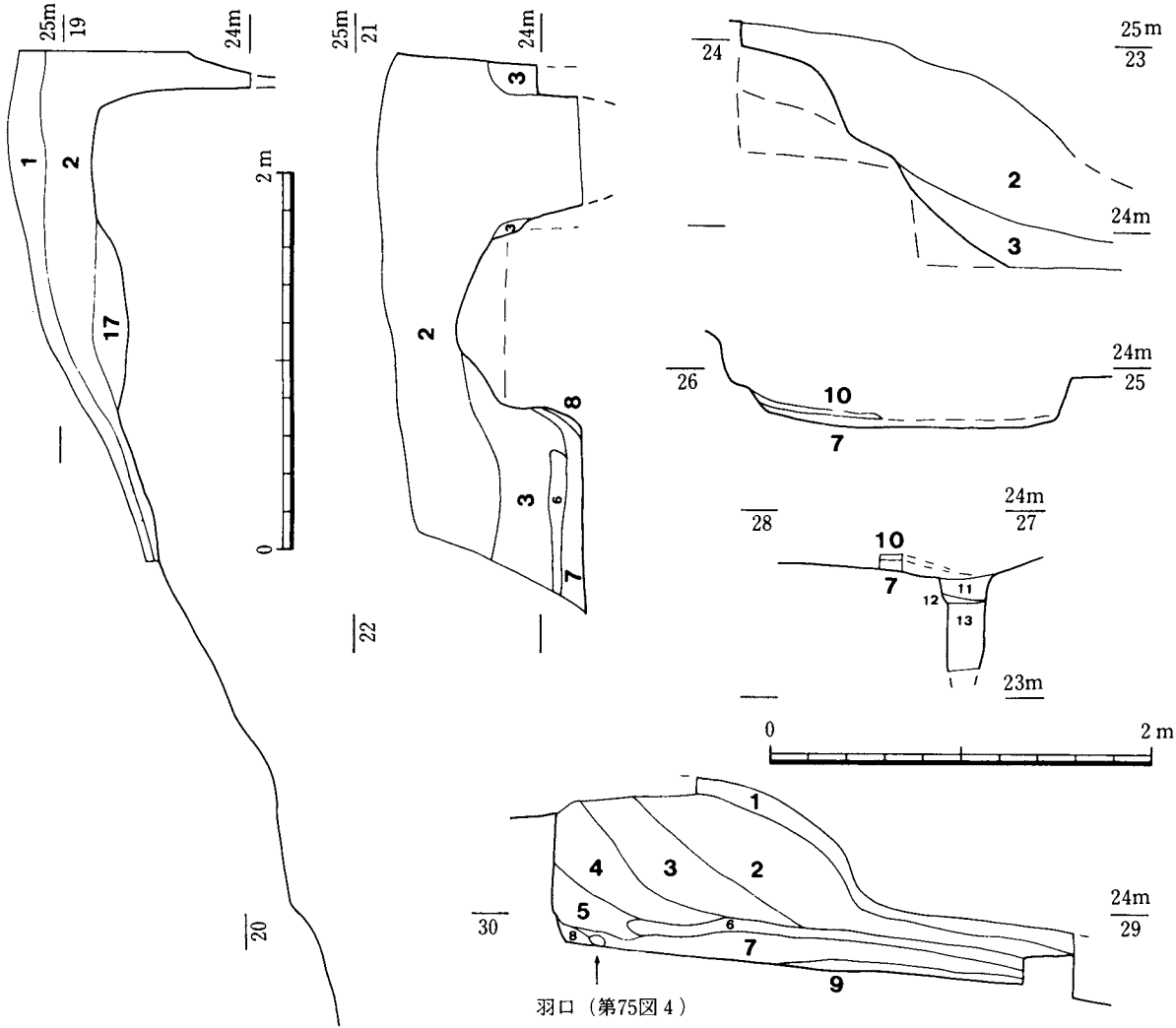


第64図 製鉄炉全体図



第65図 製鉄遺構断面図(1)





第64図 1~2ライン、15~20ライン

- 1 表土
- 2 黄褐色土 2 b (灰色が強い)
- 3 赤褐色砂質土 3 b (少し濃い)
- 4 淡黒褐色土
- 5 灰褐色砂質土 (しまり甘く、炭・焼土粒を微量含む)
- 6 暗灰褐色砂質土 (所々に淡い黄色気味の色を持つ、まったくしまらない)
- 7 黒褐色砂質土 (しまりなく、3cm程度の小さい鉄滓が非常に多い)  
7 b (小型も多いが、10cm程度の大型も多い)
- 8 焼土面
- 9 濁黄褐色粘質土 (しまりやや甘く、鉄滓を多く含む)
- 10 赤褐色粘質土 (焼土層、しまり甘い)
- 11 赤褐色粘質土 (やや色黒い)
- 12 淡黒褐色砂質土 (しまる)
- 13 暗黄褐色砂質土 (しまる)
- 14 黄褐色粘質土 (焼土粒子・炭粒子少し含む)
- 15 淡褐色砂質土 (よくしまる)
- 16 淡茶褐色砂質土 (白色微砂粒含む、しまりやや甘い)  
16 b (白色微砂粒多く含む、しまりやや甘い)
- 17 暗黄褐色砂質土

第64図 13~14ライン

- 1 表土
- 2 淡褐色粘質土 (ややしまり、焼土粒・炭粒を少々含む)
- 3 褐色砂質土 (ややしまり、焼土粒・炭粒を少々含む)
- 4 黄褐色粘質土
- 5 黒褐色粘質土 (鉄滓を多く含む、焼土粒・炭粒少々含む)
- 6 淡黄赤褐色粘質土 (鉄滓・焼土粒子含む)
- 7 褐色砂質土 (しまり甘く、炭粒少々含む)
- 8 赤褐色砂質土 (しまり甘く、鉄滓・焼土粒子少し含む)
- 9 暗赤褐色砂質土 (しまりやや甘く、鉄滓・焼土粒多く含む)

第64図 3~12、31~34ライン

- 1 表土
- 2 黄褐色粘質土
- 3 淡黄褐色粘質土
- 4 暗褐色砂質土 (しまり甘く、炭粒を多く含む) - 清覆土
- 5 淡黒褐色砂質土 (しまりやや甘い)  
5 b (炭粒子を多く含む、若干の焼土粒子を含む)
- 6 淡赤褐色粘質土 (しまり良く、粘性やや強い)
- 7 淡褐色砂質土 (やや赤みが入る、粘性なく、炭を少々含む)
- 8 淡褐色砂質土 (7層より赤みがなく、炭を微量含む)
- 9 赤褐色砂質土 (炬壁やその粒子からなり、しまりない)
- 10 淡灰褐色砂質土 (炭粒子を微量含む) - 清覆土
- 11 暗褐色砂質土 (鉄滓・炭粒子をやや多く含む)
- 12 淡黒褐色砂質土 (しまりなく、焼土・炬壁などを少々含む)
- 13 黄灰褐色砂質土
- 14 淡赤灰褐色砂質土 (しまり甘く、焼土粒子を微量含む)
- 15 濁赤褐色砂質土 (非常にしまって硬い、炬壁・焼土などで構成され、炭粒子も多い)

第64図 21~30ライン

- 1 表土
- 2 黄(茶)褐色粘質土 (しまり甘く、粘性弱い)
- 3 灰褐色粘質土 (しまり甘く、粘性弱い)
- 4 茶褐色粘質土 (しまり良く、粘性弱い)
- 5 茶褐色粘質土 (4層より暗い、しまり良く、粘性弱い)
- 6 暗茶褐色粘質土 (しまり良く、炭を少々含む)
- 7 炭層 (炭と炭の粉で構成)
- 8 濁黄色粘質土
- 9 黒黄色粘質土 (地山と7層が混じった層、炭を多く含む、焼土粒子を少々含む)
- 10 橙褐色焼土層 (しまり甘く、焼土粒・炭粒多く含む)
- 11 暗黄褐色粘質土 (しまり甘く、炭粒多く含む)
- 12 褐色砂質土 (しまり甘く、炭粒少し含む)

第66図 製鉄遺構断面図(2)

まうこと。鉄滓が多量に出るとラベルが追いつかなくなる。プラスチックのラベルを土のう袋の中に入れ、紐にも付けたが、袋づめ作業が数箇所に分かれてしまいラベルの入れ忘れ、消失、混乱などが起きた。

また、炉壁・鑄型などの集中地点の遺物取り上げは、遺物が多い場合1点ごとに取り上げると、接合しにくくなるので、接合関係を見ながら取り上げたほうが良いようである。

## 2. 遺構

山道部分には、1ケース分の長方形箱形炉の鉄滓(流出滓)17.50kgや炉壁1点が出土した。小松市教育委員会調査区の西側(約40m以上北西側)には8世紀代の箱形炉があるが、その遺物が流れてきたものではないと思われる。竪形炉の鉄滓は含まないことから遺物により箱形炉の存在が想定されるが、遺構による確証はない。また流出滓・炉壁の量が少なすぎる。道路部分の南側には2本の溝が確認された(第61図)が、製鉄遺構に関連するかは定かでない。M16区に位置し、やや曲がりながら、M17区(谷側)に流れ、長さ10m以上、幅0.6~1.2m、深さ0.1~0.3mを測る。谷側に段を持つ。遺物は、7世紀代の須恵器片と鉄滓が出土した。もう一本は道路に切られているが、長さ(2.8)m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。谷側に段を持ち、7世紀代の須恵器片と鉄滓が出土した。2本の溝とも年代は確定できないが、覆土に鉄滓を含むので製鉄炉(楕円形炉)と同時期か以降であろう。

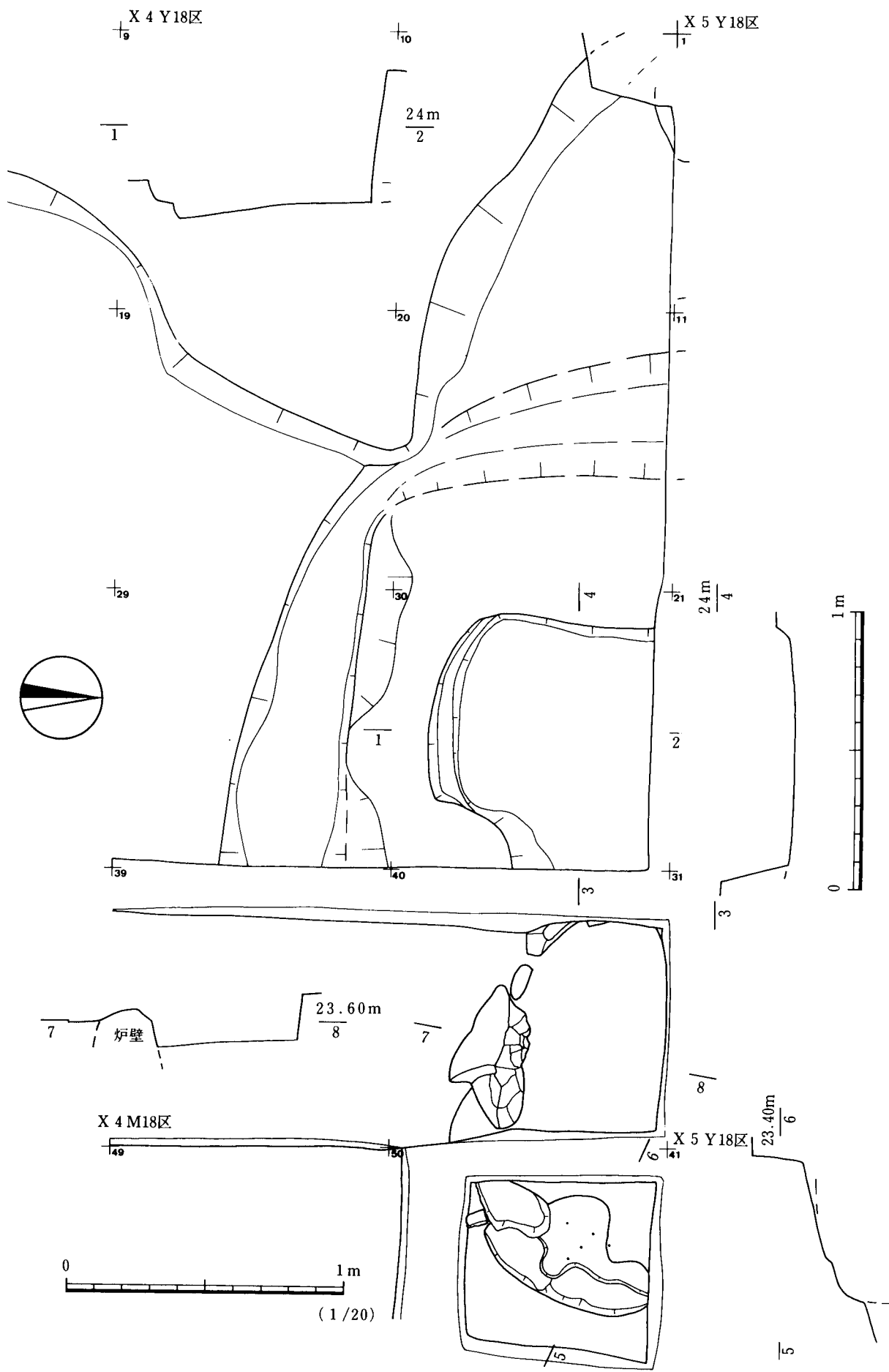
**作業場(第64図)** X 4 Y 18-6~38区に位置する。南側は道路により攪乱を受けている。隅円の楕円形ないし隅円方形と思われる。全体に炭材、炭粒子(粉)が堆積しており、Y 18-19~29区では排水溝を覆っていた。長さ3.7m、幅(3~3.7)m、深さ(炭の厚さ)0.1~0.2mを測る。ほぼ水平に削平されているが、東側はやや谷(東)側傾斜が認められる。Y 18-8~19区と送風関連施設付近にはやや多く遺物が存在した。Y 18-19・29区では遺物・焼土・炭が排水溝の上に存在した(第62図)。周辺には炉壁(溶解)・炉壁(粘土)が多く出土し、排水溝上には大鉄塊と鉄塊が存在した。つまり排水溝は第62図の遺物が廃棄された時には既に埋まっていたようである。Y 18-19・29区には堅くしまった焼土(厚さ8~10cm)が存在した。焼土の上には鑄型・炭・炉壁などが存在した。

**排水溝(第67図)** X 4 Y 18-19、20、29区に位置する。コの字状に巡るものと思われるが、Y 18-39区より谷側は未調査なので不明である。Y 18-20区断面では幅0.5m、深さ0.3mを測る。Y 18-29区では幅0.3m、深さ0.5m以上を測り、幅の割に深い。作業場の炭層が堆積した際には、既に埋まっていたものと思われる。また、Y 18-10・20区に存在する溝は覆土の切り合い関係(第66図19~22)から判断すると、一番新しいようである。

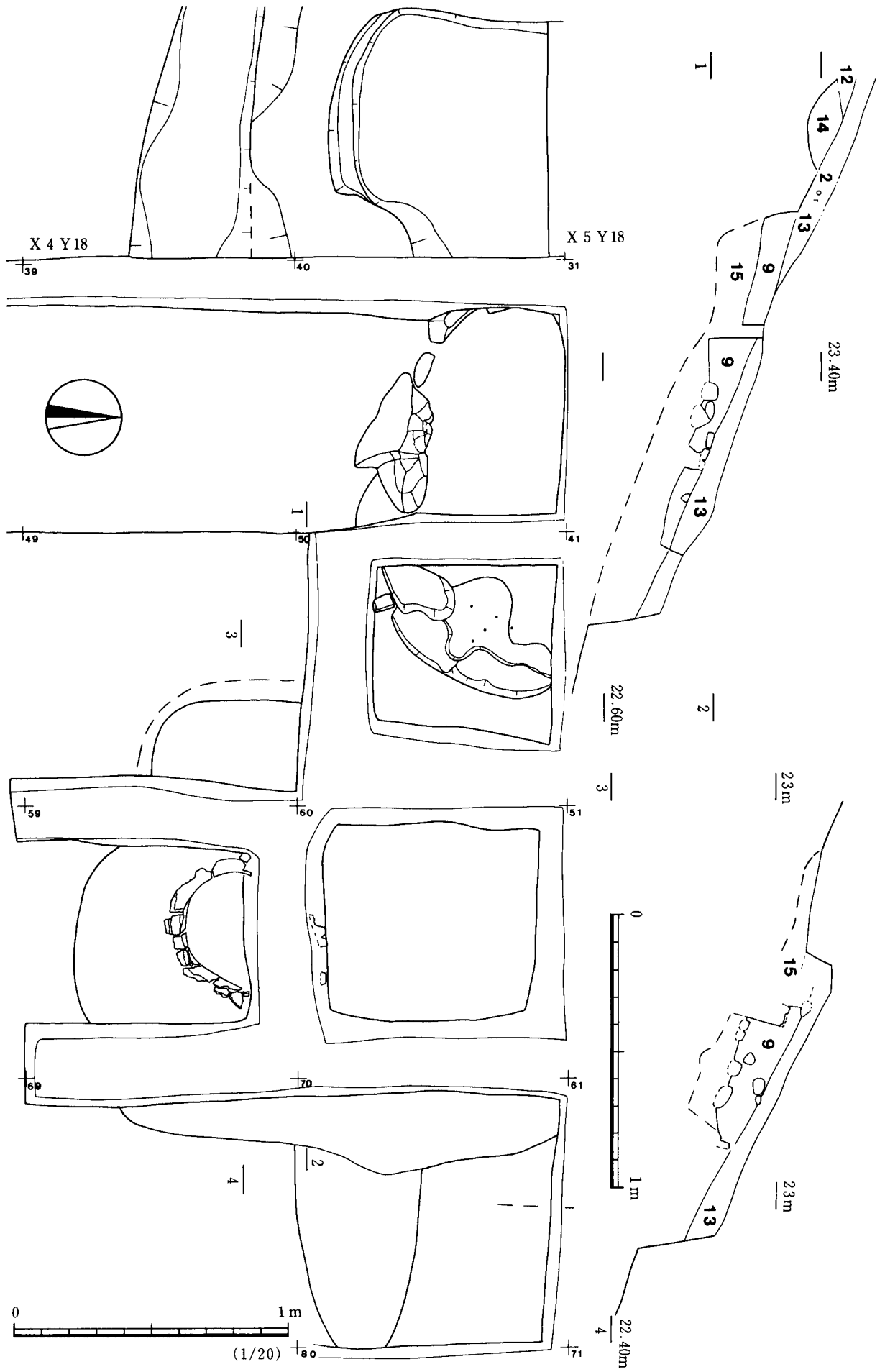
**送風関連施設(第67図)** X 4 Y 18-30区に位置する。作業場の北側に位置し、(後世の遺構・攪乱によって)半欠状態であったようである。軸木痕等は不明であった。炉と送風関連施設全体を防湿効果をねらった排水溝が巡っている。現状の長さ(87)cm、幅80cm、深さ14cmを測る(県調査部分の数値)。右端(第67図1~2ライン)は2段掘りになっており、1段目8cm、2段目6cmの深さを持つ。1段目と2段目の長さは6cm、幅67cmを測る。2段目の床長さは(70)cmを測る。右半分は1段目と水平であるが、左端から48cmの地点から2段目へ傾斜(深さ6cm)している。竪形炉の主軸に平行する部分(第67図3~4ライン)はほぼ水平である。左端の床は一部焼けていた(第63図)。床には鑄型破片が多く、その上には鑄型や炉壁が廃棄されていた。また、床面の左下には土師器の柱状高台(第76図2)が出土した。

**半地下式竪形炉(第67図)** X 4 Y 18-40・50区に位置する。炉を検出しただけであり、長さ(145)cm、幅(75)cmを確認した。楕円形の炉壁(粘土)である。Y 18-40区では炉壁の外側が赤色であり、内側は肌色であった(第69図)。Y 18-50区では3枚の面が存在した。下から1枚目は赤化(赤色)、2枚目は還元(薄い緑がかかった灰色)、3枚目(左上)はやや弱い赤化(赤から肌色)が認められた。2枚目には1~2cmの玉状の鉄塊系遺物が5個食い込んでいた。また、上方には3層(炉壁を多く含む)が被さっており、その中には炉壁(溶解)の破片1点も存在した。

外側が楕円形の炉壁(粘土)なので中側も楕円形の炉壁が存在すると思われたが、小松市教育委員会91年度調査では内側には方形の炉壁(粘土)が存在した。方形の炉壁は2~3枚程度あったようである。また、Y 18-40区には



第67図 製鉄炉実測図(1)



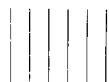
第68図 製鉄炉実測図(2)



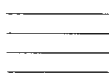
炉壁 (赤色)



炉壁 (はだ色)



炉壁 (淡赤色)



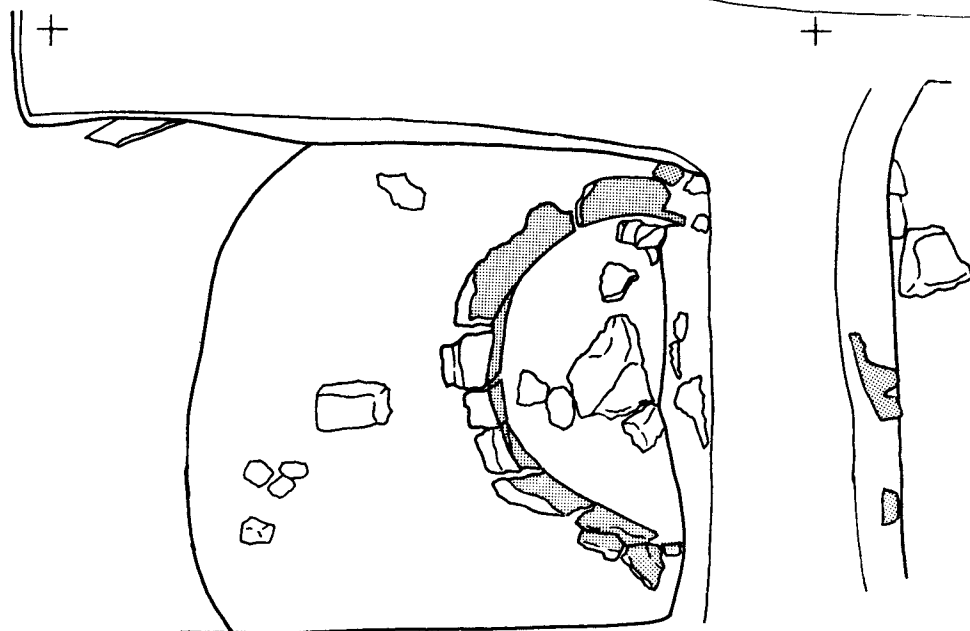
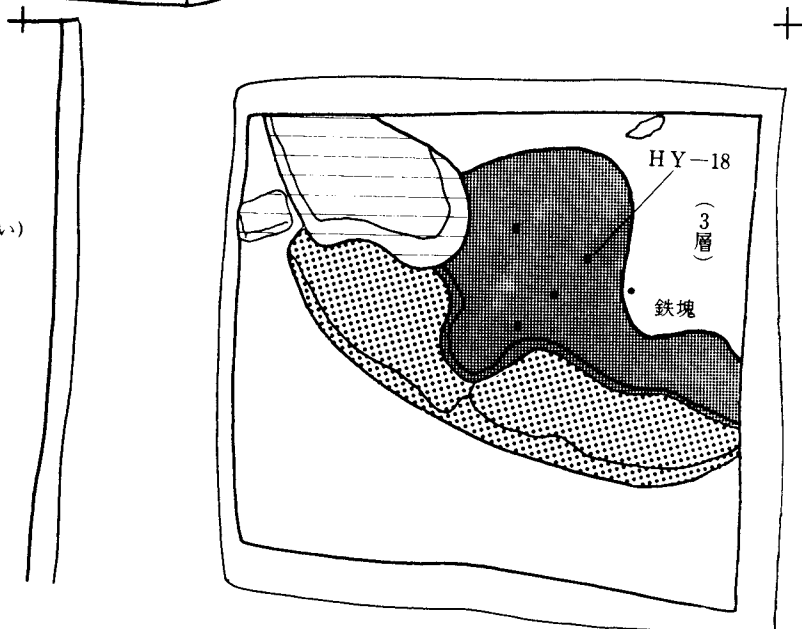
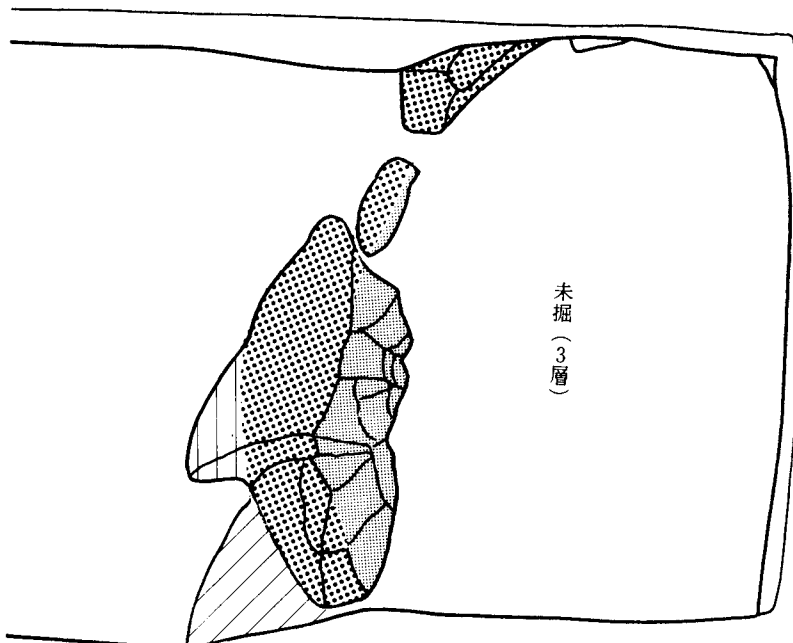
炉壁 (赤～はだ色)



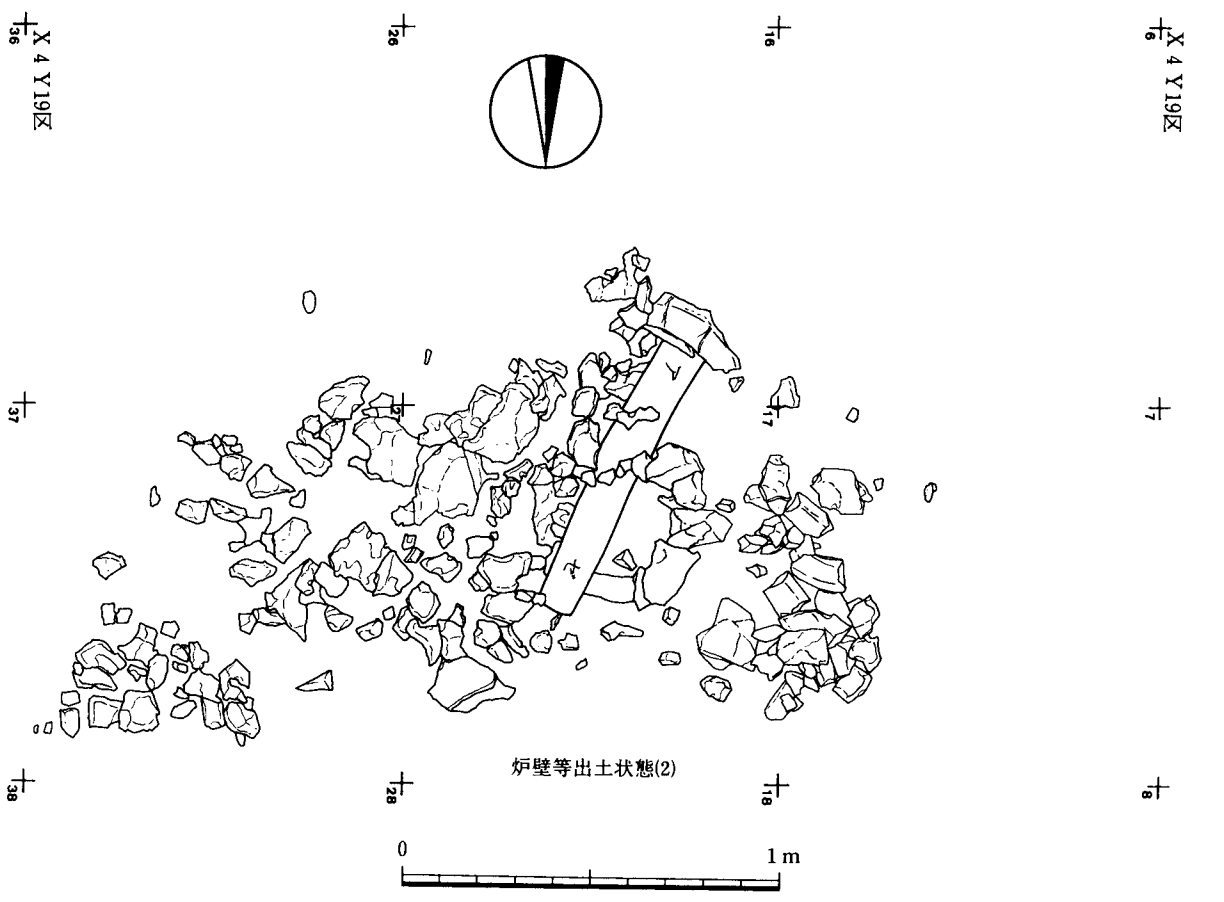
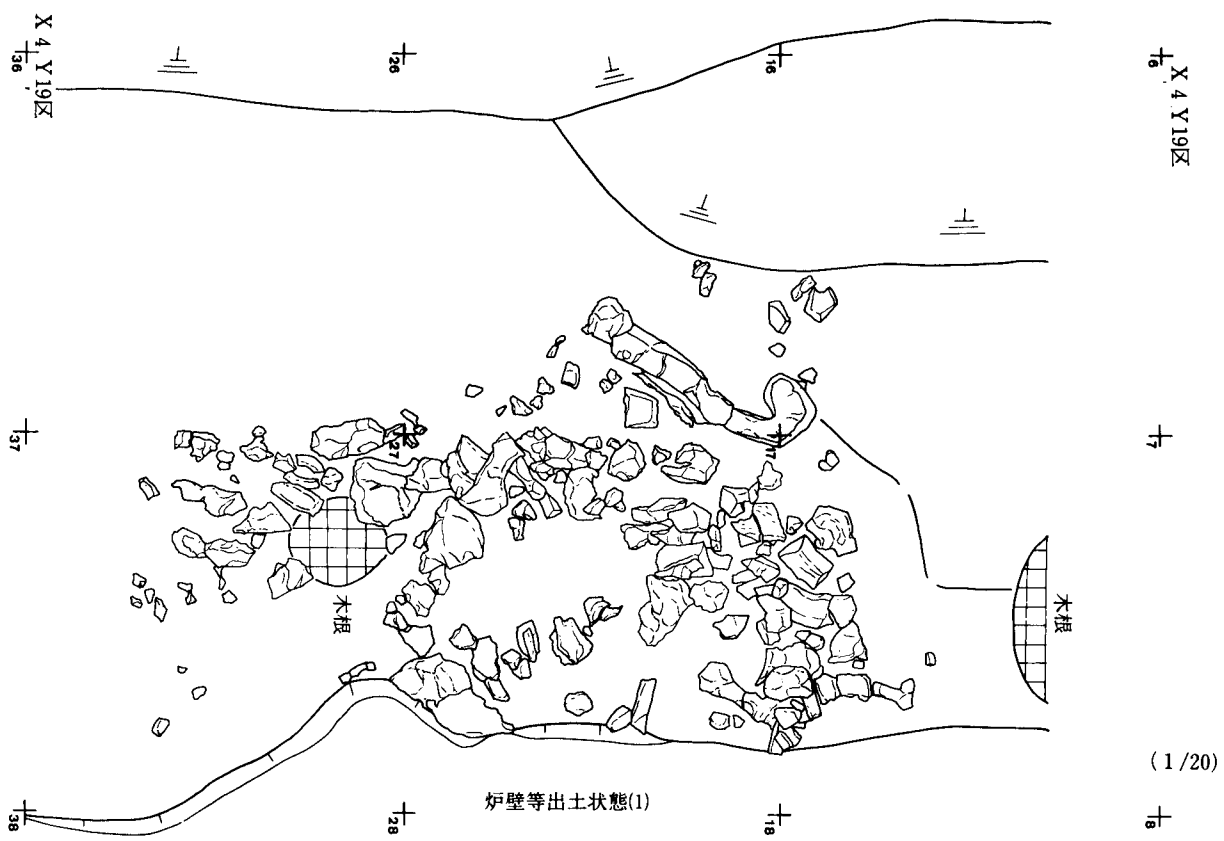
炉壁 (薄い緑がかった灰色)



掘り方? (赤褐色砂質土、しまり良い)



鋳型の還元面



第70图 炉壁集中区实测图(1)

凡例

▲ 炉壁(溶解)

△ 炉壁(粘土)

□ 铸型

● 铸滓

○ 流出滓

★ 土器

+16

+17

+18

+26

+28

+36

+37

+38



炉壁等出土状态(3)

(1/20)

+16

+18

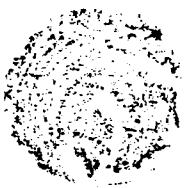
+26

+28

+36

+37

+38



(分布图)

第71图 炉壁集中区实测图(2)

(1/20)

床面が存在せずに、穴が開いていたとのことである(宮下氏教示)。

**鑄型埋設土坑(第68図)** X 4 Y18-49・50～69・70区に位置する。楕円形を呈するものと思われ、長さ1.8m、幅(1.7)m以上、深さ(0.3)mを測る。ピンポールによる確認では、約0.3m下に堅い面(第68図1～2ライン)があり、半地下式竪形炉の前庭部(作業面)と思われる。下層は淡黒褐色砂質土(炭層?)であり、しまりがなく、焼土・炉壁などを少々含む。防湿のための埋土か、竪形炉の前庭部堆積土と思われる。上層は赤褐色砂質土であり、炉壁(粘土)や鑄型や鑄型を包んでいた粘土、それらの小破片で構成され、粘性はなくパサパサである。小松市教育委員会91年度調査では上層には羽釜や鍋鑄型の大型破片が存在したが、下層では鑄型は存在しないと聞いている。

**鑄型(第68、69図)** 羽釜の鑄型と思われる。鏝径約60cm、内径(48)cm、底内径(38)cm、深さ(20)cmを測ると思われる。竪形炉の下端から鑄型までの距離は90cm、鑄型の中心部までの距離は120cmである。外型が逆さに据えられており、約26度下(谷)側に傾いている。鏝の下側より下が存在し、鑄込まれ(還元)している(第69図)。中の覆土はしまりがいいやわらかい土(竪形炉内の土と同一)であり、炉壁(粘土)や鑄型が出土した(第72図4、9、10、12、第74図48)。鑄型の底にはくぼみ(孔)が存在するようである。鏝の幅は5cmを測る。鏝は左側中央から下(谷)側は表面が剝離したり、存在しないなど残りが悪い。また、胴部も上(山)側は残りが良く、しかも破片が大きい(図版50)。下(谷)側は残りが悪く、小さく縦に割れており破片も小さい。やや谷側に破片が傾いている。下(谷)側の残りが悪く、傾いているのは、この場所で鑄込み、製品の下(谷)側に引き出したのではないかと思われる。鑄型が土坑の左側に寄っているのは、右側にも鑄型が据えられていたためと思われる。この2つ目の鑄型は有段口縁鍋の鑄型であり、下(谷)側は存在しない。厚さ1cm程度の薄い外型と思われる。一度鑄込まれた(還元)後、その内側に粘土(真土)を貼りつけて新しい鑄型を造り、鑄込んで(還元して)いる。

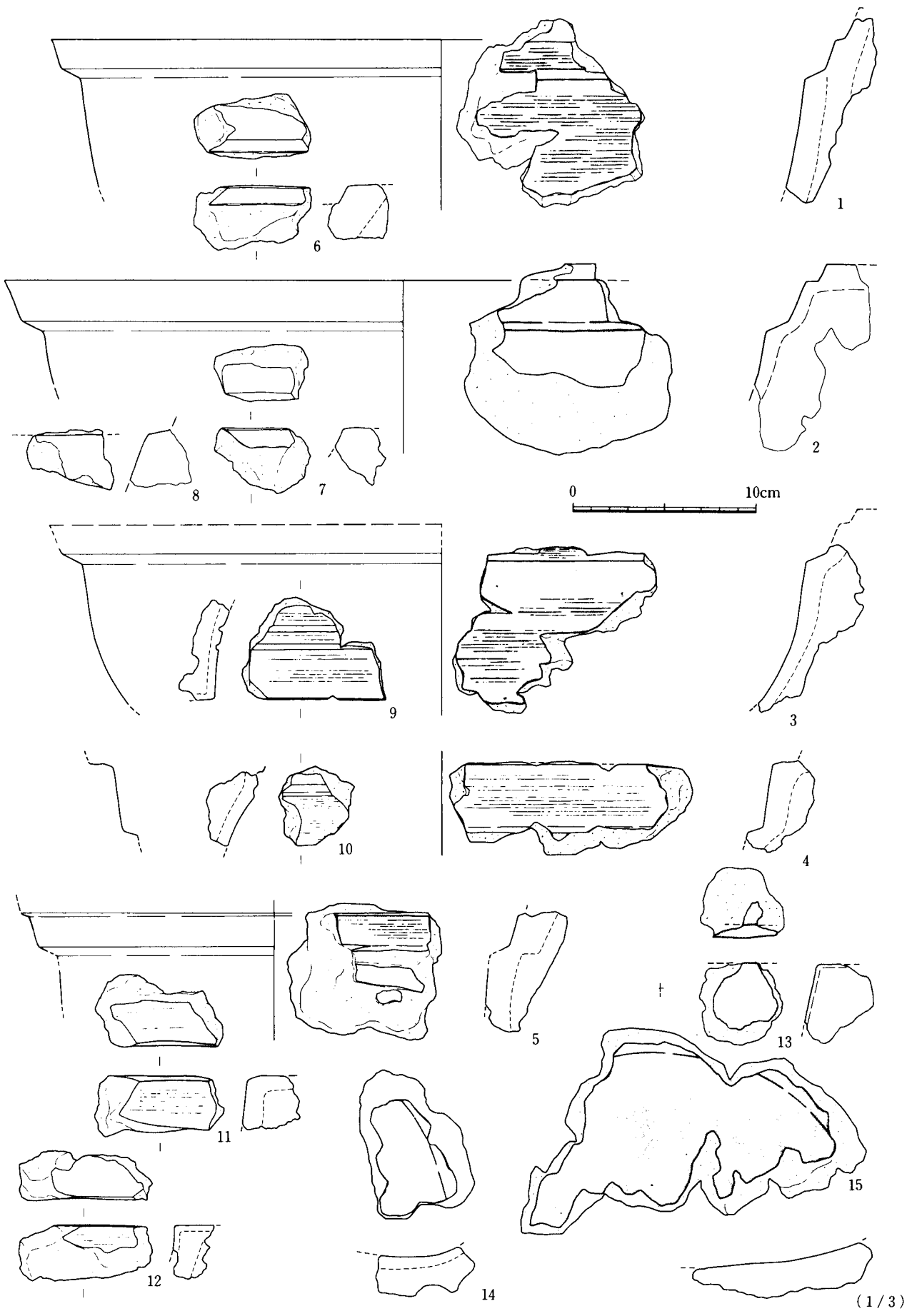
**炉壁集中区(第70、71図)** X 4 Y19-6・7～26・27区に位置する(図版53)。県の調査ではM16区東・M17区西にあたる。表土を除去すると炉壁と鑄型(第73図16)などが最初に確認された地点である。Y19-7～17区、Y19-16～17区西半に炉壁が多く出土し、Y19-16～17区西半には円形に並んだ炉壁群が見られたので、アゼを残して掘り下げた。しかし、Y18-40・50区の竪形炉のような遺構や焼土は確認されなかった。集中区の特にY19-7～17区では赤褐色のやわらかい土が多くみられた。これはY18-40・50区の竪形炉を埋めている土に近い。また、分布図(第71図下段)を見るとY19-6・7～16・17区には炉壁が多く出土し、炉壁が楕円形に分布することが確認される。鉄滓はY19-16～17区東半からY19-26・27区に多く分布する。小松市教育委員会調査区では、溶解部を持つ炉壁を円形に据えた遺構が存在し、その中でも軟らかい土が堆積していた。これは竪形炉というよりは炉壁破片を転用した竈ないし鑄型焼成遺構ではないかという指摘(穴沢氏)がある。よって、X 4 Y19-6・7～16・17区西半には炉壁を転用した遺構が存在した可能性も想定できよう。

### 3. 遺物

**土器** 土器は7世紀代の須恵器と11世紀末～12世紀前半の土師器が出土した。7世紀代の須恵器は北側約40mに須恵器窯(タカヤマ3号窯)が存在したので、その窯に属すると思われる。土師器は2点出土し、鑄造関連遺構に伴うものと思われる。第76図2は送風関連施設の鑄型下から出土した(第62図)。底径4.3cmであり、底部には回転糸切り痕と棒状の圧痕を持つ。第76図3はX 4 Y19区遺物集中地区から出土した(第71図)。底径5cmであり、底部には回転糸切り痕と棒状の圧痕を持つ。共に11世紀末～12世紀前半と思われる。

**鍋鑄型(1～6)** 第72図1～3は口縁部に幅広の突帯がつき、有段(1段)になるとと思われるもの。1、2は、はばきが残っており、はばきは未還元である。1は口径43cm、2は口径44cm、3は段部径42cmを測る。1、3は同一個体の可能性がある。4、5は口縁部が2段になる鍋と思われる。4は段部径39cm、5は段部径27.6cmを測る。5は上の面が一部還元しておらず、口縁部が1段の鍋の可能性も否定できない。6、7は、はばきの部分である。8は段部下段の部分である。14、15は鍋ないし羽釜の底部であり、同一個体の可能性がある。1～3、

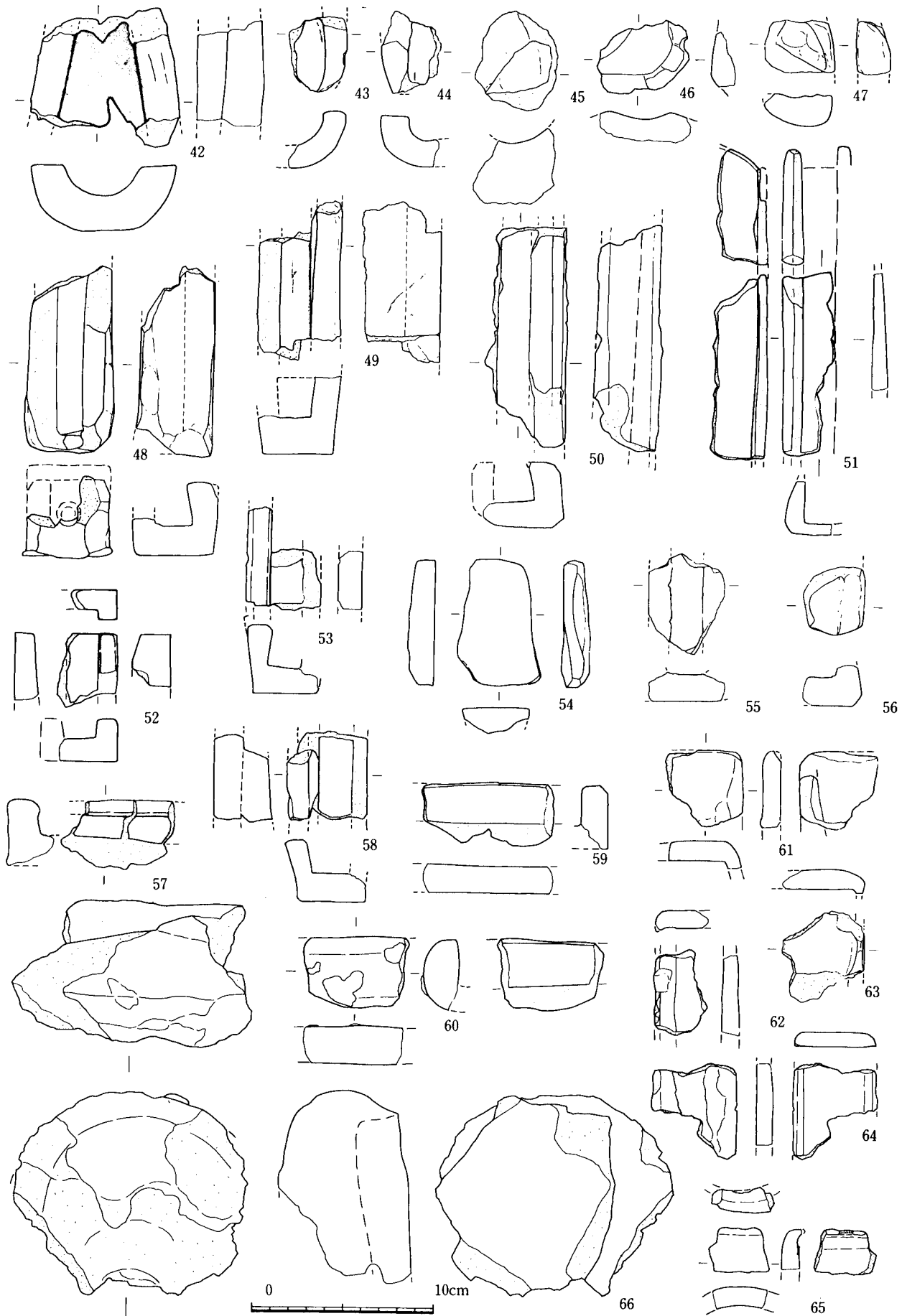


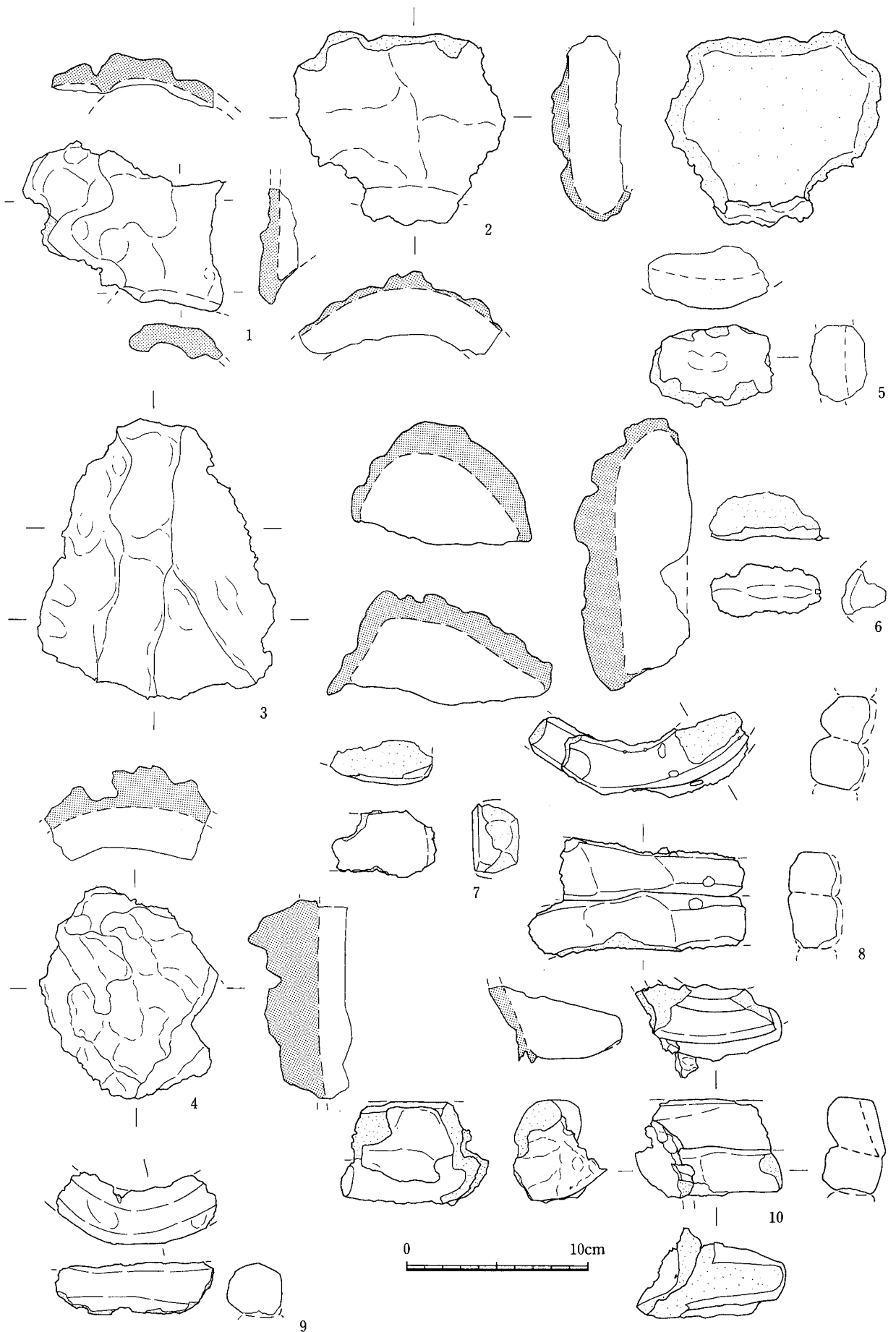


第72図 鑄型実測図(1)



第73图 铸型实测图(2)





第75图 羽口実測图

14、15は送風関連施設(フイゴ座)内(第62図)から、4はY18-60区出土である。

**羽釜鑄型**(9~13) 第72図9、10は羽釜の口縁部から鑄までの部分であり、2本の突線(沈線)の装飾を持つ。11~13は鑄の部分と思われる。9、10、12は鑄型内、11、13はY18-59区の鑄型を覆う土から出土した。

**獸脚鑄型**(第73図) Aタイプ(16~23) 足先、爪などの文様を丁寧に彫ったものである。長方形の箱型であり、ふくら脛側に別の蓋を付けた鑄型である。蓋は箱型にややオーバーハングして取り付けられ、剥離しないように別の粘土で包む(17)。箱型は膝側の方が細く、低くなっている。小孔が足裏に存在し、表面のほうが広く、ロート状を呈す。ガス抜き用とされる(安田1989)が別の用途も想定される。16は踵部分の蓋が欠落し、足の長さ・幅は2.8cmである。17は包んだ粘土が存在し、足の長さ3.3cm、幅2.8cmである。18は脛の部分である。19は右側面に当たる。20は左側面に当たり、16・17の獸脚とは文様がやや異なる。21は右側面に当たり、蓋の一部が付着する。22は右側面に当たる。23は右側面に当たり、足裏にはロート状の孔が存在する。

Bタイプ(27~34) 爪などの文様が簡単に省略されたもの。厚い楕円形の鑄型2つを合わせ、外側を粘土で包む(28)。ふくら脛の断面形は円形と考えられる。鑄込み穴は足の付け根側に存在すると思われる。Cタイプ(25、26)文様は丁寧に彫ったもので、半月形の鑄型と考えられるもの。直線部と足裏の部分に蓋がつくとみられる。25は右側面に当り、蓋の鑄型との接合面を持つ。26は左側面に当ると思われ、蓋の鑄型との接合面を持ち、接合面の一部は還元している。Dタイプ(24)やや大型の獸脚鑄型と思われるもの。

**断面(半)円形製品鑄型**(第73図35~44) 断面(半)円形の鑄型で、35のように外側を別の粘土で包む。平たい蓋を付けた半円形製品の鑄型か同じような鑄型を2つ合わせた円形製品の鑄型と思われる。また、獸脚Bタイプの付け根部分にあたるかもしれない。製品は左右対称ではなく、鑄型の厚さも左右対称ではない(38)。また、42のように(半)円錐形になるものもある。製品寸法[長さ×幅×厚さ]は35[(12.3)×(2)×(1.5)cm]、36[(8.2)×(2.2)×1.6cm]、37[6×(1.6)×(1.2)cm]、38[(12)×4.5×2.5cm]、39[(7.5)×(1.6)×1.4cm]、40[(5.8)×(3.6~4.8)×1.6cm]、43[(4)×(1.5)×(1.9)cm]、44[(35)×(1.5)×1.3cm]である。

**柱状製品鑄型**(第74図) 柱状の製品の鑄型と思われる。Aタイプ(48~53、55~59)鑄型の断面形が長方形・台形のもので、角は斜めの面を持つものもある(51、52)。底面の孔は円形のロート状(48)であり、48の孔には錆色が付着する。先端は斜めのもの(51)、垂直のもの(52)があり、共に還元している。先端になるほど側面は斜めに(低く)なるようである(52、57、58)。49は外側の右側面が還元している。製品の寸法[長さ×幅×厚さ]は48[(8.5)×2×2.2cm]、49[(7.8)×1.6×(2.2~2.4)cm]、50[(11.3)×2.1×(2.2)cm]、51[(17)×(1.5)×(2.5)cm]、52[(3.9)×1.8×(0.5~0.9)cm]、53[(5.2)×1.7×(2.2)cm]、55[(5.5)×1.7×?]、57[(5.3)×?×(1.3~1.6)cm]、58[(4.5)×1.8×(1.4~1.7)cm]、59[(6.8)×?×(1.8~2.1)cm]である。

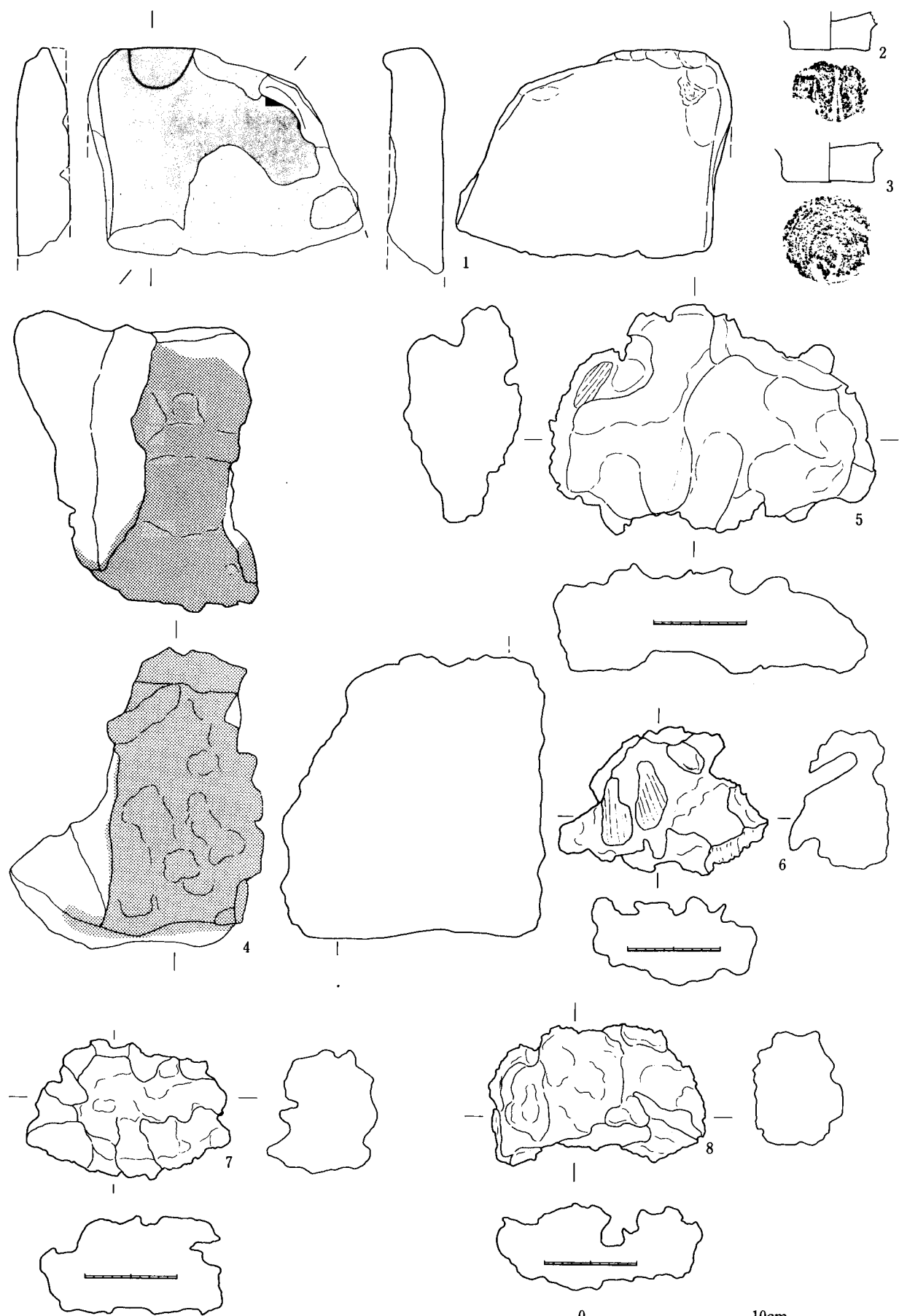
Bタイプ(60) 鑄型の断面形が円形と思われるもので、側面はAタイプ同様に斜めに(低く)なるようである。他の鑄型同様外側を粘土で包む。製品の厚さは(2.2~2.5)cmである。

**鑄型蓋**(61~64) 両側面はやや下に伸びるようである(62、63)。65は獸脚Cタイプの蓋であろうか。

**中子**(66) 容器鑄型の中子と思われる。推定直径14cmを測る。下側に方形の別の粘土(粗い、厚さ2.2~2.7cm)を組み合わせている。

**その他の鑄型** 45、46、67は獸脚鑄型の部分であろうか。68は円形の製品鑄型であろうか。47は「黒み」が存在する。第76図1は左側側面と下側が欠けている。右側面に高さ0.5cmの縁取りがある。上側には幅3.5cm、深さ0.9cmの半円形(片口状)のくぼみ(湯口か)がある。

**羽口**(第75図) 2種類確認された。一つは表面が溶解したものの、もう一つはドーナツ状のものである。前者は炉のなかに取り付けられた部分である。第74図1は表面は溶解しており、暗い藍色である。所々に錆色と小さな気孔がある。溶解部分の厚さは右側の破断面では8mmを測る。左側には木炭痕がある。内面は剥離している。胎土は荒い褐色の粘土からなり、砂粒も多い。2は表面が一部溶解した部分もあるが、木炭痕と錆色の鉄滓状の



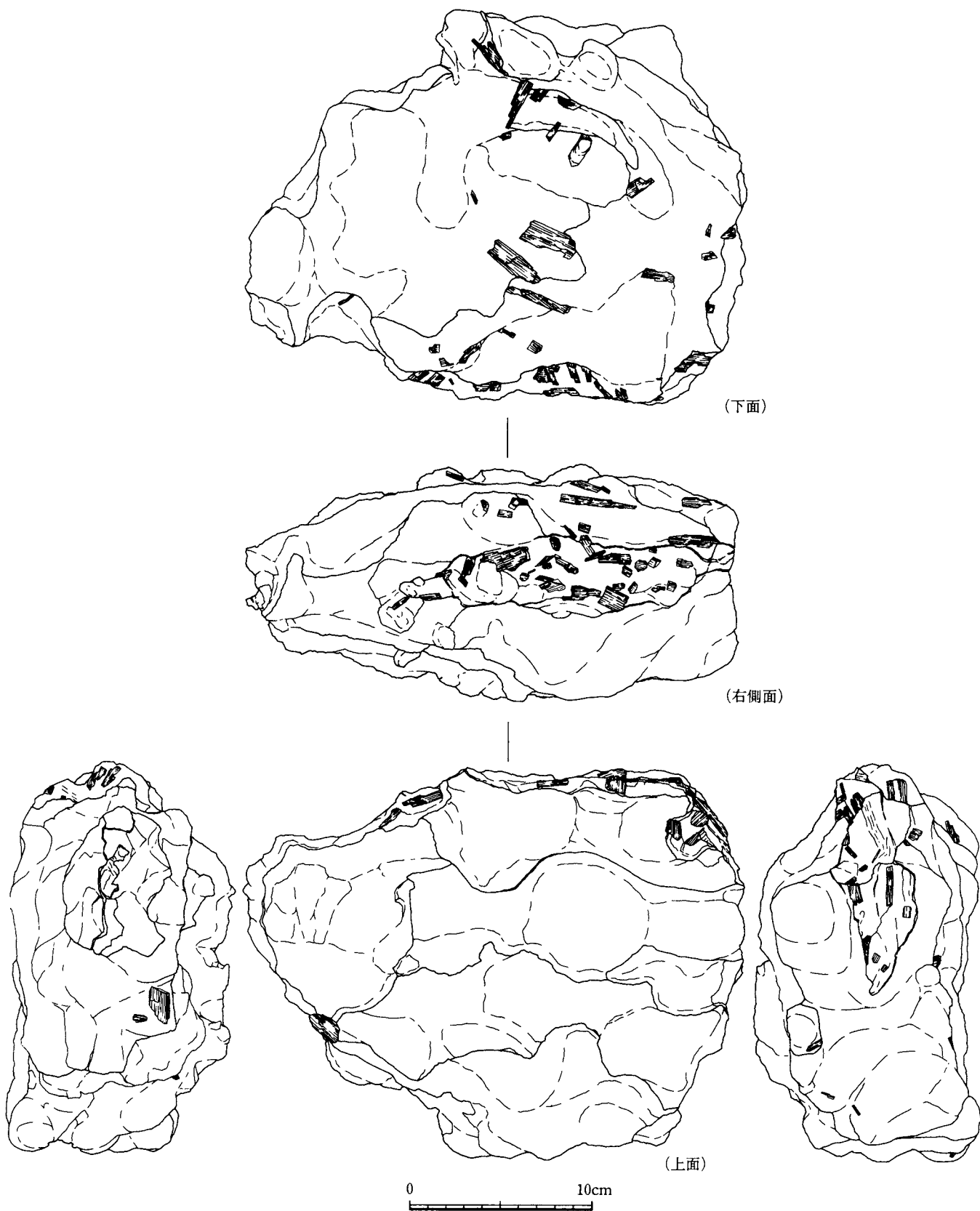
第76図 石・鉄滓等実測図

ものが多く付着する。特に中心部には多く付着し、厚みを増している。中央から右側には気孔が多い。内面は剝離しており、荒い粘土に粃殻を含む。粘土の外側は褐色、剝離面は暗い黄褐色である。推定外径17cm、推定内径(15)cmである。3は炉の中で羽口を保護する部分と思われる。表面は暗い藍色に溶解している。頂点の方には錆色が見られ、底辺部分には砂の白い粒子が多く見られる。内面は荒い粘土であり、外側は暗い褐色、内側は暗い黄褐色である。4は作業場の炭層上面に存在した。表面は厚く溶解している。暗い藍色と錆色を呈し、暗黄褐色の土(炉壁の粘土?)がみられる。内面は剝離しており、砂を多く含む荒い粘土である。色調は外側が暗褐色、内側が暗黄褐色である。推定外径15cm、推定内径(13)cmである。

後者は基本的には炉壁中(粘土内)ないし炉外に取り付けられたものと考えられる。ドーナツ状のものを重ねたものと思われる。色調は黄褐色ないし淡赤橙色であったが、表面が熱で変色して暗灰色となる。1mm程度の気孔が見られる。スサと粃殻を含み、砂粒を多く含む荒い粘土である。5は2次分析資料No.6である。上下には別の個体が存在したようである。表面は青みのある黒灰色であり、砂粒でザラザラしている。断面は表面側が濁った肌色、裏面側が淡赤橙色である。6はドーナツ状の内側にあたる。7は表面は平坦であり、右側はこの部分で終わるようである。8は2段存在し、下にもう一段存在したようである。表面には押しえによる平坦面が見られる。錆色も所々存在する。推定外径17cm、推定内径14cmを測る。上段の幅(2.5)cm、厚さ(2.2)~3cmを測る。下段の幅2.2~(2.7)cm、厚さ(2.5~3.2)cmを測る。内側は一部を除いて剝離しており、別の粘土を貼りつけていたようである。9は表面が全て発泡しており、下は下段のものが剝離している。推定外径13cm、折定内径10cmを測る。厚さ(2.7)cm、幅3cmを測る。10は左側には溶解部分が存在し、この部分が炉内に入っていたのであろう。黒いガラス状に溶解しており、白色砂粒が多い。上段は発泡しておらず、暗黄褐色である。下段は発泡しているが、右端面と内面は発泡していない。内面には暗赤褐色の粘土(厚さ5~7mm)が貼りつけてある。上段の厚さ2.5cm、幅1.5~1.7cmを測る。内側の粘土を入れると幅2.5cmを測る。下段の厚さ(2.5)cm、幅1.8~3.5cmを測る。

**鉄塊系遺物** 第77・78図は作業場(炭置場)内の排水溝上からの出土(第63図)した大鉄塊である。全体に黄褐色の付着土砂に覆われており(第77図)、右側面と裏面に炭が多く付着していた。取り上げの際には上下を確認して取り上げなかったが、炭の付着具合から、第77図上段を下にして置かれていたものと思われる。土落とし前は長さ27.3cm、幅21cm、厚さ12.8cm、重量12.05kgである。第77図下の表面右側と、中段の右側面には鉄錆が多く認められた。土落としの前に、国立歴史民俗博物館でX線CTスキャナーにかけさせていただき、中の金属鉄の状態を確認した。図版92-4~8では下側の弓状のカーブが存在し、気孔が下から上に向う様子が確認できた。この結果から図版下側が下面であり、このカーブが本来の炉底のカーブではないかと推定された。また、左側にはきれいな破面(図版92-7、8)や中央部上側にV字状のくぼみ(図版92-5)があり、割り取られた痕跡と想定された。土落とし後は長さ26.2cm、幅20.4cm、厚さ10cm、重量10.38kgである(第78図)。土落としには釘と小型グラインダーを使用した。色調は酸化のために錆色となるが、内側全体は銀色の金属鉄(巻頭図版3)である。表面には1~10mmの気孔が多く、またくぼみも多くてゴツゴツしている。下面と右側面の一部が生きており、ほかは割り取り取られている(第79図1)。しかし、硬すぎて、全部割れなかったためか、この大鉄塊は作業場に置かれていたもの(捨てられたもの?)と思われる。第79図2は切断ライン(第78図)の平面図であり、D資料が金属学的分析2次資料No.10である。下側に鉄滓がやや多く付着し、その下側に少し鉄滓混じりの土が覆う。気孔は2~5mm大が多く存在し、なかには1×1.3cmの気孔も存在した。断面写真(図版91)をみると下から上にスジ状のものが多数見えた。金属学的分析では炭素量3.56%の白鑄鉄組織鉄塊であった。

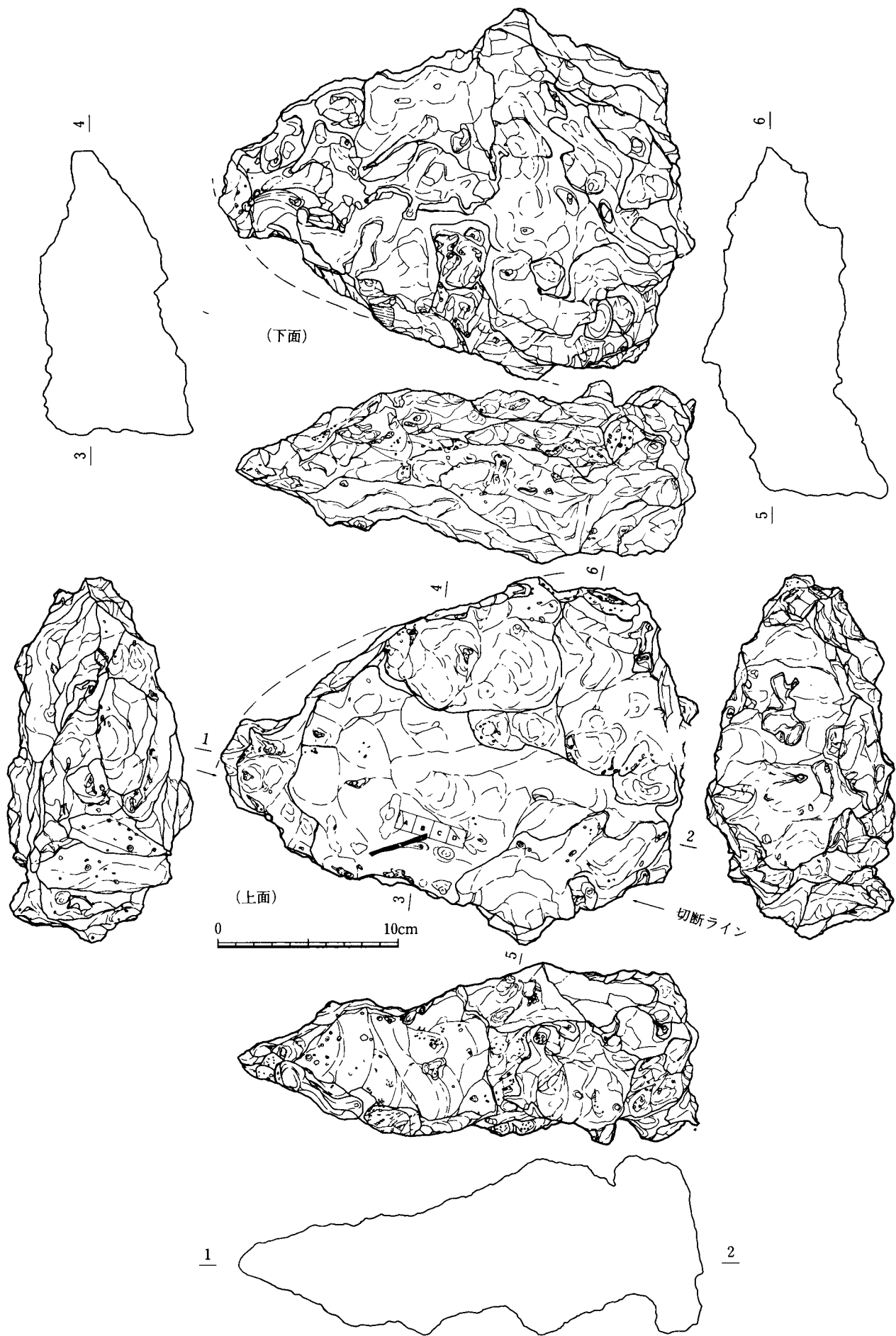
第79図3は砲弾型に近く、3.8×1.8×1.4cm、重量24.7gである。表面は錆色である。4は錆色基調であり、錆化した部分も多い。3.4×2.7×1.5cm、重量21.8gである。5は不整球形であり、1.8×1.8×1.3cm、重量11.6gである。表面は錆色であり、正面は少し小さな凹凸がある。25は楕形状であり、4×3.4×1.5cm、重量33.3gである。表面はゴツゴツしており、暗い褐色基調で錆色が見られる。9は第2次分析資料No.9である。図の上側と右



(1/3)

第77図 大鉄塊実測図(土落とし前)





第78図 大鉄塊実測図(土落し後)

側が丸くて厚く、左側が薄い。0.5～3mm程度の丸い凹凸が多く見られる。色調は青みがかった灰色基調であり、裏面には錆色した部分が多い。6.8×2.6×1.5cmである。分析結果は極低炭素鋼であった10は上の方が流動した先端部である。先がやや左上に向いている。表面は錆色で、丸みを持つ。長さ4cm、幅0.9×0.5cmである。17は鉄鉄と思われる。表面はサビ色基調であり、裏面には土が少々付着する。10.5×4.6×2.2cm、重量134gである。18は鉄鉄と思われる。表はゴツゴツしており、木炭痕がある。裏はやや平坦であり、弓状に反る。10×6×2.8cm、重量149gである。

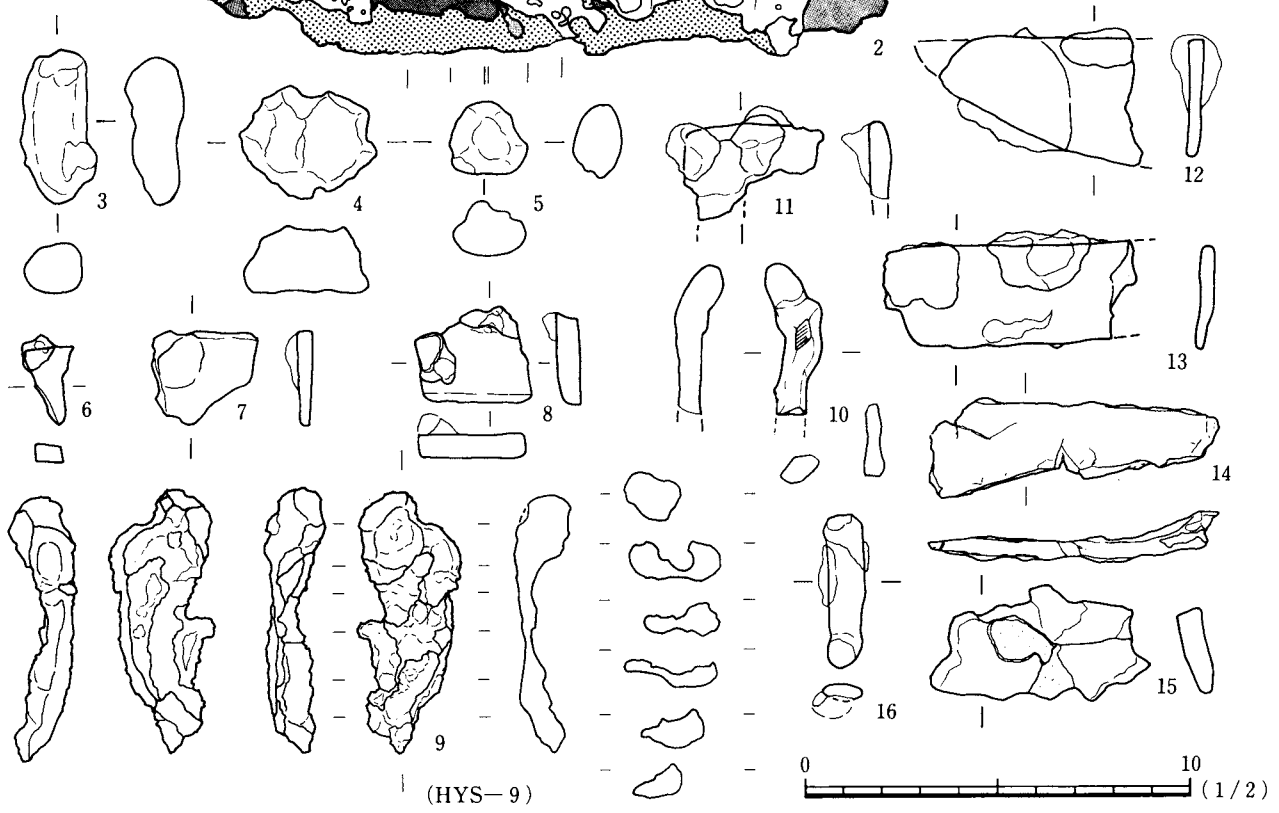
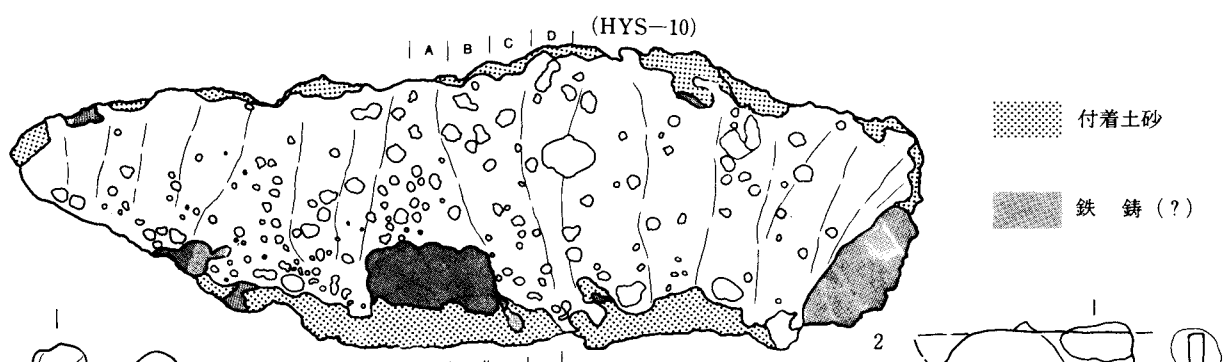
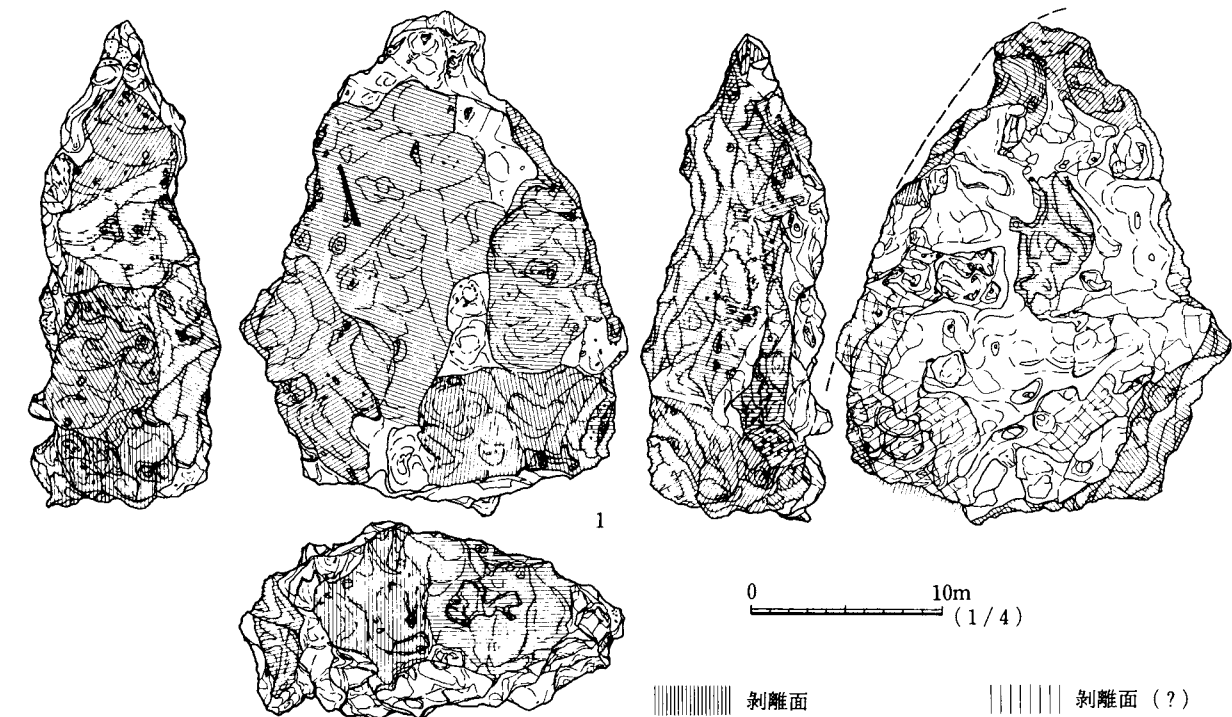
**鉄器(地金・原料)** 第79図6は鉄片であり、2.4×1.3×0.7cm、重量2.7gである。7は鉄片であり、2.5×2.4×0.5cm、重量4.9gである。左側が錆で膨れる。8は鉄片であり、2箇所錆膨れがあり、3×2.4×1cm、重量14gである。11は鉄器の破片であり、2箇所錆で膨れ、左下が欠けている。4×(3)×1.2cm、重量14.6gである。12は鎌ないし包丁の先と思われ、先には木炭を巻き込んだ土が付着する。5×3.5×1cm、重量18.4gである。13は小刀の茎～関(まち)の部分と思われ、刃先側が折れている。錆膨れが見られ、6.5×2.8×1.2cm、重量16.2gである。14は小刀の刃先であろうか。茎側が折れ、錆膨れによって反っている。7.2×2.5×0.4cm、重量13.6gである。15は鉄器の破片と思われ、右側が錆膨れしている。5.4×3×1.2cm、重量16.7gである。16は4×1.3×0.6cm、重量2.9gである。第80図26は鉄片であり、左側に大きな錆膨れがある。錆による剥離が始まっている。3.8×3.4×1.9cm、重量15.3gである。27は鉄片であり、表面には黄褐色の土が丸く付いていた。表面は少し錆ているが、鉄部分(芯)はしっかりしている。4×3×0.6cm、重量21.8gである。

**黒鉛化木炭** 第80図19は炉内で反応して黒鉛化した木炭である。表面は暗い銀色(黒鉛化)基調であり、錆色をした部分も多い。9×3.5×2.8cm、重量92.8gである。第80図21～24は炉内で反応して、黒鉛化(鉄を吸着?)した木炭である。21は錆色粒子で覆われる。鉄鉄が錆で膨張して、剥離させている。6.2×4.2×2.7cm、重量42.5gである。22は表面が錆色で覆われ、上には錆ぶくれが存在する。長さ8.5cm、厚さ2.9×3.2cmであり、木炭は断面三角形である。重量は54.3gである。23は表面錆色であり、1～5mm大の錆色粒子が付着する。先端は黒鉛化している。5.2×1.9×1.2cm、重量10.3gである。24は表面は錆色をし、木目に沿って(鉄の錆による)剥離が目立つ。7×2.3×1.7cm、重量35gである。

**椀形滓** 第80図28は2箇所が欠け(割られ?)しており、ほぼ半分が遺存する。集落遺跡から出土する椀形滓は軟らかく、砂っぽいものが多いが、この滓は非常に硬くて緻密である。表面は錆色基調であるが、所々暗い銀色に光る。割れ口断面では気孔が上に抜けるのが確認された(拓本中央)。右側には幅4.5cm、厚さ0.6cmの(黄褐色)高まりがあり、その中心に錆色(スクリーントーン部分)がある。この上面部分に精錬された鉄塊が生成されて、取り去られた痕跡と思われる。

**石** 第76図4は白っぽい肌色基調で、1～2mm大の孔や石英を多く含む石(凝灰岩質か)である。正面と上面、一部下面に炉壁の溶解したもの(暗黒褐色基調で砂粒の白色粒子、気孔を少々含む)が覆っている。16.3×13.6×16.2cm、重量2.40kgである。X 4 Y 18・19区にはこの石が多く存在するが、他の区には存在しない。また林遺跡内では石は非常に少ないので、この石は持ち込まれたものと思われる。X 4 Y 19区炉壁集中区には16×12×8.5cm、重量1.15kgが存在する。この2点を例外として、ほかは5cm以下に小さく割られたものが多く、熱を受けて変色した石も1例ある(図版91)。

**鉄滓** 竪形炉の炉内滓であり、全体にゴツゴツし、黄褐色基調と茶褐色基調のものがある。特に大きなもののみを図化(1/6)した。第76図5、8の正面図右～上～左側のカーブは炉の内側のラインを反映している可能性がある。5は黄褐色基調であり、直径4cmの木炭痕がある。35×24.6×13cm、重量6.9kgである。6は正面茶褐色基調であり、他は黄褐色基調である、裏面には土が付着する。直径1.5cmと2.5cmの木炭痕がある。12×16×10.8cm、重量2kgである。7は黄褐色と茶褐色基調が半々である。22×15×11cm、重量2.35kgである。8は正面が茶褐色基調であるが、ほかは黄褐色基調であり、裏面には土が付着する。23×15×9.6cm、重量2.55kgである。

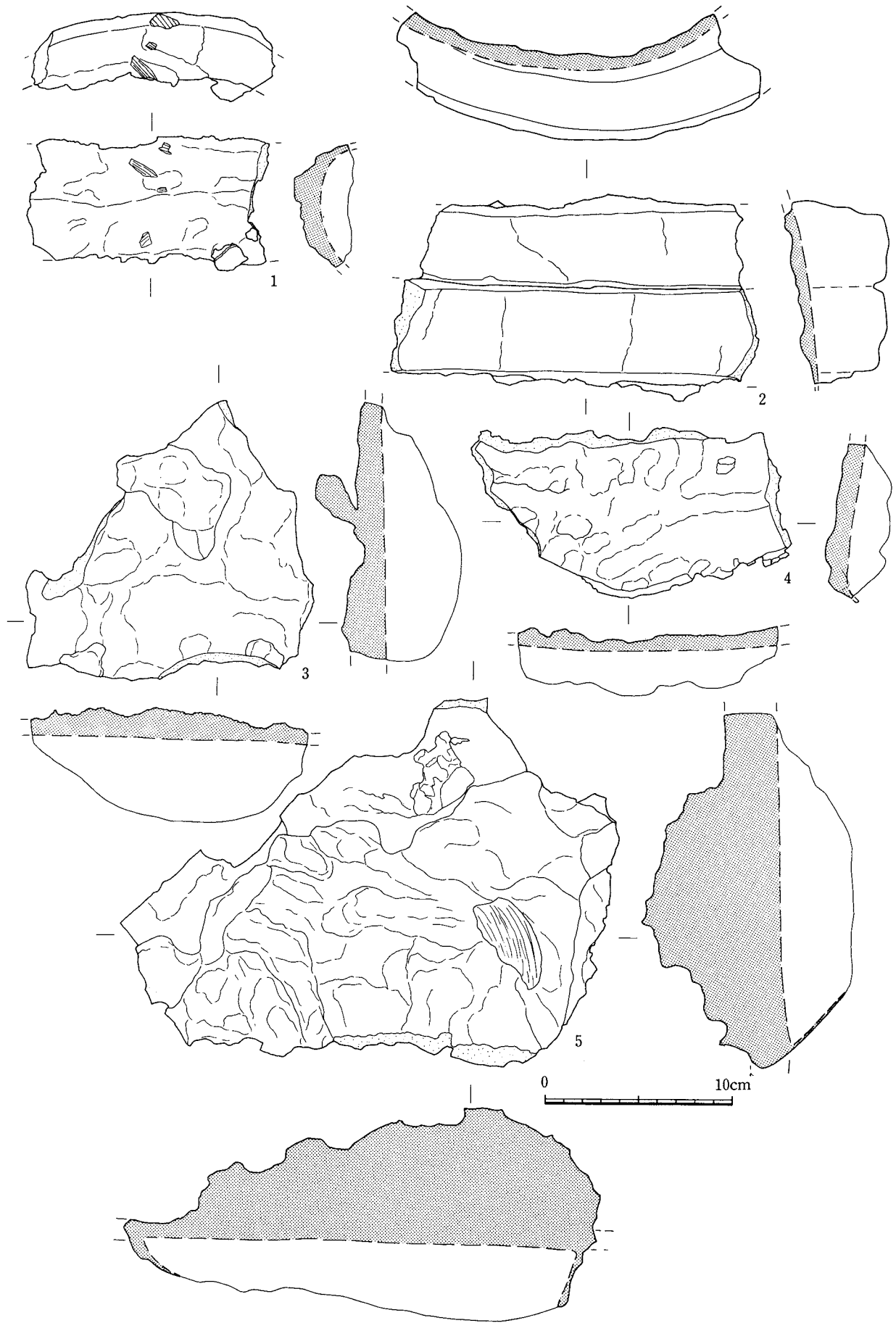


第79図 鉄塊等実測図(1)



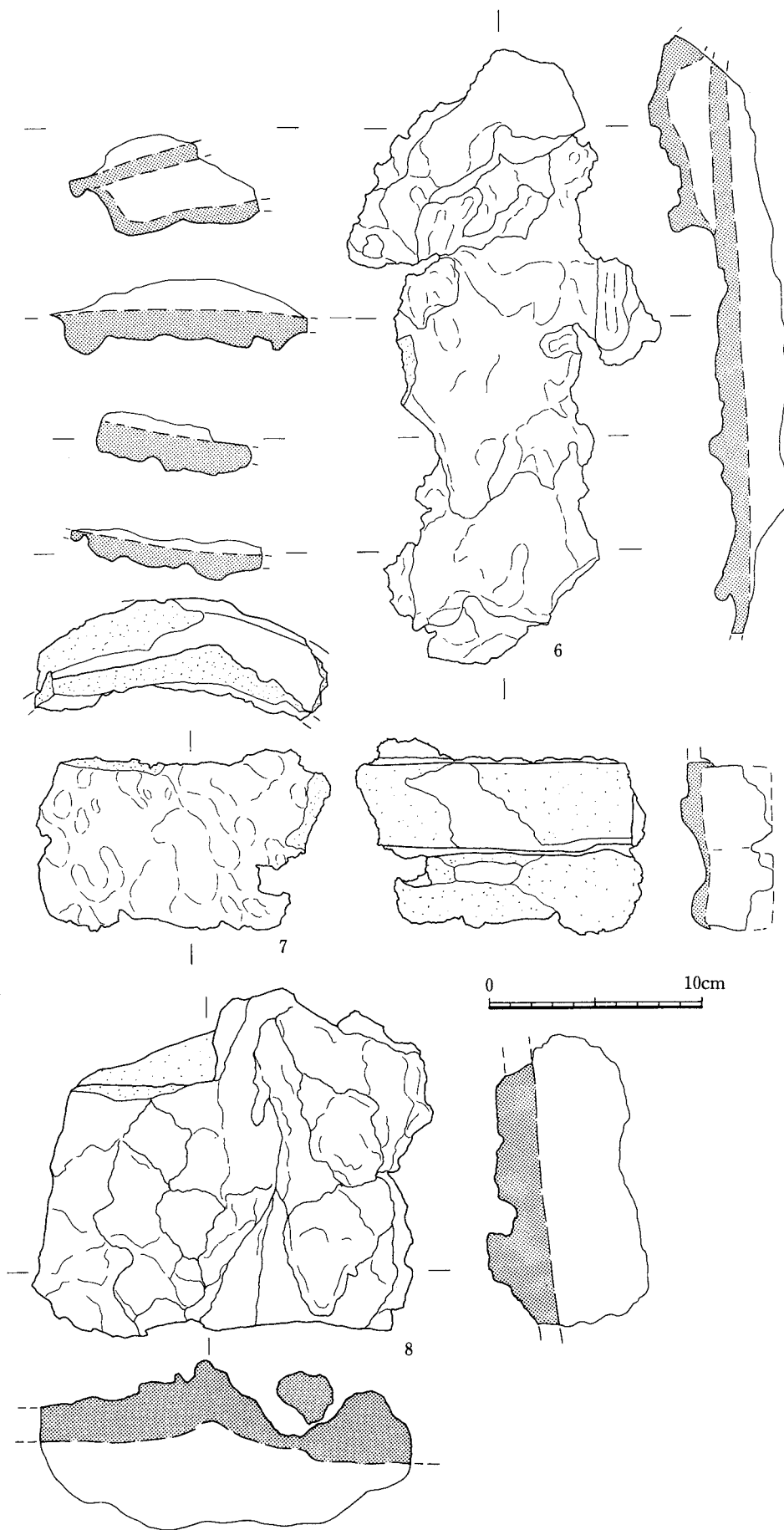
第80図 鉄塊等実測図(2)

(1/2)



(1/3)

第81图 炉壁实测图(1)



(1/3)

第82图 炉壁实测图(2)

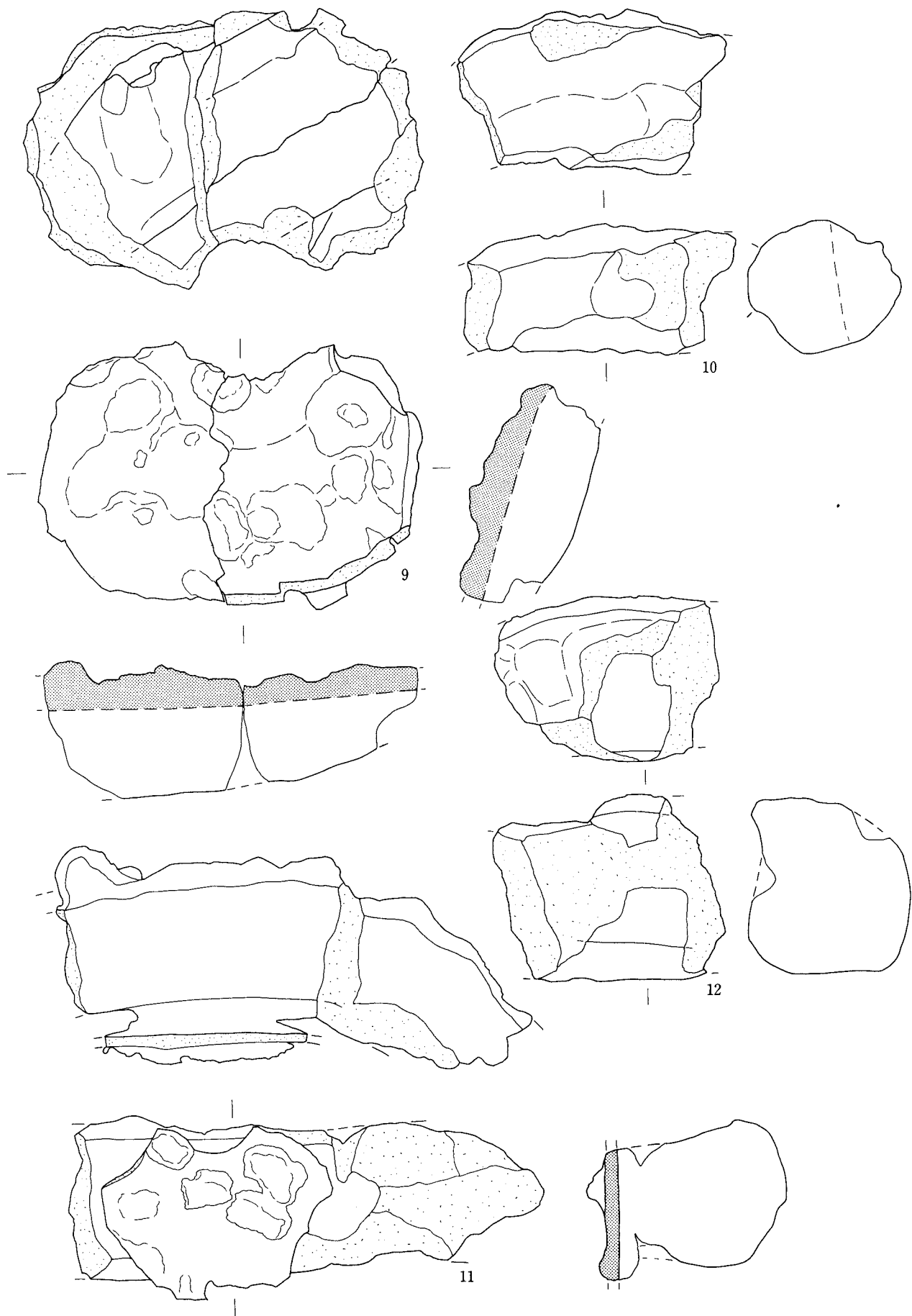
炉壁(第81～87図) 第81図1～第82図8は作業場～整形炉周辺出土である。1は下側に気孔が多く見られ、上側はあまり見られない。溶解部は錆色を基調とし、暗い藍色の部分もある。砂鉄の半還元(焼結)した茶色の粒子と炭が付着する。右下には鉄塊系遺物が付着する。2の溶解部は暗い藍色を基調とし、粘土のなかの砂粒(白色)が多く見られ、白くなっている。粘土帯(長さ・高さ×厚さ)は上段4.5×4.5cm、溶解部厚さ0.5cm、下段4.5×4cm、溶解部厚さ0.5～1cmである。裏面に5～7cm間隔の接合痕のようなヒビ割れがみられる。3は溶解部がやや直線的であり、方形炉の炉壁の可能性がある。溶解部は暗い藍色を基調とし中央付近は淡茶褐色と錆色、左端はやや赤紫色がかかる。粘土の厚さは(4.5)cmである。4は溶解部が少し弓状になる。溶解部は赤紫色がかかった藍色基調であり、0.5～1mm大の突起(粒子)が多く見られ、ゴツゴツした感じである。5は溶解部がやや直線的であり、方形炉の炉壁の可能性がある。中央部付近には横方向に厚い。表面は溶けて流れたような痕が著しい。暗い藍色基調であるが、部分的にガラス化した所もある。錆色も多く見られ、鉄塊系遺物も1個取り込む。裏面下側と右側面も溶解する。6の溶解部はやや赤紫色がかかった淡藍色であり、表面は砂粒のためかザラザラする。上側は壁が落ちてきて、上に溶着している。7は正面左側は濁った藍色基調であり、錆色の斑点が付着する。1mm以下の気孔が多い。中央から右側は暗い藍色基調で赤紫が入る。粘土帯は上段3.8×3.2cm、溶解部厚さ0.5～1cm、下段3.8×4cm、溶解部厚さ0.3～0.7cmである。8は溶解部がやや直線的であり、方形炉の炉壁の可能性がある。表面は暗い藍色基調であり、錆色や淡茶褐色が付着する。所々に0.5mm程度の錆色粒子が固まったものがみられる。正面図右側の裏まで溶解部が付着している。溶解部厚さ1～3.3cmである。

第83図9～第86図22は集中区出土(第70・71図)である。9は正面図上中央が円形にくぼみ、断面も上側が下がる。溶解部は藍色基調であるが、鉄塊、鉄分、錆色がその上を覆っている。裏面には長さ6cmの粘土帯(裏面上側)をやや曲げながら貼付け、それを別の粘土(裏面下側)で補強する。10は正面中央部が変色しており、溶解部分が剥離したようである。粘土帯は7×8.2cmである。11はコーナー部分である。右側のコーナーは変色しており、溶解部が剥離したようである。粘土帯は8～9×9.2cmであり、溶解部の厚さは0.7cmである。溶解部には砂鉄が焼結した塊と砂鉄粒子(灰色がかかった藍色)が多く付着する。12は正面が変色しており、溶解部分が剥離したようである。8.6～10×8.6cmの粘土帯であり、下面が少しくぼむ。13は溶解部の高まりが図の上から下に成長するように見える部分(縦断面図左側)から縦長に置いたが、右側から左に成長するように見える部分(横断面図上段)もあるので右側が上で横長の炉壁になる可能性もある。中央部分が大きくくぼむ。上からくぼみ部分までは、藍色基調であり、上側のくぼまない部分には紫色が入る。溶解によるコブが見られ、1～2mm大の気孔も多い。断面は暗い藍色基調で白色粒子(砂粒)を多く含み、気孔は見られない。くぼみより下は表面を錆色、淡茶褐色で覆われる。断面では、暗い藍色基調であるが灰白色の部分も多く、また気孔を多く含む。裏面は2本の粘土帯を並べ、それを別の粘土で覆う。右側の粘土帯(裏面左側)は6.5～9.5×8～8.5cm、溶解部厚さ0.5～1.5cmである。左側の粘土帯(裏面右側)は6.5～7×2.2～9cm、溶解部厚さ0.5～1.5cmである。14は溶解部が赤紫がかかった藍色を基調とし、1～5mmの気孔がやや多い。粘土帯は厚さ1.8～2.5cm、溶解部厚さ0.5～1.5cmであり、外側を厚さ1.8～2.5cmの粘土を貼付ける。15は溶解部が暗い藍色基調と思われるが、表面には錆色が覆っており、2～5mm大の錆色粒子が付着する。粘土帯は表面から褐色、白色、赤橙色に変色している。裏面は粘土帯が3本確認された。下段の上に左側を乗せ、次に右側を被せて繋げている。粘土帯は下段4.5×3.2cm、溶解部厚さ0.7～1.7cm、上段左側3.7×3.3cm、溶解部厚さ0.7～1.3cm、上段右側6×4.2cm、溶解部厚さ0.5cmである。16はコーナー部分ないし繋ぎの部分と思われる。粘土帯は(5)×(4.5)cmである。右側は斜めになっており、その周辺が溶解している。溶解部は暗赤褐色基調である。17は正面が変色しており、溶解部が剥離したようである。粘土帯の長さ5～5.7cmである。18は溶解部分につられて粘土表面が剥離している。8×7.7cmの粘土帯の裏側に別の粘土で補強する。19は正面が変色しており、溶解部が剥離したようである。粘土帯は8×10cmの断面蒲鉾型であり、下面がくぼむ。20は正面形がやや弓状になる。溶解部は暗い藍色を基調にし、赤紫色がかかる。スジ状の縦のくぼみがあり、1mm

大の気孔がやや多い。粘土帯は7.5×8.7cm、溶解部厚さ0.8cmである。21は厚い粘土部分を持つ。溶解部は紫がかった暗い藍色で、左隅がガラス化している。粘土部分の厚さ(10.5)cm、溶解部厚さ1cmである。22は炉の基底部付近であろうか。正面左側にやや変色した部分が見られ、溶解部が剥離したものと思われる。残存する厚さ10.5~14.5cmである。

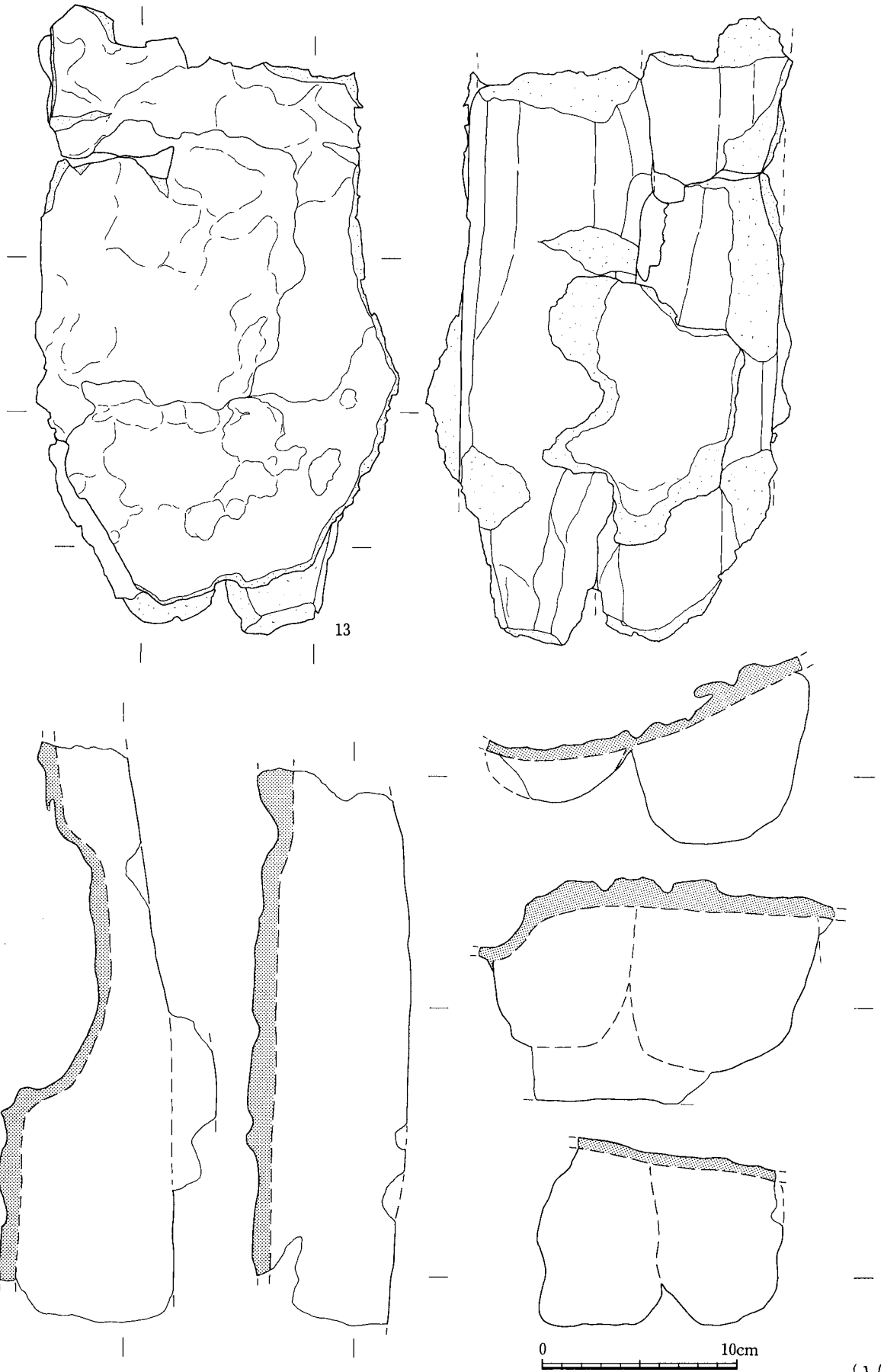
第86図23~第87図36は包含層出土である。23は粘土帯だけであるが、正面はやや暗褐色なので内側の溶解部分が剥がれた可能性もある。粘土帯は4.7×4.3cmである。24は2次分析資料No.5である。粘土帯は5×3cm、溶解部厚さ1.3cmである。溶解部はサビ色基調であり、砂粒の白色が混じる。25は粘土帯の断面形が台形である。2.5と5cmの長さ(高さ)であり、厚さ3.3cmである。溶解部の厚さは0.7cmであり、溶解部は淡茶褐色(錆色)基調である。26は粘土帯4.7×3.9cm、溶解部厚さ1.2cmである。溶解部は黒色基調でガラス化している。下側は砂粒が多く付着して灰色基調の部分と錆色基調の部分がある。27はコーナー部分である。粘土帯4~4.3cm、溶解部厚さ約0.7cmである。表面はガラス化しており、光沢を持つ。黒色を基調とし、上側は赤茶褐色が混じる。28は上・右側面とも溶解部が付着する。溶解部は暗い赤紫色がかった藍色基調であり、1~2mmの気孔が多い。粘土帯の長さ3.7~4.7cmである。29は下側の径が広いことから炉壁の上の部分と思われる。溶解部は斜めになる。溶解部は暗い藍色基調であり、赤紫色が入る。砂粒の白色が非常に多い。粘土帯は5×3.5~(4.3)cm、溶解部厚さ0.5~1.3cmである。30はコーナーないし繋ぎの部分と思われる。右の斜め部分も溶解する。上の壁が落ちてきて、溶着している。粘土帯の厚さは5cm、溶解部分の厚さは0.7~1cmである。31は粘土帯5×3.5cm、溶解部厚さ1.2~1.4cmである。溶解部は黒色基調であり、赤紫・錆色が入る。32はやや湾曲する粘土帯である。6.6×5cm、溶解部厚さ0.5~1.5cmである。4側面とも溶解している。溶解部は暗い藍色基調であり、少し気孔が見られる。錆色、灰色した部分も少しある。33は溶解部は淡い紫色がかり、1~5mmの気孔がやや目立つ。上段の粘土帯は4.5×3.2cm、溶解部厚さ1~1.3cmである。34は溶解部で接合した資料である。溶解部は淡い褐色が混じる灰色基調であり、鉄塊・錆色が付着する。35の溶解部は上側灰色、中央錆色、下側錆色+黒色である。36は第84図13のように縦の炉壁と思われるが、横の炉壁の可能性もある。溶解部は紫色がかった暗い藍色基調であり、部分的に錆色がある。幅6.8~7.5cm、厚さ3.8~5.2cm、溶解部厚さ0.7~2.5cmである。





(1/3)

第83图 炉壁实测图(3)



第84图 炉壁实测图(4)

(1/3)



第85图 炉壁实测图(5)



第86图 炉壁实测图(6)

(1/3)



第87图 炉壁实测图(7)

(1/3)

表3 製鉄遺構遺物出土地

第71～73図(鑄型)		3 X 4 Y 18-79区表土
1 X 4 Y 18-30区フイゴ座内No.23		4 X 4 Y 18-7区黄褐
2 X 4 Y 18-30区フイゴ座内No.30		5 X 4 Y 19-28区表土
3 X 4 Y 18-30区赤褐		6 X 4 Y 19-18区表土
4 X 4 Y 18-59区鑄型内		7 X 4 Y 19-58区表土
5 Y 4 Y 18-60区黄褐		8 X 4 Y 19-48区表土
6 ラベルナシ		9 M17区表土
7 X 4 Y 18-30区フイゴ座内No.59		10 X 4 Y 19-37区表土
8 X 4 Y 18-60区赤褐		第78・79図
9 X 4 Y 18-59区鑄型内		1 X 4 Y 18-19区黄褐
10 X 4 Y 18-59区鑄型内		3 M17区表土
11 X 4 Y 18-59区黄褐		4 X 4 Y 18-89区黄褐
12 X 4 Y 18-59区鑄型内		5 X 4 Y 19-38区表土
13 X 4 Y 18-59区黄褐		6 X 4 Y 18-89区黄褐
14 X 4 Y 18-30区赤褐		7 X 4 Y 18-39区黄褐
15 X 4 Y 18-30区フイゴ座内No.18、21、22		8 X 4 Y 19-89区黄褐
16 M17区東表土		9 X 4 Y 19-29区表土
17 X 4 Y 19-18区表土		10 X 4 Y 19-8区黄褐
18 X 4 Y 19-28区表土		11 X 4 Y 19-50区表土
19 M17区西表土		12 X 4 Y 19-19区表土
20 M17区東表土		13 X 4 Y 18-70区黄褐
21 X 4 Y 19-7区集中区上面		14 X 4 Y 18-70区黄褐
22 ラベルナシ		15 X 4 Y 18-99区表土
23 M17区東表土		16 X 4 Y 19-59区表土
24 M17集中区上面		17 X 4 Y 19-50区表土
25 ラベルナシ		18 X 4 Y 18-100区表土
26 X 4 Y 19-57区表土		19 X 4 Y 18-19区黄褐
27 X 4 Y 19-39区表土		20 ラベルナシ
28 M17区西、東表土		21 X 4 Y 19-29区表土
29 M17区西表土		22 X 4 Y 19-29区表土
30 X 4 Y 19-8・9区表土		23 X 4 Y 19-29区表土
31 M17区東表土		24 X 4 Y 19-8区表土
32 M17区西表土		25 X 4 Y 19-29区表土
33 M17区表土		26 X 4 Y 19-19区表土
34 X 4 Y 19-18、19区表土		27 X 4 Y 18-88区表土
35 M17区西表土、X 4 Y 19-8・17区黄褐		28 X 4 Y 19-50区表土
36 X 4 Y 19-27区表土、M17集中区上面		第80～86図(炉壁)
37 M17区西表土		1 X 4 Y 18-8区No.1
39 X 4 Y 19-17区上面、Y 19区表土		2 X 4 Y 18-58区No.4
40 X 4 Y 19-18区表土		3 X 4 Y 18-30区フイゴ座No.45
41 X 4 Y 19-17区No.287		4 X 4 Y 18-8区No.3
42 X 4 Y 19-18区表土、19-27・28区表土		5 X 4 Y 18-67区黄褐
43 X 4 Y 19-8区表土		6 X 4 Y 18-49区黄褐
44 X 4 Y 19-8区表土		7 X 4 Y 18-59区黄褐
45 M17区西表土		8 X 4 Y 18-30区フイゴ座No.42
46 X 4 Y 19-28区表土		9 X 4 Y 19-7区No.143、19-17区No.225
47 M17区集中区上面		10 X 4 Y 19-7区No.137
48 X 4 Y 18-59区鑄型内		11 X 4 Y 19-16区No.122
49 M17区集中区上面、X 4 Y 19-6区表土		12 X 4 Y 19-7区No.128
50 X 4 Y 19-28・39区表土		13 X 4 Y 19-17区No.131、268
51 X 4 Y 19-7区黄褐		14 X 4 Y 19-17区No.272
52 M17区東表土		15 X 4 Y 19-17区No.438
53 山路(攪乱)		16 X 4 Y 19-7区No.129
55 X 4 Y 19-6区灰砂		17 X 4 Y 19-17区No.403
57 X 4 Y 19-37区表土		18 X 4 Y 19-7区No.142
58 X 4 Y 19-8区表土、19-7区茶褐色		19 X 4 Y 19-7区No.132
59 M17集中区上面		20 X 4 Y 19-17区No.271
60 X 4 Y 19-37区表土		21 X 4 Y 19-17区No.141
61 M17集中区上面		22 X 4 Y 19-17区No.125
62 X 4 Y 19-17区集中区上面		23 X 4 Y 19-18区表土
63 X 4 Y 19-27区表土		24 X 4 Y 19-18区表土
64 X 4 Y 19-6区灰砂		25 X 4 Y 19-49区表土
65 ラベルナシ		26 X 4 Y 19-28区表土
66 X 4 Y 19-17区集中区上面		27 X 4 Y 19-37区表土
第73図(炉内滓)		28 X 4 Y 19-47区表土
1 M17区表土		29 X 4 Y 19-39区表土
2 X 4 Y 18-30区フイゴ座No.45		30 X 4 Y 19-29区表土
3 X 4 Y 19-16区No.478		31 X 4 Y 19-49区表土
4 X 4 Y 18-70区黄褐		32 X 4 Y 19-59区表土
5 X 4 Y 18-67区黄褐		33 X 4 Y 19-37区表土
6 X 4 Y 19-17区No.112		34 X 4 Y 19-50区表土
7 X 4 Y 19-27区No.111		35 M17区西表土
8 X 4 Y 19-17区No.120		36 X 4 Y 19-29区表土
第74図(羽口)		
1 X 4 Y 18-10区黄褐		
2 X 4 Y 19-30区表土		

















































































































































## 第5章 考察

### 第1節 須恵器について

#### はじめに

林オオカミダニ1・2号窯の調査では1号窯の南側、調査区外に遺物の分布が予想されるものの、その他の主要部分(2基の窯体および灰原の大部分)を完掘したといえる。ここでは、第4章中で十分に触れることのできなかった2号窯体内一括検出土器の出土状況や、各実測土器の出土位置・傾向、あるいは破片数等の数量データを呈示し、これに若干の考察を加えることで当時の窯操作業状況の復元を試みたい。なお、窯の先後関係は灰原層位より2号窯(古)→1号窯(新)である。

#### 1. 2号窯体内一括検出土器の検討(第90図)

2号窯の焼成室入口から2～4mの地点で一括検出した土器に、若干の検討を加えていく。

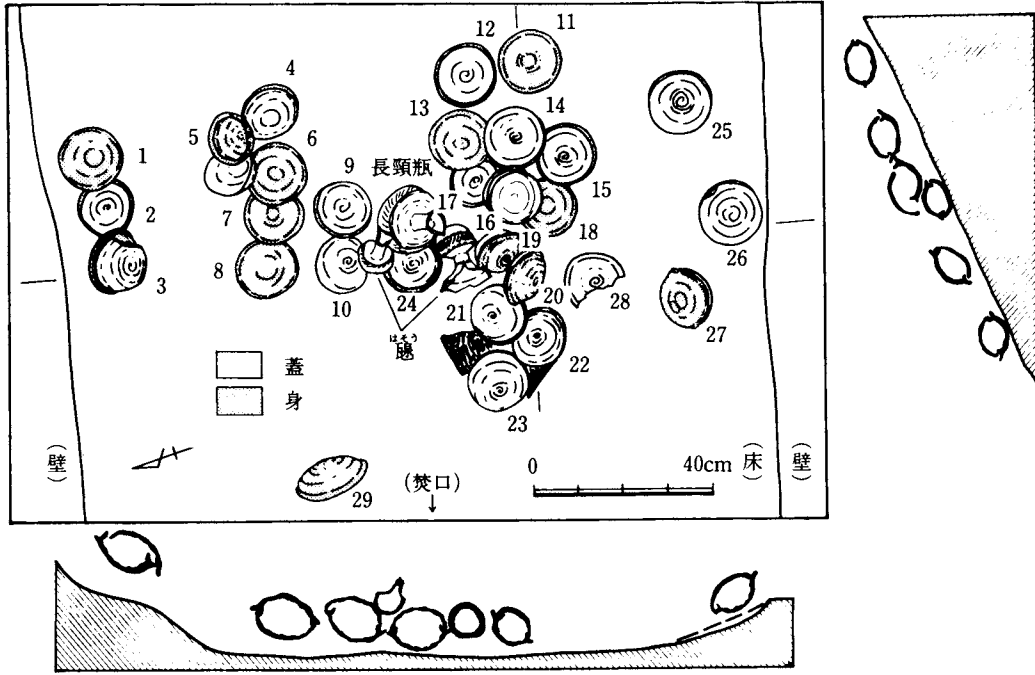
##### a、出土状況について

①が出土状況図である。長頸瓶1、甕2、坏Aは合口状態のもの28、蓋のみ1を数える。坏Aの型式は(中には判断に苦しむものもあるが)ほぼ1類である。その上下関係では28セット中、蓋が上のもの17セット、身が上のもの11セットであり、蓋を上とするものが若干勝っている。いずれも土器表面に薄く暗緑色自然釉を被っており、中にはこれが土器の傾斜のため釉垂れとなるものもある。そして、この釉垂れは多くが手前(焚口)方向に流れ、傾斜する窯床上に水平に設置された土器が、斜面下方に向かって崩れたことがうかがえるものである。また、重ね焼き状態を示す半円上の焼き斑が器表に残るものも幾つかある。②重ね焼き斑・釉付着状況図では、以上の釉の範囲および重ね焼き斑を図化した。発掘調査時には上記の表面観察に加え、土器の傾斜、他の土器との位置関係を記録して取り上げており、これを元に室内で出土状況の復元を行った。その出土状況から窯詰め時の整然とした格子状配置を保った移動の少ない状態であることを予測していたが、復元結果からも、重ねられた状態で出土したものは下位と上位の土器の焼け斑・剥離痕が整合し、甕底部の剥離痕も坏表面および長頸瓶肩部の剥離痕と一致し、これら一括検出土器が窯詰め時の原位置をほぼ動いていないことが確認できた。室内復元の結果を個別に述べると、1～24については重ねが崩れた程度で、ほぼ原位置にある。そのうち4～6は焼成中に崩れた状態で溶着する。19・20は甕も含め崩れが大きく、ここでは周辺土器の抜き取りがあったと考えられる。その一部が28かもしれない。25～27については、より壁際に配されていたものが内側に崩れたと考えられるが、散在し他の土器との関係は決定できない。29は裏返しとなっている。

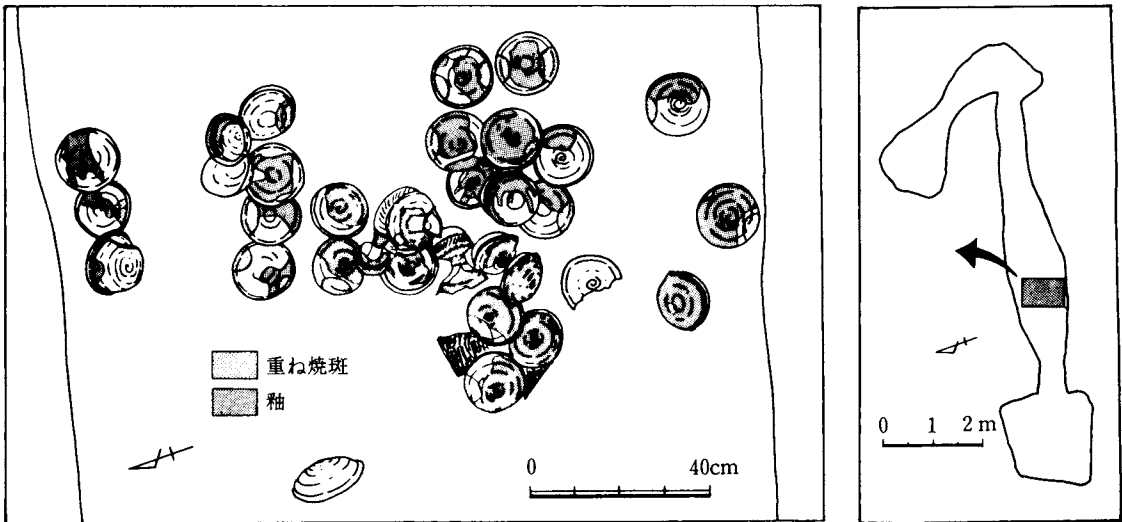
##### b、配置作業の復元

室内での出土状況復元をふまえ、原配置を検討したのが③原配置復元図である。重ね焼き斑から存在を推定した坏は綱かけで示した。その配置を見ると、まず窯体中心線に長頸瓶が乗り、その両側には甕が位置する。窯体中心線に沿う縦方向に床直で5列、これを窯の幅に単純に当てはめるなら8列程度の床直坏配置が復元できる。以下に原配置復元作業の過程で想定できた土器配置作業の手順を示したい。まず縦列に数個据えていく。その際、土器5～8の断面図に示すように斜面下から設置し、斜面上位の土器は下位の土器に縁を掛けることで一個一個を水平に設置する。一列設置し終わると次の列に移る。先に隣列との配置関係において格子状となることを予想していたが、器表面の3方に焼け斑をもつ土器の観察から、実際は隣列とは互いに土器半個分中心をずらした千鳥状配列であったことが看取できた。このようにして1段目を窯幅一杯に設置する。2段目の土器は、横断面でみるように1段目の列と列の間に載せていくが、この際も1段目と同様縦列をまず先に並べていくものである。このような作業を窯奥から順に繰り返すことで窯詰め作業が行われていったと考える。なお、一括検出土器中で

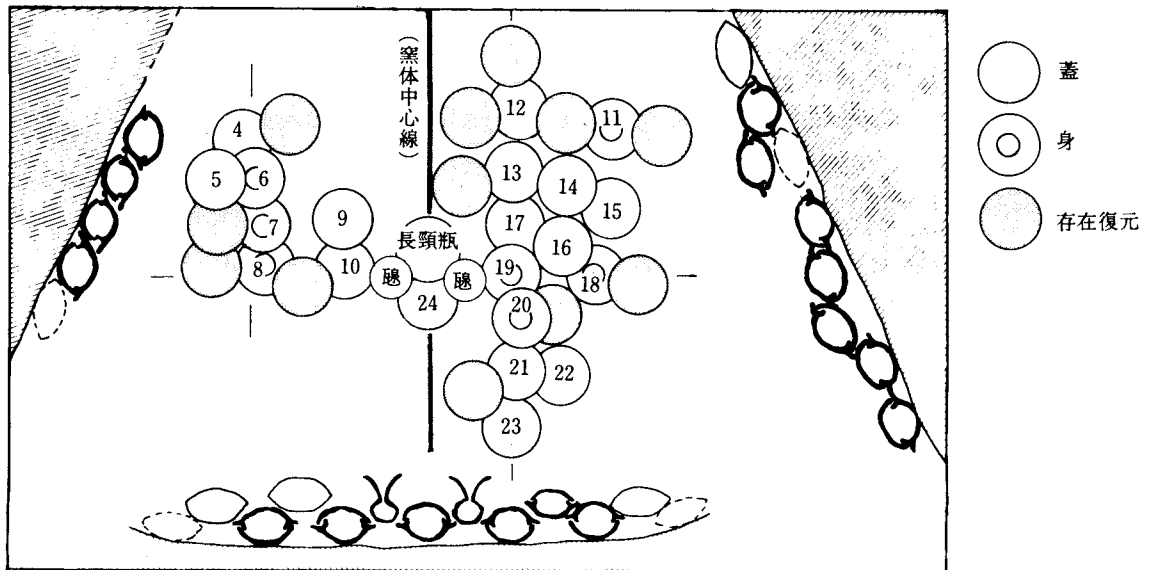
① 2号窯体内一括検出土器出土状況（番号は取り上げ時のもの）



② 重ね焼き斑・釉付着状況



③ 原配置復元



第90図 2号窯体内一括検出土器の検討



の重ねは2段までである。<sup>(2)</sup>

### c、小結

最後に、窯体内一括検出土器の性格に検討を加えていきたい。まず、その焼成状態を他の2号窯出土土器と比較するなら、一括検出土器は長頸瓶・甕の口縁が若干破損している他は完形品であり、他の土器と同様焼成良好であり窯壁等の付着もない。上記の配置復元からは、これら一括検出土器が周辺に位置した土器の一部が抜かれながらも、ほぼ原配置を保つことが確認でき、これらには天井崩落による取りこぼしというよりも、意図的な取り残しとできる状況が認められよう。<sup>(3)</sup> また、2号窯出土土器の中でも壺に破断面まで砂や釉が熔着するものが多く見られるが、このような状態を呈するのは壺のみである。このことから窯内で壺が配置されていた場所で局部的な天井崩落があったことを推察する。なお、本窯と近接する時期でこのように床上に土器が遺存していた例として加賀市分校3号窯や小松市戸津六字ヶ丘2号窯がある。さらに林オオカミダニ窯に隣接する小松市林タカヤマ1号窯では、十数枚重ねた坏A(坏H)蓋が検出されている。タカヤマ窯の例についてはすべて生焼け品であり、窯操業後、時間をおいて改めて窯内に設置されたものとみられる(小松市教育委員会望月氏の御教示による)ものの、操業後になんらかの形で製品を窯内に残す例が当該期の南加賀古窯跡群において散見できる。これらの遺存品の性格について今後より検討を加えていかなければならないが、本窯の窯体内一括検出土器に関しては、焼成中の部分的天井崩落という不十分な窯操業の結果を背景とした、次回の土器焼成成功を祈念する行為に関わるものと一応考えておきたい。

## 2. 土器窯詰め方法の検討

報文中でも重要な土器観察点として取り上げてきたように、本窯出土土器には器表面に自然釉がべったりと厚く被るものが多数存在し、他の土器と熔着状態のもの、重ね焼を示す剥離痕や焼き斑をもつものも頻繁に見ることができる。以下これら土器の観察より推測しうる土器設置・重ね焼方法、および焼台転用土器について若干の検討を加え、土器窯詰め状況に迫ってみたい。なお、実測図では重ね焼状況の図化が十分とはいえず、これを補うものとして写真図版を参照したい。

### a、土器設置・重ね焼方法(第91・92図)

#### (坏A)

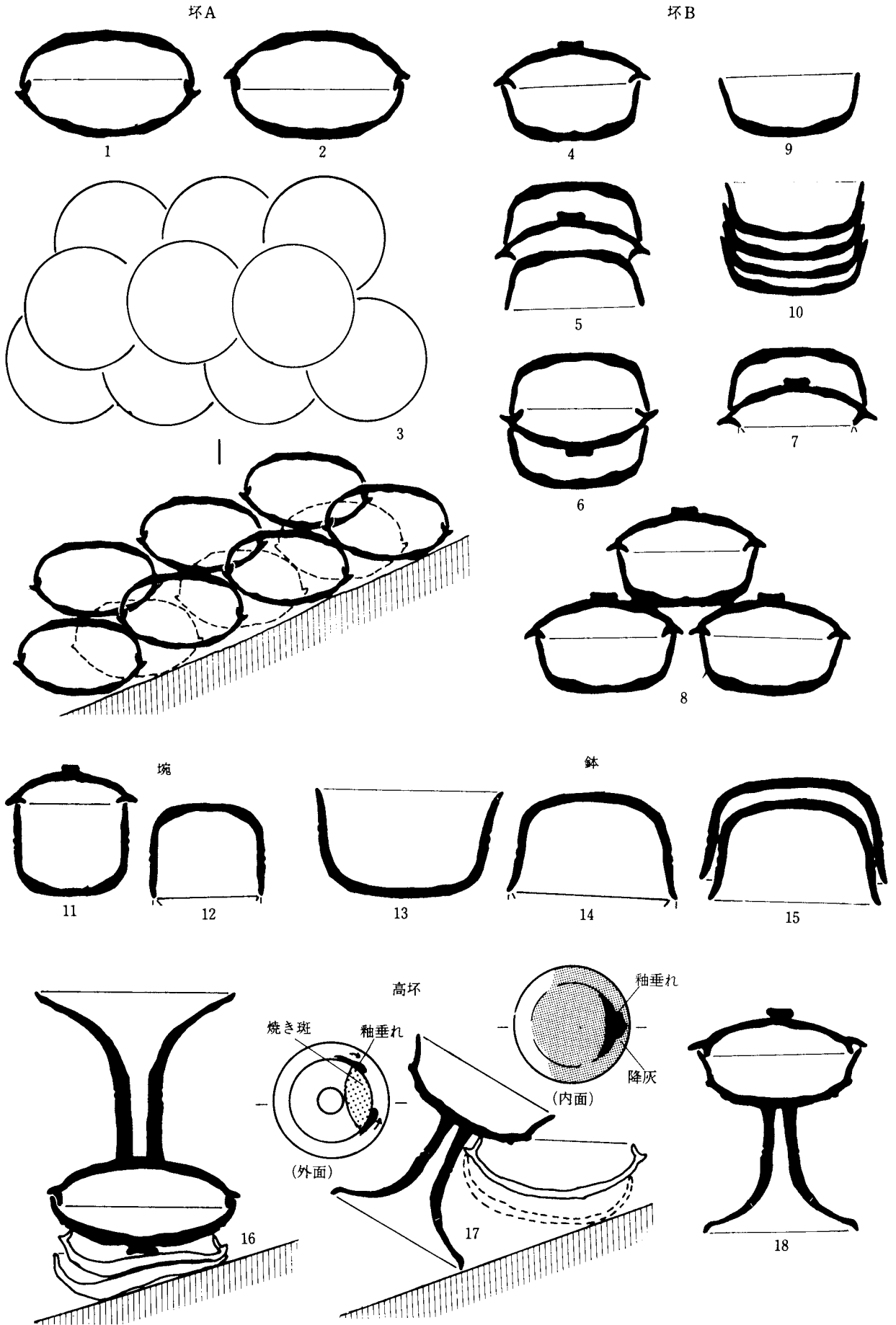
坏Aは最も多く焼成された器種であり、その設置方法は2号窯床面一括検出器によりうかがうことができた(第91図中3以下図中3と略す)。それによると、すべて蓋・身合口状態で設置される。その際、使用時の上下は特に意識していなかったようであり、蓋を上にし設置するものが若干勝る程度である。身を上にして焼成したものは、他の実測土器中にも頻繁に認められる。蓋・身セットでの重ねは2段までであるが、床の傾斜をみるならこれ以上の重ねは崩れを招くため意図的に行わなかったと考える。その他、図中16や17に見るような逆位の蓋に正位の身を載せる例が存在する。その内で焼成良好品は実測図516くらいであり、多くは他の器種と熔着状態にある。この重ね焼方法は他器種を安定させるため便宜的に用いられた方法であろう。

#### (坏B)

坏Bには数種の重ね焼方法が認められた。

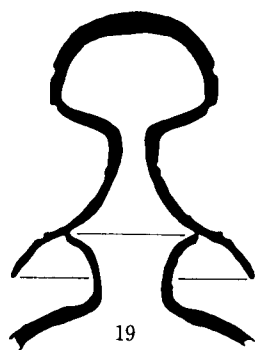
蓋・身合口状態で単体で設置するもの。中には坏Aと同様に3個の土器に1個載せる例(図中8、1号窯に認める)がある。そして、正位の蓋に逆位に身を載せる例(図中7、実測図156)。これには蓋の下位にさらに逆位の身が(図中5)存在したことを蓋口唇部の剥離痕より推測するが、あるいは他器種かもしれない。正位の身に逆位の蓋を載せる例(図中6、1号窯に認める)。この中にはさらに逆位の身を載せるものもある。

また、2号窯には蓋を伴わず身のみで重ね焼成する例(図中10、実測図172・173・177・186)が多く、中には4個の熔着(実測図176)が確認できる。身のみ単体で焼成する例もある。

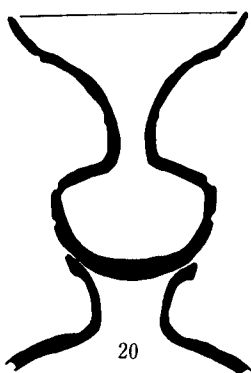


第91図 土器設置・重ね焼方法(1) (白ヌキは焼台転用土器)

壺・瓶

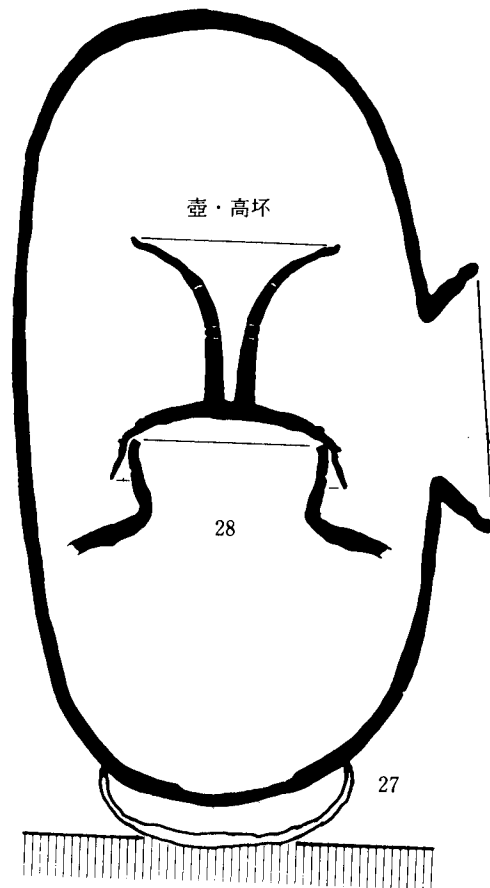


19



20

横瓶

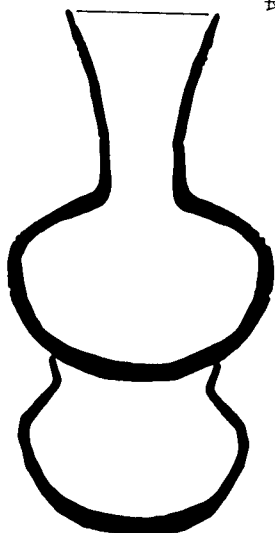


壺・高坏

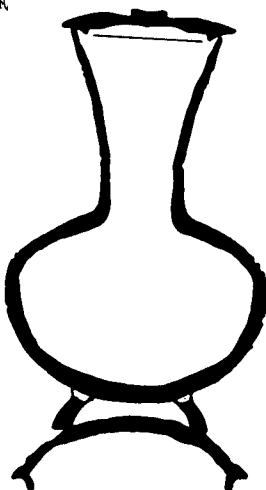
28

27

長頸瓶

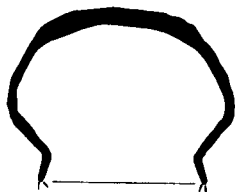


21

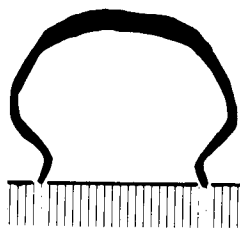


22

短頸壺

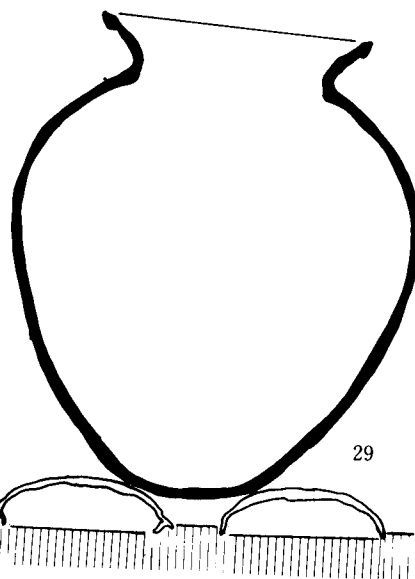


23



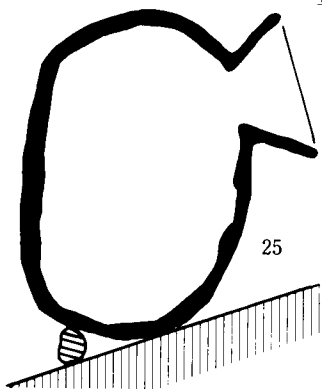
24

甕

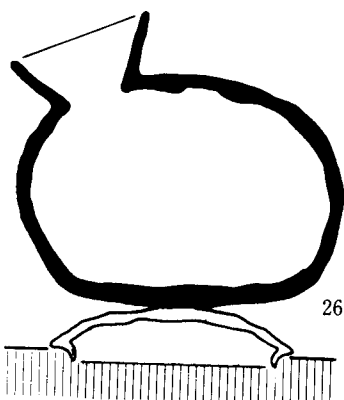


29

平瓶



25



26

第92図 土器設置・重ね焼方法(2) (白ヌキは焼台転用土器)

(碗)

碗では正位で単体で焼成するもの他、蓋を載せる例(図中11)、逆位で設置する例(図中11、実測図190、191)がある。逆位の土器の口唇部には剝離痕のめぐる例があるが、これが蓋痕か、焼台痕かは不明。

(鉢)

単体で正位で焼成する例(図中13)、逆位で焼成する例(図中14)があり、14では口唇部が剝離する(実測図625)。また、1号窯の例(図中15、実測図626)では鉢どうし重ねたものを逆位に設置している。

(高坏)

有蓋高坏としたA類は蓋・身合口状態で倒置する(図中16)。これは逆位の坏A蓋に坏A身を正位に載せたものを台としているが、坏Aの蓋と身を重ねる際、そしてこれに高坏蓋を載せる際には、それぞれ、傾斜を変えて重ねることで斜面上での安定を図っている。高坏B・C・D類の一部も倒置するが、焼台的に坏Aを用いているかは不明。倒置するこの方法は大型高坏の大きく広がる脚裾部の坏部重量によるへたりを防ぐには有効な方法であろう。また、熔着資料の存在する1号窯の例でみると、用いられる坏Aは上位に置かれた高坏蓋と同様の胎土であり、蓋と同じく器肉が厚く造りの雑な坏A10類と分かる。

高坏B・C・D類では図で示す(図中17)ように坏部内面に偏って釉だまり・降灰が存在し、外面には半月状の無降灰部分および釉垂れが観察できる土器が多い。脚裾部内面には偏って降灰があり、脚が部分的に浮いていた状態を想定させる。これらの土器には、脚棒状部と半月状無降灰部分に剝離痕が残る例があり、半月部分の径やこの剝離痕から、図のような坏A身の口縁部に高坏を懸け支える重ね焼方法が推定できる。坏A身のほかに坏A蓋の使用も考えられよう。その他、坏B蓋を載せる例(図中18、実測図665)、壺の口縁部にかぶせる例(図中28、実測図344)が存在する。

(甗)

正位で単体で設置するほか、窯体内一括検出土器中にみるように坏A・長頸瓶等の間隙に載せる例がある。その他、瓶の口縁部に倒置して載せたため、甗口縁部内面中心に丸く無降灰部分が残る例(図中19、実測図288)や、瓶の口縁部に正位に載せる例(図中20、実測図718)がある。

(瓶)

正位で単体で焼成する例、甗を載せる例、かえりを持つ蓋を載せる例がある。

(長頸瓶)

正位で単体で焼成するほか、短頸壺の口縁部に載せる例(図中21、実測図300)。かえりを持つ蓋を載せる例(図中22、実測図727・730)があり、脚付きの例(実測図560)では坏A身に載せている。なお、この坏A身は焼成良品である。他に長頸瓶肩部に坏A(実測図731)や甗(実測図143、144)を載せる例がある。

(平瓶)

正位で単体で設置するほか、適当な粘土塊を用い傾斜する床面に横立させる例(図中25、実測図307・308)も多いと推察する。他に焼台転用土器の杯A身に正位で載せる例(748)がある。

(提瓶)

提瓶については焼成方法の分かる土器は検出できなかったが、平瓶や横瓶も横立させて設置していることから、正位に立てる工夫のあったことが考えられよう。

(横瓶)

正位で単体で焼成するほか、逆位の坏A蓋等を焼台として用い横立させる例も多い(図中27、実測図320・762)。

(短頸壺)

正位で単体で焼成するものは実測土器中では少数であり、口唇部に剝離痕が残るもの、倒置するものが多い。口唇部に剝離痕をもつ例については、長頸瓶等を載せる(図中21)、倒置し他の土器に載せる(図中23)ことが推定

できるほか、床面に直接倒置する例もある(図中24、実測図325)。

(無頸壺)

点数は少ないが、いずれも正位で単体で焼成しており、坏A身が底部に熔着する例(実測図782)がある。

(壺・甕)

これらは単体で床上に直接設置するほか、1個の焼台転用土器に載せる例(実測図359・814・849・879)や、数個の焼台転用土器を用い器体を安定させる例(実測図818・859・877)がある。また、図中28のように口縁部に他の土器を載せる例もある。

(焼台)

自然の河原石や、粘土塊、過去の焼成品を適宜使用する他に、製品を用いた焼台転用土器(実測図393・394・856~860)がある。その設置方法については第4章中で記述した。その性格については後に検討を加える。

ここで以上の土器設置・重ね焼方法の様相をまとめておきたい。まず、坏Aは基本的には蓋・身合口状態を守るが、設置の際の上下は厳密ではない。中には正位でのセットを外れる例もあるが、それらは他の土器の安定のために便宜的に採られた方法と考える。坏Bも基本的に正位でのセット状態を守ると考えるが、中には坏Aと異なり、蓋あるいは身を逆位に置くことで垂直方向への重ねを指向するものがある。2号窯では坏B身のみ重ね焼きが多数存在するが、蓋のみを重ねる例は1・2号窯ともなく、ここにおいて蓋を伴わない無蓋坏的坏器種の存在を推定する。ただ、2号窯に後続する1号窯では身のみ重ねは検出できず、これが単発的なものか、後に継続するものかは今後資料の増加を持って検討していきたい。高坏では坏Aを焼台的に使用し傾斜する床面に設置するものがある。その他の器種でも同一器種を重ねて、あるいは異器種を適宜組み合わせ設置していったことが確認できた。なお、この重ねを行った土器は相互に同一工人の作であったとの見通しを持っているが、異器種間での工人識別は不十分であり今後検討していかなければならない問題である。

b、焼台転用土器について

製品として作られながらも、窯詰め時に、破損を前提とした焼台に転用される一群が坏Aに存在することは先に指摘してきたが、これらは設置時期および操業後の扱いによって大きく2種に分けることができる。その一つは窯構築時に床材とともに埋め込まれる類(実測図393・394・646・647)であり、製品化は意図せず破棄を前提として設置されるもので、本格的な焼台転用土器といえる。ここで用いられる坏Aは蓋または身単体の場合が多く、内容的には1類、6类等複数型式が確認できる。もう一つは高坏や横瓶の設置方法に代表できるものだが、製品窯詰め時に不安定な器種の安定を図るため台として使用される類であり、軽量土器を載せた場合など焼成後の状態が良ければ製品としての搬出も予想されるものである。これらは焼台的土器といえよう。ここでの坏Aは多くの場合、蓋・身セットで用いられ、熔着した高坏や壺(実測図877、878)をみると、坏Aとその上位の土器は同一の胎土で作られている。先述したように異器種間の工人識別は十分なものとはいえないが、とくに1号窯のB類胎土(高坏胎土分類)による重ね焼例では、上位・下位器種ともに成形・調整の雑さが共通して認められる。

このように、焼台転用土器に大きく2種の様相を認めたが、本格的な焼台転用土器の存在からは、窯構築作業段階において、窯詰め時の土器配置を把握していた熟練者(指揮者)のもとで、各工人製作の坏Aから任意の土器に対して、強制的な焼台転用土器抜き出しがあったことを推測する。そしてもう一種、焼台的土器の存在からは土器窯詰め時に、大量生産した各工人自作の土器に限って、焼成による破損を厭うことなく焼台的に使用していった状況を想定する。

c、小結

以上の検討結果をふまえ、土器窯詰め作業に関連し若干の見通しを示しておく。

まず、個別の土器設置・重ね焼方法の検討からは、急傾斜をもつ限られた窯内空間において有効な焼成を行うために、焼成に支障がない範囲において様々な設置・重ね焼方向を工夫している状況がうかがえた。しかし、同

一器種による垂直方向への重ねを行いながらも、後世にみるような数段におよぶ重ねは<sup>(5)</sup>検出できなかった。このような状況から、本窯での土器窯詰め作業に際しては、丸底器種や小型器種の安定を図ることが強く意図されたと考えたい。焼台転用土器の在り方からは、熟練者の指揮のもとに窯構築が行われ、土器窯詰め時には焼台転用土器を含め(技術・経験レベルによりあらかじめ決められた位置にではあろうが)、土器製作工作自らの手により自作土器を詰めていくという作業状況を想定しておきたい。

このように土器窯詰め状況をみてきたが、これらは主に実測土器の観察により得たものであり、各焼成方法の器種別比や、窯差を検討するまでにはいたらなかった。さらに、窯詰め方法とはいいながらも土器窯詰め作業初段階の検討にとどまり、土器の窯内配置まで分析はおよばなかつた<sup>(6)</sup>。ただ、以上の検討を行うなかで、社会的背景を反映した雇用形態や工人編成、あるいは必要(要求)生産量の変化が窯構造や同一窯での操業回数、および窯詰め法に大きく影響したに違いないとの感触を得た。今後、他窯との比較を行うなかで検証していきたい問題である。

### 3. 土器窯出し方法の検討

土器の報告で述べてきたように各器種とも細別型式毎に胎土の発色や釉調が類似することから、型式毎の一括した窯入れ・近接配置作業があったことを推定したが、土器焼成後の窯出し作業はどのように行われたのだろうか。これを探るために各窯、実測土器出土グリッドをもとに器種別各細別型式分布図を作成した。また、器種毎破片数の散布状況を示した分布密度図もあわせ作成した(第93～97図、表16・17)。以下に窯各部を窯体内・前庭部、灰原は左上半部、左下半部、右上半部、右下半部と大きく5カ所に分割し細別型式分布状況を記述していく。そして、分布密度図の検討もあわせることで土器焼成後の製品窯出し状況の分析を試みたい。なお、細別型式分布図の最小グリッドは一辺2.5m。分布図中の略記号は坏Aでは細別型式名を直接ドットに代え示した。A～DあるいはA2b等の型式分類をもつ高坏・壺・甕ではそれぞれの型式分類記号に細別型式名を付し、坏B・各種瓶類では器種名を示す記号に細別型式名を付すことで示した(高坏C1類では“●1”、坏B身2類では“○2”)。また分布密度図では網の最も濃い部分(中心)で全破片数の6%、次に濃い部分には50%の土器が入る(注8)。

#### a、2号窯器種別土器分布状況

##### (坏A)

坏AではA2・4・6類は点数の少なから蓋と身のセット関係の決定は保留したが、A1・3・5類についてはセット関係を推定している(第23図)。その実測土器分布状況をうかがうと、まず、窯体内・前庭部にはA1類が集中し、A2類も存在する。灰原左下半部を主体に分布し、灰原左上半・右下半部にも存在する型式としてA1・5類があり、A4類身でもこの傾向が指摘できる。灰原右下半部を主体とする型式としてA2類があり、灰原左下半部にも広がっている。A3類は蓋と身では分布様相が異なり、傾向をうかがうにいたらない。また、実測土器分布を全体的にみると、蓋・身ともに前庭部と灰原の間に土器希薄部分が存在する。破片数では各グリッド蓋・身はほぼ同数ずつ出土しており、その破片数分布密度図は灰原中心線を長辺とする長楕円形を呈し、その中心は灰原下半部、灰原中心線よりわずかに左側に位置している<sup>(9)</sup>。

##### (高坏)

窯体内・前庭部にはA1類、C1・3・4・8～10類、B1類が存在する。灰原左下半部にはD1・2類が集中し、灰原左上部にも分布する。灰原左下半部に主体的に存在し、灰原右下半部にも若干分布する型式としてC1・5・7・9・10類がある。灰原右上半部にはC6類が集中。灰原右下半部にはA1類が集中、A3類も存在する。分布密度図をみるとその形態は坏Aと同様長楕円形を呈し、その中心は灰原中心線よりやや左に寄るものである。また前庭部まで高密度部分が広がり、焚口から比較的近い位置に集められたことがうかがえよう。灰原裾部では左側への張り出しが認められ、実測土器分布と同様の傾向を示す。

表16 2号窯地点別土器出土状況

(坏A蓋)

地点\分類	1	2	3	4	5	6
煙道	1					
窯体内	5					
前庭部	5	1				
灰原左上	2		1		2	
灰原左下	9		2		3	
灰原右上	1				1	1
灰原右下	2		1	1	2	
合計	25	1	4	1	8	1

(坏A身)

地点\分類	1	2	3	4	5
煙道	1				
窯体内					
前庭部	6				
灰原左上			2		
灰原左下	7	2	1	2	4
灰原右上	1		1		1
灰原右下	3	4	3	1	2
合計	18	6	7	3	7

(坏B蓋)

地点\分類	1	2	3	4	5	6
煙道						
窯体内				1		
前庭部	1				1	
灰原左上	1		1			
灰原左下	1	8		3		1
灰原右上					1	
灰原右下	1	2	1		1	1
合計	4	10	2	4	3	2

(坏B身)

地点\分類	1	2	3	4
煙道				4
窯体内				
前庭部	1	2		
灰原左上				1
灰原左下	3			
灰原右上				
灰原右下	1	2		
合計	5	4	0	1

(高坏)

地点\分類	A1	A2	A3	B	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10	D1	D2
煙道																
窯体内	1				6		1								0.5	
前庭部	2				10		2	2				2	0.5	1	0.25	
灰原左上		1				2										2
灰原左下		2	2		7	1			4	2	5		2	1	3.25	8
灰原右上		2				1				4						
灰原右下	2		1		2				1		2		0.5	1		
合計	5	5	3	0	25	4	3	2	5	6	7	2	3	3	4	10

(壺)

地点\分類	A2a	A2b	A3a	A3b	B2c	A1a	短頸壺 a	短頸壺 b
煙道			1	1				
窯体内	1					1		0.5
前庭部	3.6	1		1				
灰原左上							1	
灰原左下	0.4	3	3				4	3
灰原右上			1				1	
灰原右下	1	2			1		1	1.5
合計	6	6	5	2	1	1	7	6

(甕)

地点\分類	A2b	A3b	B2b1	B2b2	B2b3
煙道					
窯体内					
前庭部	3	1	0.7		
灰原左上			0.1	0.3	
灰原左下	0.1	0.5	1.2	3.7	
灰原右上			0.5		
灰原右下	3.9	0.5	2.5	1	3
合計	7	2	5	5	3

(瓶類)

地点\分類	横瓶	瓶	提瓶	平瓶	長頸瓶
煙道					
窯体内					
前庭部	2.5		1	0.55	1
灰原左上					
灰原左下	4	3	2	0.7	3
灰原右上	2.5				1
灰原右下	1			0.75	3
合計	10	3	3	2	8

表17 1号窯地点別土器出土状況

(坏A蓋)

地点\分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
煙道			1				1				
窯体内	3	2				1	1	1			
前庭部	2	2	1			4		1	2		
灰原左上								1		1	3
灰原左下		1	2	1		5	1	3	1	5	1
灰原右上	2								1		
灰原右下						2				1	
合計	7	5	4	1	0	12	3	6	4	7	4

(坏A身)

地点\分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
煙道		1					2			
窯体内	1	1				5	1	1		1
前庭部		4		3		8	6	1		6
灰原左上		1				5		2		
灰原左下		2	3	1		17	4	3		10
灰原右上			1	1		3	2			
灰原右下			1	1		8		1	2	
合計	1	9	5	6	0	46	15	8	2	17

(坏B蓋)

地点\分類	1	2	4	5	6	
煙道						
窯体内	1					
前庭部	2			1	1	1
灰原左上	1		1	1	1	1
灰原左下	6	3	1	7	1	1
灰原右上					1	1
灰原右下	1			1	1	
合計	11	3	2	10	5	4

(坏B身)

地点\分類	1	2	3	4
煙道				
窯体内				
前庭部		1	1	
灰原左上			1	
灰原左下	3	1	2	1
灰原右上				
灰原右下				
合計	3	2	4	1

(高坏)

地点\分類	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	C3	C4	C5	D1	D2	D3	D4	E
煙道																
窯体内							1.5	1	1							
前庭部	3	2					0.5					2		1		
灰原左上	0.5	1					1			1			1	1		
灰原左下	3.5	1	1	1	0.5		2.5	1	1	2	1	1	1	4		2
灰原右上							1		1	2						
灰原右下					0.5	1	2.5	1			3					1
合計	7	4	1	1	1	1	9	3	2	4	6	3	2	6	1	2

(壺)

地点\分類	A2b1	A2b2	A3a	A3b	短頸壺
煙道					
窯体内					
前庭部	1				1
灰原左上	0.5	3		2	0.3
灰原左下	2.5	2			2.1
灰原右上	2	2			
灰原右下	2		3		0.5
合計	8	7	3	2	3.9

(甕)

地点\分類	A2b	B2b1	B2b2	B2b3	B2b4	B2b5	C
煙道							
窯体内		0.5	1				1
前庭部	1	1		1			
灰原左上	1.25						1
灰原左下	0.75	1.5	4	2.75			1
灰原右上	1			1	1		
灰原右下				0.25			
合計	4	3	5	5	1	3	1

(瓶類)

地点\分類	横瓶 a	横瓶 b	横瓶 c	瓶	提瓶	平瓶	長頸瓶
煙道							
窯体内	1						
前庭部					1	2	2.5
灰原左上	3	1	1		1		1
灰原左下	5	4			2	3	4
灰原右上		1		1	2	1	
灰原右下		2	1			1	3.5
合計	9	8	2	1	6	7	11



(壺)

窯体・前庭部にはA 2 a類が集中する。灰原部では型式毎の指摘はできないものの、接合関係をふまえて壺全体の動きをみると、壺には灰原左方向に運び出された一群と、灰原右下方向(1号窯盛土下)に運び出された一群があることが分かる。また、この二群の間には土器希薄部が存在し、それぞれが窯内において異なる(離れた)位置に配置されていた可能性もあろう。分布密度図は壺類(胴部に叩きを持たないもの)という扱いであるが、実焼成数からみて焼成量の多い壺の分布傾向を反映しているとみてよい。それによると高密度部分が分布中心より上方のみならず下方部分へも広がり、坏A・高坏に比べより灰原裾部へ引き出された状況がうかがえる。

(甕)

甕では接合資料も多く比較的良好に土器の動きが追える。まず、前庭部にはA 2 b類が存在する。灰原では、B 2 b 2類が灰原左側に運び出されているが、A 2 b類・B 2 b 1類・B 2 b 3類は灰原右裾部へ運び出されている。分布密度図では、まず、分布中心が他の器種に比べ、より灰原裾部に寄ることが指摘できる。高密度部分は全体に下膨らみの略三角形を呈し、前庭部での分布は希薄、灰原裾部にかけて出土量を増すという状況が認められよう。

(坏B)

坏B蓋・身および各種瓶類については出土絶対数が少なく、細片での器種識別も困難であることから有効な分布密度図作成にはいたらなかった。ここでは、実測土器の分布傾向のみを記述する。

B 2・4類蓋が灰原左下半部に集中する。B 5類蓋、B 2類身については灰原右裾部への運び出しがうかがえる。他は灰原左下半部から右下半部にかけて分布する。

(瓶類)

横瓶 前庭部～灰原右上半部と灰原左下半部に存在。

瓶 灰原左下半部に偏在。

提瓶 点数は少ない。前庭部と灰原左下半部より出土。

平瓶 接合資料より灰原左下半部と灰原右下半部への2つの動きが認められる。

長頸瓶 灰原右下半部(1号盛土下)に3点集中のほか、灰原に広く分布する。

ここで2号窯の実測土器分布状況を若干まとめると、まず、ほとんどの器種で前庭部背後に分布希薄部が認められる。この部分には製品窯出し作業にともなう分類・選別作業のための空間が想定できよう。器種相互の関係では、甕は灰原右裾下端部から左裾部下半という焚口から最も離れた位置に分布し、壺は灰原左裾部下半と右裾部に分布する。甕と壺の分布範囲は重複せず甕分布希薄部に壺が存在していることが分かる。高坏は前庭部と灰原左下半に、坏A・Bは前庭部と灰原左下半および右裾部に分布する。

b、1号窯器種別土器分布状況

(坏A)

坏Aでは第4章においてA 5類、A 11類を除きセット関係を推定している(第25・26図)。その型式別分布をみると、窯尻溝からは2類蓋、3類身、7類蓋・身が出土。窯体内・前庭部には実測点数の少ないA 4・5・11類を除き他の全てが存在している。灰原では多くの型式が左下半部を中心として分布するのに対し、A 11類は灰原左上半部に集中する。左下半部ではA 3・6・7・8・10類が偏在し、A 2・4・9類も存在する。右上半部ではA 1類の集中傾向が指摘できる。右下半部ではA 6類ほかの出土があるがいずれも主体的な分布とはいえない。そして、実測土器分布図を全体的にみるなら、前庭部から前庭部背後にかけてと灰原左下半部に土器が集中し、灰原右半部で分布は希薄といえよう。分布密度図は前庭部を頂点とする扇形を呈し、その高密度部分は灰原中心線より左に振れ灰原左下半部に位置しており、実測土器の分布と同様の傾向を示す。

(高坏)

窯体内・前庭部にはA 1・2類、C 1・2・3類、D 1・2・3類が存在。灰原左下半部ではA 1類、C 1・4類、D 3類、E類が集中し、C 1類は右下半部にも広がっている。右下半部ではC 5類が偏在し、D 4類も存在する。実測土器分布を全体的にみると、前庭部背後に希薄部分が存在し、それより下位、灰原下半に土器が分布している。分布密度図でもコンタラインは灰原中心線を軸に左右ほぼ均等に広がる。前庭部への張り出しは弱く、高坏全体として灰原下半部への集積状況がうかがえよう。その高密度部分は実測土器分布同様、灰原下半部にある。

#### (壺)

壺では接合資料が多いこともあって、その窯出しの状況がかなり積極的に復元できる。まず、窯体内・前庭部からの出土は少ない。灰原上半部・右上半部(前庭部背後)ではA 2 b 2類が集中。灰原上半部にはA 3 b類が、右下半部にはA 3 a類がそれぞれ偏在する。A 2 b 1類は前庭部右半部(前庭部右側)と灰原下半部に分布する。短頸壺は前庭部左側および灰原左下での集中が指摘でき、壺底部の多くは灰原裾部に散布する。壺類(胴部に叩きをもたないもの)の分布密度図は坏・高坏と同様の形態をなすが、その中心は灰原中心線より左に振れる。

#### (甕)

甕では接合資料により、窯出し・攪乱等による土器の移動が良好にうかがえる。その分布は前庭部右上部(B 2 b 4類)と灰原左下半部(B 2 b 1・2・5類)の大きく2箇所集中し、その間には分布希薄部分が幅をもって広がる。A 2 b類、B 2 b 5類は両地点に存在する。また、窯体内・前庭部ではB 2 b 4類、C類を除きすべての型式が出土している。灰原部での2箇所の集中区のうち、前庭部右側上に存在する一群については、焚口部天井が遺存していた状況から、これらが焚口からではなく窯天井部を壊すことによって取り出されたことを推測する。そして、その破片はいずれも丘陵斜面を転がり落ちたかのような接合状態を示している。分布密度図では、高密度部分が他器種に比べより灰原裾部に広がること、コンタラインの前庭部方向への張り出しは弱く、灰原右下・左下方向への張り出しが大きいことが特徴として挙げられ、焚口から最も離れた位置に運び出されたことがうかがえよう。

#### (坏B)

坏Bでは胎土・法量等からセット関係を推定している(第26図)。窯体内・前庭部には蓋B 1・4～6類、身B 2・3類が存在する。灰原ではほとんどが灰原左下半部に集中するが、灰原右半部には蓋B 1・4・5類が偏在するグリッドも認められる。

#### (瓶類)

横瓶 全体に前庭部背後、灰原左下半部に偏在する。b類は右下半部にも存在。

瓶 2点のみ、灰原右上半部に存在。

提瓶 前庭部右側、灰原左下部に存在。

平瓶 前庭部、灰原左下半部に集中。灰原右側にも分布。

長頸瓶 前庭部および灰原右下半部・左下半部に分布。

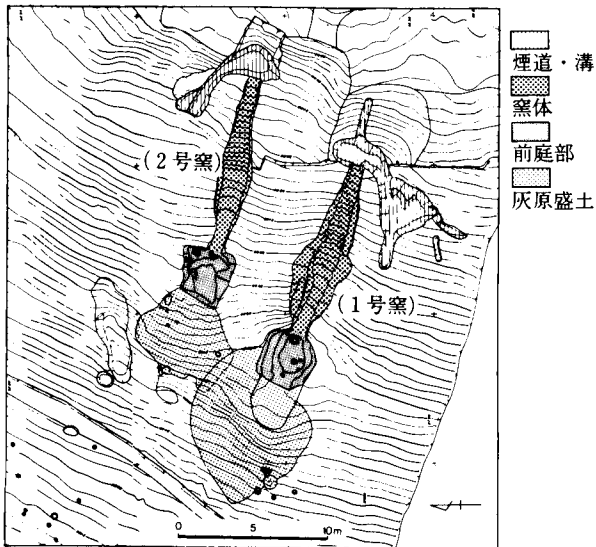
瓶類では全体として灰原右側に偏在が認められ、甕に近い分布状況を示す。

ここで1号窯での分布状況をまとめると、まず、2号窯と同様に全器種で前庭部背後に分布希薄部分が認められる。器種相互の関係をみると、甕は前庭部右上および灰原左下裾という焚口より最も離れた位置に、壺は灰原左下裾と前庭部右側・灰原右下裾の甕と重複しない位置に、高坏は灰原中央下半と前庭部に、坏A・Bでは灰原左下半と前庭部に主体的に分布しており、小型器種において前庭部での分布傾向が指摘できる。

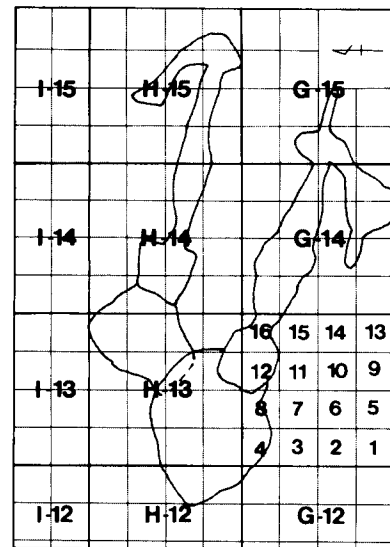
#### c、小結

以上に各器種の型式別分布状況を示してきた。その結果からは、1・2号窯とも甕・壺で分布域を違えることが指摘でき、この状態は1回焼成と考えている(後述)2号窯でより明瞭に捉えられた。小型器種では器種毎の

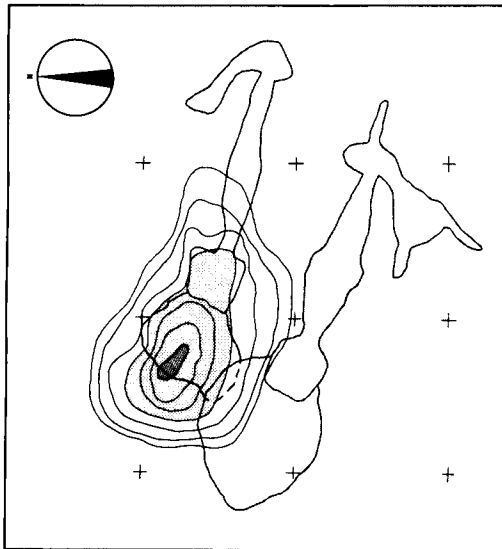
(等高線図及び竈各部名称)



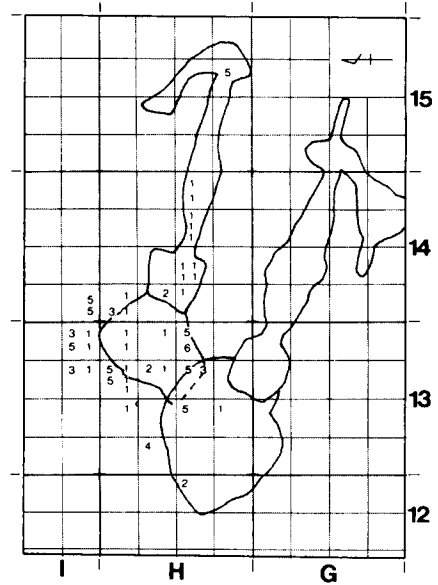
(グリッド割り図)



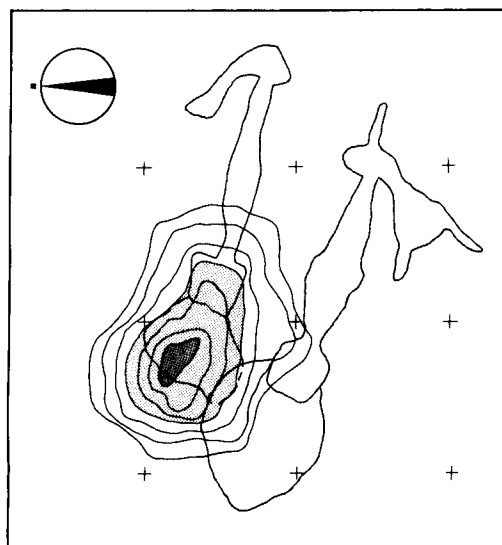
(2号竈坏A蓋破片数分布密度 1,156片)



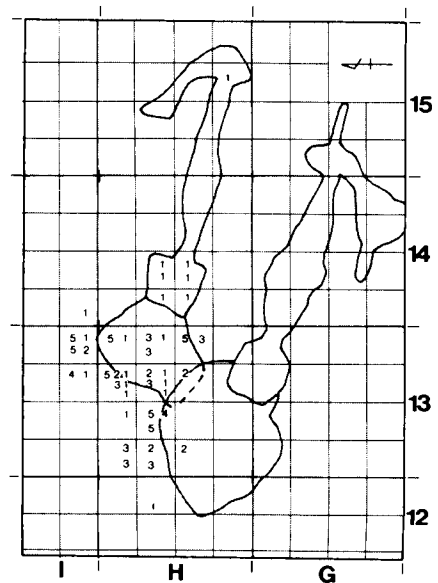
(2号竈坏A蓋型式別分布)



(2号竈坏A身破片数分布密度 1,174片)

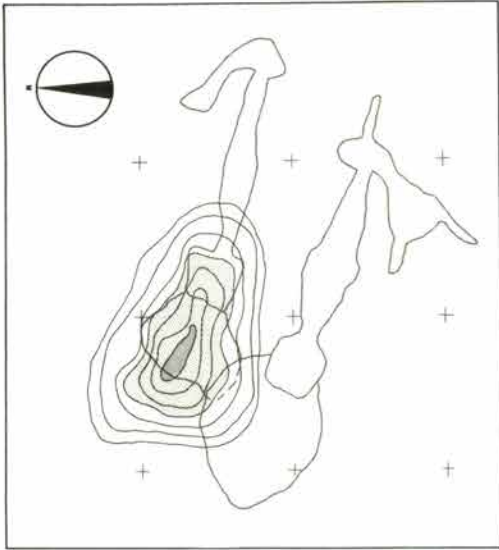


(2号竈坏A身型式別分布)

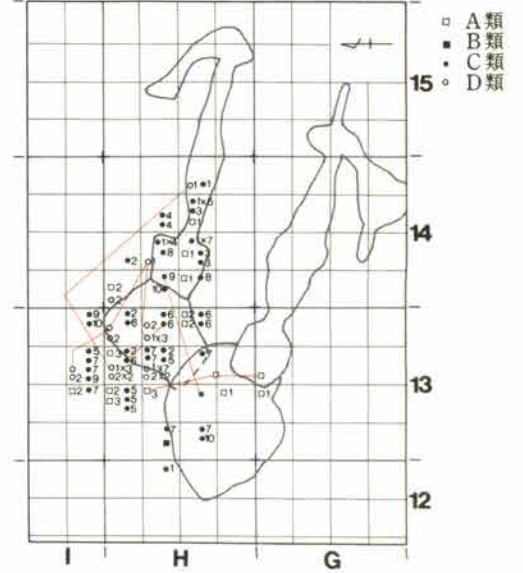


第93図 林オオカミダニ2・1号竈出土土器分布図(1)

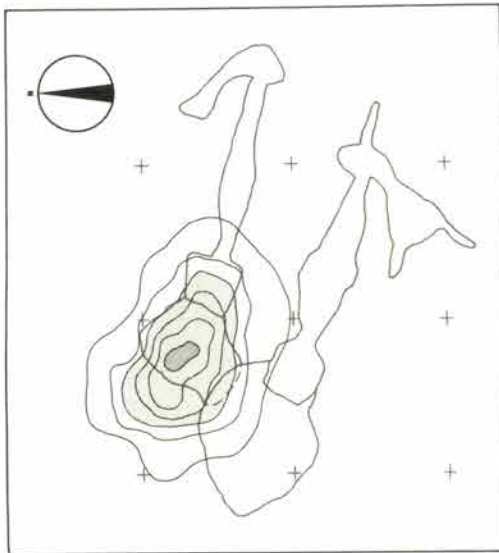
(2号窯高坏破片数分布密度 636片)



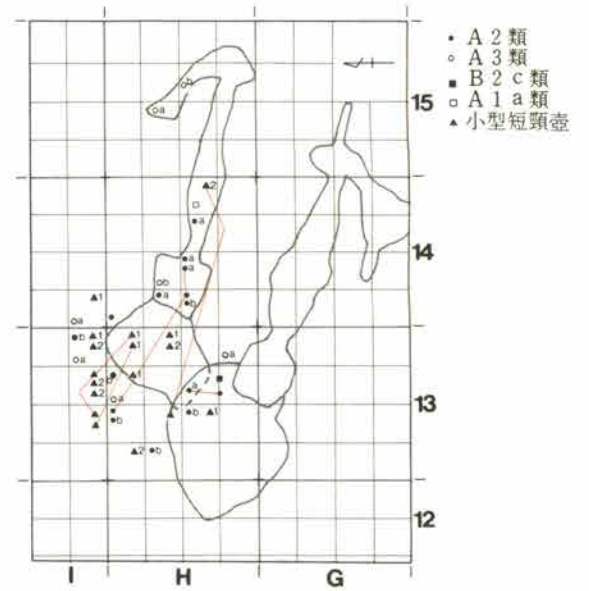
(2号窯高坏型式別分布・接合状況)



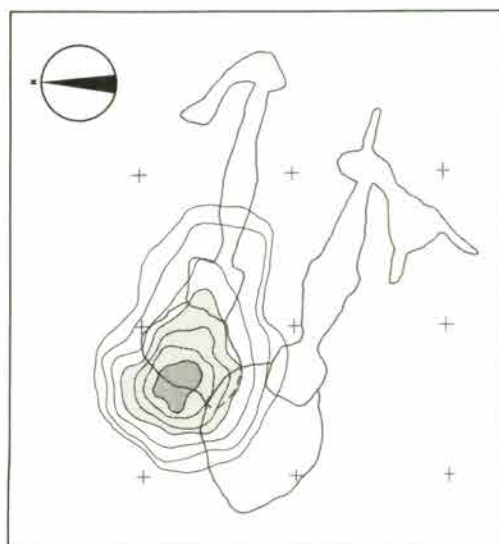
(2号窯壺類破片数分布密度 1,141片)



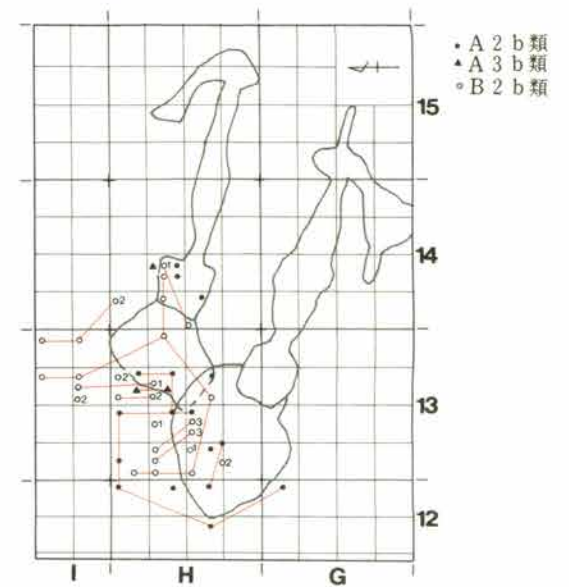
(2号窯壺型式別分布・接合状況)



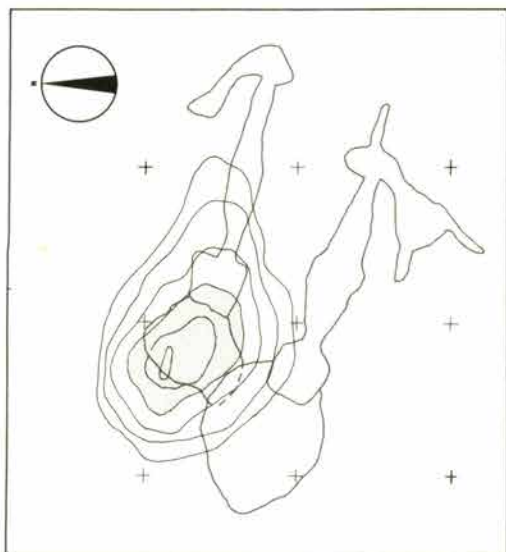
(2号窯甕類破片数分布密度 1,835片)



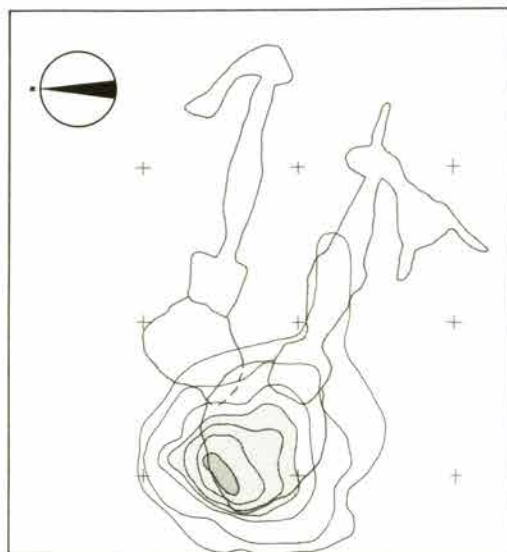
(2号窯甕型式別分布・接合状況)



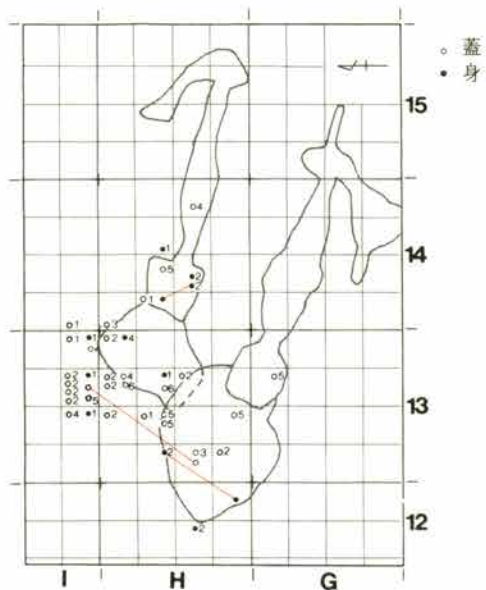
(2号窯土器重量分布密度 314.4kg)



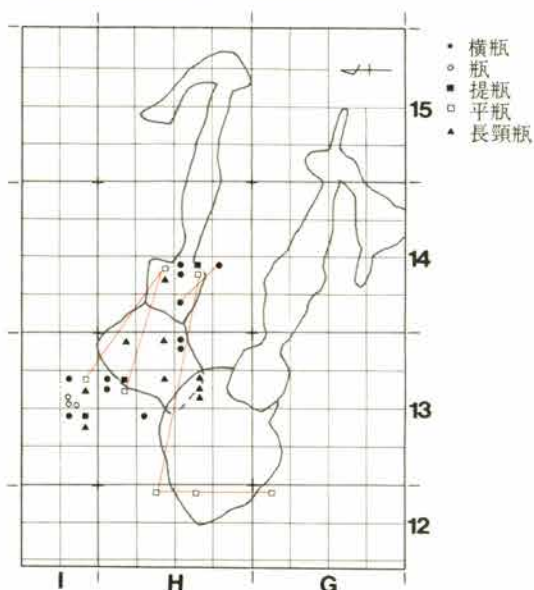
(1号窯土器重量分布密度 446.2kg)



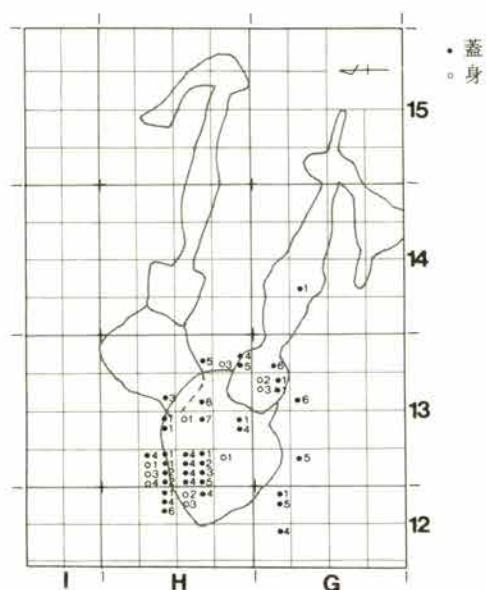
(2号窯坏B蓋・身型式別分布・接合状況)



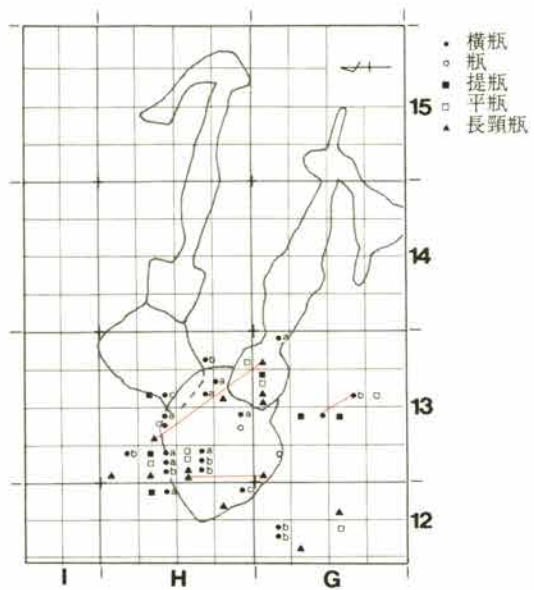
(2号窯瓶類型別分布・接合状況)



(1号窯坏B蓋・身型式別分布)

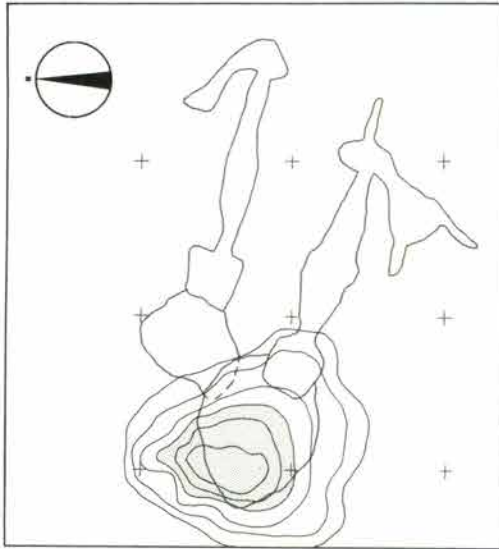


(1号窯瓶類型別分布・接合状況)

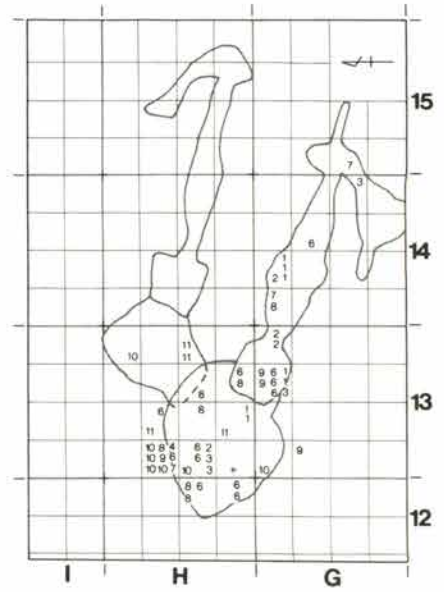


第95図 林 オオカミダニ2・1号窯出土土器分布図(3)

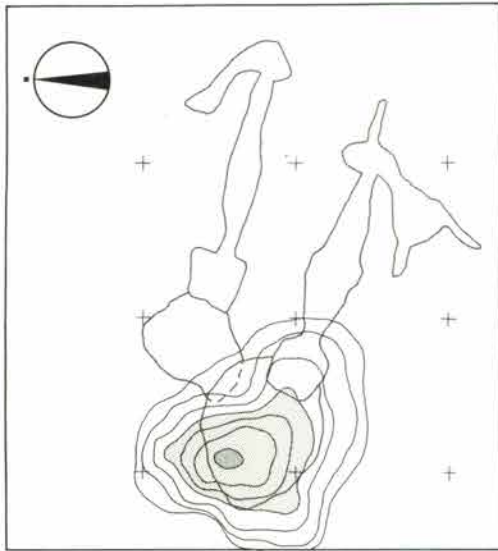
(1号窯坏A蓋破片数分布密度 2,754片)



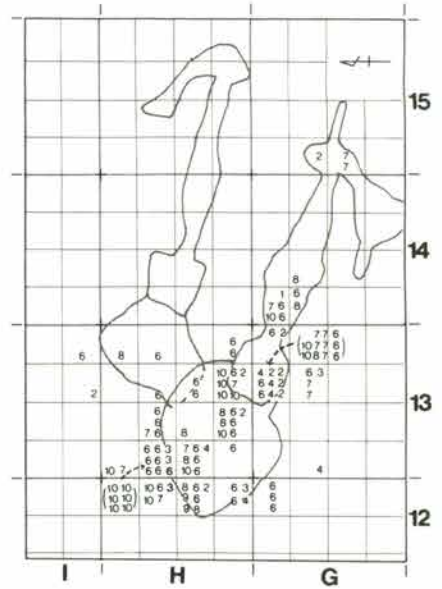
(1号窯坏A身蓋型式別分布)



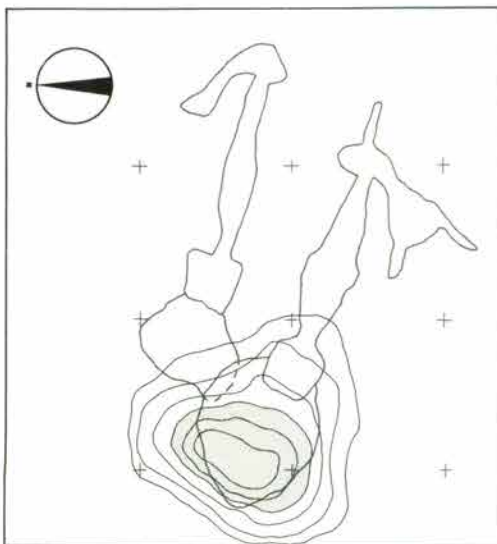
(1号窯坏A身破片数分布密度 3,159片)



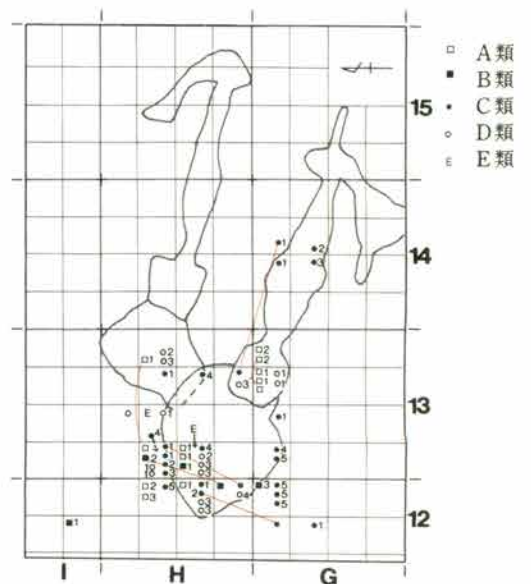
(1号窯坏A身型式別分布)



(1号窯高坏破片数分布密度 938片)

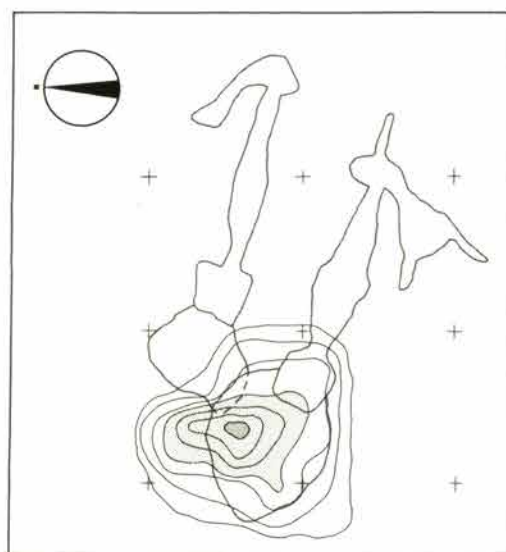


(1号窯高坏型式別分布・接合状況)

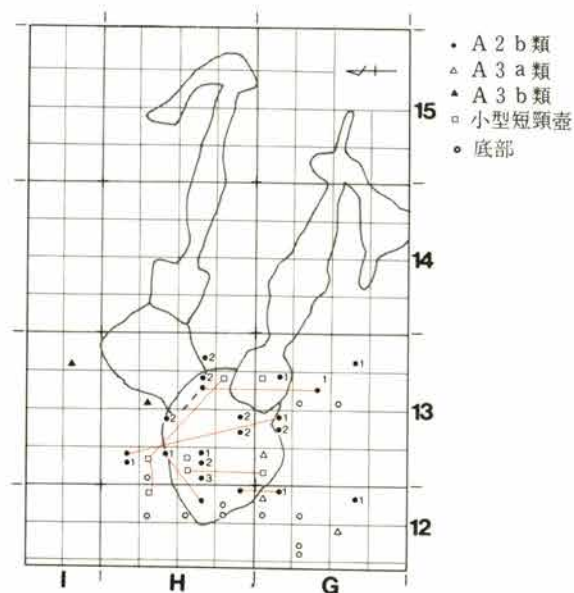


第96図 林オオカミダニ 2・1号窯出土土器分布図(4)

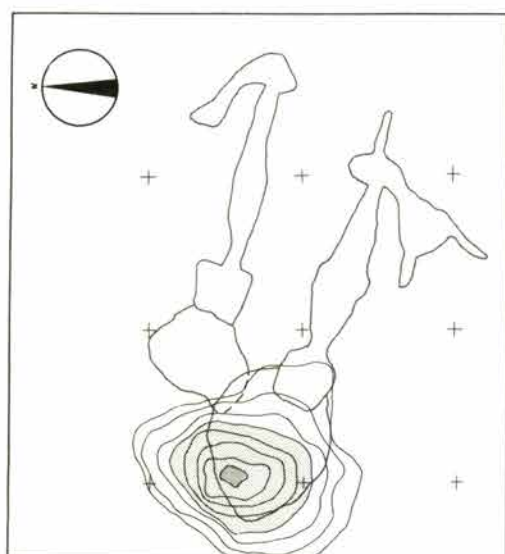
(1号窯壺類破片数分布密度 1,961片)



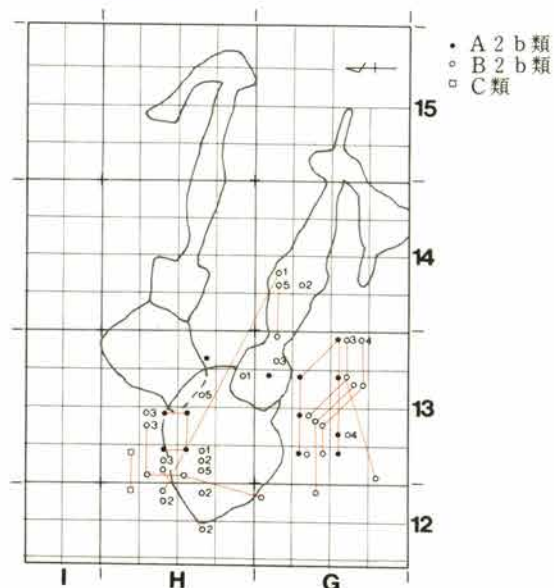
(1号窯壺型式別分布・接合状況)



(1号窯甕類破片数分布密度 4,931片)



(1号窯甕型式別分布・接合状況)



第97図 林オオカミダニ2・1号窯出土土器分布図(5)

集中域および、集中域内での型式毎の偏在、さらに、この集中域を離れて偏在する型式が認められた。このことから細別型式単位での窯出し、器種単位での集積(もしくは窯出し後における器種・型式単位の分別)があったことをうかがい、これら器種・型式単位での集積状況を可能にした背景として製品窯出し作業への土器製作工人の直接的関与があったことを想定したい。ここで各器種の窯内配置位置を考えると、大型器種である甕がより床が平坦で幅をもち、天井が高い焼成部入口近くに配置されていたことが推察されるわけであるが、このことを1・2号窯の土器分布状況は反映しているのではないだろうか。つまり、窯出し作業の手順として、より窯口側に配置されていた甕をまず運び出し、焚口よりもっとも遠い位置に置く。以後順次他の器種を運び出すのだが、その際、甕に次ぐ大型器種である壺は甕の存在しない場所に運ばれたという状況をみるのである。そして、小型のその他器種は、大型器種の間を埋める形で順次運び出されたと考える。また、窯体内・前庭部で頻出する型式については、より窯奥部に配置されていた可能性も考えられよう。このように細別型式分布の検討からは焼成終了後に製品は、窯入れ手順を遡る形で手際良く窯出しされていたという状況がうかがえたのではないだろうか。

最後に今回十分に検討を加えることのできなかった土器破片数密度分布図についてだが、これは各器種、数千片を数える破片数計測の結果を有効に表現できないかと考え作成したものである。そのコンタラインは窯毎・器種毎に形態差や分布域(特に高密度部分)の違いを認めることができた。その分布域が実測土器分布図と一致するものでは、実測土器抽出が実際の散布を反映し偏りなく行われたことを示せたともいえ、破片数計測結果の表現方法の一つとして有効であったと考える。今後、さらにその図化方法や解読方法を検討していきたい。<sup>(11)</sup>

#### 4. ヘラ記号について

ヘラ記号の意味については現在のところ、工房での土器製作工人(グループ)単位の数量検定あるいは品質管理とする考えと、窯入れ時あるいは窯出し後の製作者(グループ)識別であろうとする考えの大きく2つがある。筆者は、ヘラ記号には大きくこの2目的があり、時間と場所を変えてそれぞれ機能としてあったと考えている。さて、本窯出土土器をみるならヘラ記号は長頸瓶に数点存在するのみであり、他にヘラ記号が加えられる器種はない。ここでは土器報告、考察2・3項等の結果をふまえてその理由について考えてみたい。

まず、土器窯詰め時にすでに製品化を二の次とするような焼台転用土器の存在や、1tを越す破損品がみられる状況からは、工房での製作土器数と焼成後の製品数ではかなりの隔たりが考えられる。加えて本窯では坏A・高坏・短頸壺などで造りに精粗をもつものが共存しており、数量・品質の把握という面で、工人単位の厳密な管理があったとするには問題があろう。また、製作者識別という目的に関しては、先に、土器製作工人自らの窯入れに加え、窯出し・選別作業にも土器製作工人の直接の関与があったことを想定した。本窯出土土器を見るかぎり、土器製作作業に直接携わった工人にとって個々の土器製作工人の識別は容易だったに違いなく、この点において製作者(グループ)識別としてのヘラ記号も不要だったと考えたい。長頸瓶のヘラ記号の意味合いについての言及はできないが、本窯でヘラ記号が存在しない背景として、以上のような融通性をもった生産(要求)量や、窯出し・選別作業まで工人が直接関与するという生産体制があったことを想定したい。

#### 5. 数量的検討

発掘調査で得ることのできる土器は、窯場で最終的に棄てられたもののうち後世の攪乱を経てなお残ったものである。本来の放棄量について推察すべくもないが、ここでは、本窯の調査で得た土器破片数・重量等のデータを示し、これに若干の考察を加えていきたい。

##### a. 土器破片数の計測

調査では計34,367片の須恵器を得ている。その内訳は2号窯6,499片、1号窯14,898片、所属窯不明12,970片である。土器は発掘調査時の遺物取り上げラベルの注記により窯所属を決定し、可能な限り器種別破片数も求めた。その結果が表18である。全器種の分類を試みたが坏B身・甗などは細片では識別が困難であり、高坏に加えている可能性もあるが、これらは絶対数が少ないため問題は少ないと考える。また壺と各種瓶、甕と横瓶も胴部片では識別が困難であり、これらはそれぞれ一括し、壺類(胴部に叩きをもたないもの)、甕類(胴部に叩きをもつもの)とにまとめた。坏A(蓋・身ほぼ同数出土)では蓋・身識別不能のものはその破片数を二分しそれぞれに加えている。所属窯不明品には試掘トレンチや表土層中のものが多い。この不明品を除外し2・1号窯の器種別破片数比をみると坏Aでは2号窯1に対して1号窯2.54、以下同様に高坏1:1.47、壺類1:1.72、甕類1:2.69、破片数合計でみると1:2.29である。

##### b. 口縁部残存率の計測

第二次調査により得た土器のうち1号窯出土のもの約40箱について、口縁部残存率計測により各器種の個体数を求めた。これにより坏A蓋・身計105.6個体(2015片)、坏B蓋・身計9.9個体(91片)、高坏17.8個体(402片)、壺類13.7個体(444)、甕類11.5個体(1739片)という結果を得ている。さらにこの結果を先に集計している器種別破片<sup>(12)</sup>



表18 出土土器破片数・実測土器破片数・推定個体数

器種	2号窯				1号窯				2号比	窯不明 破片数		
	破片数	実測片数	推定個体数		破片数	実測片数	推定個体数					
坏 A 蓋	1,156	89	8%	(121.6)	2,754	151	5%	(309.9)		1,757		
" 身	1,174	74	6%	60.8	45%	3,159	147	5%	155.0	54%	2.54	2,067
高 坏	636	281	44%	28.2	21%	938	109	11%	41.5	14%	1.47	831
壺 類	1,141	103	9%	35.2	25%	1,961	226	12%	60.5	21%	1.72	1,926
甕 類	1,835	189	10%	12.1	9%	4,931	466	9%	32.5	11%	2.69	5,140
不 明 (坏 B 蓋)	557					1,155					2.07	1,249
( " 身)		49					54					
		35					19					
計	6,499			136.3	100%	14,898			289.5	100%	2.29	12,970

\*破片数総計34,367片。[実測片数]は実測土器(接合前)の破片数により器種別実測率を求め、[推定個体数]は4,691片を対象とした口縁部残存率計測の結果により器種構成比を算出。坏Aの個体数は蓋・身合計の1/2を使用。また、[2号比]は2号窯破片数を1とした場合の1号窯破片数を示す。

数にあてはめ、各窯の器種別構成比も併せて算出した(表18)。これにより各窯の器種構成比をみると、2号窯に比べ1号窯での坏A比率の増加、高坏比率の減少が特に指摘できよう。

#### c、須恵器重量の計測

窯跡出土須恵器を対象に土器重量を計測した。ここでは、器種は区別せず取り上げグリッド毎に計量している。その結果は表19のとおりであり、2号窯314.4kg、1号窯446.2kg、所属窯不明340.9kg、総計1101.5kgとなる。両窯を比較すると2号窯1に対して1号窯1.42である。

#### d、原料粘土量の推定

さて、上に放棄土器量を得た訳であるが、この約1.1tという数字は土器製作に携わった人間にとってどのような意味を持っていたのであろうか。このことを探るために、まず、土器体積を求めた。その方法は、遺物整理箱半分程(4kg前後)の土器重量を計量する。つぎにこれを水浸けし溢れた水量を計るというものである。ただし、土器の吸水を考慮し、重量計測後十分水に浸し軽く水切りしたものをあらためて水浸けしている。そして、対象土器を変え、5回計測することで平均値を求めた。なお、計測は同一人が行った。その結果、須恵器比重として1.96g/cc(計測値1.89~2.02g/cc)という数字を得た。これは須恵器1kgが5.102ℓとなる訳であり、本窯出土須恵器総重量では0.562m<sup>3</sup>(561.2ℓ)ということになる。

これとは別に須恵器製作に要した原料粘土の体積を求めた。ここでは窯跡近くで採取した粘土を用い、須恵器と同様の方法で計測することで平均1.81g/cc(計測値1.62~1.87g/cc)という比重を得た。ただ、林オオカミダニ窯で須恵器製作に使用した原料粘土が特定できていないわけではなく、さらに、選別・加工前の本来の採掘粘土量については推し量るべくもない。あくまで参考数字であるが、ここで得た粘土比重を須恵器重量にあてはめると0.609m<sup>3</sup>という原料粘土量が推定できる。

詰め甘い計測法の積み重ねではあるが、約320箱(水洗後)、1.1トンの土器から約0.6m<sup>3</sup>という原料粘土量を得た。後述するように2基の窯で計3回の操業を推定するが、3回の操業結果としてのこの原料粘土量をみるなら、焼成による土器破損率を仮に1割と少なく見積もっても、一回の操業に必要な粘土量は2m<sup>3</sup>となる。採掘粘土量

表19 須恵器重量・体積・粘土体積

	2号窯	1号窯	窯不明	合計
須恵器重量(kg)	314.4	446.2	340.9	1,102
須恵器体積(m <sup>3</sup> )	0.160	0.228	0.174	0.572
粘土体積(m <sup>3</sup> )				0.609

をうかがっても、土器製作工程のなかで粘土掘削作業の占める比重は決して大きいものではなかったことが結果としていえるのではないだろうか。

## 6. 操業回数について

遺構・遺物の観察に以上の数量的検討の結果を加え2・1号窯での操業回数を推定してみよう。まず、窯体断ち割りでは両窯ともに横断面の一箇所を酸化・還元層を2枚観察している。他は1枚である。また、2号窯前庭部の断面観察では50cmほどの厚さに堆積した灰層は漸移的に変化しており、複数の操業を積極的に認められるものではなかった(第13図)。これに対し、1号窯前庭部では固くしまった層(26層)や焼土層(27層)により、前庭部堆積灰層は大きく上下に二分できるものであった(第19図)。灰原層位からは両窯とも操業次を有効に区別できなかった。本章初めに述べたように2号窯は天井崩落により操業を中止せざるをえなかったと考えている。また、1号窯壁中および窯床中には土器の混りが見られるが、2号窯で混りはみられない。土器の観察からは、2号窯出土土器では2次被熱が数点にみられるのみであるのに対して、1号窯では2次被熱を受け一群が各器種に定量存在し、副数回にわたる窯操業が推定できるものであった。先にみてきた各数量的比較では2号窯：1号窯は1：1.42~2.72という結果を得ており、これからは2号窯1回の操業に対して1号窯に2回ないし3回の操業が想定できることになる。隣接する両窯は窯形態もほぼ同じであり、操業内容(器種構成・焼成土器量・焼成技術レベル・破損率)に大差はないという前提のもとではあるが、以上の点を総合し、前庭部層位や土器観察および土器破片数・重量に阻害をきたさないという点において、2号窯1回、1号窯2回という操業回数を推定する。

## 7. 土器様相について

ここでは1・2号窯の土器型式数に分析を加え、両窯の土器様相を比較していきたい。

第4章で述べてきた各窯の主な器種別細別型式数をまとめると表20のとおりとなる。なお、壺・甕では坏・高坏と型式分類の基準が異なるため型式数での比較はできず、ここではその型式の消長を示していく。

表20 器種別型式数

	坏A蓋	坏A身	坏B蓋	坏B身	高坏蓋	高坏A	高坏B	高坏C	高坏D	高坏E
2号窯	6	5	6	4	4	3	(1)	10	2	0
1号窯	11	10	6	5	3	3	3	5	4	1

先に2号窯1回、1号窯2回の操業回数を推定しているが、これにより各操業次での型式数をうかがうと、坏A(いわゆる坏H)では2号窯6(5)に対し、ほぼ、1号窯1次操業5、2次操業5となる。以下、坏B(いわゆる坏G)蓋では6：3：3、坏B身では4：2.5：2.5、高坏ではA類(有蓋高坏)と高坏蓋は3(4)：1.5：1.5、高坏B類(無蓋、2方透かし)は(1)：1.5：1.5、C類(無蓋、3方透かし)は10：2.5：2.5、D類(無蓋、無透かし)は2：2：2となる。

坏Aは実測土器数・型式数の両面からみて1・2号窯とも定量焼成しており、先に示した破片数からも生産の主体といえる。1・2号窯は法量・調整に顕著な差はなく同一時期に含めることができ、蓋の口径は13~14cmを中心とし、身は12~13cmを中心とするが、それぞれ口径12~12.5cm、11~11.5cmを測り、立ち上がりおよび受け部の小振りな型式が両窯ともに存在し、もし大振りの土器と小振りの土器が集落遺跡で個別に出土するなら別時期とするような窯内差を坏Aには認める。

坏Bでは2号窯と1号窯で土器内容が異なる。つまり、本窯での蓋つまみの主体は偏平つまみだが、2号窯では宝珠つまみが2型式存在する。また、1号窯の蓋では法量の大中小が認められる。身では2号窯において身の<sup>(17)</sup>みを重ねるものが定量存在するが、1号窯では認められない(この無蓋坏的坏Bの位置付けは今後の検討課題であることは先に述べた)。全体として坏Bの焼成量は実測点数からみても1号窯で確実に増加しているのだが、それ

が型式数の増加とはなっておらず、この点にも坏Aとの相違を認める。本窯での坏Bは一部の工人により製作された客体的な存在であり、新出器種として不安定な位置にあったといえるのではないだろう。

高坏ではA・C類に1号窯での型式数減少が指摘できる。その内容は2号窯C類では長方形2段透かしを丁寧に加えるもの、上段透かしが省略気味のもの、上・下段とも刻みのみのものと多様である。また、2号窯C類ではカキ目調整を加えるものが1型式のみであるのに対し、1号窯C類では同一形態をもちながらカキ目調整のもの、ナデ仕上げによるものの2種が5型式中4型式に存在する。B類は2号窯の例が脚棒状部片のみであり型式数比には十分な検討を加えられないが、1号窯では確実に3型式存在しており、その透かし形態には丁寧な長方形透かしのもの、上・下段とも省略気味のものとがある。透かしをもたないD類の型式数は2・1号窯とも定量を占めるが、1号窯では新たにD4類という坏部碗形態をもつもの、E類とした低脚有蓋高坏が出現している。これら多様な高坏の在り方には、古墳時代からの供献用土器として伝統的形態を保ってきた器種にたいしての、葬送形態の変化の中でその主目的を喪失していく過程での形態的制約の緩和、あるいは、実用器としてへの位置付けの変化を背景として考えたい。そして、形態的制約の緩和のもと同一工人による作り違いの幅が拡大したことが、結果として2号窯C類で型式数の多さとして捉えられたと考えたい。

壺・甕では2・1号窯共通の基準により器形、細部の形態・加飾といった諸属性の組合わせで型式分類している。

壺でその型式の消長をうかがうと、2号窯で定量を占めるA1a・A2a類(口唇部に面を設けず、端部を先細りさせる)は1号窯では無くなっている。逆に、B3a類(口縁部肥厚帯をもち、口唇部に面を設けない)は1号窯にのみ存在する。他の型式は1・2号窯ともに存在する。

甕では、A3b類(肥厚帯をもたない口縁部を内湾させる)は1号窯では無い。また、口頸部高30cmあまりを測る大型甕は1号窯では検出していない。ただ、極少量しか生産しない器種であろうから、その有無については保留しておきたい。

その他器種では、1号窯の横瓶において口縁部肥厚帯に加えられる凹線の粗雑化、横瓶C類(口縁端部を短く折り上げる)の出現。そして、1号窯の提瓶の肥手形状において、環状把手とボタン状貼り付けがともに存在することを指摘しておく。

## 8. 土器製作工人数について

本報告での型式分類が、意図したような土器製作工人単位を反映した分類となった、という仮定の下であるが、坏Aの型式数を手懸りに、林オオカミダニ窯で操業一回当たり土器製作に携わった工人数をうかがってみよう。ここで坏Aを用いるのは、坏Aが最も大量に生産した(生産しなければならなかった)器種であり、内容的には、巧みな型式、稚拙とみてとれる型式が共存する。また、同一型式内でも全く同じとできる土器は少ない、など土器製作時の制約の相対的弱さがうかがえ、より多くの工人が製作に関わったと考えられるからである。この坏Aの焼成次毎の型式数を比較し、土器製作工人数として5～6人という数字を挙げておきたい。ただし、すべての工人が全器種の製作にあたった訳ではなく、坏Aの製作にのみ携わった工人、あるいは特定の器種のみ製作した工人もいたと考えている。

## 9. 編年的位置

本窯の編年的位置について近年の北陸での研究成果によりうかがうと、坏A(いわゆる坏H)の口径および外面へラケズリ調整の省略。高坏透かしの粗雑化。また、金属器模倣形態の碗、金属器模倣から派生したとされる坏B(いわゆる坏G)、低脚有蓋高坏や坏部碗形高坏の客体的存在。また、平瓶、提瓶その他の豊富な器種構成よりみて、田嶋編年古代I<sub>1</sub>新期にあたる、加賀市分校3号窯に後続し、小松市那谷金比羅山6号窯や小松市戸津六字<sup>(20)</sup>

ヶ丘2号窯・林タカヤマ各窯にほぼ並行する時期に比定できよう。本窯の実年代についてここで論じる力量はないが、ほぼ7世紀第1四半期に含まれよう。なお、2号窯では考古地磁気年代測定によりA.D.625年±5年という結果を得ている。

### むすび

以上、林オオカミダニ1・2号窯出土の土器にいくつかの点から考察を加えてきた。その結果は各項毎にまとめているので、ここでは繰り返さないが、1～4項において土器窯詰め・窯出し作業、およびへう記号に検討を加え、指揮者のもとで整然とした秩序ある作業が土器製作工人自身の手で行われた状況を想定した。5・6項では数量的データを示し2号窯1回、1号窯2回という窯操業回数を得た。7項では1・2号窯の土器様相変化を土器型式数をからめうかがい、その中に伝統器種と新出器種が共存する本時期における土器形態の多様さを見た。そして8項では土器型式数の比較をもとに5～6人という土器製作工人数を推定している。9項では操業年代の比定を行った。

<sup>(21)</sup>土器観察結果や数量的データからこのような検討結果を得たが、十分なまとめはできていない。ただ、個々の結果の多くは、今後、林オオカミダニ窯周辺の該期窯跡資料との対比を行うことで検証できると考えている。なお、今後含めなければならない問題点として、窯相互における土器窯詰め時の器種構成あるいは器種構成比、個別窯での器種別破損率の実態。さらに、窯出し後の選別作業が窯あるいは器種相互において同一基準であったか等がある。本窯のような隣接する窯ではその土器内容からも2・1号窯での相違は小さい、という前提に立ち考察を加えてきたが、今回全く力のおよばなかった他窯との比較・検討も含め、今後、改めて検討していきたいと考えている。先学諸氏の御叱正、御批判を乞う次第である。

<sup>(22)</sup>最後にこの考察を作成するにあたり、以下の諸氏より御指導・御助力を賜った。記して感謝の意を表するとともに、有益な御助言を賜りながら十分に生かすことができなかつた点をお詫びしたい。

服部敬史、宇野隆夫、田嶋明人、福島正実、田嶋正和、菱田哲郎、北野博司、望月精司、木立雅朗、岡本恭一、川畑誠、北陸古代土器研究会(順不同・敬称略)

### 注

- (1) 合口となった坏Aの半数以上は蓋と身が熔着するものであるが、これらは手の力のみではなかなか外れなかった。しかし、竹べらを用い試みると意外に簡単に外れるものが多く、坏Aのような大量生産器種では蓋あるいは身の一方を欠き割り出荷したことが考えられる。この際どちらか一方を重視していたとすれば、それが出土数に反映する可能性も考えられよう。また、熔着品が希少器種であったならば、少々の破損があっても出荷したということもあつたであろう。
- (2) No.14の土器などは、No.17とNo.13に載り3段目にあたるともみてとれる。が、これは下位の土器に上位の土器の縁を載せるという設置方法のためであり、底面を床に着ける土器(No.13)から数えるなら、No.14は2段目の重ねとなる。
- (3) 焚口部天井が遺存した1号窯では、土器出土位置および接合状況からも、甕などは天井部を破り運び出したとも考えており、地表から調査時で深さ2mを測るこの位置で取り残し品を置くことも、当時の製品窯出し作業においては決して大きな障害とはならなかったと考える。
- (4) 大阪大学桜井谷窯跡調査団1991「桜井谷窯跡群2—23号窯跡」の例では緩やかな傾斜の床に合口による4段の重ね例が報告されている。
- (5) 石川県立埋蔵文化財センター1985「高松町若緑ヤキノ窯跡」では坏どうし15段の重ねの例が報告されている。
- (6) 本窯出土の土器に被る自然釉には数種の色合いがあることから、土器の発色もあわせ全器種を通してまとめるなら、窯内配置位置を復元することも可能であろうとの見通しをもっており、今後検討を加えていきたい。
- (7) 第4章で述べたように土器の作風差による土器製作工人単位の識別を意図し土器分類を行っており、本報告で用いている型式という語は工人単位という意味合いをもつ。また、この作風差は焼成量の多い小型器種でより的確に把握できたと考えている。
- (8) 凶化の方法は各グリッドに落とした実破片数から、まず、あるグリッド(仮にAGと呼ぶ)の破片数の全破片数中での百分率比を求める。そして得たAGの百分率比にこれを取り囲む8グリッドの百分率比を加え9で割ったものをAGの値(重心値)とする。次にこのグリッドの重心を求める。その方法はAGを中心とし相隣接するグリッドの値にそれぞれAGの値を足し、その相隣接する数値の比によりAGの重心の偏りを求めるのである。縦・横・斜3方向に計算を加え、その交点を重心とする。この重心に先に求めた重心

値をあてる。この作業を繰り返し、各グリッドの重心と重心値を求め、以下等高線を引く要領で同値のものを結んだのが密度分布図である。

- (9) 焼成室入口で中心線が左に振れる2号窯では、窯体の中心線を延長した場合灰原を的確に2分することはできない。本項では窯出し状況を問題とすることから、焼成室中央を通り、略方形の前庭部に直交するラインを灰原中心線として用い、このラインにより灰原を左右に分割する。また、灰原上下は略菱形を呈する盛土輪郭の左右(南北)頂点を結ぶラインにより分割する。
- (10) 灰原部での器種・型式毎の偏在は、器種・型式毎の窯内配置位置の近接を反映していると考えられるが、これとは別に壺・甕を含め型式毎の偏在という分析結果を得たことに本窯での型式分類の有効性を認めたい。逆に、灰原で分散出土した型式には(窯内での分散配置を反映した可能性もあるが)分類の見直しが必要なのかもしれない。
- (11) 今回は計算を簡略化するために、重心値は百分率比から求めたが、実破片数により計算する、あるいは、グリッドを細分化することによりさらに細密な図化も可能となろう。また、重量分布密度図も作成したが、これには有効な解釈は加えられなかった。
- (12) 方法は宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集により、残存率は1/12以上のものを、破片数は親指の爪大以上のものを集計している。
- (13) 吸水量は特に求めていないが、ポリバケツ3/4程度まで入った土器に対して吸水量は200cc位であった。
- (14) ここで算出した結果を須恵器の数値と比較すると、粘土が焼成を受けることで最大で20%、最小で1%体積を減じている。つまり収縮していることになる。この最大収縮率は、一般に言われる陶磁器の収縮率と比べても大過のない結果と言えるのではないだろうか。ただ、土器の収縮率は一個の土器でも口縁部と底部とは違ったであろうし、火前、火後でも器厚の変化は同様ではなかったであろう。
- (15) 考古地磁気年代測定の結果は2号窯の1回使用、1号窯の副数回使用を反映しているのではないだろうか。
- (16) 注7。
- (17) 坏B蓋では結果的に坏B身以外の壺・長頸瓶等の蓋も含めてしまった。この法量差は対応器種の違いによるもので、坏B身の法量差ではない。ただ、つまみをもつ蓋の増加は指摘できよう。
- (18) 高坏では点数が少ないため坏Aのような焼成次の違いは十分に把握できなかったが、カキ目を加えるものの多くは2次被熱を受けておらず、1号窯第2次焼成においてカキ目調整が多用された可能性がある。
- (19) 田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会、北野博司・池野正男1989「北陸における須恵器生産」「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工業生産史研究会、望月精司1990「南加賀古窯跡群成立期の様相」「二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡」石川県小松市教育委員会、木立雅朗1991「北陸」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器。
- (20) 田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」「編年表の補足にかえて」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会。
- (21) 年代に関連しては、本窯出土の土器をみるかぎり、型式相互で顕著な作風差が認められ、本窯のような新旧の様相が混在する時期にたいして窯差を比較する際には、前作業として十分な窯内差把握の必要性を感じた。
- (22) 報文中に触れることのできなかった土器製作方法に関して、ここで一部補足しておく。ロクロ回転方向は、観察可能なものについて、すべて時計回り(右回り)である。坏は一枚の円板を底部(天井部)とし、これに体部を接合し、成形するものと考えている(巻頭図版4)。また、この底部円板は型式毎にその径が異なり、型式識別の一指標ともなった。

## 第2節 製鉄遺構について

### 1. 豎形炉の問題点

検出した豎形炉は外側に楕円形、内側に方形の炉壁が認められた。このことは、楕円形の炉で操業した時期(I期)と、その後楕円形炉の内側に方形の炉壁を築いて操業した時期(II期)が想定される。I期は砂鉄から鉄を製錬した製錬炉と思われる。II期は製錬が中心に行なわれたが、鑄型の存在から一時(最終段階?)銑鉄を溶解して鑄造を行なった炉と思われる。では、I期とII期の時期はいつであろうか。北陸地方では9世紀中頃以降に箱形炉にかわり豎形炉が主体を占めると考えられている(関1989)。富山県小杉町綿内池遺跡の9世紀後半(関1991)、上野南II B遺跡の9世紀(中頃~)後半代(池野1991)の2例から、9世紀後半以降に一般化すると思われる。よって、林遺跡の楕円形炉(I期)も9世紀後半以降と推定されるが、土器が伴わないのではっきり確定できない。II期の方形炉(溶解炉)は送風施設(フイゴ座)の鑄型下から出土した土器から廃棄時期が11世紀末~12世紀前半と考えられる。豎形炉には一定の時間差が想定可能であるが、他の遺構との関係はどうであろうか。北側8m以内には土坑を伴う鍛冶炉と木炭窯が存在する。木炭窯の前庭部掘り方から1m以内に鍛冶炉(鍛錬)が存在するので鍛冶場の作業空間が狭すぎることから鍛冶炉と木炭窯には時間差が想定される。また、豎形炉の前庭部に鑄型を埋設していたことからかなりの時間差が想定される。以上の2点から判断すると、I期は楕円形炉(製錬炉)+鍛冶炉がセットであり、時期は9世紀後半以降~II期までの間と思われる。II期は方形炉(溶解炉)+炭窯がセットであり、時期は11世紀末~12世紀前半と思われる。しかし、I期とII期の差は時間差ではなく、II期だけの作業工程(段階)の差と考えるべきかもしれない。それは排滓場には間層がないことや、丘陵先にある木炭窯(5号窯:8世紀末~9世紀初頭、6号窯:5号窯より新しい)までI期が遡る可能性は難しいという(宮下氏教示)。

鑄造用の溶解炉は円形炉が優位(中山1987)であり、絵図や遺構でも円形炉がほとんどである。方形の鑄造用溶解炉はみられないが、方形の製錬炉は類例がある。新潟県豊浦町北沢遺跡(川上1992)と福井県金津町笹岡向山遺跡にある。北沢遺跡2号、3号炉は方形炉であり、1号炉もその可能性がある。いずれも製錬炉と考えられ、時期は12世紀後半~13世紀初頭とされている。笹岡向山遺跡は土器や鑄型が出土しておらず、整理中なので未確定だが、製錬炉であり時期は中世と考えられる(木下氏教示)。つまり、北陸地方の中世前半期には方形の製錬炉が存在することは確実であるが、溶解炉の可能性は林遺跡のII期だけである。ただし林遺跡の炉付近には砂鉄が炉壁に焼結したのがあることや鑄型が非常に少ないことなどから、方形炉も砂鉄を原料とした製錬が主に行なわれたと想定されよう。しかし、林遺跡には送風施設(フイゴ座)内に鑄型と方形炉壁(第81図3、第82図8)が廃棄されていたこと(第62図)や自然科学的分析結果からも、II期のある時期(最終段階?)に(短期的な)鑄造を行なったことは明らかであり、(基礎部が)方形の鑄造用溶解炉も機能したものと一応考えておきたい。

### 2. 炉壁について

炉の形が2種類(楕円形、方形)があり、炉壁も2種類想定されたが、はっきりした方形炉の炉壁は3例(第81図3、5、第82図8)と少ない。溶解炉は方形より円形のほうが、物理的な面(壊れにくい)と操業面において優れているという(中山1987)。また、方形炉壁そのものが少ないことから、鑄造用溶解炉は基礎部分が方形であるが上部は隅円方形(第86図27)か楕円形ではないかと思われる。よって、炉壁そのものから製錬炉、溶解炉の区別は難しいと思われる。炉壁は粘土帯を横に置くものが多く、縦に並べて外側を別の粘土で包む例(第84図13、第87図36)は非常に少ない。粘土帯は高さ(幅)3.8cm前後、4.5~5cm、6~7cm、8~10cmのグループにまとまっている。また、厚さ10cm程度の厚い炉壁(粘土、第86図20~22)も存在する。林遺跡では粘土帯の観察から炉の造り方を想定すると次のようになる。底付近は厚い粘土で固定(第86図21、22)して基礎(地下~地上残存部)を造る。その上に高さ8~10cmの粘土帯を乗せて形を整え、さらにその上に断面方形・蒲鉾形の粘土帯を乗せていく。粘土帯を

曲げる際に外側には長さ5~7cmの縦すじがつく(第81図2)。上に行くほど粘土帯の高さを低くして、重量がかからないようにして、内側と外側には別の粘土で補強したと思われる。

炉壁は炉の全形を復元できる資料が非常に少ないのが通例である。これは、炉の壊し方のほかに、炉の造り方と耐久性の問題があろう。埼玉県金井遺跡B地区の鑄造用溶解炉では補修部を5枚(溶解面5層、操業5回)持つ炉壁が存在するという(赤熊氏教示)。また、断面方形の粘土帯を非常に丁寧に接合しており、接合部が分かりにくかった(筆者確認)。つまり、金井遺跡B地区は継続的な操業を目的としたためか炉は堅固な造りであったと思われる。これに対して林遺跡の炉壁(溶解面)は楕円形炉壁(製錬用)と方形炉壁(製錬・鑄造用)ともすべて1枚(溶解面1層、操業1回?)であり、粘土帯の乗せ方もやや粗雑である。これは短期的な操業ないし、1回の操業毎に炉を壊す(製錬炉は鉄塊系遺物を取り出す)ためかと思われる。

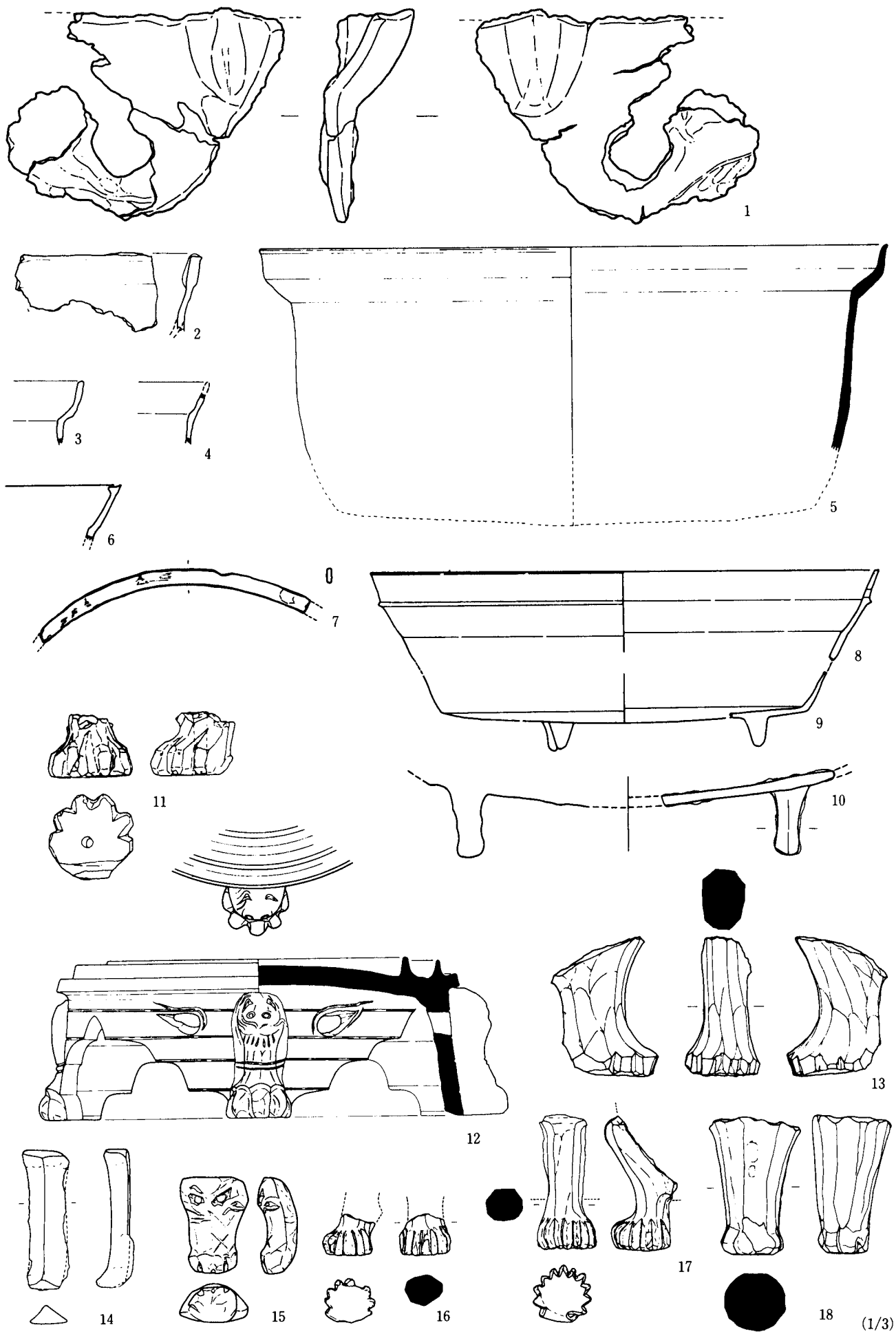
### 3. 埋設された鑄型の問題点について

林遺跡には炉の下側に2基の鑄型が口縁部を上にして土坑に埋設されていた。この2基の鑄型は羽釜と鍋A(五十川1992)であり、すでに一度鑄込まれていた。普通容器鑄型は底から鑄込むことから、この2基の鑄型は(底から)鑄込み、製品を取りはずしてから(再利用するために)埋設されたことになろう。製品を取り出した鑄型(不用品)をなぜ炉の下側に2基も据えたのであろうか。羽釜は谷側のほうに引かれて壊れた痕が観察され、再利用されたとしても、谷側に引っぱられていた。その後小松市教育委員会の調査した鑄型(鍋A)は一度鑄込まれた後に、内側に別の真土(粘土)を貼って、再度鑄込まれていた。これは一度鑄込んだ鑄型の内側に真土(粘土)を貼って新しい鑄型として再度鑄込んだものと考えられる。それを埋設したとすると2度も再利用されたことになる。しかし他の鍋A鑄型は同一個体でも接合が難しいほど壊されているので2度も再利用されたと考えることは難しい。

では埋設された鑄型はその場で鑄込まれたと考えてみよう。埋設土坑は大型の羽釜・鍋鑄型を据えて鑄込んだ鑄造坑(五十川1990)の一種とも考えられる。2基とも炉に近いことは鑄込み作業が行ないやすい。羽釜の鑄型は炉側が残り良く、下側が残り悪ことから、製品を下(谷)側に引き出したと考えられる。しかし、この場で鑄込んだとすると、口縁部側(片口部分)から鑄込むことになる。五十川1990によると口縁部側からの鑄込みは否定的である。羽釜鑄型には底部に円形のくぼみが存在する。このくぼみは湯口の痕跡または中子の受けと思われるが、孔の先端が開いているかは現在確認できない。埋設された鍋A鑄型は底が全部残っていないのでくぼみ(湯口の痕跡)は確認できない。ほかの鍋A鑄型のはばきは未還元(第72図1、2)であり、口縁部から鑄込んでいることは考えにくい。しかし、第72図5の上の屈曲部は一部還元してない(斜めの)部分もある。再利用したと想定しても、逆にその場で鑄込んだと想定してもうまく説明できない。筆者は後者ではないかと考えているが、問題点も多い。林遺跡の溶解炉は中世前半の良好な鑄造遺構であるが、未解明の問題点も数多い。

### 4. 鍋鑄型について

容器の鑄型は鍋と羽釜の鑄型がある。鍋は口縁部に蓋受けの屈曲のつく形態(鍋A)であり、12世紀以降中世の終末までほぼ等しい形態変化を示すという(五十川1992)。県内にはこうした容器の鑄型が報告された例はなく、比較できない。よって、数は少ないが、県内出土の鉄鍋(第98図)と比較してみたい。1は羽咋市寺家遺跡出土であり、9世紀後半とされている(小嶋1988)。口縁部がまっすぐ立ち上がり(五十川分類鍋I)、片口がつく。ほかに底部破片が数点ある。2は辰口町下開発遺跡B地区包含層出土であり、古代に属するとされている(北野ほか1988)。口縁部外側がやや厚くなることから屈曲の弱い鍋Aの可能性はある。3、4は小松市佐々木ノテウラ遺跡包含層出土である(北野ほか1986)。鍋Aであり、12世紀中葉かそれ以降とされている。5は加賀市三木だいもん遺跡出土(荻中1987)である。鍋Aであり、付近から出土した土器から13世紀後半とされる。口径36cm、頸部径32.5cm、残存高11.9cmである。6~9は穴水町大町・縄手遺跡出土(四柳ほか1987)である。鍋Cであり、14~16世



第98図 県内出土鉄鍋・獸脚集成図



紀とされている。6～9は別個体であり、8は口径29.2cm、9は底径21cmである。10は門前町道下元町遺跡出土(西野ほか1985)である。鍋Cと思われ、13世紀末～16世紀後半の間とみられる。さて、以上の例と比較すると形態的にも時間的にも3～5は近い。しかし林遺跡の鑄型は底部付近がやや丸いカーブとなり、大阪府真福寺遺跡例(13世紀後半、五十川1992)により形態が近いものである。あるいは林遺跡の鑄型は河内系鑄物師によるものであろうか。真福寺遺跡と(廃棄が)同じ時期とされる三木だいもん遺跡の鍋(5)の形態差は廃棄の時期差(5が下がる)のほかに、鑄物師の系譜差を考えるべきかもしれない。

県内の鉄鍋生産はいつごろから始まったのであろうか。加賀地方では、林遺跡が唯一の例である。能登地方では1100年能登国から東寺に封戸代として送られた「石納釜」を初見に、平安時代末期の『新猿楽記』の「能登釜」、『堤中納言物語』の「能登鼎」などが文献にみられ(長谷1987)、室町時代以降は有名な「中居の鑄物」が大正時代まで存在する。文献では鉄鑄物生産が平安時代末期から行なわれていたようである。遺物からみると県内最古の鉄鍋(第98図1)は北陸地方の溶解炉出現時期と一致する。能登地方で生産されたものとは確定できないが、北陸地方で生産されたものと想定できる。文献などから判断すると中世の鉄鍋C(第98図6～10)は地元産の可能性が高い(四柳1987)と思われる。鑄造遺構は明治・大正期の遺構(長谷・辻本1981)以外は現在確認されていない。鑄造遺構ではないが、羽咋市滝・柴垣製塩遺跡群には8世紀初め頃の製塩煎熬用鉄釜炉があるとされている(秋山ほか1991)。文献史料では奈良時代の製塩用鉄釜は3点だけであり、国衙・郡衙・有力大寺のごく一部が使用したことが推定されている(岸本1992)。その3点は長門国(737年)、周防国(738年)の国衙(正税帳)と筑前国の観世音寺(709年)にあり、共に太宰府周辺地域である。また、越前国桑原荘の荘券(755年)に「釜一口受二斗五升」があるという(四柳1971)。もし滝・柴垣製塩遺跡E地区2号炉が鉄釜製塩炉であるならば、当時非常に貴重品であった鉄釜(鍋)を越中国(718年能登国)羽咋郡衙か気多大社が所有していたことになる。なお、滝・柴垣製塩遺跡群では8世紀初頭～9世紀初頭の製塩土器が連綿と出土しているが、8世紀初め頃～中頃に鉄釜(鍋)と効率の悪い製塩土器が同時に使われていたことになる。そして、2号炉は紛れ込んだ製塩土器の特徴によって時期が決定されている(宇野・春日1991)点など、遺構とその時期を再検討する必要がある。

## 5. 獣脚について

県内には獣脚鑄型の類例はなく、須恵質、土師質獣脚、鉄製脚(14)が存在する(第98図)。須恵質獣脚は生産地である金沢市浅川3号窯出土の11(出越1989)以外は消費地出土である。12は金沢市戸水B遺跡出土の円面硯の脚(北野1991)であり、獣脚を全て仏具関係とみることはできない。これは小松市戸津古窯跡群で焼かれたようである(北野氏教示)。13、14は辰口町下開発遺跡A地区出土(北野ほか1988)であり、13は辰口町和気3号窯に同じようなものが1点あるという(北野氏教示)。14は鉄製脚であり、爪先が若干欠けている。現存長8.1cm、足の長さ(1.5)cm、幅1.9cm、脛の幅2.1cm、厚さ1cm、付け根の幅2.7cm、長さ1.3cmである。ふくら脛側が平坦なので、時期は中世前半と思われる。16、17は加賀市篠原遺跡(田嶋ほか1987)、18は加賀市敷地天神山遺跡C地区(平田ほか1987)出土の須恵質獣脚である。15は小松市漆町遺跡出土の土師質獣脚であり、古代に属すると思われる。15と12は大きさ、獣面を持つこと、指の数などで共通点が多い。

林遺跡の獣脚は文様の分類では大きく2類に分かれる。足裏の形態では、足裏に孔があるもの(第73図16、17、23)と孔がないもの(28～31)に大別される。足裏に孔がないものは鑄込み口は脚の付け根にしか考えられないが、足裏に孔があるものも脚の付け根が鑄込み口とされている(安田1989、五十川1992)点が気にかかる。足裏の孔は福島県向田A遺跡ではガス抜き孔とされており、孔には還元面があるが、「鑄込まれた鉄が流れ出した様子はとどめておらず、おそらく鑄込み時には鑄型を包んだ粘土でふさがれていた」と記されている。また、「器物鑄型にも獣脚を組み込んだ痕跡は認められない」ので、器物と獣脚は別々に鑄込んだものとされている(安田1989)。

しかし、向田A遺跡、富山県上野南II B遺跡(池野ほか1991)では足裏の孔まで粘土で包んだ獣脚は認められな

い。しかも、ガス抜き孔であれば粘土で包んでしまうと、ガスが抜けないので孔を開ける意味がない。また五十川氏が鋳物業に従事される人と意見交換をされた際に「足裏に孔が開いていたら、鉄が流れ出てしまう」と言われたそうである。林遺跡には足裏に孔がないもの(第73図28~31)もあり、このタイプにはガス抜き孔は存在しない。獣脚足裏の孔の形状からみると向田A遺跡では外側が広い(ロート状)ものが12例、上野南II B遺跡は3例、林遺跡では3例認められる。内外径がほぼ同じ孔の例が向田A遺跡で6例、上野南遺跡II B遺跡は2例あり、内側が広い孔の例は存在しない。孔の径がほぼ同じものより外側が広い(ロート状)例が向田A遺跡ではなぜ2倍も多いのであろうか。外側から孔を開けるので外側が広がることは充分考えられる。しかし、ガス抜き孔であれば外側を広くする必要はないので別な目的があったためとみたい。

鑄込み口は「獣脚の上部の段から上と、獣脚蓋の上端部は鑄型の外側まで還元」していたことから脚の付け根が鑄込み口の根拠とされた(安田1989)。足裏の孔はふさがっていないのに、「鉄の流れ出した様子」がなく、しかも脚の付け根側と蓋の上端部外側までが還元していることになる。つまり、鑄込み口とされる部分に鉄の流出(被熱)痕がみられ、ガス抜き用の孔はふさがれていないのに、孔の周辺には流出(被熱)痕がみられない。

以上のことから、獣脚足裏の孔はガス抜きの孔ではないと思われる。外側が広いロート状の孔が多いことは、鉄を鑄込みやすくするための工夫と考えてみたい。この工夫は柱状製品鑄型(第74図48)にも認められる。

## 6. 製鉄遺跡における石について

林遺跡の製鉄炉の付近には、炉壁の溶けたものが付着した石(第76図4)が1例、その石を小割にしたもの(写真図版91)が多数存在していた。X 4 Y 19区炉壁集中区(第70、71図)には熱を受けて変色した同じ石(図版91)が1例存在した。林遺跡では石が非常に少ないのでこの石は遺跡外から持ち込まれたこと、第76図4は炉の周辺に置かれていたことは明らかである。小割にした石は炉内滓から鉄塊系遺物を割り取る際に台石の割れたものとも考えられるが、一部に熱を受けたものが含まれている。また埼玉県金井遺跡B地区には小割にした石が炉内に投下された可能性があるといわれる(赤熊氏教示)など意識的に石を利用したことも想定される。また、栃木県大境遺跡ではガラス状に溶解した鉄滓の中に白濁した塊(石?)が存在したという(斉藤氏教示)。さらに長野県清水遺跡でもガラス状に溶解した鉄滓(炉壁の溶解部か)に白濁色の石が確認された。しかし、清水遺跡の炉壁粘土には0.5~2 cmの石を多く含んでおり(筆者確認)、それが溶けたものとも考えられる。さらに北九州市室町遺跡では副原料(媒溶剤)として石灰岩と貝殻が想定され、江戸時代には周防の鋳物師が蠣炭(蠣灰)を使用したこと(中山1990)も伺える。林遺跡でも最初は副原料(媒溶剤)として石が使われたと考えて見たが、石を入れると炉の温度が下がる(大澤氏教示)ようであり、副原料(媒溶剤)とは考えにくい。今後、金属学的分析成果のほかに、考古学的に炉付近から出土した石や石(白濁色)の混った鉄滓・炉壁溶解部にも注目していく必要があろう。

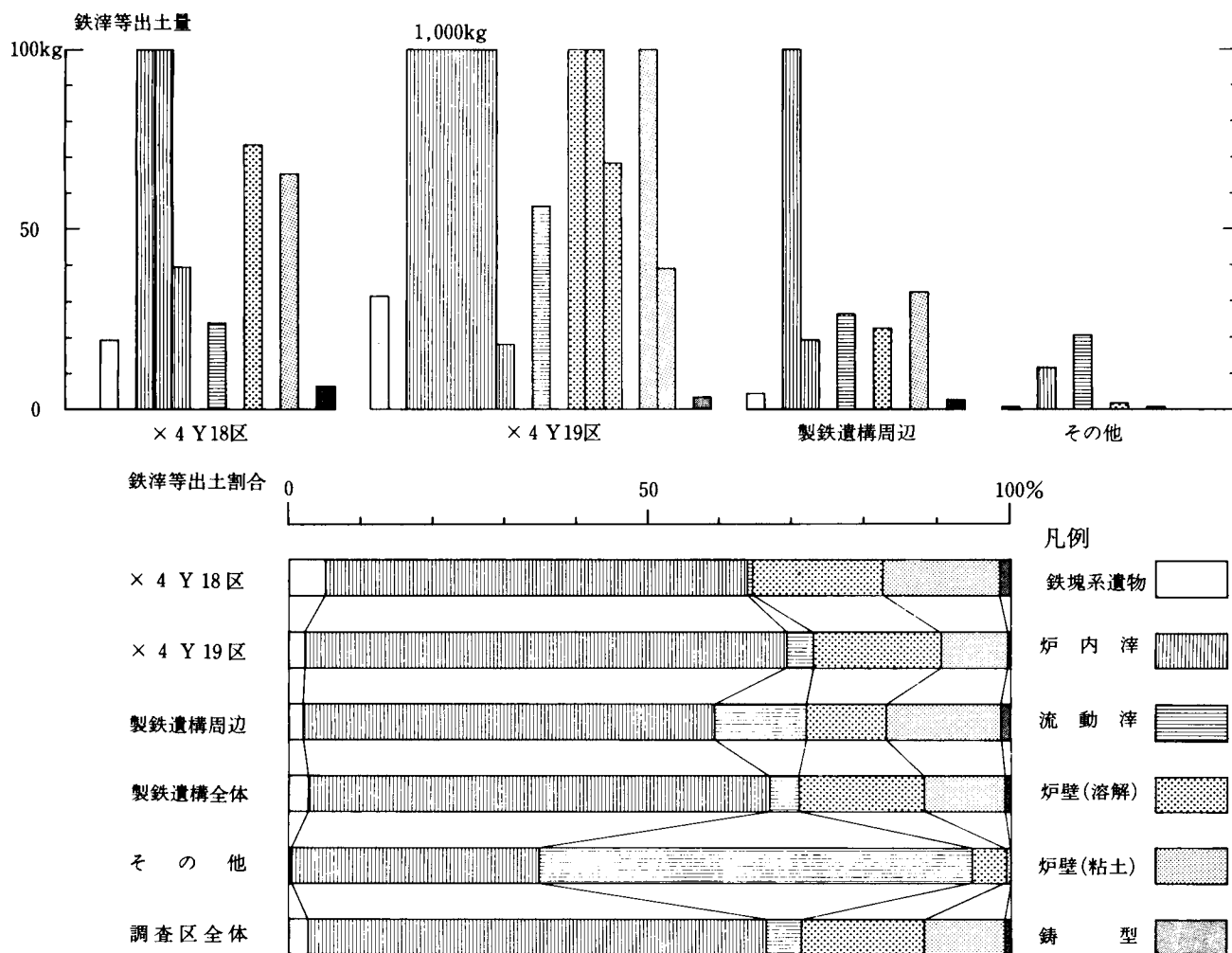
## 7. 鉄滓等の分布などについて

製鉄関連遺構の鉄滓等の出土量(県調査分)は2t131.125kgであった。計測には50g単位の計量器を使用した。鑄型は小さいので1g単位の計量器を使用した。県調査地区(第61図)でも豎形炉の前庭部(鑄型埋設土坑)内は掘りきっていない。しかも、小松市教育委員会調査分は現在整理中なので、数値も完全ではない。あくまでも目安の集計値であり、小松市教育委員会発行の正式報告書の結果を待ちたい。

分類は鉄塊系遺物、炉内滓、流動滓、炉壁(溶解)、炉壁(粘土)、鑄型に分類した。鉄塊系遺物は選別の初期には小型の磁石で行なったが、効率が悪くしかも遺漏が大きかったので、大型の磁石を使用した。肉眼では、錆びによる剥離が著しいものや青色がかった灰色のもの(第79図9など)が識別できた。小さいわりに重量感がある(比重が重い)ので、手に持つだけでも鉄塊系遺物ではないかと判断できた。炉内滓は豎形炉系の鉄滓であり、表面がゴツゴツしたもので、木炭痕などが多くみられる。色調は黄褐色と茶褐色に大別できた。流動滓は箱形炉系の炉

外流出滓のように流れ出た痕が見られる鉄滓である。緻密で重いために破面はきれいに割れている。厚いものと薄いものが認められた。炉壁は中子や鑄型の外型破片などと完全に識別することが不可能だったので溶解部を持つものと持たないものに区別した。炉壁の溶解部のみのなかには、緻密で流動滓と見紛うものが存在した。破面に白濁色粒子(炉壁粘土中の砂粒)が入ったものと裏面に粘土の痕跡があるものを炉壁(溶解)とした。流動滓は破面に白濁色粒子が見られず、しかも裏面には土や石を巻き込んでいる(図版100)。鑄型は確実なもののみ(製品名の分るものと仕上げマネの部分)を集計した。よって、炉壁(粘土)の中には不確実な鑄型の破片も含まれている可能性がある。未使用の鍋鑄型の表面は肌色～赤橙色であるが、中側に厚さ2cm程度茶褐色～暗褐色をした部分がある。これは中真上と思われる。また、白っぽい肌色であり、砂粒が多くて粗い粘土が作業場出土遺物中(第63図)にあり、これは粗真上と思われる。よって、鑄型の胎土のパターンを認識してから選別を行えば、炉壁粘土と鑄型は胎土で選別することがある程度は可能と思われる。

製鉄関連遺物の出土傾向をみてみよう。出土量は排滓場にあたるX 4 Y 19区(谷側)に圧倒的に多く(第99図)、製鉄遺構全体の71%を占める。鉄塊系遺物は全体の2.7%であり、作業場の送風施設近く(大鉄塊出土)のX 4 Y 18-19区とY 18-100区周辺に多い。Y 18-100区周辺には遺構(掘り込み?)が存在した可能性がある(第65図1～2ライン参照)。鉄滓は炉内滓64.6%、流動滓4%、合計68.6%であり、ほぼ7割を占める。流動滓はM17区表土、山道(攪乱)部分に多い。その他の地区での割合が高いのは1号製鉄炉(小松市調査区内の箱形炉)の鉄滓が流れてきたためと思われる。炉壁は(溶解)が17%、(粘土)が11.1%、合計28.1%であり、ほぼ3割を占める。炉壁は炉の1m下のX 4 Y 18-60区とその下側(10列)とX 4 Y 19区炉壁集中区に多い。鑄型は0.6%と非常に少ないが、炉壁



第99図 鉄滓等出土量グラフ

表21 X4Y18区鉄滓等計測値(単位 kg)

	鉄塊系遺物	炉内滓	流動滓	炉壁溶解	炉壁粘土	鑄型	層合計	区合計	石
7	黄褐			6.05			6.05	6.05	
8	表土 黄褐 炭層	0.05 0 0.05		1.35 0.05	0 1.10		0.05 2.45 0.10	2.60	
9	黄褐	10.00			0.15		10.15	10.15	
10	表土 黄褐	0			0		0 0	0	
16	炭層				0		0	0	
18	黄褐 茶褐 炭層	0 0.10		0.25	0 0.05 0.45		0 0.30 0.55	0.85	
19	表土 黄褐 茶褐 炭層	0 0.10 11.20 0.05	0	0.85 0.05	0.20 1.75 1.10	0.015 0.918	0.85 0.365 14.268 1.30	16.783	
20	黄褐 茶褐	0.20		0	0.10		2.25 0.30	2.55	
27	表土 黄褐 炭層	4.35 0.15					4.35 0.15 0.05	4.55	
28	表土 黄褐 炭層	0.05	0.10	0.05 0.15 0.05	0.05 0.15		0.10 0.25 0.35	0.70	0.10
29	表土 黄褐 茶褐 炭層 溝	0.05 0.05 0.55 0.10 0.45	0	0 0.10 0.10 0.10	0.45 0.75 1.70		0.05 0.50 1.40 2.80 0.55	5.30	
30	表土 黄褐 茶褐 ファイゴ座内	0 0 0.25	0.30	0 0.20 0.05 3.45	0.60 2.00 0.35	1.542 1.462	0 1.10 3.842 5.162	10.104	
37	黄褐 炭層	0 0.35					0 0.45	0.45	
38	表土 黄褐	0.45 2.50	0.15	0.10			0.45 2.75	3.20	
39	表土 黄褐 黄砂	0.05 0.70 0.10	0	0.05	0 0.60		0.05 0.75 0.70	1.50	
40	表土 黄褐 黄砂	0	0.05	0 0.05	0.25 3.30 1.45		0.25 3.40 1.55	5.20	
47	黄褐 炭層	0.25			0 0.10		0.25 0.10	0.35	
48	表土 黄褐	0 0.05	0	0.40 0.10	0		0.50 1.40	1.90	
49	表土 黄褐 黄砂 赤褐	0.10		0.20 1.95 0.35	1.45 1.75 1.80 3.00	0.011	1.65 5.55 2.15 3.011	12.361	
50	表土 黄褐 赤褐	5.50 0.05 0.30	0	1.05 2.45	1.35 6.30	0.076	7.90 0.05 9.276	17.226	
57	茶褐	0.95			0.05		1.00	1.00	
58	表土 黄褐 茶褐	0.55		0.05	0		0 0.55 0.05	0.60	
59	表土 黄褐 鑄型内	0.25	0	0.85 0.25	0.25 1.25 0.15	0.029 1.109	0.50 2.129 1.509	4.138	
60	表土 黄褐 赤褐	0.05	0.05	1.55 8.65 2.45	2.00 10.00 3.00	0.011 0.344 0.201	3.661 18.994 5.651	28.306	0
67	表土			0			0	0	
68	表土 黄褐	0.45 2.30		0.25 0.20	0 0.05		0.70 2.55	3.25	0.20
69	表土 黄褐	0.45	0	0.10 2.35	0.35	0.286	0.30 6.436	6.736	0.05 1.15

	鉄塊系遺物	炉内滓	流動滓	炉壁溶解	炉壁粘土	铸型	層合計	区合計	石
70	表土 黄褐	0 0.15	2.90	0.05	1.10	0.35 1.30	0.35 5.723	6.073	0.10 2.65
78	表土 黄褐	0.10 0.25	3.00 10.50	0.30	2.45 2.00	0.25 1.65	0.006 0.015	6.106 14.415	20.521
79	表土 黄褐	0.05	4.45 2.05		2.10 0.10	0.10 0.05		6.70 2.20	8.90 0
80	表土 黄褐		6.65 8.00	0.05	0.55 0.10	0.10 0.15		7.35 8.25	15.60 0.45
87	黄褐	0.05	1.00		0.15	2.75	0.052	4.002	4.002
88	表土 黄褐	0.45 0.10	9.65 4.85	0.35	1.00 0.20	0.45 0.25		11.90 5.40	17.30
89	表土 黄褐	0.65 0.05	20.35 6.55	0.10	9.05 0.05	0.25 0.10	0.003	30.403 6.75	37.153
90	表土 黄褐	0.10 0.10	1.00 8.45	0.15 0.10	0.50 0.55	0 0.35		1.75 9.55	11.30 0
97	黄褐	0.05	1.10		0.70	0.35		2.20	2.20
98	表土 黄褐	1.80 0.45	17.90 14.10	0.10	2.30 1.25	0.40 2.10	0.012 0.004	22.512 17.904	40.416 2.00
99	表土 黄褐	1.30 0.10	24.95 9.05	0.35	5.65 1.10	1.20 1.30		33.45 11.55	45.00 1.80 0.10
100	表土 黄褐 黒褐	0.50 0.75 0.40	9.30 13.00 18.65	0.10 0.15	1.85 2.20 1.20	0.05 0.40 0.05	0.09	11.80 16.509 20.30	48.609 0.05 0
	炉付近黄褐		0.10		0.10	0.05		0.5	0.25
	作業場上面		0.75		1.00	1.75		3.50	3.50
合 計		19.95	239.30	2.40	73.50	65.20	6.328	406.678	8.80
割 合		4.9%	58.8%	0.6%	18.1%	16%	1.6%	分母(石も合計)→	2.1%

表22 X 4 Y 19区鉄滓等計測値(単位 kg)

	鉄塊系遺物	炉内滓	流動滓	炉壁溶解	炉壁粘土	铸型	層合計	区合計	石
6	黄褐 茶褐 赤褐 灰砂	0.15	10.80 4.10		3.55 0.70	0.90 0.35	0.113	15.513 5.15	25.812
			0.20	2.60	0.30			3.10	
		0.85	0		1.10	0.099		2.049	
7	表土 黄褐 茶褐 赤褐		0.60 13.50 1.70 5.60		0.55 14.10	1.60 10.10 0.40 3.55	0.009 0.112 0.056	2.759 37.812 2.156 9.55	52.277
8	表土 黄褐	0.10 0.30	1.80 14.85	0.20	0.75 5.80	4.95 6.45	0.073 0.063	7.873 27.463	35.336
9	表土	0.15	15.40	0.25	1.50	1.00	0.069	18.369	18.369
10	表土	0.35	19.45	0.80	2.40	0.20	0.008	23.208	23.208
16	黄褐 赤褐 灰砂	0.05 0.05	25.70 0.45 2.50	0.65	5.10	1.35 0.35 1.10		32.85 0.85 3.65	37.35
17	表土 黄褐 赤褐	0.05 0.15 0	4.90 13.55 7.40		1.80 2.50 0.15	3.05 8.75 5.35	0.008 0.389 0.010	9.808 25.339 12.91	48.057
18	表土 黄褐 赤褐	0.45	39.30 0 5.55	0.75	7.20	13.25 0.90	0.510 0.198	61.46 0 6.698	68.158
19	表土	0.65	32.05	0.65	5.10	4.75	0.243	43.443	43.443
20	表土	5.55	71.65	1.55	6.95	1.10	0.022	86.822	86.822
26	茶褐 灰砂	0.25	0.55 2.90		0.80 0.40	0 0.70	0.007	1.35 4.257	5.607
27	表土 黄褐 赤褐	0.45 0.55	13.90 20.55 6.35	0.35 0.10	12.55 3.80	12.75 3.55 0.20	0.222 0.062 0.048	40.222 28.612 6.598	75.432
28	表土	1.10	51.65	2.75	18.00	9.55	0.255	83.305	83.305
29	表土	4.85	73.45	3.30	19.65	6.55	0.047	107.847	107.847
30	表土	1.20	53.90	0.90	10.05	2.45	0.015	68.515	68.515
36	黄褐		0.15					0.15	0.15
37	表土	0.65	16.05	0.75	10.40	5.60	0.022	33.472	33.472
38	表土	0.5	18.95	0.85	9.90	1.55	0.005	31.755	31.755
39	表土 黄褐	1.85	74.30 0.20	3.80	14.00	4.65	0.143	98.743 0.20	98.943
40	表土	3.15	84.70	3.40	18.35	4.55	0.036	114.186	114.186
47	表土	0.05	15.65	0.30	6.50	0.55		23.05	23.05

	鉄塊系遺物	炉内滓	流動滓	炉壁溶解	炉壁粘土	鑄型	層合計	区合計	石
48 表土	1.20	28.15	3.80	14.30	0.20	0.020	47.67	47.67	0.35
49 表土	4.00	61.40	3.10	13.75	0.40		82.65	82.65	0.15
50 表土	2.05	36.35	1.85	9.95	1.35	0.081	51.631	51.631	
57 表土 黄褐		4.85 0.20	0.60	0.55	3.85	0.053	9.903 0.20	10.103	
58 表土	0.50	22.35	3.25	9.85	4.05	0.096	40.096	40.096	
59 表土	0.35	48.10	1.65	10.10	2.35		62.55	62.55	
60 表土 黄褐	1.05	47.15	5.50	12.30	0.60 1.05	0.005	66.605 1.05	67.655	
67 表土		0.65	0.90	0.05			1.60	1.60	
68 表土	0.05		0.20	0.30	0.05		0.60	0.60	0
69 表土		2.35	0.45	1.95	0.20		4.95	4.95	0.10
70 表土	1.10	16.30	1.40	3.50	0.05		22.35	22.35	0.05
78 表土		1.60		0.05			1.65	1.65	0.15
79 表土 黄褐	0	0.45	3.00		0.05		3.50	3.50	
		0.05		0.05			0.05 0.05	0.10	
80 表土	0.25	1.95	0.05				2.25	2.25	
86 表土		0.05					0.05	0.05	
87 表土		0.05	0.85				0.90	0.90	
88 表土			1.75		0.20		1.95	1.95	
90 表土		0.05	0				0.05	0.05	
96 表土		0	0				0	0	
97 表土		0.10	0.70				0.80	0.80	
98 表土			0.25	0.55			0.80	0.80	
99 表土		0	1.70	2.25			3.95	3.95	0
100 表土			0.80				0.80	0.80	
Y19区表土		4.70	0.35	0.15			5.20	27.814	
Y19区黄褐		8.20	0.55	1.55	0.70	0.035	11.035		0.05
Y19区茶褐		3.45	0.70	0.15	0.15	0.015	4.465		
Y19区赤褐				0.80			0.80		
Y19区不明		4.70	1.25	0.05	0.30	0.014	6.314		
合計	33.15	1018.15	56.20	267.85	139.05	3.163	1517.563		4.05
割合	2.2	67.1%	3.7%	17.6%	9.2%	0.2%	分母(石も合計)→		0.27%

表23 製鉄遺構鉄滓等計測値(単位 kg)

	鉄塊系遺物	炉内滓	流動滓	炉壁溶解	炉壁粘土	鑄型	層合計	区合計	石
M17 表土	0.10	57.30	6.25	10.10	13.70	1.813	89.263	89.263	0.50
集中区上面	1.45	2.00	0.95	3.95	10.65	0.371	19.371	19.371	1.85
山路(攪乱)	0.35		17.20	0.65		0.020	18.22	18.22	
ラベルナシ	2.15	59.95	2.35	8.05	7.95	0.230	80.68	80.68	
小計	4.05	119.25	26.75	22.75	32.30	2.434	207.534		2.45
製鉄遺構合計	57.05	1376.70	85.35	364.10	236.55	11.925	2131.675		6.50
割合(製鉄全体)	2.7%	64.6%	4%	17%	11.1%	0.6%	分母(石も合計)→		0.3%

(粘土)の中には鑄型が若干含まれていると思われるので、実際はもう少し多いものと思われる。送風施設とその付近、埋設鑄型付近に多い。

表24 調査区鉄滓等計測値(単位 kg)

	鉄塊系遺物	炉内滓	流出滓	炉壁溶解	炉壁粘土	鑄 型	区 合 計		石
2トレ東半		0.05	0.10				0.15	西谷部 合計	0.05
3トレ東半			0.05				0.05		
4トレ東半		0.05	0.20				0.25	0.1	
6トレ西半		0.05	0.90				0.95		
7トレンチ		0.65	0.05	0.05	0.05		0.80		
8トレンチ			0.05				0.05		
9トレンチ		0	7.50				7.50	中央谷 部合計	
F-15区包					0		0		
G-1区包			0.05				0.05		
G-6区包			0.25				0.25		
G-8区包			1.25				1.25		
G-10区包			0.25				0.25		
G-14区包			0.05				0.05		
H-4区包			0.05				0.05		
H-6区包			0.05				0.05		
H-8区包			0.20				0.20		
I-2区包		0					0		
I-8区包			0.10				0.10		
I-10区包			0				0		
I-11区包			0.20				0.20		
J-7区包			0.10				0.10		
J-8区包		0.35	1.05	0.10	0.05		1.55	0	
J-9区包			0.90		0		0.90		
J-10区包			0.10	0.05			0.15	0.05	
J-11区包		0.05					0.05	0	
J-13区包					0		0		
K-9区包		0.05	0.60				0.65		
K-10区表土			1.20				1.20		
K-11区包		0.05	0.15				0.20	0	
K-12区包		0.20	0.05				0.25	0.05	
L-12区包		0.05	0.45				0.50	0.05	
L-13区包		0.05	1.55		0		1.60	0.15	
L-14区包		0.95	0.30				1.25	0.65	
L14区5溝			0.40	0.30			0.70	0.10	
L-15区包			0.05				0.05		
M-13区包			0.20				0.20		
M-14区包		0.10	1.15				1.25	0.10	
M-18区包			0.20		0		0.20		
N13区5溝			0.05				0.05	東谷部 合計	
N20区落ち込み			0.05				0.05		10.85
N22区S X	0.05	9.05	0.50	1.00			10.60		0.25
合 計	0.05	11.70	20.35	1.50	0.10		33.70		1.45
調査区合計	57.10	1388.4	105.70	365.60	236.65	11.925	2165.375		7.95
割 合	2.6%	64.1%	4.9%	16.9%	10.9%	0.6%	分母(石も合計)→		0.37%

## 第3節 林超勝寺について

### はじめに

本節の課題は、本遺跡調査で検出した土壘等が、加賀一向一揆で重要な役割を果たした超勝寺の伝承地であったことから、遺跡理解の一助として一向一揆での超勝寺の位置付けを文献史料で整理することである。これまで、超勝寺のみを対象にした論考はないが、浅香年木氏の『北陸真宗教団史論—小松本覚寺史—』や大桑齊氏執筆の『加賀市史 通史編上』中世編は、超勝寺に関してかなり触れており、本節においてもこの両書を参考にすることが多かった<sup>(1)</sup>。

また、本節では併せて林超勝寺伝承地の諸資料をも検討することとしたい。

### 1. 超勝寺の来歴

超勝寺の創建は、これまでのところ応永14(1407)年本願寺巧如がその弟頓円を越前国に下向させ、九頭竜川に近く、その河川交通によって日本海交通の要衝三国湊と結び得る、吉田郡藤島荘にて開かせたとする説が有力となっている。このような本願寺法主の一門住持の寺院を一家衆寺院と呼び、その寺格は他の一末寺とは異なっていた。この後蓮如は、三代の巧遵を退け、その子蓮超をたて、自ら娘蓮周を嫁がせて以来、超勝寺は越前の本願寺教団の中で和田本覚寺とともにその中心寺院として位置付けられるようになる。

永正3(1506)年には朝倉貞景との戦いに敗れて、五代実頭が本覚寺らと寺基を加賀に移している。超勝寺は、その開基頓円が粟津保内の戸津から津波倉に移って本蓮寺を開き、さらに能美郡軽海郷鶴川の浄徳寺、石川郡大桑庄の善福寺、能美郡野代庄本折の勧帰寺を分出しており、そのため寺基の移転が容易であったのだろう。また本覚寺は以前より加賀に通寺を所持し、その門徒に加賀の山内在住の坊主が確認できるなど、加賀に支持基盤が整っていたことが考えられる。その点で浅香年木氏は、超勝寺・本覚寺の加賀移転は単なる亡命とは言えない根があるとしている<sup>(2)</sup>。

### 2. 加賀一向一揆における超勝寺の地位

#### 一向一揆の発生

一向一揆の時代、加賀における本願寺教団の中心寺院は、はじめ「賀州三ヶ寺」と呼ばれる本願寺蓮如の子息を配置した一家衆寺院、若松本泉寺(蓮悟)・波佐谷松岡寺(蓮綱)・山田光教寺(蓮誓)とされる。しかし、その活動が史料上判明するのは、文明年間も終り近くになってからである。蓮如の吉崎退去後の加賀本願寺教団の統轄者は、吉崎留守職を所持する本覚寺であつとみなされている。

加賀一向一揆においての画期の一つとされるのが、長享2(1488)年加賀守護富樫政親が敗死した長享一揆である。「官知論」(『蓮如・一向一揆』)によれば、この一揆の中心は、加賀国内の国人層およびそれらに率いられた地縁的な組集団と本願寺教団の在地大坊主とされる。ここでは「賀州三ヶ寺」や超勝寺・本覚寺の動向が全く判明しない。蓮如の説く「王法為本」に反する行為(この場合守護に敵対したこと)に対して発せられた有名な蓮如の「お叱りのお文」の宛所は、吉藤専光寺をはじめとする在地大坊主であることから、「賀州三ヶ寺」や超勝寺が一向一揆の核であったとは言い難いのではなかろうか。ただ、結果として在地大坊主を中心とする加賀本願寺教団は、蓮如の譴責をうけ、貴種である「賀州三ヶ寺」に結集する方向へ動いていく。

#### 「賀州三ヶ寺」体制

さて、明応9(1500)年臨川寺領石川郡大野荘年貢算用状(『加能史料研究4』)の支出項目に莊園経営維持のため、「国方」(守護)のほかに、「郡」(在地の国人土豪層の地縁的結合である「組」の郡単位連合体、一揆の中心組織)や「両御山」(若松本泉寺・波佐谷松岡寺)が記されている。ここでの専光寺は「賀州三ヶ寺」の代坊主となってお



り、「賀州三ヶ寺」が加賀本願寺教団の中心となり、在地大坊主も明確にその配下に組込まれている。

本願寺および「賀州三ヶ寺」が宗教上以外の権力に関わるのは、膨張を続ける本願寺教団に対する守護大名権力側の圧力に対応していくため、室町幕府有力者の細川政元を教団の外護者として受入れたことにより始った。それは、永正3(1505)年細川政元の強い要請によって本願寺法主実如が加賀より1,000人の軍勢を動員したことにより本格化する。このことは「当宗御門弟の坊主衆以下具足かけ始めたる事」(「本願寺作法之次第」『蓮如上人行実』)として受け取られ、本願寺は宗派として大名権力と同様に振る舞い、権力抗争に身を置くこととなった。この年には反細川政元派の越前朝倉氏と加賀一揆及び本願寺教団とが戦闘状態に入り、朝倉方が勝利して超勝寺・本覚寺をはじめとする越前の本願寺派寺院が加賀に寺基を移すこととなった。そして永正10(1513)年までには「郡」も完全に本願寺の規制下に組込まれる<sup>(3)</sup>。

永正15(1517)年加賀では国内混乱が生じている。その原因は「本泉寺蓮悟与和田之坊主申事出来し待りし間、則本寺山科へ注進(中略)和田蓮恵御勘気かうふられけり」(「塵拾抄」『真宗史料集成2巻』)というものであり、主として越前朝倉氏問題をめぐって加賀教団および一揆の内紛が表面化し、結果としては、「賀州三ヶ寺」に敵対した本覚寺蓮恵が勘気を受けることとなった。またこの際に、実如は「賀州三ヶ寺」を経由して新たに三ヶ条の掟を下すとともに、本願寺教団内部の格付けを上から順に、蓮枝、一門、末の一家衆に分ける一門一家の制を布告している<sup>(4)</sup>。「賀州三ヶ寺」は蓮枝にあたり、超勝寺は末の一家衆に位置付けられた。これによって加賀国内での「賀州三ヶ寺」の権力は、教団・一揆のいずれの面においても強大化がはかられた。

#### 「超・本両寺体制」

大永5(1525)年本願寺実如が死去し、10歳の証如が本願寺を継ぐ。そして蓮如の六男顕証寺蓮淳が中心となって補佐することとなった。蓮淳の三女は証如の母であり、蓮淳は外祖父としての権勢をふるうこととなったわけである。この蓮淳の次女は超勝寺実顕に嫁いでおり、超勝寺実顕は蓮淳と緊密に連絡を取りつつ行動したことは疑いのないところであろう。この時期、超勝寺実顕が「賀州三ヶ寺」の意思を無視し、「実顕ハカライトシテ思イノマ、ニ所領ヲ渡シ与へ、自分ノ知行過分ニナリシマ、国ノ守護諸侍等マデナキガ如シ」や「国ノ成敗ヲ用ヒス、連々本寺へ讒訴コレアリ」(「今古独語」『真宗史料集成2巻』)とあるのは、そうしたことを示すものと言っただろう<sup>(5)</sup>。このような「賀州三ヶ寺」と超勝寺との対立が、国内を二分する合戦となるのが、享禄4(1531)年に起った享禄錯乱である。天文6(1537)年には「賀州三ヶ寺」の残党らが本覚寺を襲撃するなどの若松相動をおこしている。この争いもまた畿内の政治状況を大きく反映し、本願寺と細川晴元との和儀が成る天文6年によく終結をみる。この結果、「賀州三ヶ寺」は敗れ、それに与同した坊主衆、「郡」衆は別心衆と呼ばれ、天文20(1551)年によく赦免されている<sup>(6)</sup>。

これによって成立したのが、浅香山木氏の言う「超・本両寺体制」である<sup>(7)</sup>。しかし、超勝寺と本覚寺とは大坂石山本願寺内では、その立場は全く相違する。超勝寺は一家衆であり、本願寺証如の記した『天文日記』(『真宗史料集成3巻』)には、実顕の子実照が「刑部卿」と呼ばれて常に証如の側近として仕え、実顕を加賀で補佐しその代官として本願寺との往復をした実照の弟顕祐も「兵部卿」として記されている。これに対して本覚寺は末寺にすぎず、蓮恵とその子実恵は、「和田」・「本覚寺」とあって、その名を記されることはない。斎の相伴に至っては、実照が頻繁に登場するのに対して、実恵は1回のみである。

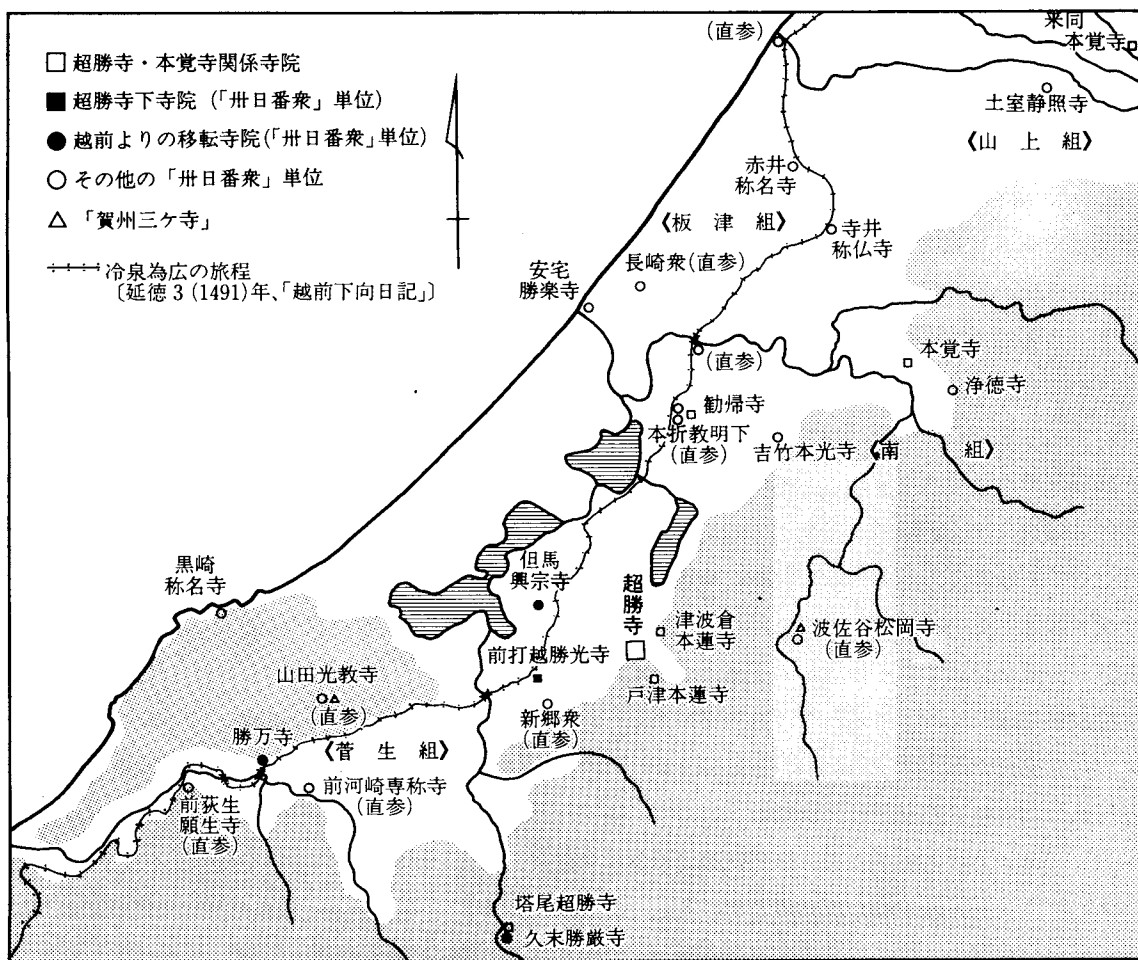
それでは加賀国内において超勝寺・本覚寺の果たした役割を整理しておこう。その第一は「卅日番衆」の加賀教団における割付である。「卅日番衆」とは毎月28日の開山命日を交代日として、1か月間石山本願寺御堂の奉仕をする宗教役(義務)である。その対象となるのは、加賀教団においては、一門等の中間手次を持たない寺坊及び別心等により退転した寺坊下にあった門徒集団を直参衆として編成したものである。金龍静氏によれば、加賀からは43単位が28か月周期で勤めていたとされる<sup>(8)</sup>。この編成について『天文日記』天文6年10月19日には「加州坊主衆へ、構別心候坊主ノ門徒卅日番ヲ可勤候由、上野書状申させ候。此状和田所へ付候」とあって、本願寺は、

本覚寺をして「卅日番衆」役の割付という形で、別心坊主の退転によって宙に浮いていた門徒集団の再掌握を行わせたわけである。

しかし、役の対象には例外が存在する。それは、超勝寺下として「前聖安寺下」と「前勝光寺下」の2単位、また本覚寺にも2単位、いずれも別心坊主退転にともなってこの両寺の下に組込まれた門徒集団である。この4単位は、浅香年木氏によって享禄4(1531)年から天文6(1537)年に推定された「超勝寺下分并本覚寺下分書上」<sup>(9)</sup>に記された両寺院の加賀「下分」の25寺院に含まれる。そして、その4単位以外の寺院は、超勝寺・本覚寺下でなく直接「卅日番衆」を勤めている。この文書の作成された契機は今一つははっきりしないが、この史料に記される「下分」寺院を本末関係として捉らえるとすると、超勝寺・本覚寺は「卅日番衆」の割付を行った時点で、それら21もの門徒集団を失ったこととなる。それでは、享禄錯乱の功労者の処遇としては、いささか苛酷すぎよう。したがって、この文書中の「下分」は、一時的なもの、特に享禄錯乱で混乱に陥った加賀本願寺教団を再建すべく、反「賀州三ヶ寺」方の中心であった超勝寺・本覚寺に付けられた与力寺院ではないかと思う。そして、その与力寺院となっている間の天文6年の若松相動で、先の4単位の坊主はいずれも「賀州三ヶ寺」方として別心衆となり退転した。そのため、その下の門徒集団はそのまま超勝寺・本覚寺下分として組込まれたのだろう。それは、この両寺の享禄錯乱における功績の報償措置と考えることができる。

金龍氏は超勝寺・本覚寺について「番衆の割付申付の代行をてこに、加賀坊主衆すべてにわたって、自己の統制下」においた、と述べている<sup>(10)</sup>。一方、本願寺にとっては、混乱した加賀教団の指導権の委任を「賀州三ヶ寺」からこの両寺に移し、門徒衆把握にあたらせた。これは、この両寺が文明年間以降加賀において培ってきた実力と享禄錯乱の功とがもたらした結果である。

その第二は、超勝寺・本覚寺には加賀一揆に対する重要案件について、「郡」に対する指令のほかに連絡が入っ



第100図 南加賀一向一揆関係図(1/200,000)

ていることである。たとえば、六角氏との和儀(『天文日記』天文5年11月12日)、鈴見長門別心事件(『天文日記』天文7年4月20日)、対越前防衛(『天文日記』天文12年6月17日)などである。これらは、いずれも一揆の政治向きを司どる「郡」に対する指令を宗教面から補い、「郡」とは密接の関係にある加賀教団への徹底を図るためなされたものと考えられる。管見の限り、超勝寺・本願寺が「郡」の権限行使に直接関与した史料は見られない。

#### 金沢坊設置後の超勝寺

天文15(1545)年金沢坊に本願寺証如より仏具等が下付される<sup>(11)</sup>。これによって、金沢坊が加賀一向一揆の本拠となりえたかどうかとなると、疑問を抱かざるを得ない。それは、『天文日記』に全く金沢坊に対する指令や、金沢坊よりの報告の記事が確認できないことによる。金沢坊及びその坊官が一揆を指導するのは、石山本願寺が織田政権と相対する時期になってからである。ただ、本願寺法主の兼帯する坊舎が成立した以上、教団の統括権は金沢坊が有すると考えられよう。超勝寺への本願寺指令伝達も金沢坊成立後は見られず、その権限も縮小方向に進んだものと思われる。

こうした方向性に反応したのか、天文17(1547)年に超勝寺が「郡」衆によって襲撃される事件が起きる。この事件は一部の「群」衆によるものではなく、「四郡衆」という認識を持つほど広範囲勢力によるものであり、超勝寺は一時退去を余儀なくされている<sup>(12)</sup>。この事件の評価については、金龍氏は、金沢坊の設置を好機として江沼郡や周辺の門徒が超勝寺の統制排除を図ったものとしている<sup>(13)</sup>。一方、大桑齊氏は、金沢坊の設置によって郡としての自治権を弱められることに反発した一揆衆が本願寺に反抗する姿勢を強めたことが原因としている<sup>(14)</sup>。しかし、大桑氏の説にしたがうとすると、金沢坊によって権限の縮小を余儀なくされつつある超勝寺が何故襲撃対象となりうるのかの説明が困難となろう。超勝寺は前述のようにかなり無理な行動をとっており、それへの反発が、金龍氏の説のような形で現れたのではないだろうか。

さて、天文23(1554)年本願寺証如が死去し、12歳の顕如が法統を継ぐ。そうしたなか天文24年7月には朝倉教景率いる越前衆が加賀に攻め込む。「朝倉始末記」(『蓮如・一向一揆』)にはその合戦の様子が詳細に記されているが、結局は「為四郡取懸共不成、数千人打死シテ(中略)遂二不決勝負」(『白山莊嚴講中記録』『白山史料集 上』)とあって加賀国内四郡総掛かりであったが、決着がつかなかった。山田光教寺顕誓はその著「反故裏書」(『真宗史料集成 2巻』)に「是皆超勝寺教芳ノ偽妄謀略ヨリオコレリ」と記し、超勝寺教芳の責であったとする。本願寺顕如の命をうけ、弘治2(1556)年和平交渉のため加賀に下向した下間頼言が、超勝寺教芳のために毒殺されており<sup>(15)</sup>、超勝寺が越前との和平には反対であったことがわかる。また、弘治3年には超勝寺の内衆が河北郡旗本の所で火起請させられたが<sup>(16)</sup>、これは対能登問題で加賀一揆指導者層が超勝寺の恣意的行動に釘を刺したものと理解される。超勝寺教芳はこの後加賀から逃亡しその活動は途絶えることとなる。永禄12(1569)年朝倉氏との和平が成った背景について「カノ佞臣生害ニオヨヒ寺中マツ静ヌ」(『反故裏書』)と顕誓は記している。この佞臣は超勝寺教芳であり、その死でようやく決着をみたわけである。

#### 超勝寺の位置

超勝寺は永正3(1505)年に寺基を加賀国内に移すことは、既に述べた。しかし、その所在地に関しては地誌書等で確認する限り、現在の加賀市塔尾町と本遺跡所在地の小松市林町の二箇所がみえるのみで、その存続期間などは全くわからない。大桑齊氏は享禄錯乱の勝利以後に前者から後者へ移転したのではないかとされている<sup>(17)</sup>ものの、超勝寺の位置に関しては、当時の史料にそれを記したものはなく、この場で伝承はもちろん大桑氏の見解を論評することはできない。したがって、次の項目で超勝寺跡の伝承地について検討するが、結局、超勝寺の所在地及びその存続時期に関しては、考古学上の成果による確認を待つしかないのが現状である。本遺跡の調査地点は山麓の土塁を確認しただけであり、その検討材料としては聊か不十分であった。今後加賀市塔尾町の地点を含め、なんらかの確認作業が待たれるところである。

### 3. 林超勝寺跡伝承地とその関連資料

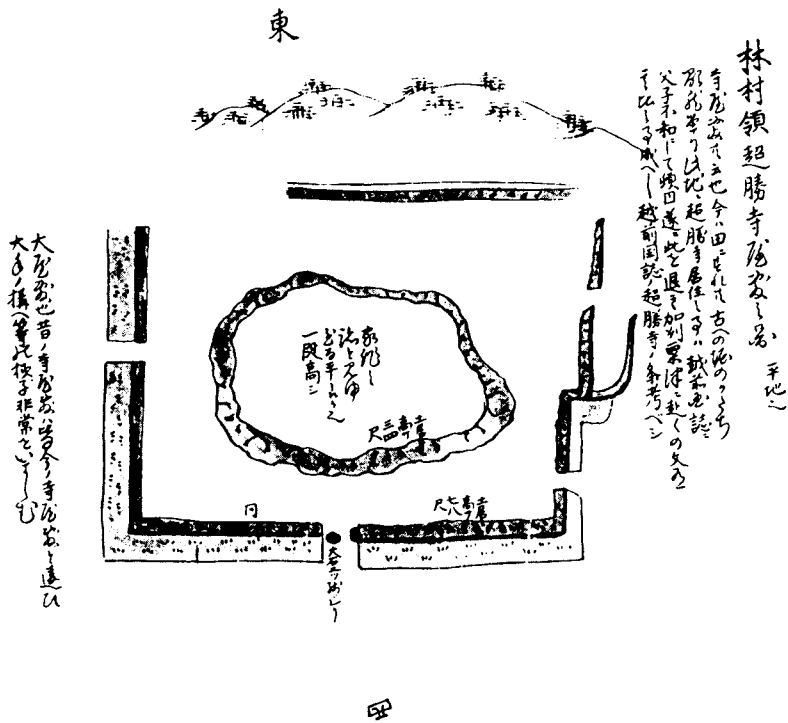
#### これまでの調査

超勝寺伝承地の調査は、大正13(1924)年発行の『石川縣史蹟名勝調査報告第2輯』(以下『史蹟報告』)で現況報告が行われているにすぎない。さらに、その位置が地図上に明示されていないためか、数次の改訂を経た『石川縣遺跡地図』にも記載されず、地元でもその地を知る人が少なくなって、忘れ去られようとしていた。

林超勝寺に関して触れた文献には『加賀市史 通史編上』があり、大桑齊氏が『史蹟報告』の内容と絵図を合成して、略図化している<sup>(18)</sup>。また近年では『石川考古』に連載された城郭寺院調査の一部として、その踏査記録が示されている<sup>(19)</sup>。今回、本遺跡の調査地が『史蹟報告』の報告地に該当することが明らかとなったので、関係資料を整理して、若干の検討を試みたい。

#### 関係資料の検討

林超勝寺跡は「加賀志徴」をはじめとして江戸時代の地誌書には必ず記載されている。しかし、その詳細を記した文献史料は限られ、天保15(1844)年大聖寺藩士小塚秀得編の「加賀江沼志稿」(『加賀市史 資料編1巻』)古蹟之図所載の「林村領超勝寺屋敷跡之図」、文化～嘉永年間(1800年代前半)に調査作図された「江沼郡古城跡図」収載の「林超勝寺跡屋敷之図」(『加賀市史 通史上』)を数えるにすぎない。この両史料とも同一の人達が調査執筆に関わっており、またその成立年代が相前後していることから、全く無関係のものとは考えがたい。そこで、記載内容の詳しい後者を主に利用して検討していくこととする(第101図)。



第101図 林村超勝寺屋敷之図  
(『江沼郡古城跡図』『加賀市史 通史編上』所収)

さて、『史蹟報告』は、調査時点での現地の様子を明らかにしており、その概要を示せば次の様になる。

[位置] 林の南西に位置する標高43.9mの丘陵の北西麓、通称「門ノ内」という平坦地。現況は果樹園。後方

に山を負い、西は江沼の平野に臨み、北は月津の丘陵と相對し、東北は木場潟の平野に連節する勝地。

[遺跡]

- 1 幅3間、長100余間(実測推定110間)の堀。

- 2 堀に沿って「那谷往来」という林と二ツ梨を結ぶ道。しかし、今はその位置が変わり、小道を残すのみ。
- 3 堀の内側の土塁は幅4間、高10尺というが、埋め立てに利用して消滅。
- 4 堀の内側に幅20間、長80間の前庭部あり。
- 5 前庭より8尺高い平坦地があり、山麓に接する。〔前庭と山麓間〕70間×〔南北間〕80間の広さを測る。本堂跡、鐘楼跡というがその痕跡なし。
- 6 山麓には堀あり。



第102図 林超勝寺伝承地復元プラン(1/2,500)

7 寺門の礎石は林の村社の前面に建立。

8 後背地の丘陵上の平坦地は「おすずみ場」と称する。極めて眺望にすぐれている。

では、上記の内容と絵図(第101図)や現地の状況(第102図)とを対比しつつ、超勝寺跡伝承地のプランを整理・検討していくこととする。

伝承地の位置は、第101図によれば、標高43.8mの丘陵の北西麓にひろがる果樹園を主とする平坦地が当該地にあたる。その位置は、絵図にみえる東側の山の記載とも合致する。絵図には平地で、「寺屋敷」とも呼ばれていると記してある。現地は粟津・戸津から延びる丘陵の先端部にあたり、『史蹟報告』に記されるごとく江沼平野から小松市中心部まで180度の眺望が可能な要衝地といえる。現在では、本遺跡の調査原因である国道8号線の工事のほか土取りや埋立などでかなり景観が変ってしまっている。

次に、絵図にみえる方形の土塁と堀について検討しよう。西に面する土塁について、絵図は高さ7・8尺(約2.1~2.4m)と記している。『史蹟報告』では、既に埋立のため土塁は消滅しているとするが、堀は痕跡があったためか、実測値を示すとともに、その長さの推定を110間(約200m)としている。その値を考慮に入れて、堀と土塁の位置の推定をしたのが第102図のC地点である。これは、『史蹟報告』記載の山麓までの距離よりその位置を割出したもので、現在の地割にもその痕跡が確認できる。北と南に面する土塁・堀は、等高線の屈曲部分および絵図の方形を意識して推定した。第102図のD地点は本遺跡調査で検出、踏査確認した土塁である。絵図にも山麓に見えており、『史蹟報告』に堀があるというのは、この事ではないだろうか。

第102図のB地点は、『史蹟報告』にいう前庭にあたる。

絵図には、一段高く、高さ3・4尺(約0.9~1.2m)の土塁をもつ不整形の平坦地がみてとれる。その地点は『史蹟報告』には、前庭より8尺(約2.4m)高い平坦地で山麓に接し、本堂・鐘楼跡と記している。現地には、土塁はもちろん2mもの段差は存在せず、大正期以降にかなり削平されていることがわかる。しかし、第102図のA地点とB地点の段差は1mではあるが、B地点の幅は、『史蹟報告』の前庭の幅20間(約36m)と合致する。したがって、この段差は生きていたと考えるべきものであろう。そこで、A地点(本堂・鐘楼跡)の範囲は、不確定要素が多いながら、『史蹟報告』の長さ表記と絵図の不整形を参考にして、一応スクリーン部分としたのである。

第102図の赤刷り部分は、上記の検討結果を2500分の1都市計画図に書き入れたものである。現在は、『史蹟報告』にも記してあるが、明治以降たび重なる開墾のため、かなり地形等の変更があったようである。また、江戸時代末の絵図作成以前の資料は全く存在しない。したがって、今回の復元は不完全なものと言わざるを得ないが、現時点で考えられるプランを記した。

## むすびにかえて

加賀一向一揆における超勝寺に関して文献史料を使ってその役割を通史の中で概観した。超勝寺は単なる越前亡命衆とは位置付けられず、特に「賀州三ヶ寺」や加賀在地大坊主が罪を得た享禄錯乱以後、核を失った加賀本願寺教団を一定期間まとめる役割を果たした。しかし、それは本願寺による加賀教団直接支配への過渡的なものであった。本願寺証如の『天文日記』をはじめ関係史料を見る限り、超勝寺と「郡」・「組」などの一揆組織との関わりは明確ではない。そのことを早計にこの場で論ずることはできないが、浅香山木氏が「超・本願寺体制」と呼んだ体制は、加賀本願寺教団という宗教上のものであり、政治的な面は一揆組織が担っていたと考えてはどうだろうか。加賀一向一揆における超勝寺の役割は、一向一揆全般に言えることではあるが、史料の限定があるため推測の域をでない部分もかなりある。また、一向一揆を概観したため、紙幅の都合上詳述することができず、極めてわかりづらい文章になった。それは筆者の力不足によるものと思ひ、本節の目的を達したかどうか、不安でもある。

林超勝寺伝承地の現地周辺調査は平成元年度に行い、その際の資料をもとに他の文献等を交えて検討を加えた。

その後、執筆段階で生じた疑問を解決すべく、現地に赴いた時には現地の景観の変化に戸惑ってしまった。発掘調査中にもう少し問題意識を持つべきであったことを痛感している。しかし『史蹟報告』に記され、現地にその痕跡を残す超勝寺伝承地を改めて紹介することができたのではないかと思う。

〔付記〕

小文を成すにあたり、野々市町教育委員会事務局社会教育課の田村昌宏氏には特に種々のご教示を賜った。田村氏のご教示に謝意を表するとともに、すべてを生かしきれなかったことをお詫びしたい。

注

- (1) 浅香年木1983『北陸真宗教団史論—小松本覚寺史—』能登印刷出版部。加賀市史編纂委員会1978『加賀市史通史編上』加賀市役所。
- (2) 浅香註(1)書第3章。
- (3) 永正10年加賀国内の混乱に際して本願寺実如は「先年も申下したしつるすちめあいちかゝる候ハ、くせ事候」と「郡」に書状を發してその行動を咎めている。ここでは既に「すちめ」といえるなんらかの掟が本願寺より下されており、「郡」はその統制下に入っていたことがわかる。(本願寺実如書状写、『加賀市史 資料編第3巻』p550)。
- (4) 「今古独語」・「反故裏書」(『真宗史料集成 2巻』1977、同朋舎)など。
- (5) 「今古独語」は超勝寺実蹟によって罪を得た山田光教寺顕誓の言葉であるから、少し割り引いて考える必要があることは否めないが、他の古文書と合致するところも多く、概ね信じてよいだろう。
- (6) 『天文日記』(『真宗史料集成 3巻』1979、同朋舎)天文20年2月2日、同年3月25日。
- (7) 浅香註(1)書第3章。
- (8) 金龍静1975『「卅日番衆」考』『名古屋大学日本史論集(上)』吉川弘文館。なお、「卅日番衆」についての記事は、『天文日記』、「卅日番上勤座配次第」(『真宗史料集成 2巻』)、「本願寺番衆差定」(『本願寺文書』)『富山県史 史料編中世』史料番号1443、1446、1462、1502号)がその史料である。
- (9) 『富山県史 史料編中世』(1975、富山県)史料番号1581号。年代推定は浅香註(1)書。
- (10) 金龍註(8)論文。
- (11) 『天文日記』天文15年10月29日。
- (12) 『天文日記』天文17年8月18日、9月5日。石山本願寺にあって常に法主の側にあった蓮如の末子順興寺実從の『私心記』(『真宗史料集成 3巻』)天文17年8月19日。
- (13) 金龍註(8)論文。
- (14) 『加賀市史 通史編上』第7章。
- (15) 『私心記』弘治2年4月9日にその記事がある。なお、「反故裏書」にもその記述がある。
- (16) 『私心記』弘治3年5月14日。
- (17)・(18) 『加賀市史 通史編上』第7章。
- (19) そのうち、超勝寺関係の踏査報告は『石川考古』184号(石田1988)、192号(宮本1989a)、193号(宮本1989b)に掲載されている。

## 第6章 まとめ

### 1. 須恵器について

須恵器窯の構造は基本的には地下式であるが、焚口部と窯尻は半地下式となる。窯尻の先端に土坑状の煙道を持ち、上に延びる溝状の煙り出しを持つ。煙道からは付属溝が続き、途中に土坑を持つ。前庭部より下には、窯を掘りぬいた土を盛土状に積み上げていた。オオカミダニ2号窯は壁が2枚、前庭部の灰層3層、灰原2層が確認された。1号窯では壁が1枚、前庭部は焼土の間層を挟んで灰層が3層(上1、下2)、灰原は3層が確認された。操業回数は遺構では1～3回が想定できそうである。土器では2号窯と1号窯出土土器(破損品)の器種割合が1:1.4～2.7前後であることから、2号窯1回、1号窯2(ないし3)回の操業が想定されよう。なお、1号窯出土土器に分類された514・534・535・593・595・600・692・730・734・788・810・846は1号窯造成時の盛土中、または下からの出土しているので、2号窯出土土器の可能性が高いと思われる。

2号窯の焼成部焚口側には土器が多数存在した(第90図)。下から上に数個を並べて縦列を設定し、隣列は半個ずらして千鳥状に配置していた。その上にもう1段重ねており、2段目の中心には長頸瓶が、その横に甕が載っていた。窯に土器を残すことは7世紀前半の窯に類例があることから、壁崩落による取り残しというよりは意識的に放置した可能性(次回の焼成成功を祈願するため)があるという(201ページ参照)。しかし、32個も次回の成功のためにそなえるのはやや多すぎると思われる。その意味は、他の窯の事例との詳細な比較検討を行なったうえで再検討すべき課題であろう。私見では、土器取り出し中に第90図付近に天井(第12図14層)が崩落したために取り残された可能性が高いのではないか。

2・1号窯とも前庭部背後にすべての器種の分布希薄域が認められ、そこを中心に器種毎に運びだされたようである。大型品である甕は灰原裾に多くみられることから、焼成部の焚口側に置かれたために一番遠くに運びだされた可能性がある。もう一つの大型品である壺は甕の分布範囲とは重複しないことから、焼成位置は甕と違う場所に置かれた可能性がある。窯詰め・窯出し作業は熟練者の下、土器制作者が自作土器を詰め、そして運び出した可能性を想定できそうである。しかし、私見としては窯の天井部を壊して大型品の甕を取り出したと推定したこと(201、210ページ参照)には問題があるのではないか。焚口部天井は高さ80cmを測るので、最大級の土器(762・772・826・840、推定最大径50～60cm)を取り出すことは可能である。1号窯の甕は前庭部からたまたま高い位置に置かれて選別されたためと考えておきたい。

林遺跡には須恵器窯は2支群が存在した。南側(谷奥)に位置するオオカミダニ支群は谷前から谷奥に須恵器窯が移動した。北側(丘陵先端)にある林タカヤマ支群(3基)はオオカミダニ支群とほぼ同時期とされている。タカヤマ支群も窯構造は同じであることから、同一工人による須恵器生産の可能性も考えられよう。もし、同一工人によるものならば短期間における窯の造成順番や土器の小変化が明らかにされる可能性がある。

### 2. 土塁・郭状遺構について

中央丘陵には、郭状遺構は北側の登り口部分(5箇所)と頂上部分(5箇所)を調査した。また、頂上の南方向に5箇所、東方向に1箇所存在するのを踏査により確認した(第3図)。東側は丘陵裾の傾斜が強いので、登り口に当たる部分にだけ存在する。また、中央丘陵北側の丘陵(小松市教育委員会調査区)には製鉄遺構を厚い盛土が覆っていたので、郭状遺構の存在が想定される。土塁状遺構は第2号土塁状遺構が中央丘陵先端から西側に巡っている。また中央丘陵先端から東に向かってK18～N20区の落ち込み(土塁状遺構付属溝?)が存在する。

つまり、中央丘陵の頂上部(主郭状遺構)を中心にして、西側を意識して郭・土塁状遺構が配されている。よって、両者は関連して築かれたものと想定される。時期は決定できていないが、第2号土塁状遺構の起点付近には14・16世紀代の遺物が、またK18～N20区の落ち込み(土塁付属溝?)には、15・16世紀代の遺物が出土した。よって



て、14ないし16世紀に造成された可能性がある。遺構の性格は中央丘陵は標高39mを測り、江沼平野～小松市全体を見渡せる絶好な位置にあたることから、簡易な山城というより物見台などの防衛施設(宮本1990)の可能性が高いのではないかと。

西丘陵の第1号土塁状遺構は江戸時代の文献や上田1924などから林超勝寺伝承地の山側土塁に想定される(第5章第3節参照)。よって、第1号土塁状遺構の造成時期は16世紀初頭～中頃となろう。では、林超勝寺と中央丘陵の遺構群の関連はどうであろうか。第2号土塁状遺構は14世紀ないし16世紀の造成の可能性がある。14世紀説をとると、林超勝寺は過去に防衛施設などがあつた要衝地を移転地を選んだ可能性がある。16世紀説をとると、林超勝寺は交通の要衝地を選んで移り、そして防衛施設を築いた可能性が考えられる。2つの可能性とも、決定的な確証はなく、今後の検証・検討が不可欠である。

### 3. 土師器焼成土坑、ピット群について

土師器焼成土坑やピット群は中央谷部に集中した。調査区は中央谷部の平野側に当たるため、全容は不明であるが、谷側にも遺構が存在するものと推定される。調査区南側には2層の包含層が確認された。土器は8～11世紀初頭の土器が出土し、10世紀中頃の土器がやや多い。土器には明確な使用痕を持つものは無く、集落というよりは生産遺跡(窯跡)に伴う破損品と思われる。工房と思われる遺構や粘土採掘穴は調査区内では確認されなかった。谷奥に存在したのか、それとも平野部に存在したのかは今後の課題である。

### 4. 製鉄遺構について

林遺跡は県教育委員会調査区と小松市教育委員会調査区に別れ、色々な遺跡群が存在していた。製鉄遺構に関しては3遺跡である。8世紀代の箱形炉・鍛冶炉・地下式木炭窯、8世紀末～9世紀初頭とそれ以降の地下式木炭窯2基、12世紀前後の豎形炉・鍛冶炉・地下式木炭窯の3遺跡が確認できた。当報告書は最後の遺跡の一部概要報告である。豎形炉は遺構では時間差ないし作業工程(段階)差(222ページ参照)、鉄滓等の金属学的分析では作業工程(段階)差が明らかにされた(144ページ参照)。

排滓場には間層がないこと(小松市教育委員会宮下氏教示)より短時間の作業工程(段階)差とも考えられる。しかし、排滓場では豎形炉の鉄滓と一緒に流動滓も混じって出土した。流動滓は豎形炉でも排出されるらしい(穴澤氏教示)が、金属学的分析では箱形炉排出の可能性がある精錬滓(フイゴ座内、作業場表土、X4Y19-90区表土)であった。丘陵の反対側には8世紀中頃の箱形炉が存在し、また山道の攪乱部分に箱形炉が存在した可能性がある。とにかく豎形炉の排滓場に箱形炉の鉄滓(流出滓)が流れこんだものと推定される。つまり排滓場では8世紀代の箱形炉の鉄滓と12世紀前後の豎形炉の鉄滓が間層を挟まずに混在していることから、時間差の可能性も完全には否定しきれない。今後の検討課題の1つである。

鋳型は羽釜と鍋Aが出土した。両方とも炉の下側に埋設されており、しかも口縁部を上に向けていた。内面が還元しており、鋳込まれていた。その場で鋳込まれたとしても、転用されて埋設されたとしても、問題が大きく、今後の検討課題の1つである。

大鉄塊は白鋳鉄組織鉄塊であった。始発原料は砂鉄系とされるが、マンガン(Mn)の少なさからは砂鉄の匂いは少ないとされる(141ページ参照)。それは砂鉄を精錬した鉄塊系遺物のほかに、鉄器を地金・原料として再利用したことによるのであろうか。今後の検討課題の1つである。なお、第79図A、Bの切断片を分析希望の方には返却を条件に貸し出しを行ないたいと思っています。久田までご連絡ください。

製鉄遺構の遺物はその量の多さや遺物が難解なものが多いので、整理作業になかなか入れないものである。私も初めての経験なので戸惑うことも多く、しかも分類を完了した箱を再度見なおすことがあつた。分類作業の初めに、製鉄遺構の調査に携わった人の適切な指導のもとで、分類資料の標本を決定して選別すれば間違いも少な

くなるであろう。また考古学的調査だけでは不十分であり、金属学的調査と連帯して、事実を解明する必要がある。

製鉄関係遺物の実測図は鑄型の一部を除いて、すべて久田が行なった。剥離面には不規則なドットを入れて、溶解部などと区別した。鉄滓などの凹凸が激しいものは、細かく図化するのではなく全体の雰囲気を出すことにした。戸壁は表面の凹凸を細かく図化することよりも、溶解部と粘土帯の関係、つまり断面と裏面の観察に注意を払った。その結果、粘土帯の単位の違いは炉に積まれる位置の違いによるのではないかと想定された。

## 5. おわりに

林遺跡は須恵器窯の土器と製鉄遺構の鉄滓等が大量に出土した。とくに鉄滓は個体が多いことから、分類作業に多くの時間を費やすこととなった。製鉄遺構は良好な遺構であったが、小松市教育委員会と地区別発掘を行なうことになってしまった。また文献等の調査不足、攪乱のために分布調査を行なわなかったこと、発掘調査時間の不足などから林超勝寺伝承地を調査できなかったことが残念である。

最後に穴澤氏には第1次調査から報告書作成作業まで数多くの指導・助言を賜わり、特に感謝しております。また、大澤氏、広岡氏にはお忙しいなか原稿執筆して頂きまして感謝しております。発掘調査、遺物整理作業、報告書作成作業において数多くの方々から指導・助言を賜りましたが、その成果をすべて生かすことができなかったことをお詫びしたい。氏名を記して謝意としたい。(敬称省略)

青木一男、赤熊浩一、穴澤義功、石岡憲雄、五十川伸矢、上田 真、宇野隆夫、大澤正己、岡本恭一、川端 誠、神崎 勝、北野博司、木下哲夫、久保智康、斉藤 勉、斉藤 弘、酒井重洋、鋤柄俊夫、関 清、田口 勇、田嶋明人、田村昌宏、中山光夫、服部敬史、菱田哲郎、広岡公夫、藤田邦男、増田孝彦、宮下幸夫、望月精司、百瀬長秀、山中 健、吉岡康暢、作業員一同、(株)パリノサーブエイ、(株)川鉄テクノロジーサーチ、アジア航測株式会社、セントラル航業株式会社、藤島超勝寺

## (参考文献)

- 秋山進午ほか 1991『能登滝・柴垣製塩遺跡群』 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会  
池野正男ほか 1982『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群—第3・4次緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会  
池野正男ほか 1986『石名山窯跡発掘調査報告』 富山県大門町教育委員会  
池野正男ほか 1991『上野南遺跡群発掘調査報告』 富山県小杉町教育委員会  
石田文一 1988『林超勝寺を求めて—一城郭寺院調査の記録2』『石川考古』第84号 石川考古学研究会  
五十川伸矢 1990『中世前半の大型鑄鉄鑄物』『京都大学構内遺跡調査研究年報—1987年度』 京都大学埋蔵文化財センター  
五十川伸矢 1992『古代・中世の鑄鉄物』『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集  
上田三平 1924『石川縣史蹟名勝調査報告』第2輯—加賀能登社寺墓跡・古城址・殖産遺跡  
上原真人 1984『天平12、13年の瓦工房』『研究論集』VII 奈良国立文化財研究所  
宇野隆夫 1990『北陸古代手工業生産の成立と変容』『日本史研究』第330号 日本研究会  
宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究』桂書房  
宇野隆夫・春日真実 1991『煎熱遺構の考察』『能登滝・柴垣製塩遺跡群』 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会  
萩中中和ほか 1987『三木だいまん遺跡』 加賀市教育委員会  
春日真実 1989『窯詰めの方法』『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室  
川上貞雄 1992『北沢遺跡群』 新潟県豊浦町教育委員会  
岸本雅敏 1992『律令制下の塩生産』『考古学研究』第152号(第38巻第4号)  
小嶋芳孝ほか 1988『寺家遺跡発掘調査報告II』 石川県立埋蔵文化財センター  
北野博司ほか 1986『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター  
小林行雄 1964『IV屋瓦』『続古代の技術』 塙書房  
北野博司ほか 1988『辰口西部遺跡群I』 石川県立埋蔵文化財センター  
北野博司 1988『重ね焼きの観察』『辰口西部遺跡群I』 石川県立埋蔵文化財センター  
北野博司 1991『戸水C遺跡の発掘調査』『拓影』第35号 石川県立埋蔵文化財センター  
久保智康 1989『近世中～後期越前における赤瓦の生産』『福井考古学会会誌』第7号

- 久保智康 1992 「近世後期南加賀における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第10号
- 関 清 1989 「北陸における鉄生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
- 関 清 1991 「北陸・中部地方」『日本古代の鉄生産』六興出版
- 大聖寺高校郷土研究部 1973 「分校古窯址発掘調査報告」『郷土』11
- 竹野谷俊夫 1990 「第1節鳩山窯における窯詰めの方法について」『鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊』埼玉県鳩山町教育委員会
- 田嶋明人 1972 「加賀市分校古窯址群発掘調査概報」加賀市教育委員会
- 田嶋明人ほか 1987 「篠原遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 近間 強・小松高等学校地歴部 1988 「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ」『石川考古学研究会々誌』第31号
- 出越茂和 1989 「金沢市末窯跡群」金沢市教育委員会
- 中村 浩 1977 「須恵器生産に関する一考察」『考古学雑誌』63-1 日本考古学会
- 中山光夫 1987 「鑄鉄溶解炉の系譜をめぐって」『地域相研究』第17号 地域相研究会 福岡
- 中山光夫 1990 「室町遺跡の鑄造製品」『室町遺跡』(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 贅 元洋 1987 「窯体構造の復元と須恵器生産量の推定」『水神古窯』豊橋市教育委員会
- 花塚信雄 1984 「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畷田・寺中遺跡』金沢市教育委員会
- 福島正実 1985 「那谷金比羅山窯跡群」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』石川県立埋蔵文化財センター
- 福島正実ほか 1986 「柳田タンワリ1号窯跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 西野秀和ほか 1985 「門前町道下元町遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 長谷 進・辻本 馨 1981 「中居金屋の浜鑄物跡調査」石川県穴水町教育委員会
- 長谷 進 1987 「能登中居鑄物師史料」石川県穴水町教育委員会
- 平田天秋ほか 1987 「敷地天神山遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 北陸古代土器研究会・石川考古学研究会 1988 「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」
- 北陸古代土器研究会 1992 「須恵器窯跡カード作成マニュアル」『北陸古代土器研究』第2号
- 宮下幸夫 1987 「戸津六字ヶ丘古窯跡発掘調査概要報告書」小松市教育委員会
- 宮下幸夫 1991 「林遺跡の調査」『小松市埋蔵文化財調査だより』第1号 小松市教育委員会
- 宮下幸夫 1992 「林遺跡の調査」『小松市埋蔵文化財調査だより』第2号 小松市教育委員会
- 宮本哲郎 1989 a 「小松市林新町地内での踏査」『石川考古』第192号 石川考古学研究会
- 宮本哲郎 1989 b 「加賀市塔尾町の藤島超勝寺跡の踏査—城郭寺院調査の記録9」『石川考古』第193号 石川考古学研究会
- 宮本哲郎 1990 「小松市林超勝寺跡を求めて—城郭寺院調査の記録13」『石川考古』第197号 石川考古学研究会
- 望月精司 1991 「木場遺跡の調査」『小松市埋蔵文化財調査だより』第1号 小松市教育委員会
- 四柳嘉章ほか 1987 「西川島一能登における中世村落の発掘調査」石川県穴水町教育委員会
- 四柳嘉章 1971 「古代製塩技術変革に関する覚書」『石川考古学研究会々誌』第14号
- 安田 稔ほか 1989 「相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ」福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 山田邦和 1985 「北陸地方の須恵器」『福井市宿布古墳群』福井県教育委員会
- 山田邦和 1991 「窯業製品」『古墳時代の研究』第5巻生産と流通Ⅱ 雄山閣

## 林オオカミダニ窯実測須恵器一覧表

- [番号] 図版の土器Noを記入。  
 [器種] [分類] 「第3章 第2節 4. 土器 (4)土器の分類」に従い記入。  
 [出土地点] 出土地区・層位および取り上げ番号を記入。  
 [観察/接合関係] 火樺や他の土器との熔着状態について主に観察。また、他地点出土土器との接合関係のあるものはその地点・層位を当欄に記入。  
 [口径] [器高] 各値、計測可能なものについて記入。推定によるものは( )で囲む。  
 [その他法量] A: 受部径(坏A身)、または、つば部径(坏B蓋等)。B: 立ち上り高(坏A身)、または、返り高(坏B蓋等)。C: 鈕径。D: 鈕高。E: 胴部最大径。F: 高坏脚幅部径をそれぞれ示す。  
 [残] 口縁部残存度を記入。全て○/12で示す。

番号	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
1	坏蓋	A1a	H-14東 焚口 27以下層		13.8	5.4		10
2	坏蓋	A1a	H-14 窯口 赤色粘土層		11.8	4.8		4
3	坏蓋	A1a	H-13-12 灰原上面		13.4			2
4	坏蓋	A1a	H-13-16 南北セク 黒褐色層		13.3			4
5	坏蓋	A1b	H-14南東 床		13.3	4.7		2
6	坏蓋	A1b	H-14 床		13.4	4.4		2
7	坏蓋	A1b	H-14-6 焚口 褐色層		13.7	4.5		7
8	坏蓋	A1b	H-14-6 灰原上面		13.6	4.5		2
9	坏蓋	A1b	G-12-11 上層		12.7			3
10	坏蓋	A1b	灰原 スミ		14	4.1		4
11	坏蓋	A1b	I-13-9 小ブロック	I-13-9 小ブロック/H-13-16	13.2	4.6		3
12	坏蓋	A1c	H-13-8 灰原上面		13.5	4.5		3
13	坏蓋	A1c	H-14-6 焚口 褐色層		12.6	4.2		11
14	坏蓋	A1c	H-14-4 灰原 黒色層		13.6	4		4
15	坏蓋	A1c	H-14-4 灰原 黒色層		14	4.6		4
16	坏蓋	A1c	H-13-12 灰原上面		14			3
17	坏蓋	A1c	H-13-12 灰原上面		14	5		1
18	坏蓋	A1c	H-13-11 灰原上面		14	4.2		1
19	坏蓋	A1c	H-14東 焚口 27以下層		14	4.4		4
20	坏蓋	A1c	I-13-9 南北セク 灰原上面		13.8	3.6		2
21	坏蓋	A1c	H-13-16 黒層 灰原		14.4	4.1		2
22	坏蓋	A1c	I-13-5 東西セク 黒褐色層		13	4.2		4
23	坏蓋	A1c	H-13-15 灰原 黒色層		13.3			4
24	坏蓋	A2	H-13-11 東西セク 黒色層		12.4	4.4		3
25	坏蓋	A2	H-12-14 盛土内		13.6	4.6		6
26	坏蓋	A2	H-14-3 焚口セク 灰下34層		13.6	4.2		2
27	坏蓋	A3	I-13-5 東西セク 黒褐色層		14.8	3.8		3
28	坏蓋	A3	I-13-9 上層		13.4			2
29	坏蓋	A3	I-13-9 小ブロック 黒色層		13.8			3
30	坏蓋	A3	H-13-10 盛土下灰層		12.6	4		3
31	坏蓋	A3	H-14-4 黒色層					3
32	坏蓋	A4	H-13-3 盛土 黒色層		12.9	4.5		2
33	坏蓋	A5	H-13-12 灰原上面		13	3.4		2
34	坏蓋	A5	G-12 上層		13.3			2
35	坏蓋	A5	I-13-13 小ブロック	外面へラ描きあり	13.2	4.2		3
36	坏蓋	A5	H-13-14 黄色粘土層		12.2	3.8		3
37	坏蓋	A5	H-13南東 盛土下		13	4		8
38	坏蓋	A5	H-13-12 東西セク 黒褐色層		13	4.1		3
39	坏蓋	A5	H-15南東 窯尻溝床		13.2	3.9		2
40	坏蓋	A5	N-20 アン部内溝 砂層No.2		12.2	4.1		8
41	坏蓋	A5	表土層		13	3.4		2
42	坏蓋	A5	H-13 北西上 盛土中(2) 赤褐色層		12			6
43	坏蓋	A5	I-13-13 小ブロック 黄褐色層		13.6	3.7		5
44	坏蓋	A5	表土層		13.2	3.4		3
45	坏蓋	A6	灰原上面		13.2	4.9		1
46	坏蓋	A6	H-13-14 黒褐色層		12.9			2
48	坏身	A1a	H-14-7 焚口セク 13層		12.2		A: 14cm B: 1.1cm	3
49	坏身	A1a	H-14 焚口上面 黄粘(ブロック)層		11.7	5	A: 13.9cm B: 1.1cm	5
50	坏身	A1a	H-14-7 床		12.3	4.8	A: 14.3cm B: 0.8cm	6

表25 2号窯須恵器(1)

器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他	法量	残
51	坏身	A1a	H-14 床		12.4	4.4	A:14cm B:0.8cm	12
52	坏身	A1a	H-15 窯尻溝クシヨシ 8層下		12.3	4.8	A:14.4cm B:0.8cm	11
53	坏身	A1a	H-13-5 灰原上面		12	4.4	A:14.2cm B:0.8cm	6
54	坏身	A1b	H-14-6 焚口 褐色層		12.4	4	A:14.8cm B:0.7cm	8
55	坏身	A1b	H-13-11 灰原		12.2	4.5	A:14.3cm B:0.8cm	1
56	坏身	A1b	H-14 流土下/流土黒灰層		11.6	4.3	A:13.8cm B:1cm	3
57	坏身	A1b	H-13-8 灰原ク		11.8	4.2	A:14cm B:0.8cm	1
58	坏身	A1b	H-14東 焚口 27以下層		12.2		A:14.4cm B:0.9cm	3
59	坏身	A1b	H-14-2 焚口 褐色粘土層		11.8		A:14.2cm B:0.8cm	4
60	坏身	A1b	H-13-11 灰原		12.6		A:14.4cm B:0.7cm	2
61	坏身	A1c	I-13-5 東西クシヨシ 黒褐色層		11.3		A:13.6cm B:0.6cm	6
62	坏身	A1c	H-13-12 灰原上面		13.5	4	A:16.2cm B:1cm	1
63	坏身	A1c	H-13-12 灰原ク 淡黒色層		12.3		A:15cm B:0.7cm	3
64	坏身	A1c	I-13-3 小ブロック 黄褐色層		11.6		A:14.3cm B:0.6cm	4
65	坏身	A1c	I-13-9 灰原上面 南北クシヨシ		12.6		A:14.8cm B:0.8cm	2
66	坏身	A1c	H-13-11 黒色層		11.2		A:13.6cm B:0.8cm	2
67	坏身	A1c	H-13-16 黒色層		12.2		A:14.6cm B:0.9cm	3
68	坏身	A1c	H-14-3 灰原 黒色層		13.8		A:16cm B:0.8cm	3
69	坏身	A1c	H-13 南 表土層(トルチ)		11.6		A:14cm B:1.1cm	4
70	坏身	A1c	H-13 南 表土層(トルチ)		12.4		A:14.6cm B:1cm	3
71	坏身	A1c	H-13-12 灰原ク		12.2		A:14.6cm B:0.9cm	2
72	坏身	A1c	H-13-15 灰原上面		13.8		A:16cm B:1.1cm	3
73	坏身	A1c	H-14南西 流土下の黒灰層		13		A:14.9cm B:0.9cm	2
74	坏身	A2	H-13-12 灰原ク		12.4	4.1	A:14.4cm B:0.7cm	3
75	坏身	A2	H-13-3 地山直上		12	4.1	A:14.2cm B:0.7cm	4
76	坏身	A2	H-13-11 東西クシヨシ 黒色層		11.6	3.4	A:13.6cm B:0.9cm	5
77	坏身	A2	C-13-2 灰原上層		13		A:15.2cm B:0.9cm	3
78	坏身	A2	H-13-10 黒色層		13.4		A:15.6cm B:0.9cm	3
79	坏身	A2	I-13-9 灰原 黄褐色層		12.2		A:14.4cm B:0.8cm	3
80	坏身	A2	灰原 黒褐色層		10.6	4.1	A:13.2cm B:0.4cm	3
81	坏身	A3	H-13-14 黒褐色層	H-14-3/H-13-13	11.6	4.2	A:13.9cm B:0.7cm	4
82	坏身	A3	H-13-15 灰原	H-14-4	12.1	3.8	A:14.5cm B:0.7cm	5
83	坏身	A3	H-14-4 灰原 黒色層		12.4		A:14.6cm B:0.6cm	2
84	坏身	A3	H-14-4 盛土上面		11.8	4.2	A:14cm B:0.7cm	2
85	坏身	A3	H-13-11 灰原 黒色層		11	4.2	A:13.3cm B:0.7cm	2
86	坏身	A3	H-13-3 盛土 黒色層		11.3	4.6	A:13.2cm B:0.9cm	3
87	坏身	A3	H-13-15 黒色層		12.4		A:14.8cm B:0.7cm	2
88	坏身	A3	C-13-12 焚口上段		11.1		A:13.6cm B:0.9cm	2
89	坏身	A4	I-13-5 東西クシヨシ 黒褐色層		13.8	3.4	A:16.6cm B:0.6cm	3
90	坏身	A4	H-13-7 灰原上面 南北クシヨシ		12.2	3.8	A:14.4cm B:1cm	1
91	坏身	A5	H-12 上層		10.6	3.2	A:12.6cm B:0.4cm	5
92	坏身	A5	H-13-7 灰原境 黒色層		10.6	3.3	A:12.9cm B:0.7cm	2
93	坏身	A5	H-13-12 灰原上面		11.2	3.7	A:13.2cm B:0.8cm	3
94	坏身	A5	H-13-16 南北クシヨシ 黒褐色層		12	4	A:14.4cm B:0.7cm	3
95	坏身	A5	I-13-9 小ブロック		11.8		A:14.2cm B:0.7cm	3
96	坏身	A5	H-13-11 灰原上面		12		A:14.2cm B:0.7cm	3
97	坏身	A5	H-13-14 褐色層		10.4		A:12.7cm B:0.6cm	4
98	坏身	A5	H-13-11 灰原		11.7		A:13.4cm B:0.9cm	3
99	坏身	A5	I-13-9 小ブロック		11.6		A:14cm B:0.8cm	3
100	坏身	A5	H-14-7 焚口 黒褐色層 下半		11		A:13.2cm B:0.7cm	3
101	坏蓋	A1	H-14-14 床直層 No.1		13.2	4.6		12
102	坏身	A1	H-14-14 床直層 No.1		12	4.5	A:14.4cm B:0.9cm	12
103	坏蓋	A1	H-14-14 床直層 No.2	身・蓋熔着	13	4.2		12
	坏身	A1	H-14-14 床直層 No.2				A:14.2cm	12
104	坏蓋	A1	H-14-14 床直層 No.3		14.4	3.8		12
105	坏身	A1	H-14-14 床直層 No.3		13.1	4.2	A:15.1cm B:1cm	12
106	坏蓋	A1	H-14-14 床直層 No.5		13.8	4.6		12
107	坏身	A1	H-14-14 床直層 No.5		11.6	4.2	A:14cm B:0.7cm	12
108	坏蓋・身	A1	H-14-14 床直層 No.6	重ね焼が崩れた状態で熔着				12
109	坏蓋	A1	H-14-14 床直層 No.7		12.7	4.1		12
110	坏身	A1	H-14-14 床直層 No.7		11.6	4.9	A:13.9cm B:1cm	12
111	坏蓋	A1	H-14-14 床直層 No.8		13.8	4.7		12
112	坏身	A1	H-14-14 床直層 No.8		12.2	10.4	A:14.4cm B:0.8cm	12
113	坏蓋	A1	H-14-14 床直層 No.9	身・蓋熔着	12.8	4.1		12

表26 2号窯須恵器(2)

器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.9				A:13.7cm	12
114	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.10	身・蓋熔着	13.2	4.4		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.10		14			12
115	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.11		13.4	4.4		12
116	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.11		11.6	4.6	A:13.9cm B:0.7cm	12
117	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.12	身・蓋熔着	12.8	4.6		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.12				A:13.9cm	12
118	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.13		13.4	4.6		12
119	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.13		11.7	4.3	A:13.9cm B:0.9cm	12
120	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.14	身・蓋熔着	12.8	4.5		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.14				A:13.9cm	12
121	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.15	身・蓋熔着	13.3	4.2		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.15				A:14.3cm	12
122	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.16		13.4	4.5		2
123	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.16		11.5	4.5	A:14cm B:0.7cm	9
124	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.17	身・蓋熔着	13.3	4		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.17				A:14cm	12
125	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.18		14	3.8		12
126	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.18		12.4	4.6	A:14.8cm B:0.9cm	12
127	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.19	身・蓋熔着	13.3	4.1		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.19				A:14.2cm	12
128	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.20		13.2	4.4		11
129	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.20		11.8	4.4	A:14.2cm B:1cm	12
130	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.21	身・蓋熔着	12.9	4.5		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.21				A:13.8cm	12
131	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.22	身・蓋熔着	12.8	4.6		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.22				A:14cm	12
132	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.23	身・蓋熔着	13.6	4.1		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.23				A:14.4cm	12
133	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.24	身・蓋熔着	13	4.2		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.24				A:13.8cm	12
134	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.25	身・蓋熔着	13.2	4.6		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.25				A:14cm	12
135	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.26		13.8	4.6		10
136	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.26		11.8	4.7	B:0.8cm	12
137	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.27		13.6	4.4		12
138	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.27		11.5	4.7	A:13.9cm B:1.1cm	12
139	坏蓋	A1 H-14-14 床直層 No.28		13.5	4		10
140	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.28		12.8	4.7	A:14.2cm B:0.7cm	12
141	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.29		13.3	4.2		12
	坏身	A1 H-14-14 床直層 No.29				A:13.9cm	12
142	長頸瓶	H-14-14 床直層	底部:不定方向ケズリ	8.9	21	E:15.1cm	12
143	甕	H-14-14 床直層 (2)		13.8	15	E:9.7cm	10
144	甕	H-14-14 床直層 (1)	底部に重ね焼斑あり	12.8	15.4	E:9.4cm	12
145	坏蓋	B1 I-13-13 小フロック				C:1.1cm D:0.7cm	0
146	坏蓋	B1 I-13-5 東西ケジョン 黒褐色層		10.2	3.5	A:13.4cm B:0.3cm D:0.9cm	3
147	坏蓋	B1 分調 7トロン		10.2		A:13cm B:0cm	3
148	坏蓋	B1 H-13-16 灰原 黒褐色層					0
149	坏蓋	B1 H-13-11 上層		10.4		A:13cm B:0.4cm	12
150	坏蓋	B1 H-14南西 流土下の黒灰層		9.4		A:12.3cm B:0.4cm	2
151	坏蓋	B1 I-13-9 灰原 黄褐色層		11.8	3.5	A:14.3cm B:0.4cm	3
152	坏蓋	B2 H-14-6 焚口 褐色層		10.8		A:13.4cm B:-0.3cm C:1.2cm D:0.9cm	6
153	坏蓋	B2 H-14-6 焚口上段 褐色層	H-14-3	10.6		A:13.6cm B:-0.1cm	10
154	坏蓋	B2 H-13-3 下層 黒色粘土層	H-12-13	10	3	A:0.3cm B:-0.5cm	3
155	坏蓋	B2 H-12-10 灰原上面		11.4		A:14.2cm B:-0.3cm	4
156	坏蓋	B3 H-13-2 盛土層	天井外面に坏口縁痕あり	9.1	3.7	A:12.4cm B:0.3cm C:2.4cm D:0.8cm	8
157	坏蓋	B3 I-13-9 灰原上面	H-13-12	9.4	2.7	A:12.4cm B:0.35cm	4
158	坏蓋	B4 I-13-13 小フロック 黄褐色層				C:2cm D:0.6cm	0
159	坏蓋	B4 H-13-15 黒色層		12.8	3.2	A:15.4cm B:0.55cm C:2.2cm D:0.5cm	7

表27 2号窯須恵器(3)

群	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
160	坏蓋	B4	H-13-12 灰原上面		10.5	3.3	A:13cm B:0.4cm C:2.1cm D:0.8cm	3
161	坏蓋	B4	H-13-14 黒褐色層		11		A:13cm B:0.3cm	3
162	坏蓋	B4	上層		10		A:12.7cm B:0.4cm	3
163	坏蓋	B4	H-14-15 床直		9		A:11.9cm B:0.3cm	2
164	坏蓋	B5	H-13-7 盛土下 灰層				C:2.2cm D:0.7cm	3
165	坏蓋	B5	G-13-12 焚口上段 黒褐色層		10.9		A:14.2cm B:0.35cm	2
166	坏蓋	B5	H-14-7 焚口 焼土層下層		11		A:14cm B:0.5cm	2
167	坏蓋	B5	H-13-7 盛土下 黒色層		10.2		A:13cm B:0.7cm	4
168	坏蓋	B5	H-13-5 焚口 黄褐色層		10.4		A:13cm B:0.35cm	3
169	坏蓋	B5	I-13-9 灰原上面		9.8		A:12.4cm B:0.5cm	1
170	坏蓋	B6	H-13-12 灰原刈				C:1.8cm D:0.4cm	0
171	坏蓋	B6	H-13-11 灰原上面		9.3		A:12.2cm B:0.45cm	5
172	坏身	B1	H-14-3 灰原上面 焚口セクション	身2個熔着				2
173	坏身	B1	I-13-13 小ブロック 黄褐色層	身2個熔着				0
174	坏身	B1	H-14-1 小ブロック					5
175	坏身	B1	H-13-7 灰原					3
176	坏身	B2	H-13-12 灰原 南北セクション	身4個熔着				0
177	坏身	B2	I-13-9 小ブロック 黒色層	身3個熔着	12.7	5.1		2
178	坏身	B2	H-13-12 灰原刈 淡黒色層		10.9	4.7		6
179	坏身	B2	H-13-8 上層					0
180	坏身	B2	H-13-10 上層		11.8	4.2		2
181	坏身	B2	I-13-9 灰原上面		12.3	4.2		2
182	坏身	B2	I-13-9 小ブロック		11.7			1
183	坏身	B2	I-13-9 灰原刈		14	3.5		1
184	坏身	B2	H-13-1 灰原上面		12	4		1
185	坏身	B2	H-13-12 南北セクション 黒褐色層					0
186	坏身	B2	H-13-16 灰原上面	身2個熔着				0
187	坏身	B3	H-14-4 灰原 黒色層		11.2	3.8		2
188	坏身	B4	H-13-15 灰原		12	4.5		4
189	坏身	B4	I-13-5 東西セクション 黒褐色層	I-13-9 小ブロック	12			1
190	埴		H-14 焚口		8.6	7.2		3
191	埴		H-13-5 焚口 灰層					1
192	鉢		H-13-2 たてセクション 盛土中下	H-13-6 盛土下				1
193	鉢		H-13-4 黒褐色層					2
194	高坏蓋	A1	H-14-7 焚口セクション 27層	鈕なし 天井部:不定方向ケズリ	14.9	4.9		5
195	高坏蓋	A2	H-14-7 焚口 褐色層下半		15			2
196	高坏蓋	A2	H-14南西 床	H-13-11/H-14南東 床	15	5.2		10
197	高坏蓋	A2	I-13-13 小ブロック		13.2			3
198	高坏蓋	A3	H-14 床	H-14 27以下層/H-14-10	13.4	4.8		9
199	高坏蓋	A4	G-14-8 窯体上面	外面窯壁(焼台か)付着				0
200	高坏	A1	H-13北西上 盛土中(2) 赤褐色層	内面板状具押さえあり				0
201	高坏	A1	H-14-2 焚口 褐色粘土層				F:15.2cm	4
202	高坏	A1	G-13-8 盛土 赤褐色層	脚基部に接合のための刻みあり			F:15.9cm	6
203	高坏	A1	H-14東 焚口 27以下層/床	H-13-7		5.7	F:15.6cm	5
204	高坏	A1	H-14 床	高坏脚熔着	16.2	12.6		11
205	高坏	A2	H-13-14 黒褐色層		14.4	3.9		4
206	高坏	A2	H-14-4 灰原		14.1			2
207	高坏	A2	盛土下 黒色層		13.2			2
208	高坏	A2	H-13-8 灰原上面	内面板状具押さえあり				0
209	高坏	A2	H-13-14 黒褐色層				F:15.7cm	8
210	高坏	A2	I-13-5 東西セクション 黒褐色層				F:15.6cm	1
211	高坏	A3	H-13北西上 盛土中(1)	H-13-7 盛土下/H-13-13	12.8			2
212	高坏	A3	H-13-12 灰原上面				F:15.2cm	3
213	高坏	A3	H-13-8 灰原上面	ゆがむ				3
214	高坏	B	H-13-3 黒色層					0
215	高坏	C1a	H-14-6 焚口上段 褐色層		12.2			3
216	高坏	C1a	H-14東 焚口 27以下層	H-14-7 焚口床	11.8			4
217	高坏	C1a	H-14-6 焚口 褐色層		12	14		3
218	高坏	C1a	H-14-7 焚口上層		12.6			2
219	高坏	C1a	H-14東 焚口 27以下層/床		12.5		F:11.9cm	9
220	高坏	C1a	H-14東 焚口 27以下層	H-14-7 床	13.2	14.5	F:11.5cm	9
221	高坏	C1a	H-14 床		13			6
222	高坏	C1a	H-14-6 灰原上面				F:11.8cm	2

表28 2号窯須恵器(4)

群	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
223	高坏	C1a	H-14 表土層				F:11.8cm	9
224	高坏	C1a	H-15南東 窯尻溝トクシヨ				F:11.5cm	10
225	高坏	C1b	H-14-7 床/南北トクシヨ 27以下層		12.7	14	F:11.7cm	10
226	高坏	C1b	H-12-15 最下層				F:11.6cm	4
227	高坏	C1b	H-14 床上				F:12cm	4
228	高坏	C1b	H-14-6 焚口上面 褐色粘土層	H-14-10・14 窯床上			F:11.8cm	1
229	高坏	C1b	H-14 崩落壁上/床				F:11.9cm	3
230	高坏	C1b	表土層					0
231	高坏	C1c	H-14-6 焚口 褐色層	H-14東 27以下層	12.7	14.4	F:12cm	3
232	高坏	C2	H-13-12 東西トクシヨ 黒褐色層	H-13-11			F:12.8cm	4
233	高坏	C2	G-13-16 焚口上段 黄褐色層					0
234	高坏	C2	H-14-8 灰原 黒色層				F:11.1cm	3
235	高坏	C3	H-14-6 焚口トクシヨ 32層	内面板状具押さえあり	13.1	5.1		1
236	高坏	C3	H-14-6 焚口トクシヨ 32層	内面板状具押さえあり	11.8			1
237	高坏	C3	H-13-8	内面板状具押さえあり				0
238	高坏	C4	H-14南西 流土下の黒灰層					0
239	高坏	C4	H-14南西 流土下の黒灰層					0
240	高坏	C5	表土層	内面板状具押さえあり	12			4
241	高坏	C5	H-13-8 灰原上面	内面板状具押さえあり				0
242	高坏	C5	H-13-8 灰原上面	I-13-9 小ブロツク	12.3			3
243	高坏	C5	H-13-8 灰原刈				F:11.8cm	5
244	高坏	C5	H-13-11 南北トクシヨ 黒褐色層				F:12.1cm	6
245	高坏	C6	H-13-14 黒褐色層		12.4			1
246	高坏	C6	H-13-14 褐色層		12.4			3
247	高坏	C6	H-13-12 たちわり	H-13-15			F:13.9cm	2
248	高坏	C6	H-13-16 南北トクシヨ 黒褐色層				F:11.8cm	2
249	高坏	C6	H-13-15 灰原 トクシヨ(3)				F:11.8cm	1
250	高坏	C7	I-13-9 小ブロツク たちわり		13.2	13.6	F:11.6cm	12
251	高坏	C7	I-13-5 灰原上面	7トV西半	12.5			6
252	高坏	C7	H-13北西上 盛土中(2) 赤褐色層				F:12.2cm	2
253	高坏	C7	I-13-9 小ブロツク 黒褐色層				F:12.5cm	3
254	高坏	C7	H-13-11 灰原				F:12.4cm	2
255	高坏	C7	G-13-3 灰原上層	G-13-2				2
256	高坏	C7	H-13-11 黒色層				F:12.7cm	2
257	高坏	C8	H-14 窯口 灰層 床		14.4			1
258	高坏	C8	H-14-2 焚口				F:11.3cm	2
259	高坏	C9	H-14-3 灰層	H-13-6 盛土下	12.2			6
260	高坏	C9	I-13-9 灰原上面 南北トクシヨ				F:14cm	2
261	高坏	C9	H-14-7 焚口 焼土層下層				F:14.6cm	1
262	高坏	C9	I-13-13 小ブロツク 黄褐色層				F:11.4cm	6
263	高坏	C10	H-13-2 南北トクシヨ 下層				F:10cm	3
264	高坏	C10	H-14-3 焚口トクシヨ				F:11.1cm	3
265	高坏	C10	I-13-13 小ブロツク	H-14-2/G-13-12			F:10.2cm	7
266	高坏	D1a	H-13-11 黒色層		15.6			1
267	高坏	D1a	G-13-11 上層		16.2			2
268	高坏	D1a	H-14南西 流土下の黒灰層		15.2			1
269	高坏	D1a	H-13-15 黒色層		14.8			1
270	高坏	D1a	H-13-11 灰原上面	H-13-12	14.2			2
271	高坏	D1a	H-13-11 東西トクシヨ 黒褐色層	内面板状具押さえあり				0
272	高坏	D1a	H-14-7 焚口 黒褐色層 下半	H-13-15・16/I-13-9 小ブロツク			F:13.5cm	5
273	高坏	D1a	H-14 床上	H-13-12			F:13.4cm	4
274	高坏	D1a	H-13-15 灰原上面					0
275	高坏	D1a	H-13-12 灰原刈				F:13.4cm	3
276	高坏	D1b	G-13-11 灰原上層		14.8	14.2	F:12cm	2
277	高坏	D1b	J-10		14.7			2
278	高坏	D1b	H-13-11 灰原				F:13.2cm	0
279	高坏	D1b	I-13-5 東西トクシヨ 黒褐色層		15.4	4.8		1
280	高坏	D1b	H-13-15 灰原	H-13-12	14.3			3
281	高坏	D2	H-13-16 灰原 黒褐色層(畔中)	I-11	15.4			3
282	高坏	D2	H-13-11 南北トクシヨ 黒褐色層		16.8			4
283	高坏	D2	H-13-12 灰原上面	H-13-15/H-14-4/I-13-9	15.1			7
284	高坏	D2	H-13-12 灰原刈		15.8			1
285	高坏	D2	H-13-11 灰原上面		13.8			1
286	高坏	D	H-13-11 東西トクシヨ 黒色層					0

表29 2号窯須恵器(5)



絹	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
287	甗		I-13-9 灰原セクション 13層	頸部中位に縦位刻み巡る	12.6			1
288	甗		H-13-16 南北セクション 黒褐色層		14			2
289	甗		H-14-2 焚口		11.2			3
290	甗		I-13-9 小ブ ロック 黒色層					0
291	瓶		I-13-9 小ブ ロック		5.3			2
292	瓶		I-13		5			5
293	瓶		I-13-9 少ブ ロック 黒褐色層		7.2			1
294	瓶		I-13-9 小ブ ロック 黄褐色層	口唇部剝離	7.2			4
295	長頸瓶		H-13-15 灰原					6
296	長頸瓶		H-13-10 灰原 黒色層		8.8			4
297	長頸瓶		H-13-11 東西セクション 黒褐色層		15.4			0
298	長頸瓶		H-13北西上 盛土中(1) 黄褐色層				E:13.5cm	0
299	長頸瓶		I-13-13 小ブ ロック	底部:不定方向ケズリ /I-13-9			E:13.4cm	0
300	長頸瓶		H-14-7 焚口上層				E:14.6cm	0
301	長頸瓶		H-13-10 灰原セクション(1)				E:13.2cm	0
302	長頸瓶		H-13-16 灰原上面	底部ヘラ刻みあり				0
303	提瓶		H-14-6 焚口 褐色層	環状把手2ヶ			E:18.7cm	0
304	提瓶		I-13-5 小ブ ロック 黄褐色層	環状把手2ヶ			E:15.4cm	0
305	提瓶		H-13-12 南北セクション 黒褐色層					0
306	提瓶		表土層					0
307	平瓶		G-12-16 上層	把手なし 横置され片側に床付着 H-12-14・15/H-14-6				0
308	平瓶		H-14-7 焚口上層	H-13-9・16	8			1
309	平瓶		H-13-12 灰原ヲ 淡黒色層					3
310	横瓶	b	H-14-2 灰原上層	H-14-5	15.2			5
311	横瓶	b	I-13-5 灰原上面		15.6			3
312	横瓶	b	H-13-12 灰原上面		20			3
313	横瓶	b	H-13-7 灰原上面 南北セクション		15.8			1
314	横瓶	b	H-13-14 褐色層		13.2			2
315	横瓶	b	I-13-9 少ブ ロック 黒褐色層		15.2			1
316	横瓶	b	H-13-14 黒褐色層		15			2
317	横瓶	b	表土層		17.8			1
318	横瓶	b	H-14東 焚口 27以下層		14.6			2
319	横瓶	b	H-13-12 灰原上面	ゆがむ				1
320	横瓶	b	H-14東 焚口 27以下層	横置され片側に逆位の坏A蓋痕あり				0
321	短頸壺	1	H-13-16 南北セクション 黒褐色層	口唇部剝離 /I-13-5	12			5
322	短頸壺	1	H-13-12 南北セクション 黒褐色層	口唇部剝離	9			1
323	短頸壺	1	I-13-13 小ブ ロック 黄褐色層		11.2			3
324	短頸壺	1	分調 7トレチ		10.8			3
325	短頸壺	1	I-13-5/9 東西セクション 黒褐色層	倒置される /H-13-16	11.6			5
326	短頸壺	1	H-14-1 褐色層	口唇部剝離 /H-14南西	9.8			2
327	短頸壺	1	H-13-6 盛土下 黒色層	口唇部剝離	11.4			1
328	短頸壺	2	H-13-4 褐色層	H-13				0
329	短頸壺	2	H-14-14	H-13-7				0
330	短頸壺	2	I-13-9 灰原上面					0
331	短頸壺	2	H-13-15 灰原		10			2
332	短頸壺	2	I-13-9 少ブ ロック 黒褐色層		10			3
333	短頸壺	2	H-14-3 焚口セクション 31層	I-13-13 小ブ ロック	8.5			4
334	短頸壺	2	I-13-13 小ブ ロック					0
335	無頸壺		H-13-11 灰原	環状把手2ヶ 内面同心円当て具痕				0
336	壺	A1a	H-14-14		12.6			3
337	壺	A2a	H-14東 焚口 27以下層		13			1
338	壺	A2a	H-14-3 灰原上面 焚口セクション		11.2			2
339	壺	A2a	G-14-4 窯体内 黒褐色層		10.8			2
340	壺	A2a	H-13-8 灰原上面	H-14-2・6	12.8			4
341	壺	A2a	H-14-6 焚口セクション 32層		11.8			4
342	壺	A2a	H-13-10 灰原上層	H-13北西下 盛土中	10			8
343	壺	A2b	H-13-6 盛土層 (黄色・赤色混)		12.8			3
344	壺	A2b	H-13-3 灰原上面	口縁に高坏坏部のる	10.8			4
345	壺	A3a	H-13-13 上層		12.2			2
346	壺	A3a	I-14 灰原上層		11			2
347	壺	A3a	H-15南東 窯尻溝		11.8			4
348	壺	A3a	I-13-13 小ブ ロック 黄褐色層		13.4			3
349	壺	A3b	H-13-12 灰原ヲ 淡黒色層		13			2

表30 2号窯須恵器(6)

器号	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
350	壺	A3b	H-15-10 窯尻溝セクション 11層上		14			1
351	壺	A3b	H-14 南北セクション 27以下層		13.8			1
352	壺	A2b	I-13-13 小フロウ		15.4			1
353	壺	A2b	H-14-2 灰原上層		15.6			2
354	壺	A2b	H-13-12 灰原ヲ 淡黒色層	H-13-8	13.8			4
355	壺	B2c	H-13北西下 盛土中 黄褐色層		14.1			4
356	壺 胴部		H-14-7 焚口	胴部カキ目				0
357	壺 胴部		I-13-13 小フロウ	底部叩き後カキ目				0
358	壺 底部		H-14-7 焚口上層	底部ロクロケズリ				0
359	壺 底部		H-13 盛土下 黒色層	底部に逆位の坏A蓋痕あり				0
360	壺 脚部		H-15-2 畔B	脚部完存				0
361	甕	A3b	H-13-12 灰原上面	把手3ケ・ゆがむ /H-13-11	16			6
362	甕	A3b	H-14-7 焚口上層	環状把手2ケ	16.8			4
363	甕	A2b	H-13-10 灰原セクション(1)	把手なし /H-14-7	16.8			12
364	甕	A2b	H-13-12 灰原ヲ	把手なし	14.2			2
365	甕	A2b	H-14-2 焚口 褐色粘土層	把手なし /H-14-7	14.9			4
366	甕	A2b	H-13北西下 盛土中 黄褐色層	環状把手2ケ /H-12-14 盛土中	28.4			3
367	甕	A2b	H-13-2 盛土層	環状把手2ケ /I-12-4	25.7			5
368	甕	A2b	G-12-16 上層	環状把手3ケ /H-12-10・15・16 H-13-4・6・7・8・11・12	21.4			3
369	甕	B2b1	I-13-9 灰原上面 南北セクション	H-13-11	15			1
370	甕	B2b1	H-14-7 焚口 北側	H-14-2	19.3			3
371	甕	B2b1	H-13-7 盛土下 黒色層		25.6			3
372	甕	B2b1	I-13-9 小フロウ 黒褐色層					3
373	甕	B2b1	H-13-2 盛土下 灰層		21.8			3
374	甕	B2b1	H-14-8 灰原上層	H-13-15/I-13-10	22.2			5
375	甕	B2b1	H-13-2.3.4 上層	H-13-10・15/H-14-3・7/I-13-9・10	26.6			8
376	甕	B2b2	H-14 床上		22.8			1
377	甕	B2b2	H-13北西上 盛土中(1) 黄褐色層		20.6			1
378	甕	B2b2	H-13-12 たちわり	H-13-11	25.5			2
379	甕	B2b2	H-13-12 灰原 南北セクション					1
380	甕	B2b2	I-13-9 小フロウ	I-J-14	22.6			2
381	甕	B2b2	H-13-3 上層	H-14-4/I-13-13・14	23.2			11
382	甕	B2b3	H-13 盛土下	H-13-3/分調7トレンヂ				4
383	甕	B2b3	H-13 盛土下 地山上	H-13-3				2
384	甕	B2b3	灰原セクション	頸部付根に接着のための叩きあり				2
385	甕 底部		H-13-12 灰原上面					0
386	甕 底部		H-13北西上 盛土中 黄褐色層					0
387	脚		H-14-7 焚口 焼土層下層				高:9.6cm 幅:2.8cm	
388	脚		H-14-3 灰原上面				高:9.6cm 幅:3.9cm	
389	脚		H-14-3 焚口セクション 灰中 33層				高:9.4cm 幅:3cm	
390	脚		H-14 表土層					
391	蓋		H-13-12 灰原上面		11.6	3.6		1
392	蓋		H-14-7 焚口セクション 18層		13.2			2
393	床焼台		H-13-2 南北セクション 下層	坏A蓋・身各1				
394	床焼台		H-13-2 盛土or黒色層	坏A蓋+身				

表31 2号窯須恵器(7)

器号	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
395	坏蓋	A1	H-14 床中		15.2			3
396	坏蓋	A1	G-14-4 床直		13.2	4.5		1
397	坏蓋	A1	G-14北西 床		13.6			2
398	坏蓋	A1	H-13-5 焚口 29層					1
399	坏蓋	A2	G-13-12 焚口上段 黒褐色層		12.8	4.3		7
400	坏蓋	A2	H-13-5 焚口 18層	G-13-12 23層/H-12-14	13.8	4.1		1
401	坏蓋	A2	H-12		13.9	4.1		3
402	坏蓋	A2	G-13-12 焚口上段		13.6	3.7		4
403	坏蓋	A2	表土層		14.2	3.7		4
404	坏蓋	A2	H-12 上層		13.5	3.6		3
405	坏蓋	A2	G-14-4 床直		12.7	3.8		4
406	坏蓋	A2	H-13-2 南北セクション 最下層		13.7			2

表32 1号窯須恵器(1)

器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残	
407	坏蓋	A3 G-14	窯尻溝 No.1		13.6	3.8		8
408	坏蓋	A3 H-13-2	上層 灰原 黒色層		13.9	4.1		5
409	坏蓋	A3 H-13-2	盛土上面		14.3	3.3		5
410	坏蓋	A3 G-13-12	焚口上段 黄褐色層		13.1	4.3		9
411	坏蓋	A4 H-13-3	黒色層		13.4	4.3		3
412	坏蓋	A4 G-13-5	最下層		13.8	4		8
413	坏蓋	A6Ⅱ G-14北西	床		14	4.8		2
414	坏蓋	A6Ⅱ	上層		13.4	4.6		3
415	坏蓋	A6Ⅱ H-13	上層		13.8	4.5		3
416	坏蓋	A6Ⅱ	上層		13.5	4.2		8
417	坏蓋	A6Ⅱ H-12-13	上層 黒色層		13.6	4.2		5
418	坏蓋	A6Ⅱ H-13-2	南北セクション 下層	天井部ゆがむ	13.6			3
419	坏蓋	A6Ⅱ G-13-12	焚口上段 黄褐色層		13.6	4.8		6
420	坏蓋	A6Ⅱ H-14	床直		14	4.1		3
421	坏蓋	A6Ⅱ G-14-12	床直		13.6	4.5		7
422	坏蓋	A6Ⅱ G-13-12	焚口上段 黒褐色層		15	4.3		3
423	坏蓋	A6Ⅰ H-13	上層		12.4			3
424	坏蓋	A6Ⅰ H-12-13	小フロック 下層 黒色粘土層	H-13-3	11.8	4.3		2
425	坏蓋	A6Ⅰ H-13-9	上層		12.5	4.3		5
426	坏蓋	A6Ⅰ H-13-2	灰原上面		11.4	4		5
427	坏蓋	A6Ⅰ H-13	上層		12.9	3.9		1
428	坏蓋	A6Ⅰ I-12-4			13.2	3.9		2
429	坏蓋	A6Ⅰ H-13-7	灰原境		13	4		9
430	坏蓋	A6Ⅰ H-12-14	下層 黒粘土層たちわり		12	4.3		3
431	坏蓋	A7 H-13-3	黒色層		13	4.2		1
432	坏蓋	A7 G-15	窯尻溝		12.6	4.2		1
433	坏蓋	A7 G-13北西	焚口 東西(北)トレンチ 26層		13.4	4.3		3
434	坏蓋	A8 H-13-6	盛土上		13	3.6		1
435	坏蓋	A8 H-13-3	灰原上面 南北セクション		12.5			3
436	坏蓋	A8 G-13-16	焚口上段 黄褐色層		13	4.1		1
437	坏蓋	A8 G-13-12	焚口 30層		14.2	3.8		1
438	坏蓋	A8 H-13-9	焚口 27b層		14.8	4.2		1
439	坏蓋	A8 H-12-14	たちわり 黒土層		12.2	4.3		2
440	坏蓋	A8 H-12-15	下層 黒色粘土層		12	4.2		1
441	坏蓋	A8 H-12-14	下層 黒色粘土層		12.4	4.3		3
442	坏蓋	A8 H-13-10	灰原 黒褐色 上層 畔中		12.2	4.5		4
443	坏蓋	A9 G-13-12	焚口 黄褐色層		13.3	4		3
444	坏蓋	A9 H-13-3	黒色粘土層		12.7	4.3		2
445	坏蓋	A9 H-14南東	流土下		12.2	5		2
446	坏蓋	A9 G-13-8	小フロック		12.4			2
447	坏蓋	A9 G-13-2	南北セクション 上層	G-13-3	12	3.7		5
448	坏蓋	A9 H-13-3	灰原上面 南北セクション		12.1	3.5		3
449	坏蓋	A9 G-13-12	焚口上段 褐色層		13.3	4.3		6
450	坏蓋	A10a H-13-3	灰原上面 南北セクション		12.8	4		8
451	坏蓋	A10a H-13-3	灰原上面 南北セクション		13	3.8		1
452	坏蓋	A10a H-13-3	南北セクション 上層		12.8	3.3		4
453	坏蓋	A10a H-13-2	灰原上面		12.6	3.7		3
454	坏蓋	A10a H-13-2	南北セクション 上層		13.8	3.8		2
455	坏蓋	A10a H-13-16	灰原(黒色層)		12.5	3.6		10
456	坏蓋	A10a H-13-3	南北セクション 下層		12.9	3.4		1
457	坏蓋	A10b H-13-3	灰原上面 南北セクション		12.5	3.2		4
458	坏蓋	A10b H-12-15	灰原上面		11.6	4.1		2
459	坏蓋	A10b H-13-3	灰原上面 南北セクション		13.8	2.8		2
460	坏蓋	A11	表土層		13.2	4.5		2
461	坏蓋	A11 H-13-2	盛土上面		13.4	4.6		2
462	坏蓋	A11 H-13-5	灰原		12.5	5		3
463	坏蓋	A11 H-13-7	灰原上面 南北セクション		12.8			2
464	坏蓋	A11 H-13-14	褐色層		13			2
465	坏蓋	A11 H-13-1	灰原上面		13.2			2
466	坏蓋	A11 H-13-14	灰原セクション		13.6			1
467	坏身	A1 H-14	床中		12.4		A:14.8cm B:0.6cm	2
468	坏身	A2 H-13-9	焚口 黄褐色層	H-13-5	12	5	A:14cm B:0.5cm	3
469	坏身	A2 H-12-14	上層 黒色砂層	外面板痕あり	12.6	3.5	A:14.6cm B:1.1cm	4
470	坏身	A2 G-13北西	焚口 東西トレンチ 10・11層		12.4	3.9	A:14.9cm B:0.7cm	5

表33 1号窯須恵器(2)

番	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
471	坏身	A2	G-13-12 焚口上段 黒褐色層	逆位の蓋に載る	11.7	3.8	A:14cm B:0.7cm	4
472	坏身	A2	G-13-12 焚口上段 黒褐色層		12.1	4.1	A:14.6cm B:0.8cm	4
473	坏身	A2	G-13-12 焚口上段 黒褐色層		12		A:14.3cm B:0.8cm	3
474	坏身	A2	I-13-9 小ブロツク 黒色層		10.6		A:13.2cm B:0.6cm	2
475	坏身	A2	G-13-12 焚口上段		12.4		A:14.8cm B:0.9cm	2
476	坏身	A3	H-12-13 黒褐色層		11.8	4.1	A:14cm B:0.7cm	5
477	坏身	A3	H-12-15 下層 黒色粘土層		11.7		A:14.1cm B:0.7cm	4
478	坏身	A3	H-13-3 灰原上面 南北トクシヨ		13.8	4.1	A:15.7cm B:0.7cm	6
479	坏身	A3	H-13-10 上層		14.4		A:16.6cm B:0.7cm	2
480	坏身	A3 I	H-13-3 黒色層		11.3	3.7	A:13.2cm B:0.8cm	4
481	坏身	A3 I	G-13-11 焚口上段 黒褐色層		11.2	4	A:13.5cm B:0.6cm	6
482	坏身	A4	G-13-3 灰原上層		13	3.6	A:15.4cm B:0.4cm	6
483	坏身	A4	H-12 上層		12.1	4	A:14.4cm B:0.8cm	3
484	坏身	A4	H-12-13 灰原上面		11.4	4.2	A:13.7cm B:0.8cm	3
485	坏身	A4	H-13-2 南北トクシヨ 下層		11.7	4.1	A:13.7cm B:0.7cm	2
486	坏身	A4	G-13-12 焚口上段 黄褐色層		11.8	4.3	A:14cm B:0.8cm	2
487	坏身	A4	G-13-12 焚口 黄褐色層		10.6		A:13.1cm B:0.6cm	4
488	坏身	A4	G-13-12南 焚口 26下層				A:(15.7)cm B:0.7cm	1
489	坏身	A5	G-14 窯尻溝 最下層	G-15-3 窯尻溝 最下層	12.3	3.8	A:14.6cm B:0.6cm	2
490	坏身	A6 II	H-13-2 南北トクシヨ 上層		12	3.7	A:14.4cm B:0.6cm	3
491	坏身	A6 II	H-12-14 黒色粘土層		12.2	4.5	A:14.8cm B:0.9cm	3
492	坏身	A6 II	G-13-12 焚口上段 黒褐色層	G-13北西 29・30層	11.7	4	A:13.7cm B:0.9cm	5
493	坏身	A6 II	H-12-15 下層 黒色粘土層		12	4.1	A:14.2cm B:0.8cm	2
494	坏身	A6 II	H-13-3 下・最下層		13.1	3.8	A:15.1cm B:0.9cm	3
495	坏身	A6 II	H-13-13 南北トクシヨ 上層		11.9	3.5	A:14.2cm B:0.5cm	2
496	坏身	A6 II	G-12-16 上層		12.2		A:14.6cm B:0.7cm	2
497	坏身	A6 II	H-12-13 小ブロツク 下層 黒色粘土層		12	3.3	A:14.6cm B:0.6cm	6
498	坏身	A6 II	H-13-15 灰原 トクシヨ(3)		12.8		A:15cm B:0.7cm	2
499	坏身	A6 II	G-12-16 小ブロツク		12.7		A:15.2cm B:0.9cm	3
500	坏身	A6 II	G-12-16 小ブロツク		13.2		A:15cm B:1cm	3
501	坏身	A6 II	H-12-14 黒色砂層 上層		11.9		A:14.3cm B:0.8cm	5
502	坏身	A6 II	南北トクシヨ		12.6		B:0.7cm	3
503	坏身	A6 II	G-14-4 窯体上面		12.6		A:14.9cm B:0.9cm	3
504	坏身	A6 II	G-13-12 焚口上段 黒褐色層		13.2		A:15.7cm B:0.5cm	2
505	坏身	A6 II	G-14-8 最下層 窯体内一括		12.8	5	A:14.8cm B:0.8cm	9
506	坏身	A6 II	H-13-3 黒色層	H-13-9	11.8	4.7	A:14cm B:0.6cm	6
507	坏身	A6 II	G-13北西 焚口 下層		11.9		A:13.7cm B:0.8cm	2
508	坏身	A6 II	I-12		13.4		A:15.4cm	2
509	坏身	A6 II	I-12		12.4		A:14.8cm	3
510	坏身	A6 II	H-13-5 焚口 二層		12.1		A:14.6cm B:0.7cm	2
511	坏身	A6 I	H-13-3 盛土上面	H-13-7	12.6	4.1	A:13.2cm B:0.8cm	12
512	坏身	A6 I	H-13-7 黒色層	H-13-3	12	4.2	A:13.8cm B:0.6cm	6
513	坏身	A6 I	H-13-3 黒色層		11.4	3.6	A:13.5cm B:0.8cm	4
514	坏身	A6 I	H-13-2 盛土内 黄色粘土層		11	3.8	A:12.8cm B:0.8cm	6
515	坏身	A6 I	H-13-3 黒色層		11.2	4.3	A:13.6cm B:0.6cm	1
516	坏身	A6 I	H-13-7 黒色層	逆位の蓋に載る	11	4	A:13cm B:0.5cm	1
517	坏身	A6 I	I-13-13 小ブロツク		10.6	4.2	A:12.6cm B:0.7cm	3
518	坏身	A6 I	G-13-12北 焚口 12層		10.3	4.2	A:13cm B:0.6cm	4
519	坏身	A6 I	H-13-13	H-13-10	10.7	4.1	A:12.7cm B:0.6cm	9
520	坏身	A6 I	G-13-11 焚口上段 褐色層		11.3	4.1	A:13.3cm B:0.8cm	6
521	坏身	A6 I	G-13-12南 焚口 11層		11.3	3.9	A:13.1cm B:0.6cm	2
522	坏身	A6 I	H-13-5 焚口 八層		11.2		A:13.3cm B:0.6cm	2
523	坏身	A6 I	H-13-3 南北トクシヨ 上層		11.7		A:13.8cm B:0.7cm	3
524	坏身	A6 I	H-13-11 灰原 黒褐色・黄褐色層		11.2		A:13.6cm B:0.7cm	3
525	坏身	A6 I	G-14 燃烧室 床中		10.9		A:12.8cm B:0.7cm	2
526	坏身	A6 I	H-13-1 上層		12.3		A:14.1cm B:c0.6m	3
527	坏身	A6 I	G-13-12 焚口上段の 27層 焼土層		10.4		A:12.2cm B:0.9cm	4
528	坏身	A6 I	H-12-13 灰原上層		10.8		A:13.2cm B:0.6cm	4
529	坏身	A6 I	H-13-5 焚口		11.7		A:13.6cm	2
530	坏身	A7	H-13-7 黒色層		11.3		A:13.5cm B:0.8cm	6
531	坏身	A7	G-14 窯尻溝 No.2		11.6	3.7	A:13.6cm B:0.7cm	4
532	坏身	A7	H-12-15 灰原上面		11.8	3.8	A:14.3cm B:0.8cm	3
533	坏身	A7	G-13-12北 焚口 11層		12.1		A:14.3cm B:0.8cm	3
534	坏身	A7	H-13-2 盛土内 黄色粘土層	H-12-14	12.8	3.7	A:15cm B:0.8cm	4

表34 1号窯須恵器(3)

器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
535	坏身	A7 H-13北西上 盛土中(2) 赤褐色層		11.7	4.4	A:13.9cm B:0.9cm	2
536	坏身	A7 H-13-4 南北セクション 上層		11.4	3.7	A:13.6cm B:1.2cm	3
537	坏身	A7 G-15-1 窯尻溝 床直層		11.8		A:14.6cm B:0.7cm	3
538	坏身	A7 G-14-4 床直		14		A:16.4cm B:0.5cm	1
539	坏身	A7 G-13-12 焚口上段 黄褐色層下		12.6		A:15.2cm B:0.6cm	3
540	坏身	A7 H-13-9 焚口 27層	G-13-12 26層	11.5		A:13.9cm B:0.6cm	4
541	坏身	A7 G-13-12 焚口上段 黒褐色層	G-13-11	12.1		A:14.2cm B:0.8cm	6
542	坏身	A7 G-13-12 焚口上段 黒褐色層		14		A:15.2cm B:0.2cm	2
543	坏身	A8 H-12-14 下層 黒粘土層たちわり		11.2	4.6	A:13.6cm B:0.6cm	2
544	坏身	A8 H-12-14 黒色砂層 たちわり		11.7	3.9	A:13.2cm B:0.7cm	2
545	坏身	A8 H-13-6 灰原上面 南北セクション		12	3.5	A:14.4cm B:0.6cm	3
546	坏身	A8 焚口 1層		11.3	4	A:13.8cm B:0.6cm	2
547	坏身	A8 H-14 床直層		11.7	4.4	A:14.2cm B:0.9cm	3
548	坏身	A8 H-13-2 南北セクション 最下層		11.6	4.3	A:13.8cm B:0.9cm	2
549	坏身	A8 H-13-5 焚口 灰層		12.3		A:14.3cm B:0.7cm	2
550	坏身	A8 H-13-5 灰原 黒褐色 上層		11.8		A:13.9cm B:0.8cm	2
551	坏身	A8 焼成室 床中				A:(14.3)cm B:1.1cm	1
552	坏身	A8 H-13-16 灰原(黒色層)		11.6		A:13.4cm B:0.7cm	3
553	坏身	A9 H-12-14 下層 黒色粘土層		11.5	4.2	A:13.6cm B:0.9cm	11
554	坏身	A9 H-12-14 下層 黒色粘土層		11.6	4	A:13.4cm B:0.5cm	3
555	坏身	A10 H-13-3 灰原上面 南北セクション		11.1	2.8	A:13.3cm B:0.4cm	1
556	坏身	A10 H-12-15 灰原上面		10.4	4.1	A:12.4cm B:0.7cm	2
557	坏身	A10 H-13-4 上層		11.6	4.1	A:13.6cm B:0.4cm	3
558	坏身	A10 G-14北西 床	壺熔着	12.3	4.3	A:13.9cm B:0.8cm	3
559	坏身	A10 H-12-15 灰原上面		14	3.8	A:16.5cm B:0.6cm	3
560	坏身	A10 H-13-3 灰原	倒置され上に(壺)脚が載る	12.2	3.6	A:14.1cm B:0.9cm	6
561	坏身	A10 H-13-3 南北セクション 下層		12.7	3.7	A:14.4cm B:0.9cm	2
562	坏身	A10 H-13-2 南北セクション 下層		10.7	4.5	A:12.3cm B:0.7cm	2
563	坏身	A10 H-13-5 焚口 29層	H-13-9 30層	11.5	3.9	A:13.8cm B:0.5cm	2
564	坏身	A10 G-13-12南 焚口 30層		11.2		A:13.4cm B:0.6cm	2
565	坏身	A10 G-13北西 焚口(北)トレンヂ 29・30層		11.4		A:13.3cm B:0.9cm	3
566	坏身	A10 I-13-9 灰原 黄褐色層		11.8		A:13.8cm B:0.9cm	3
567	坏身	A10 H-13-9 焚口 灰層		12.8			3
568	坏身	A10 H-13-3 灰原上面 南北セクション		13.8		A:11.4cm B:0.6cm	2
569	坏蓋	B1a G-15-3 窯尻溝 最下層		10	3.1	A:12.4cm B:0.6cm C:2.21cm D:0.5cm	4
570	坏蓋	B1a G-12-16 灰原上面		10.2	3.7	A:12.7cm B:0.6cm C:2cm D:0.7cm	4
571	坏蓋	B1a G-13-12北 焚口 11層		11.4		A:13.8cm B:0.3cm	2
572	坏蓋	B1a H-13-3 黒色層		10		A:12.2cm B:0.5cm	3
573	坏蓋	B1a H-13-7 灰原上面 南北セクション	I-13-9	9.4		A:11.9cm B:0.6cm	2
574	坏蓋	B1a G-13-12南 焚口 26上層		9.4		A:12.1cm B:0.2cm	1
575	坏蓋	B1b H-12-15 灰原上面		10.6	3.1	A:13.6cm B:-0.1cm C:2.1cm D:0.7cm	3
576	坏蓋	B1b H-13-2 灰原上面		10	3.4	A:12.6cm B:0.25cm C:2cm D:0.8cm	2
577	坏蓋	B1b 分調 7トレンヂ		9.6	2.8	A:12.2cm B:0.3cm C:2cm D:0.7cm	2
578	坏蓋	B1b G-14北西 床		8.8	2.9	A:11.4cm B:0.4cm C:2cm D:0.6cm	6
579	坏蓋	B1b 分調 7トレンヂ		10.3		A:12.7cm B:0.3cm	2
580	坏蓋	B1b H-13-7 灰原上層		9.4		A:11.8cm	5
581	坏蓋	B1b H-13-3 南北セクション 上層		10.8		A:13.3cm B:0cm	4
582	坏蓋	B1b H-13-5 焚口 黄褐色層		9.1		A:11.8cm B:0.2cm	2
583	坏蓋	B2 H-13-3 南北セクション 上層		9.5		A:13cm B:0.25cm	7
584	坏蓋	B2 H-13-2 灰原上面		10.5		A:13.2cm B:0.7cm	3
585	坏蓋	B2 H-13-3 南北セクション 下層		11		A:13.8cm B:0.7cm	2
586	坏蓋	B3 H-13-11 灰原 黒褐色・黄褐色層		10.4		A:12.8cm B:0.2cm	3
587	坏蓋	B3 H-13-2 南北セクション 上層		11.4	3.1	A:13.5cm B:0.5cm C:1.9cm D:0.6cm	5
588	坏蓋	B4 I H-12-15 下層 黒色粘土層		7.5	2.3	A:10.8cm B:0.2cm C:0.8cm D:0.7cm	3
589	坏蓋	B4 I H-13-3 下層 黒色粘土層		8	1.9	A:10.8cm B:0.5cm C:1.9cm D:0.5cm	4

表 35 1号窯須恵器(4)

号	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他 法 量	残
590	坏蓋	B4 I	H-13-2 南北セクション 最下層		7.3	1.8	A:10.2cm B:0.8cm C:2.1cm D:0.4cm	2
591	坏蓋	B4 I	H-13-2 南北セクション 下層		7.9		A:9.4cm B:0.55cm	3
592	坏蓋	B4 I	H-13-5 灰原 黒褐色層		7.5		A:10.1cm B:0.5cm	8
593	坏蓋	B4 I	H-13 盛土 たちわり		6.4		A:9.4cm B:0.45cm	2
594	坏蓋	B4 II	G-12-12 灰原上層		9		A:11.8cm B:0.3cm	3
595	坏蓋	B4 II	H-13北西下 盛土中 黄褐色層	H-13-2	8.3		A:11.2cm B:0.5cm	3
596	坏蓋	B4 II	H-13-2 南北セクション 下層		8.7		A:11.3cm B:0.45cm	3
597	坏蓋	B4 III	H-13-13 褐色層		10.1	3.2	A:13.2cm B:0.3cm C:2.2cm D:0.7cm	3
598	坏蓋	B4 III	H-12-14 下層 黒色粘土層		10.3	2.9	A:13.6cm B:0.25cm C:2cm D:0.6cm	1
599	坏蓋	B4 III	H-13 南北セクション		9.6		A:12.4cm B:0.5cm	3
600	坏蓋	B5	H-13 盛土下 黒色層		10.4	2.9	A:13.1cm B:0.55cm C:2cm D:0.6cm	2
601	坏蓋	B5	H-13-2 上層 南北セクション	G-13-3	10.2	2.4	A:13cm B:0.55cm C:2cm D:0.5cm	4
602	坏蓋	B5	H-13-14 褐色層		10.2	3	A:13cm B:0.5cm C:2.2cm D:0.6cm	4
603	坏蓋	B5	G-12-16 小ﾌﾞﾛｯｸ		10.4	2.9	A:12.7cm B:0.6cm	4
604	坏蓋	B6a	G-14北西 燃烧室 床直		9.4		A:12.4cm B:0.4cm C:1.8cm D:0.7cm	12
605	坏蓋	B6a	H-13-10 灰原 黒褐色 上層群中	G-13-11	8.8		A:11.8cm B:0.25cm	6
606	坏蓋	B6b	H-12-15 最下層		10.8	3.1	A:13.8cm B:0.35cm C:2.2cm D:0.6cm	6
607	坏蓋	B6b	H-13-13 褐色層	H-13-14	10.7		A:13.3cm B:0.75cm	9
608	坏蓋	B7	H-13 上層				C:4cm D:1.4cm	0
609	坏蓋	B7	H-13-6 灰原上面		20		A:23.4cm B:0.5cm	1
610	坏身	B1	H-13-10 灰原 東西セクション	H-13-3	10.2			1
611	坏身	B1	H-13-2 南北セクション 下層					2
612	坏身	B2	分調 7ﾄﾚﾝﾌ		11.5	5.3		2
613	坏身	B2	H-12-14 上層 黒色砂層		11.4	4		4
614	坏身	B2	G-13-12 焚口上段 黒褐色層		11.6	4.5		6
615	坏身	B2	H-13-1 上層		12			1
616	坏身	B3	G-13-12北 焚口 26層	H-12-14	11.4			3
617	坏身	B3	H-12-14 黒色粘土層		10.6	4.9		1
618	坏身	B3	H-13-13 褐色層		12.9	4.1		3
619	坏身	B3	H-13-3 南北セクション 上層					0
620	坏身	B4	H-13-3 黒色層		10.8			2
621	坏身	B5	G-12 上層		11.2			2
622	坏身	B5	H-12 上層					1
623	壺		H-12-13 上層 黒色層		10.1			1
624	壺		G-13-12 焚口 黄褐色層					1
625	鉢		H-13-14 灰原上面 南北東西セクション					3
626	鉢		H-13-3 灰原上面 南北セクション					0
627	高坏蓋	A2a	H-12-16 南北セクション 黒褐色層		14.8			2
628	高坏蓋	A2a	G-13-12 焚口上段 黒褐色層		15			1
629	高坏蓋	A2b	H-12-13 上層 黒色層	倒置され外面に焼台熔着	16.4	4.3		1
630	高坏蓋	A2b	H-12-15 下層 黒色粘土層		15.3			2
631	高坏蓋	A2b	H-13-3 灰原上面 南北セクション	壺熔着	13.8			0
632	高坏蓋	A2b	H-12-15 灰原上面		14.7			2
633	高坏蓋	A2b	G-13-12 焚口上段 黄褐色層	倒置され焼台熔着	16.7			1
634	高坏蓋	A2b	H-12 上層	倒置され焼台熔着	15.4			2
635	高坏蓋	A2b	H-12 上層	倒置され焼台(坏A身)熔着				0
636	高坏蓋	A2b	H-13-2 灰原上面	倒置され焼台(坏A身・蓋)熔着				0
637	高坏蓋	A1	G-13-12南 焚口 26層西					2
638	高坏蓋	A3	G-13-12南 焚口 26上層	倒置され焼台(坏A蓋か)熔着	14	5.5		0
639	高坏蓋	A3	H-13 上層	倒置され焼台(坏A蓋か)熔着	15	4.7		2
640	高坏蓋	A3	H-13-4 上層	倒置され焼台(坏A蓋か)熔着				0
641	高坏蓋	A3	表土層	倒置され焼台(坏A蓋か)熔着	16.2	4.3		3
642	高坏蓋	A3	H-13 上層	倒置され焼台(坏A蓋か)熔着				0
643	高坏蓋	A3	分調 7ﾄﾚﾝﾌ	倒置され焼台(坏A身)熔着				9
644	高坏蓋	A3	H-13-3 灰原 黒色層	倒置され焼台(坏A蓋)熔着				0
645	高坏蓋	A3	H-13-9 焚口 27b層	倒置され焼台(坏A)熔着	15.4	1		0

表36 1号窯須恵器(5)

号	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
646	高坏 蓋	A3	H-13-2 南北セクション 下層	焼台 (坏A蓋・身) 鈕痕あり				0
647	高坏 蓋	A3	H-13-2 灰原上面	焼台 (坏A蓋・身) 鈕痕あり				0
648	高坏	A1	表土層		14.8			4
649	高坏	A1	H-13-2 灰原上面	ゆがむ				5
650	高坏	A1	H-13-2 南北セクション 上層	ゆがむ				2
651	高坏	A1	G-13-12 焚口上段 黒褐色層				F:14.2cm	5
652	高坏	A1	H-12-14 黒色砂層 上層				F:13cm	3
653	高坏	A1	H-12 上層				F:14.5cm	2
654	高坏	A1	H-13-3 上層 黒色層	H-13-15			F:14.4cm	5
655	高坏	A2	G-13-16 焚口 下層				F:16.8cm	2
656	高坏	A2	G-13-12 焚口上段 黒褐色層				F:17cm	2
657	高坏	A2	G-13-16 焚口上段 黄褐色層	G-13-12			F:17.5cm	2
658	高坏	A2	H-12-15 下層 黒色粘土層				F:15.8cm	3
659	高坏	A3	H-12-15	ゆがむ				3
660	高坏	B1	H-13-2 南北セクション 最下層				F:13cm	3
661	高坏	B1	H-12-9 灰原上面				F:11.4cm	3
662	高坏	B2	H-13-3 灰原 黒色層	2次被熱 /H-12-13 小ブロツク			F:11cm	11
663	高坏	B3	G-12-16 灰原上面	2次被熱			F:10.7cm	2
664	高坏	B	H-13-9 焚口 26層					0
665	高坏	C	G-12-16 灰原上面	返り蓋載る				2
666	高坏	C1a	H-12-13 上層 黒色層	2次被熱 /H-13-3	13.3	4.3		4
667	高坏	C1a	H-13-3 灰原	2次被熱			F:11.7cm	10
668	高坏	C1a	G-13-8 焚口 灰層				F:11.8cm	4
669	高坏	C1a	G-14-8 最下層 窯体内一括				F:12.7cm	6
670	高坏	C1b	H-13-12 盛土or黒色層	内面板状具押さえあり	12.7	4.1		1
671	高坏	C1b	焚口 上段	内面板状具押さえあり /G-14-12	13.4	4.1		3
672	高坏	C1b	H-12-14 黒色砂層 上層		14.1	4.1		2
673	高坏	C1b	G-12-11 灰原上層					2
674	高坏	C2	H-13-3 下層 黒色粘土層		12.6			3
675	高坏	C2	H-12-14 下層 黒色粘土層	2次被熱 /G-12-12			F:11.9cm	4
676	高坏	C2	G-14北西 床				F:12.8cm	6
677	高坏	C3a	H-13-3 灰原上面				F:11.7cm	3
678	高坏	C3a	G-14北西 床				F:11.6cm	8
679	高坏	C3b	H-13-10 灰原畔中 黒褐色層下層	2次被熱			F:13.2cm	3
680	高坏	C4a	H-13-2 盛土上面	2次被熱			F:10.7cm	3
681	高坏	C4a	H-13-3 下層 黒色粘土層	2次被熱			F:9.9cm	3
682	高坏	C4b	G-13-4 灰原上層				F:11.6cm	2
683	高坏	C5a	G-12-16 灰原上面	内面板状具押さえあり	12.1	5.4		5
684	高坏	C5a	G-12-16 小ブロツク		11.8			1
685	高坏	C5a	G-13-4 上層				F:11.6cm	3
686	高坏	C5a	G-12 上層				F:10.8cm	3
687	高坏	C5a	G-12-16 小ブロツク				F:11.2cm	2
688	高坏	C5b	I-6	内面板状具押さえあり	10.8			1
689	高坏	C5b	H-12-15 最下層				F:14.7cm	3
690	高坏	D1a	H-13-3 下層 黒色粘土層	内面板状具押さえあり	13.2			1
691	高坏	D1a	G-13-12 焚口 下層		14.6			1
692	高坏	D1a	H-13北西下 盛土中 黄褐色層					0
693	高坏	D1a	H-13-3 盛土上面				F:13cm	1
694	高坏	D1b	G-13-12南 焚口 30層		15.7			1
695	高坏	D1b	H-13-7 灰原上面	H-13-8/I-14-7	14.4	14.6	F:12.6cm	1
696	高坏	D2	H-13-2 灰原上面		14.8			3
697	高坏	D2	H-12-15 上層					0
698	高坏	D3	H-12-14 黒色砂層 上層	内面板状具押さえあり	11.5			4
699	高坏	D3	H-12-14 灰原上面		12			2
700	高坏	D3	H-13-9 焚口 27b層		12.6			1
701	高坏	D3	H-13-15 灰原 セクション(3)		11.5			1
702	高坏	D3	H-13-2 灰原上面		12	4.1		4
703	高坏	D3	H-12-14 黒色粘土層					0
704	高坏	D4	H-12-13 灰原上面	低脚				0
705	高坏	D4	H-12 上層	低脚			F:11.7cm 脚高:4.6cm	4
706	高坏	E	H-13-7 灰原上層	透かしなし				2
707	高坏	E	H-13-2 南北セクション 最下層	透かしなし				0
708	甕		H-13 上層	壁焙着	12.8			2
709	甕		H-13-9 焚口 11層	壁・壺焙着 /H-12-13	12.6			2

表37 1号窯須恵器(6)

器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
710	甕	H-13-16 灰原(黒色層)		14.2			2
711	甕	H-12-10 灰原上面	頸部中位に縦位刻み巡る	13.6			2
712	甕	G-12-16 灰原上面		13.2			3
713	甕	G-13-11 焚口上段 褐色層					1
714	甕	G-12-10 灰原上層				E:9cm	0
715	甕	H-13-11 灰原 黒褐色・黄褐色層				E:11.2cm	0
716	甕	G-13-12 焚口上段	底部:不定方向ケズリ				2
717	甕	G-13-8 灰原上面	底部:不定方向ケズリ			E:8.9cm	0
718	甕	分調 7トレンヂ	瓶に載せ焼成			E:9.7cm	0
719	甕	H-13-2 南北トクシヨ 上層	底部:不定方向ケズリ			F:9.1 E:9.1cm 脚残:4/12	0
720	瓶	H-13-5 焚口 二層	ゆがむ	5			2
721	瓶	G-13-4 灰原上面					2
722	長頸瓶	H-12-14 灰原上面		9			4
723	長頸瓶	G-12-12 灰原上層					3
724	長頸瓶	H-12-15 灰原上面					0
725	長頸瓶	G-13-12北 焚口		7.6			4
726	長頸瓶	G-13-4 小ブ ロツク	H-13-2 最下層				2
727	長頸瓶	H-13-2 盛土上	頸部ヘラ刻みあり	8.8			2
728	長頸瓶	G-13-12 焚口 J層		7.7			2
729	長頸瓶	G-13 焚口 床		9.6			3
730	長頸瓶	H-13北西上 盛土中(2) 赤褐色層		8			3
731	長頸瓶	H-13-5 上層	坏A身載る /H-13-3			E:15.2cm	0
732	長頸瓶	H-12 上層	ゆがむ /H-13-3			E:(16)cm	0
733	長頸瓶	H-13-4 南北トクシヨ 上層	底部:不定方向ケズリ			E:13.2cm	0
734	提瓶	H-13北西下 盛土中 黄褐色層		7.8			7
735	提瓶	H-13-3 灰原上面	環状把手2ケ	7		E:17.2cm	5
736	提瓶	G-13-12 焚口 30層	環状把手2ケ			E:16.2cm	0
737	提瓶	G-13 上層	* 矽状貼付2ケ /G-13-6・7			E:17.6cm	0
738	提瓶	H-13-11 灰原 黒褐色・黄褐色層	* 矽状貼付2ケ				0
739	提瓶	H-12-15 最下層	ゆがむ	7.3			4
740	提瓶	H-13-8 灰原上					0
741	提瓶	G-12-10 灰原上層					0
742	提瓶	H-13-2 南北トクシヨ 下層					0
743	平瓶	J-14北東		8.6			4
744	平瓶	H-13-3 下層 黒色粘土層		7.8			5
745	平瓶	G-13-12 焚口上段		7.7			3
746	平瓶	H-13 焚口ト層					2
747	平瓶	H-13-2 南北トクシヨ 最下層	小型品	5.4			11
748	平瓶	H-13-2 南北トクシヨ 上層	逆位の身に載せ焼成				0
749	平瓶	G-13-9	* 矽状貼付8ケ /G-13-6	8.2			2
750	横瓶	a H-13 北東 盛土上		11.1			2
751	横瓶	a H-12-15 下層 黒色粘土層		13.5			0
752	横瓶	a H-13-10 灰原 トクシヨ(7)					2
753	横瓶	a G-13北西 焚口 東西北トレンヂ		15			10
754	横瓶	a H-13-2 盛土or黒色層		14			9
755	横瓶	a H-13-3 灰原 黒色層		15			3
756	横瓶	a H-13-7 灰原		16.8			1
757	横瓶	a H-13-5 上層		14.2			3
758	横瓶	a H-13-3 黒色層					2
759	横瓶	b G-13-7.10 灰原上層		15			10
760	横瓶	b H-13-2 灰原上面		13.2			1
761	横瓶	b I-11		15.6			1
762	横瓶	b H-13-2 下層	横置され焼成 /H-13-4	14.8		E:(23)cm	12
763	横瓶	b H-13-14 灰原上面		14			9
764	横瓶	b G-12-12 灰原上層		15.5			5
765	横瓶	b H-13-4 灰原上面 南北トクシヨ		14.9			1
766	横瓶	b H-13-3 南北トクシヨ 上層		15.1			1
767	横瓶	b G-12-12 灰原上層		15.4			2
768	横瓶	c H-13-7 灰原上面 南北トクシヨ		13.8			1
769	横瓶	c H-12-13 下層		16.6			2
770	横瓶	c H-13-11 1号盛土境 黒色層		15			1
771	横瓶胴部	H-12-14 灰原 下層(群中)				E:22cm	0
772	横瓶	c 表土層		15		E:(24.6)cm	6

表38 1号窯須恵器(7)



料	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
773	鉢	A	H-12-14 上層 黒色砂層		18.7			1
774	鉢	B	H-13-6 上層				F:9.2cm	4
775	鉢	B	H-12-15 下層 黒色粘土層				F:10.5cm	4
776	短頸壺		H-13-2 南北tクシヨ 最下層		8.9			3
777	短頸壺		H-13-5 焚口 上層					0
778	短頸壺		G-13-12 焚口 J層	口唇部剝離	11.2			3
779	短頸壺		H-13-2 盛土上面	口唇部剝離 /H-13-3 盛土上	11.3			3
780	短頸壺		H-13-3 下層 黒色粘土層	H-12-15/H-13-9	10.6			6
781	無頸壺	1	H-13-3 灰原上面 南北tクシヨ	ゆがむ 壁付着	13.4			3
782	無頸壺	2	H-12-14 下層 黒色粘土層	ゆがむ /H-13-2	14.6			4
783	壺	A2b1	H-12-13	G-12-16 小アロク	12.3			2
784	壺	A2b1	H-13-2 盛土直上		12.4			1
785	壺	A2b1	G-13-12南 焚口 11層		12.2			2
786	壺	A2b1	H-13-4 上層	G-13-8	12.3			3
787	壺	A2b1	G-13-11 焚口上段 褐色層	H-13-10	14.4			5
788	壺	A2b1	H-13 盛土 たちわり		11.2			5
789	壺	A2b1	H-13-4 灰原上面 南北tクシヨ		12.4			3
790	壺	A2b1	H-13-3 南北tクシヨ 上層	H-12-14	13.8			6
791	壺	A2b1	G-13-14 上層		15.4			2
792	壺	A2b1	G-12-14 灰原上層		13.5			1
793	壺	A2b2	H-13-5 上層 窯体 灰層		13.4			3
794	壺	A2b2	G-13 焚口 南北tク 黄褐色層		14.2			3
795	壺	A2b2	H-13-14 褐色層		13.6			2
796	壺	A2b2	G-13-8 灰原上層					6
797	壺	A2b2	H-13-2 南北tクシヨ 上層	H-13-10	13.2			3
798	壺	A2b2	H-13-5 焚口 29層		12.6			2
799	壺	A2b2	H-13-7 盛土上		14.6			4
800	壺	A2b3	H-13-2 南北tクシヨ 最下層		13.8			3
801	壺	A2b4	H-13-3 灰原上面 南北tクシヨ		12.6			1
802	壺	A2b4	G-13 表土層		12.4			1
803	壺	A2b4	H-12-14 灰原 上層(群中)		14.1			2
804	壺	A3b	I-13-13 小アロク 黄褐色層		11.4			2
805	壺	A3b	H-13-11 灰原		12.6			3
806	壺	B3a	G-12-10 上層		16.1			6
807	壺	B3a	G-13-4 灰原 黒褐色 下層		21.8			2
808	壺	B3c	G-12-16 灰原上面		16			1
809	壺 底部		G-13-10.14 灰原上層					0
810	壺 底部		H-13北西上 盛土中(2) 赤褐色層	底部:不定方向ケズリ				0
811	壺 底部		H-12-13 上層 黒色砂層	底部:不定方向ケズリ				0
812	壺 胴部		G-12-11 南北トレンヂ	底部:カキ目				0
813	壺 底部		H-12-13 上層 黒色層	底部:叩き後カキ目				0
814	壺 底部		H-12-15 灰原上面	底部:カキ目				0
815	壺 底部		G-12-11 南北トレンヂ	底部:カキ目 正位の坏A身に載る				0
816	壺 底部		H-13-3 南北tクシヨ 上層					0
817	壺 底部		G-13 東西tクシヨ 上層					0
818	壺 底部		G-13-11 褐色層	底部に叩き痕残る 杯A身が融着				0
819	壺 脚部		G-12-15 灰原上層				F:8.8cm	4
820	壺 脚部		G-12-16 灰原上層					0
821	壺 脚部		H-12-14 上層 黒色砂層	H-14南東			F:13.2cm	3
822	壺 脚部		表土層				F:13.6cm	2
823	甃	A2b	H-13-14 黒褐色層		13.7			3
824	甃	A2b	G-13-12 焚口上段					1
825	甃	A2b	G-13-2 灰原上層	環状把手4ヶ G-13-3・6・7・10・11・14	27.6			7
826	甃	A2b	H-13-2 上層	環状把手2ヶ以上 /H-13-3・6・7	25.2			7
827	甃	B2b1	H-13-9 焚口 たちわり		15			3
828	甃	B2b1	H-13-2 南北tクシヨ 下層		15.1			2
829	甃	B2b1	H-12-15 最下層	G-14-8 窯体内	17.3			6
830	甃	B2b2	H-13-2 南北tクシヨ 下層		21.8			1
831	甃	B2b2	I-11		21.2			1
832	甃	B2b2	G-14北西 床		22.6			2
833	甃	B2b2	H-12-15 下層 黒色粘土層					2
834	甃	B2b2	H-12-10 上層	H-13-3	17.2			2
835	甃	B2b2	H-12-14 東西tクシヨ 黒褐色層					1

表39 1号窯須恵器(8)

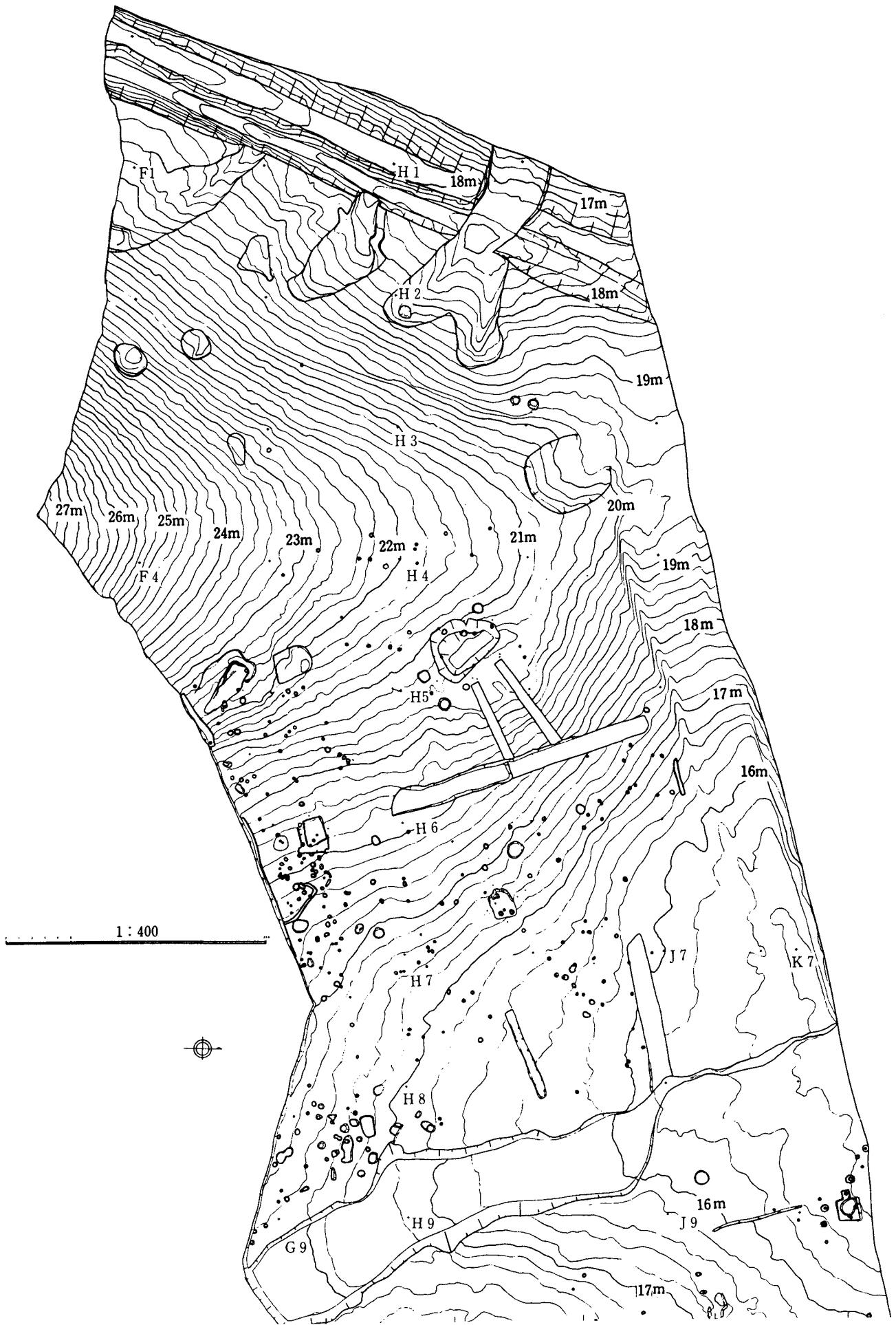
番号	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
836	甕	B2b3	G-12-16 上層	H-13-2・3・7	16.8			6
837	甕	B2b3	G-13 焚口		15			1
838	甕	B2b3	H-13-7 灰原上層		20			2
839	甕	B2b3	G-13-1 灰原上層	G-13-3・7・10・14	21			5
840	甕	B2b4	G-12-15 灰原上層	G-13-7・10	25.4			6
841	甕	B2b4	G-13-6		21.2			3
842	甕	B2b4	G-13-3 上層	G-13-7・10・14	21.2			4
843	甕	B2b5	H-13-2 灰原上面					4
844	甕	B2b5	H-13-3 南北トレンチ 上層	H-13-10	25.4			4
845	甕	B2b5	G-14-8 最下層(床直) 窯体内	G-13-16	28.2			6
846	甕	C	H-13北西下 盛土中 黄褐色層		14.8			3
847	甕	C	H-13-4 南北トレンチ 上層	G-12-16	18.8			2
848	甕 底部		G-13-4 灰原 小ブロック					0
849	甕 底部		H-13-4 灰原上面 南北トレンチ	逆位の坏A蓋に載る				0
850	甕 底部		G-12-11 南北トレンチ					0
851	甕 底部		表土層	底部:不定方向ケズリ				0
852	蓋		H-13-12 盛土上面	天井部内面に円形重ね痕あり	10.2	4		10
853	蓋		表土層	口唇部剝離				2
854	陶錘		H-12-14 黒色砂層 上層	完存			長:6.8cm 幅:2.2cm 重:31.4g	
855	不明		G-13-11 焚口上段 褐色層					0
856	床烧台		H-13-2 南北トレンチ 上層	坏A身・蓋各1				
857	床烧台		H-13-2 南北トレンチ 下層	坏A身1・蓋2 床粘土接合痕あり				
858	床烧台		H-13-3 南北トレンチ 最下層	坏A蓋1				
859	床烧台		H-13-3 南北トレンチ 上層	坏A身・蓋に壺載る				
860	床烧台		H-13-3 南北トレンチ 上層	坏A身1・蓋3 床粘土接合痕あり				

表40 1号窯須恵器(9)

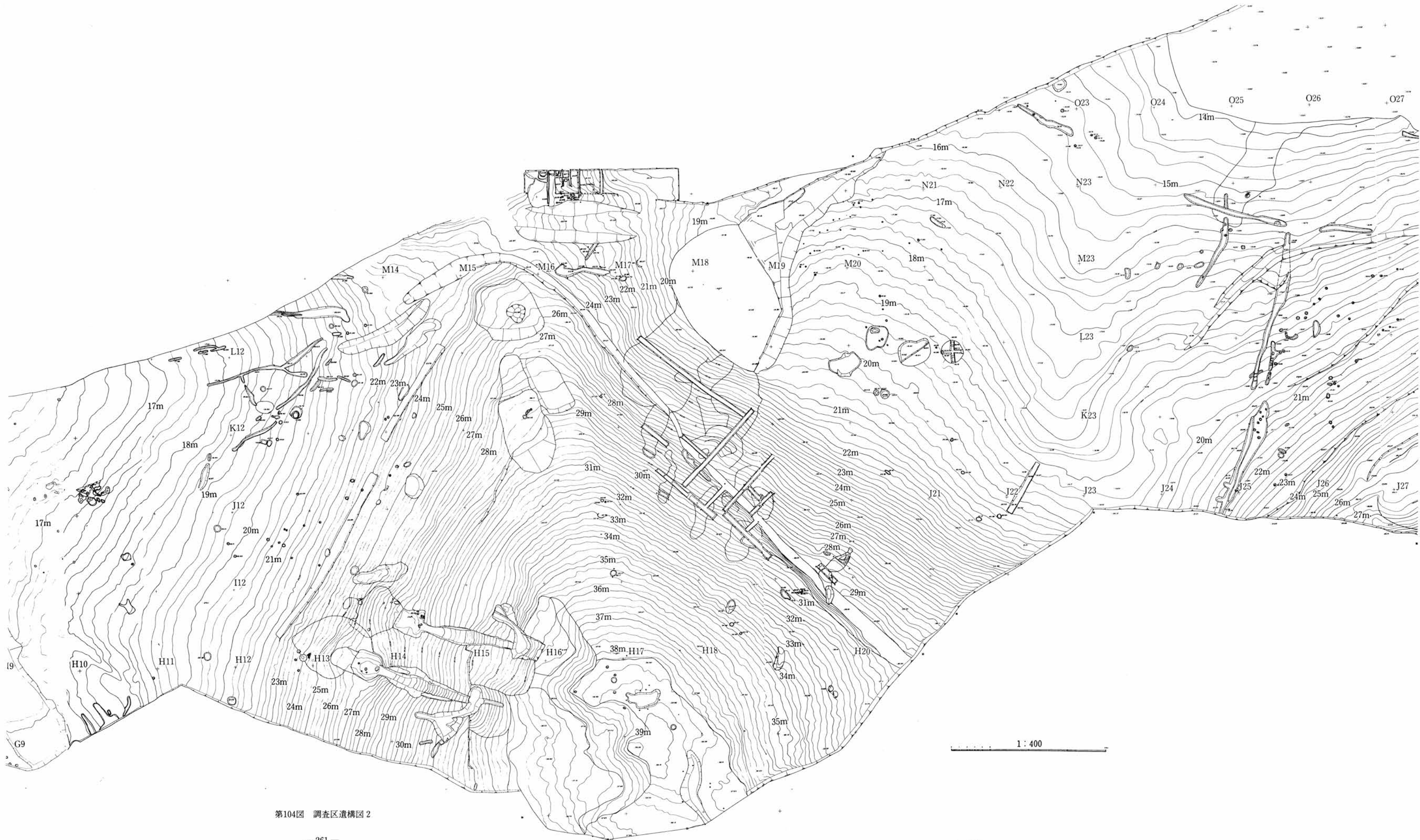
番号	器種	分類	出土地点	観察 / 接合関係	口径	器高	その他法量	残
861	提瓶		J-8	環状把手2ヶ				0
862	提瓶		F-15 流土	環状把手2ヶ				0
863	提瓶		H-12 上層	おん状貼付2ヶ				0
864	提瓶		表土層					0
865	提瓶		分調 7トレンチ	環状把手2ヶ	9.3			1
866	提瓶		I-12-14					0
867	提瓶		分調 7トレンチ	提瓶体部				0
868	平瓶		分調 7トレンチ	環状把手1ヶ				0
869	横瓶		分調 7トレンチ		13.1			3
870	鉢		灰原上層	ゆがむ				1
871	壺		分調 7トレンチ	外面ヘラ描きあり				0
872	壺		I-11		13.8			1
873	壺		G-12 上層		11.2			2
874	壺		H-13-15 灰原 黒褐色層		10.6			1
875	壺		J-14		15.4			1
876	壺		分調 7トレンチ		13			2
877	壺		表土層	逆位の坏A身に載る 底部カキ目				0
878	壺		分調 7トレンチ	逆位の坏A蓋に載る 底部カキ目				5
879	甕	A2b	表土層		22.8			1
880	甕	B2b	H-13-7 灰原境		21.6			2
881	甕	B2b	H-13-10 灰原 トレンチ(7)		23.4			1
882	甕	B2b	分調 7トレンチ		20.4			2
883	甕	B2b	表土層		25.4			2
884	甕	B2b	分調 7トレンチ	長頸				2
885	甕 胴部		G-13-10 灰原上層					0
886	陶錘		分調 7トレンチ	完存 片端不定ケズリ			長:6cm 幅:2.1cm 重:24.9g	

表41 所属窯不明須恵器

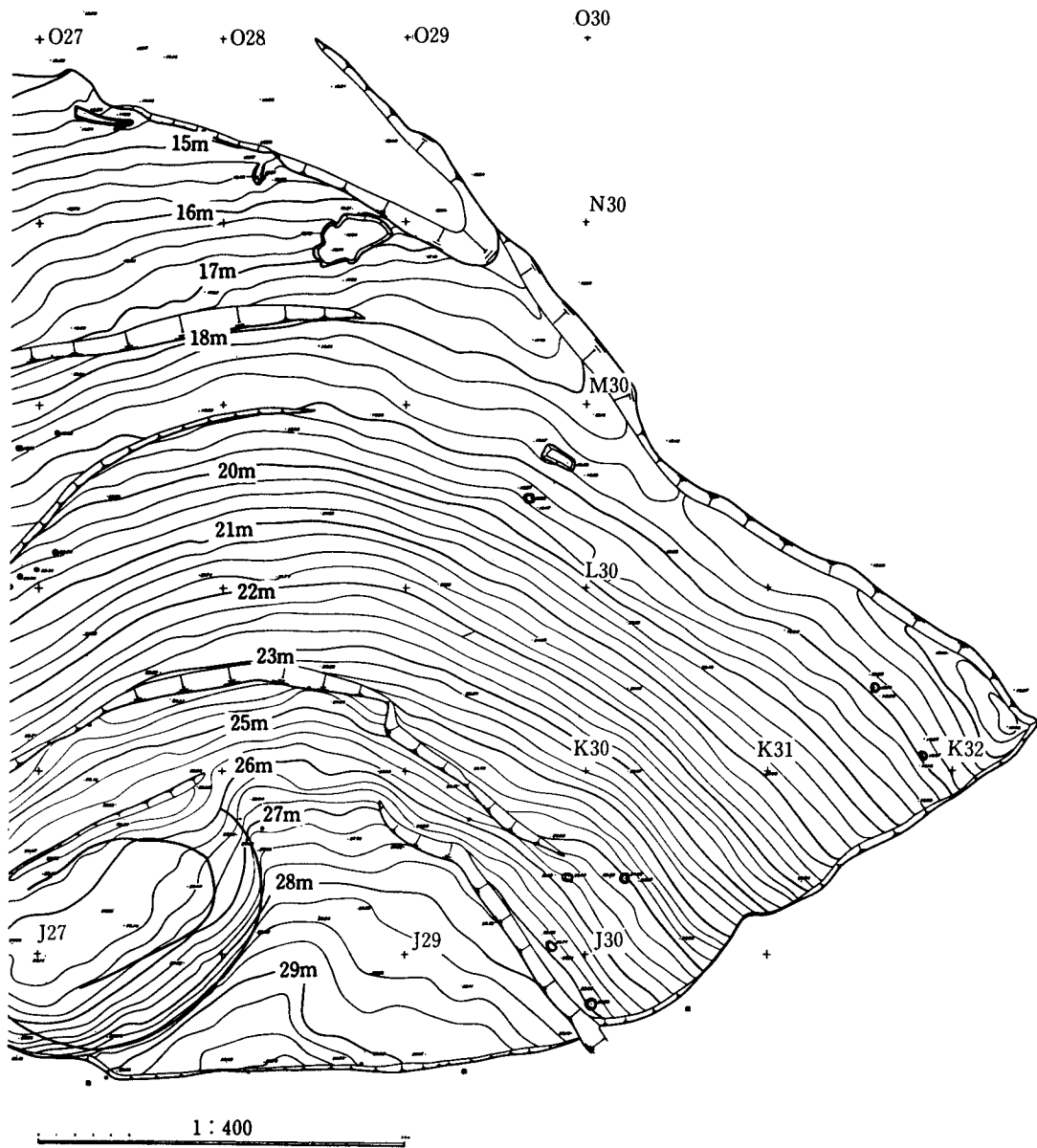
# 圖 版



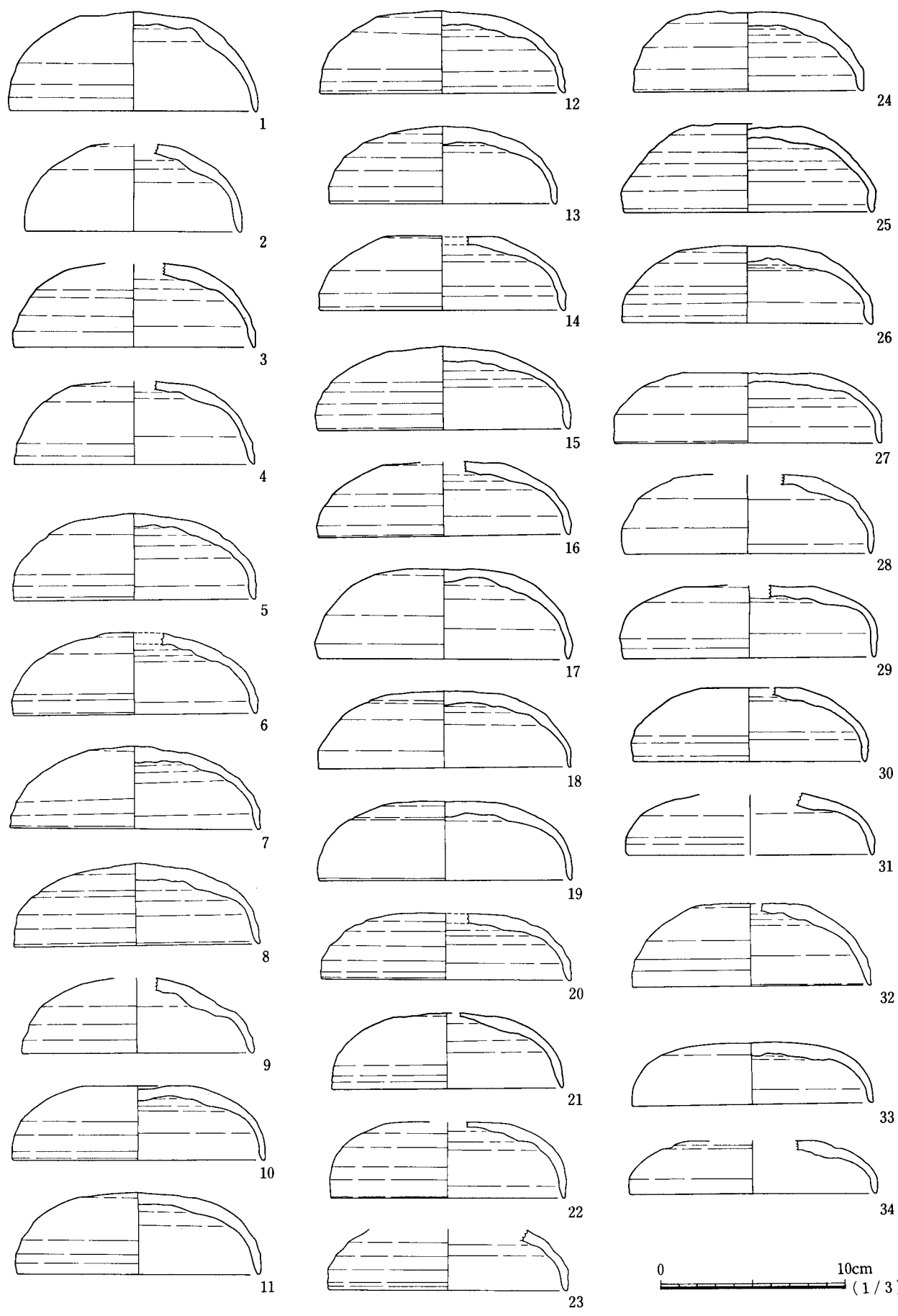
第103図 調査区遺構図 1



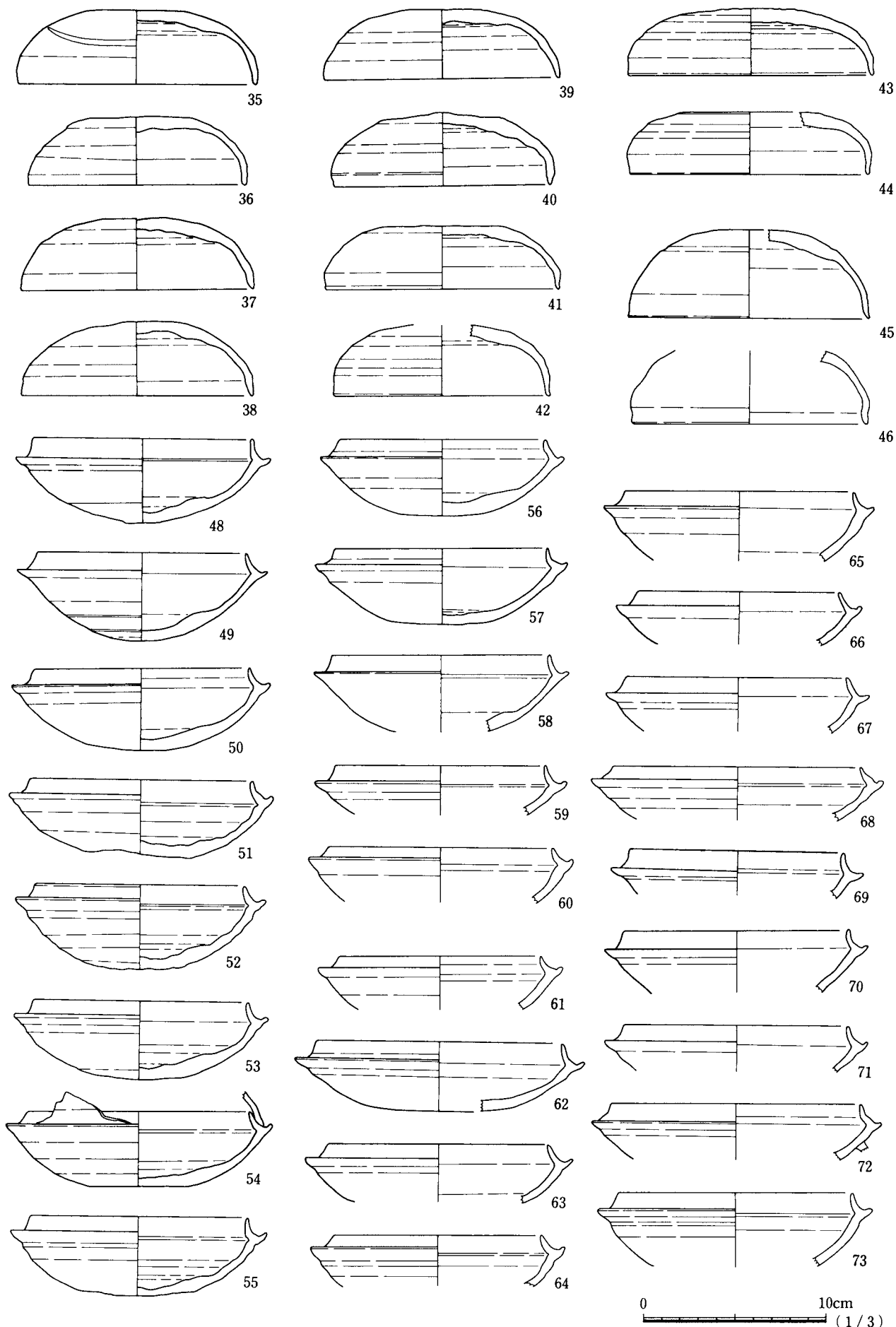
第104図 調査区遺構図2



第105図 調査区遺構図 3

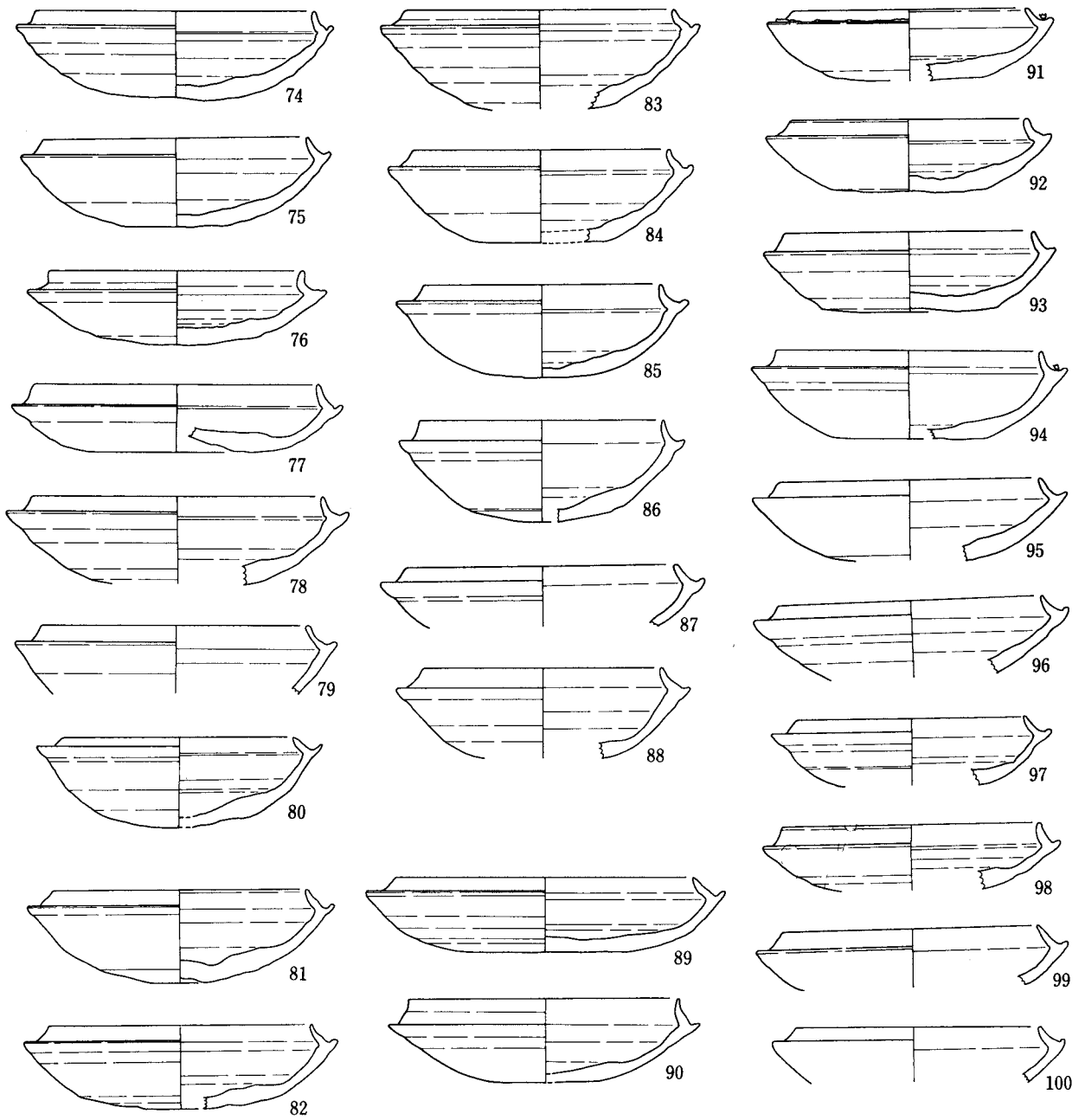


第106图 2号窯出土土器 坏A蓋(1)

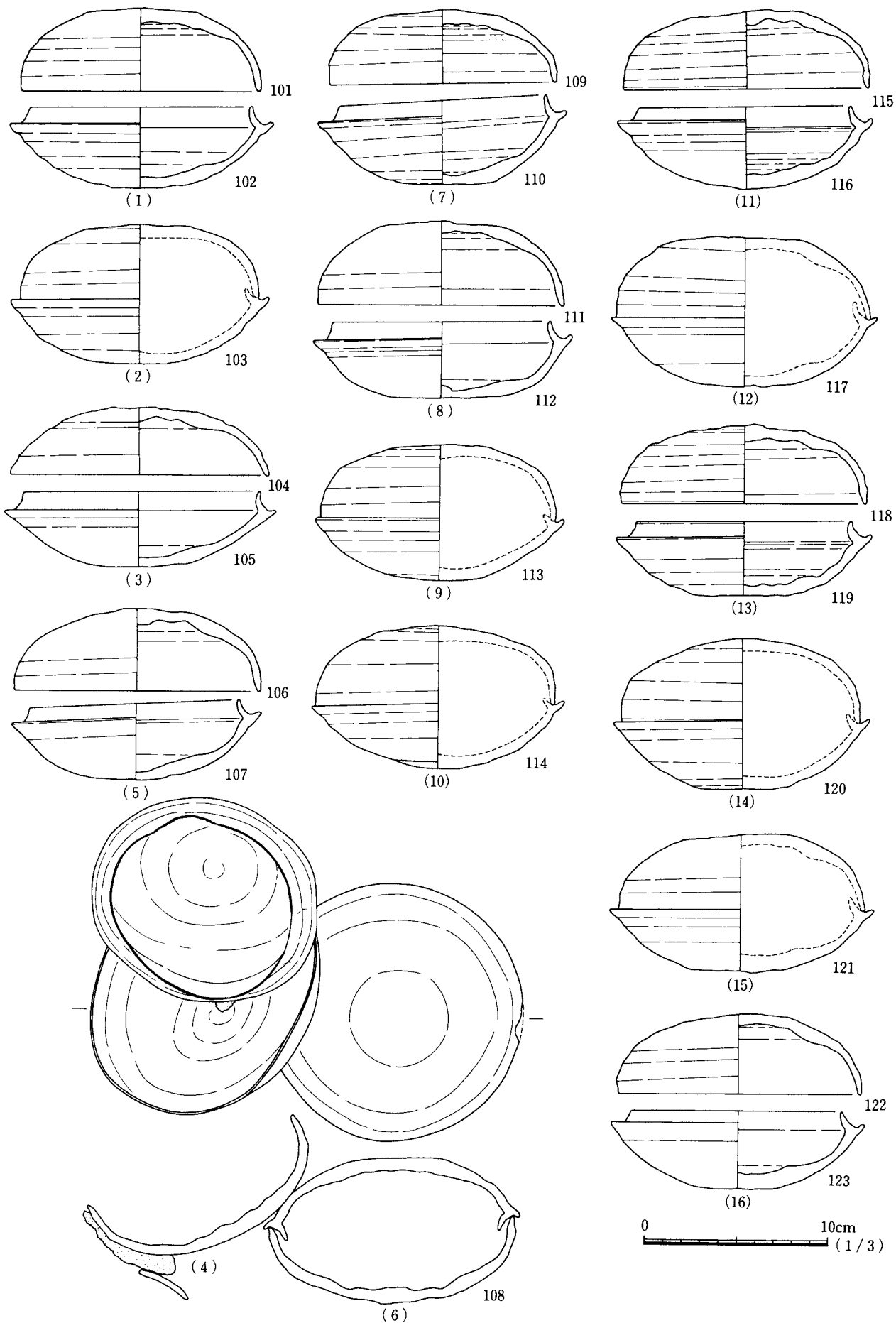


第107图 2号窟出土土器 坏A盖(2)、坏A身(1)

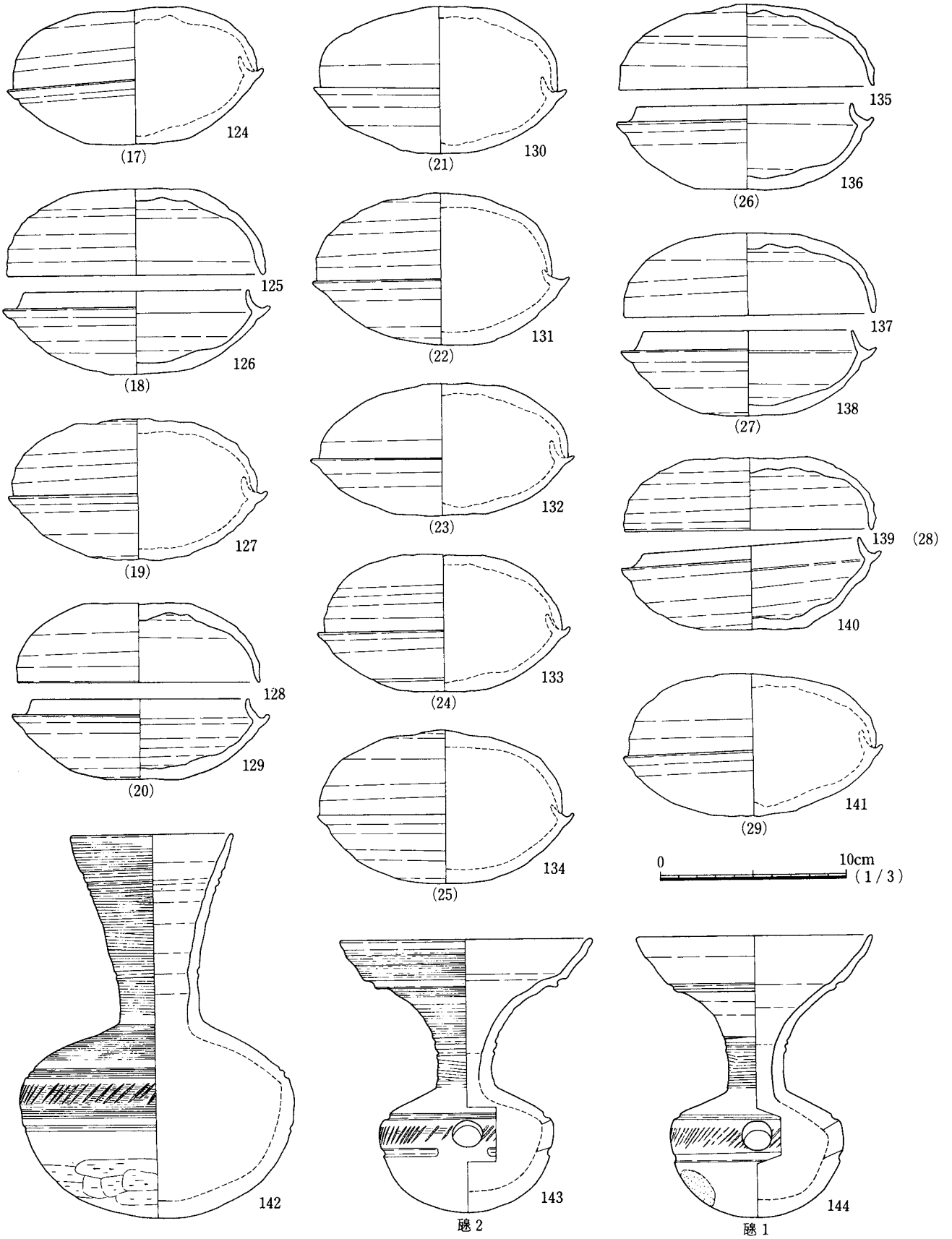




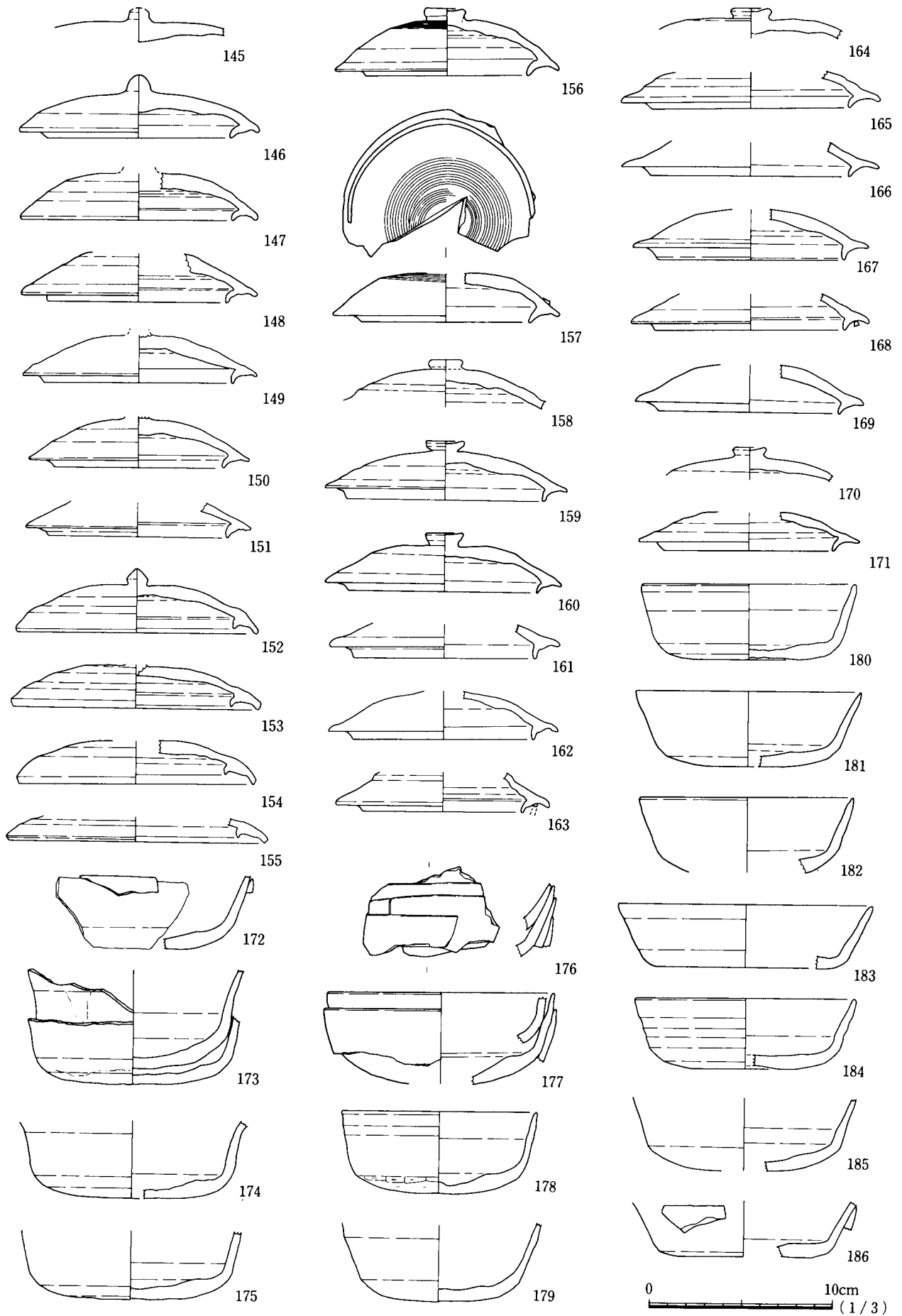
第108图 2号窑出土土器 坏A身(2)



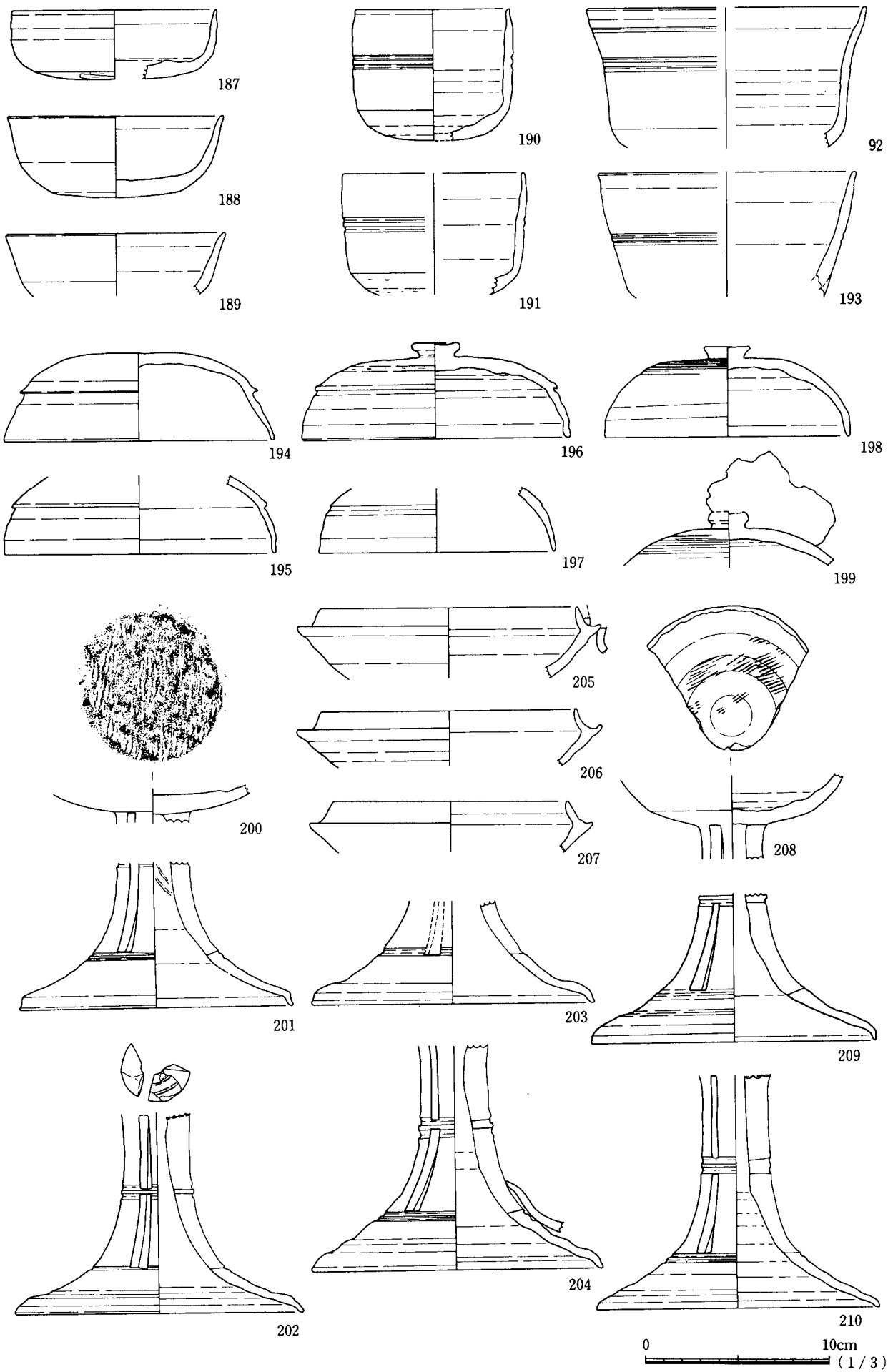
第109図 2号窯体内一括検出土器(1) (カッコ内は取り上げ番号)



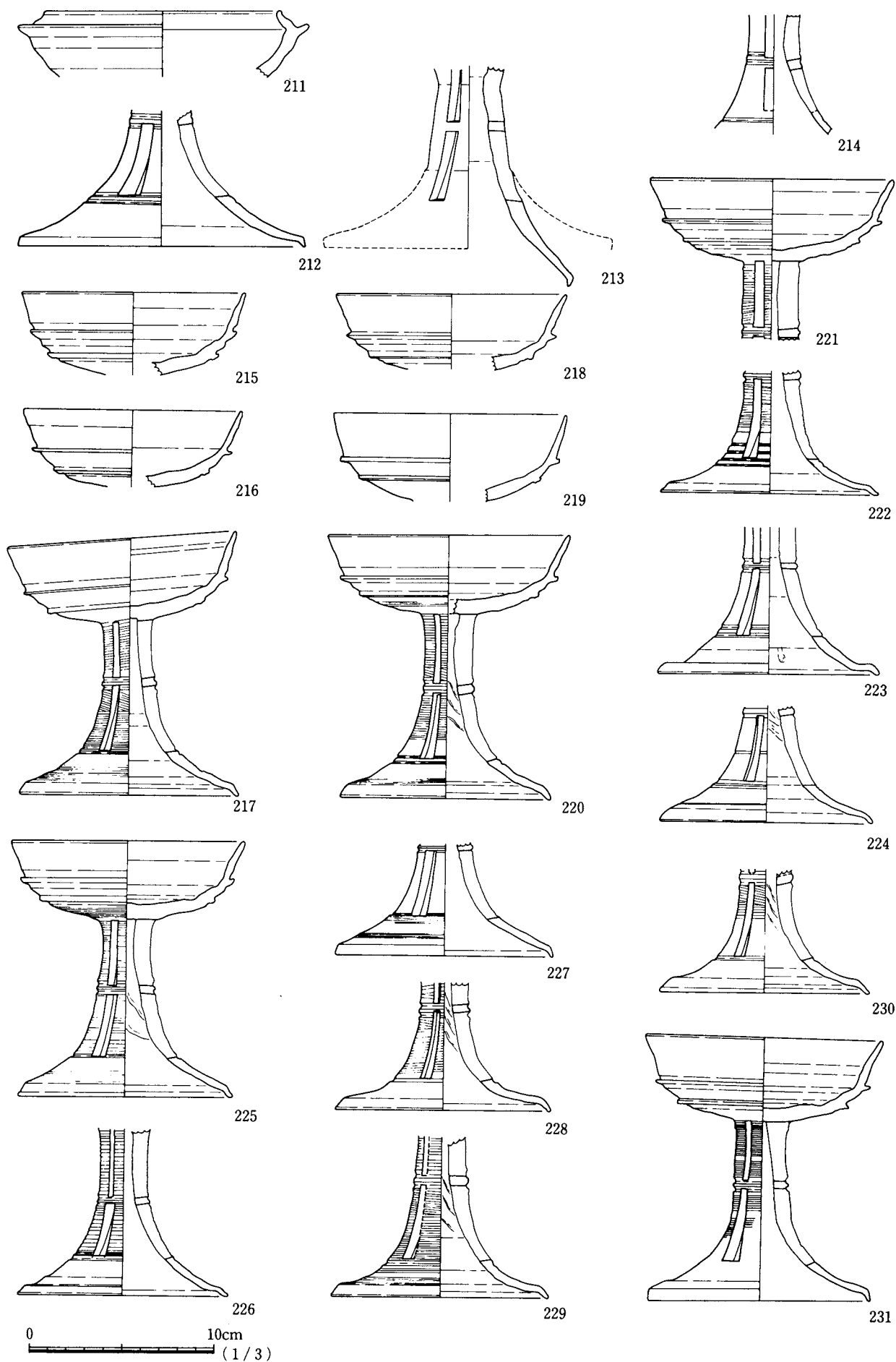
第110図 2号窯体内一括検出土器(2) (カッコ内は取り上げ番号)



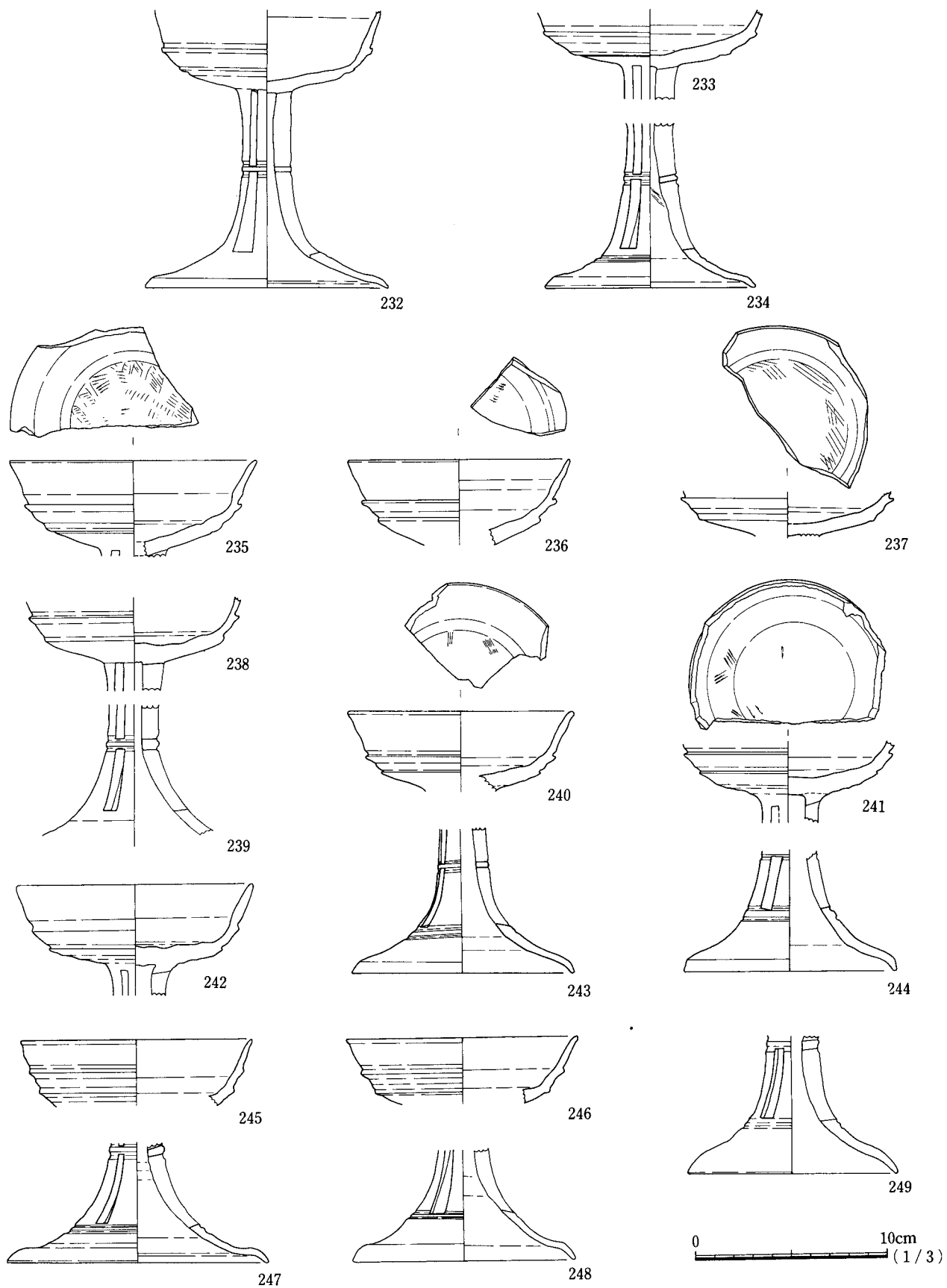
第111图 2号窑出土土器 坏B盖·身(1)



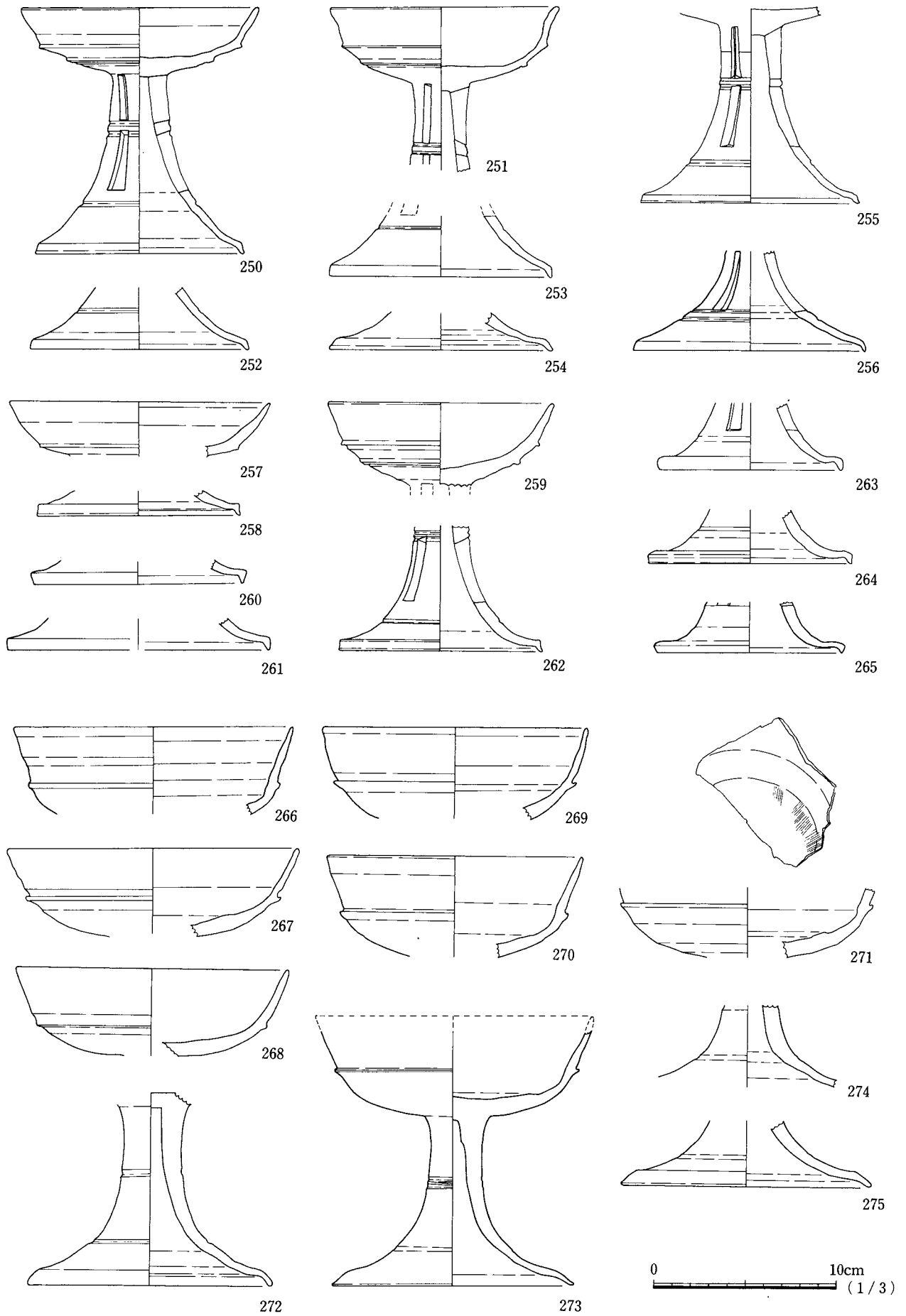
第112图 2号窑出土土器 坏B身(2)、碗、鉢、高坏(1)



第113图 2号窑出土土器 高环(2)

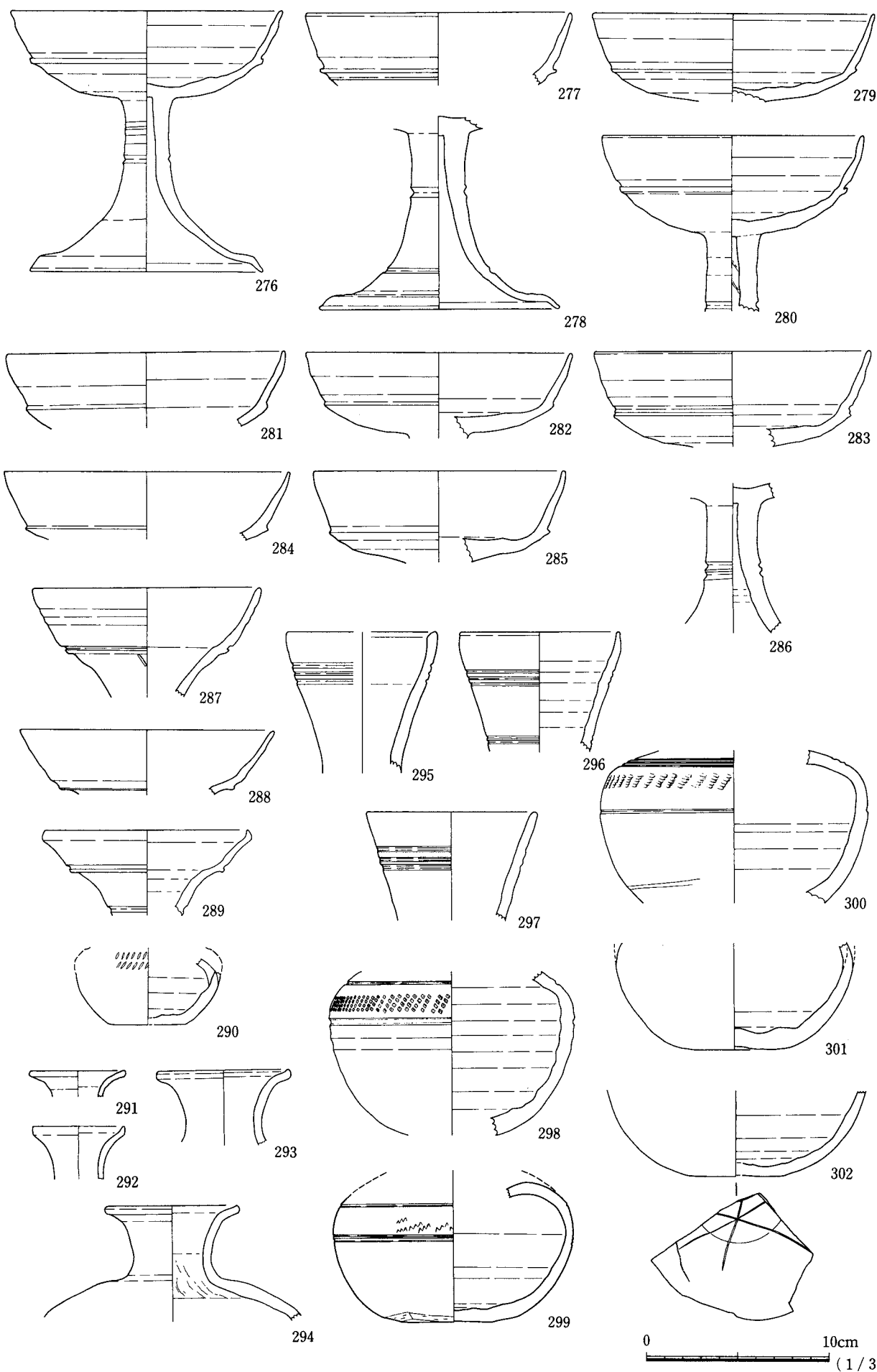


第114图 2号窖出土土器 高环(3)

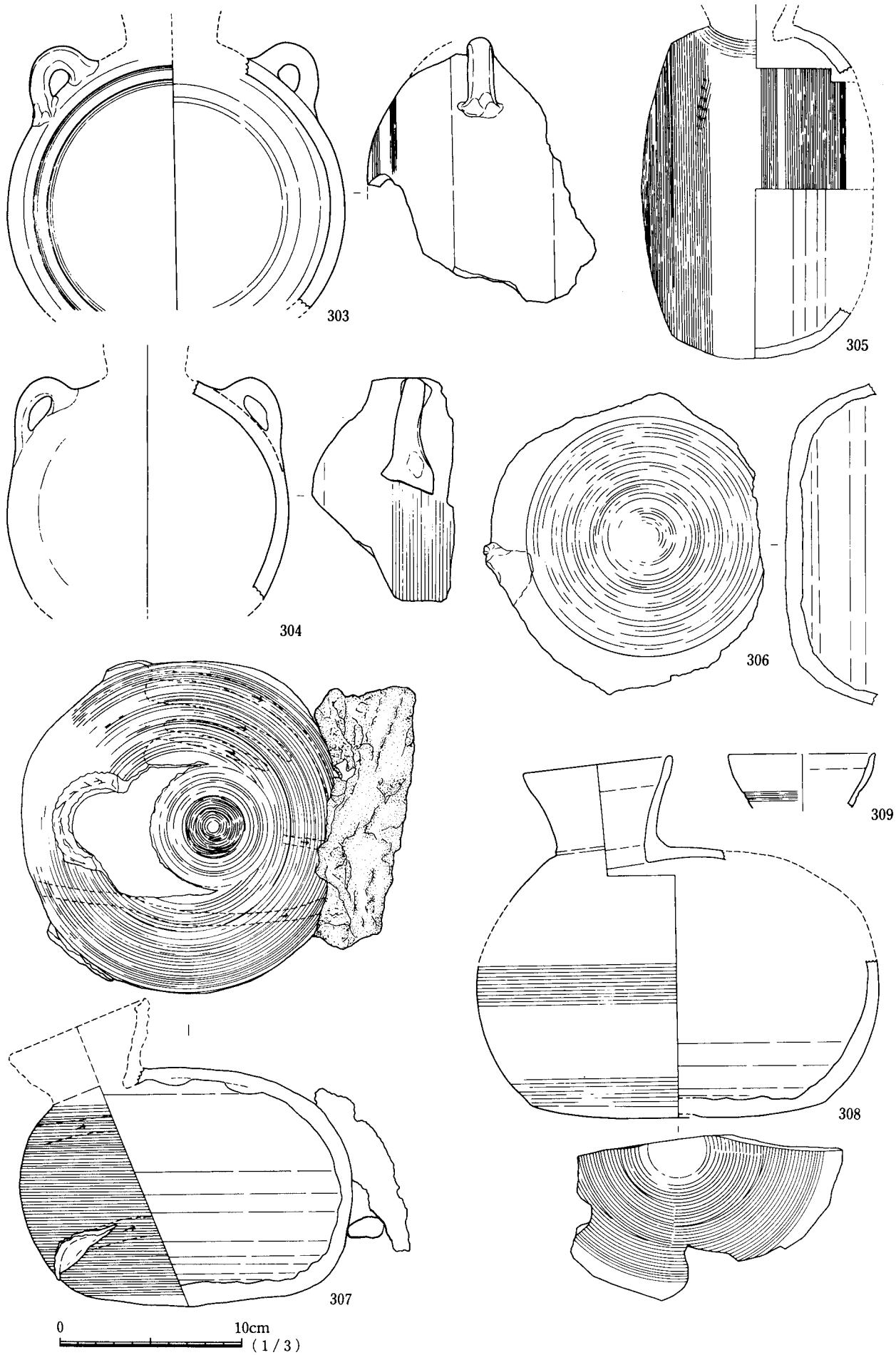


第115图 2号窖出土土器 高坏(4)

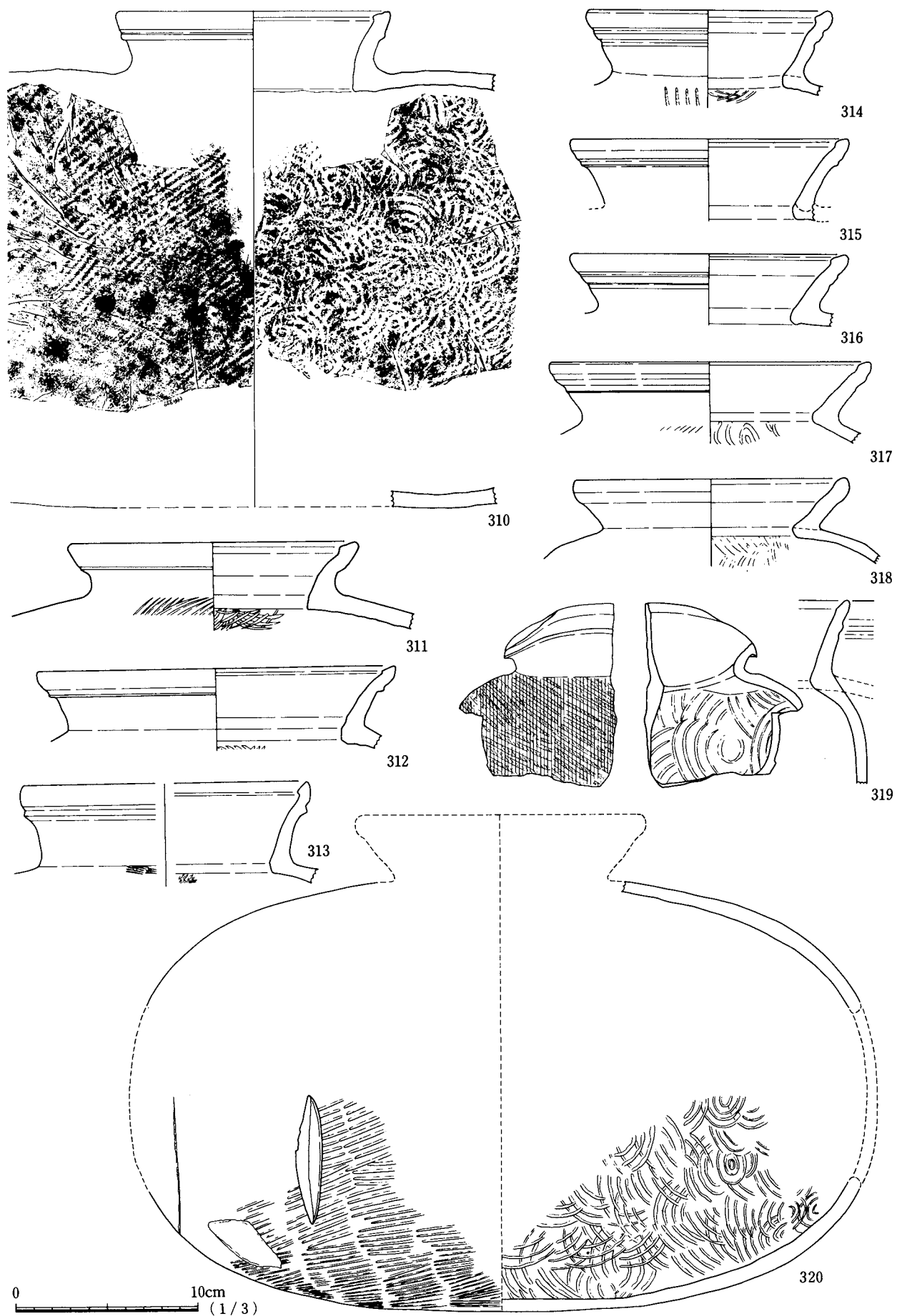




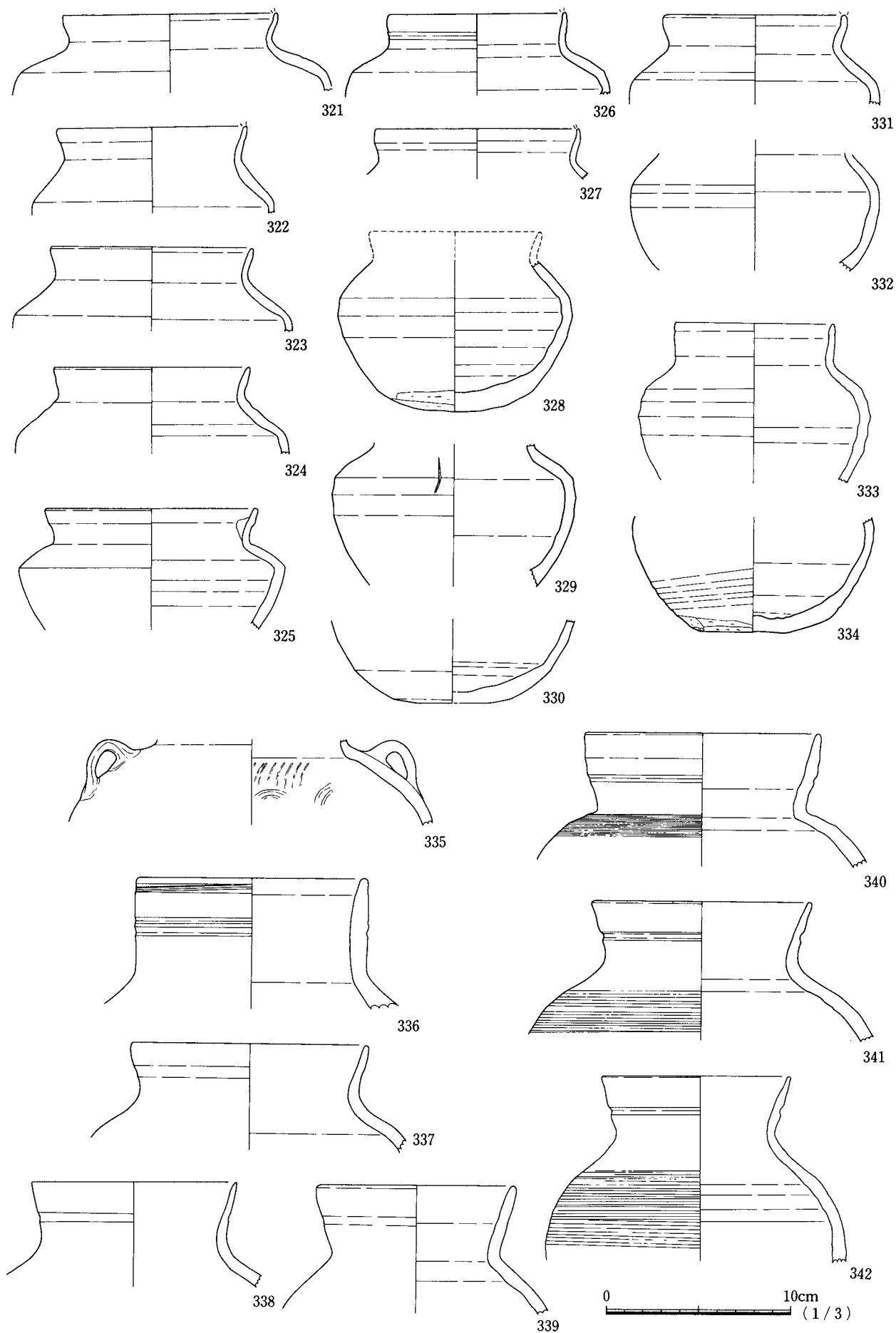
第116图 2号窑出土土器 高坏(5)、碗、瓶、长颈瓶



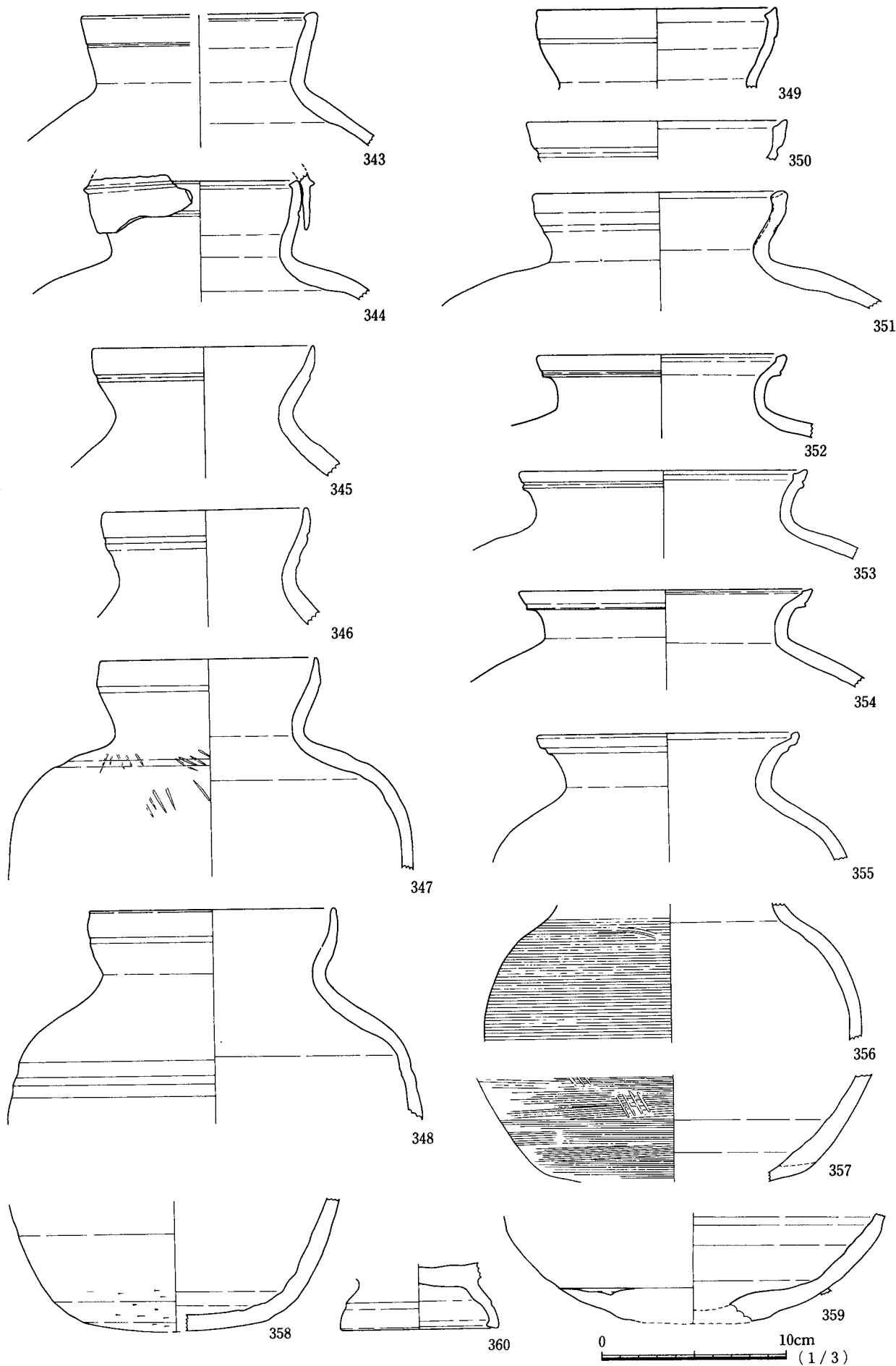
第117图 2号窑出土土器 提瓶、平瓶



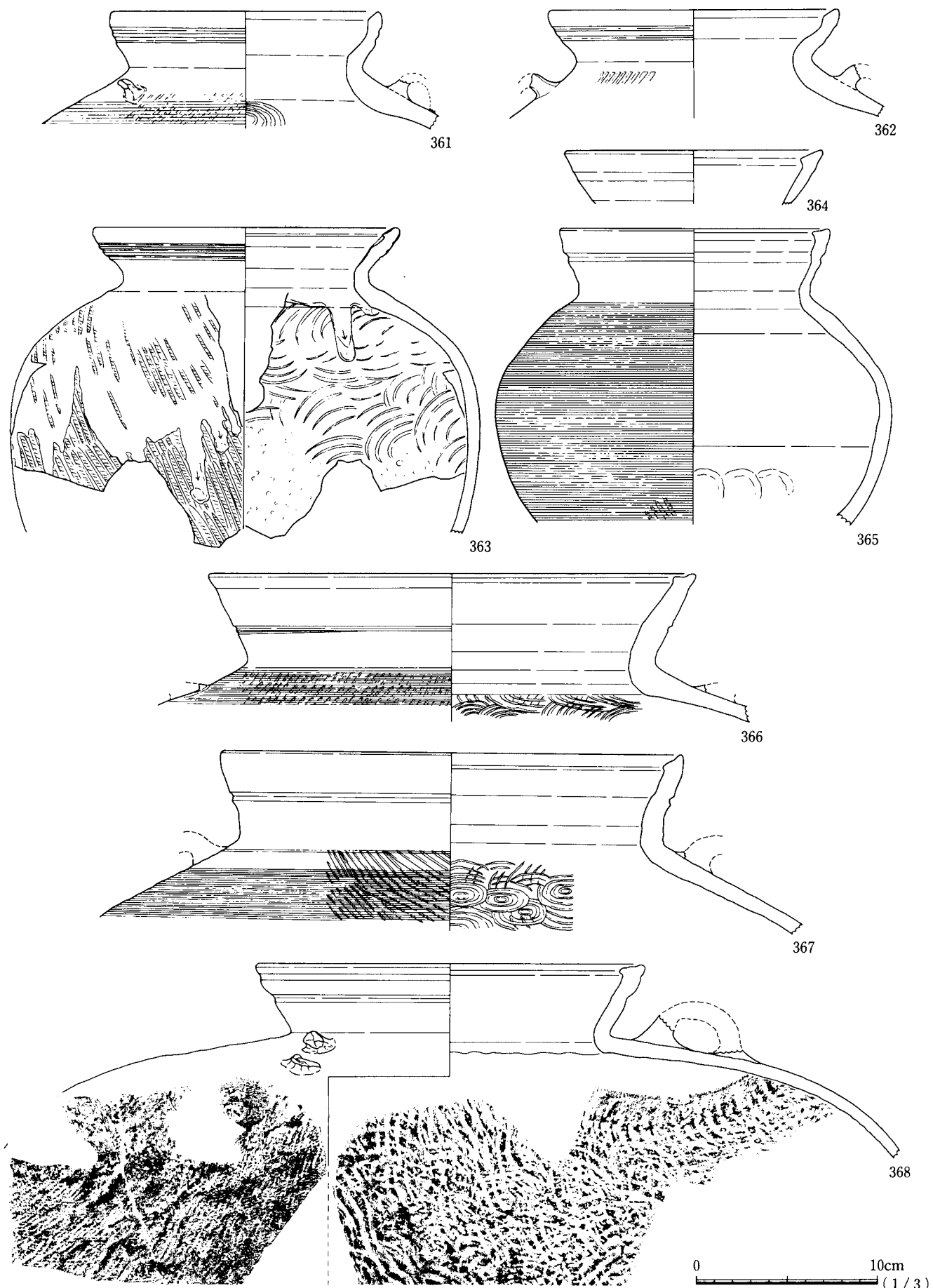
第118图 2号窰出土土器 横瓶



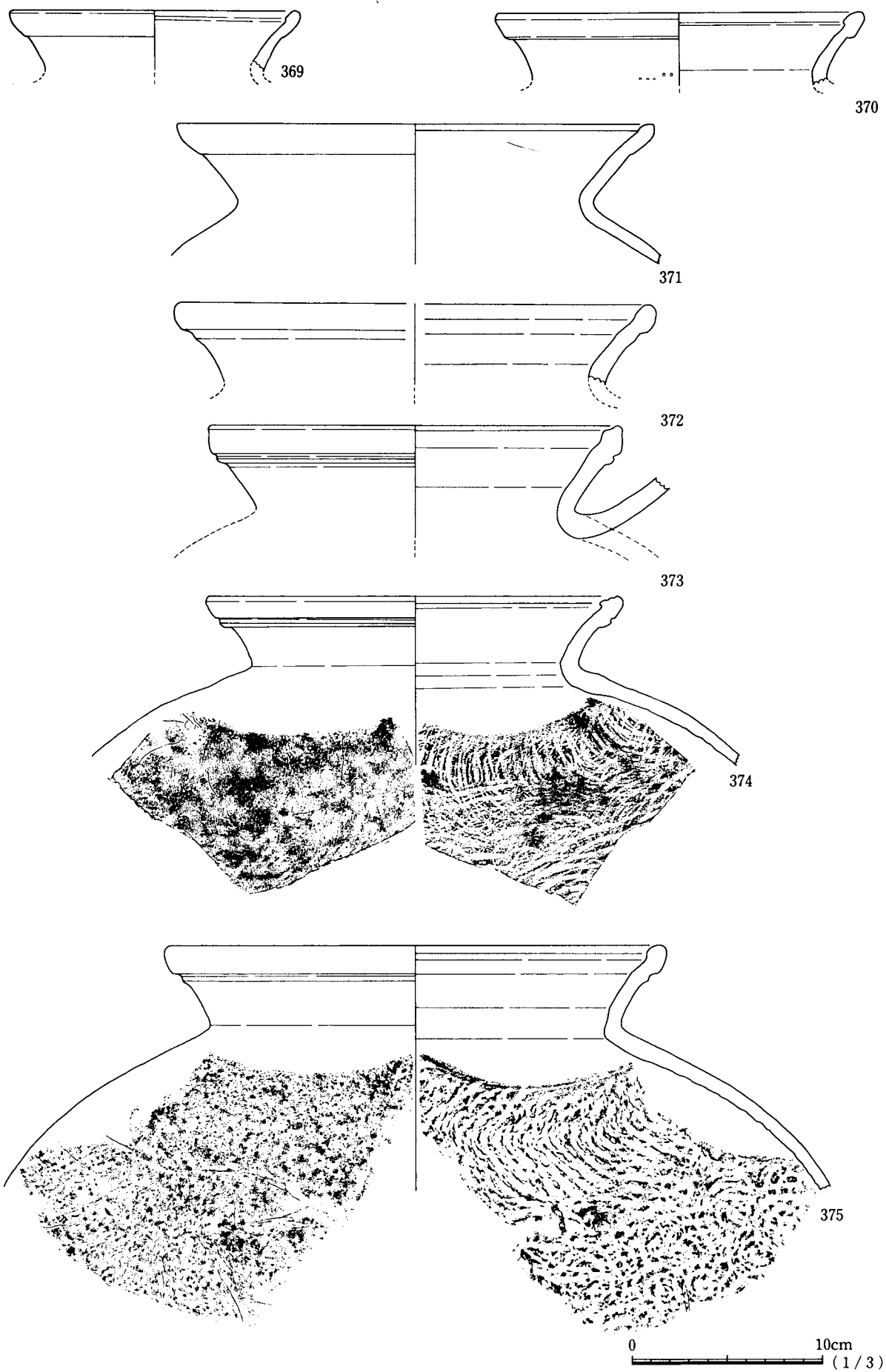
第119图 2号窯出土土器 壺(1)



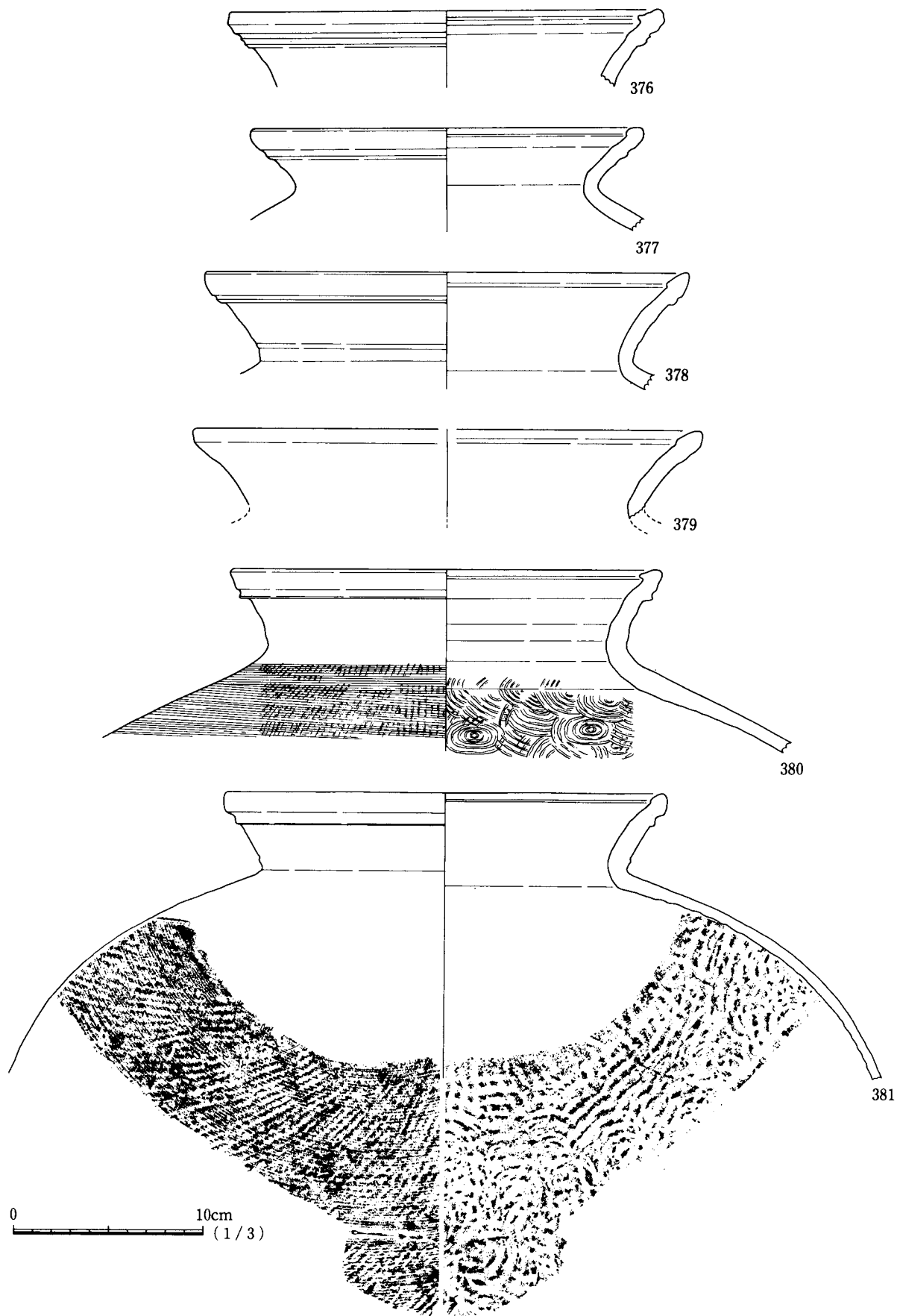
第120图 2号窯出土土器 壺(2)



第121图 2号窑出土土器 甗(1)

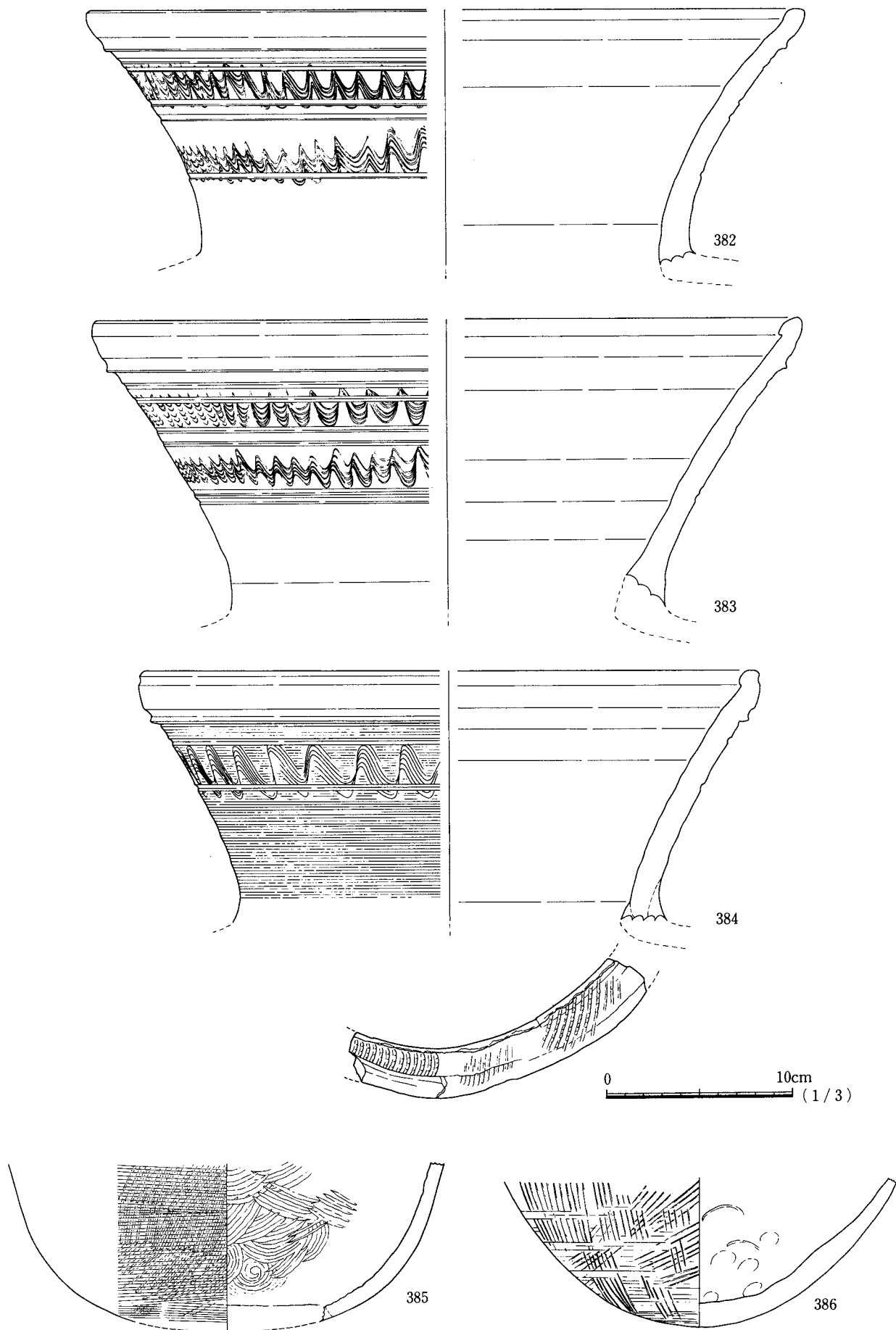


第122图 2号窯出土土器 甕(2)

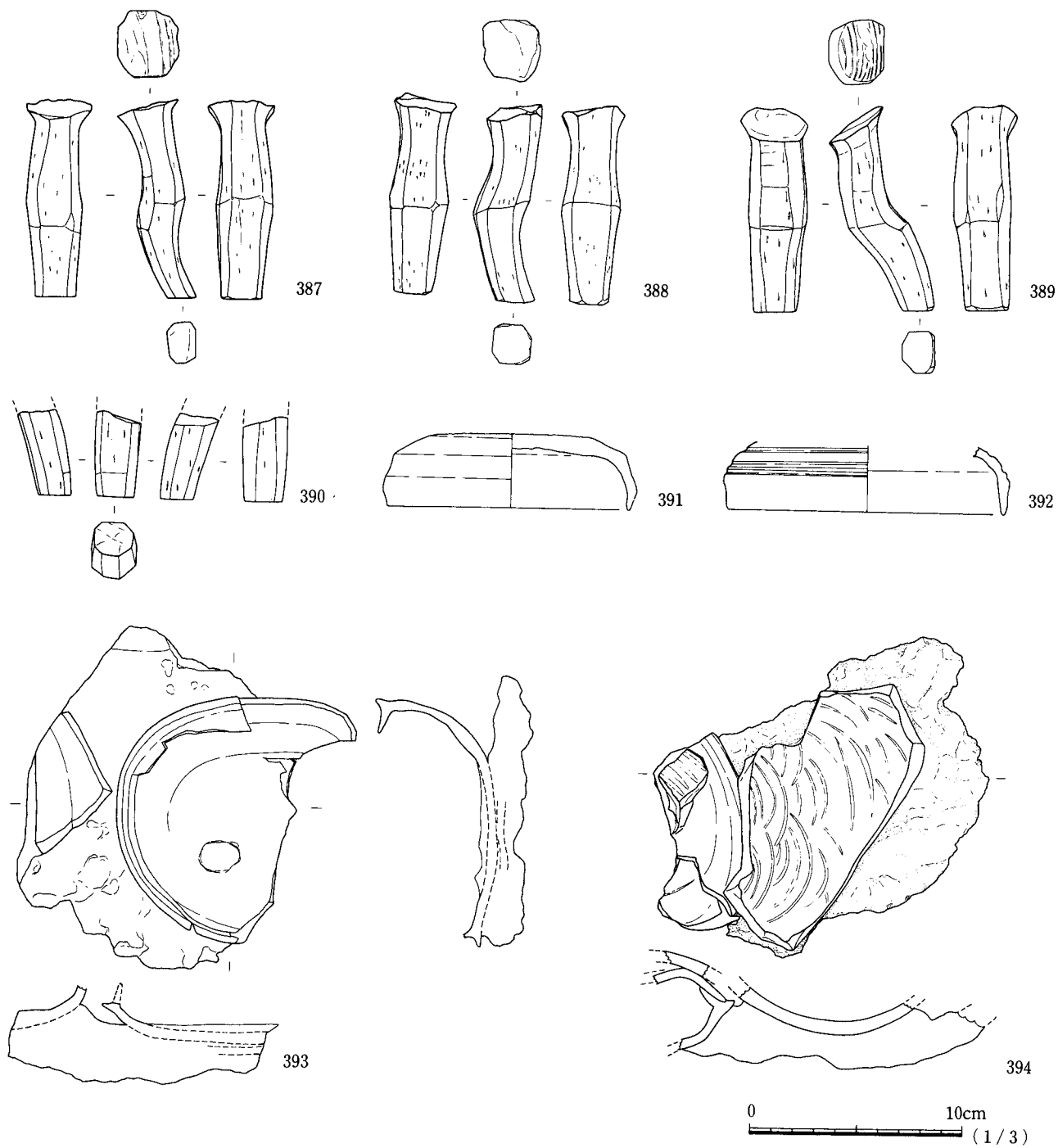


第123图 2号窯出土土器 甕(3)

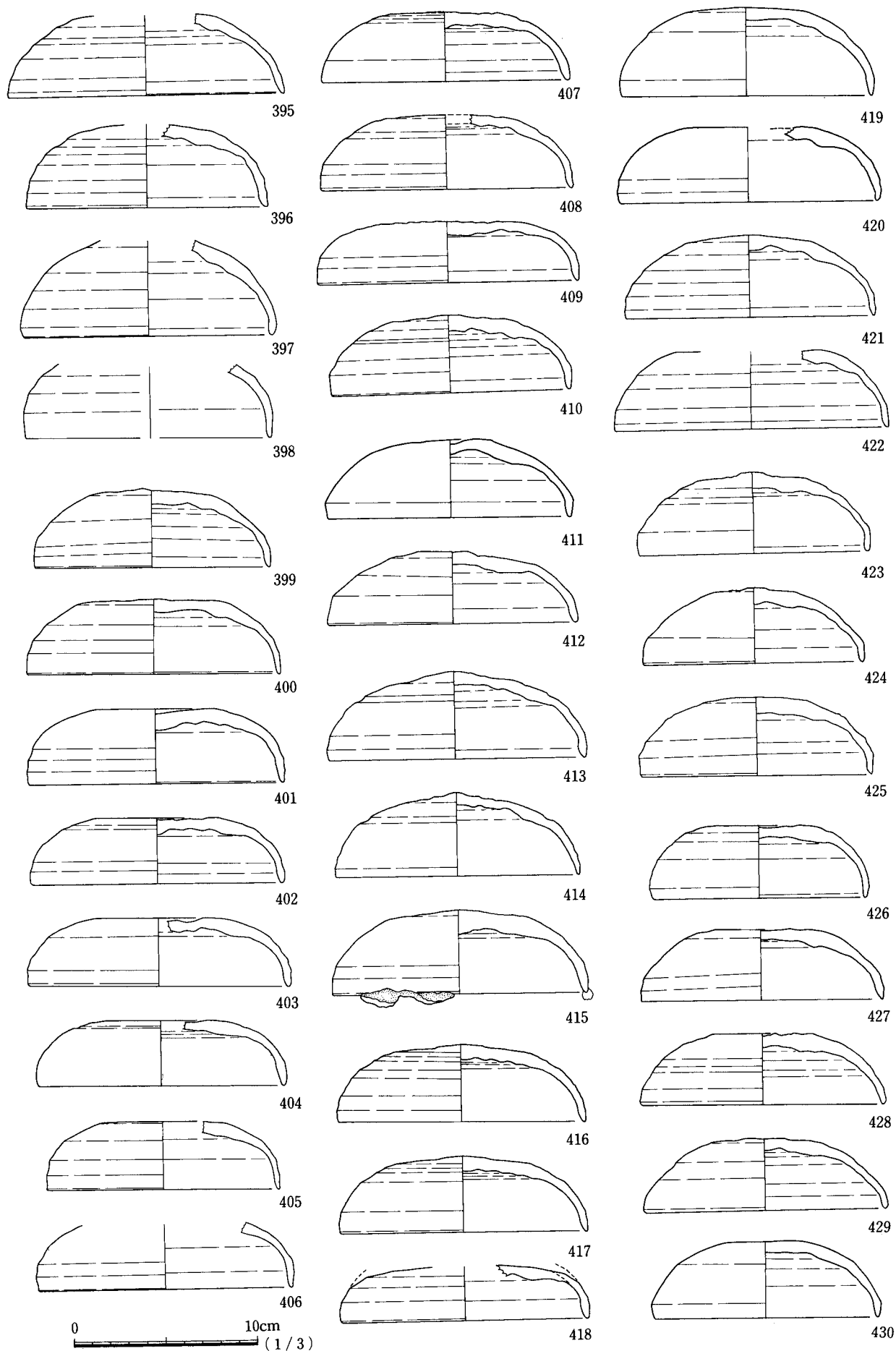




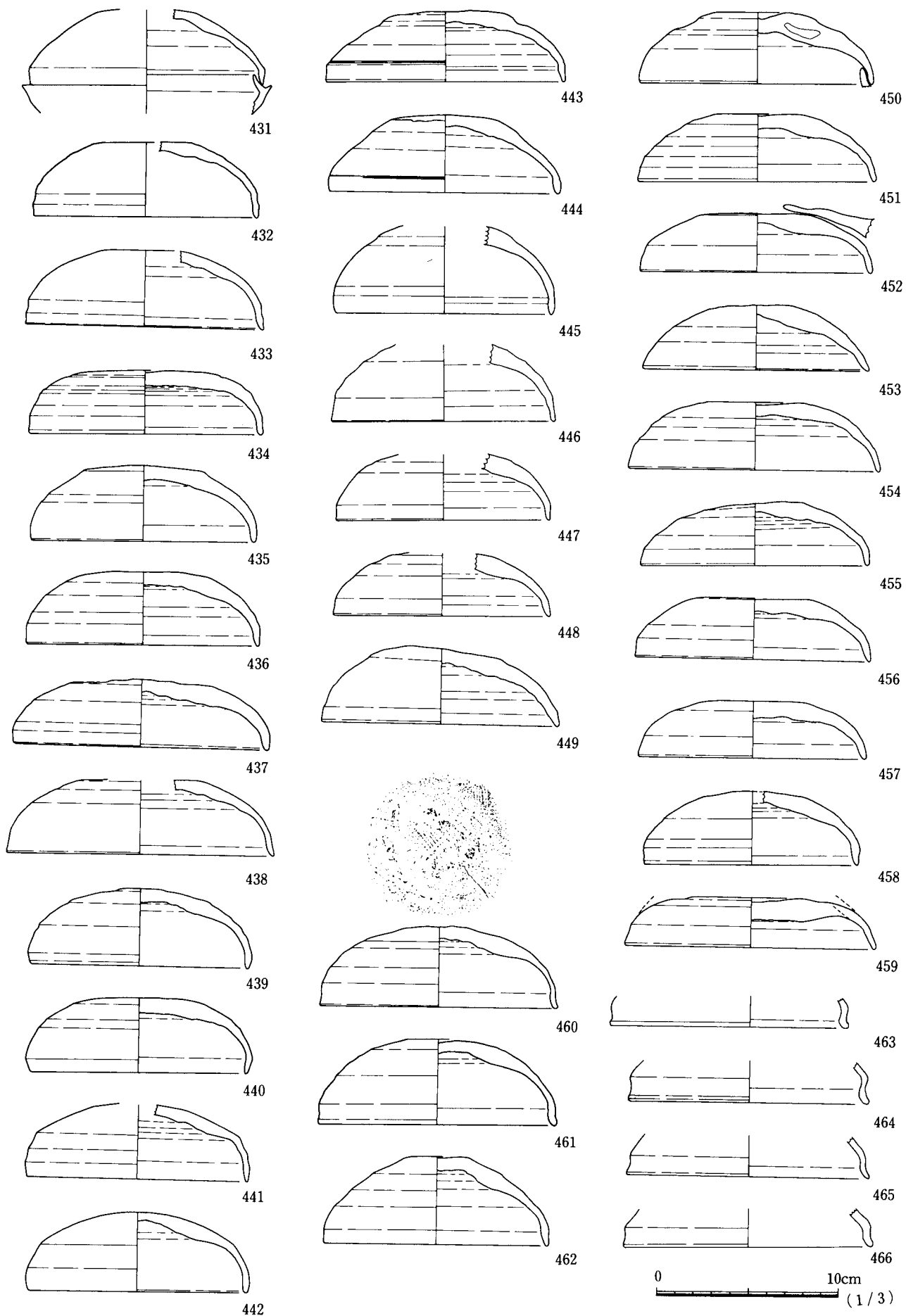
第124图 2号窯出土土器 甕(4)



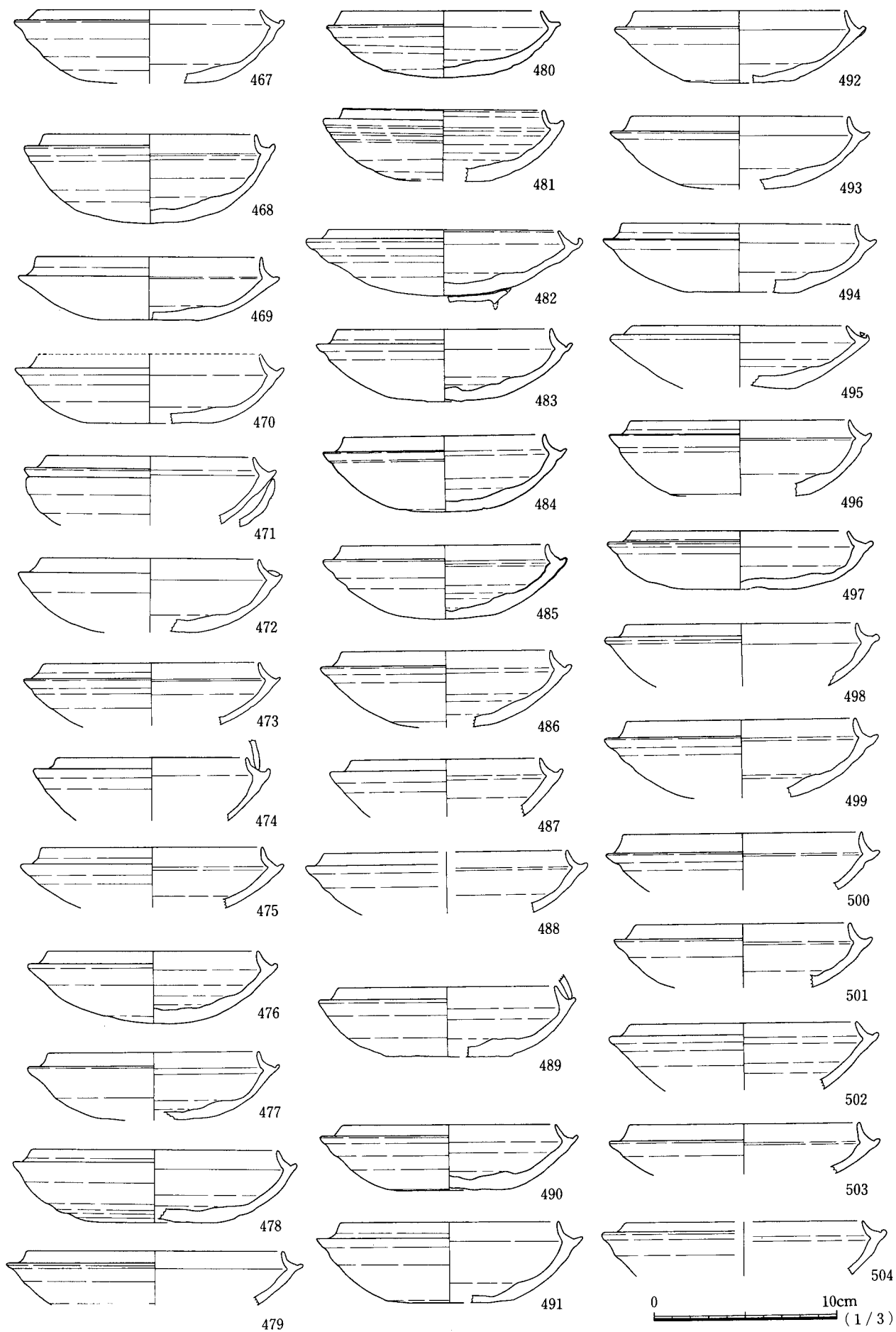
第125图 2号窑出土土器 脚、盖、烧台転用土器



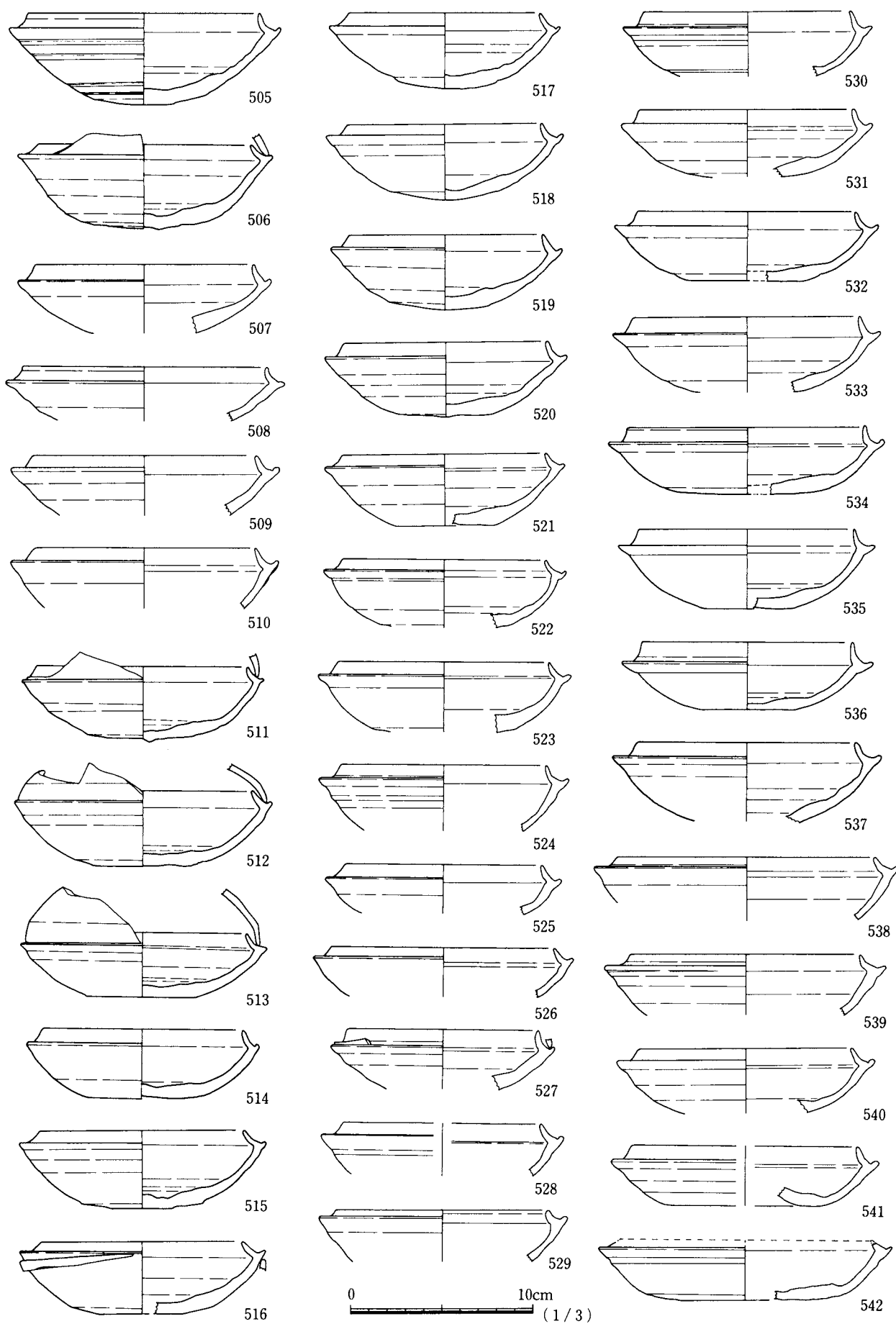
第126图 1号窑出土土器 坏A盖(1)



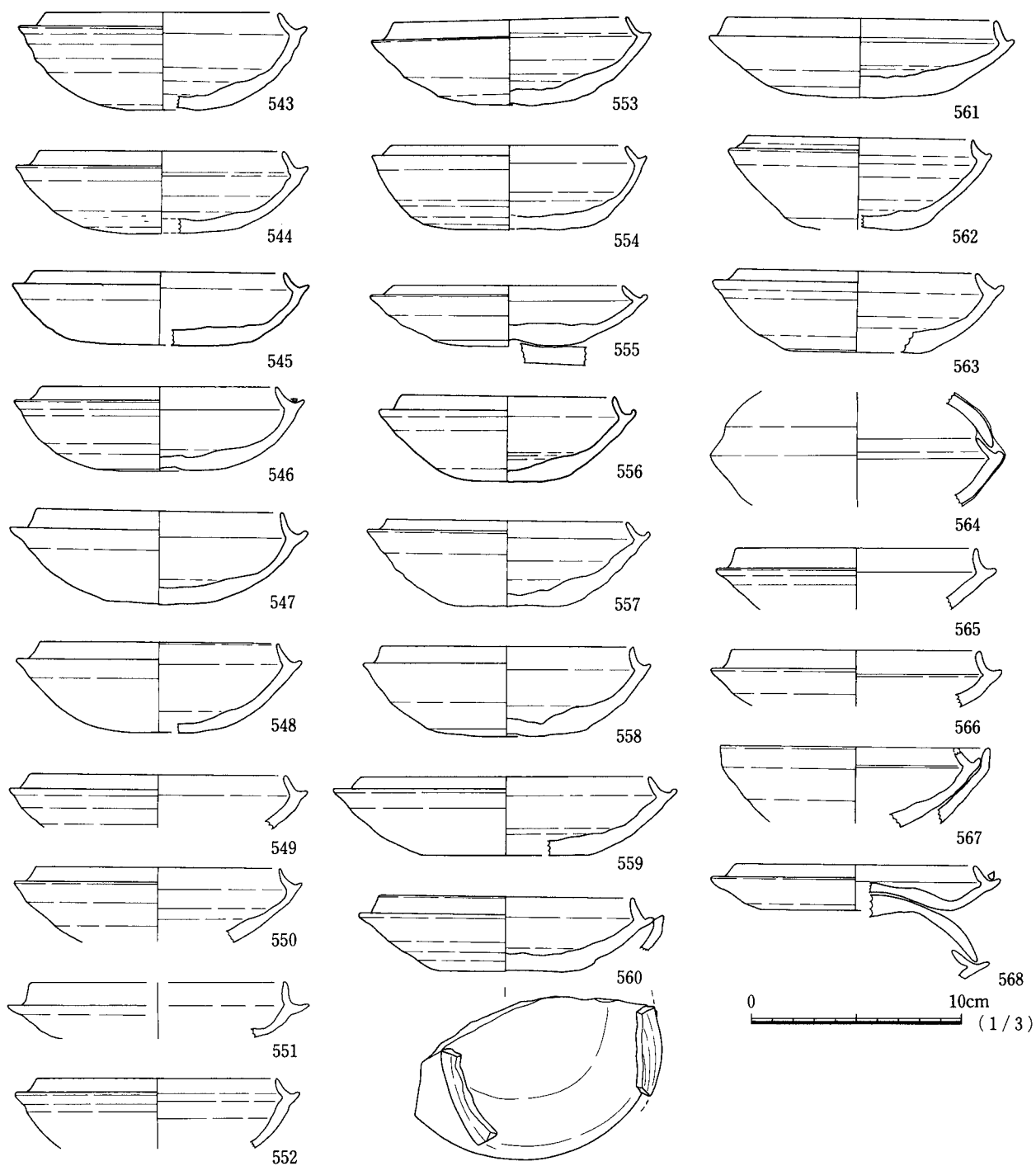
第127图 1号窑出土土器 坏A盖(2)



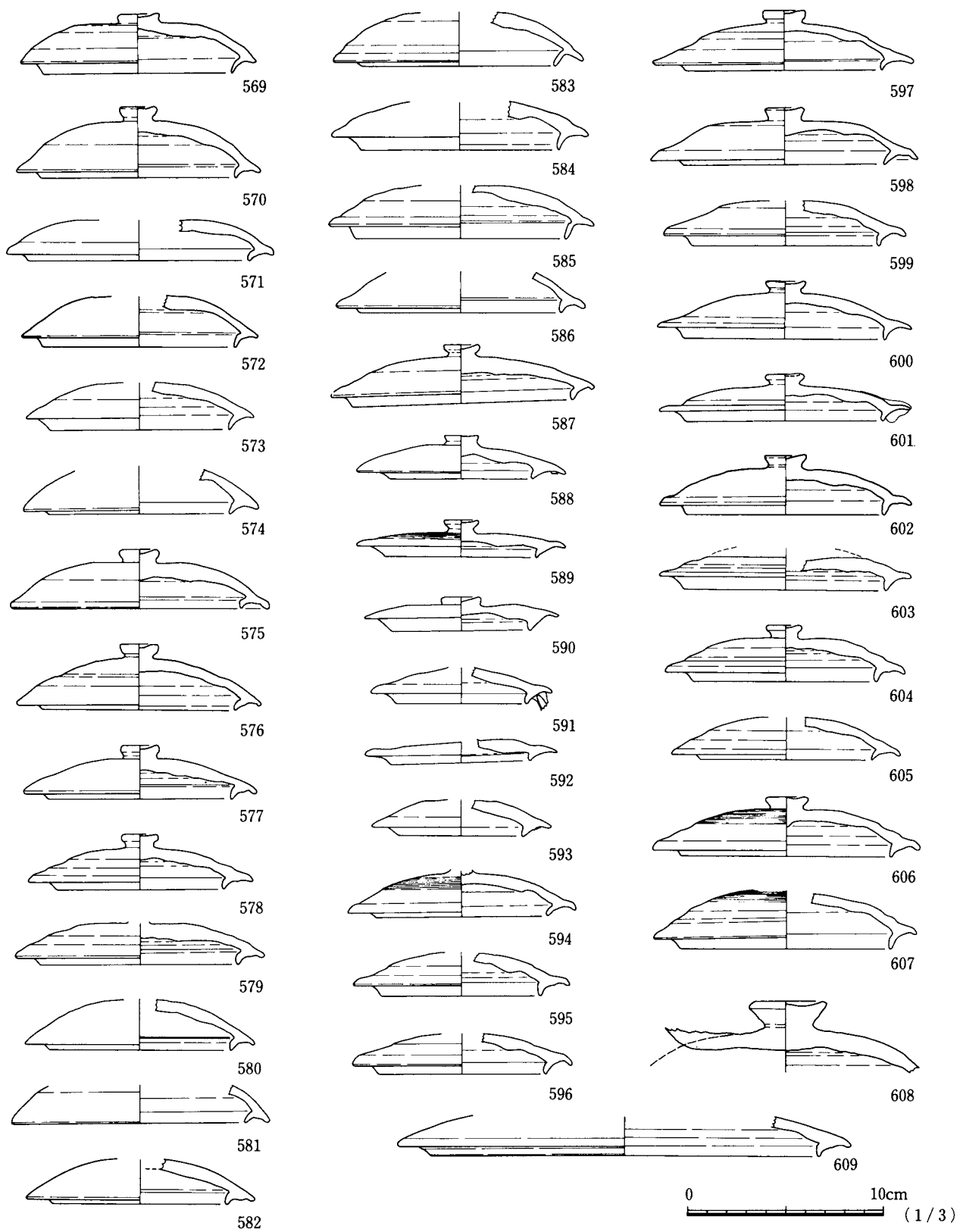
第128图 1号窯出土土器 坏A身(1)



第129图 1号窑出土土器 坏A身(2)

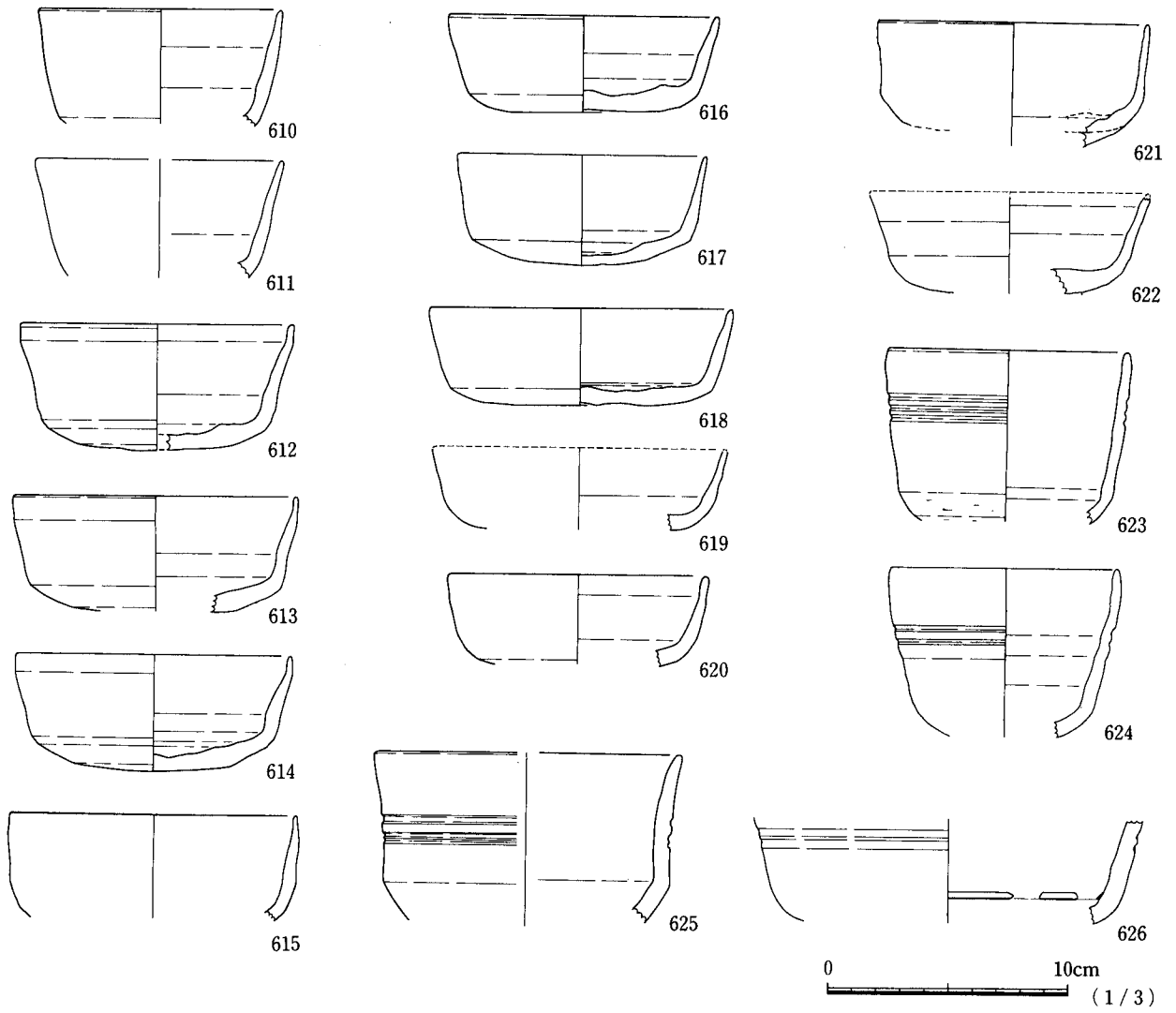


第130图 1号窑出土土器 坏A身(3)

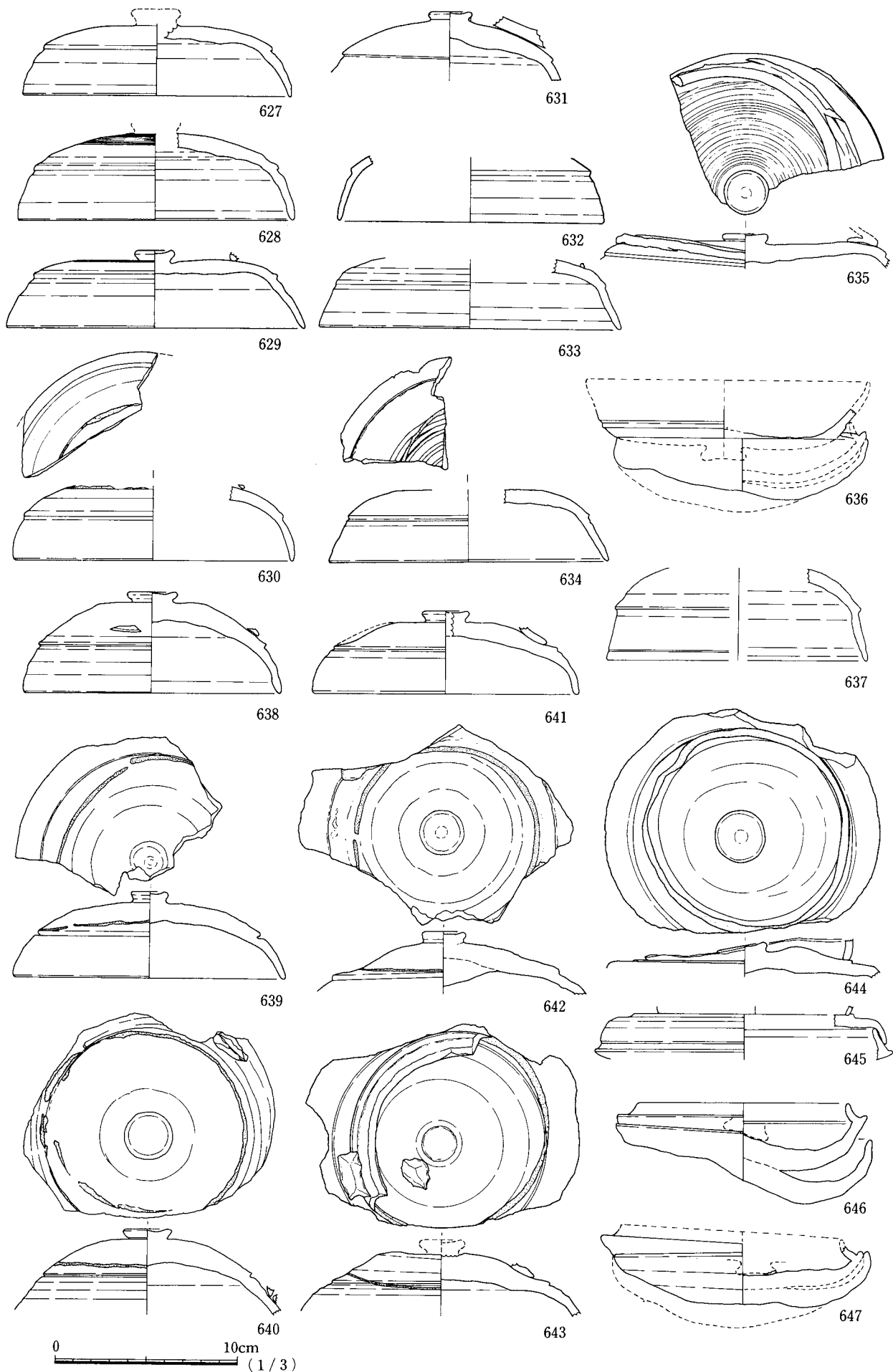


第131图 1号窖出土土器 坏B盖

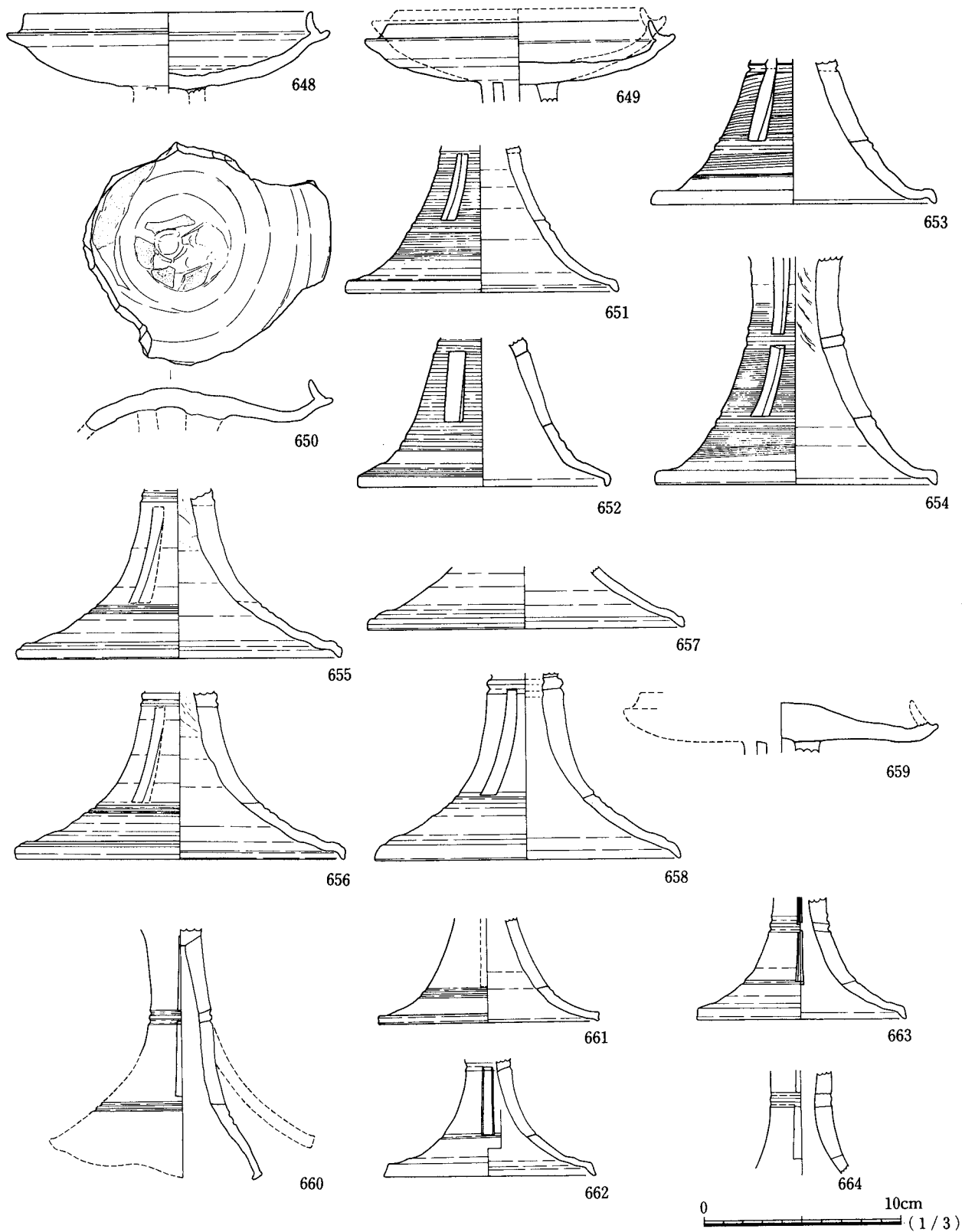




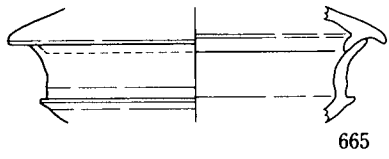
第132图 1号窯出土土器 坏B身、碗、鉢



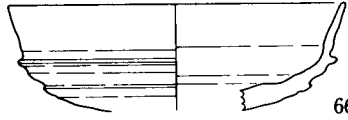
第133图 1号窑出土土器 高坏盖



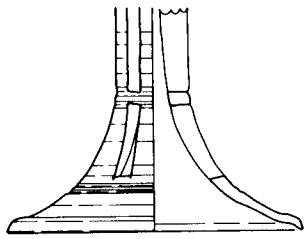
第134图 1号窖出土土器 高环(1)



665



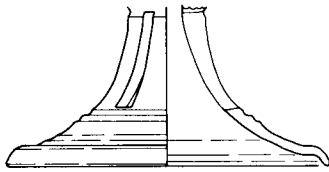
666



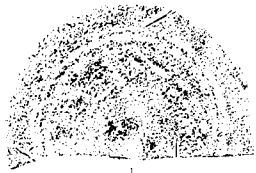
667



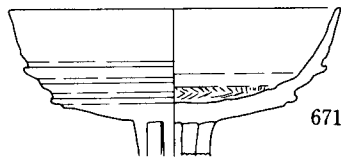
668



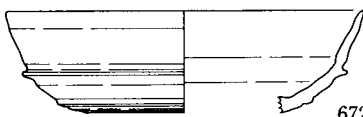
669



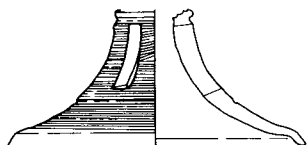
670



671

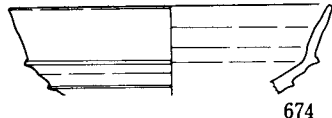


672

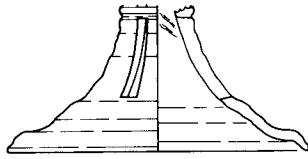


673

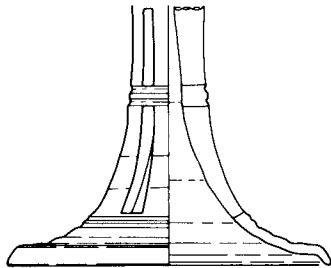
0 10cm (1/3)



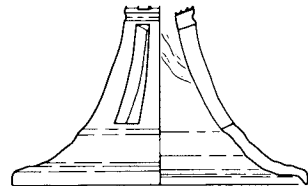
674



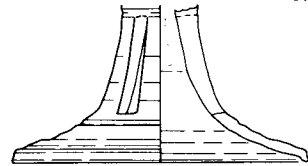
675



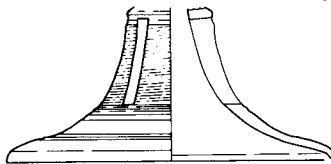
676



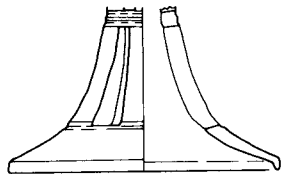
677



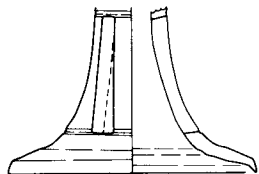
678



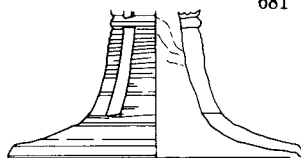
679



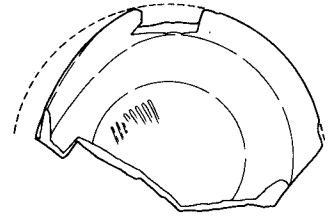
680



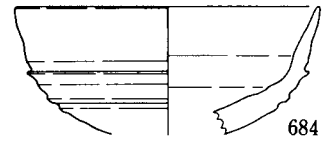
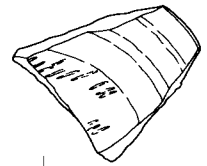
681



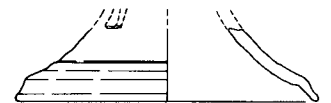
682



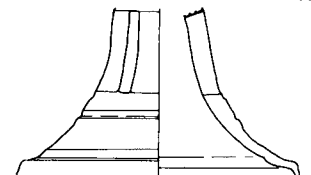
683



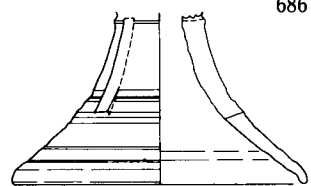
684



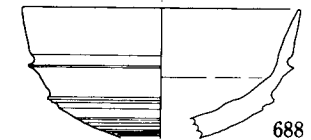
685



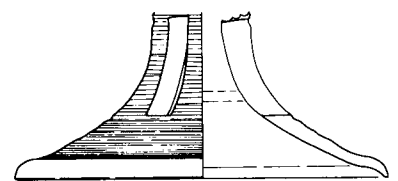
686



687

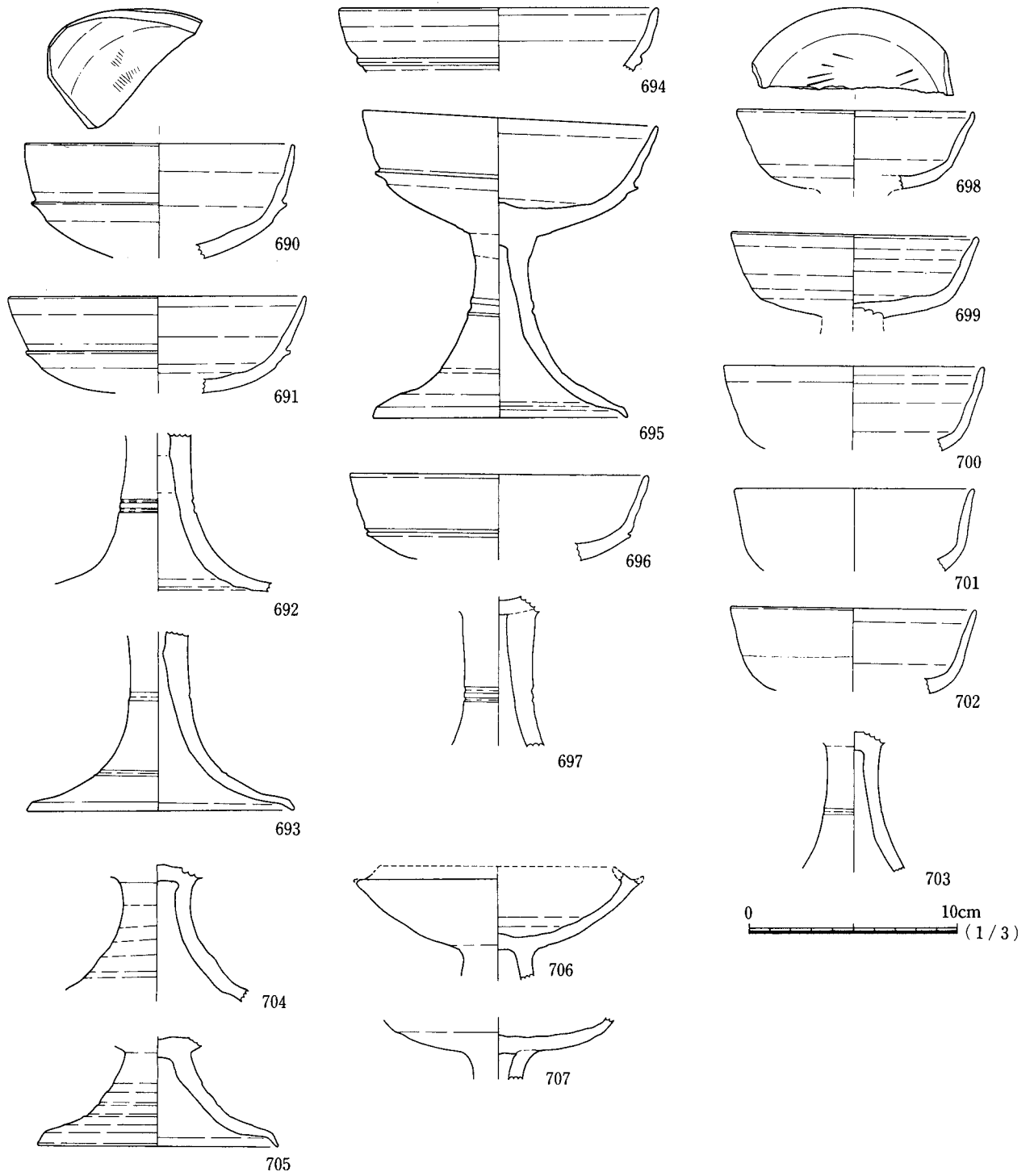


688

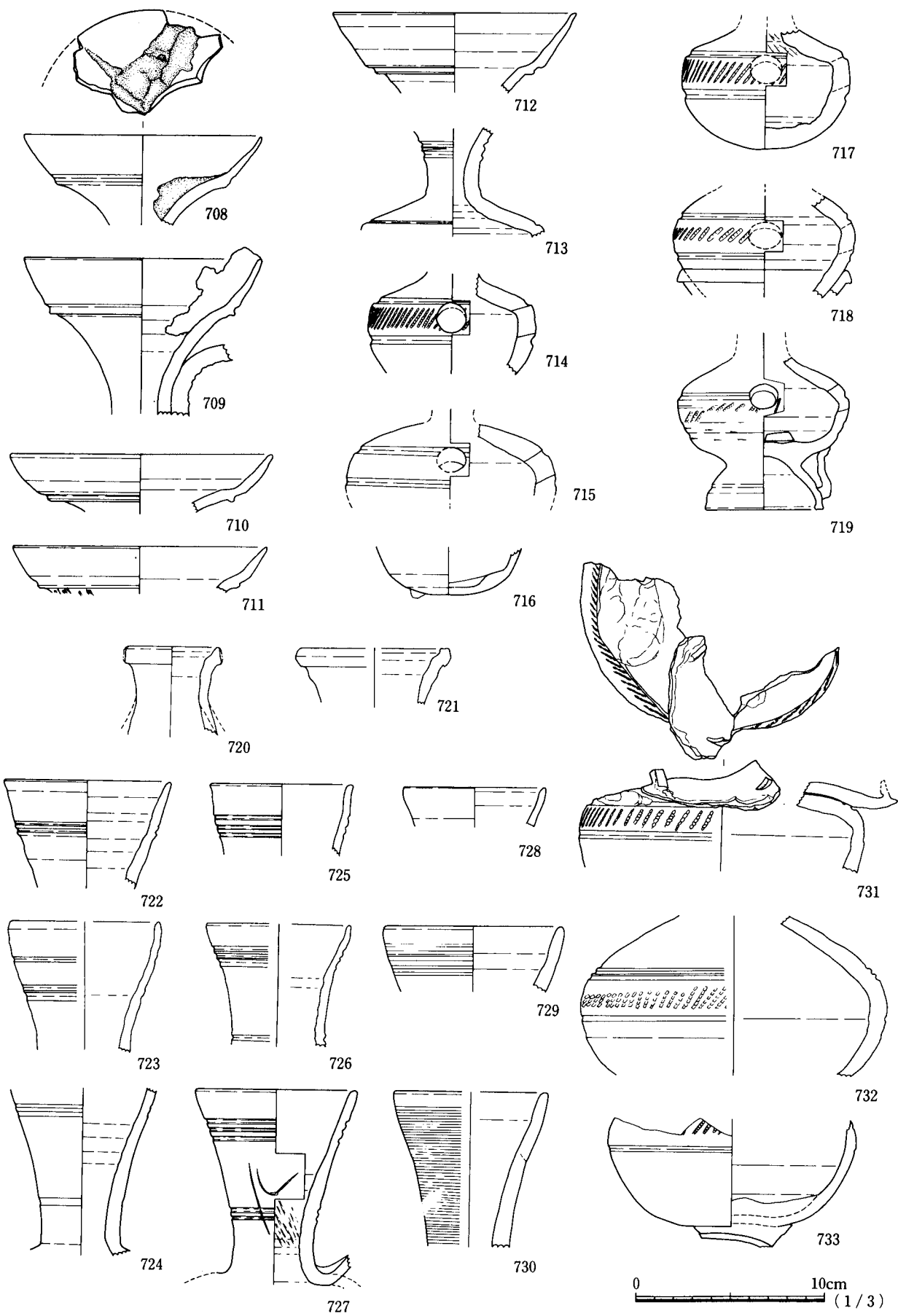


689

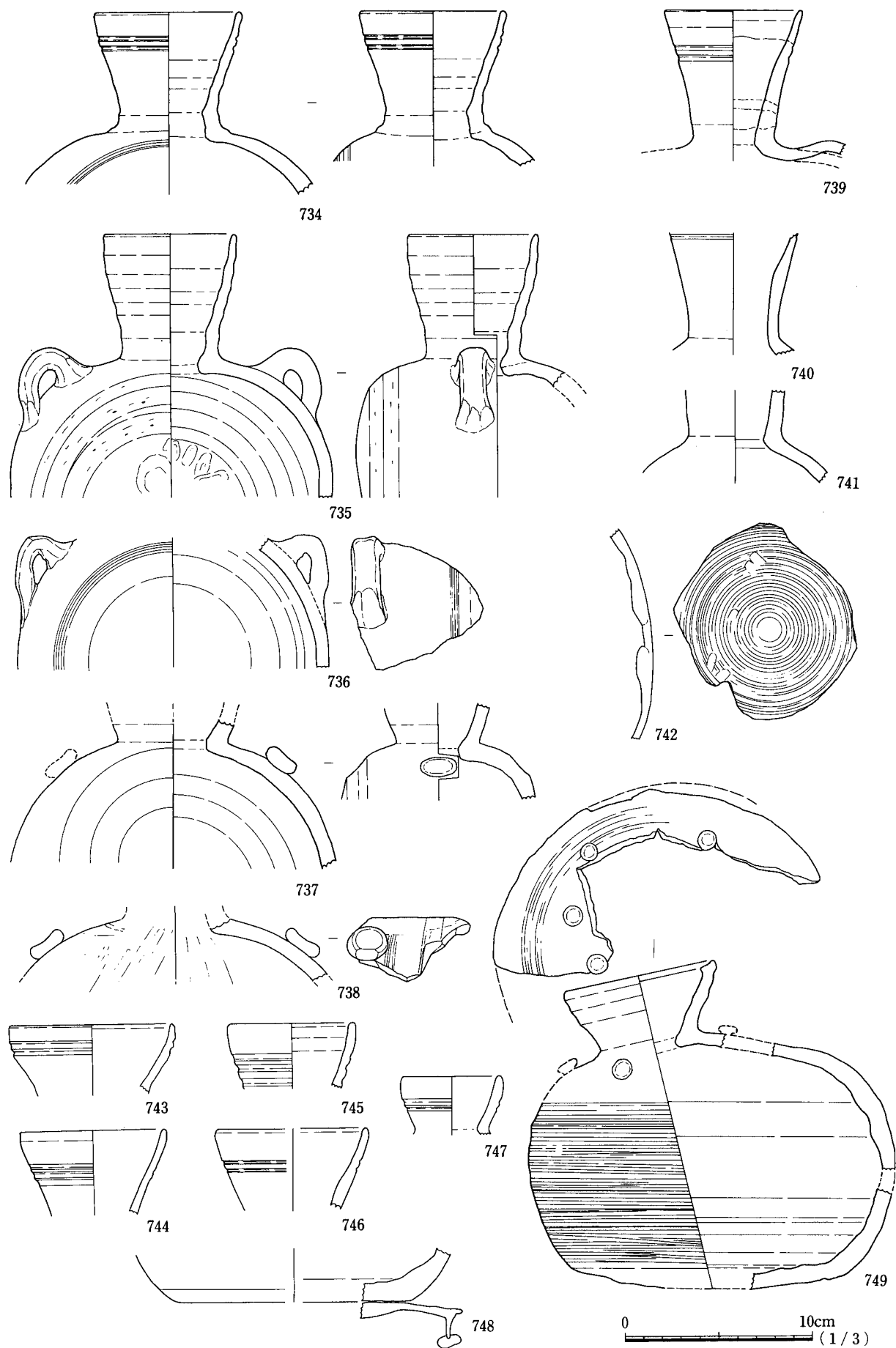
第135图 1号窑出土土器 高坏(2)



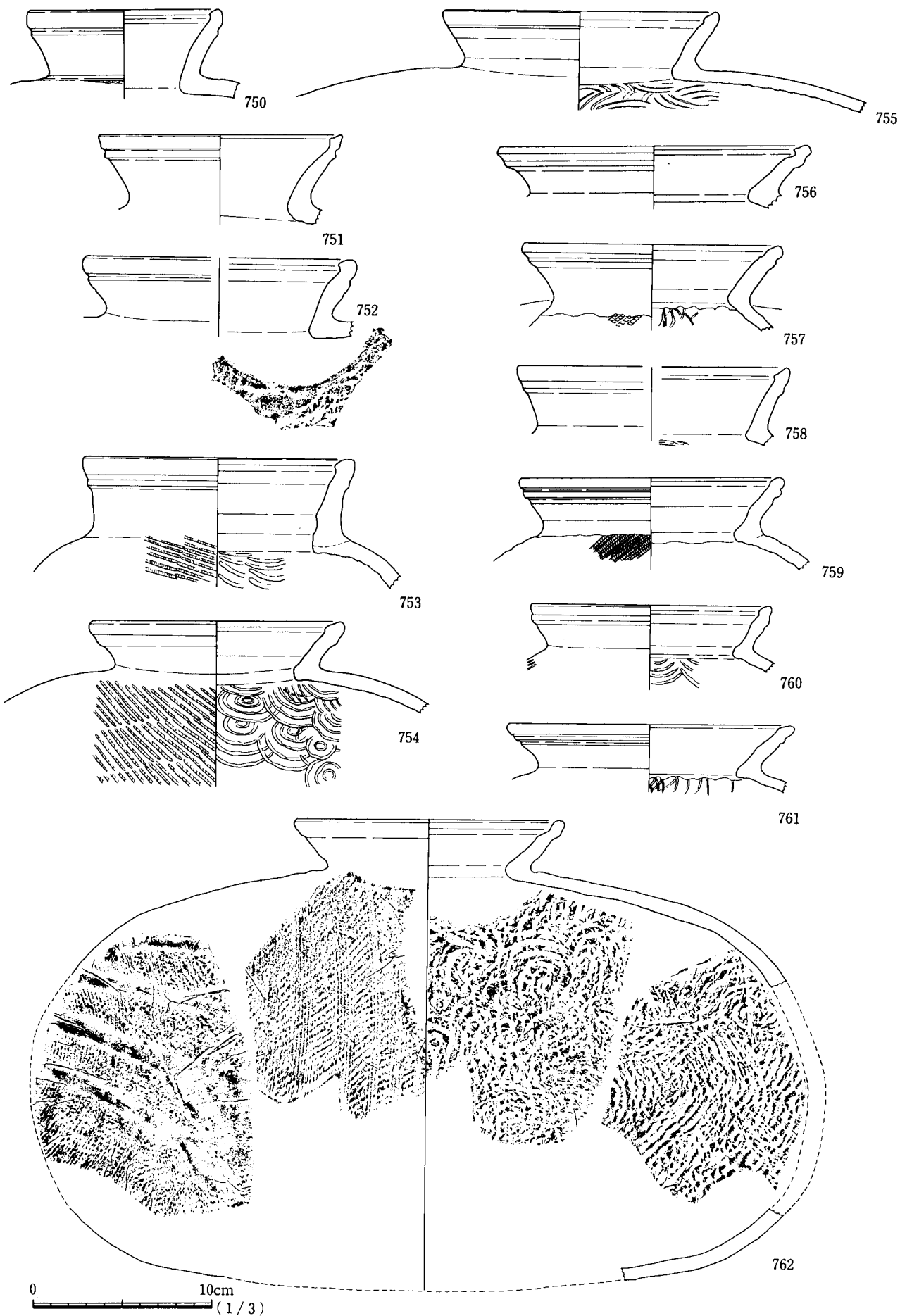
第136图 1号窯出土土器 高坏(3)



第137图 1号窟出土土器 甃、瓶、长颈瓶

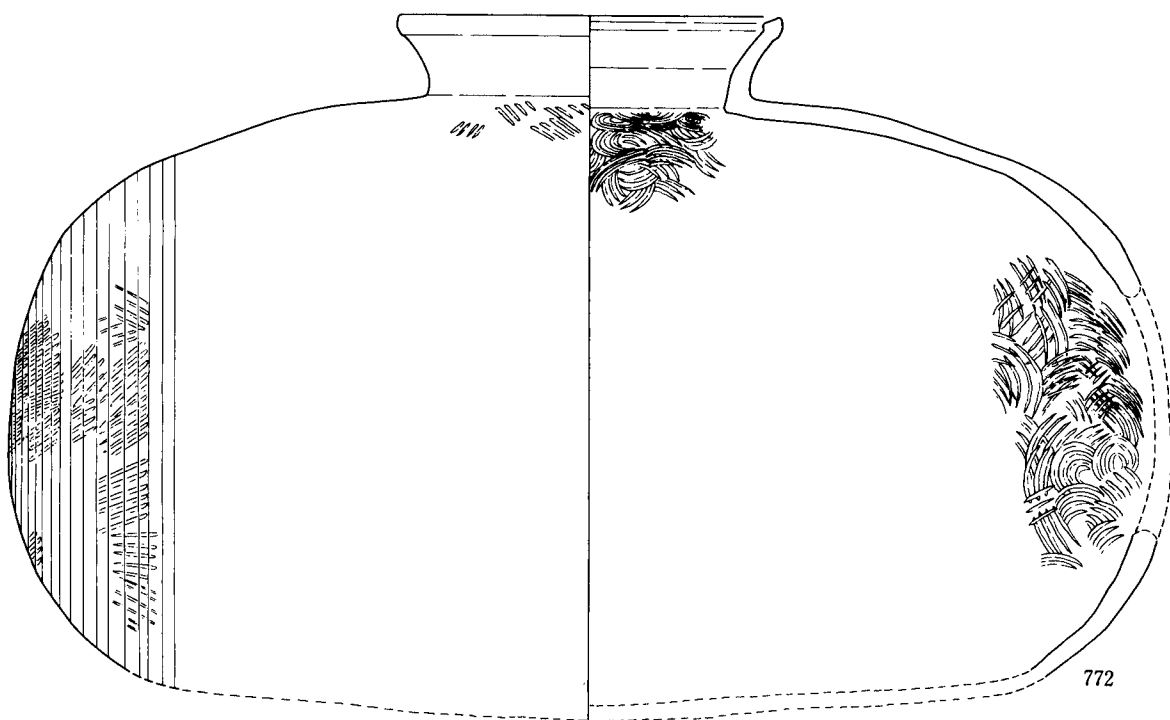
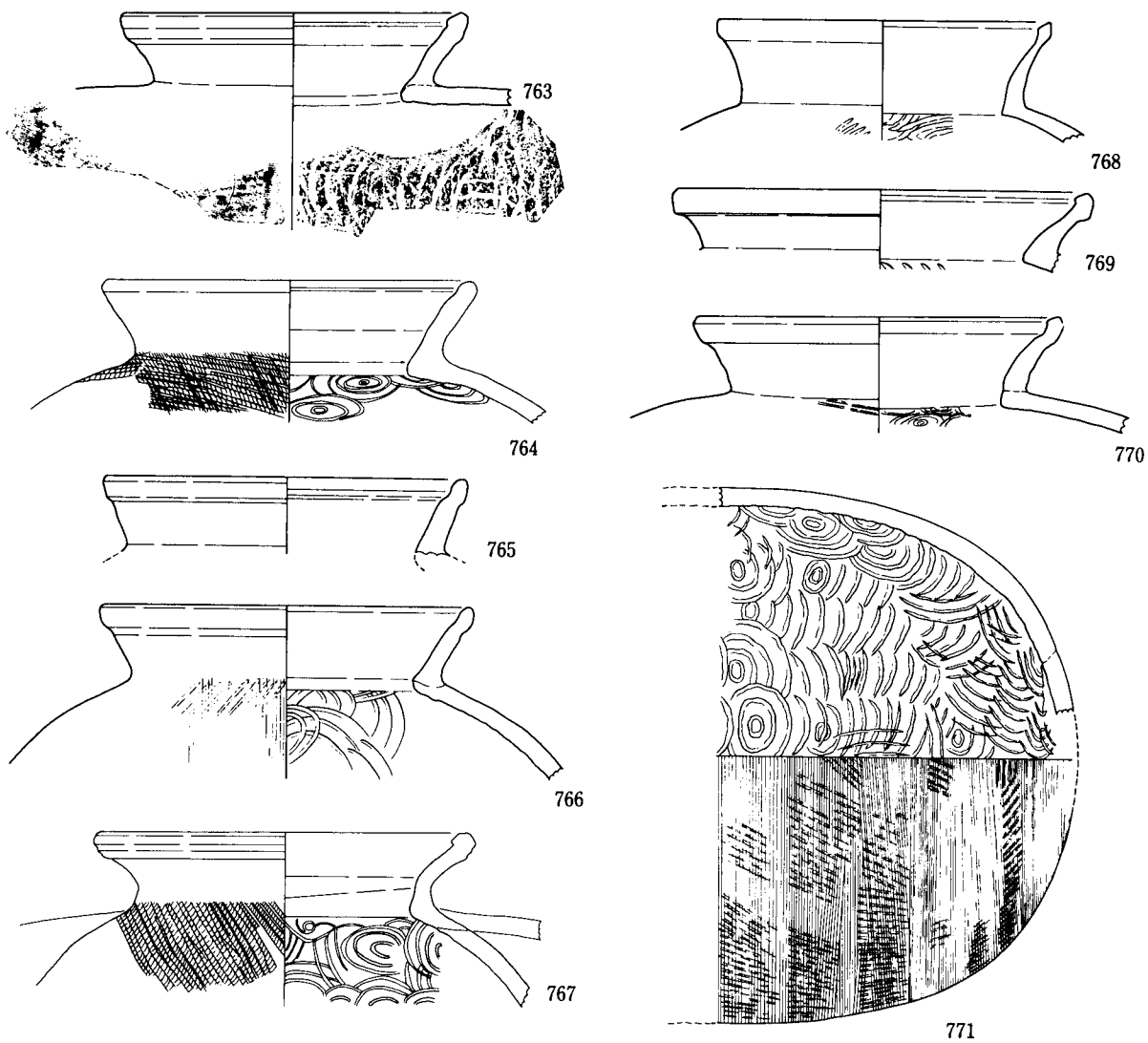


第138图 1号窖出土土器 提瓶、平瓶



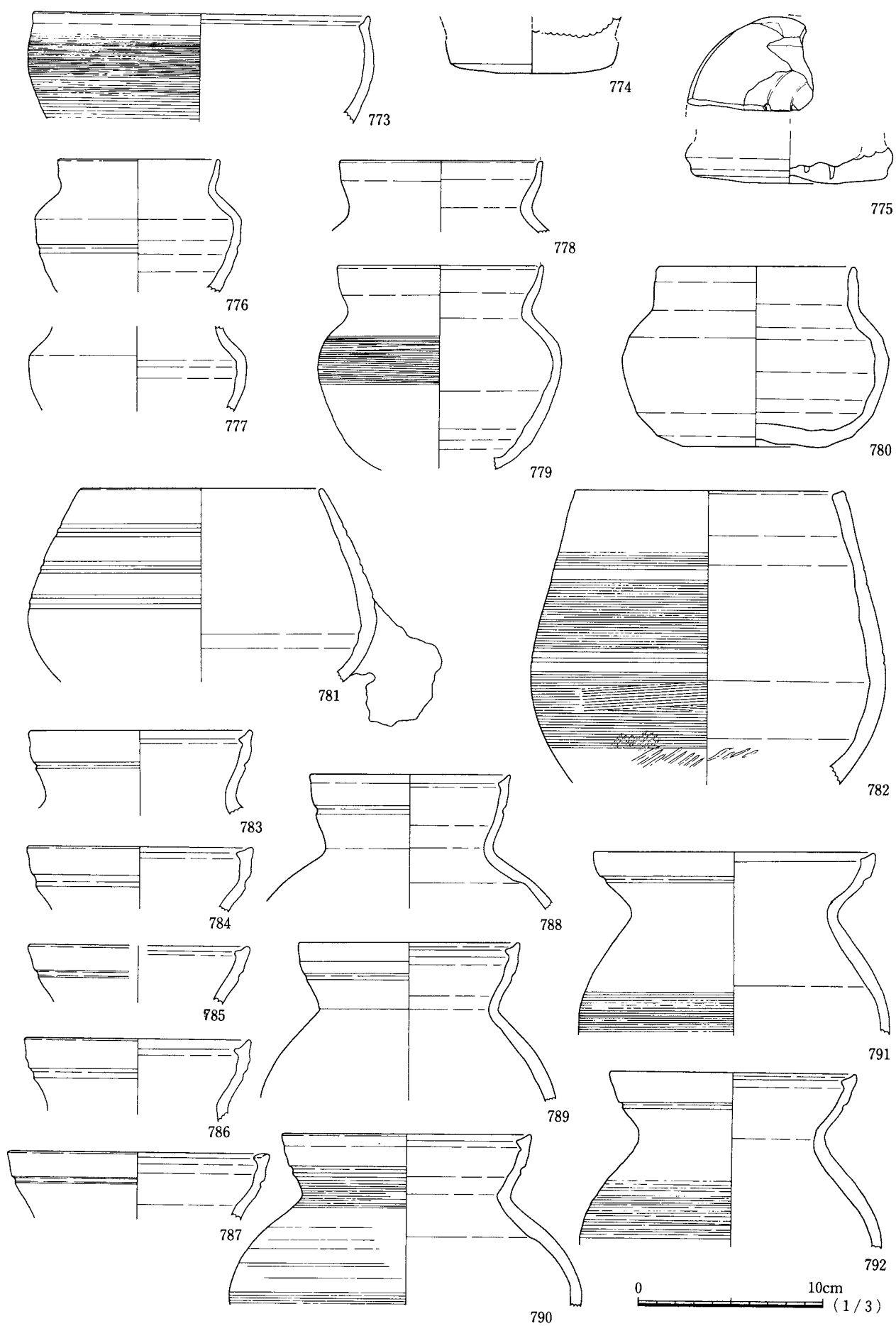
第139图 1号窖出土土器 横瓶(1)



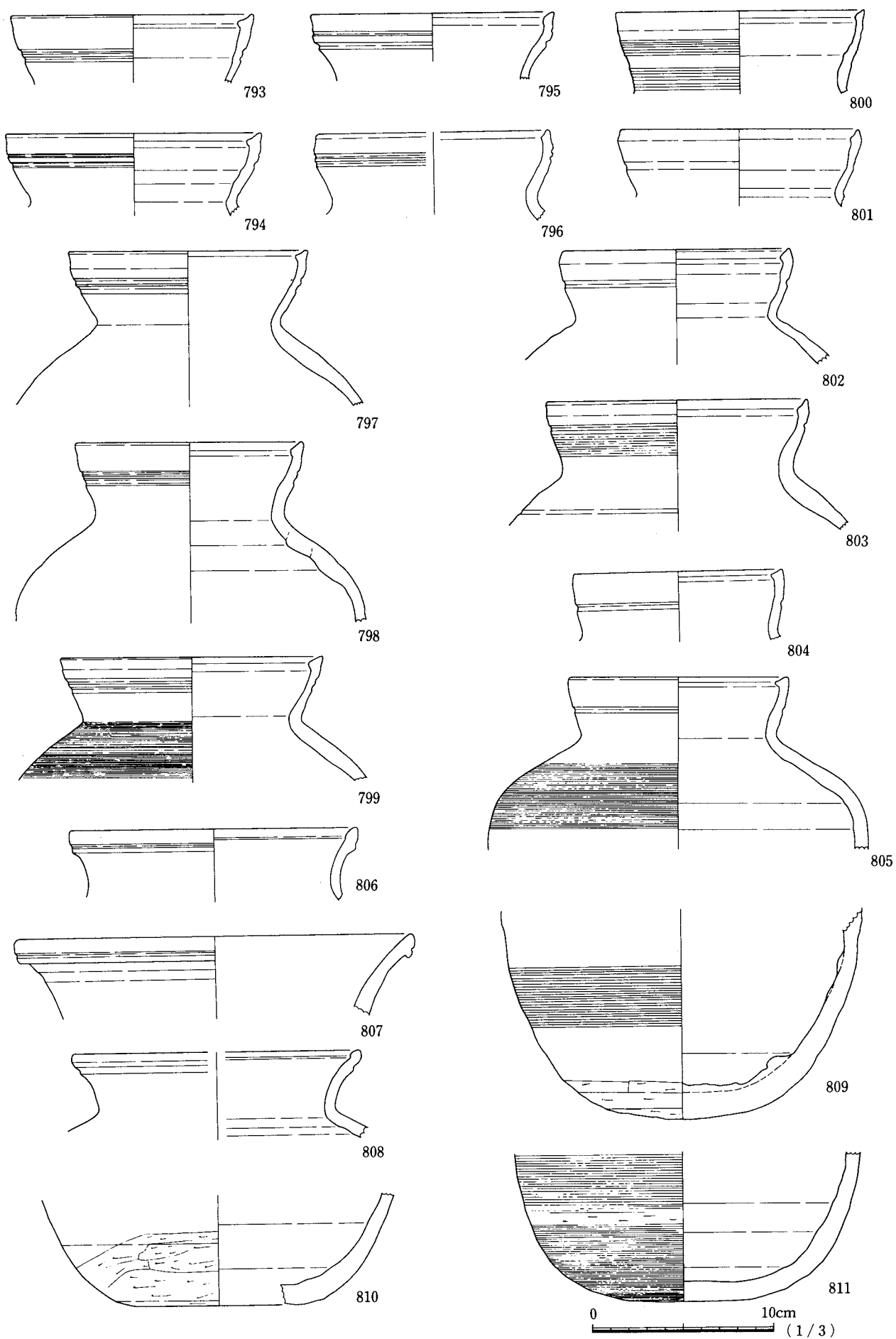


0 10cm (1/3)

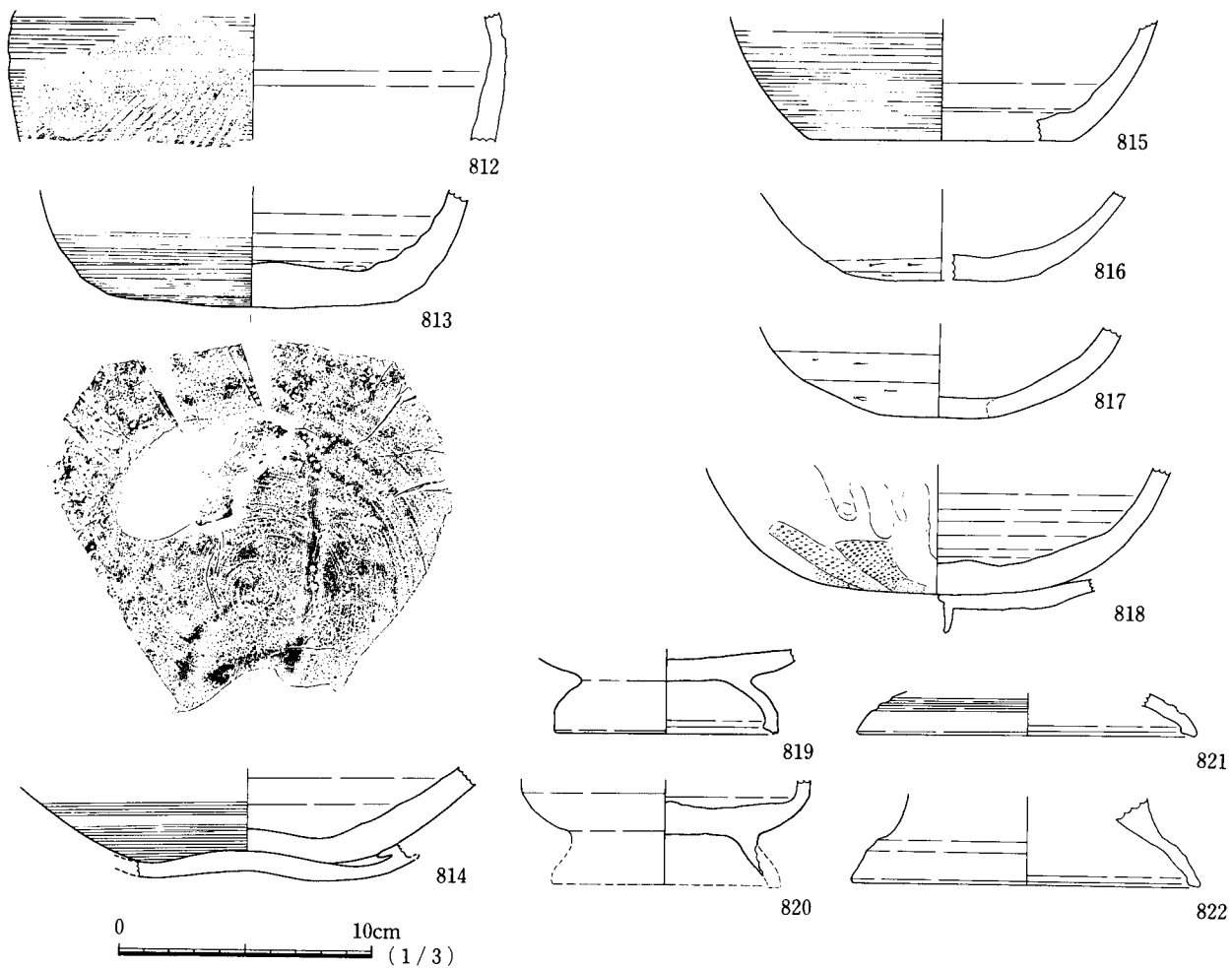
第140图 1号窯出土土器 横瓶(2)



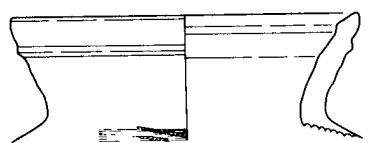
第141图 1号窑出土土器 鉢、短頸壺、壺(1)



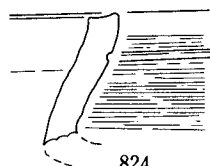
第142图 1号窯出土土器 壺(2)



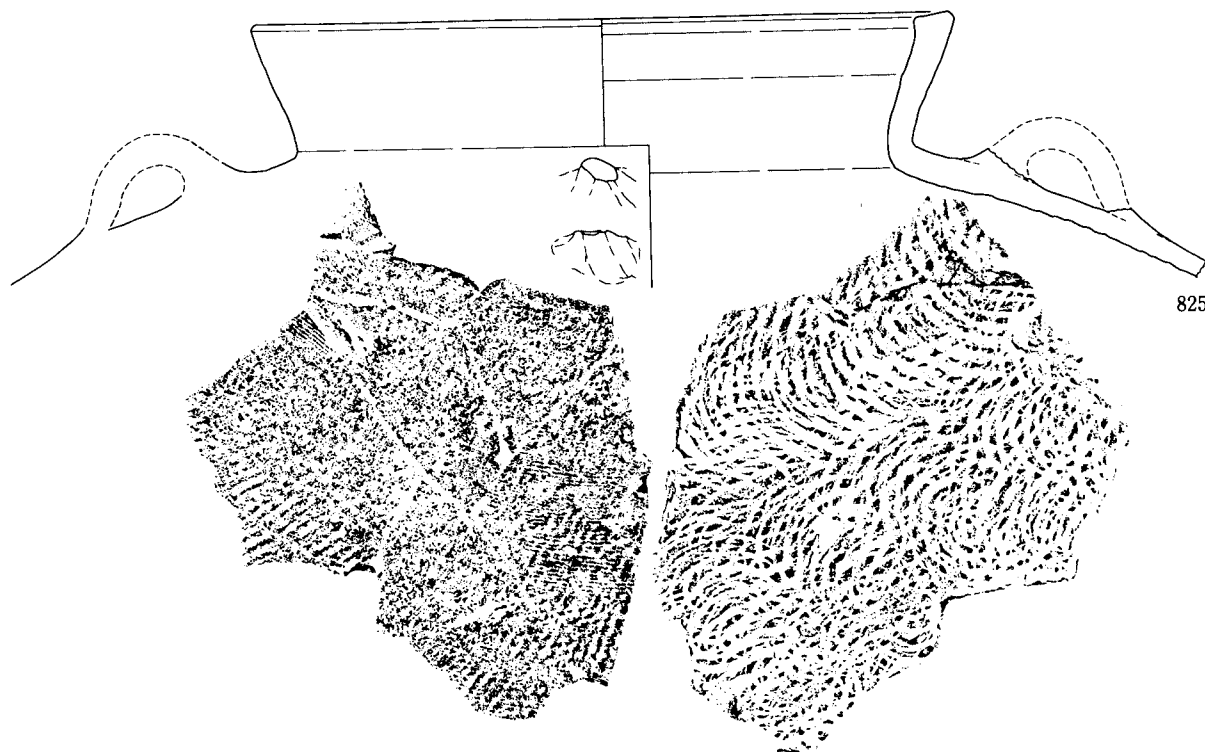
第143图 1号窯出土土器 壺(3)



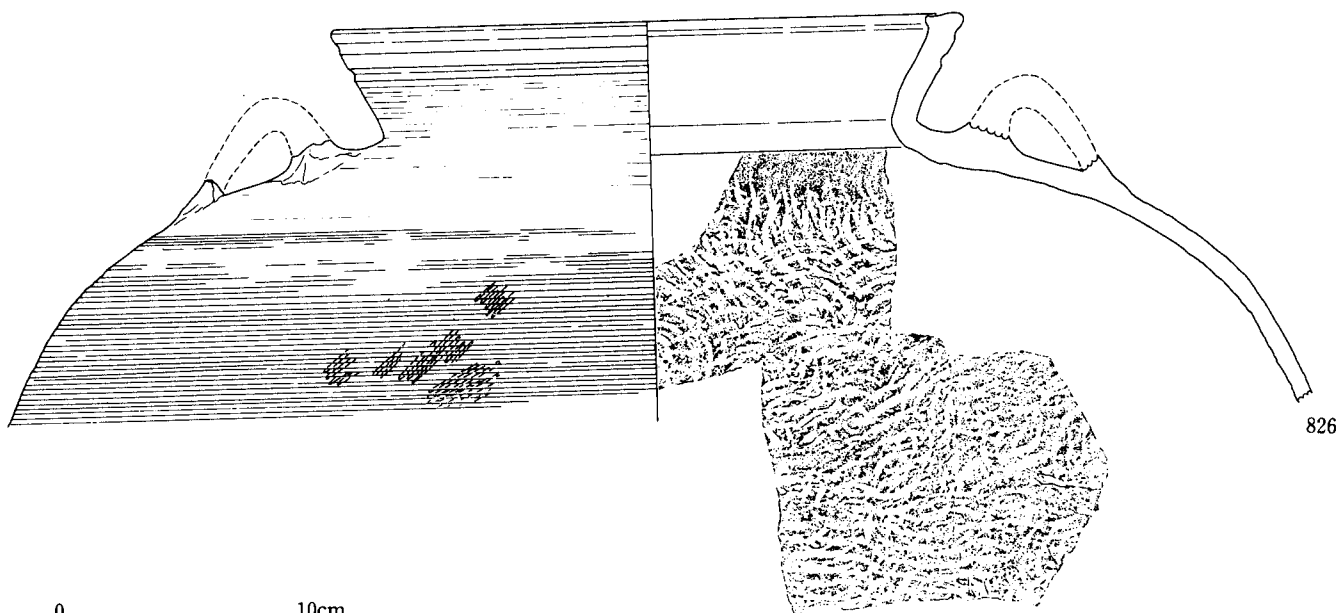
823



824



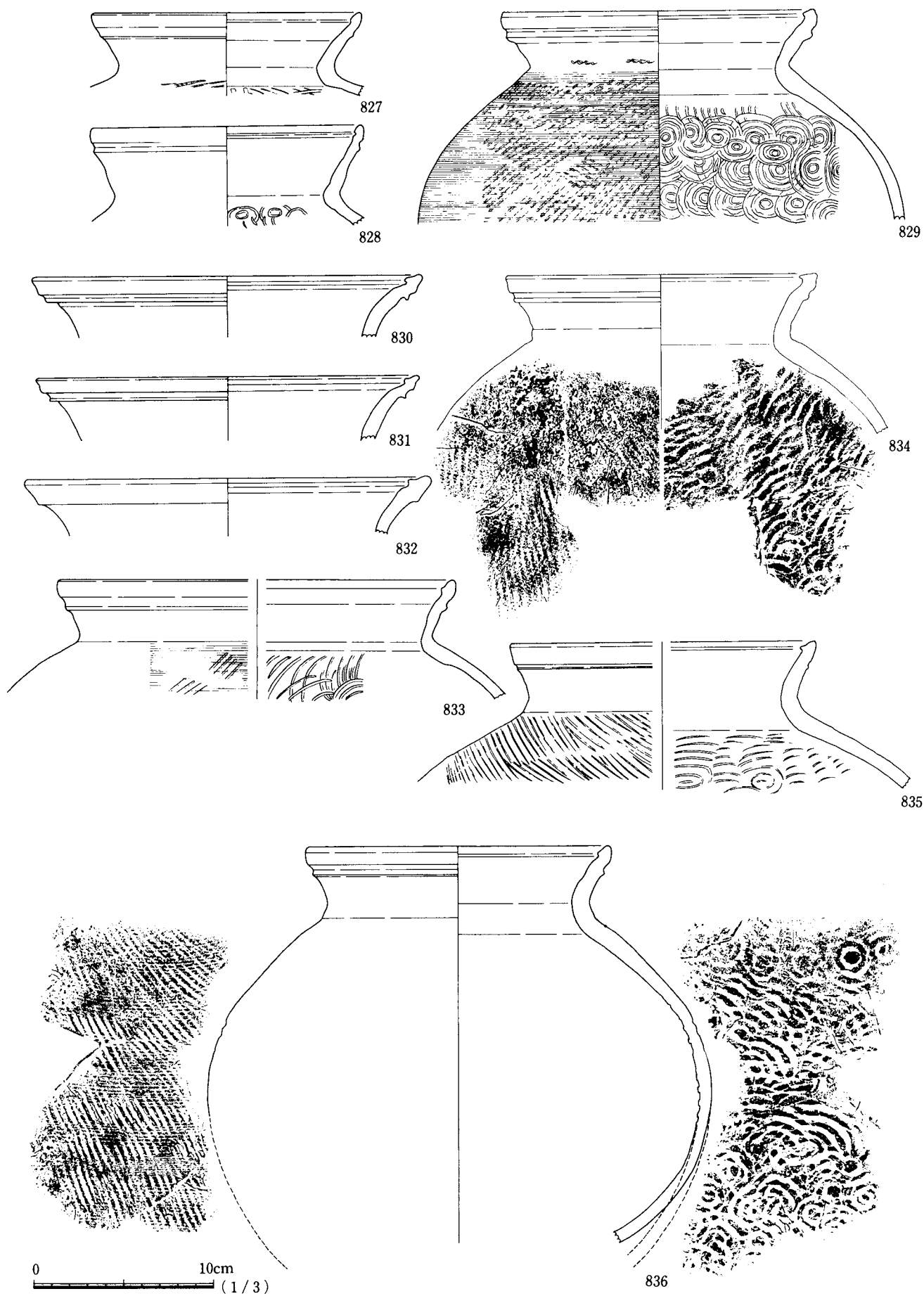
825



826

0 10cm (1/3)

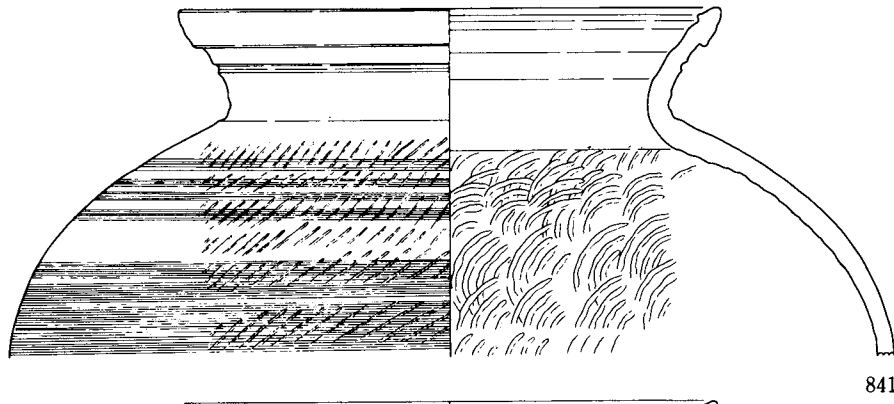
第144图 1号窑出土土器 甗(1)



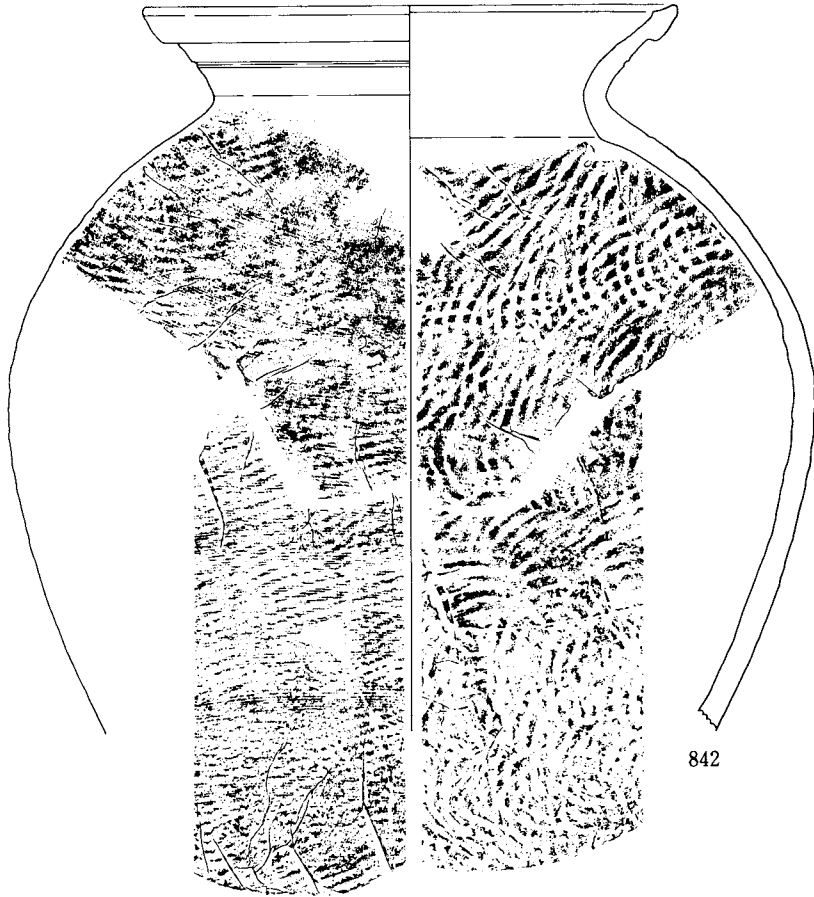
第 145 图 1 号窑出土土器 甗(2)



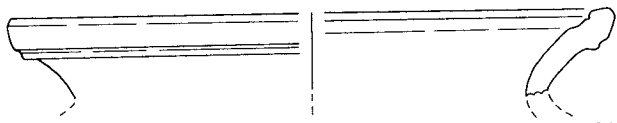
第146图 1号窑出土土器 甗(3)



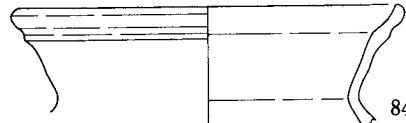
841



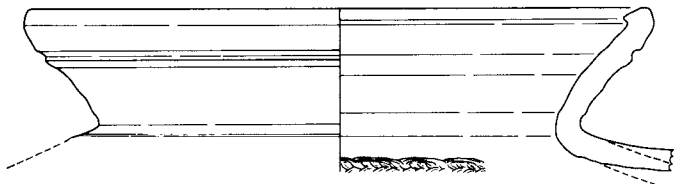
842



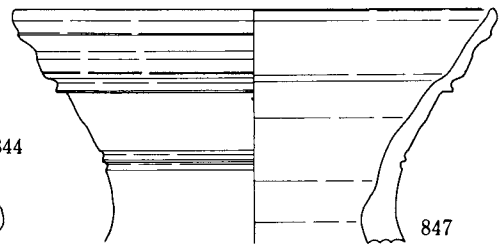
843



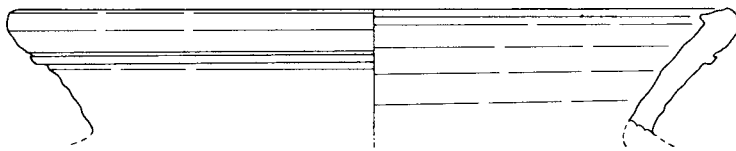
846



844



847

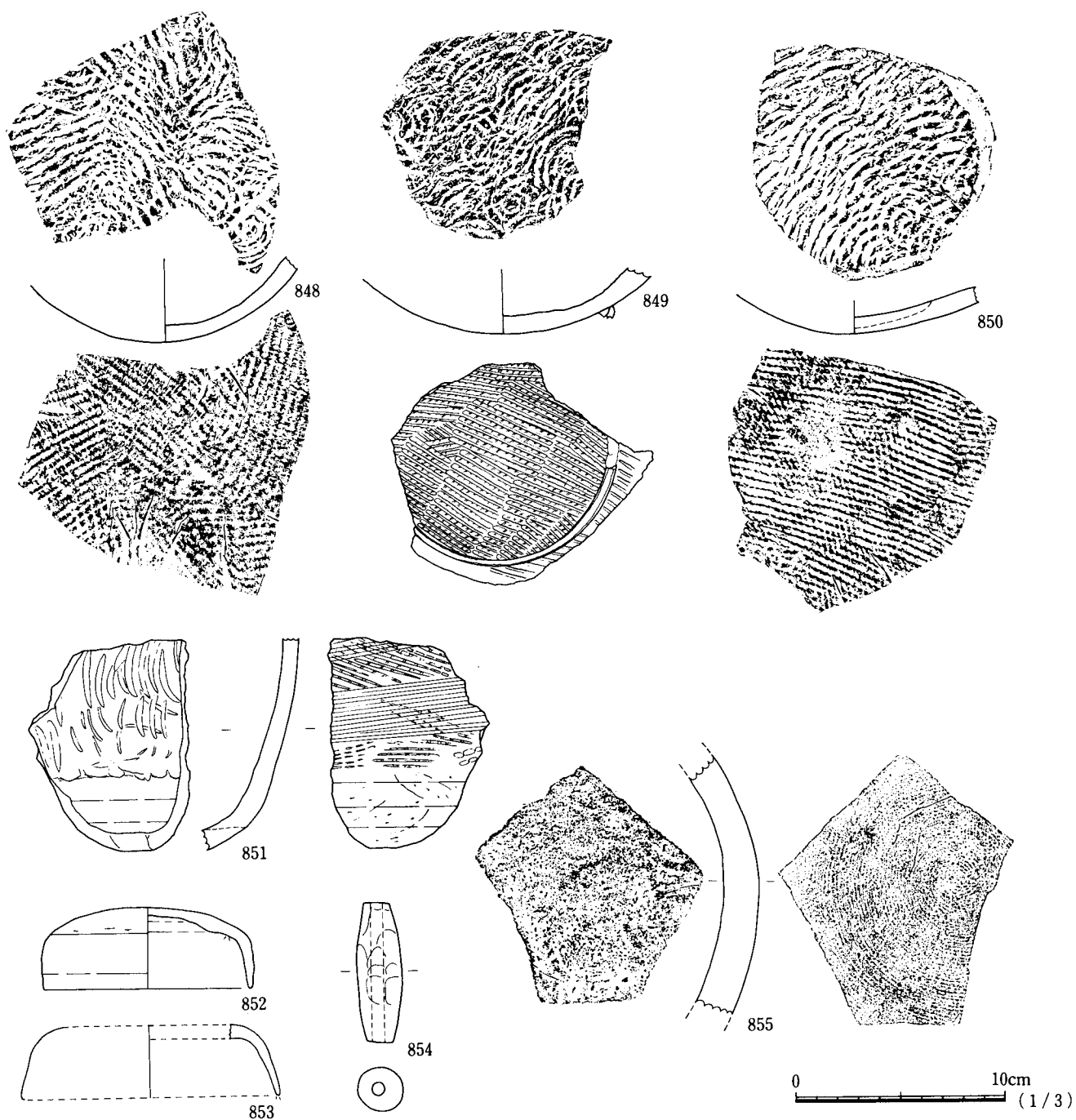


845

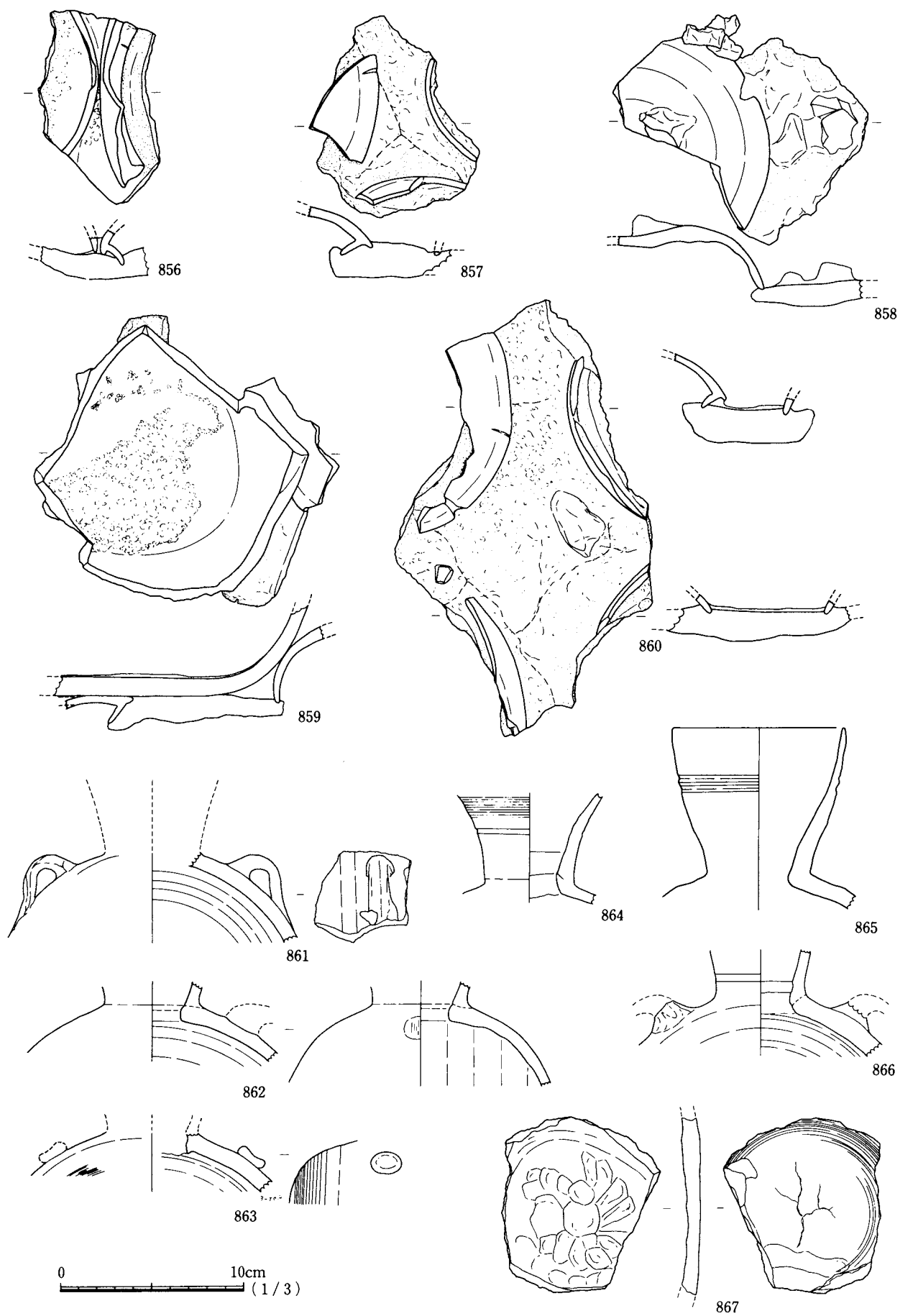
0 10cm (1/3)

第147图 1号窯出土土器 甕(4)

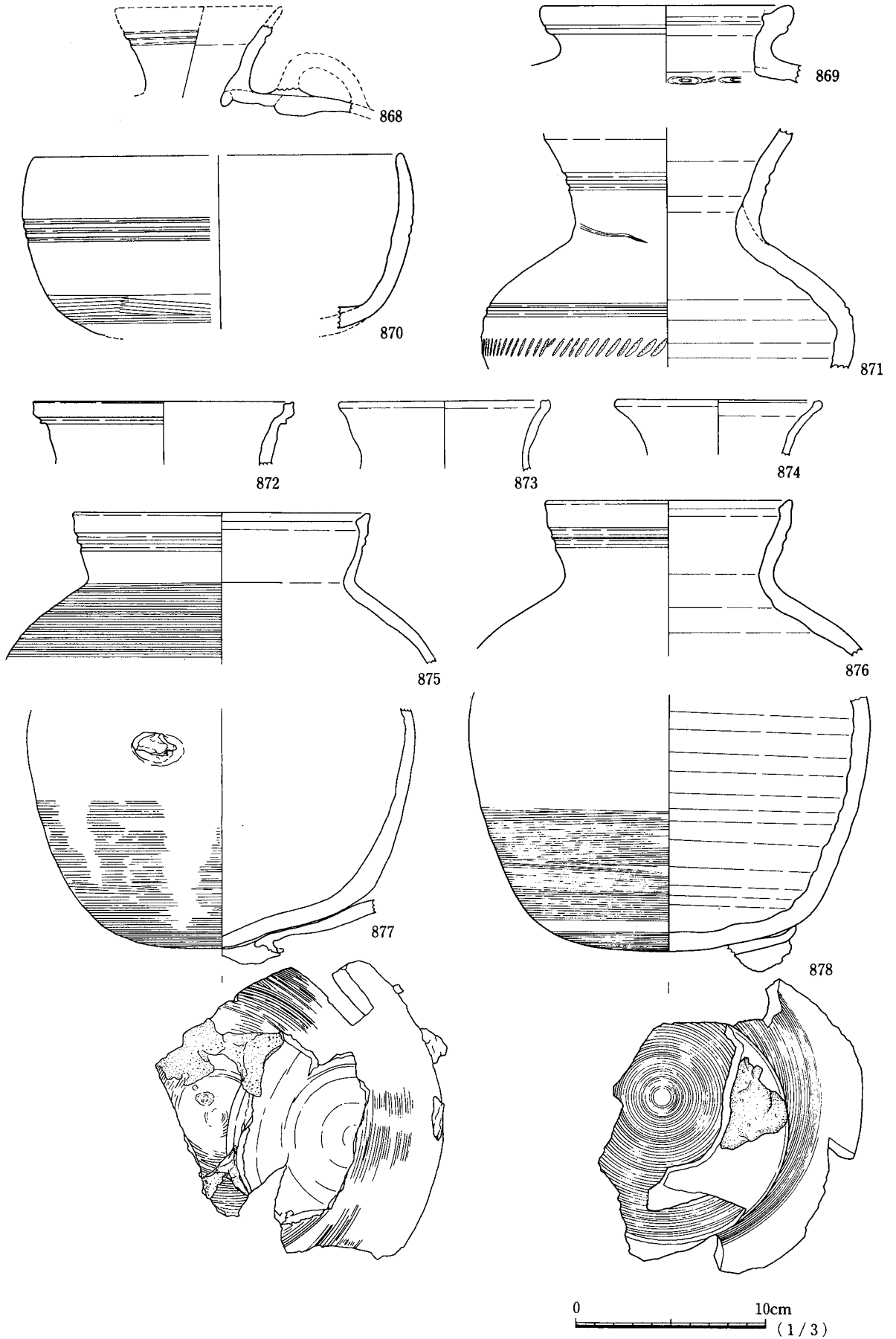




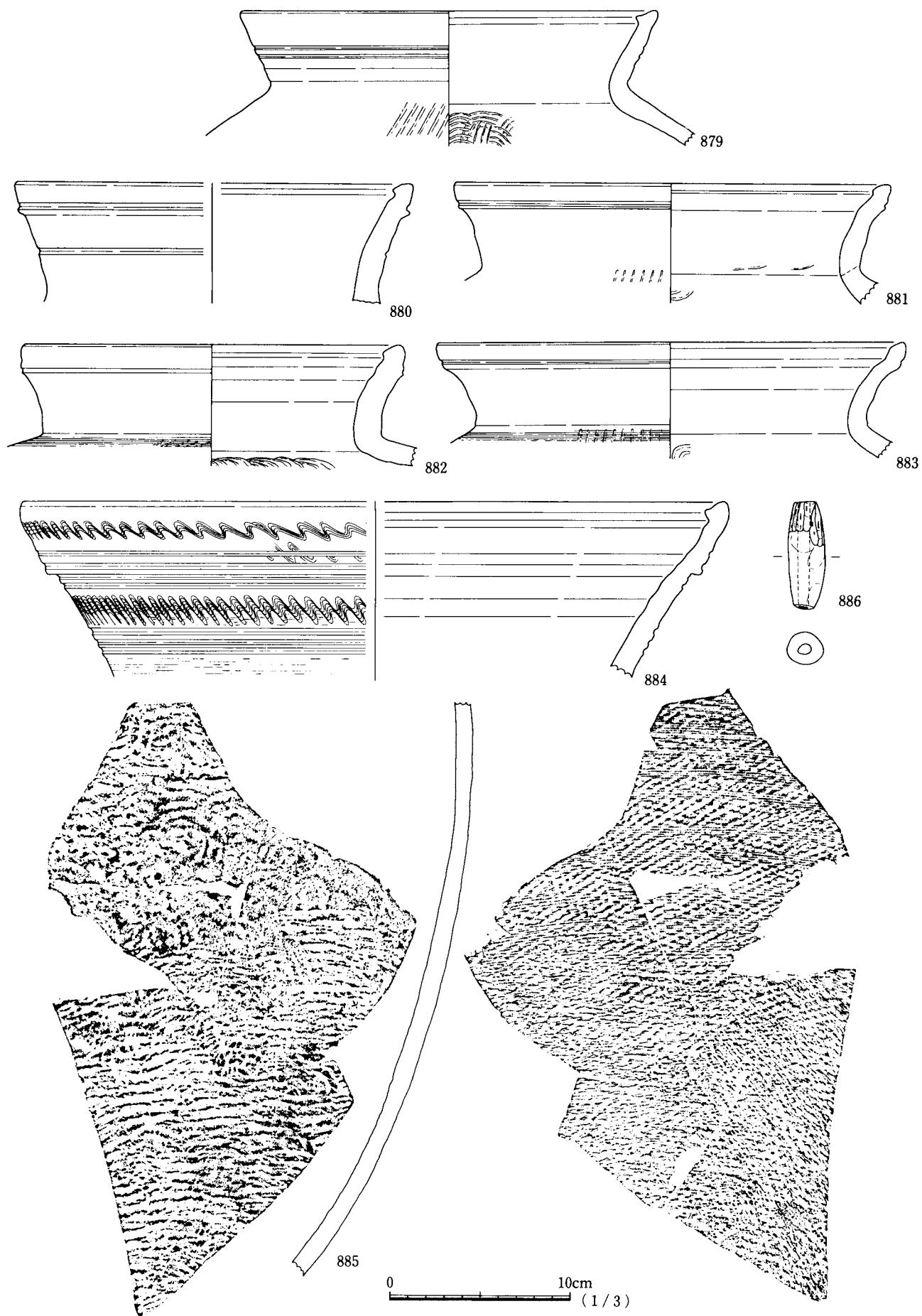
第148图 1号窯出土土器 甕(5)、蓋、陶錘、器種不明品



第149图 1号窯出土土器 焼台転用土器、所属窯不明土器 提瓶

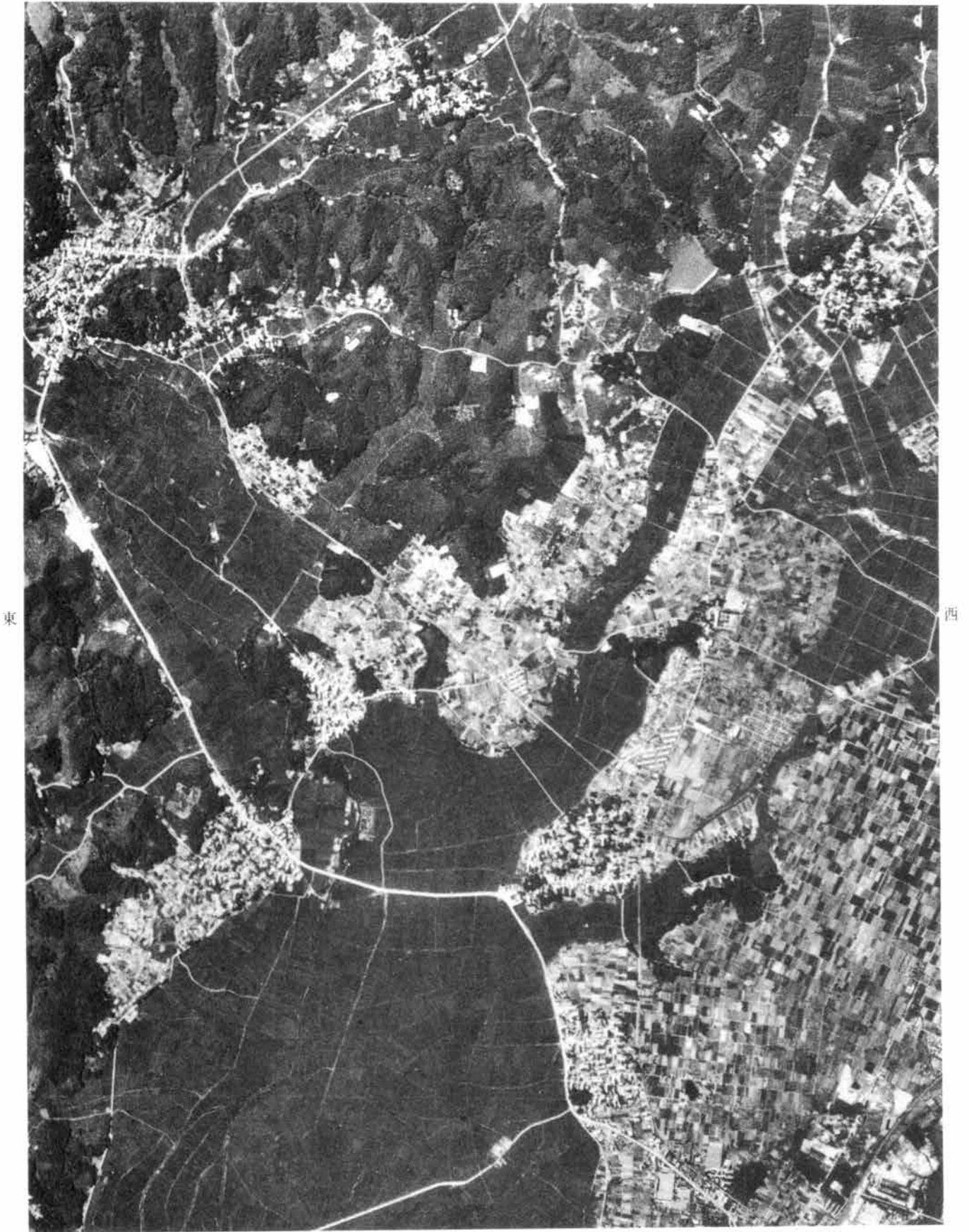


第150图 所属窯不明土器 平瓶、横瓶、鉢、壺



第151图 所属窑不明土器 甕、陶锤





遺跡周辺(1947年)



遺跡周辺 (1989年)

(1/10,000)



林遺跡全景





中央丘陵遠景



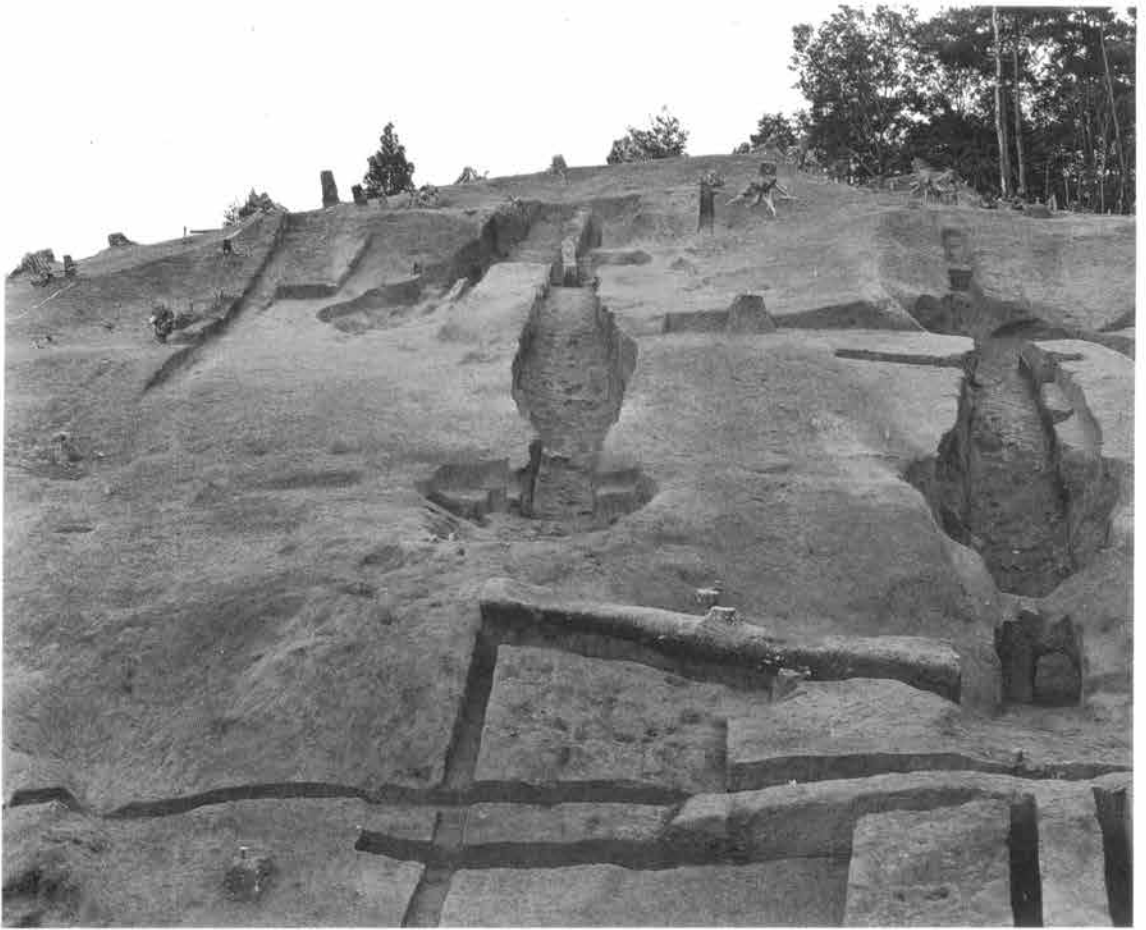
オオカミダニ2・1号窟



灰原検出状況



灰原掘り下付



オオカミダニ2号窯全景



完掘後



断ち割り後



奥壁部層位



焼成部層位



焚口部層位



焚口部壁断ち割り



床面土器出土状況1(焚口部から)



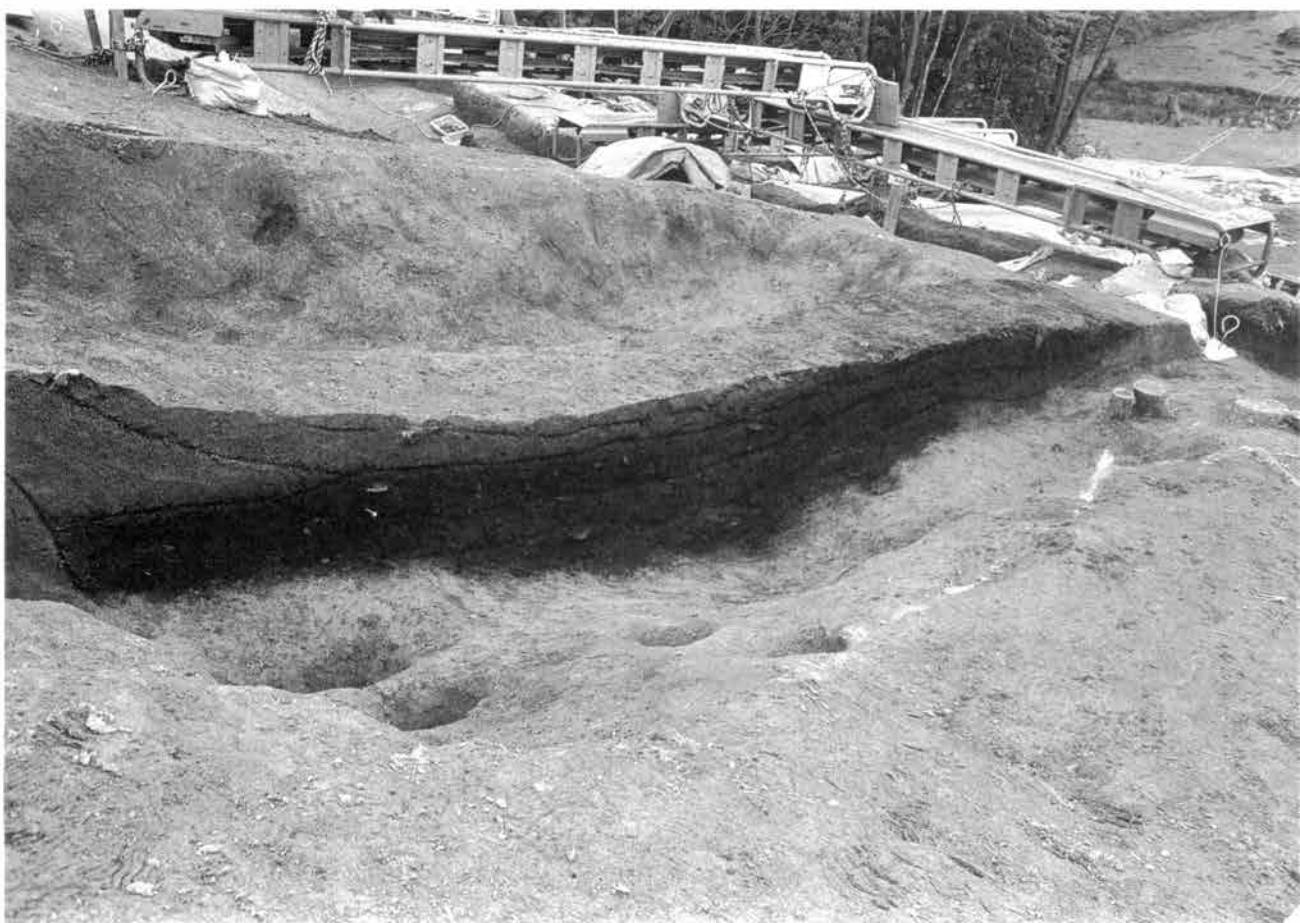
床面土器出土状況2(焼成部から)



床面上器出土状況3(詳細)



前庭部層位(南面)

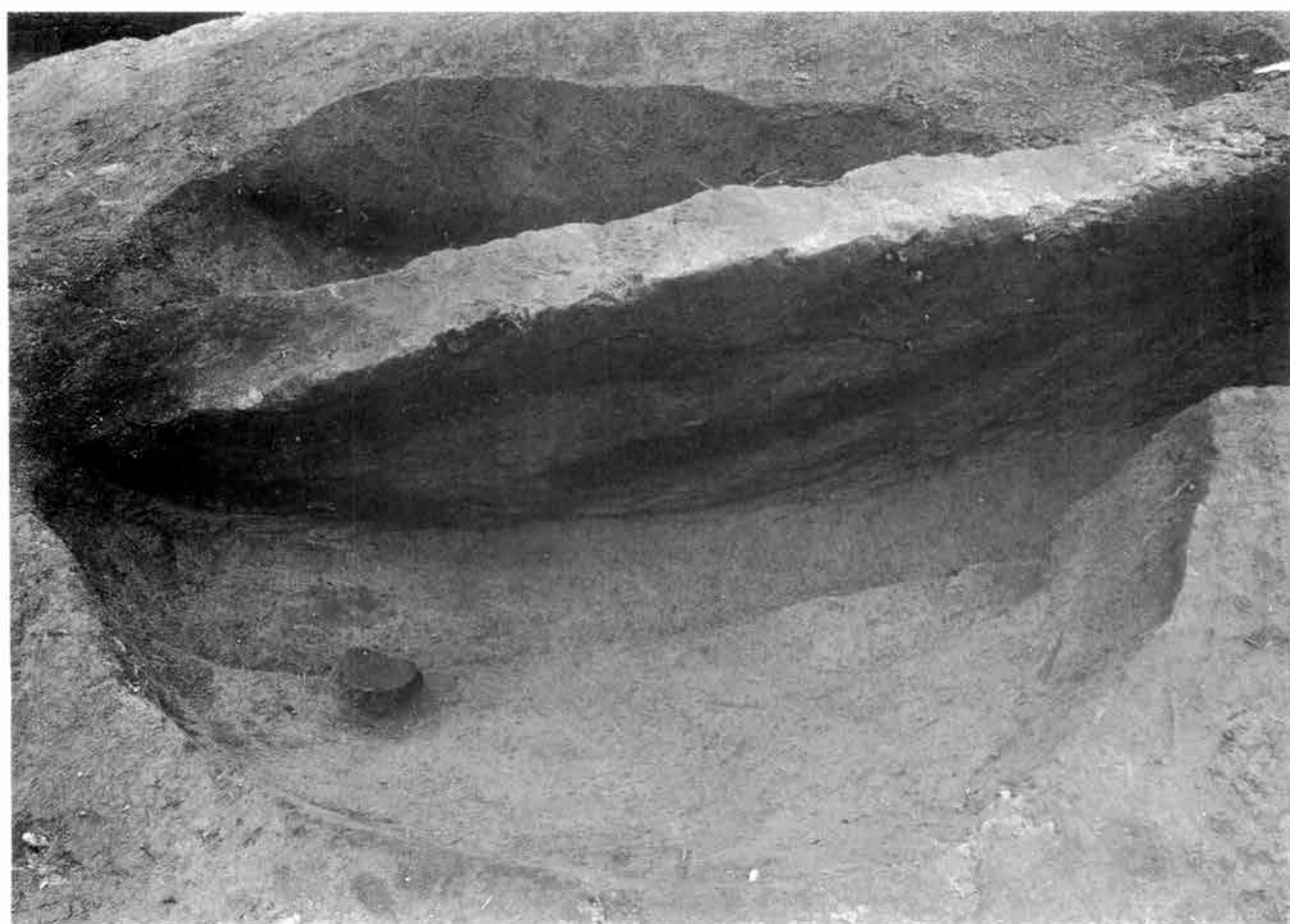


前庭部層位(北面)





煙道全景



煙道層位(上層)



煙道層位(下層、南面)



煙道層位(下層、北面)



煙道貼り床1(南面)



煙道貼り床2(南面)



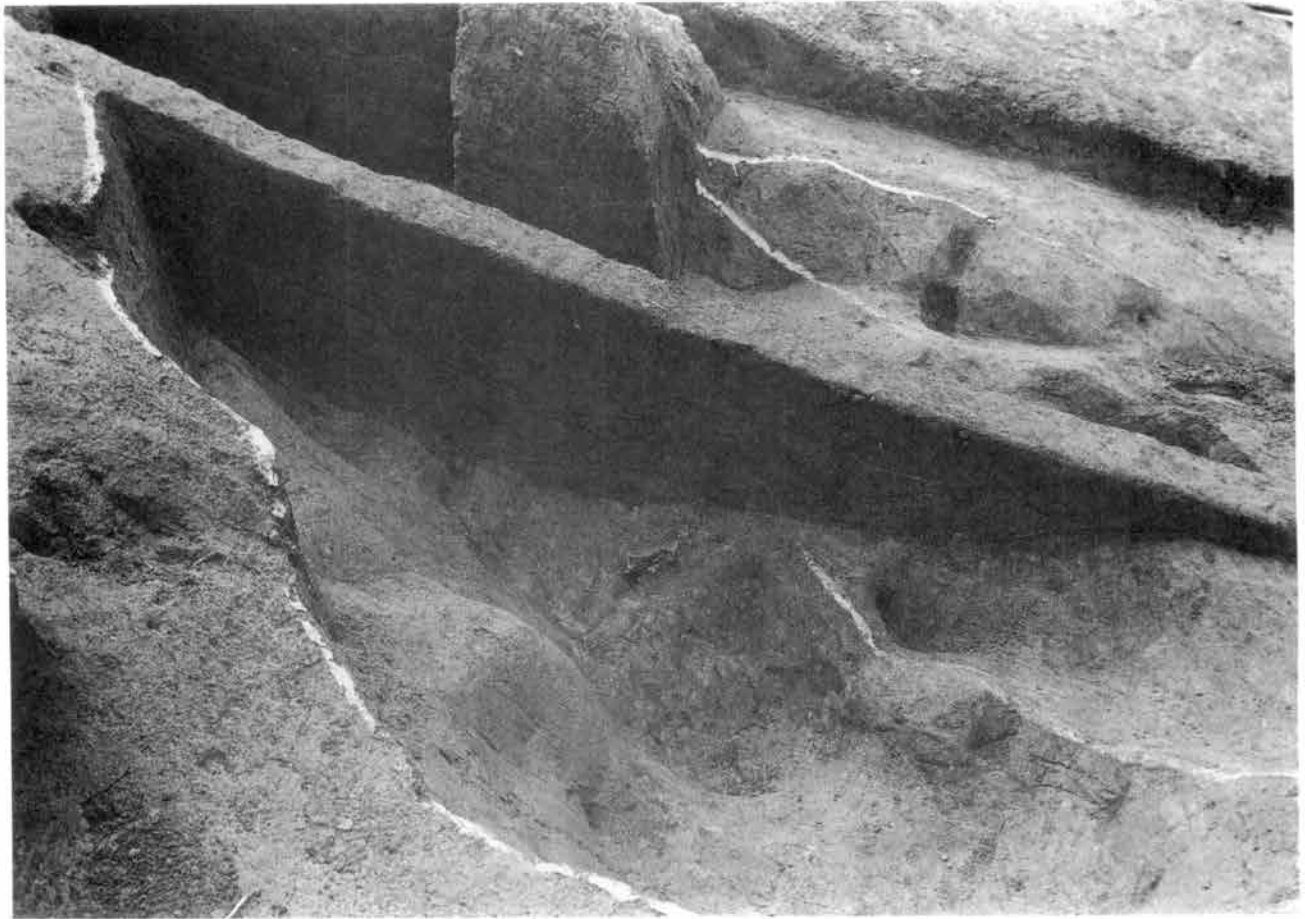
煙道貼り床3(北面)



煙道貼り床4(北面)



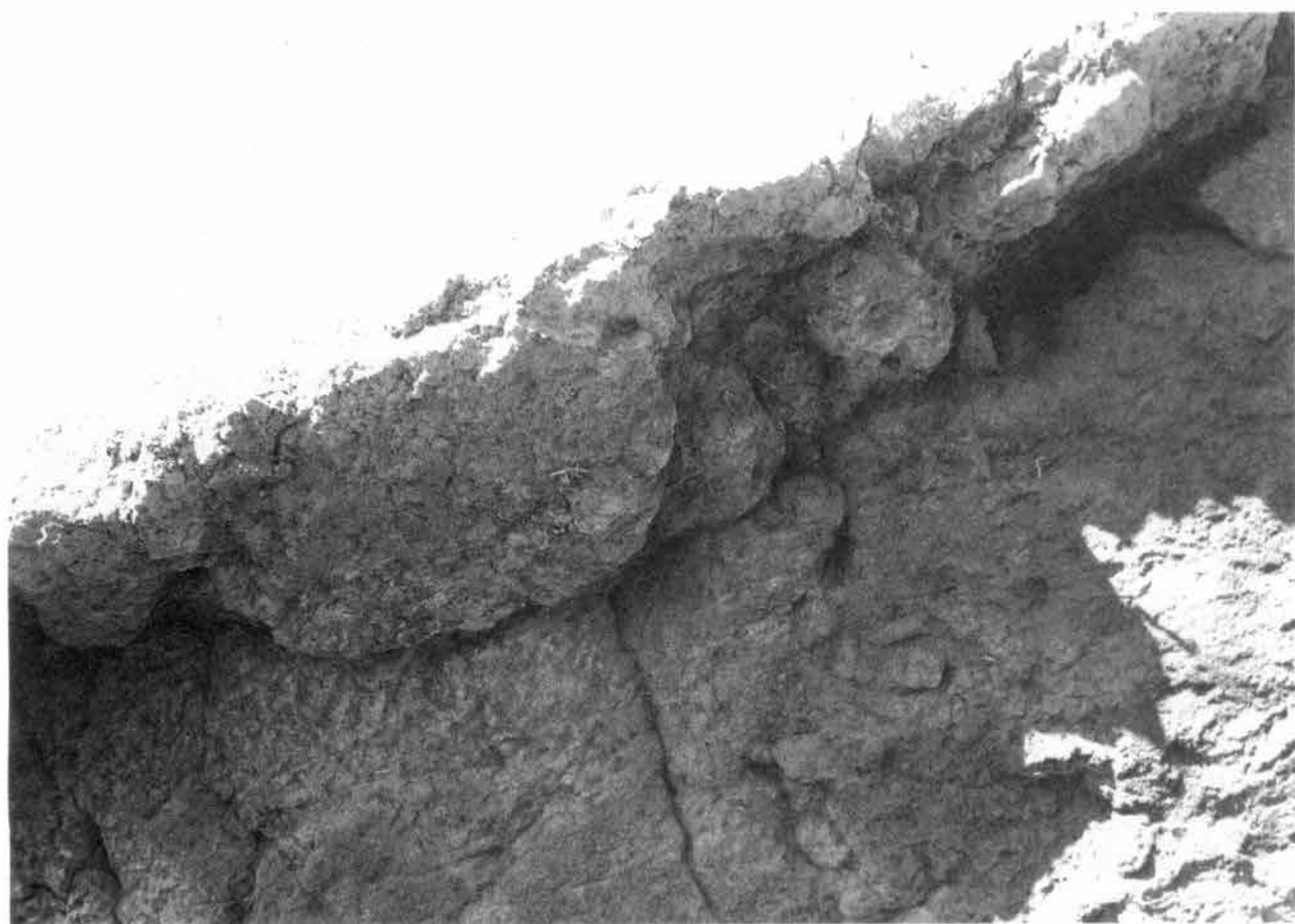
付属溝層位



付属土坑層位



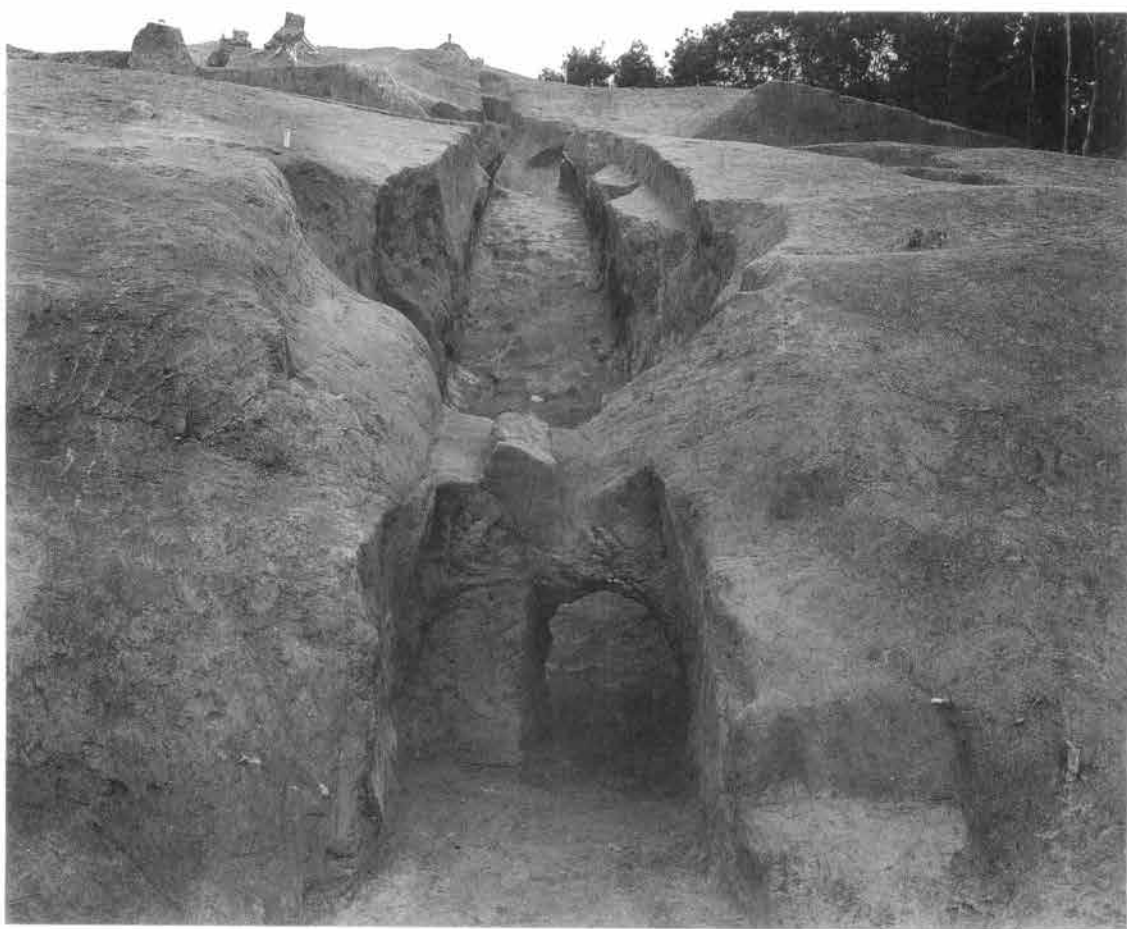
付属土坑・付属溝



焚口部天井(北壁)



オオカミダニ1号窟全景



完掘後

焚口部層位



北壁



焚口部天井1

南壁



焚口部天井2

南壁下



焼成部壁断ち割り

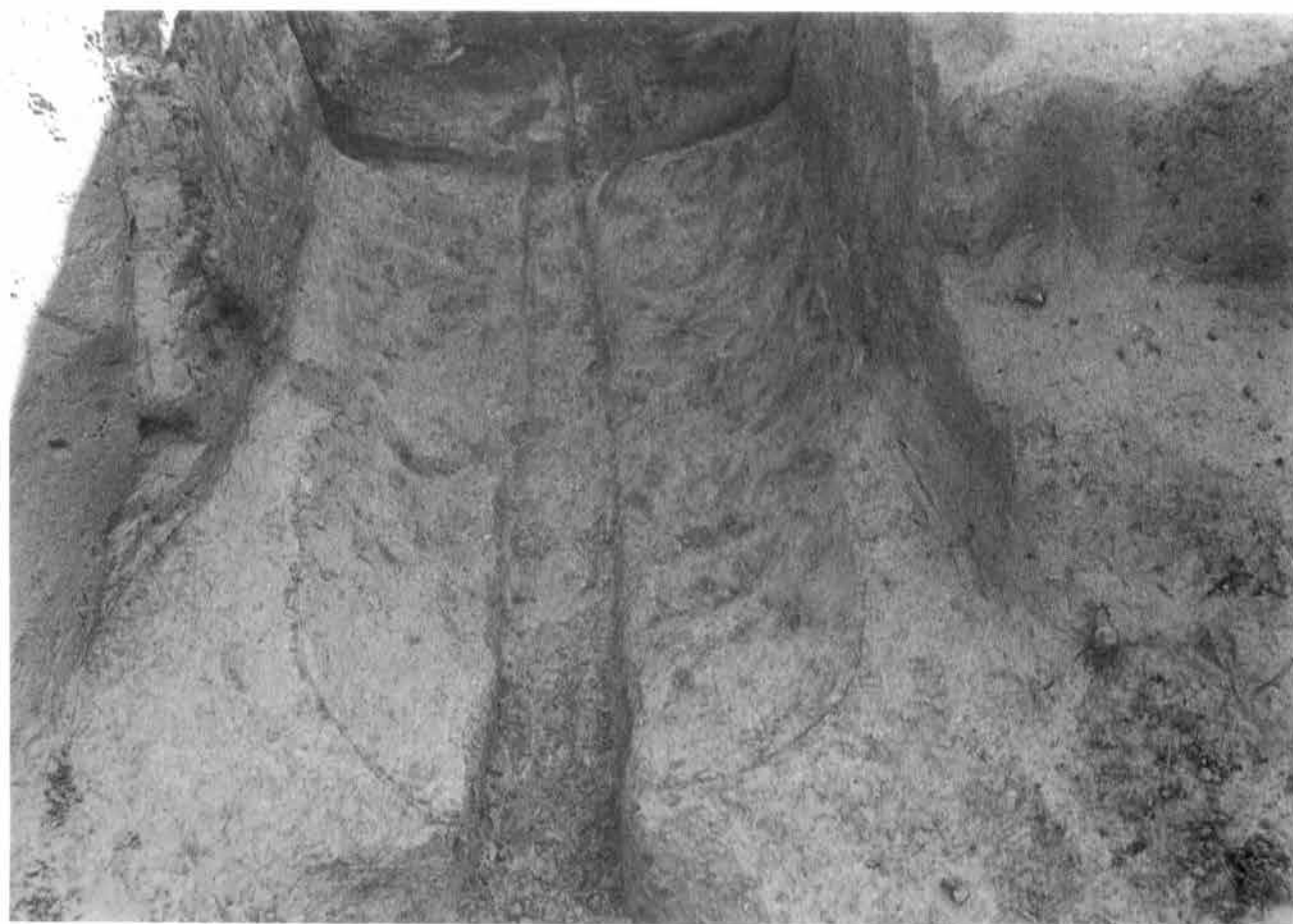


焚口部天井3





奥壁付近



焚口部舟底状ビット



煙出し部



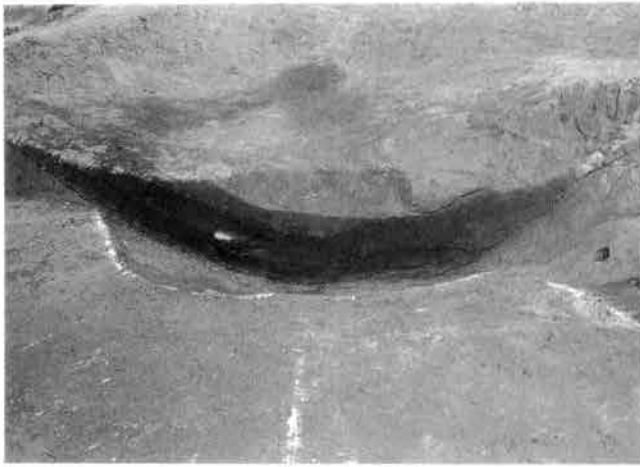
煙道全景(南から)



煙道全景(北から)



付属溝・付属土坑

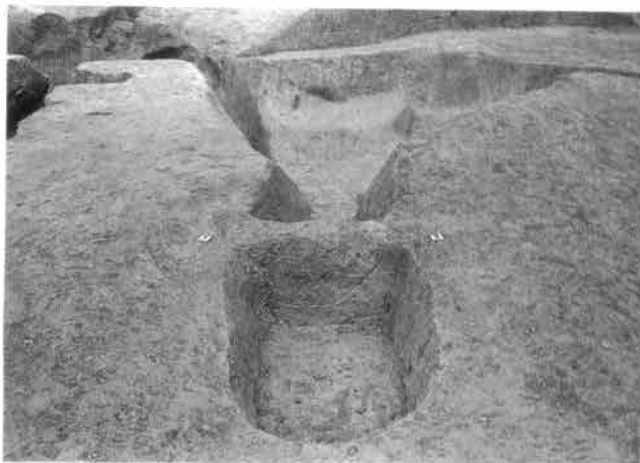


煙道層位



煙道部窯壁出土狀況

付屬溝



付屬溝層位



付屬土坑層位



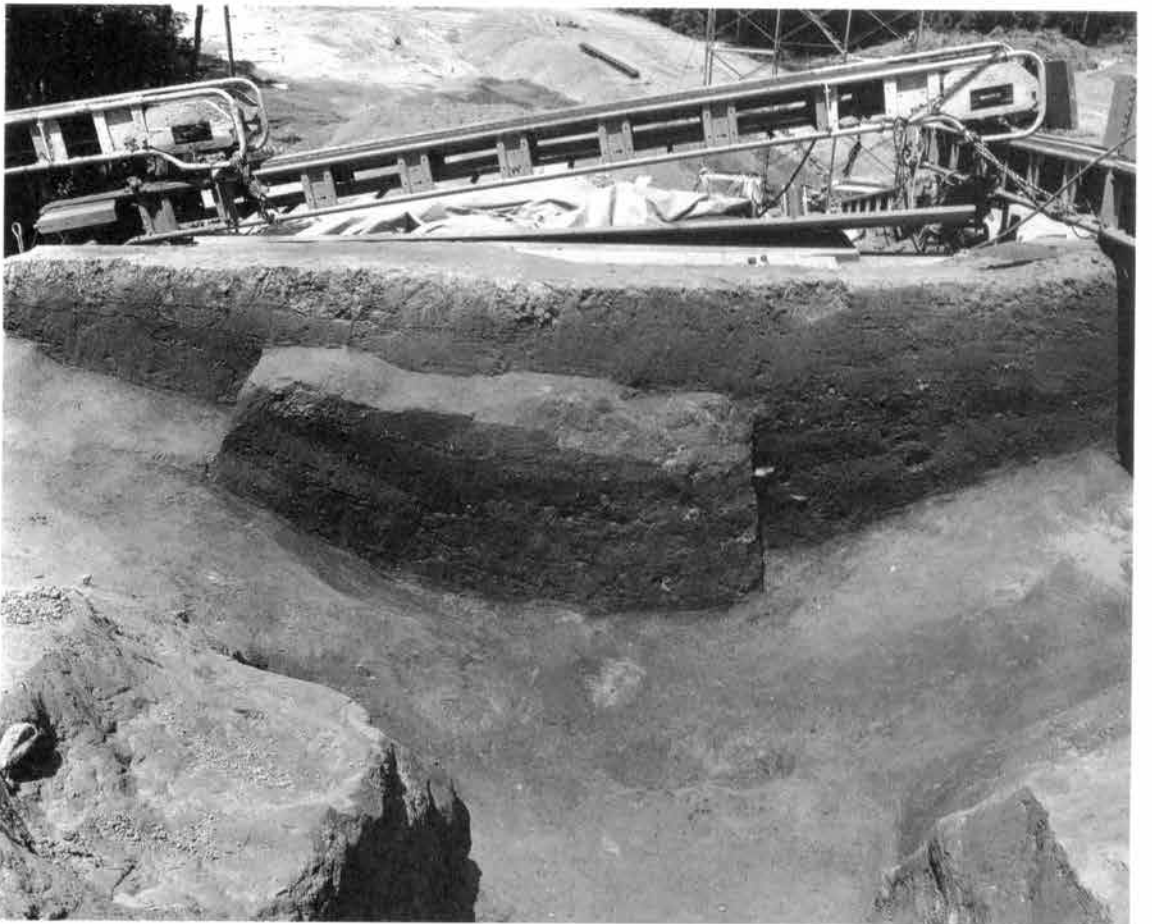
前庭部層位1(焚口部側)



前庭部層位2(灰原側)



前庭部層位3



前庭部層位4(横断面)



1号窯灰原・盛土層位



1号窯盛土内土器出土状況



1号窯盛土層位(横断面)



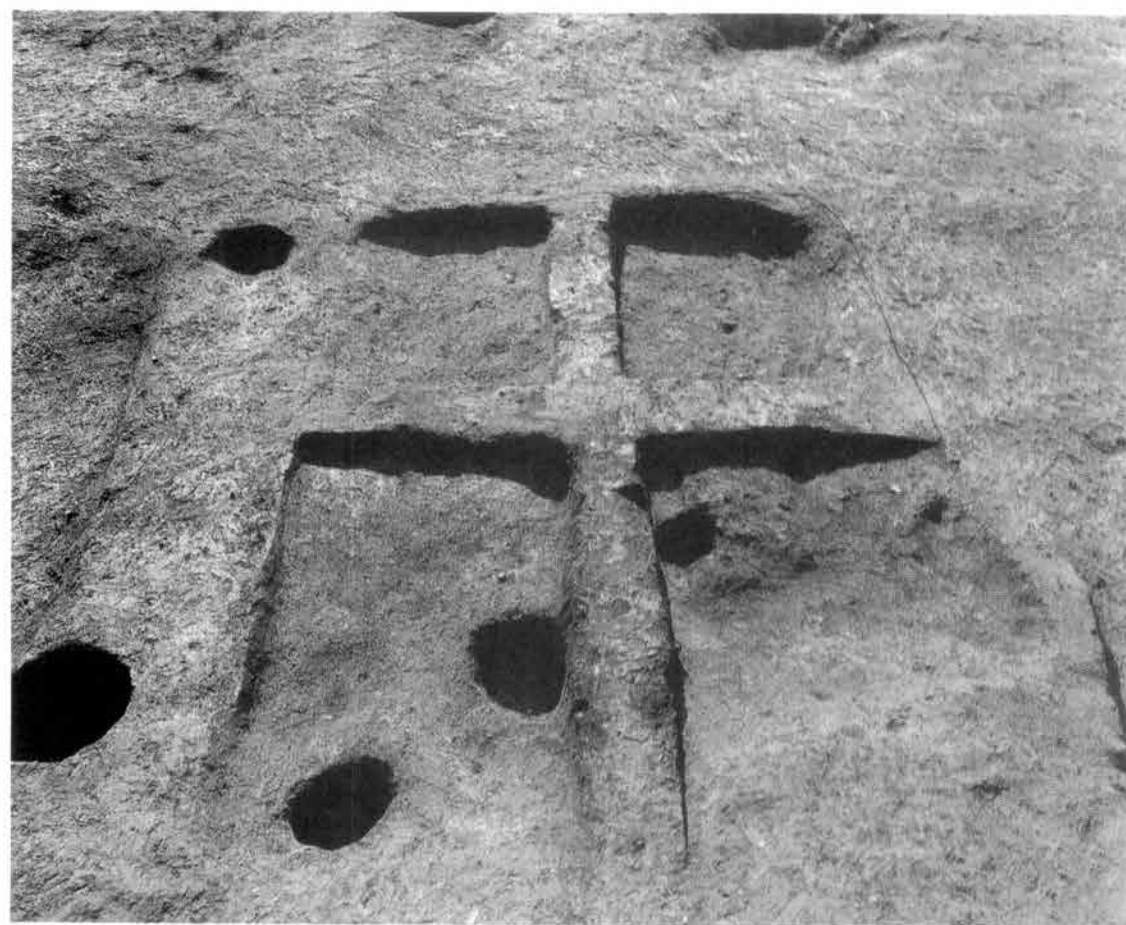
1号窯盛土層位(縦断面)





土師器焼成土坑

土器出土状況



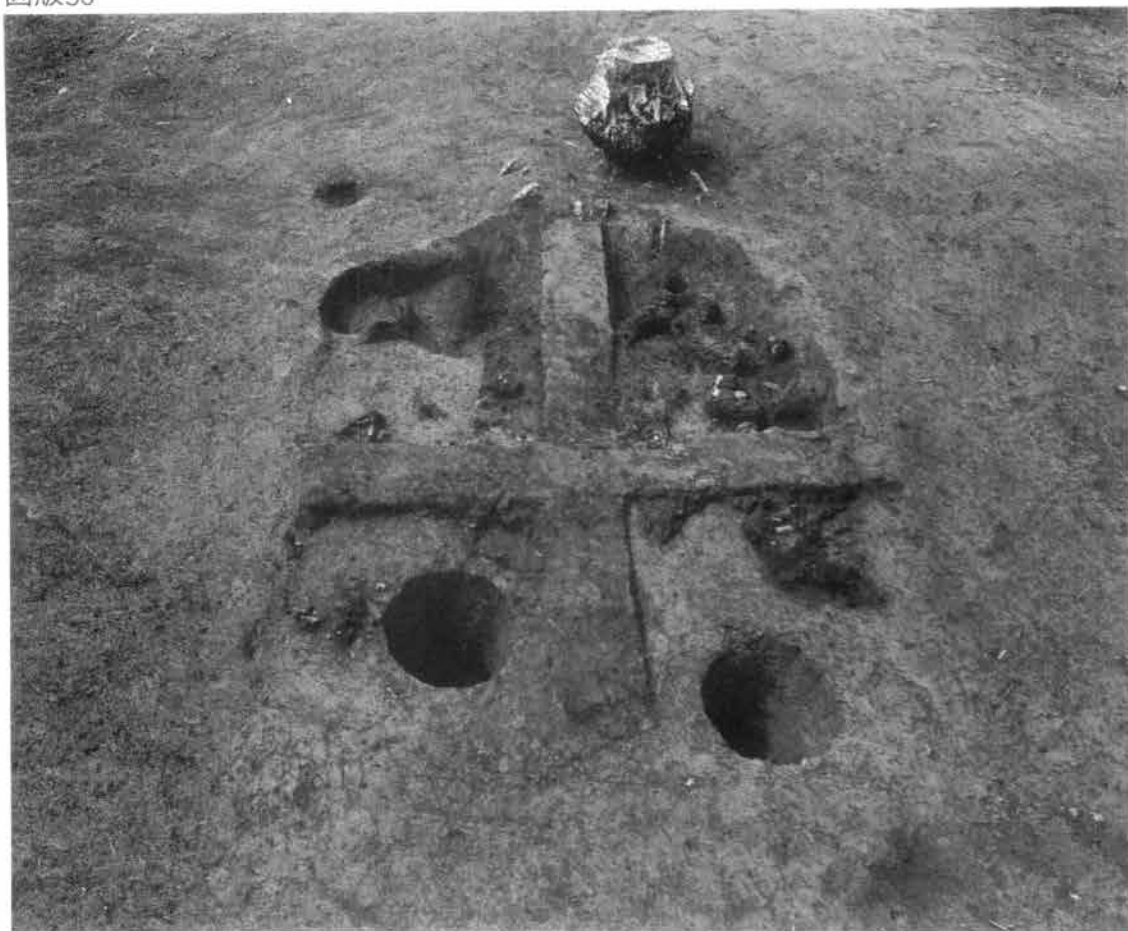
土器取り上げ後



土師器焼成土坑、第1・2・4号木炭窯付近

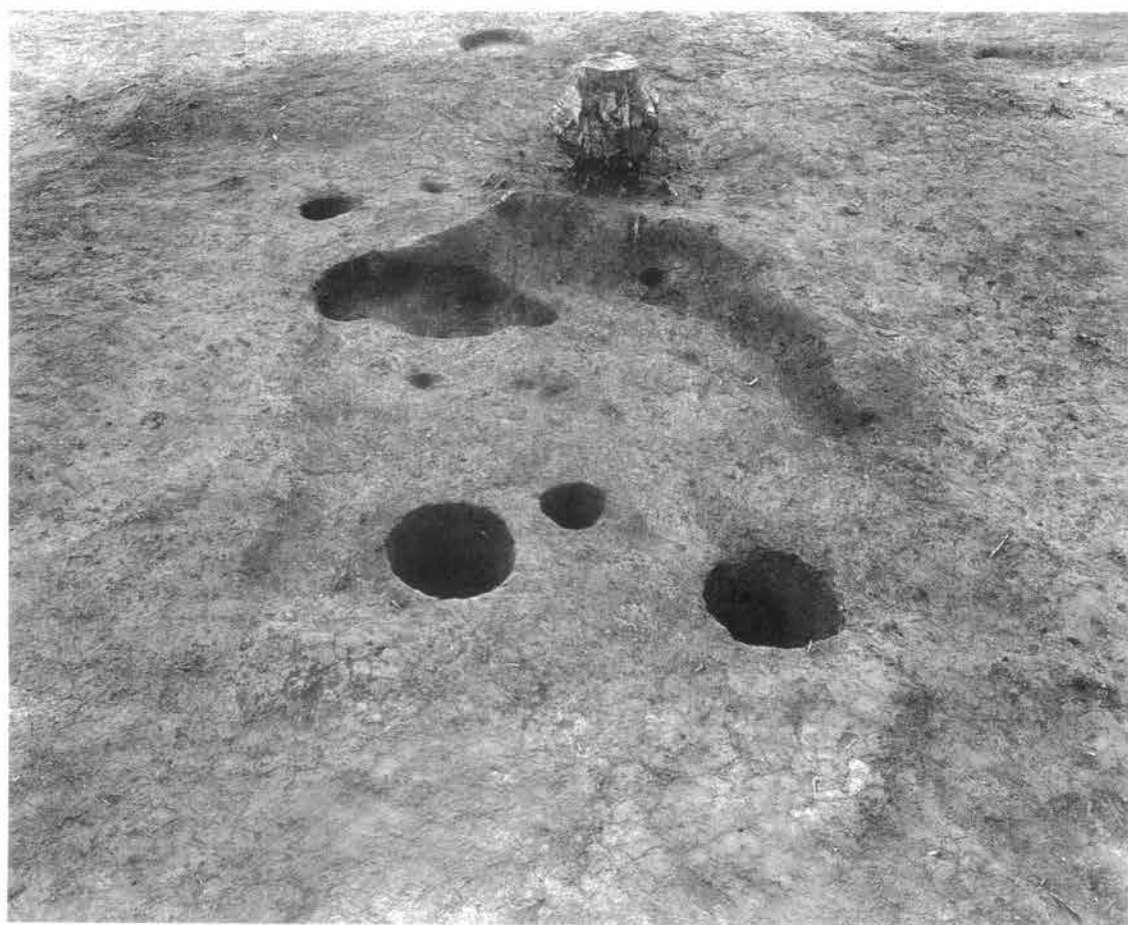


第1号木炭窯(南から)



第2号木炭窯

木炭出土状況



完掘後

第4号木炭窯



木炭出土状況



完掘後

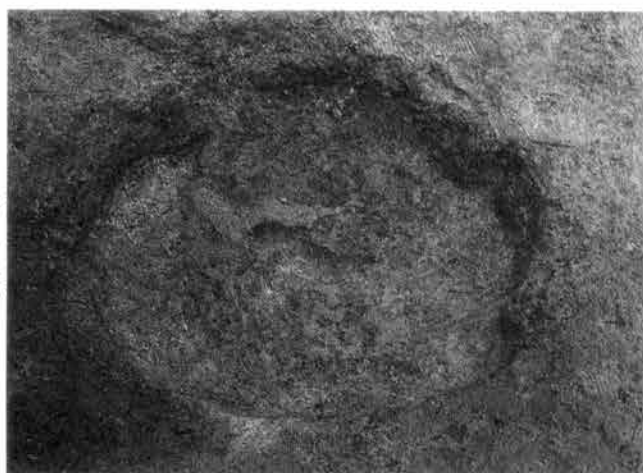


第5号木炭窯

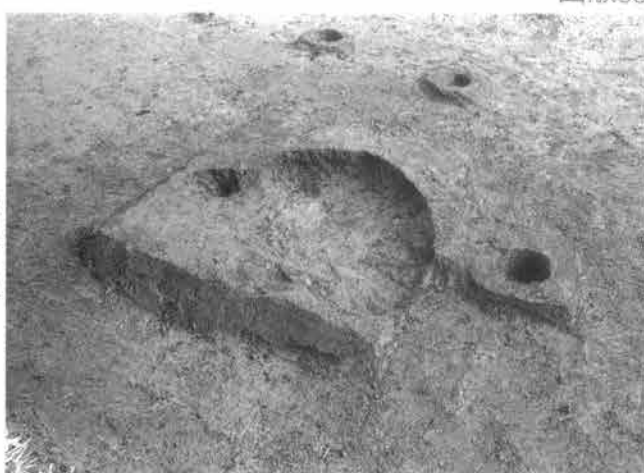


調査区壁側断面

第1号土坑



第3号土坑



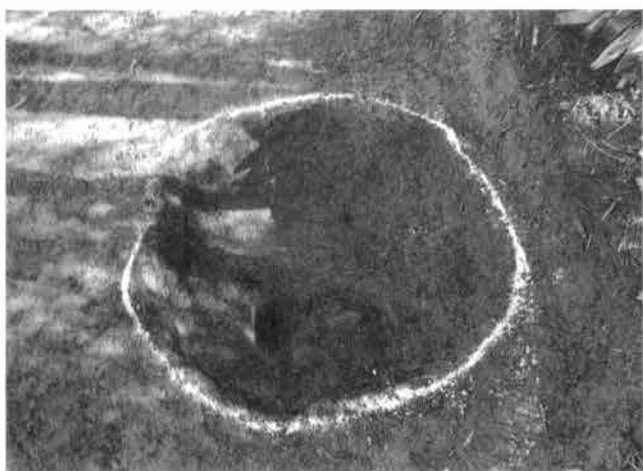
第5号土坑



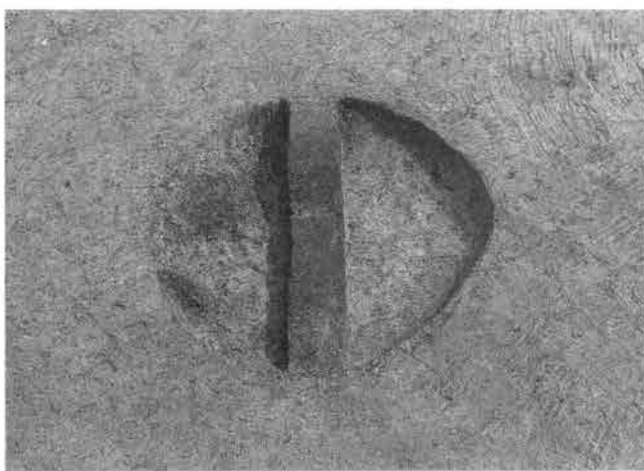
第6号土坑



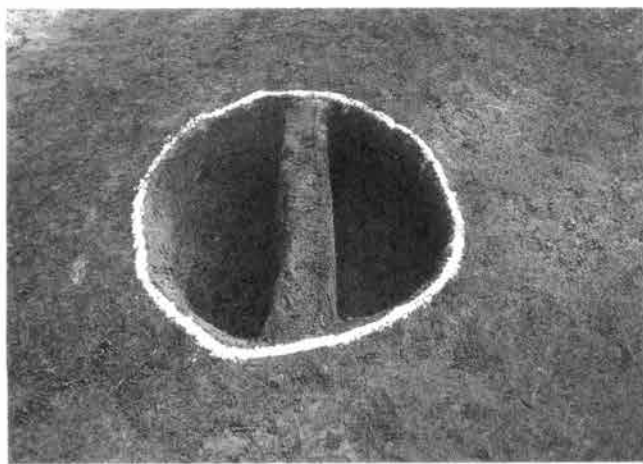
第8号土坑



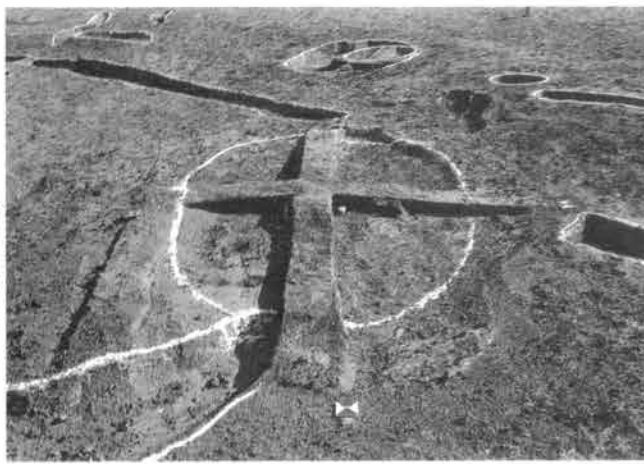
第9号土坑



第12号土坑



第13号土坑



烧土土坑



第1号土塁全景



土塁断ち割り土層



第2号土墓全景





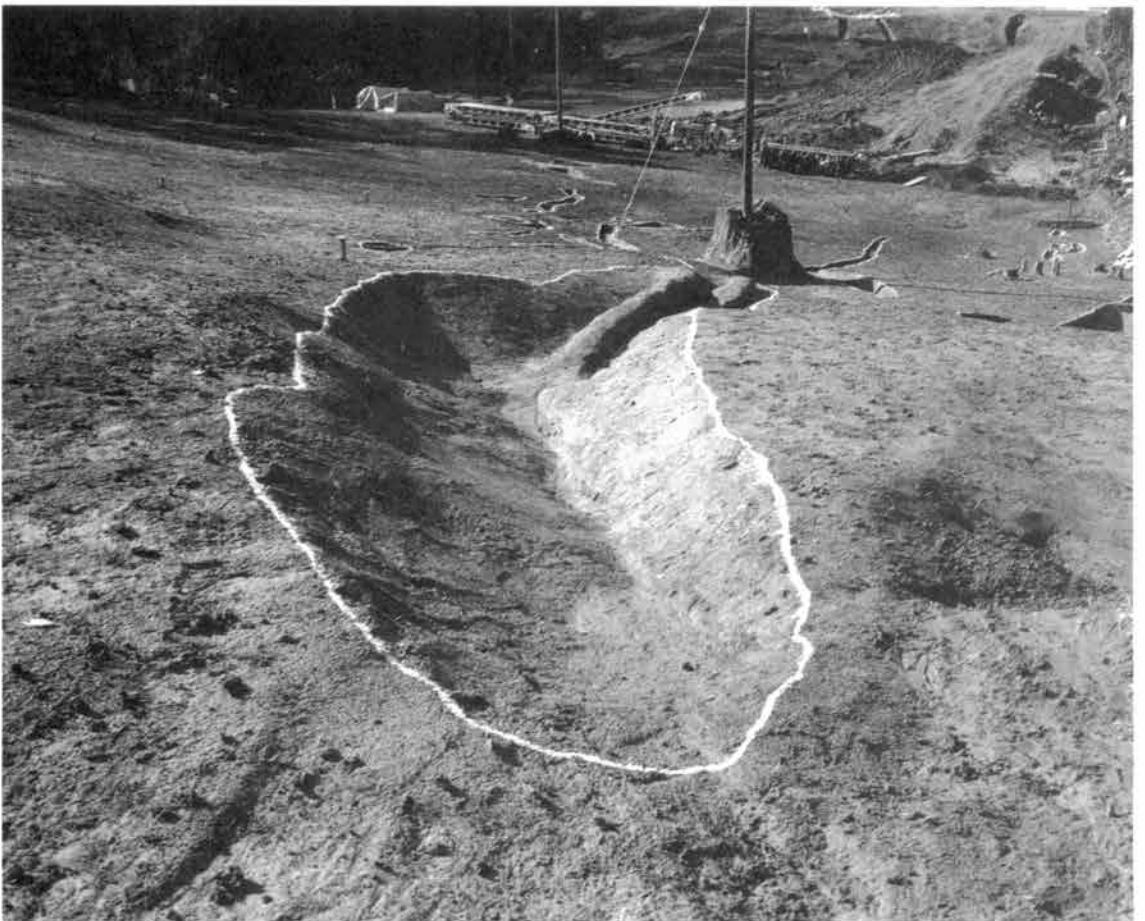
第2号土墓



第2号土墓付属溝群



第5号溝(西から)



第5号溝(北東から)



第5号溝



東から



北東から



南西から



東から

第5ab号溝

第2号土塁付属溝群

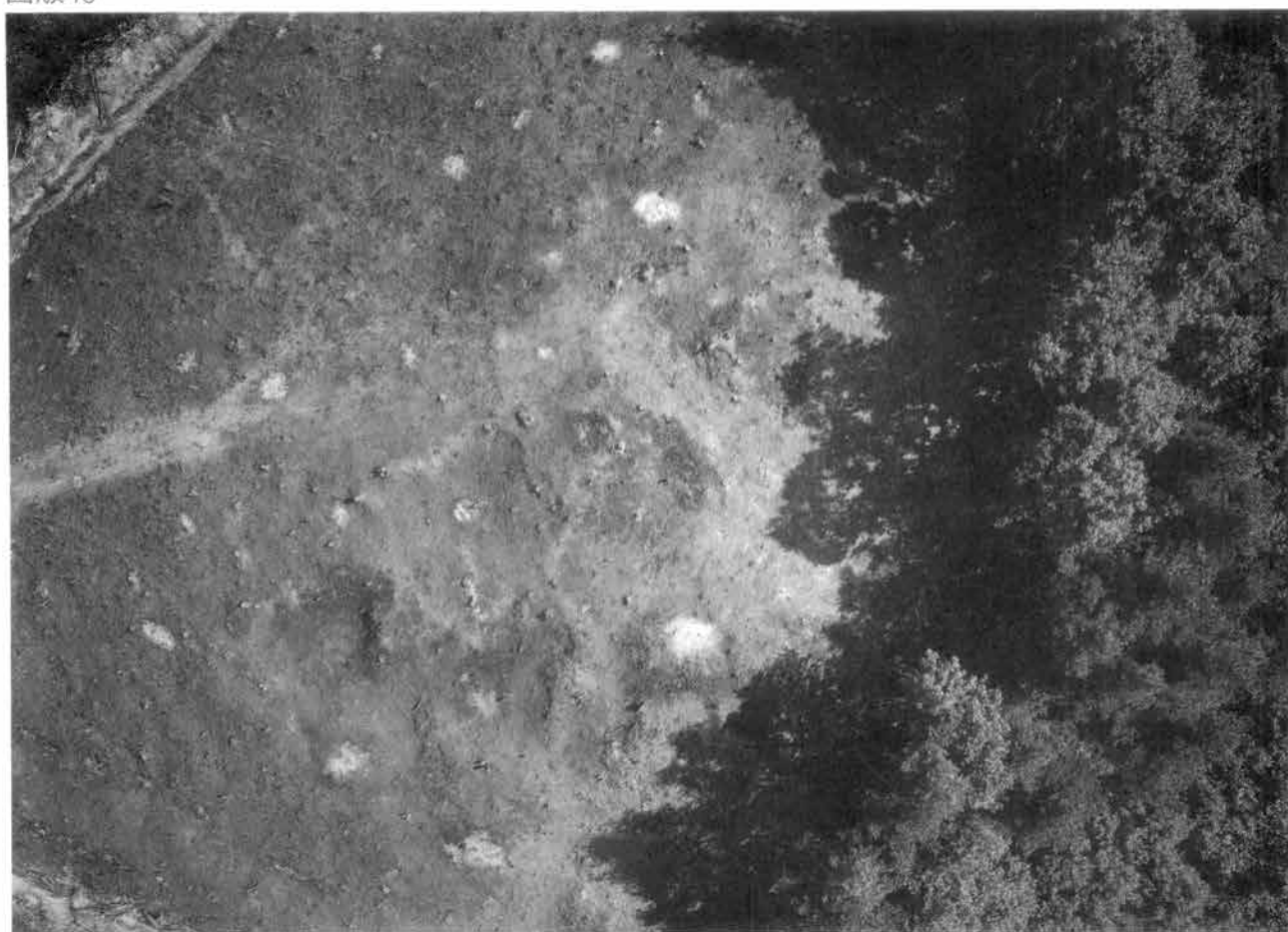
第4号溝



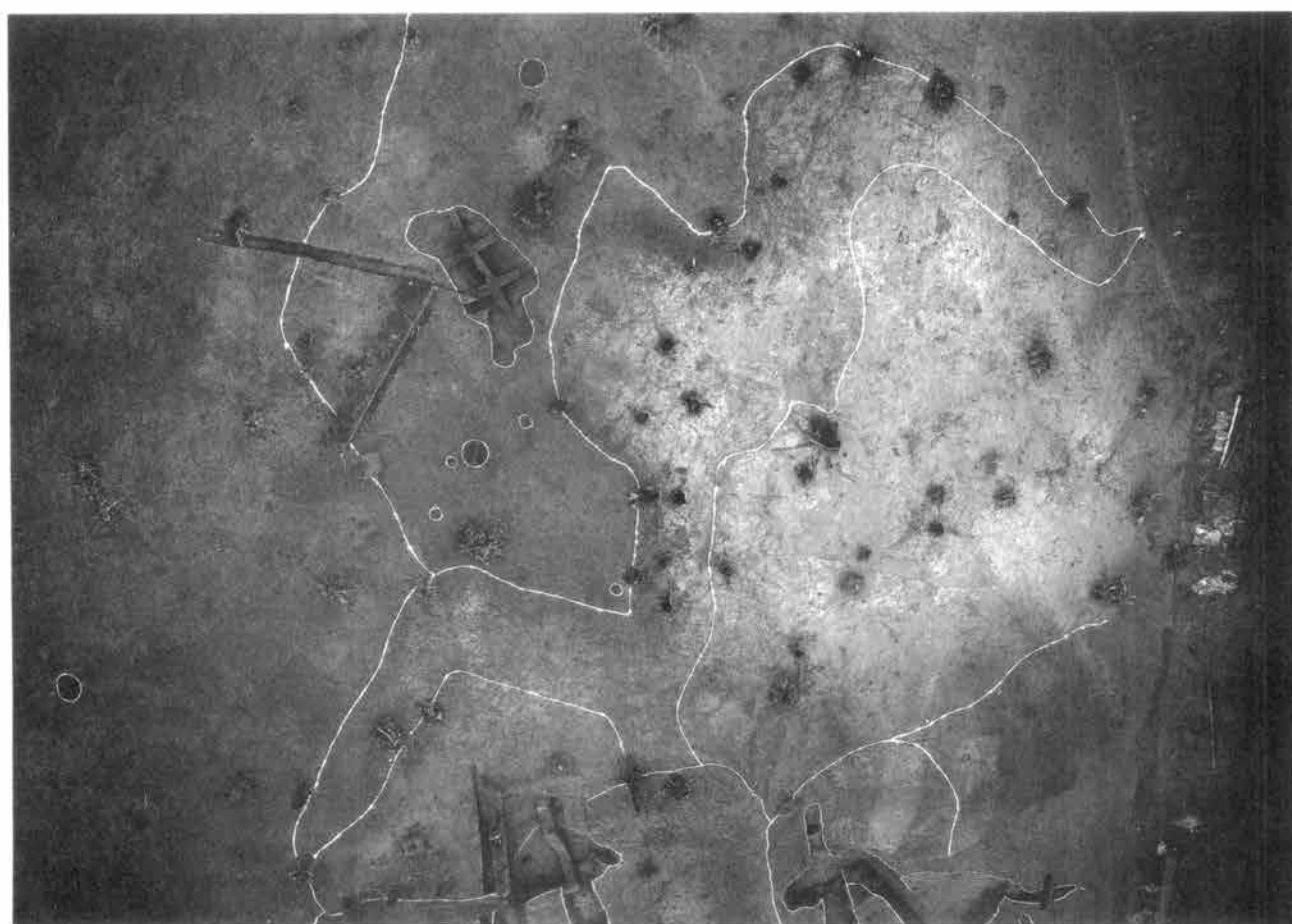
郭状遺構遠景



中央丘陵全景



主郭状遺構



完掘後

主郭状遺構(東)



主郭状遺構(西)



第1号郭状遺構



第2号郭状遺構



郭状遺構遠景



第2号郭状遺構



第2・3号郭状遺構



第3号郭状遺構



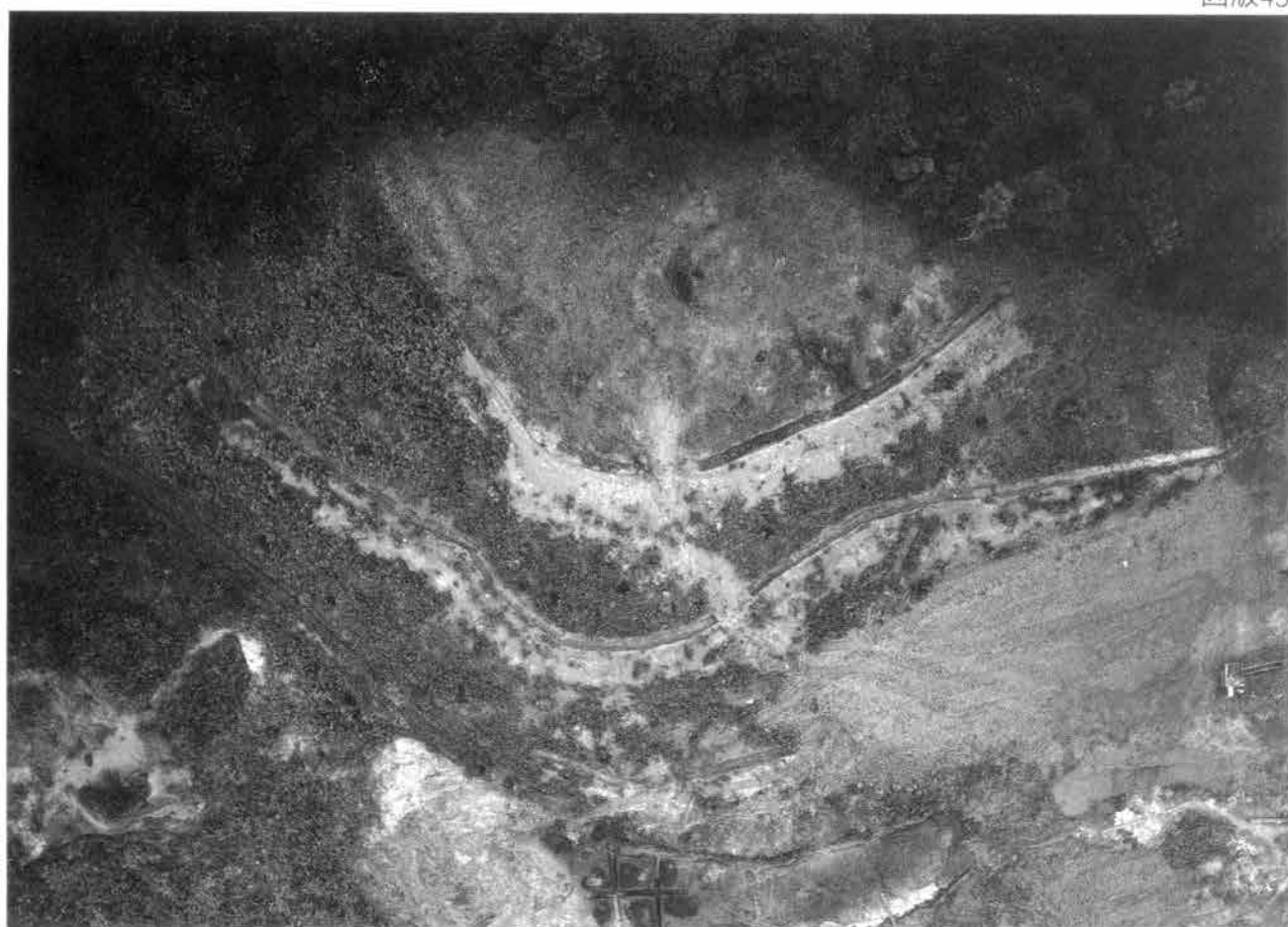
郭状遺構



第4~8号郭状遺構



完掘後



第9号郭状遺構

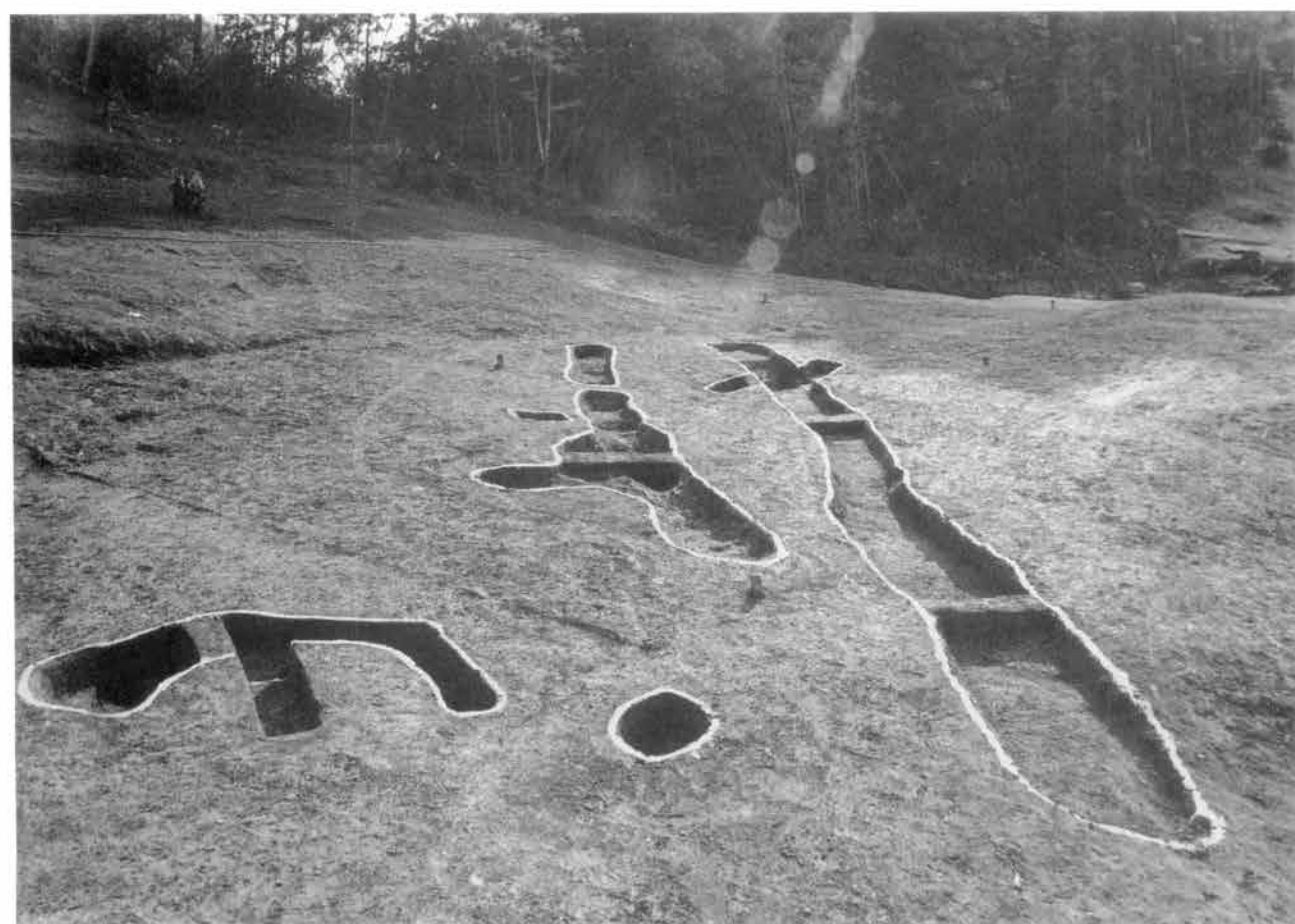


完掘後





道路状遺構全景



道路状遺構(第11号溝)

G6区東付近



G8区付近



I7区付近



ピット内土器



ピット群



N19区落ち込み(土壘付属溝?)



製鉄遺構



製鉄遺構



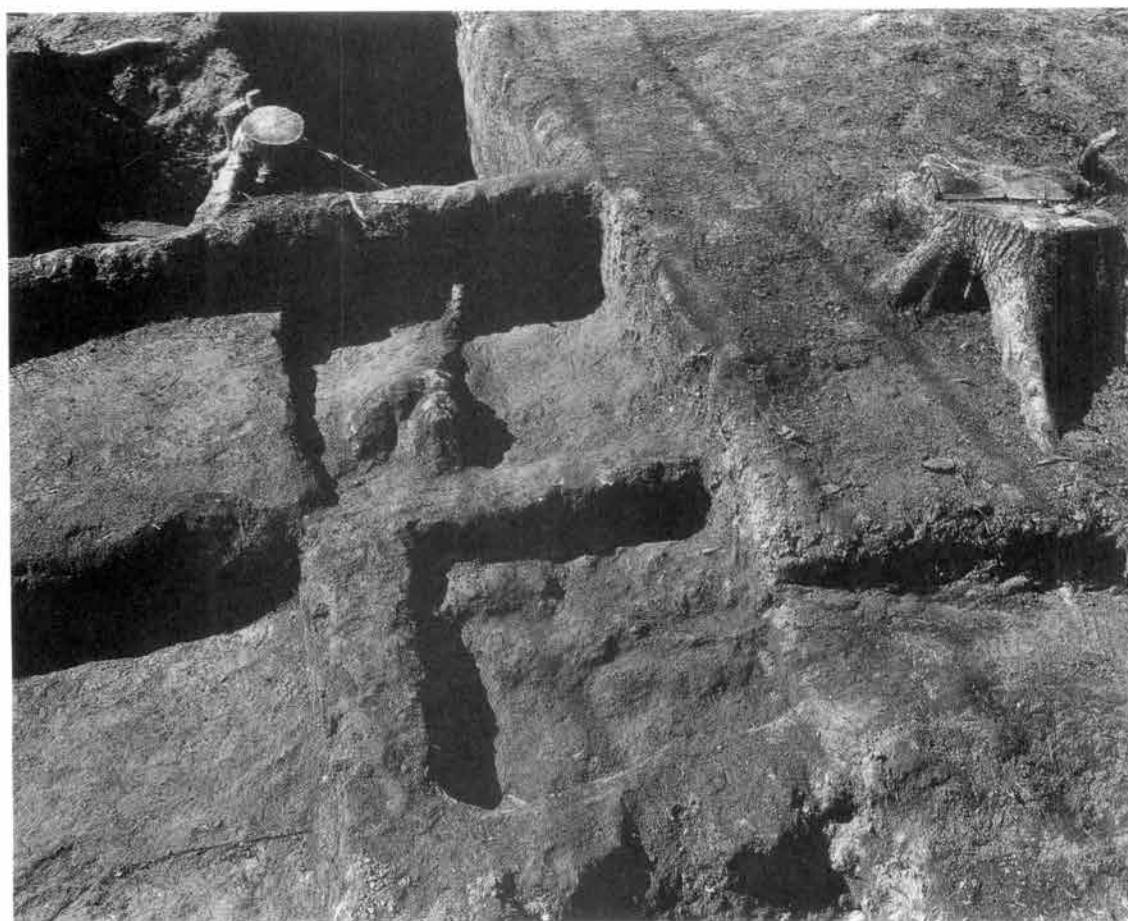
製鉄遺構(南側)



製鉄遺構(北側)



製鉄遺構全景



半地下式竪形炉



鑄型埋設土坑1(上側)



鑄型埋設土坑2(下側)



铸型出土状况1



铸型出土状况2

作業場炭層



作業場層位



排水溝層位



排水溝



作業場・排水溝



作業場遺物出土状況





送風関連施設遺物出土状況



完掘後

遺物出土状況1(上面)



遺物出土状況2(下面)



遺物出土状況3(土器)



排水溝



炉壁No.2出土状況



炉壁集中地区表土除去後

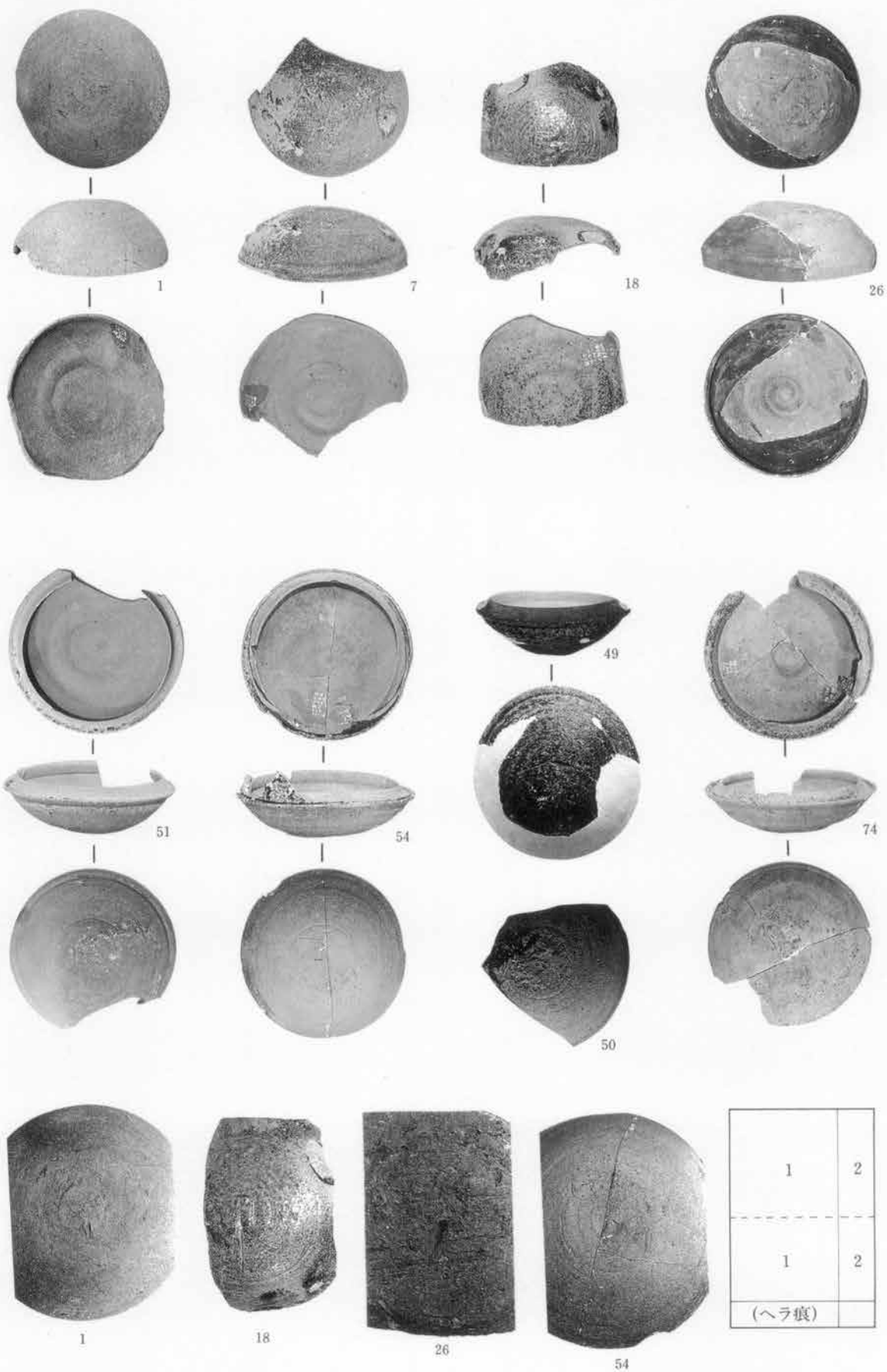


炉壁集中地区全体

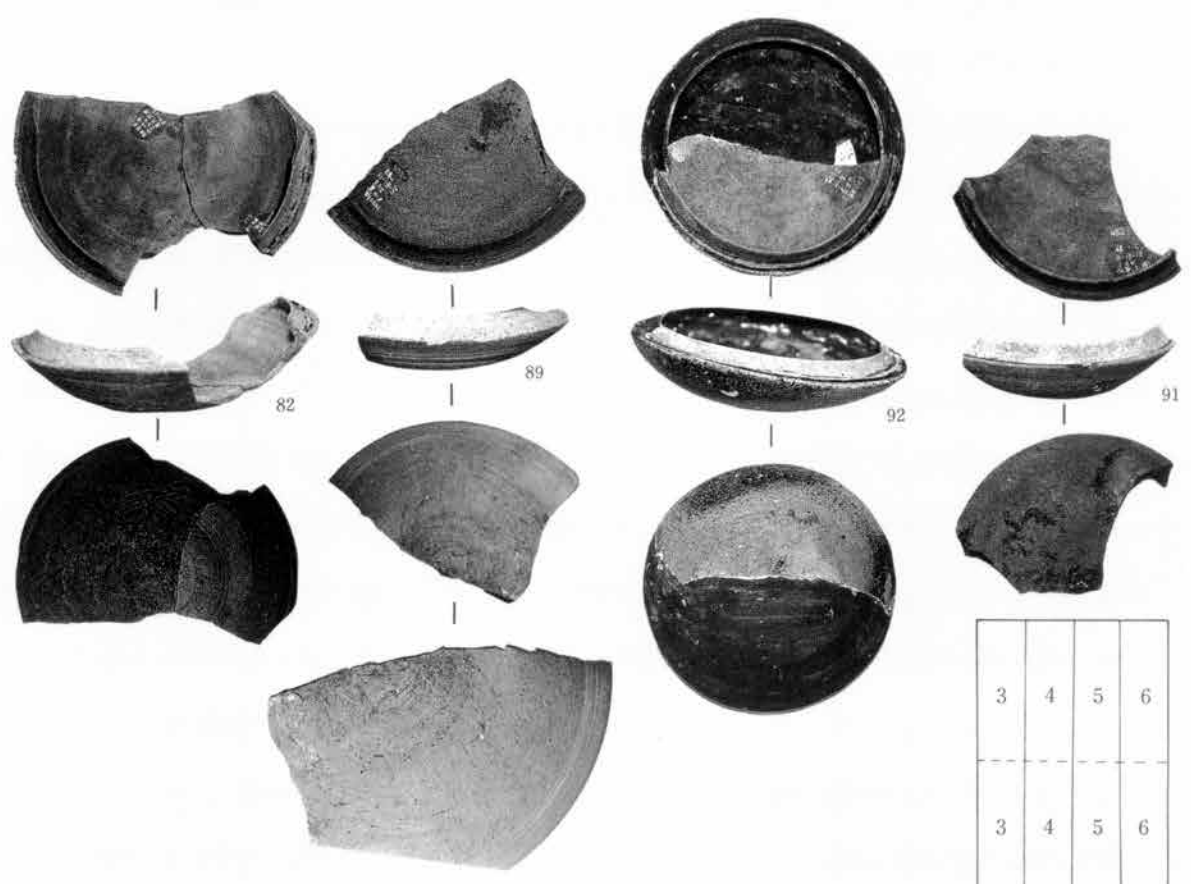
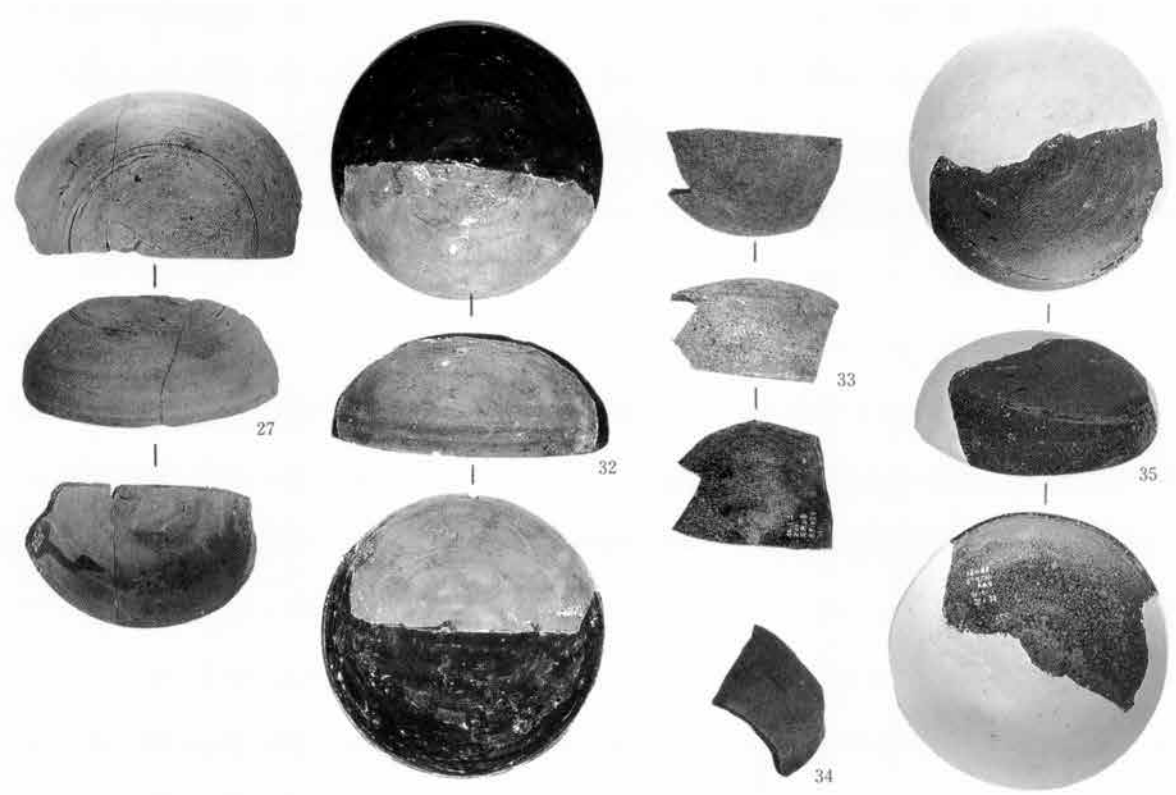


炉壁集中地区上側





2号窯環A1・2類



(ヘラ痕)

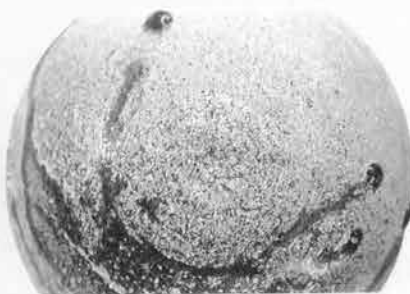
2号窯坏A3~6類



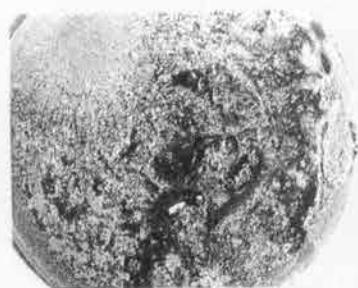
109·110



122·123



124



131



133



135·136



(盖外面)

(身外面)

2号窠床上检出环A

(1類身)



(1類蓋)



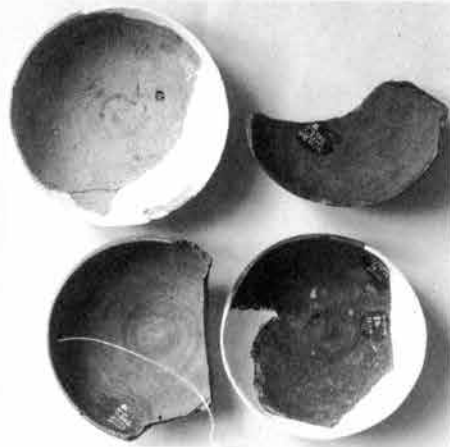
(3類身)

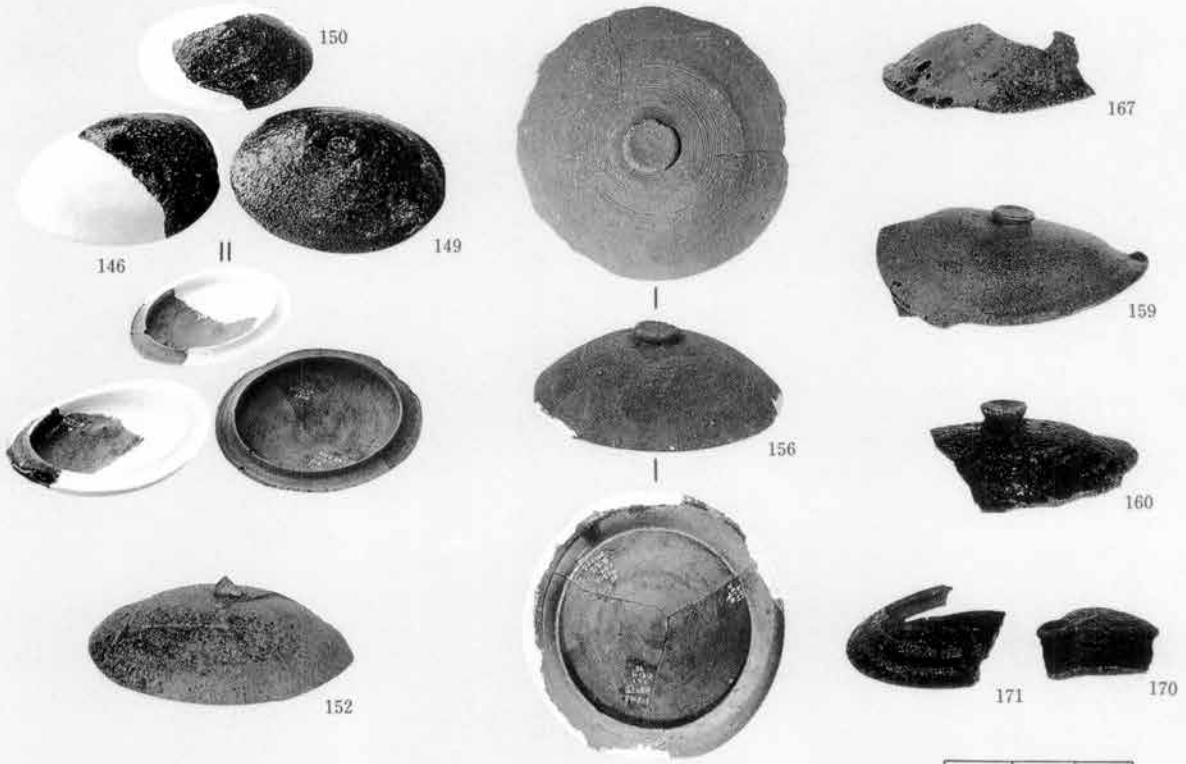


(6類蓋)

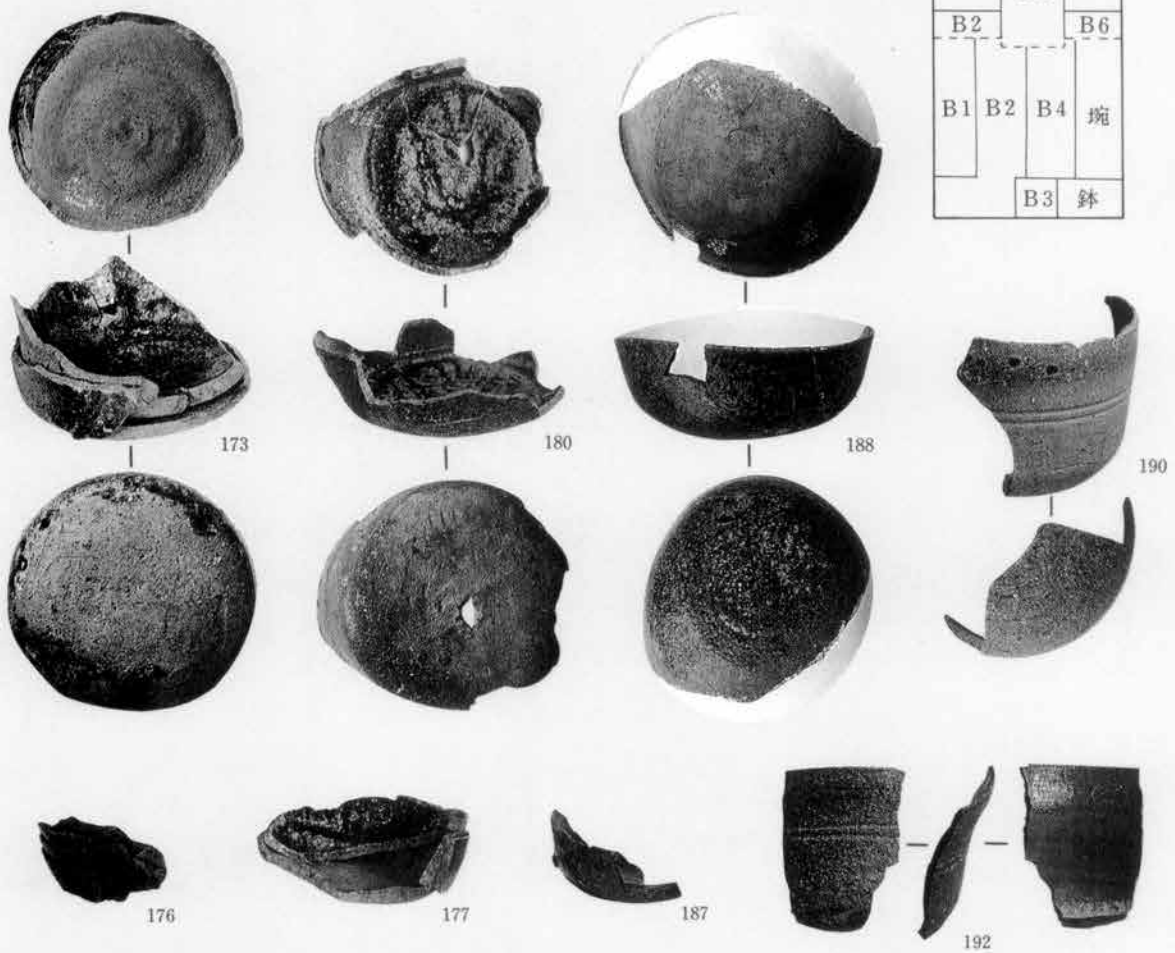


(3類蓋)

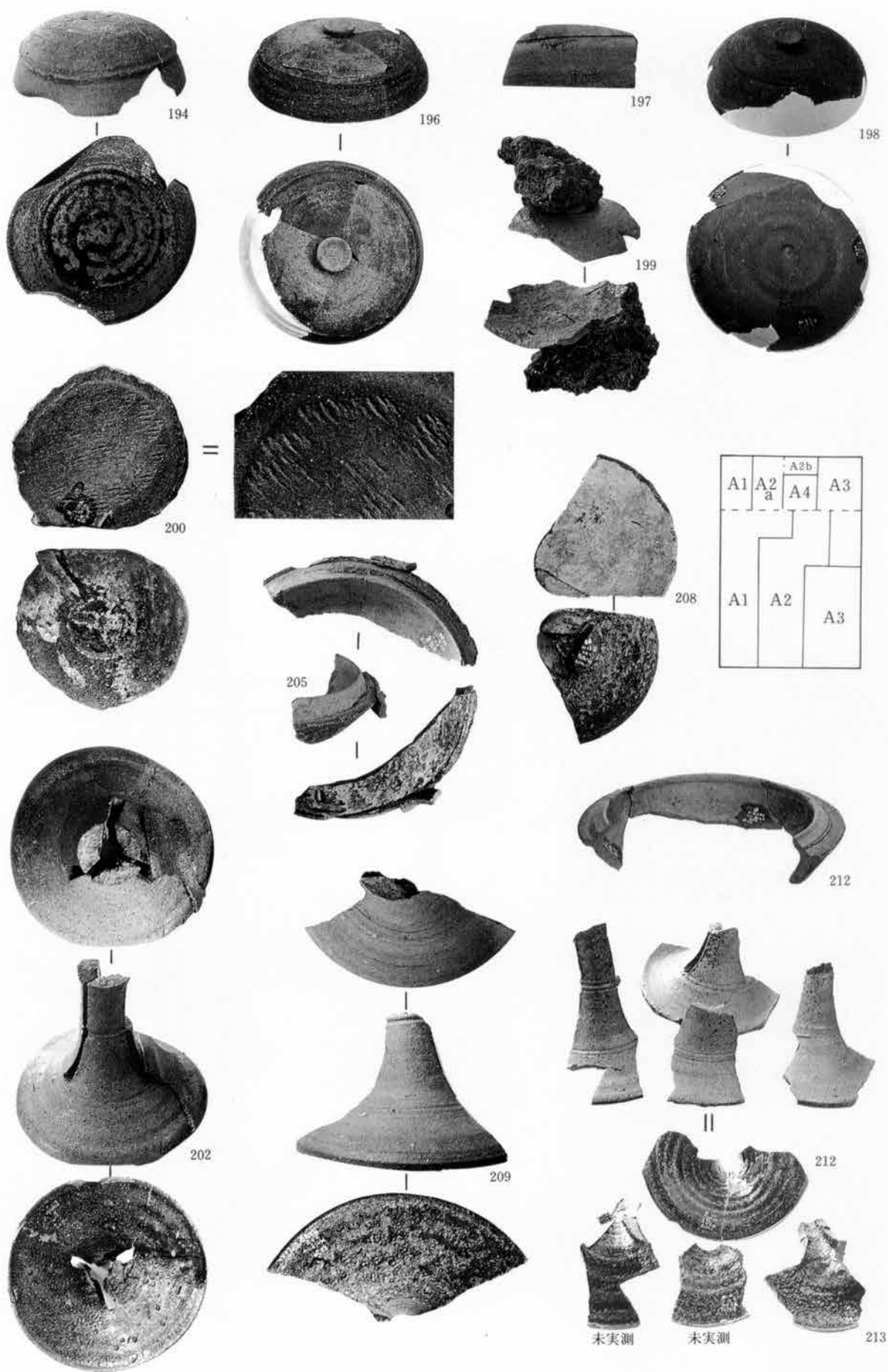




B1	B3	B5
B2		B4
B1	B2	B4
	B3	鉢
		鉢



2号窯坏B

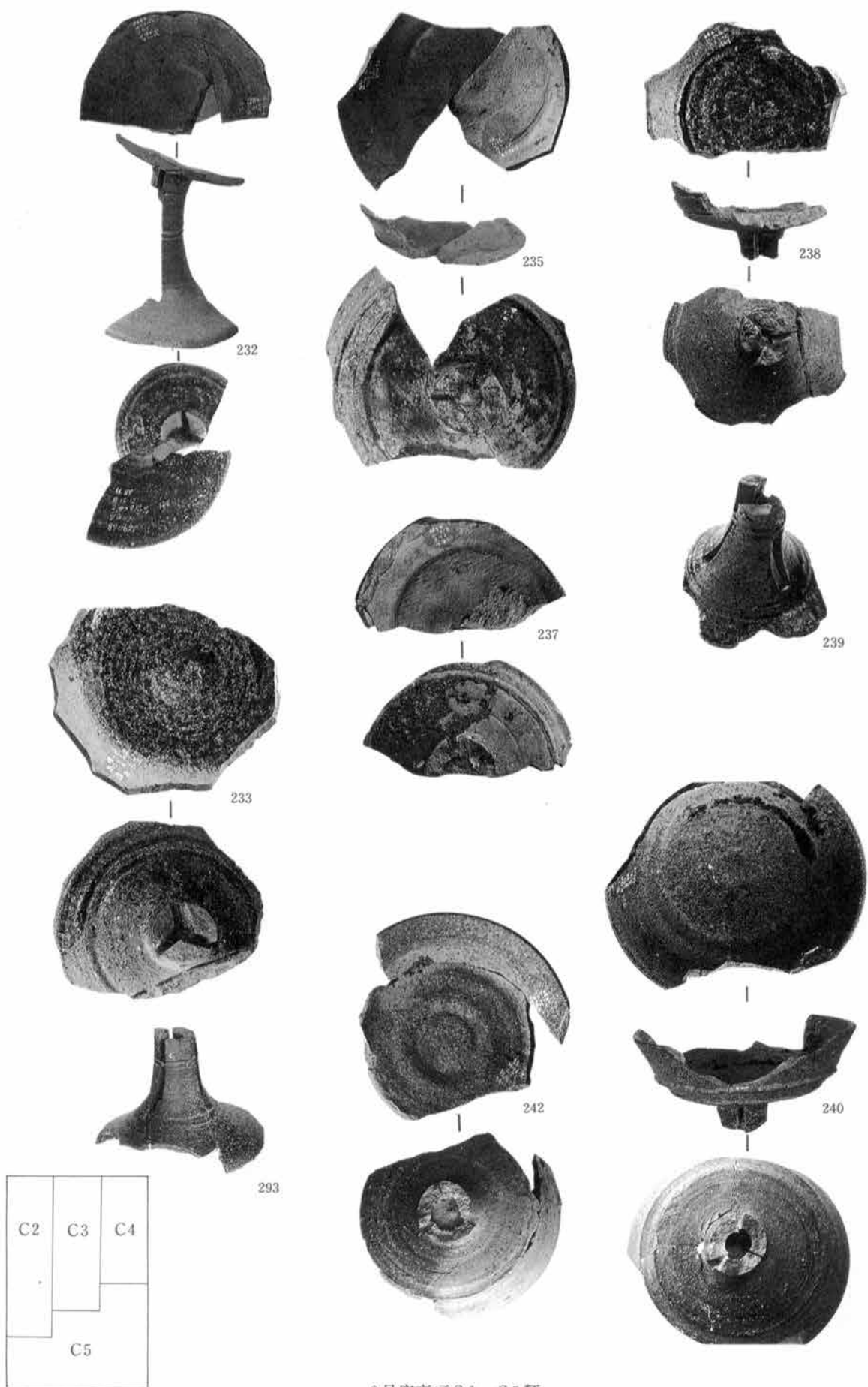


2号窑高环A類

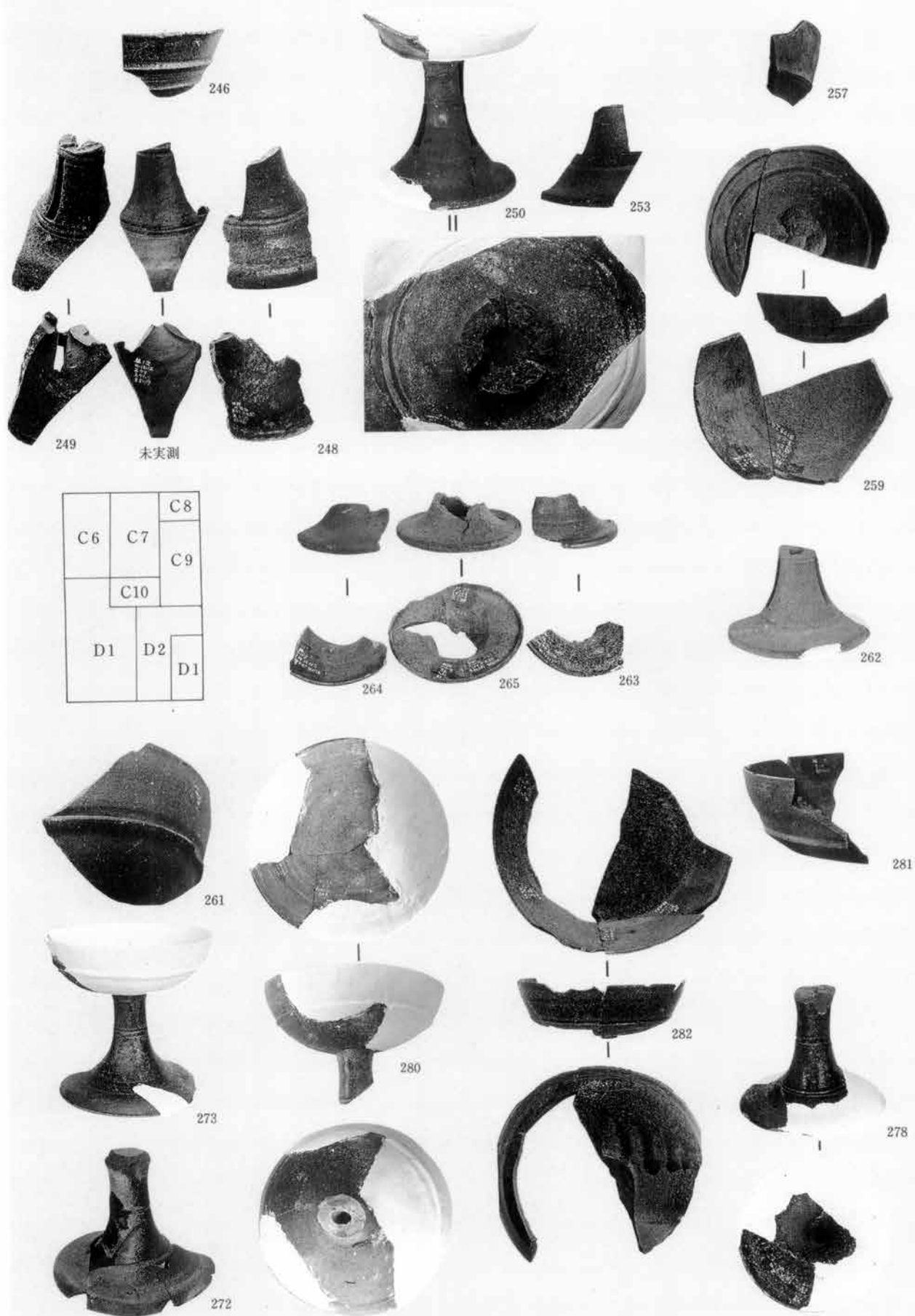




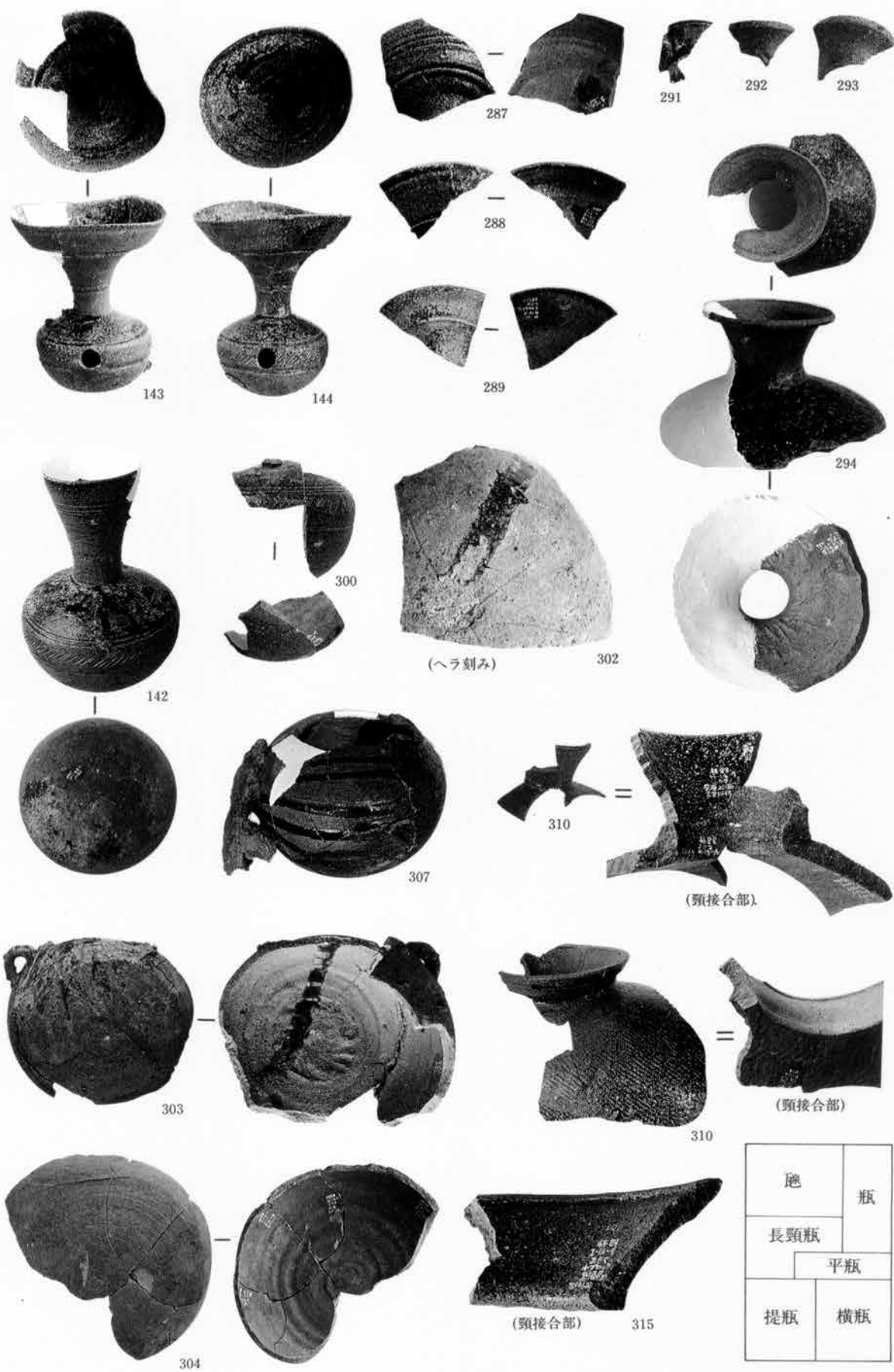
2号窟高环C1類



2号窟高环C2~C5類

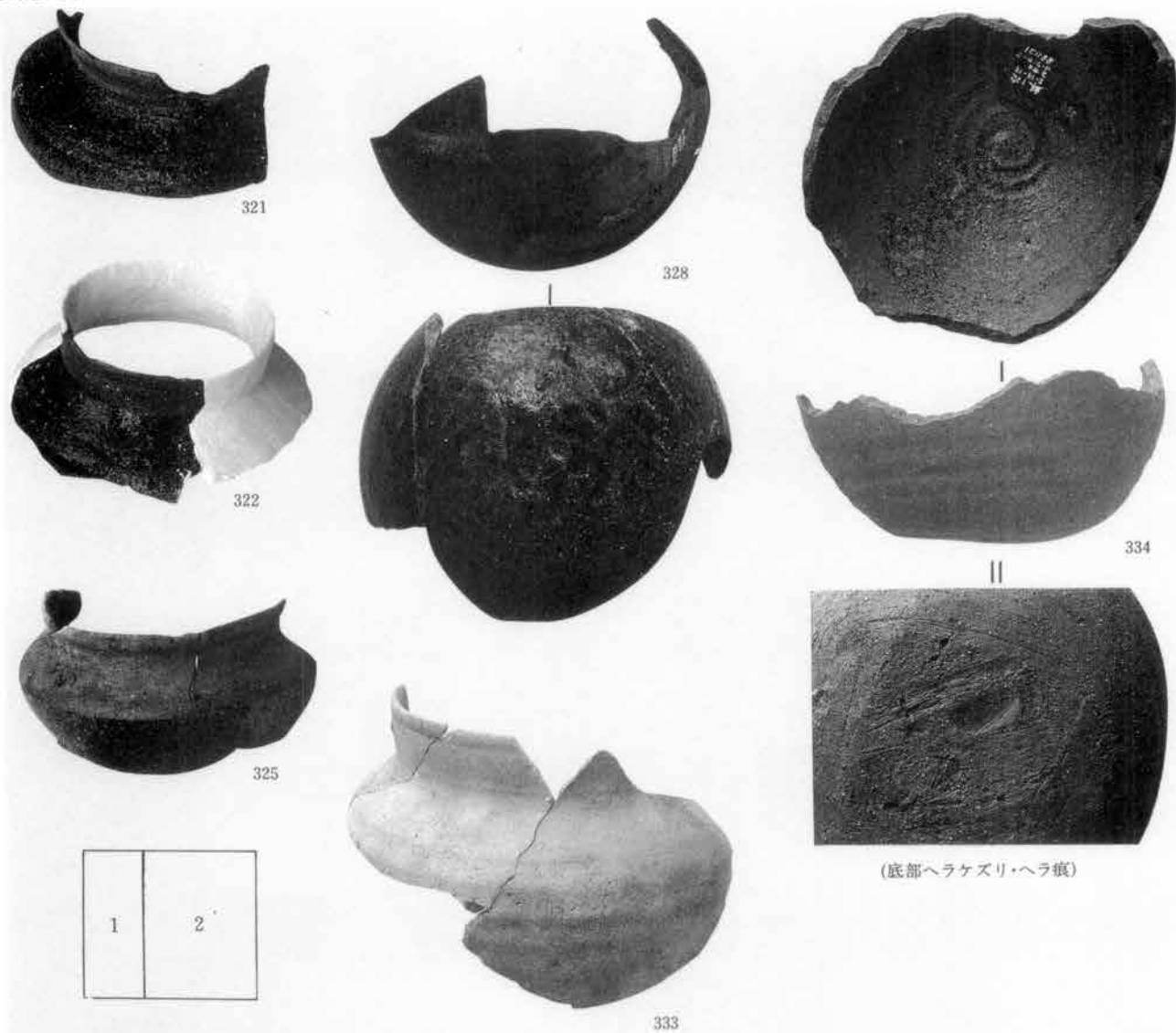


2号窯高环C6~C10・D類

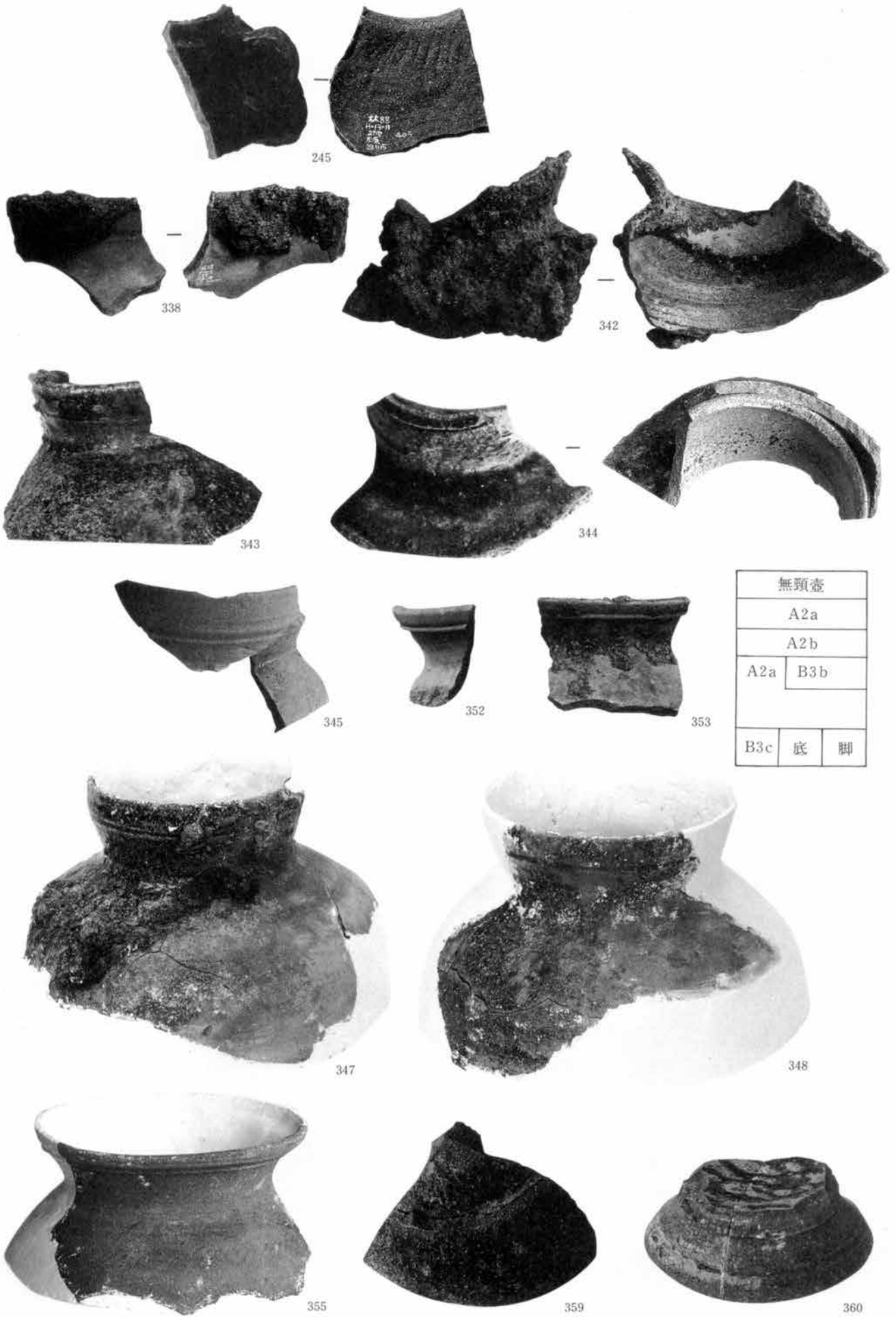


2号窯壺、瓶、長頸瓶、平・提・横瓶

壺	瓶
長頸瓶	
	平瓶
提瓶	横瓶



2号窯短頸壺



無頸壺		
A2a		
A2b		
A2a	B3b	
B3c	底	脚

2号窯壺



361



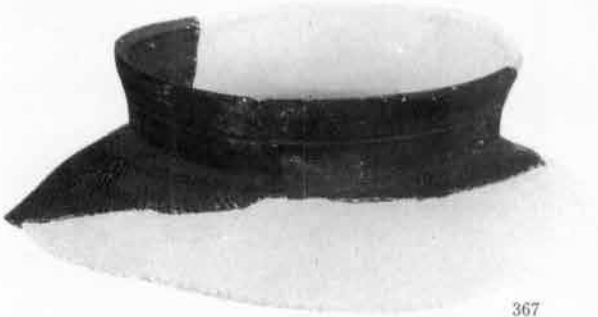
365



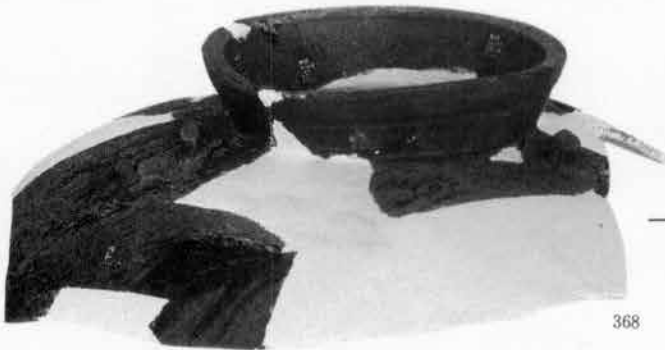
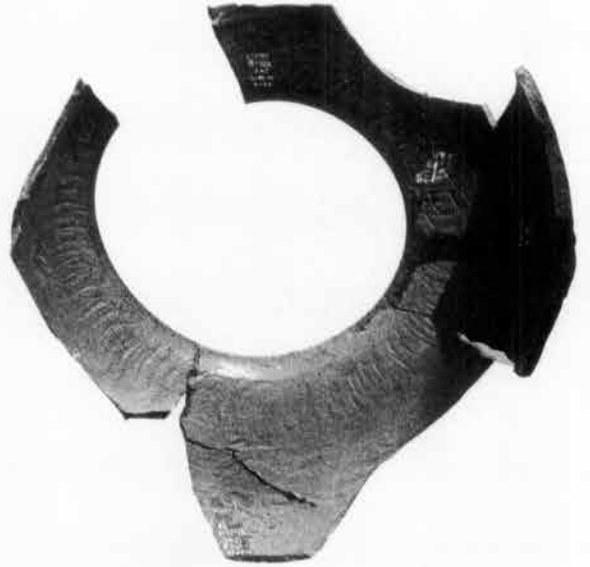
363



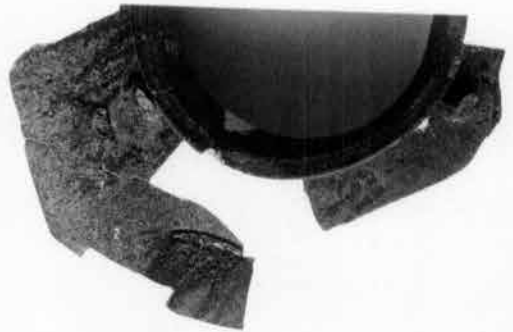
366



367



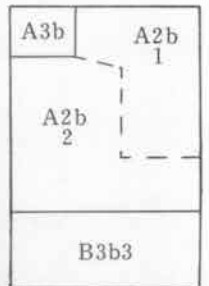
368

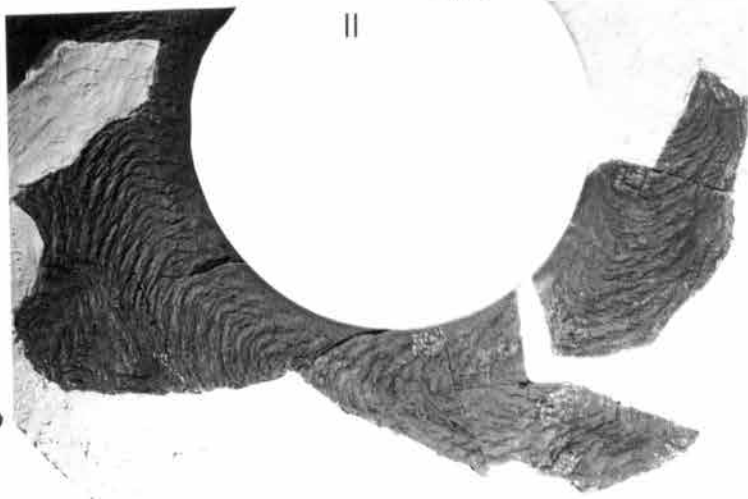
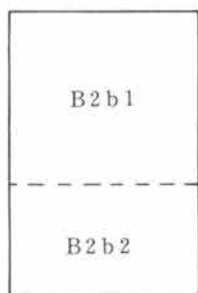


383



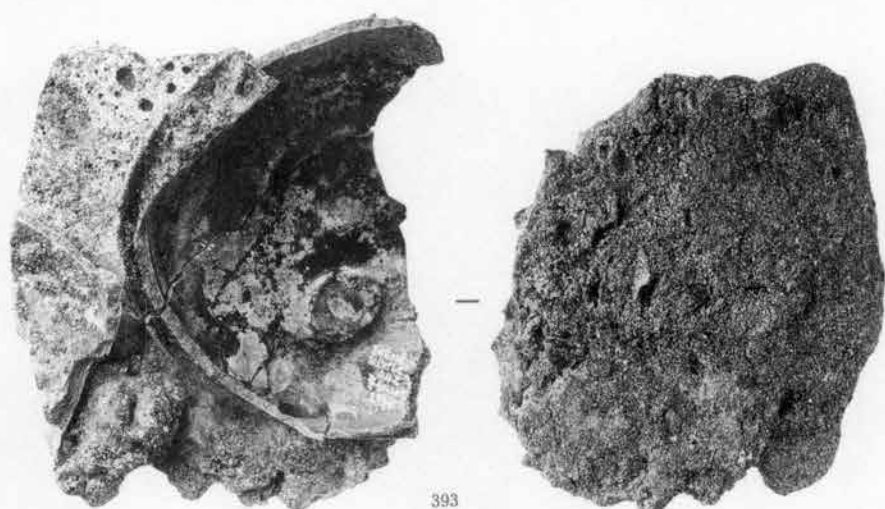
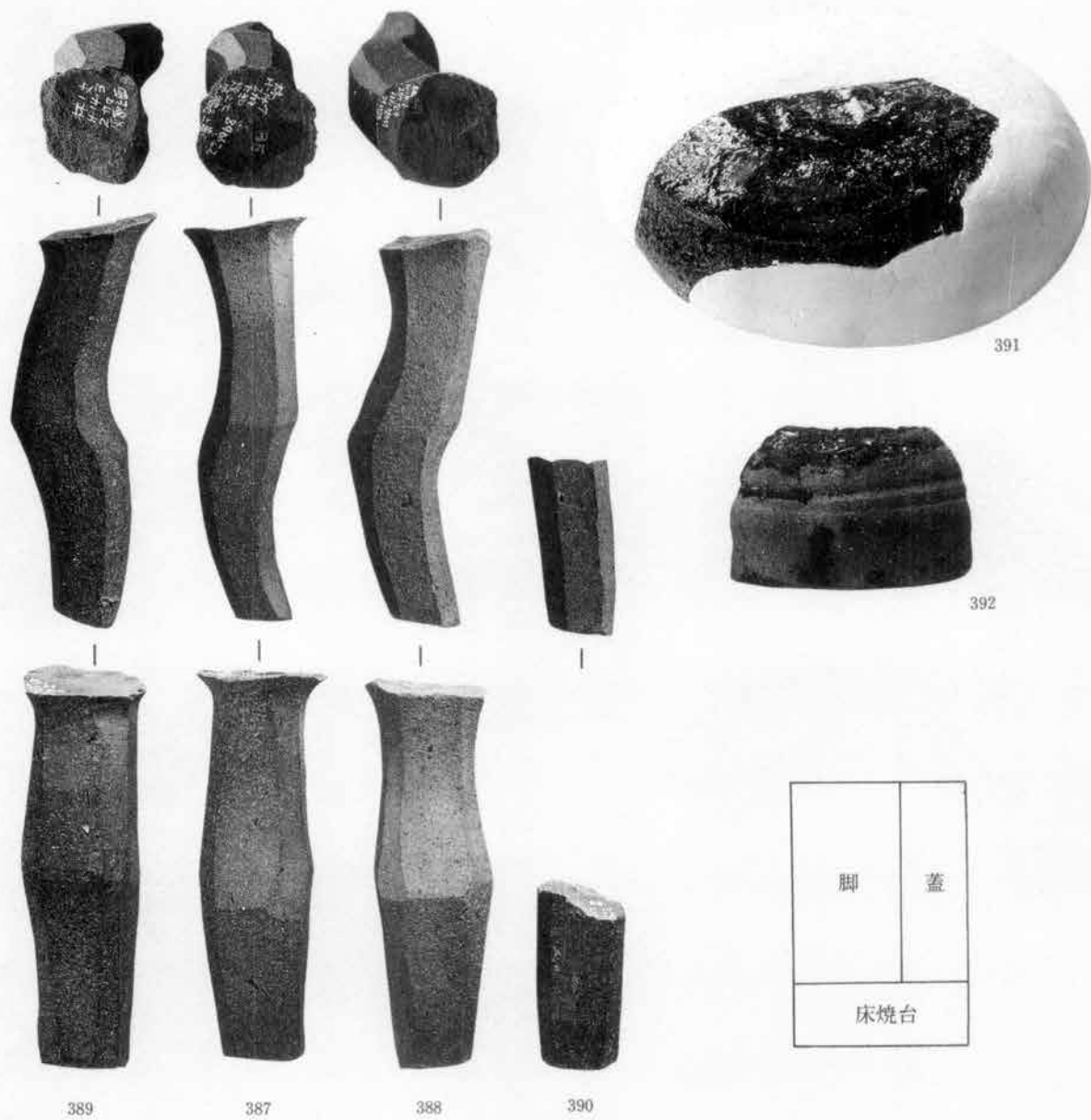
384



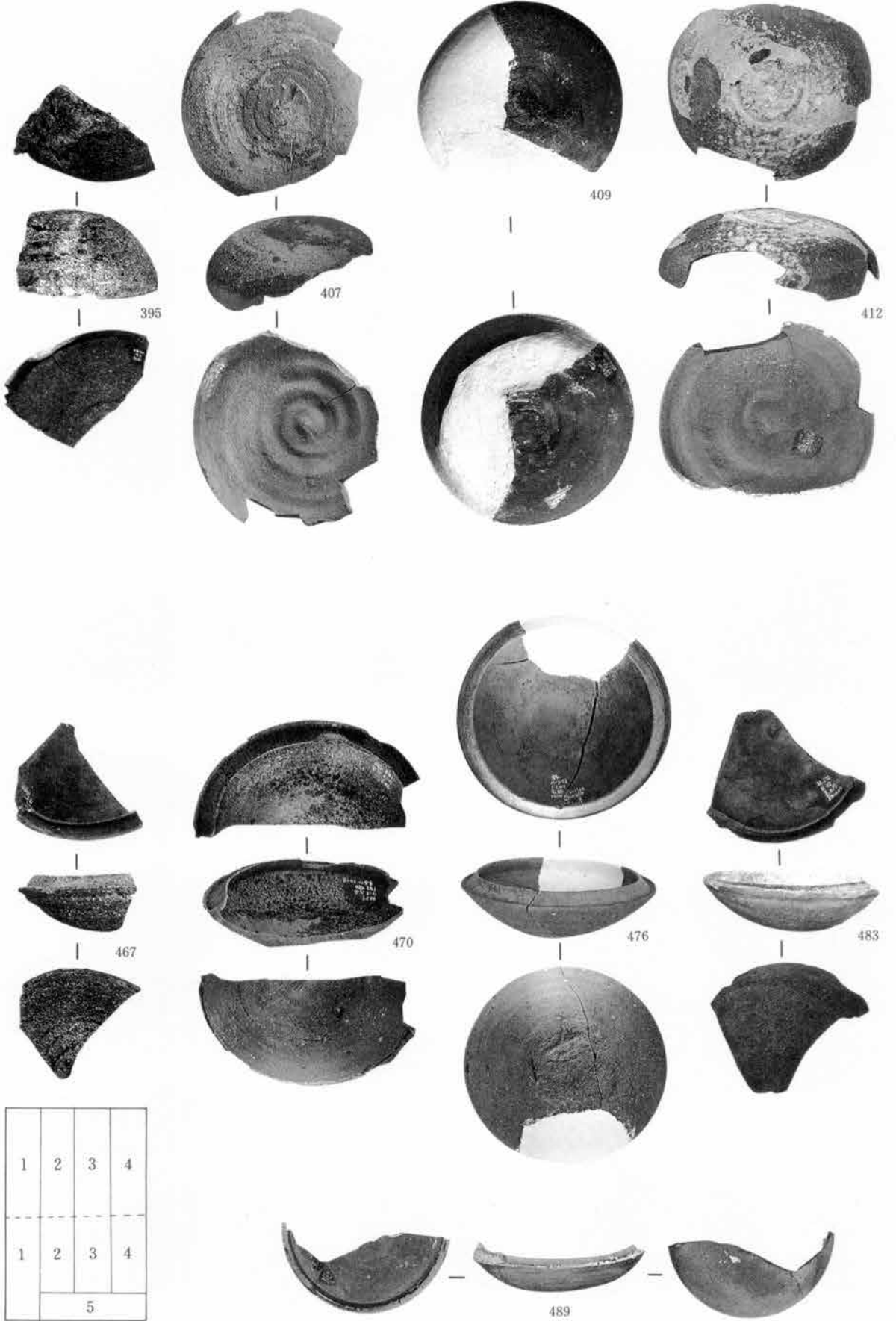


2号窯裏

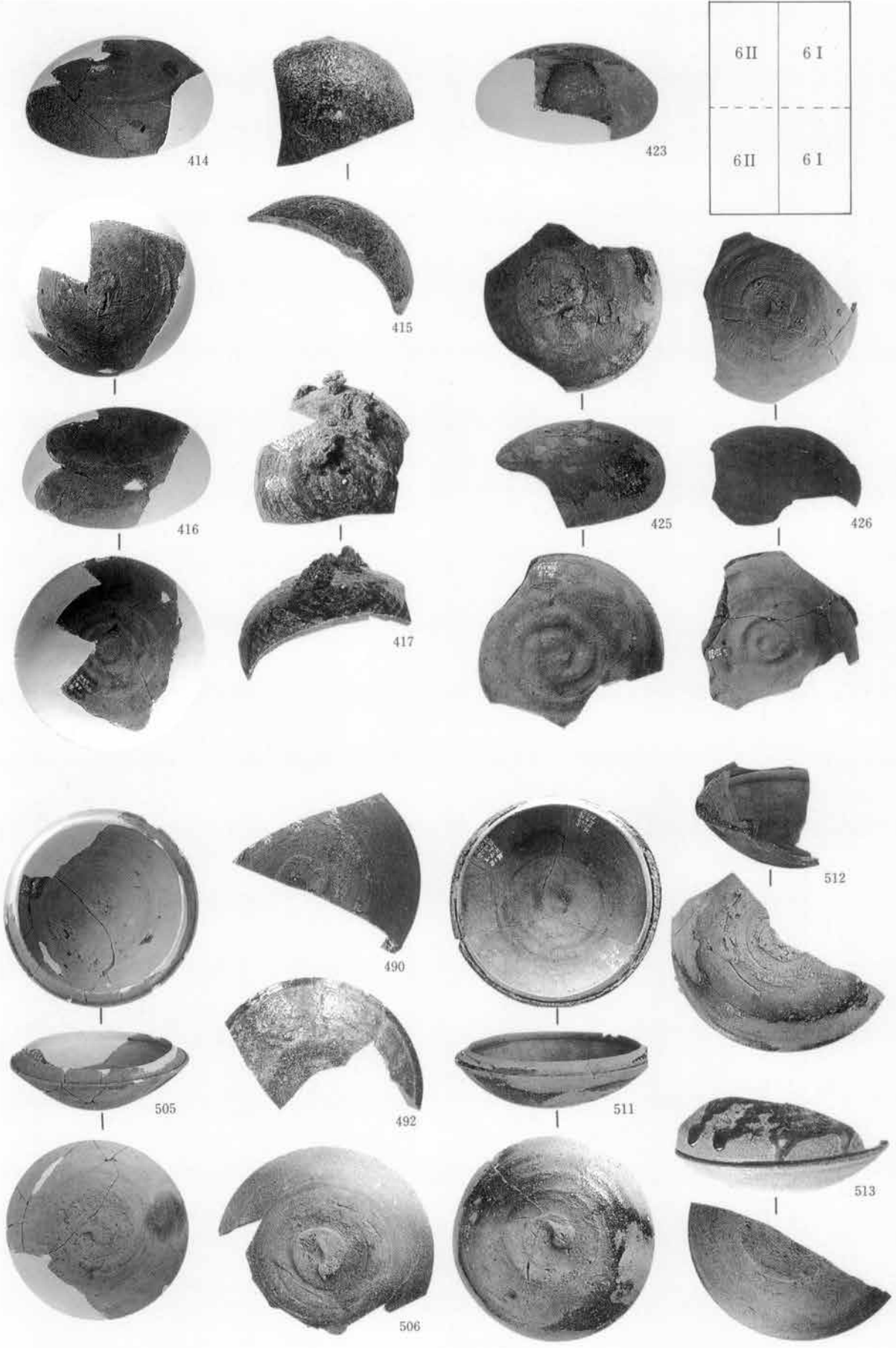




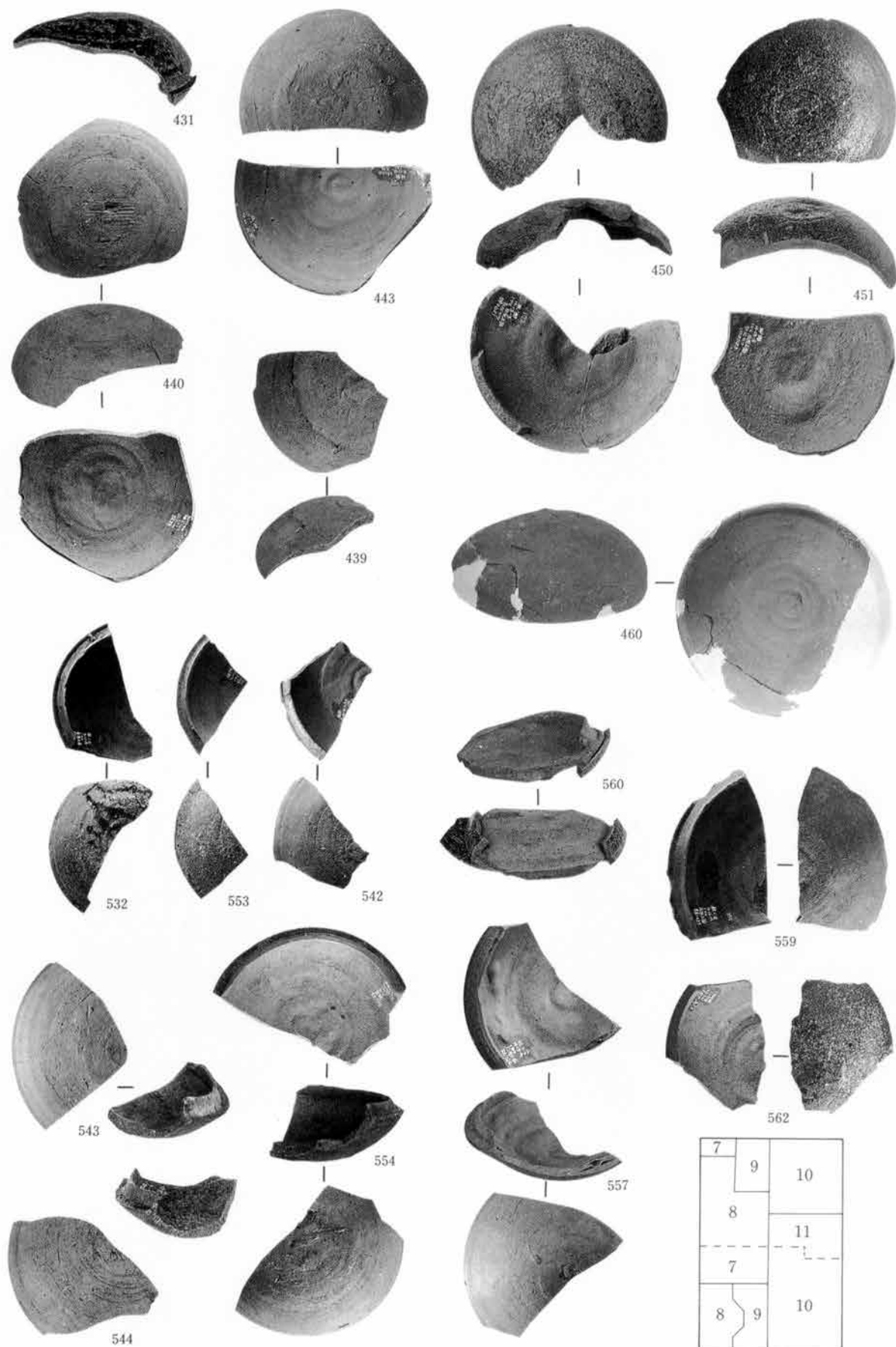
2号窑脚、盖、烧台



1号窑环A1~4類

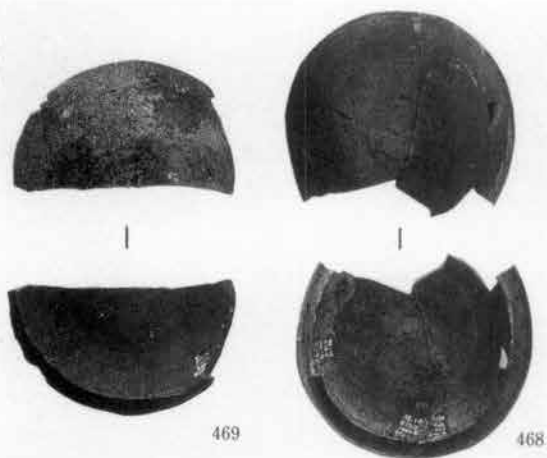


1号窑环A6類

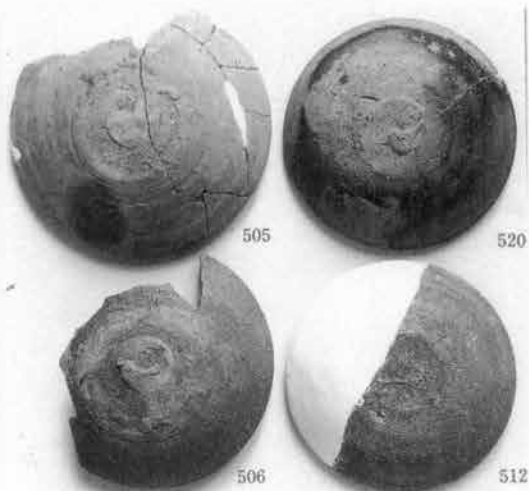


1号窑环A7~10(11)類

(2類身)

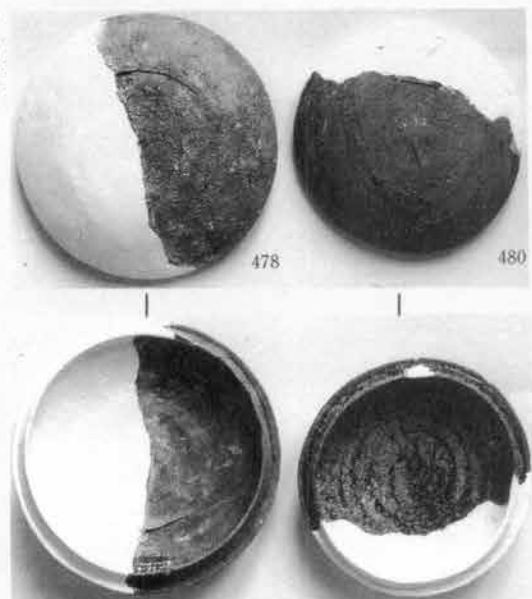


(6 I・II類身)

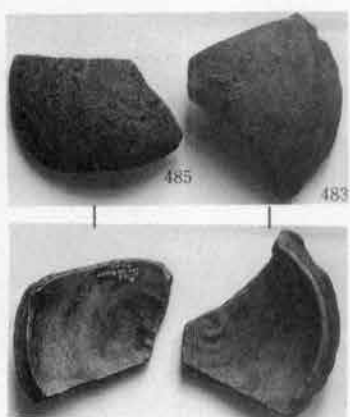


II

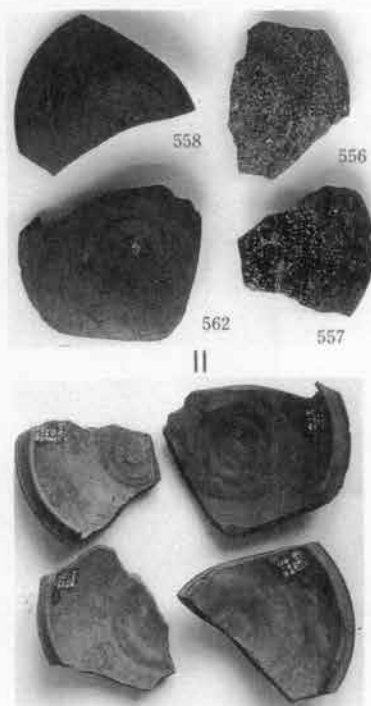
(3類身)



(4類身)



(10類身)



II

(7類身)



(A6I類)

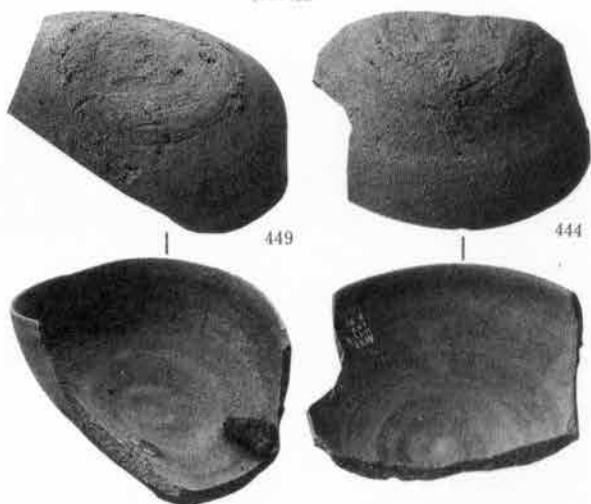


(未実測)

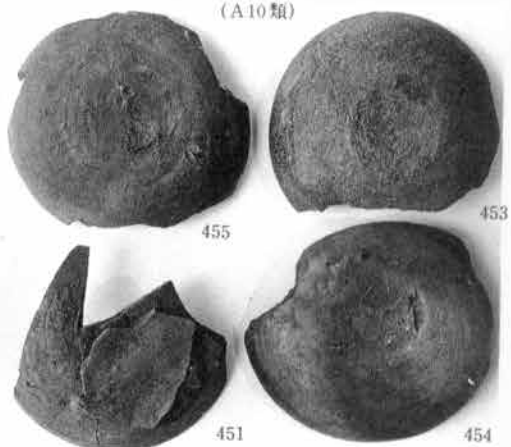
||



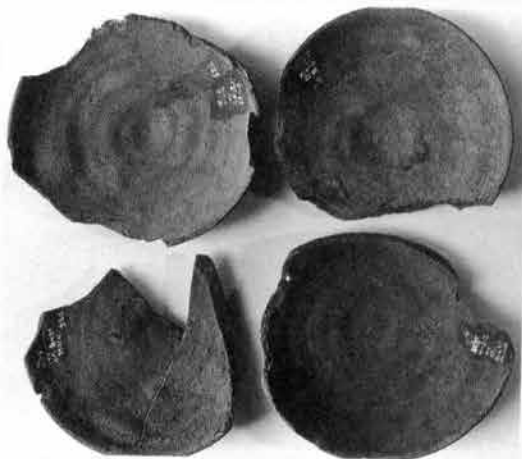
(A9類)



(A10類)



||



(A8類)



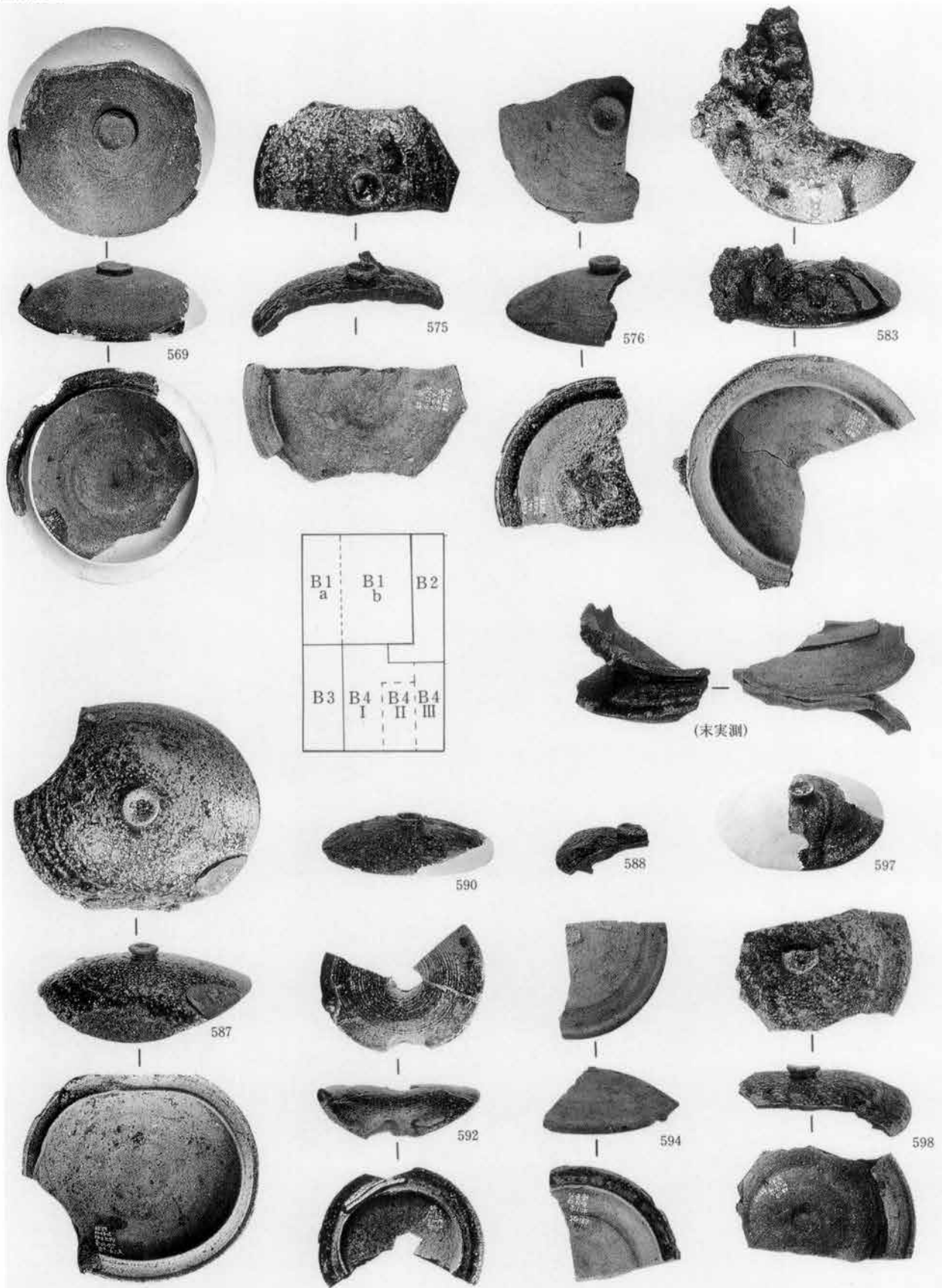
||

(未実測)

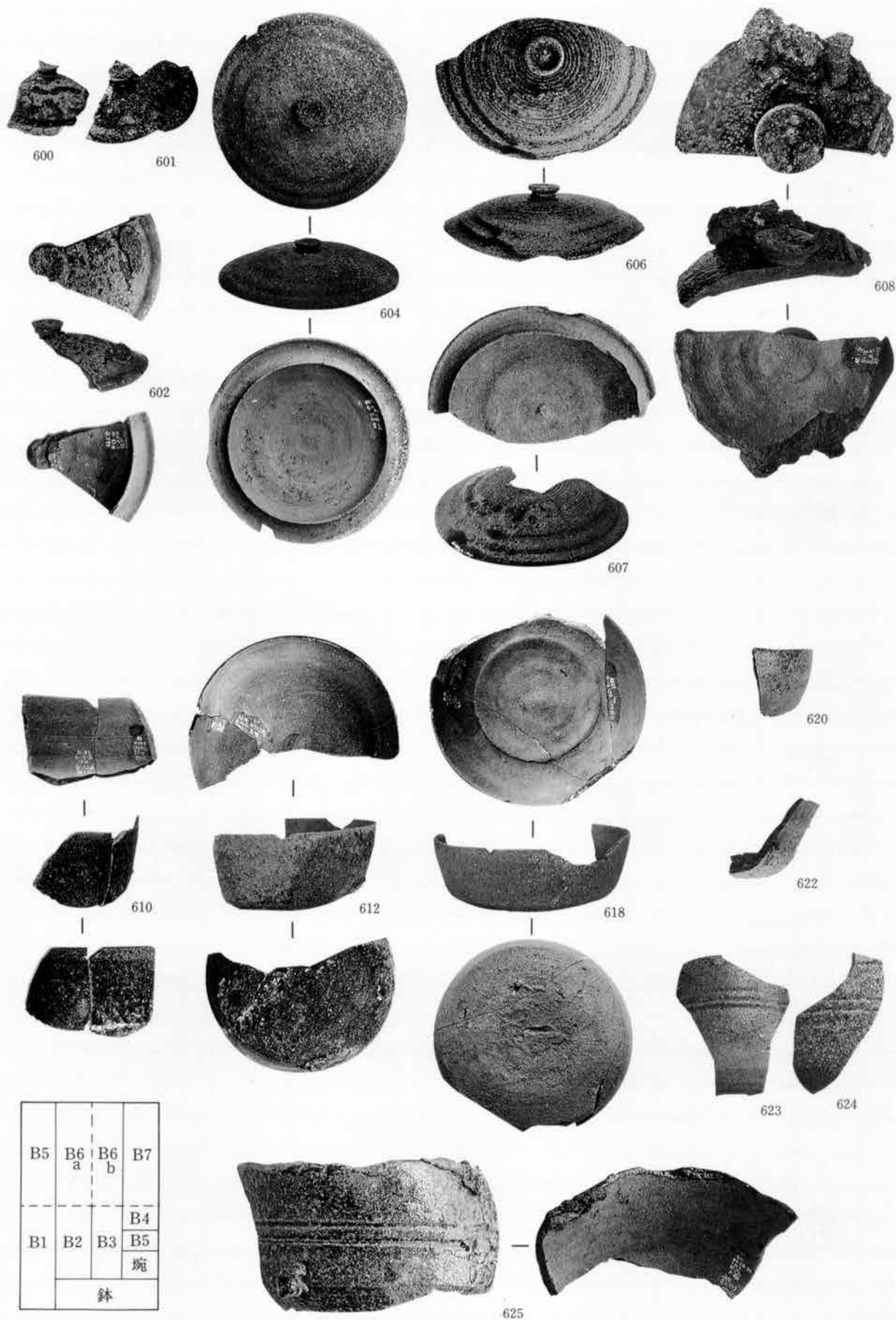


(454 ヘラ痕)



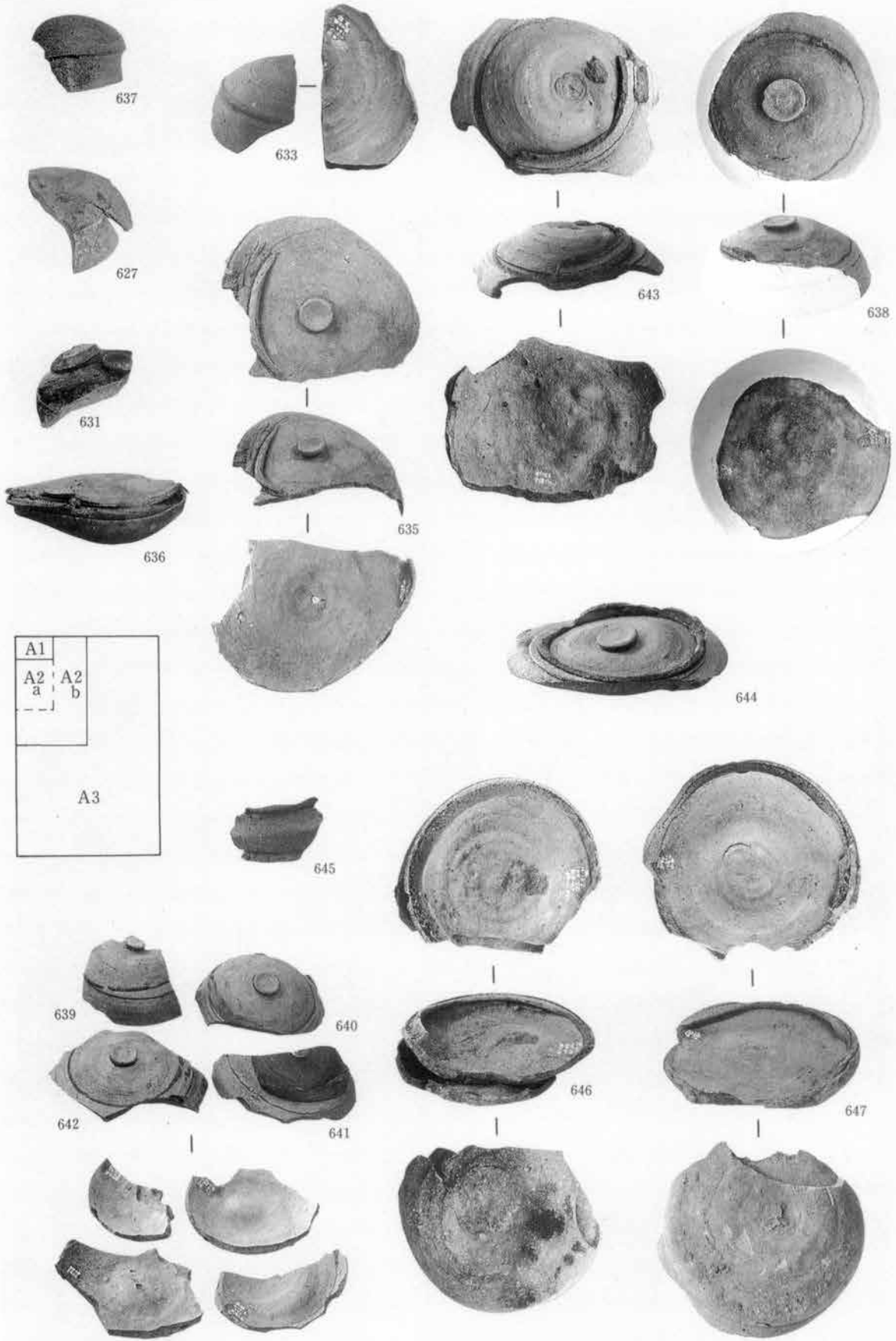


1号窑环B盖B1~B4類

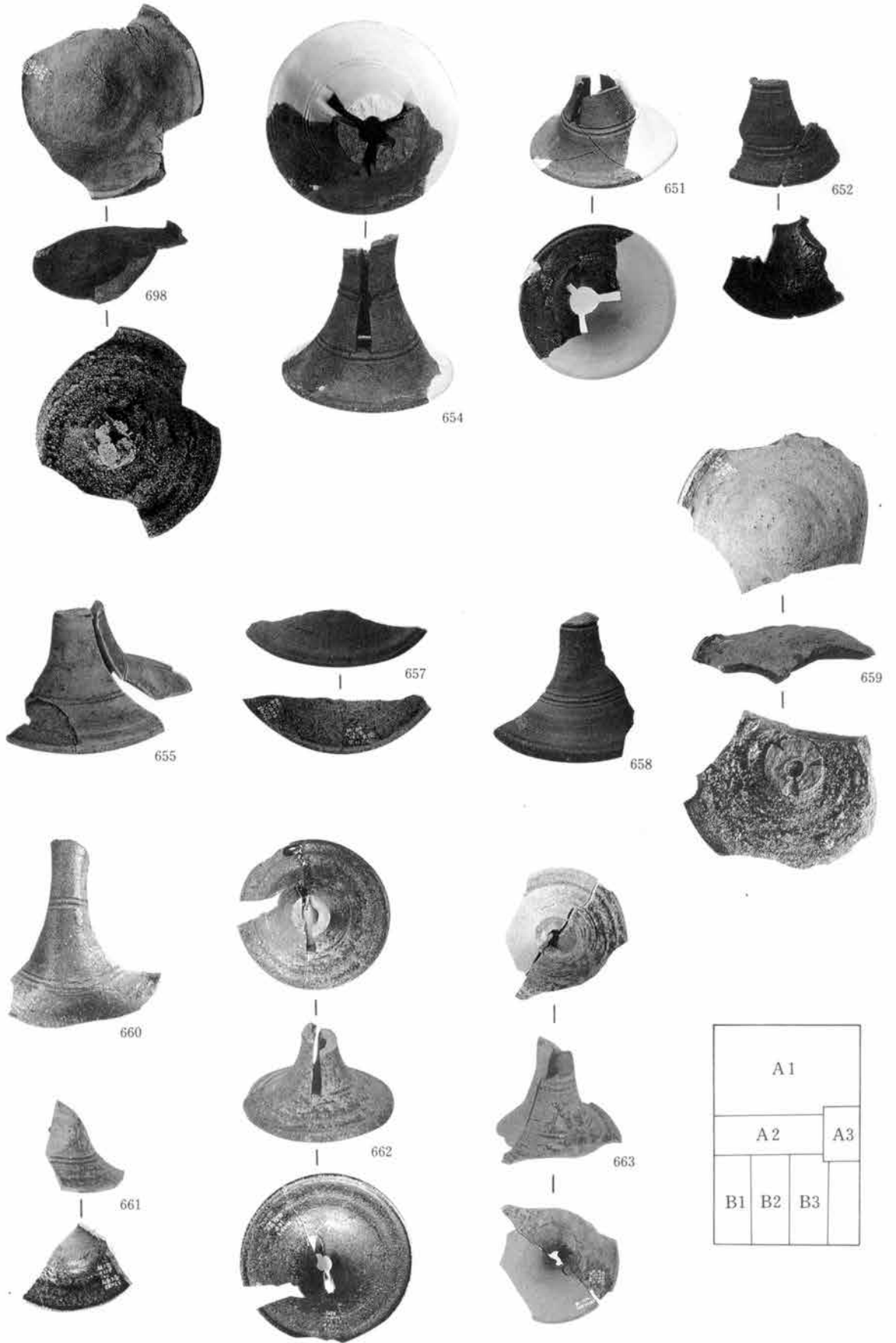


1号窯坏B蓋B5~B7類、坏B身、碗、鉢

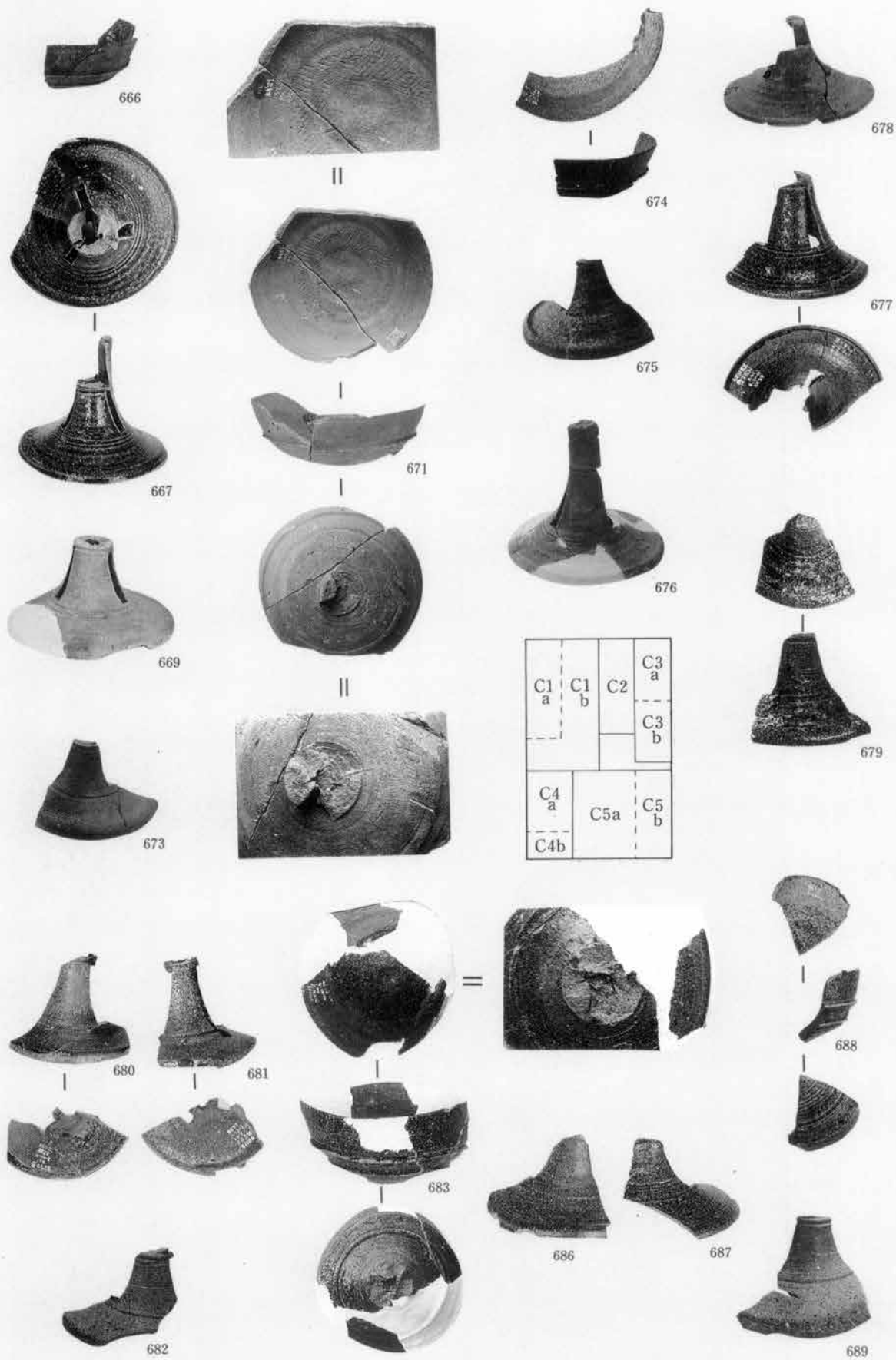




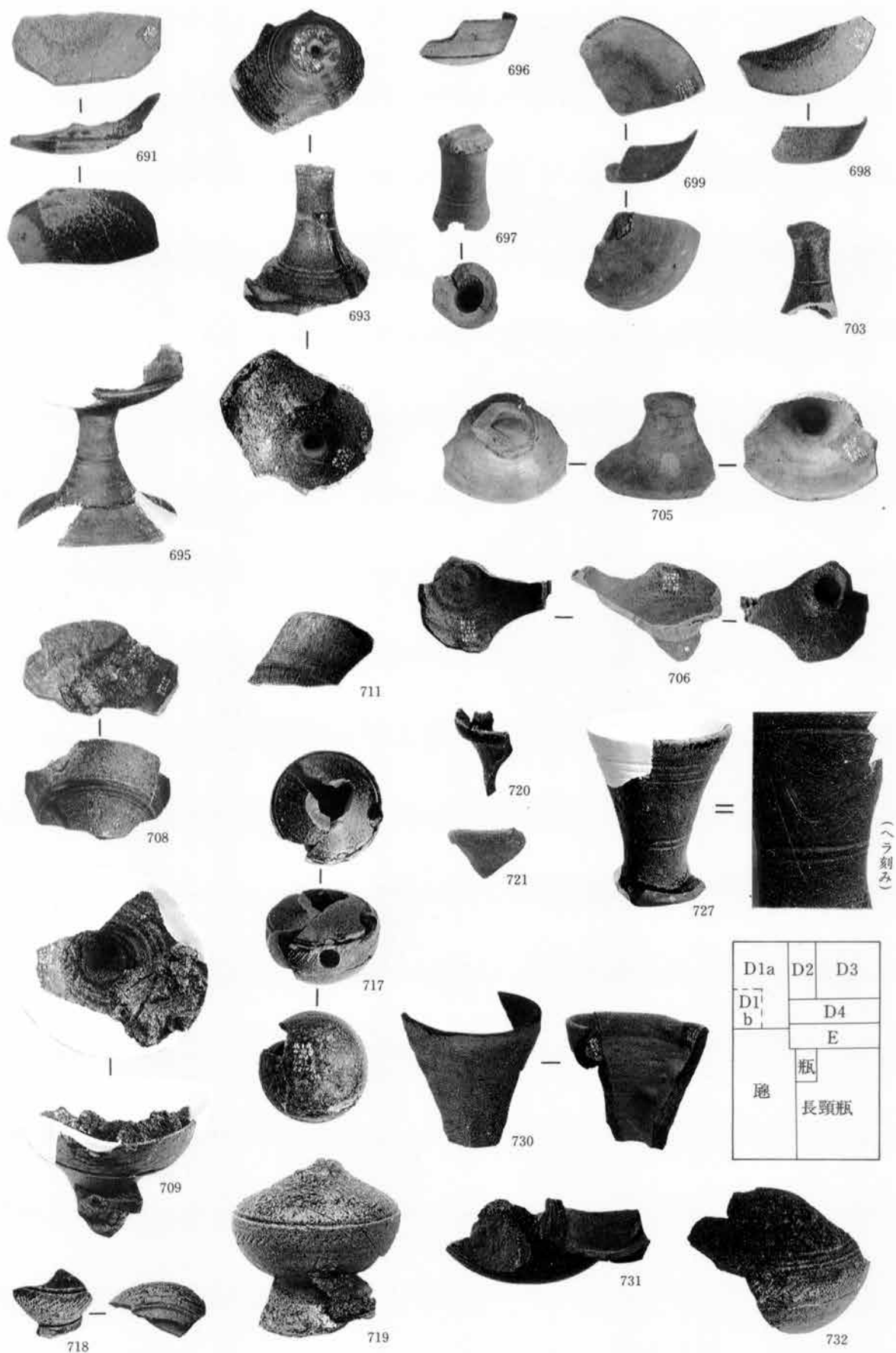
1号窑高环盖



1号窑高环A·B類

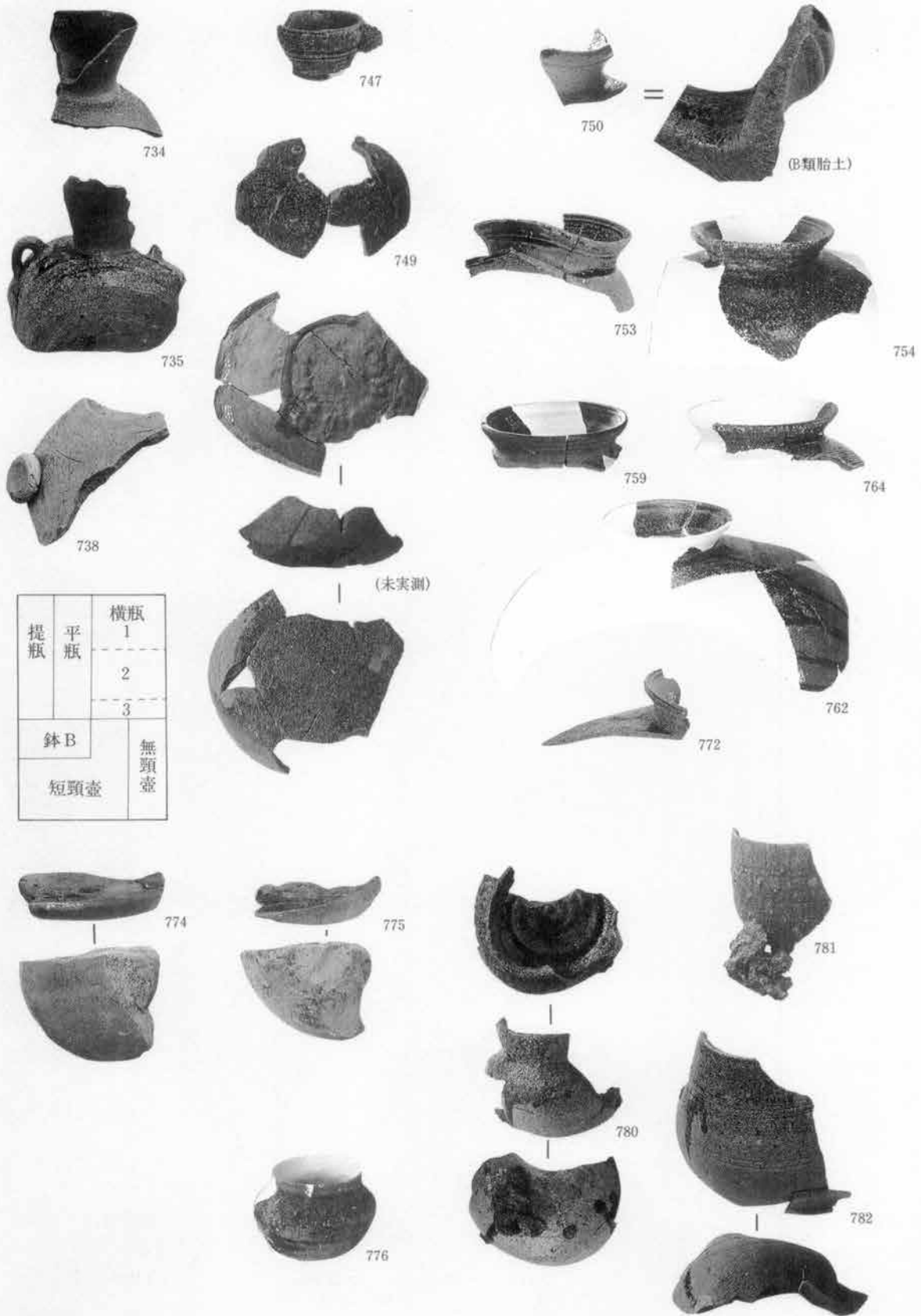


1号窑高环C类

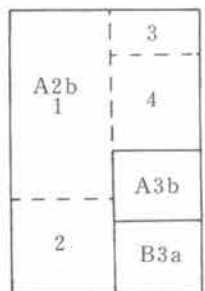


D1a	D2	D3
D1b	D4	
廳	E	
	瓶	長頸瓶

1号窯高環D類、廳、瓶、長頸瓶



1号窯提瓶、平瓶、横瓶、鉢、無頸壺、短頸壺



1号窑壺



811



819



(B類胎土)

813



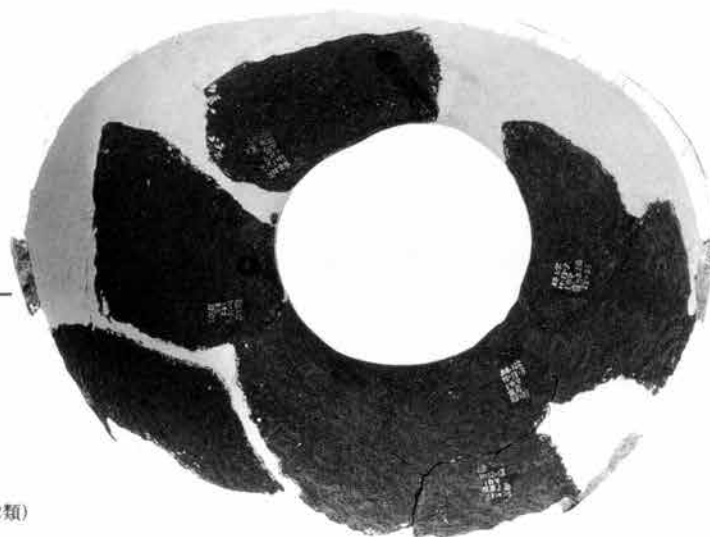
825 (A1b類)



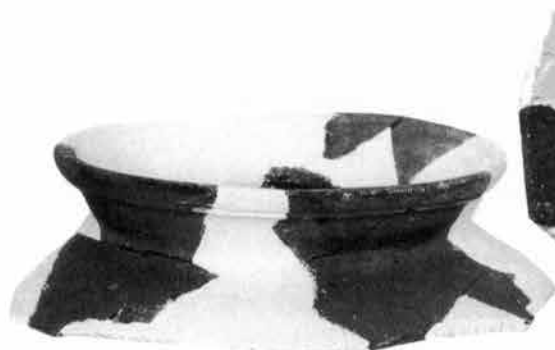
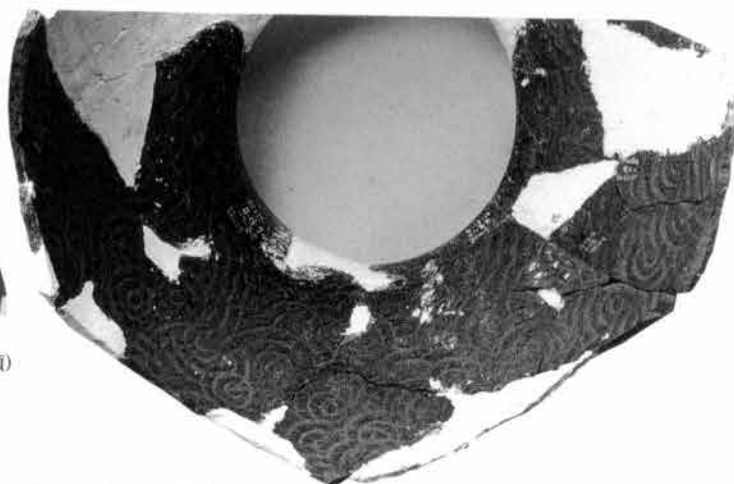
829 (B2b1類)



831 (B2b2類)



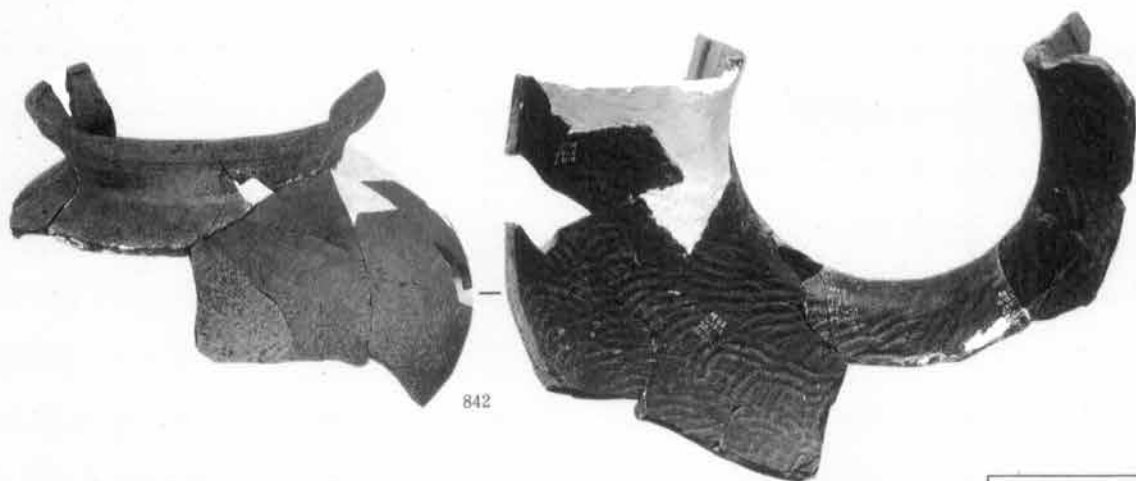
839  
(B2b3類)



840 (B2b4類)







842



845



847

B2b4	
B2b5	C
底部	

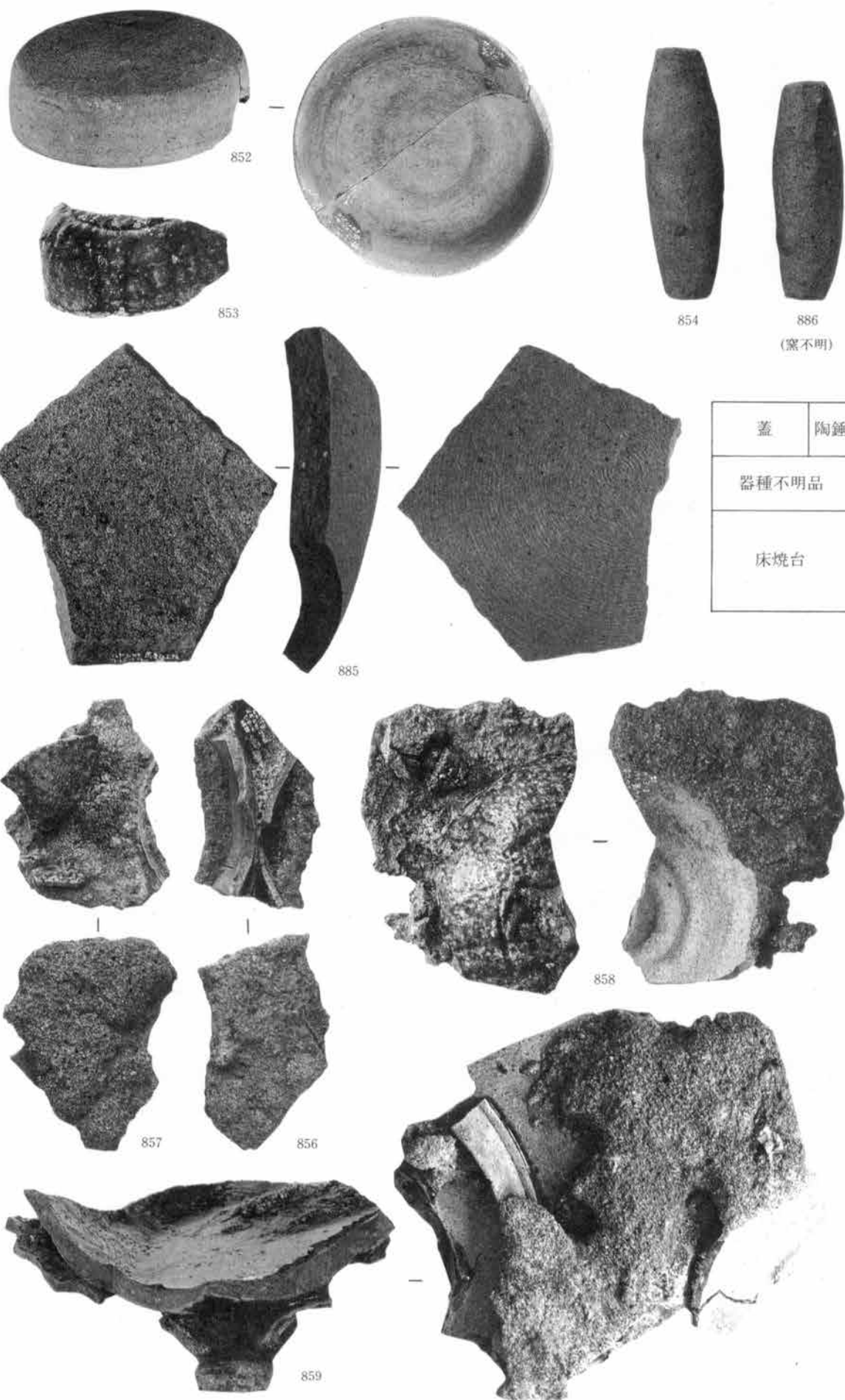


850



849



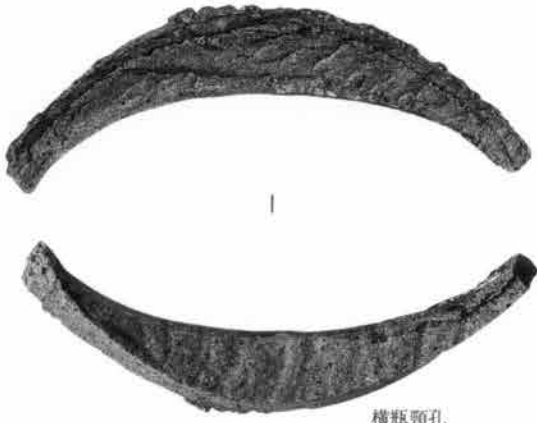


I号窯蓋、陶鍾、燒台、器種不明品



横瓶	鉢
壺	

所属窯不明横瓶、鉢、壺



横瓶頸孔  
切断片  
(Sキタ)

環A身  
内面クシ歯  
調整痕  
(Sキタ)



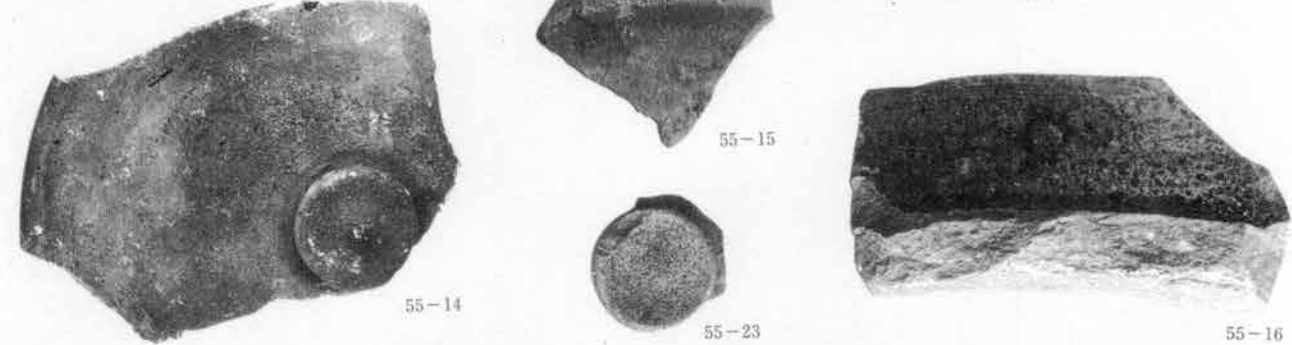
5



6



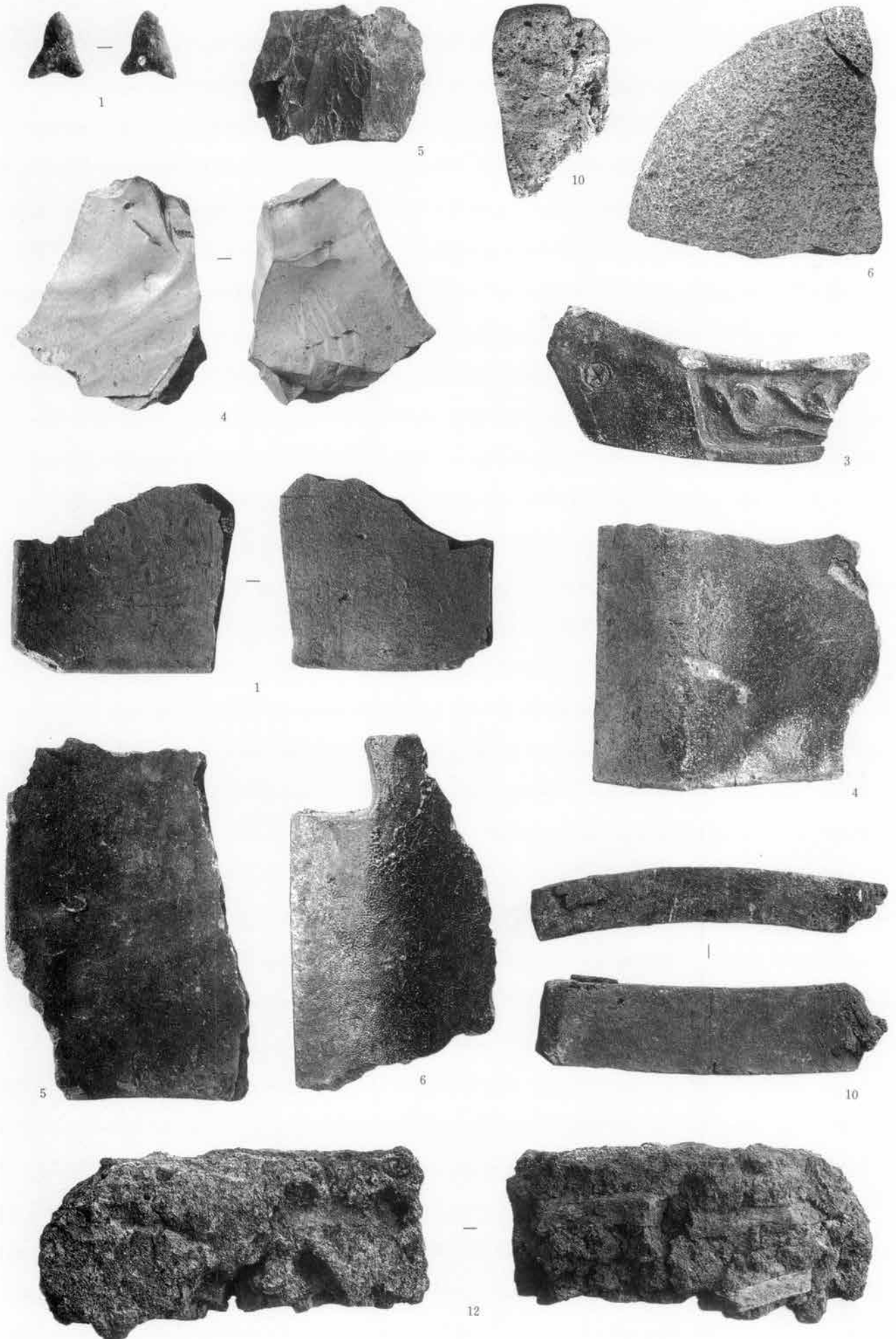
土師器焼成土坑



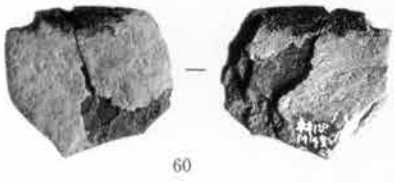
調査区出土遺物1(土師器、須恵器)



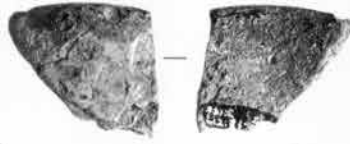
調査区出土遺物 2 (土師器、中・近世陶磁器)



調査区出土遺物 3 (石器、瓦)



60



62



61



71



55-12



72



73



熱変化した石



79-9

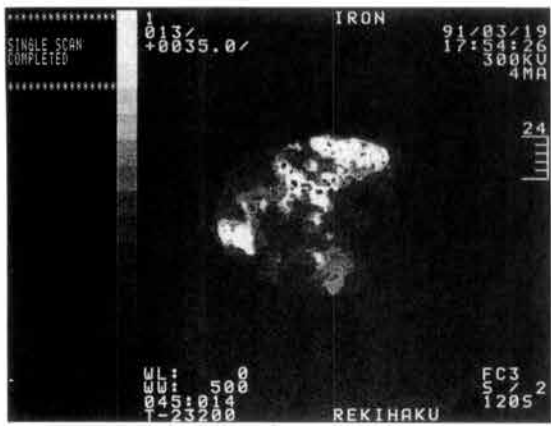


小割り石

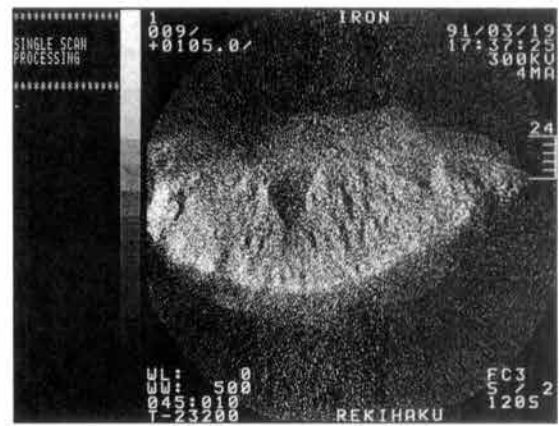


79-2

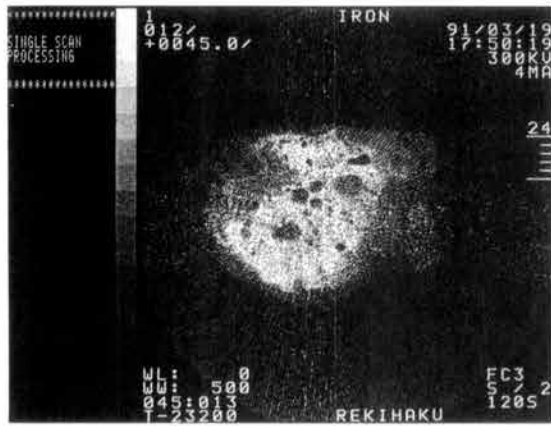




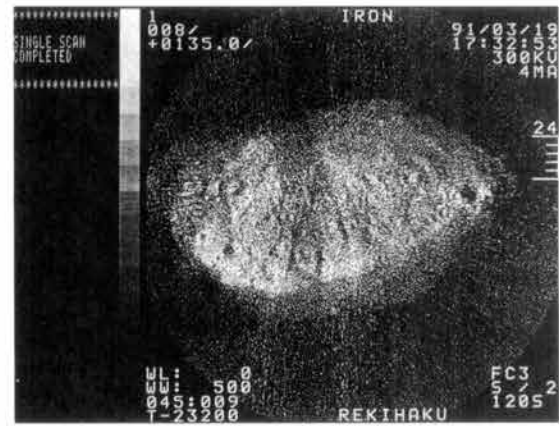
1



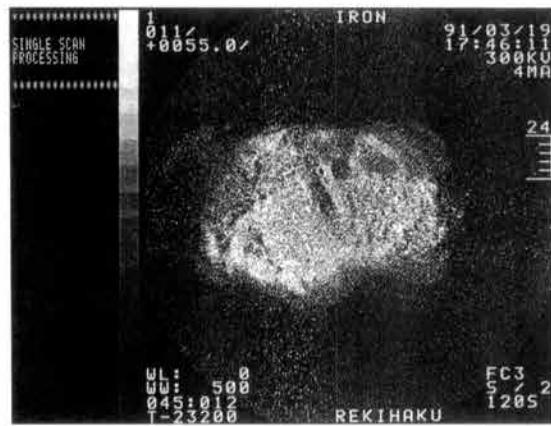
5



2



6



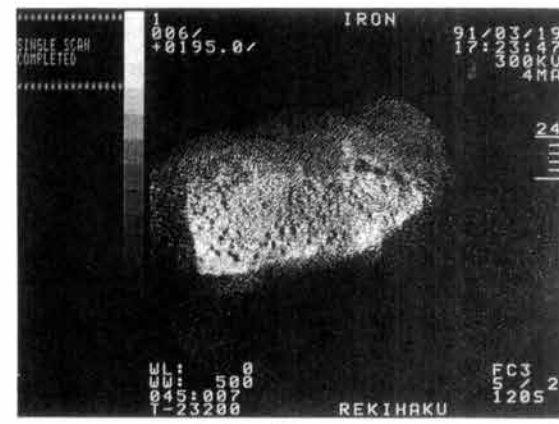
3



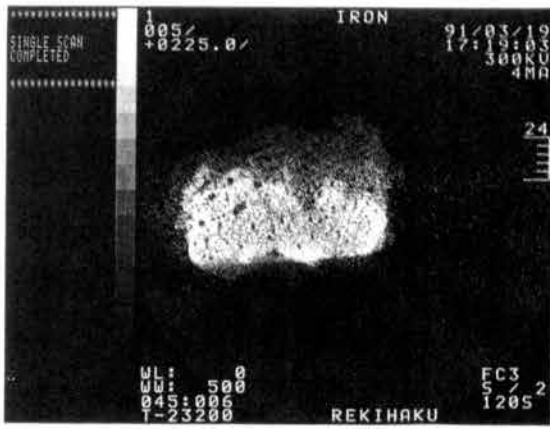
7



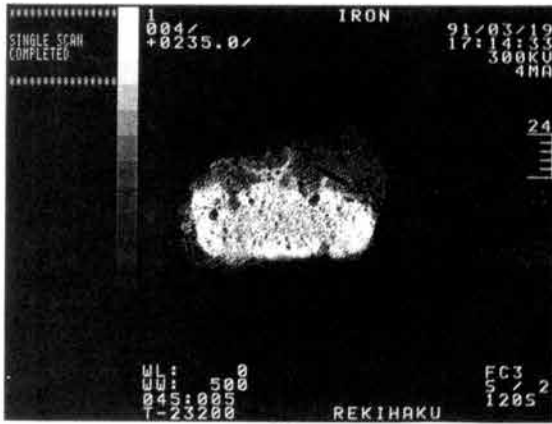
4



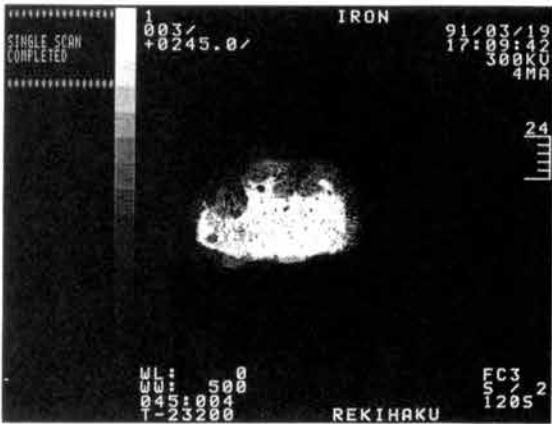
8



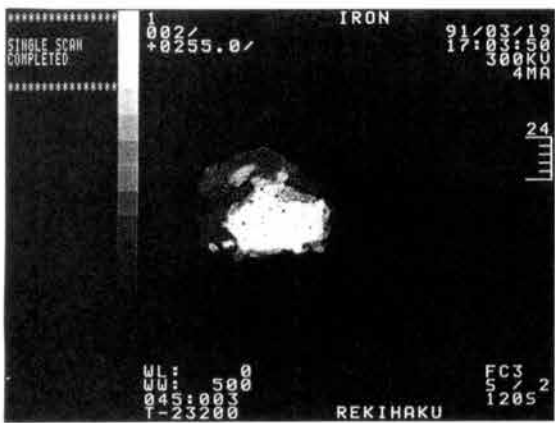
9



10



11



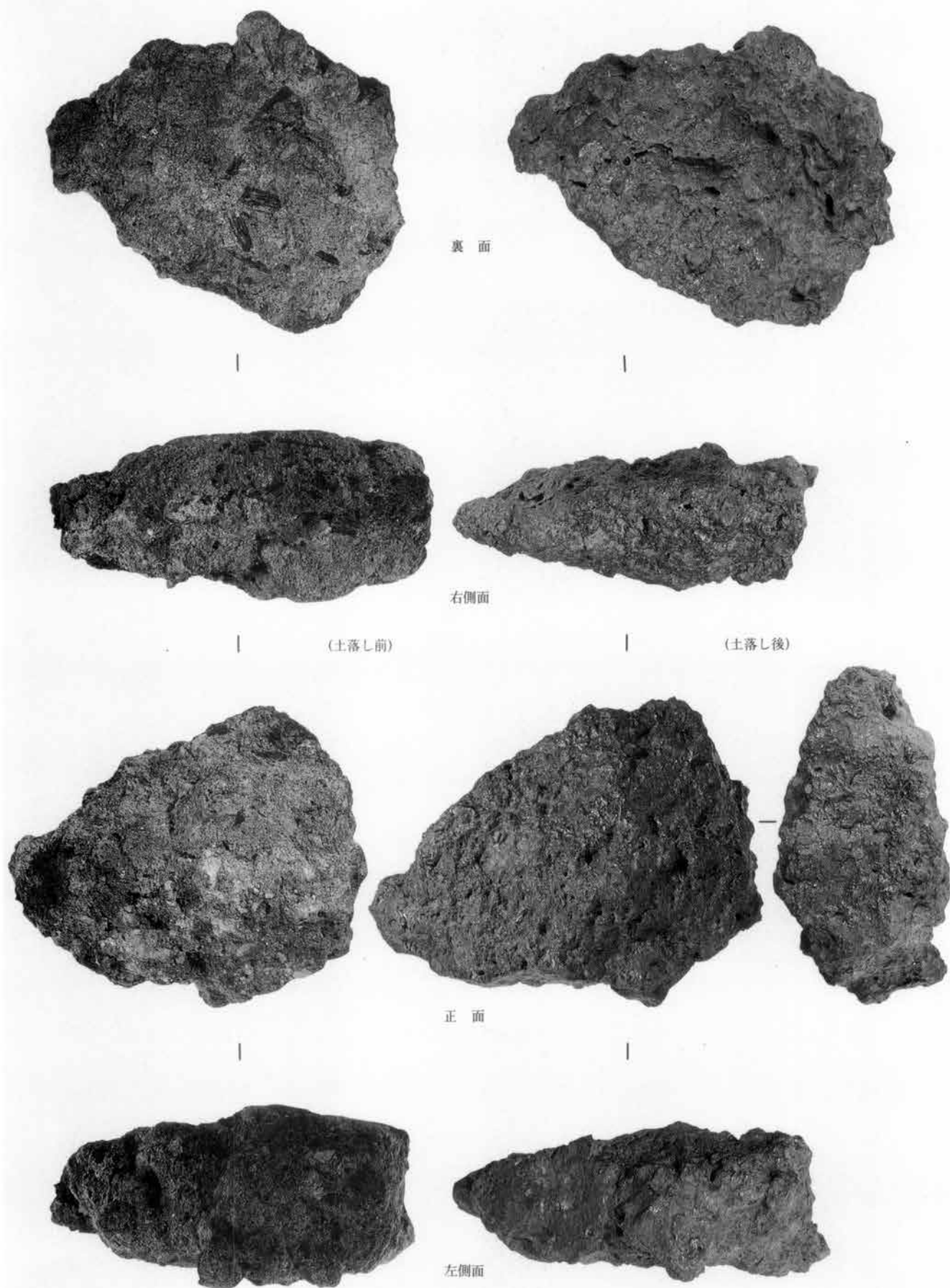
12



1



2



製鉄遺構出土遺物2(大鉄塊)



12



13



14



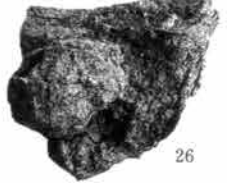
17



18



11



26



27



28



19



24



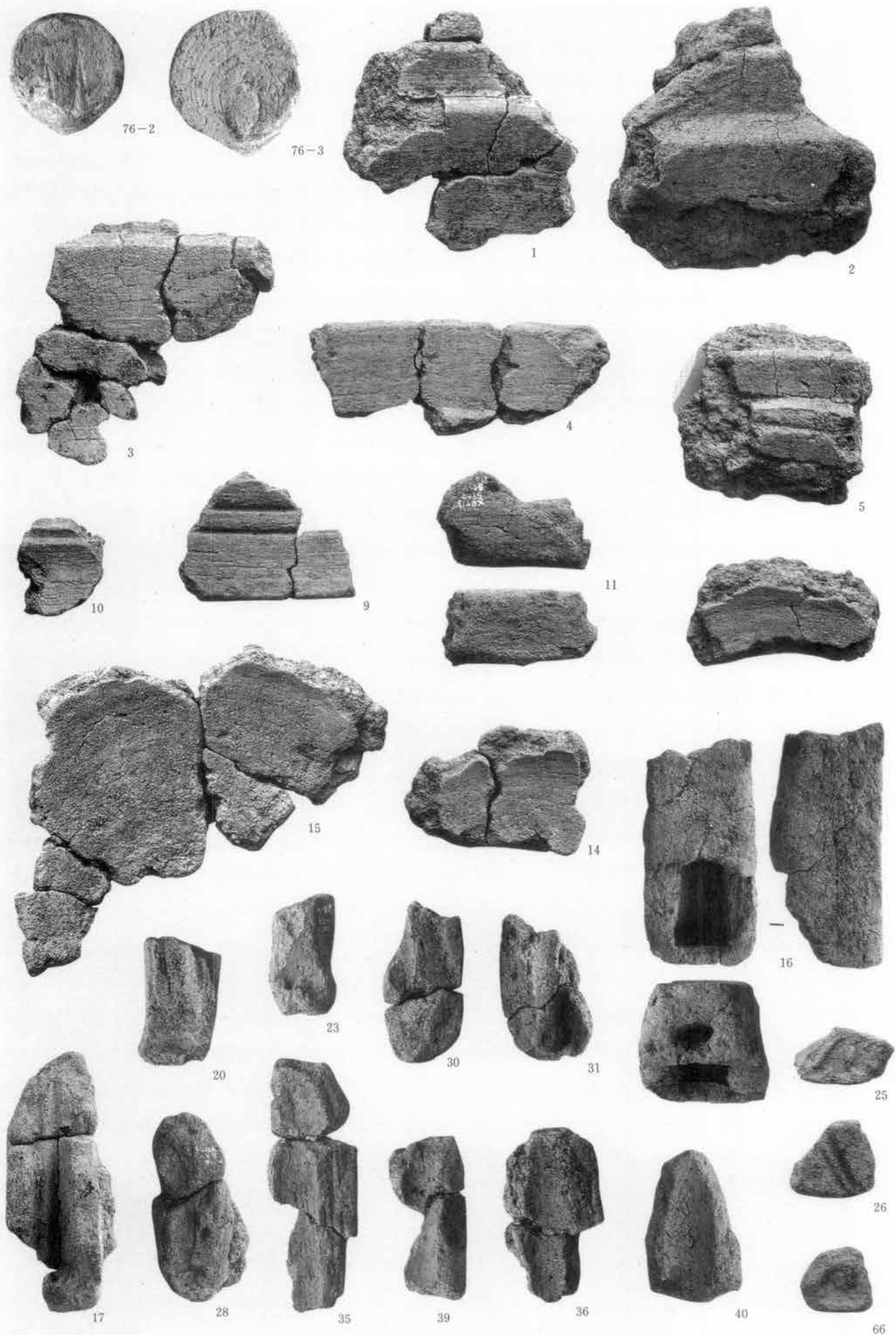
22



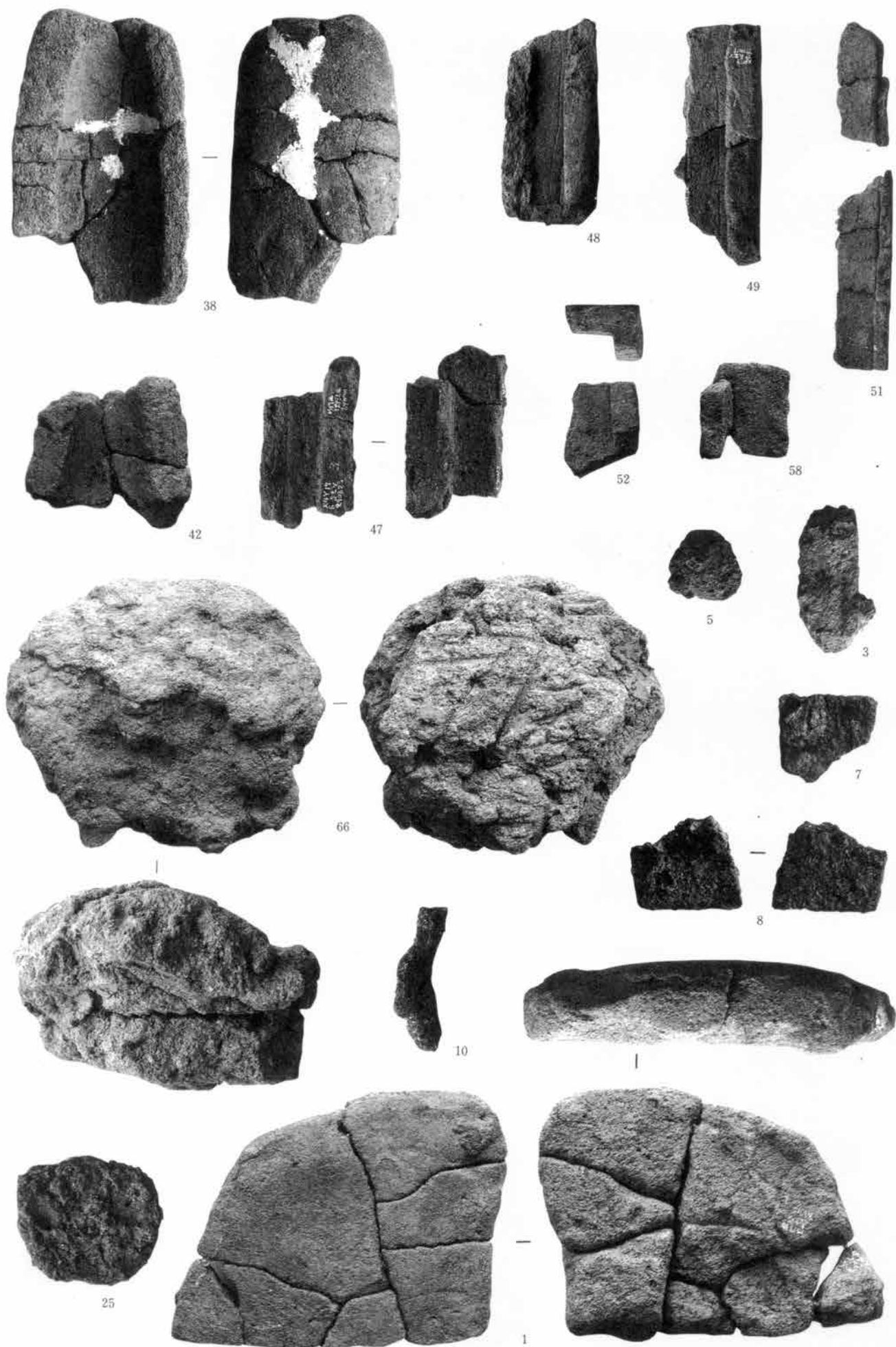
23



製鉄遺構出土遺物3 (鉄器、黒鉛化木炭など)



製鉄遺構出土遺物 4 (土器、鑄型)



製鉄遺構出土遺物 5 (鑄型、鉄塊系遺物)



1



2



4



3



10



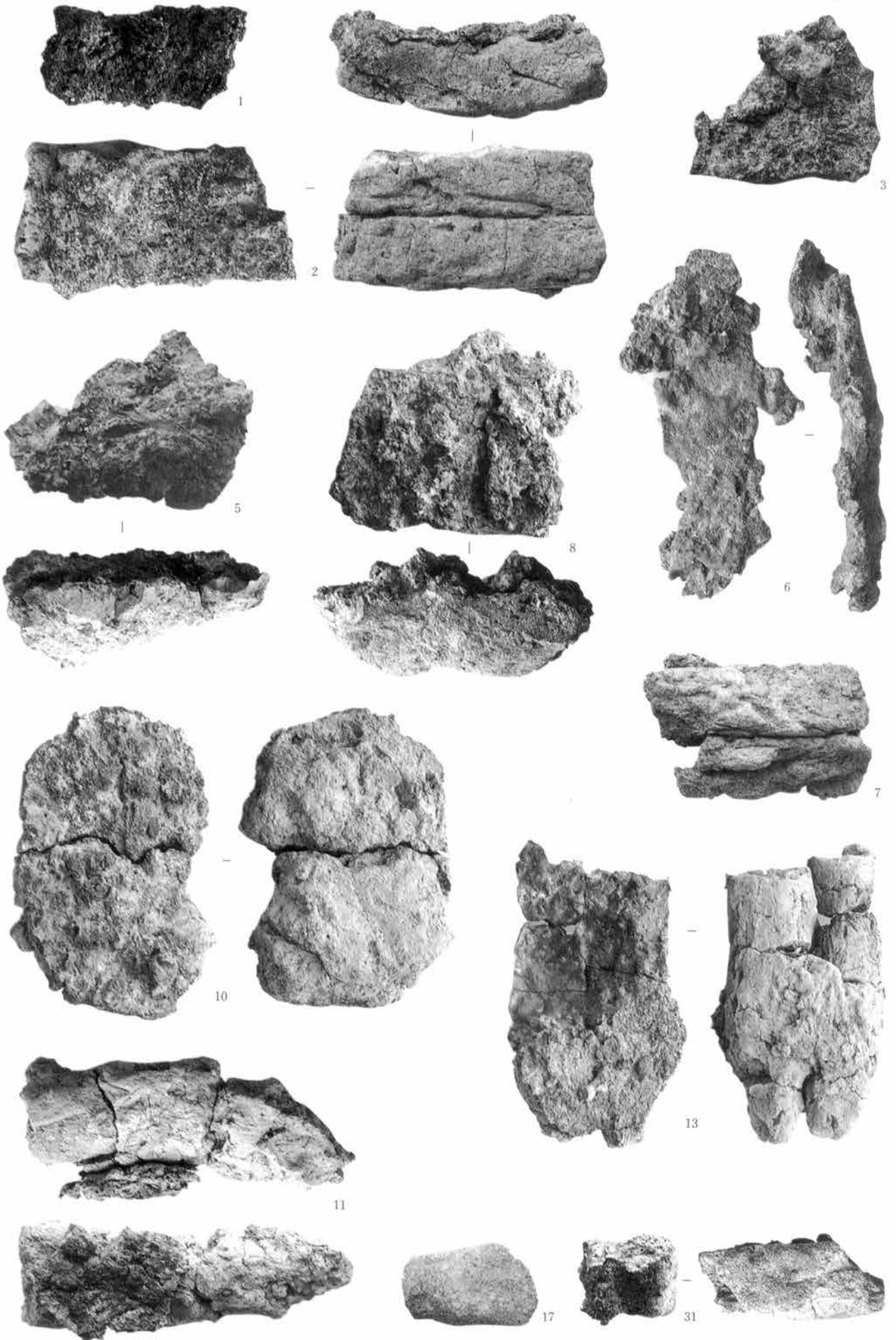
8



76-4

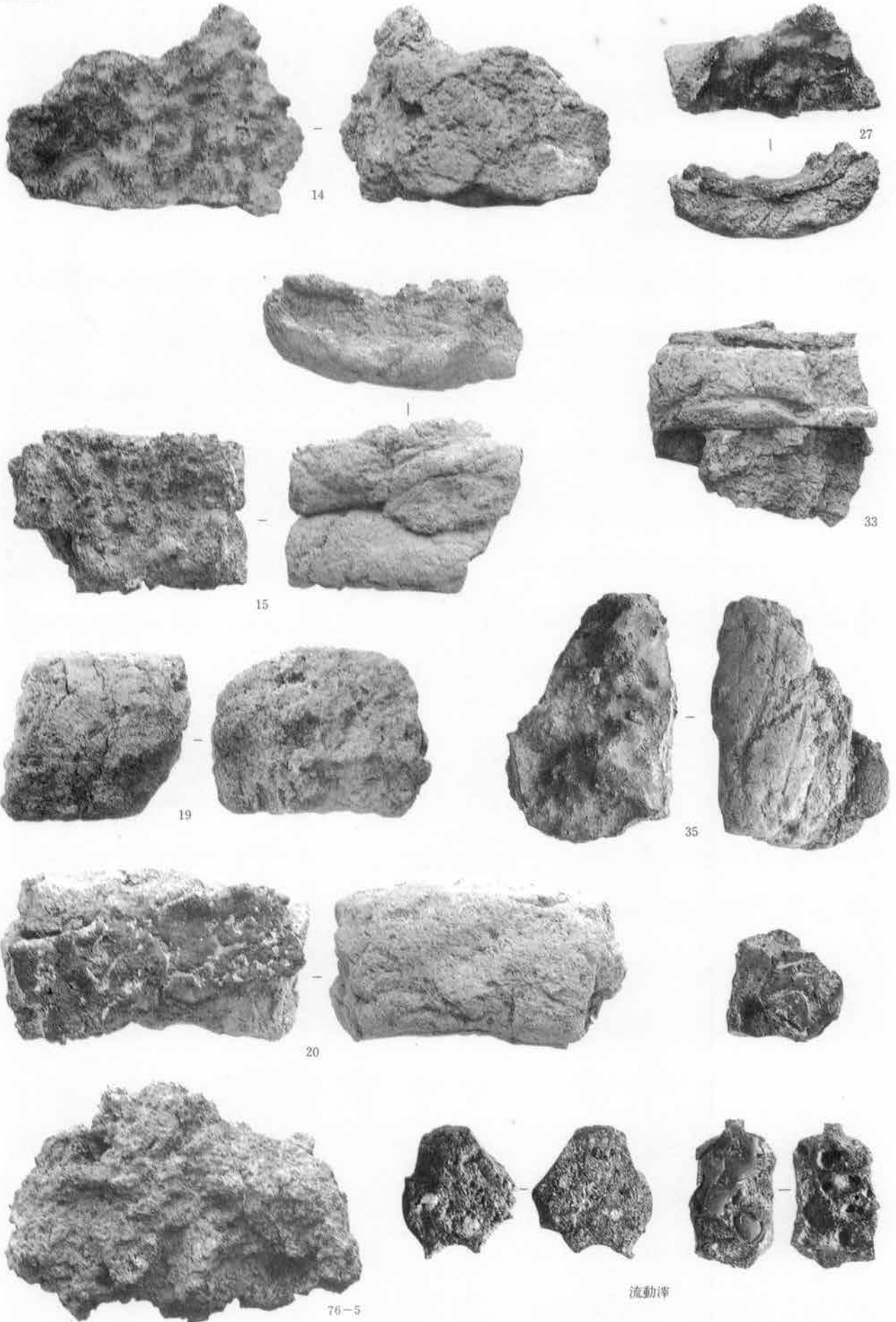


製鉄遺構出土遺物 6 (羽口、石)



製鉄遺構出土遺物7 (炉壁)





製鉄遺構出土遺物 8 (炉壁、鉄滓)

## 小松市林遺跡

一般国道8号小松バイパス改  
築工事に係る発掘調査報告書

編集・発行 (社)石川県埋蔵文化財保存協会  
石川県小松市島田町イ-85-1  
〒923 TEL 0761-21-5150

発行日 平成5年3月23日  
印刷 橋本確文堂

石川県小松市林遺跡全体図（県調査区）





石川県小松市林遺跡正誤表 (石川県埋蔵文化財保存協会)

		誤	正																	
例言 図版目次 図版目次 写真 図版目次	21行 第28図 第34図 図版51  図版55 図版62 図版74 図版75 図版77	(新日本製鐵株式会社) 他の窯土器 焼土土坑実測図(1/20) 排水溝(作業場木炭層、作業場層位、排水溝層位) 2号窯坏A・3~6類 C6~10・B類 坏B蓋1~B4類 坏B身、甕 高坏A・B・類	(新日本製鐵株式会社) 他窯の土器 焼土土坑実測図(1/30) 排水溝(作業場炭層、作業場層位、排水溝層位) 2号窯坏A3~6類 C6~C10・D類 坏B蓋B1~B4類 坏B身、塀 高坏A・B類																	
P5 P16 P30 P33  P34 P59 P97 P117 P122 P123  P137  P141 P166 P189 P201 P215 P222 P242	40行 8行 29行 20行 31行 8行 8行 17行 38行 29行  34行 39行 22・30行 17行 36行 10行 16行 3行 5行 19行	標識窯である。 (第12図13~Aライン) 壁い 口縁部は 口径13cm前後 口縁部は (第50図6層) 自然の谷頭が 第74図1は 1~2mm大の孔や石英 (スケール)10m (スケール)10 HYS-2に⑤~⑦ Photo.22の④ 第78図 特性X線像X線像 (表1~4、図版1~4) (図中7、実測図156) 第4章中で (溶解炉)+炭窯がセット 鋳型の一部を 戸壁は 藤山邦男	標式窯である。 (第14図13~Aライン) 壁い 口縁部は 口径12.5cm前後 口縁部は (第51図6層) 自然の谷が 第75図1は 1~2mm大の孔や石英 (スケール)10cm (スケール)10cm HYS-2は⑥~⑧ Photo.22の⑤ 第79図 特性X線像 (表11~14、Photo.36~39) (図中7、実測図157) 第4章(注10)中で (溶解炉)+木炭窯がセット 鋳型の一部と大鉄塊を 炉壁は 藤山邦雄																	
図版55	33	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td></tr> <tr><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td></tr> </table>	3	4	5	6	3	4	5	6	45	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>3</td><td>4</td><td>6</td><td>5</td></tr> <tr><td>3</td><td>4</td><td colspan="2">5</td></tr> </table>	3	4	6	5	3	4	5	
3	4	5	6																	
3	4	5	6																	
3	4	6	5																	
3	4	5																		
図版57 図版88 図版89 図版93 図版96 図版97 図版99 図版100	(6類蓋) 21 25 1 2 66 44 49 10 35		(5類蓋) 55-21 55-25 右側面 右側面細部 68 49 50 9 36																	

